

奇譚クラス

3
特大号



奇譚クラス

3

定價百四拾円



モデル嬢 股間縛り競艶

各組 (キヤビネ判) 三枚一組 三百円

問題の股間縛り、各嬢競艶、縛りマニアの絶体に見逃すことの出来ない珍品

中富綾子嬢 三態

純情可憐、芳紀正に十七才の乙女、無垢の肌を喰い込んだ痛々しい縄目

杉 美美嬢 三態

昨年十二月号の口絵に掲載して大好評を得た作品

萩 千恵子嬢 三態

乳房を出すのさえ恥しがらる萩嬢を観念させた股しぼり

伊吹真佐子嬢 三態

豊満な肉体をタテに喰い込ませる股間しぼりの縄目 縄

坂口利子嬢 五態

キヤビネ判 五枚一組 五百円

十数態の中から最も強烈な股間縛りの代表作を選ぶ、股間縛りを流行させた問題の作品も含んだ特別品揃い

女性切腹擬態写真

〇女性切腹姿態写真

各 (手札型六枚一組) 三百円

初めて試みた女性切腹の好評作

第一集 (三人のモデルによる各態)

第二集 (裸体着衣共代表的各態)

〇真刀を用いた女性切腹写真

手札型六枚一組 三百円

真刀が白い腹部の肌へグサリと刺さる思わずゾクリとする真迫した切腹フォト

〇血紅使用の女性切腹写真

各 (手札型六枚一組) 三百円

血紅によって女性切腹の様相の経過を示した珍しい文獻的なフォト

第一集 第二集

〇女性切腹シリーズ写真

連続八枚続き (順を追うたもの)

キヤビネ判 八枚一組 六百元

〇女性切腹「立腹」写真

手札型 三枚一組 二百円

傑作・マゾ・フォト

春日ルミ嬢構成 各組 キヤビネ判 三枚一組 三百円

足舐三態

A、椅子に腰掛けたルミ嬢が男の口の中へ足を入れてる。B、後ろから男の足に口をくっつけて舐める。C、男が足を保持して舐めようとしている。

足蹴三態

A、ハイヒールで頭を蹴る。B、蹴り倒される男。C、後手に縛られた男が、思いうま、に頭を蹴られる。

人間椅子三態

A、胸の上へ灰皿を置いて女王様の休息の椅子となつて居る。B、人間ソファに屈伏するドレイ。

人間馬三態

A、乗馬ズボンに馬靴の女に股がられる。B、鞭の苛責。C、乗馬の訓練。

犬の折檻三態

A、芸を仕込まれるワン公。B、女主人を背にするワン公。C、首環とクサリで仕込まれる。

マゾ・フォトのベッド・シーン

キヤビネ判 4枚1組400円

一、馬乗り 二、首締め 三、押え込み 四、足台

… (第二集) …… [縛られた女ばかりの豪華アルバム] …… (第一集) …

美しき縛しめ

九人の緊縛モデルを駆使して完全した緊縛フォトの圧巻 未発表の秘作集

代表的な縛りポーズ三十二態

(詳細な説明はKK通信第十七号に)

〇責め写真は美しいが、印刷紙に焼付けたものは高くて困ると、おっしゃる方は極く鮮明なコロタイプ印刷のアルバムをお求め下さい。

〇三十二枚の変わったフォトがぎっしりと並んできつと皆さまの胸をわくわくさせることでしょう。全く素晴らしいです。

美術コロタイプ印刷、アルバム装釘 頒価 一部 五百円 (送料三十円)

晴雨『美人乱舞』

伊藤晴雨先生著並面菊版和装美本 定価 四〇〇円 二四

図版目次

▲人体時計 ▲天国の女 ▲美人燈 ▲島田島のこわれる迄 ▲丸髻のこわれる迄 ▲美女のなやみ ▲崩れたる女 ▲鉄砲責にされる女 ▲火葬場異聞 ▲佛々に抱かれた美女 ▲死神につかれた女 ▲特別附録、娘風俗年中行事十二月、外特別読物として先人未発の貴重な春画文獻五章十九項に互って詳説す。晴雨ファンに薦む。

〇洗腸フォト三態 第一集 第二集 第三集

キヤビネ判 各三枚一組 三百円

ベテランの方々の御意向を総合して完成した、アツと驚く新趣向の洗腸フォト、三〇〇C、五〇〇C洗腸器、イルリガトール、いちじく洗腸器を用いて、施術者と被施術者とを同一画面に入れた真に迫るマニア待望の品。

〇洗腸責め三態 第一集 第二集 第三集

キヤビネ判 各三枚一組 三百円

洗腸と縛りを併用したフォト、手又は足の自由を奪って身動き出来ない姿態のま、無理に洗腸されようとする被施術者に、施術者の持つ洗腸器は情容赦なく迫ってゆく。洗腸責めの最も出ず甘美な雰囲気は、皆さんを妖しい感激のルッポへ誘ってゆく。

時代物責絵巻

華麗な責めの色刷面帖

横トシ豪華美本、各葉説明文句入

三条春彦 画 一部 三百円 (送料三十円)

内容

一、山法師と静御前 五、八百屋お七の最期

二、女スリと岡引き 六、新撰組と芸妓

三、淀君と千姫 七、十郎左衛門と腰元

四、犬公方と侍女 八、小紫と悲旗本

アリスの人生学校

奇譚クラブ臨時増刊号

吾妻新氏の麗筆により心にくき迄執拗に描写されたサディズム文学の決定版

サディブラッケイズ作・吾妻新訳

一冊 百円 (送料共)

美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く堂々五百枚に垂んとする傑作口絵、挿絵カット多数挿入

曙書房代理部

女体縛り悦虐姿態集

川端多奈子嬢

ベテラン多奈子嬢の

定評あるフोट

第一集、第二集

各(手札型七枚一組)三百円

村田那美子嬢

純情型の清新なしぼり

手札型五枚一組 二百円

伊吹真佐子嬢

豊満な肉体に強烈なしぼり

手札型五枚一組 二百円

急襲

手札型十五枚
一組 五百円

モデル (杉美美嬢)

連続十五枚続きで女が縛られる
迄の過程を描いた最優秀作

台上の殉教者

キヤビネ判二枚一組 二百円
モデル (杉、村田、坂口嬢)

吊り3態特選集

モデル (川端多奈子嬢)

キヤビネ判各三枚一組 五百円

第一集、第三集

第二集、第四集

二女連縛集

(中富綾子、並川トミ嬢)

手札型六枚一組 三百円

椅子責め五態

モデル (伊吹真佐子嬢)

キヤビネ判 五枚一組 五百円

磔

(キヤビネ判)

第一組 二枚一組 三百円

第二組 一枚組 百円

モデル (村田那美子嬢)

半吊り二態

モデル (村田、坂田嬢)

キヤビネ判二枚一組 二百円

女々名種趣向縛り写真

各組一組 (キヤビネ判)

三枚 一組
三百円

※三人得意のポーズ

モデル (村田、坂口、杉嬢)

※水辺責め三態

モデル (萩千恵子嬢)

※悦虐遊戯三態

モデル (坂口、杉嬢)

※後手高手小手二百体

モデル (伊吹真佐子嬢)

※レインコート3態

モデル (萩千恵子嬢)

※溪流の飛魚

モデル (村田那美子嬢)

※高手小手三態

モデル (木田雅子嬢)

※制服の女学生

モデル (雲井久子嬢)

※野外全裸の縛り

モデル (村田那美子嬢)

※猪吊り3態

モデル (萩千恵子嬢)

※猿ぐつわ三態

モデル (浅野末乃嬢)

※縋帯縛り3態

モデル (萩千恵子)

※蠟燭責め3態

モデル (坂口、村田、二嬢)

※腰巻縛り3態

モデル (萩千恵子嬢)

※梯子責め三態

モデル (伊吹真佐子)

※ナイロン女体縛り

モデル (杉美美嬢)

※鞭打ち三態

モデル (杉美美嬢)

※三嬢連縛棒吊り

モデル (杉、村田、坂口、三嬢)

※基盤責め三態

モデル (雲井久子嬢)

※灸責め三態

モデル (杉美美嬢)

※女が女を責める

モデル (坂口、杉、二嬢)

※縋帯縛りの特選

モデル (伊吹真佐子嬢)

◎全部卓絶した未発表の特写写真ばかりです。

◎価格は全部送料共です。どうぞ多少に拘らず御申込み下さい。

◎女体縛りの詳細説明はKK通信第二十三号にあります。



奇譚クラブの三月特別増大号の目次

倒錯研究の新展開について 成瀬 亮
SAPPHO日本版 (雑誌切) 川合伊都子
ボクの責め方 宝塚二三夫
大津事件とその後日譚 須藤 律夫

夜光島 (6)

吾妻 新天

残虐なる女性達

撮影 大庭高視
森本愛造・沢 二

血染の毛綱

伊藤 晴雨

「潮来波」

白 金 紅 次 元

「お天狗様、音無」

天狗鼻由来記 緑 猛比古天

汗について

三条春彦・画
みずしよ・まもる 空

マゾへの胎動 (雑誌少年期)

R・G・S
三 根 耕 二

「百合子の冒険」

村崎明・作
野本数久・画

アブ追求三十年の回顧

山田 正 実 三
伊藤 晴 雨 三

陰の花

片 矢 薰 二

縄のない縛しめ

二俣志津子
滝 麗 子 画

緊縛モデルの素顔

春木俊野 提供 一
辻 村 正 三 六

「マニヒストの手帖」通信

沼 正 三 六

最近の映画から

白石 鈴 木 千 年 三 六
津島比呂史提供 六

懸賞入選作品 (第二集)

「ヴィナスの重石」 轟 砂 十四郎 一 五

女性願望の青年の手紙

中 津 直 三 六

Mへの手紙 第一集

二俣志津子 三 六

「残虐なる女性達」 調査・解説

森 本 愛 造 三 六

編集者への公開状

菅 原 春 夫 三 六

「わが半生の記」

喜多島佳月 三 六

幽囚四十ヶ月

依田精一 文 三 六
春 田 一 郎 画

「織田信長」

笠置俊郎・作
八 郎 一 五

「縛り絵を描いて」

山田平文と画 三 六

「洗馬マニヤ」

花村恵美子 三 六

「特異な事件」

森 太 一 三 六

「自虐を切る」

小 田 原 渡 三 六

「私の体験記」

長 瀬 昭 子 三 六

「寄宿舎での体験」

緑 川 純 子 三 六

「渾身される令嬢」

田 村 仁 一 三 六

日本画 川柳アイデア十題 山村弘風・作
「火の車」 伊藤晴雨・画
外国文壇紹介 壬寅の囚人 顔覆い、イギリスの若衆たち
椅子に後手しぱり、貴女は彼を好きにならないうに出来る
「娘相撲」 藤本数久・画
「ジャジャ馬車」 藤本 孝・画
「尻 打 ち」 足を蹴めさせる 藤 日 三
「くびれ」(中宮様子) 藤 日 三
「パール」(中宮様子) 藤 日 三
「縛り上げる迄」(野外撮影) 藤 日 三
「伊吹二重名コンビ」 藤 日 三
「春日・伊吹二重の性愛遊戯」 お隣いじめ
「マゾ・フット二重」ムチをふり上げるお尻(ペシリット) 藤 日 三
「可愛い、お客様」 フエチシストの夢 藤 日 三
「フェチシスト」 クリップによる異いじめ 鼻つまみ(異国四十七提供)
「男性の裸体」 藤 日 三
「残虐なる女性達」 藤 日 三
「売られゆく女奴隷たち」 藤 日 三
「洗馬」(春日と) 貴めが終つて中宮様子
「アルバム」 押えつけ(伊吹貴佳子) 屋上にて(中宮様子)
外国文壇紹介 アブノーマル 藤 日 三
「女レスリング」(異性) 藤 日 三
「来国家庭」 朝の出動 藤 日 三
「朝の出動」 藤 日 三
「夕食後のひととき」 藤 日 三
「絵物語」 裏切者 藤 日 三



悦にり
なれやしかと
この次は



舞台のいる女
縛りたような

水責めの
楽しみ
こゝにきわれり



下でおあづけし
ワシ公はベットの



大鏡
こんな
時には
役に立ち



しるいわと
扱帯だし
どんなこと



大磐石の
ハイール
落し物



足首の白
眼にお
縛ぢりめん



靴
下は
こんな
便う
すべ
知り



傷の
つかない
真夏
模
様
操りは

川柳
アイデア十態
山村孤風作
瀧麗子絵

責の見世物の百種内

火の車

伊藤晴雨・画

(解説は本文172頁)

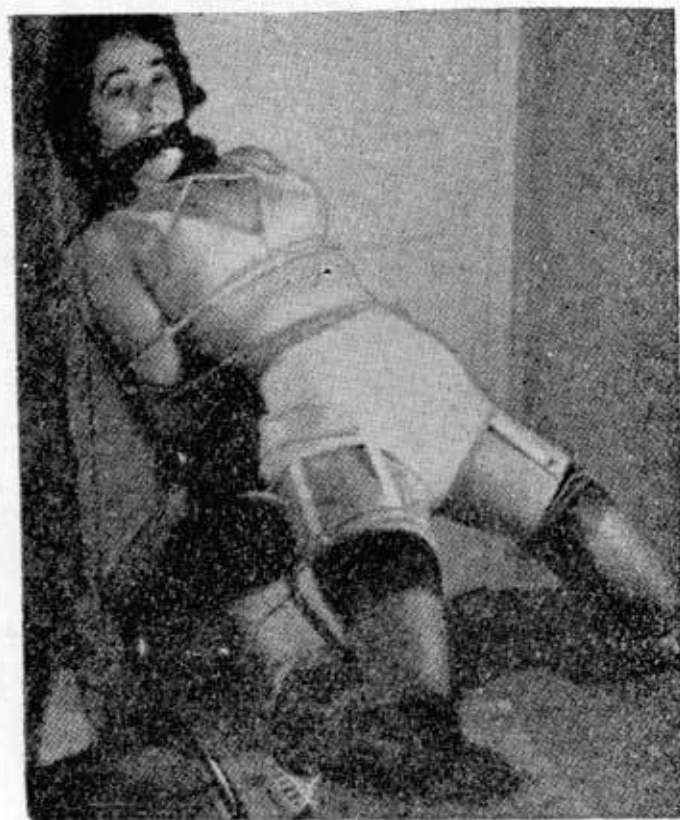


手袋の囚人

ブラハチック製の手錠が彼女の手袋に完全な自由を奪ってしまっている。



椅子に後手しばり

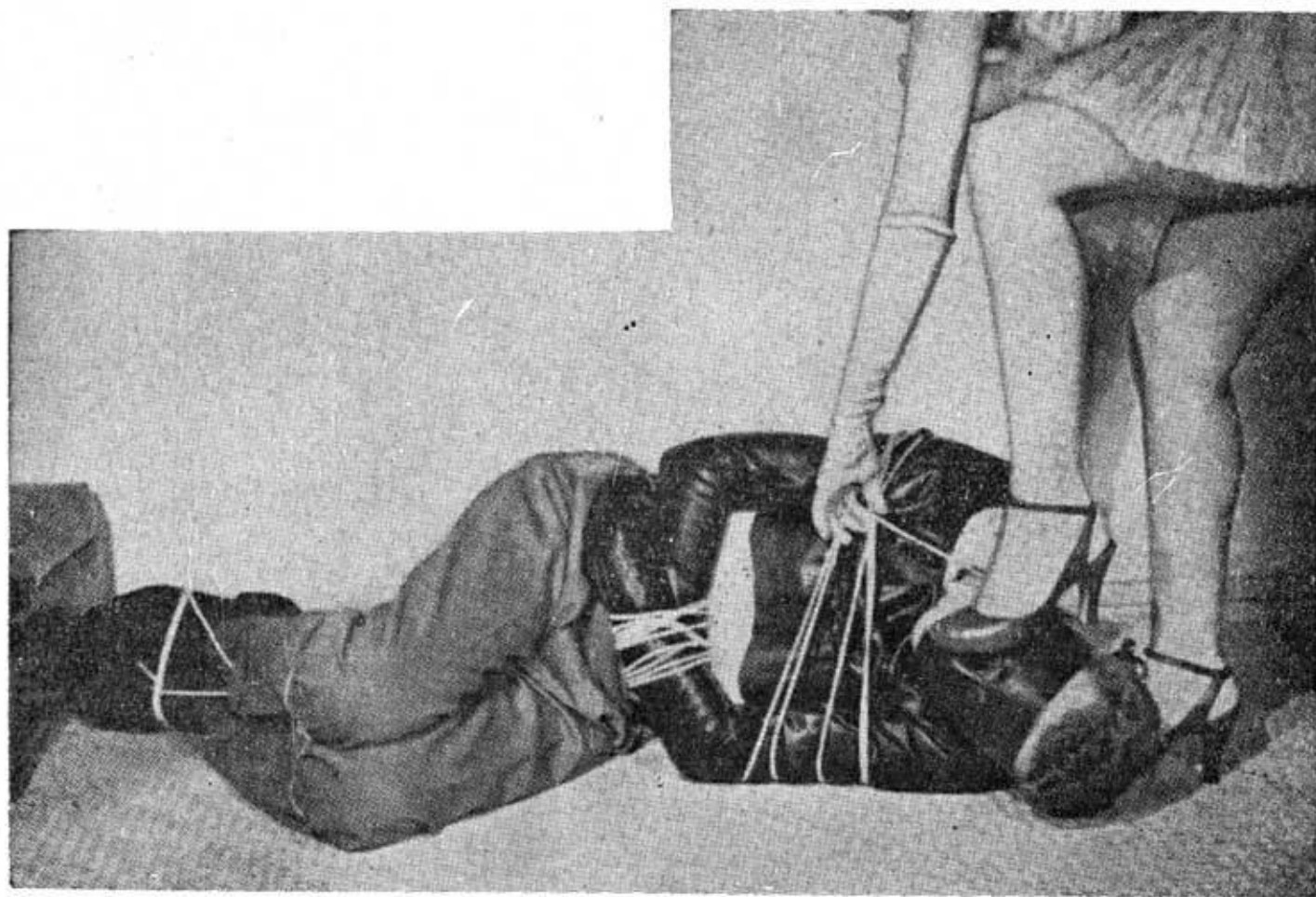


顔覆い

(回教徒の婦人などが外出の時に用いる。)

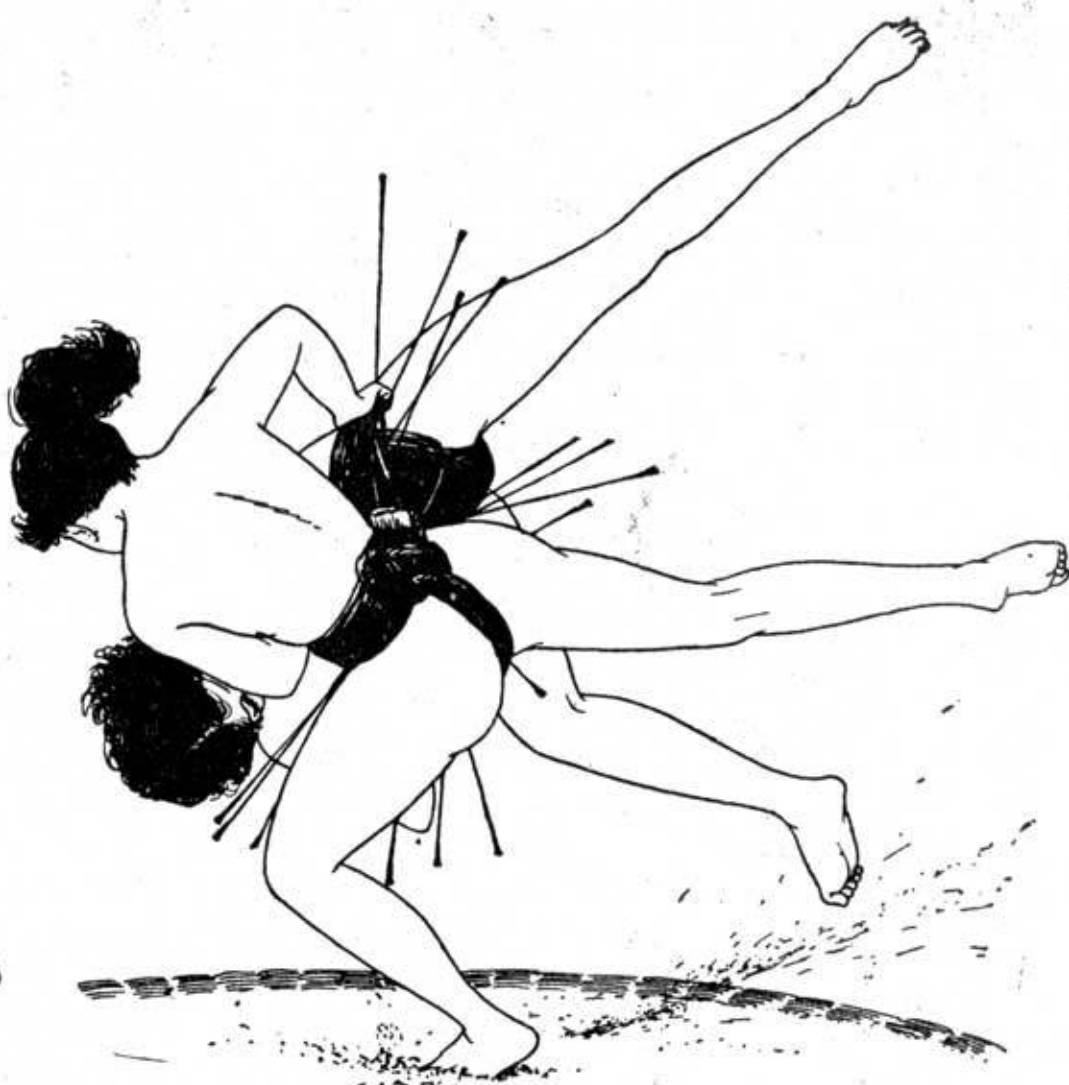


アメリカ雑誌「BIZARRE」の表紙より
—サタンの仕立てた近代的な淑女の衣裳—
(着色)



「貴女は彼を好きなように出来る。」

Suk



娘相撲

畔亭数久

「やせつぼちの関取だな、
便々たる太鼓腹波打つて居
ります、つてえ形容が出来
ないじゃないか。」
「犬ころがじやれてるみた
いやないか。なんぼ娘相撲
かてもう一寸烈々たる闘志
ちゆうもん出せんかいな」
まあそう言い給う勿れ。
これは畔亭勧進の戯画娘相





撲。モデルの麻理も
 勝手がわからずまご
 まごしています。ま
 ともに取っては女性
 らしさの象徴である乳房
 が見えなくて特徴がばや
 ける。苦心さんたん、こ
 んな処でお茶を濁しま
 した。
 さて、長らく御愛顧を
 頂きました戯画、この辺
 で擱筆する事といたしま
 す。

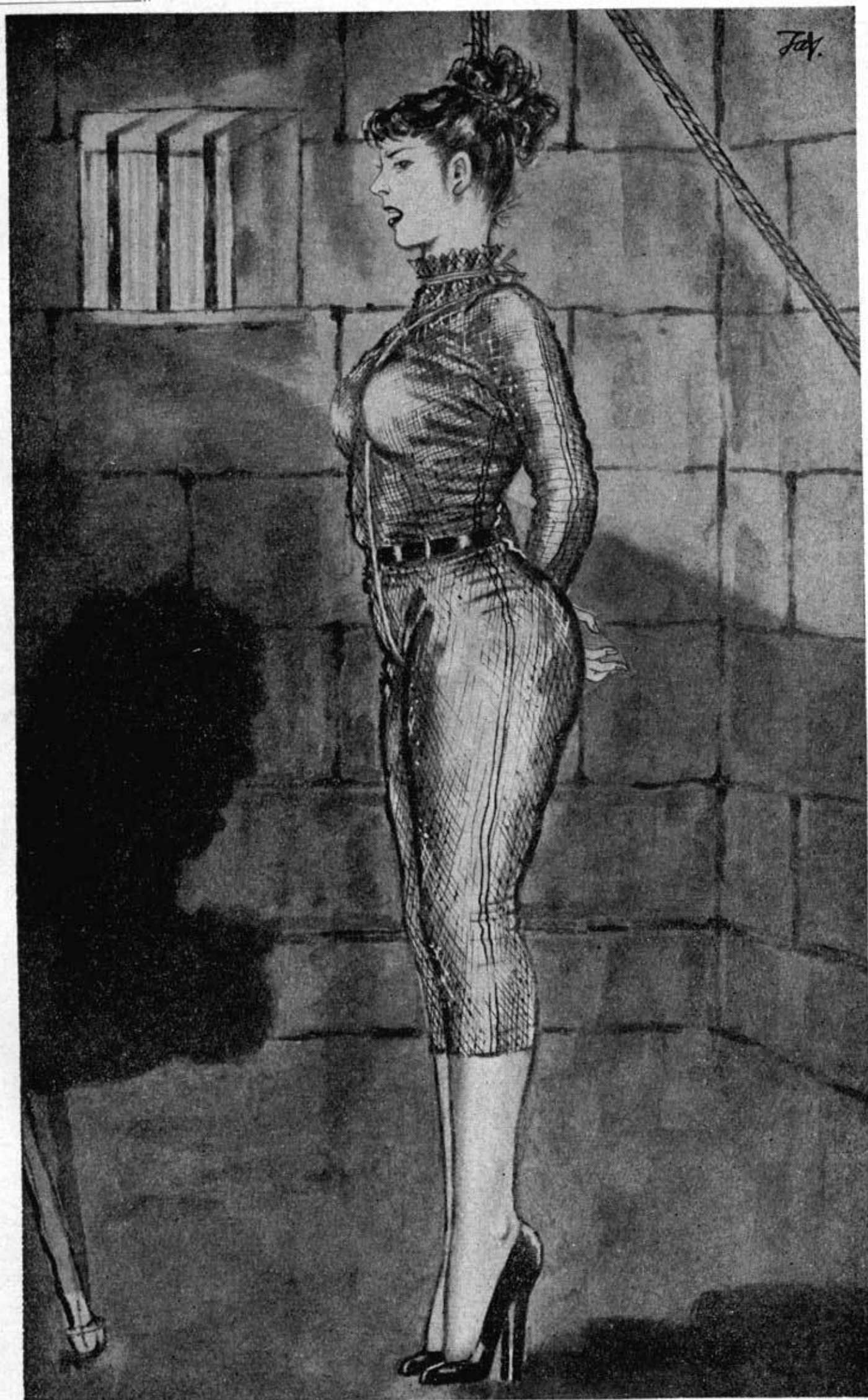


二 題

孝・画

ジャジャ馬馴し

黒髪を吊つた縄がハイヒールの両足を浮かせるギリギリの線で止つてい
る。身動き出来ない彼女は、そのまゝの姿勢で、やがて吊縄の移動と共
に歩まねばならない。…前に……後に……。



尻打ち

太股まである革の長靴は、これ以上踏むことを彼女に許さない。首環のトゲはうつむくことさえ出来ない。首環と足首を締めつける革紐のため、豊満なお尻はイヤでも後へつき出さねばならない。むきだしの尻へ鋭い鞭が……。

縛 絵

四し 馬ま



足を舐めさせる

「足の裏を舐めさせてあげるから、有難く押し頂くのだヨ、お前の舌の先で汚れをきれいに舐めとりなさい、擦ったくすると承知しないから……」

春日ルミ嬢

(モデル……小沼正三……)





殴らせる

春日ルミ嬢構成

「なにッ、叩かれるのはイヤだつて？馬鹿にするんじゃない、お前のために、やっ
ているんじゃないんだヨ、鋼線入りのムチがお前の身体にぶち当たる感触がなんとも云え
ないんだヨ。」

(モデル…… 湖田平雄)

くびれ

(中富綾子嬢)



膝頭

(萩千恵子嬢)

ペールを透して

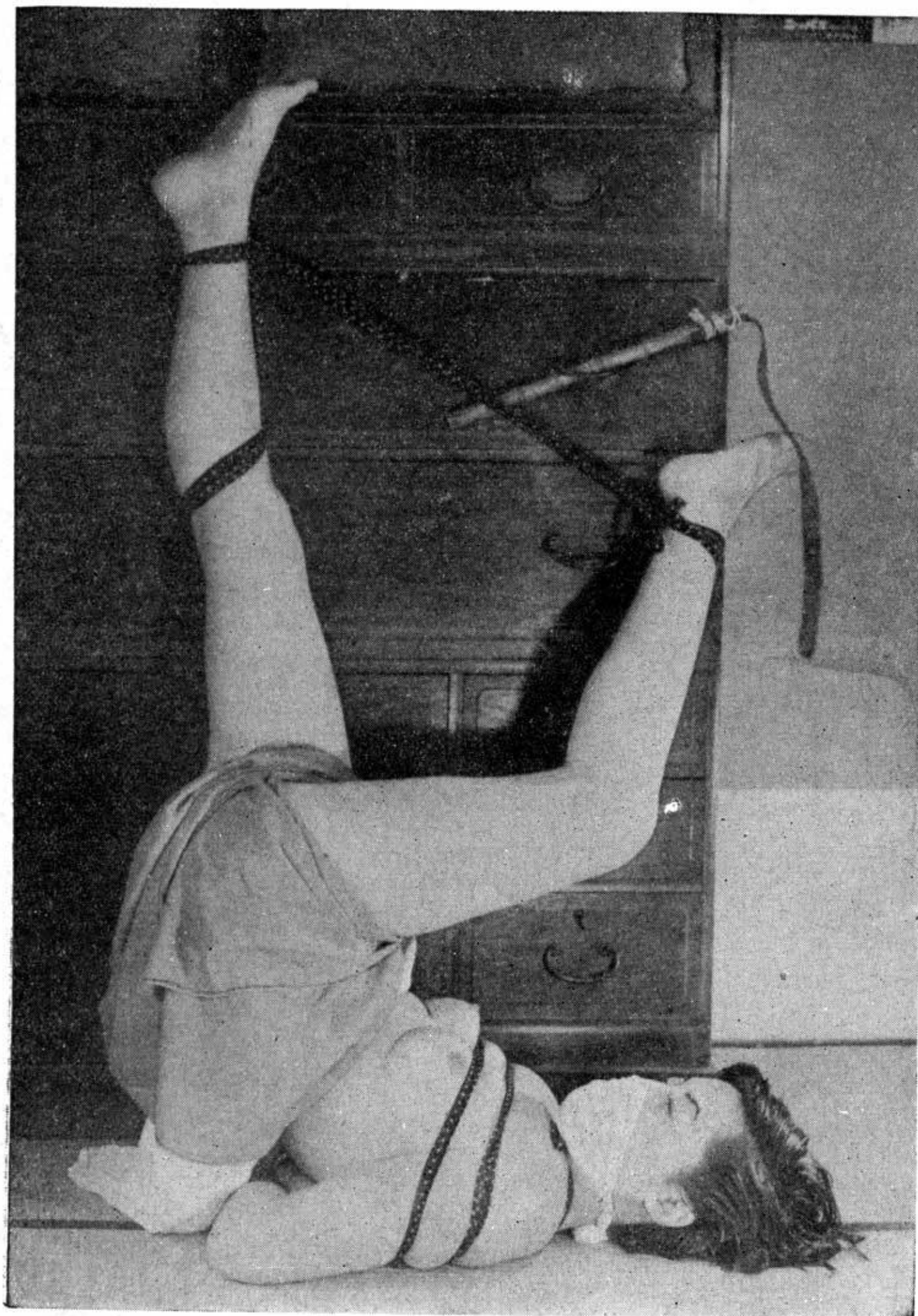


萩千恵子嬢

箆 笥

後手高手小手に縛り上げ、仰向けに長々とのびたところを右足を高く、左足を頭の方へ曲げてタンスの環に括りつけた、途端にピンクの腰巻がバラリとはずれてしまつたが、モデル嬢は自分では、どうすることも出来ない。そこですかさずヌードで一枚、そして、これは、腰巻をまとわせた一枚である。

モデル — 伊吹真佐子嬢 —



(3) こうなれば、もう大人しくするより仕方ない。 (1) ロープを肩に春日ルミ嬢がやってきた。



(4) ニヤリと顧つたルミ嬢の顔の凄艶さ。 (2) 獲物の左手に喰いついた素早やさ。

(7) シタバタしたって、今更どうにもならない。(5) 身動きの出来ないロープ縛り完成。

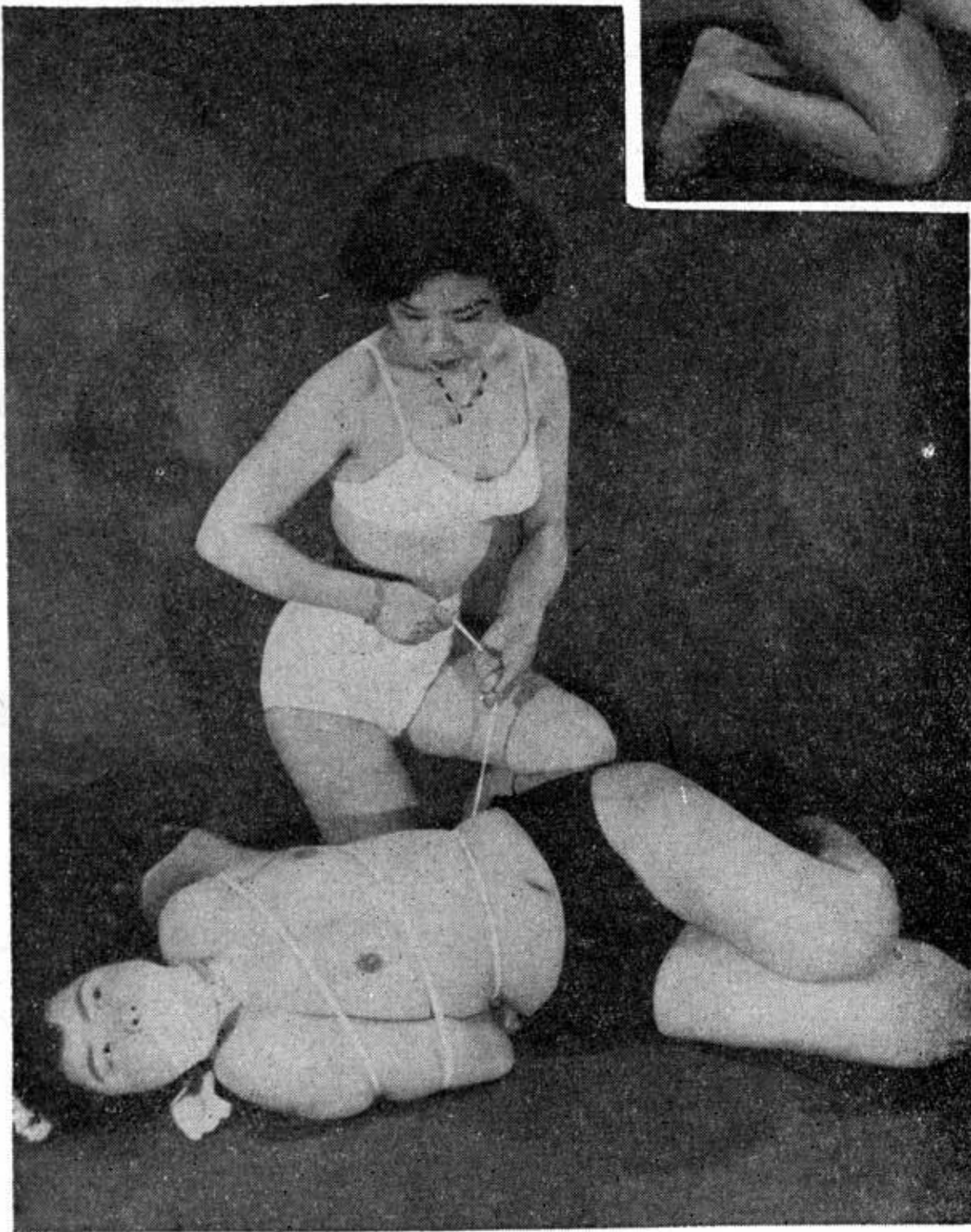


(8) それにしては、締め方がゆるいようだね。(6) 公園の柵へ押し倒そうとする。



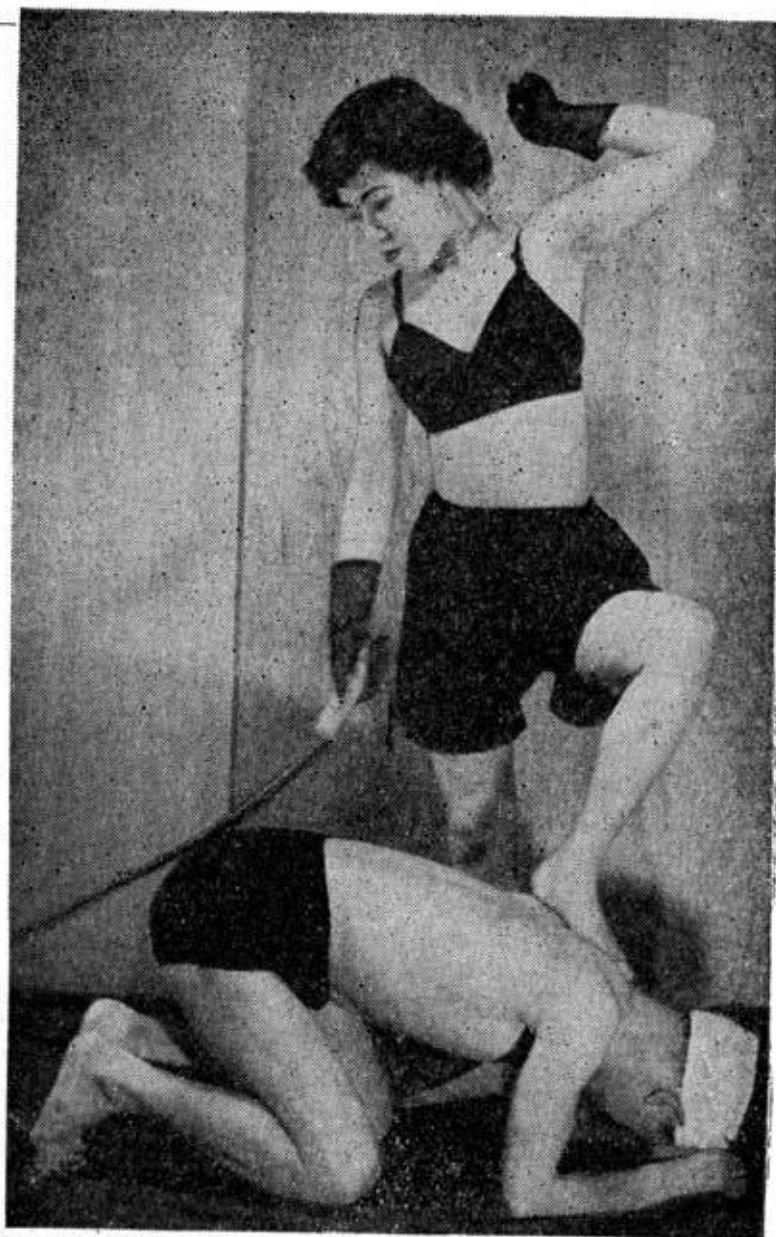
ムチをふり上げる

女の人にいじめられるのが嫌だという湖田モデルをムチで叩き上げるルミ嬢、縛られるのは好きだが叩かれるのは、どうも、と尻込みしても彼女にかゝっては、いや応なしに従がえさせられてしまう。



二嬢名コンビ写真(一)

ルミ嬢と伊吹嬢との悦虐遊戯といってよい、別に何の注文もつけず、彼女たちの好きなようにポーズしてもらったのが、このフォトである。



尻へパチリと

女の人でもルミ嬢だけには、思いきりいじめられていたいという湖田モデル、お尻に馬のムチが当たるとさすがに辛抱出来ないとみえて、願い上げを申し出た。「弱者、もう来なくてもいいヨ」



二嬢名コンビ写真(二)

(二) お臍いじめとでも題しようか、後手、胸、膝、と緊縛された伊吹嬢が、組上の魚さながらに仰向けになっているのへ、ルミ嬢が棒で力一ぱい押えつけている。

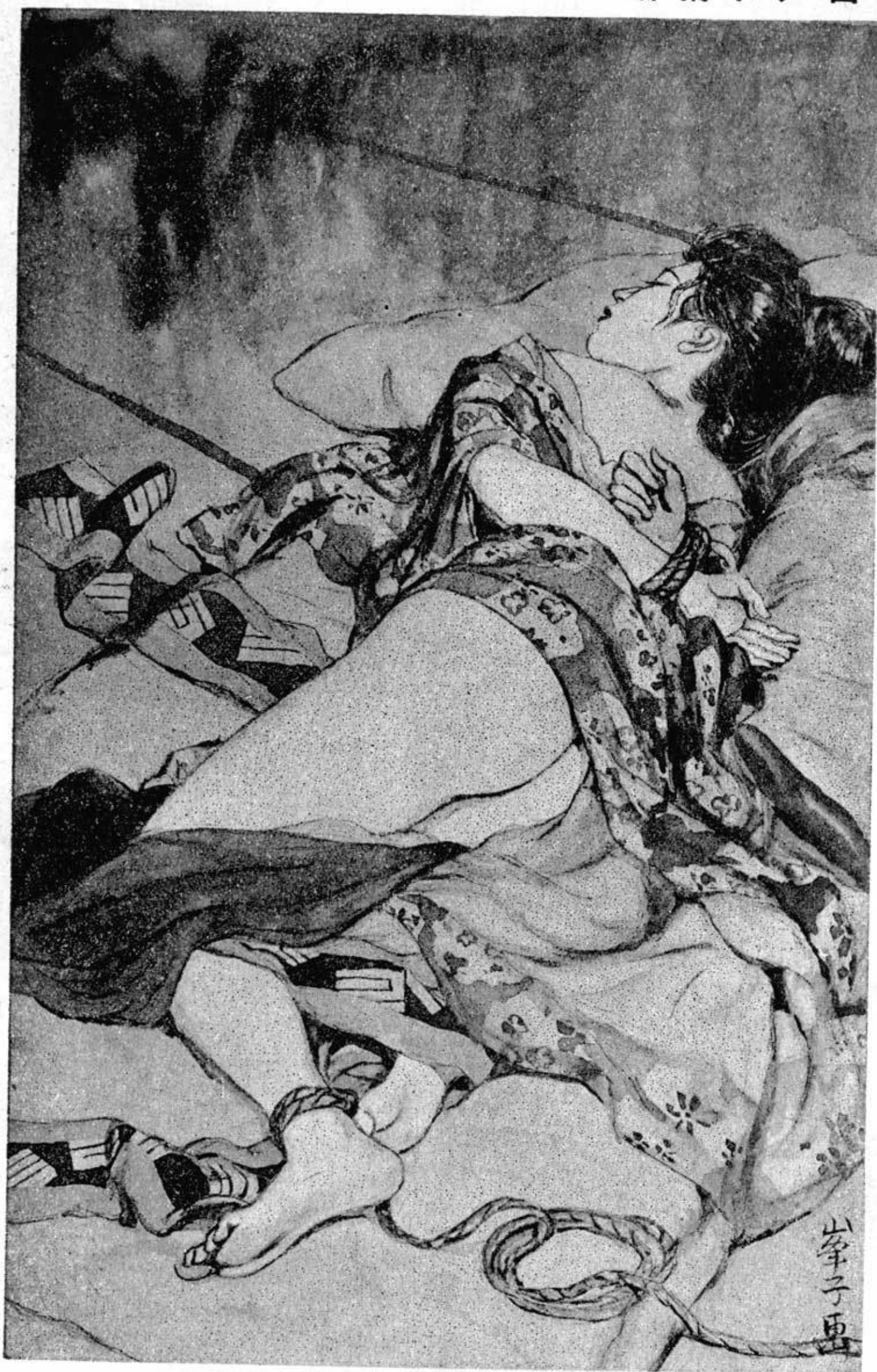


『可愛い、お客様』

都築峯子・画

『フェチシストの夢』

都築峯子・画





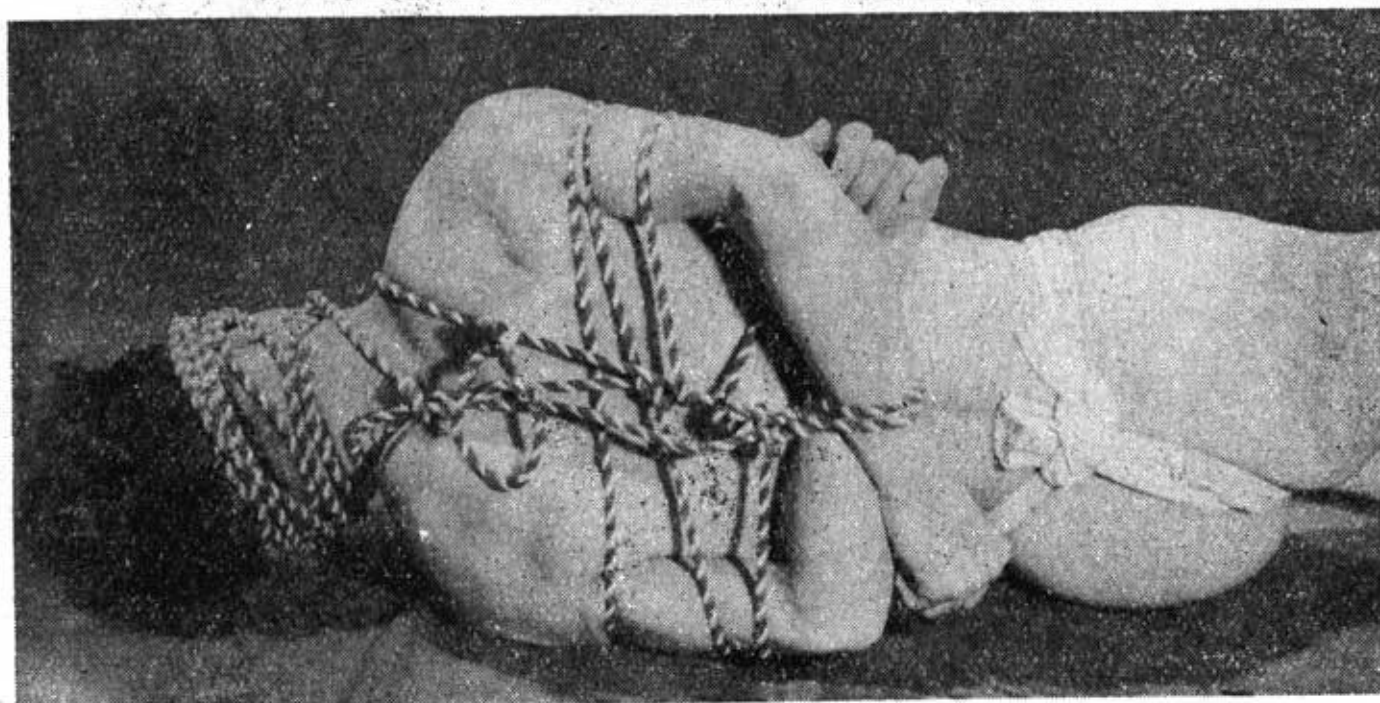
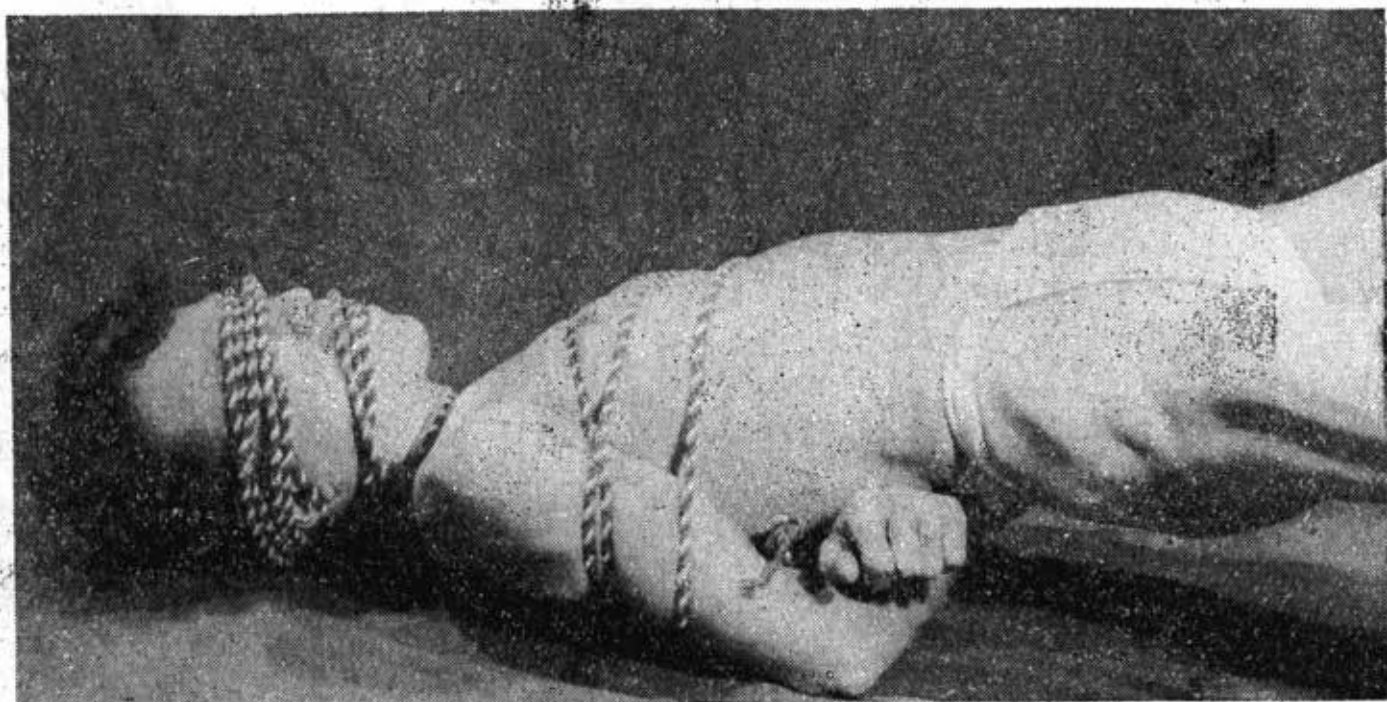
クリップによる鼻いじめ



鼻つまみ（表情に御注意）

（真鍋四十七氏提供、Y. M 氏撮影）

男性の禪姿
ロソクの火で責めて下半身を浮
かせたところ。



蹴ころがしたところ

（モデル・湖田平雄）

『残虐なる女性たち』画集

森本愛造解説

ヘゲマン特集

(Rudolf Hegemann)

先ず第一に、小生の私事によつて缺号の出た事をお詫びしなければならぬ。大見得をきつた直後の事なので、御期待下さつた読者諸君に対しては誠に相済みぬ事と深くお詫び申上げる。さて、前回のパウル・カム作品集に続くのはルドルフ・ヘゲマン作品集である。

其の筆致の雄渾、其の幻想の雄大、其の雰囲気の豪奢、パウル・カムをシヨパンに例えるならば、

これはまさしくヴァークネルの風格を持つて居る。劇的な迫力に於て、写真のよく為し能わざる効果を盛り上げ、独逸風の重厚な構成に、ほのかな夢とロマンティスムを加味したヘゲマンの作品はシュリヒテルのドビュッシー風の頽唐と共に、斯界の二大主流を為して居ると考えられる。前置きはさておいて、先ず作品自体に就いて見られたい。
(詳細解説は本文二九五頁参照)



1、『アルゼンティンのアマゾン』
(Argentinsche Amazone)



3、『女首斬役人』
(Die Scharfrichterin)



2、『力の入ったマツサージ』
(Energische Massage)



5、『看護婦』
(Die Krankenschwester)



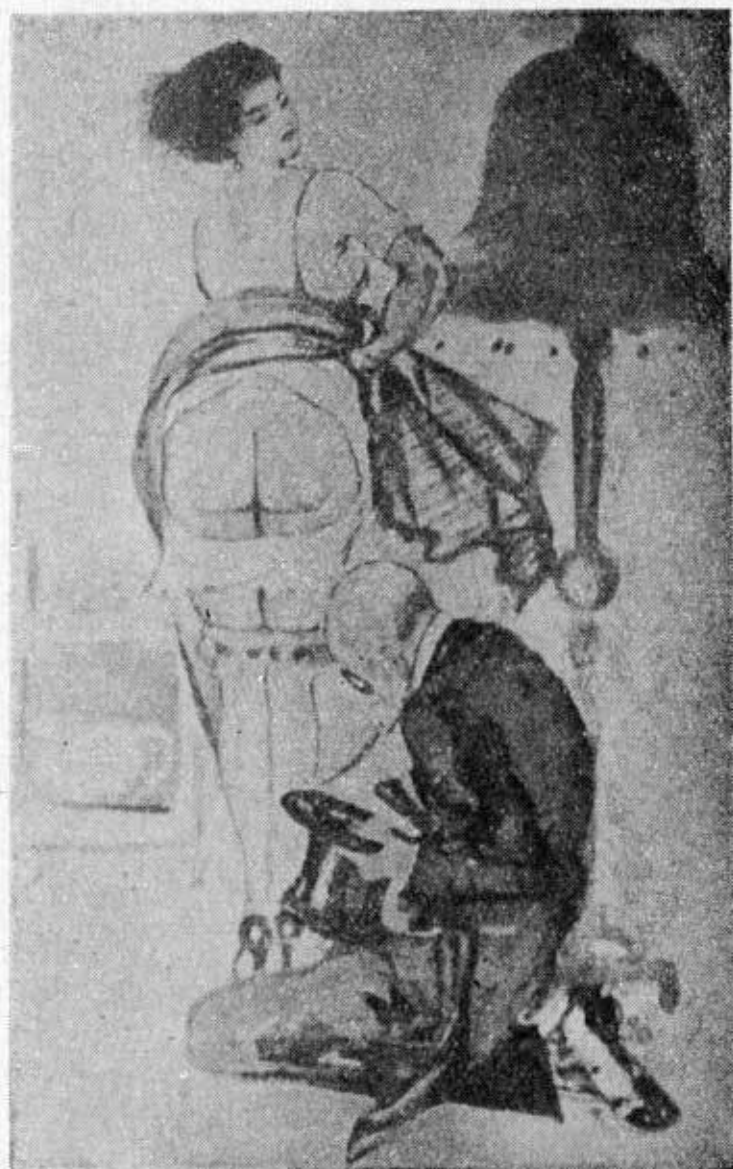
4、『サーカスの練習』 (Zirkusdressur)



7、『彼女は鞍上の人となつた』
(Sie steigt in den Sattel)



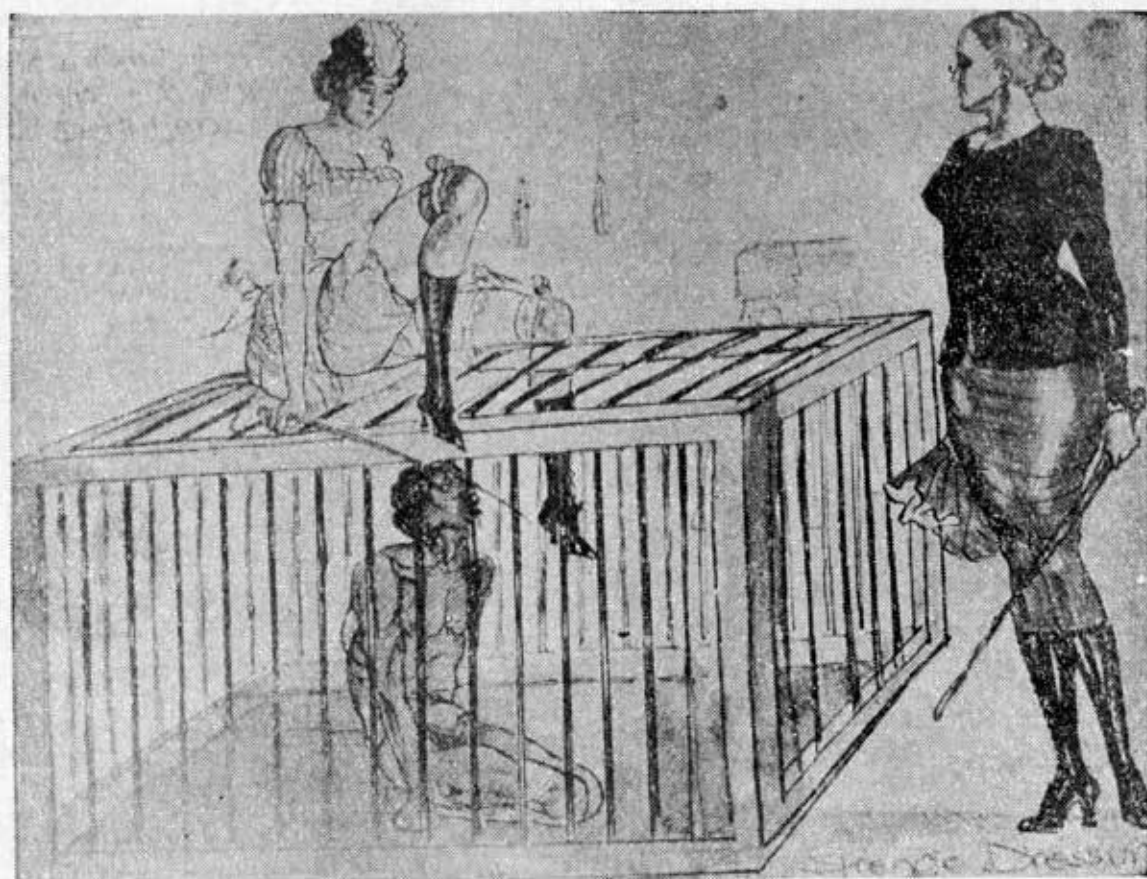
6、『鞦韆女の責苦』
(Der Gesangene der Tatarin)



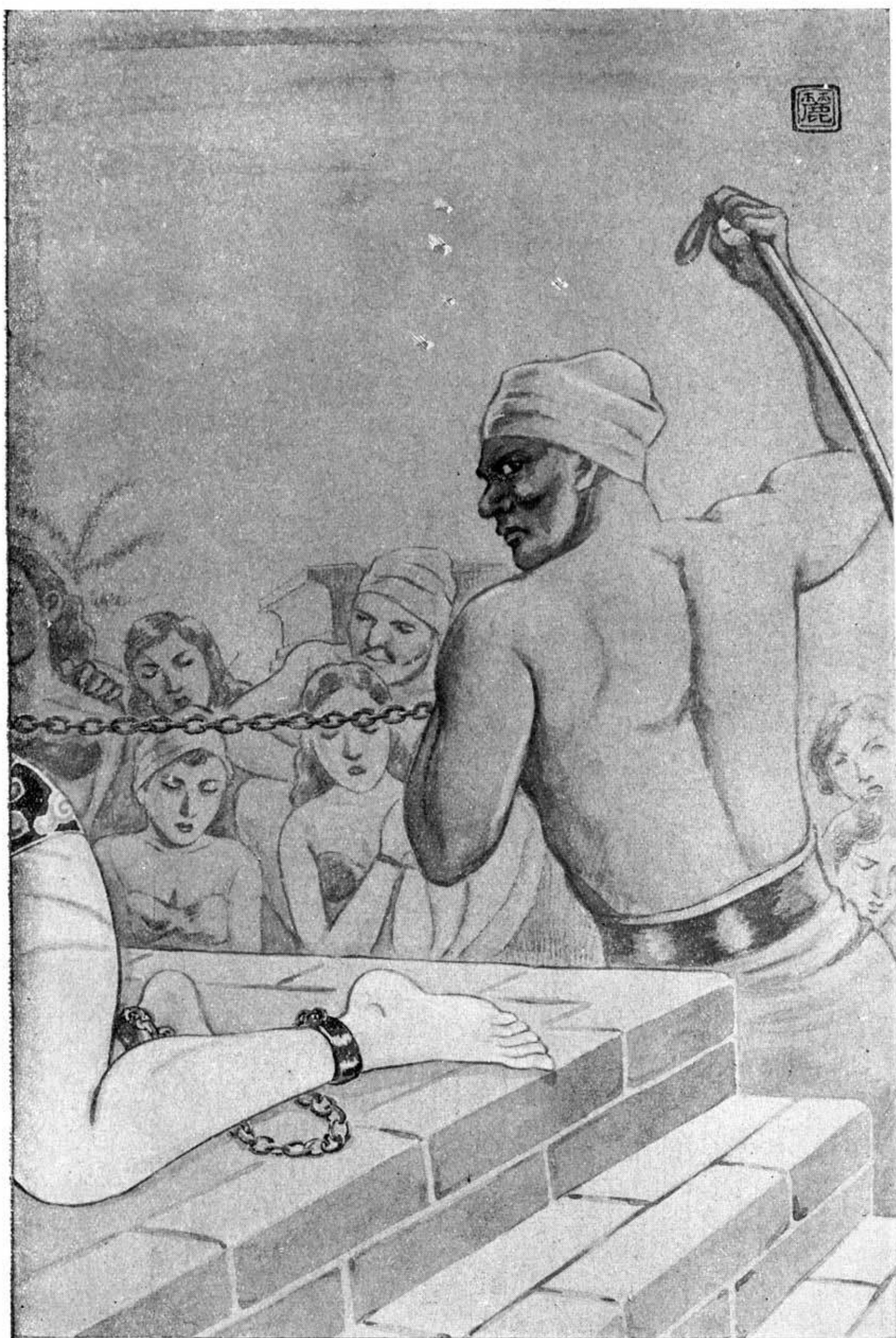
9、『崇 敬』
(Anbetung)



8、『さあ、ひざまづいてゝお育し下さいゝと
お言い。』
('Auf die Knie und um
Verzeihung bitten!')



10、『不思議な訓練』
(Strenge Dressur)



売られゆく女奴隷たち

滝れい子・画

せり売り台の上に据えられた女奴隷は、台の上に立って、奴隷商人たちに、身体の間々までよく見て貰えというせり売人の命に背たい為、激しいムキを受けている。白い女奴隷の悲鳴を商人たちは面白そうに見物している。果して彼女は誰に売られてゆくのだろうか。



浣腸

(真佐子嬢に浣腸をするルミ嬢)

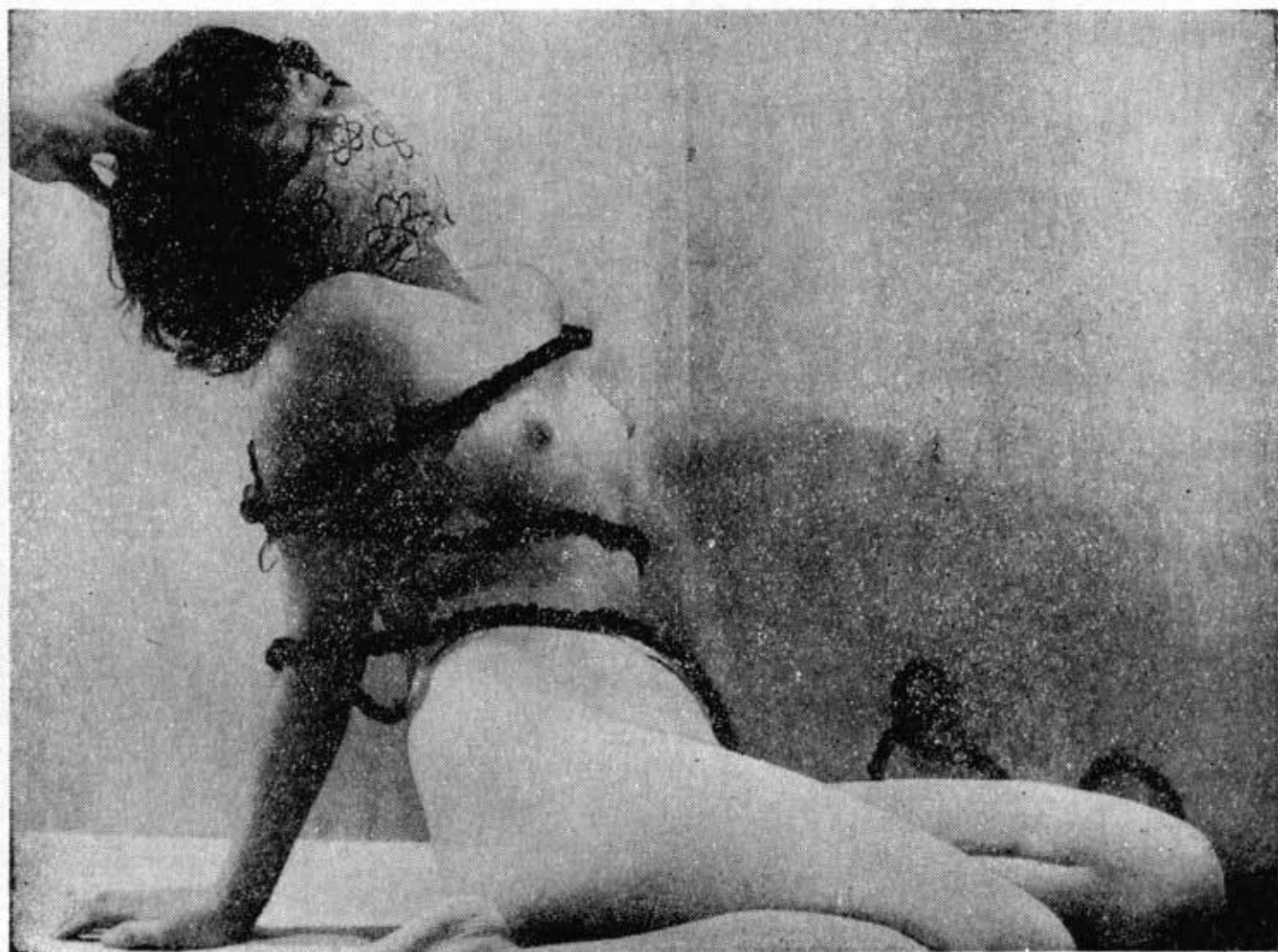


ルミ嬢の手にするは、20ccのガラス製浣腸器、羞恥におびえながら、諦めに似た表情の伊吹真佐子嬢、無理に脱がされたズロースがかわいゝ。

責めが終つて

きびしい縛しめが解かれてホツとしたところ、髪の毛を掻んで仰向けにころがされようとする。

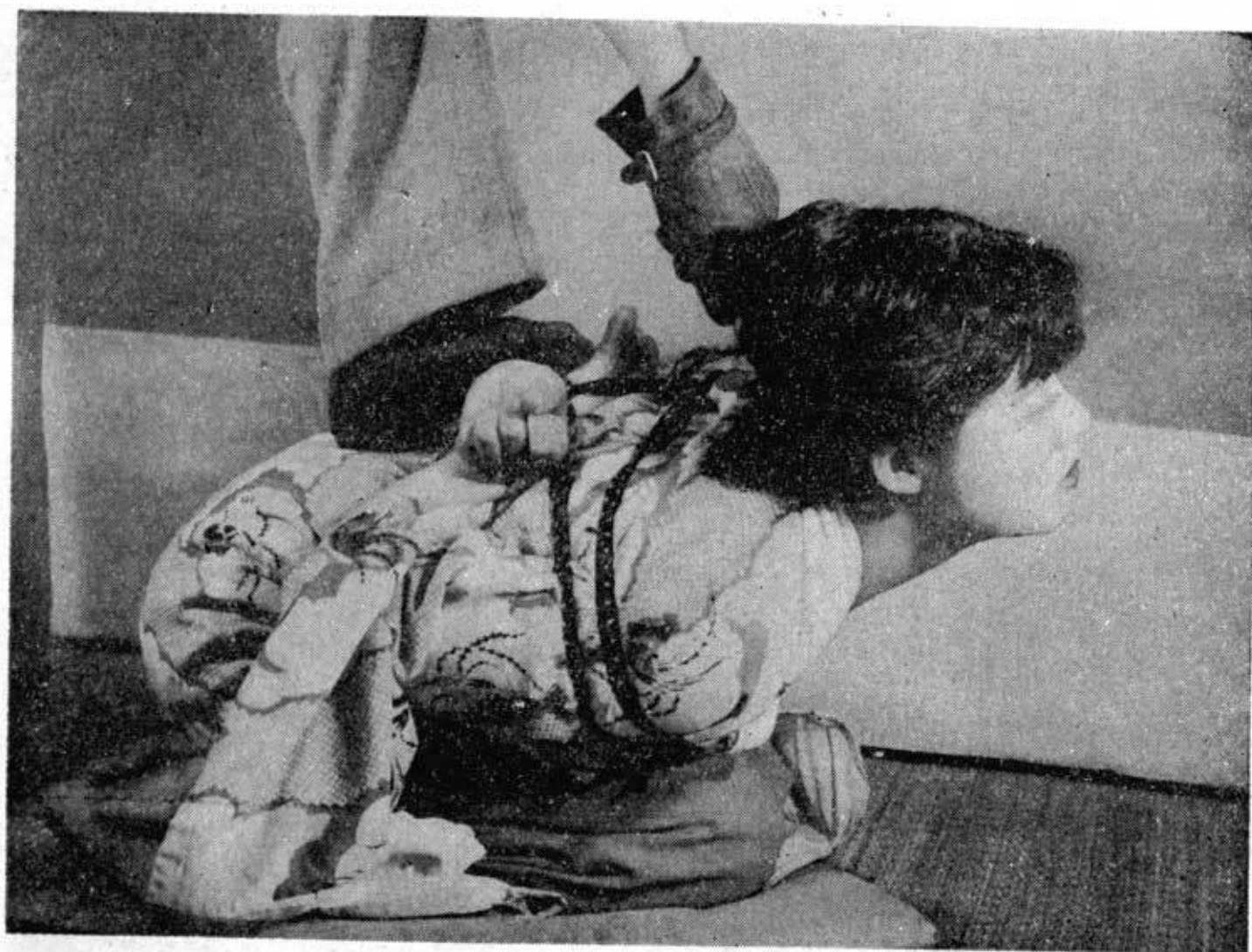
(中富綾子嬢)



押えつけ

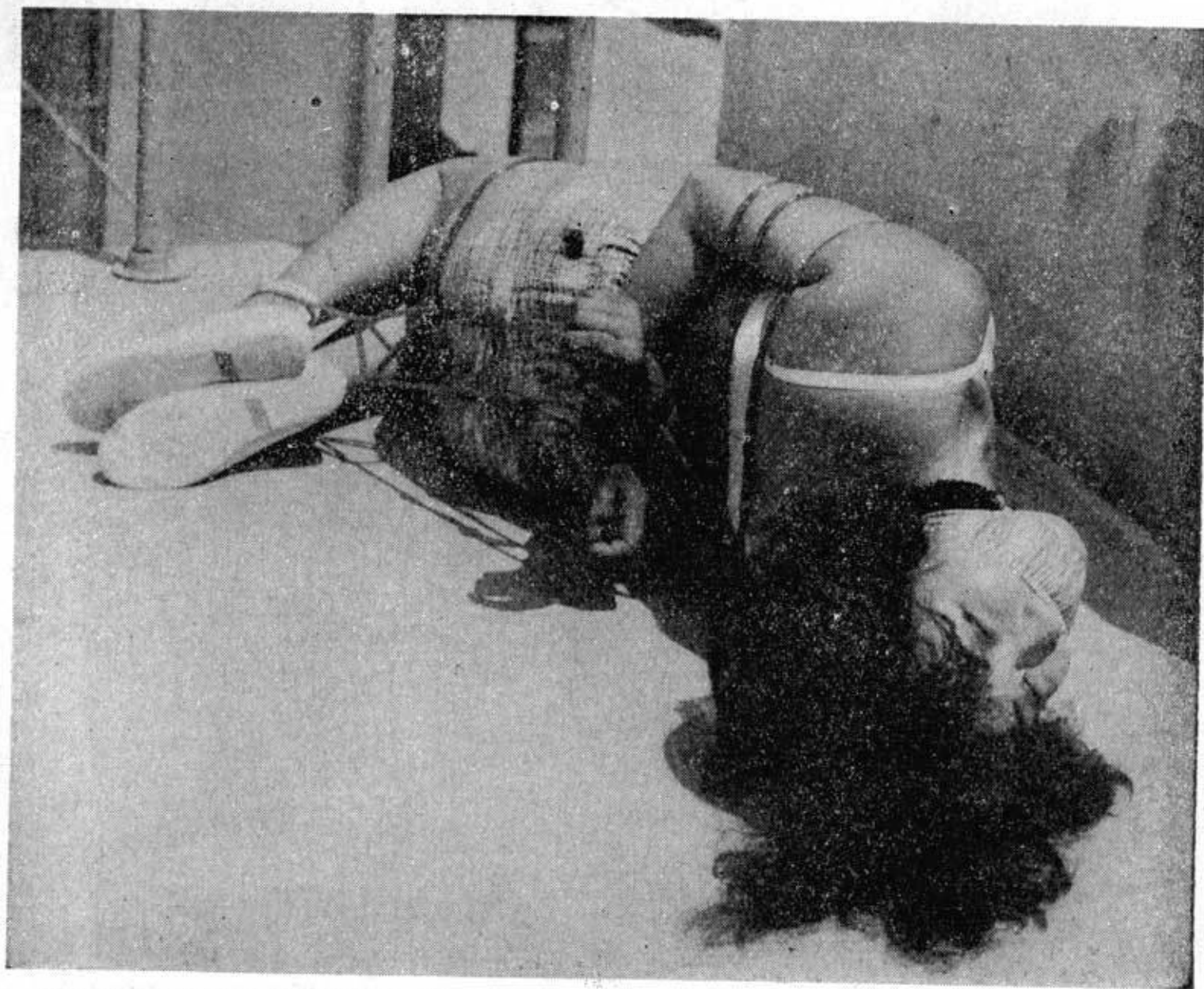
後手に足をかけて押えつけ、前に倒れたところを、ヘッ
プバーンの髪を掴んで引き起す。

(伊吹真佐子嬢)



屋上にて

(萩千恵子嬢)

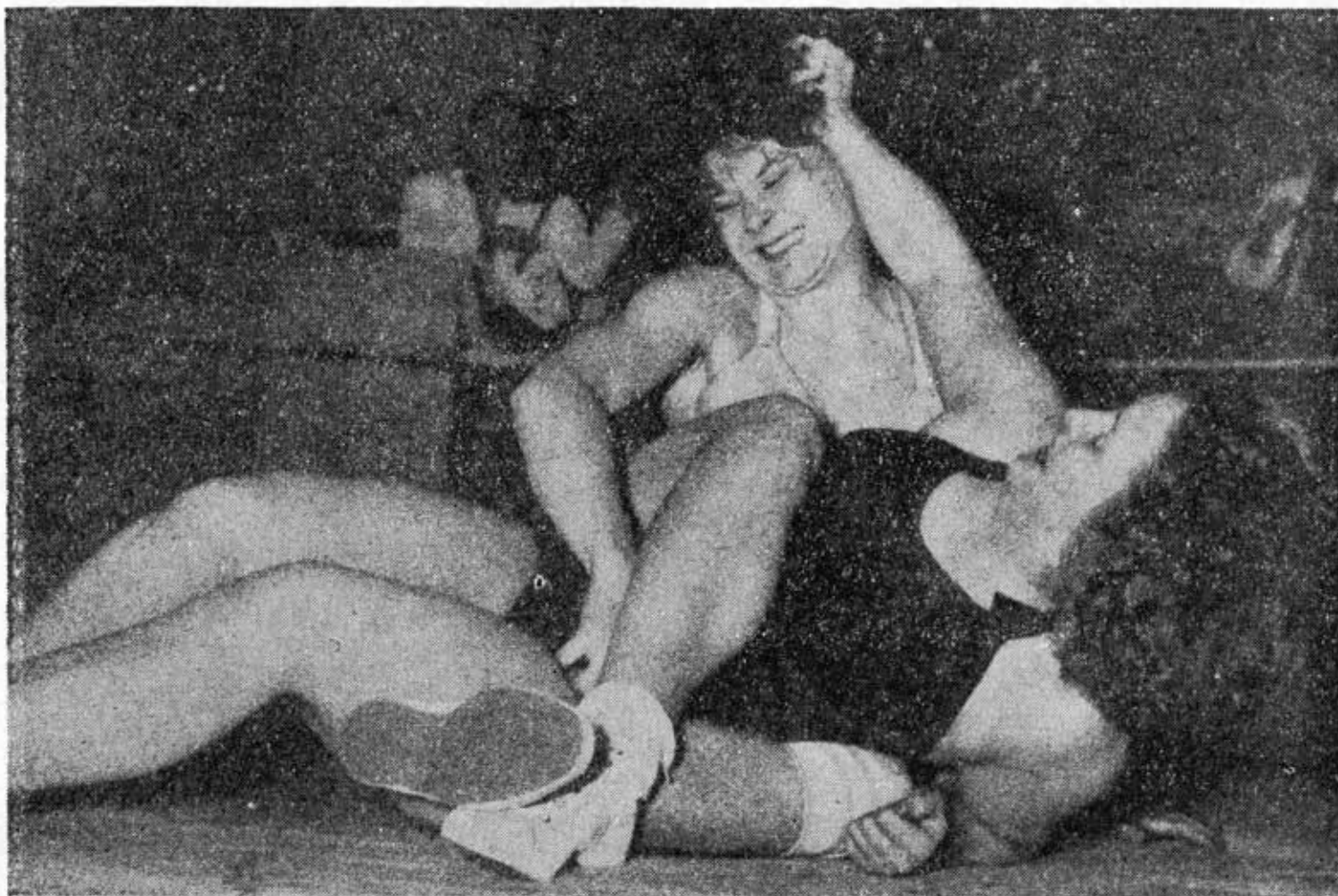


小春日和の屋上の午さがり、萩千恵子嬢を裸にむいて撮った一枚、友布れのさるぐ
つわ、紐は赤色のビニール線を用いた。

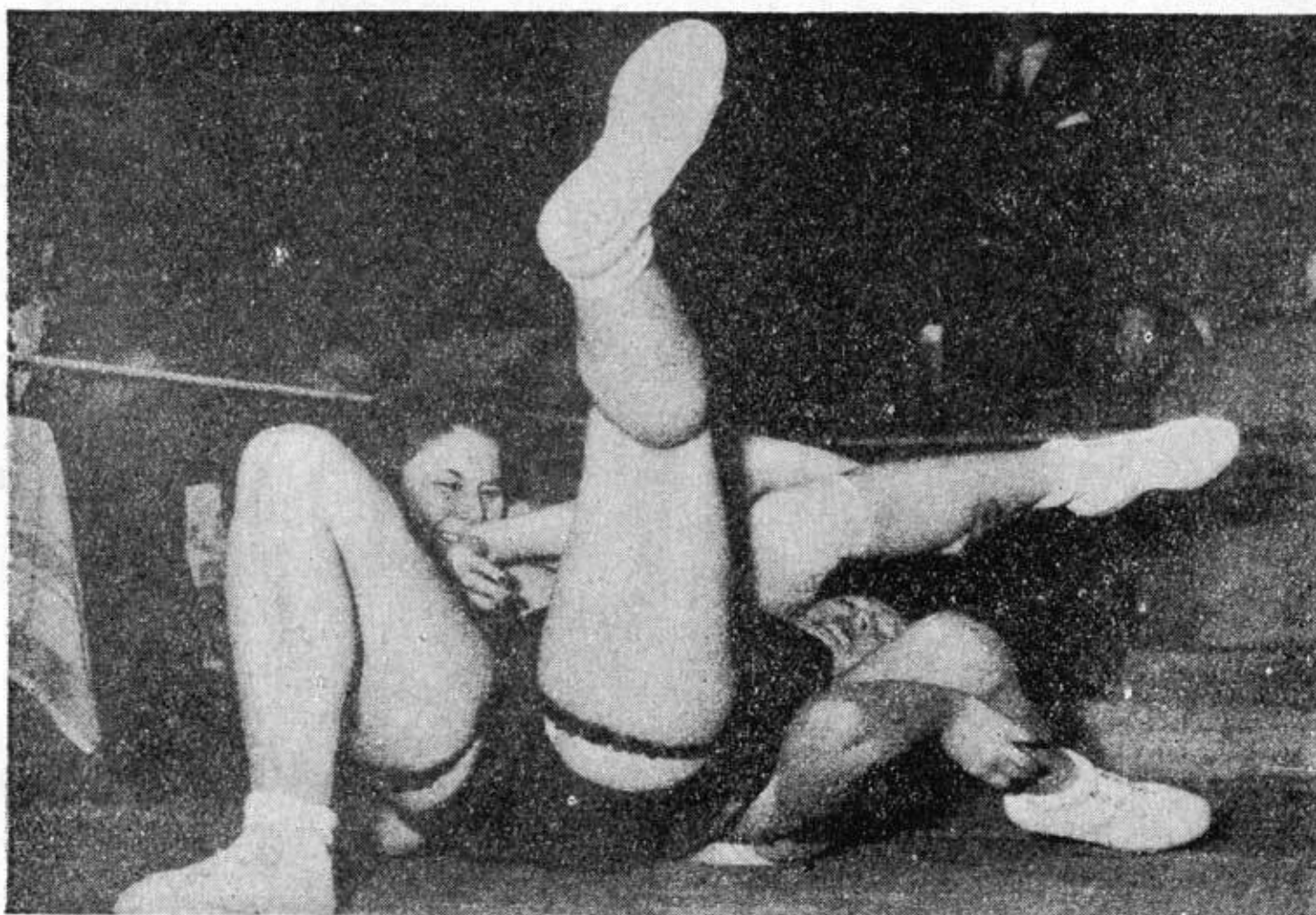
女レスリング

(フランス雑誌 Pigalle より)

胸
絞
め



頸
は
さ
み



女同士のあられもない格闘、しかし、こゝにもサジとマゾとの妖しい心のおのゝきが芽を出している。知ると知らずに限らず。

Marry and
Live Longer!
Oh Yeah!!

妻帯者が長生きするのは、チャンと一城の主となって、うちへ帰ってくつろげるからだそう。いや全く、たしかにくつろげます。御覧のとおり、それに奥様御手製の御料理という奴も戴ける！

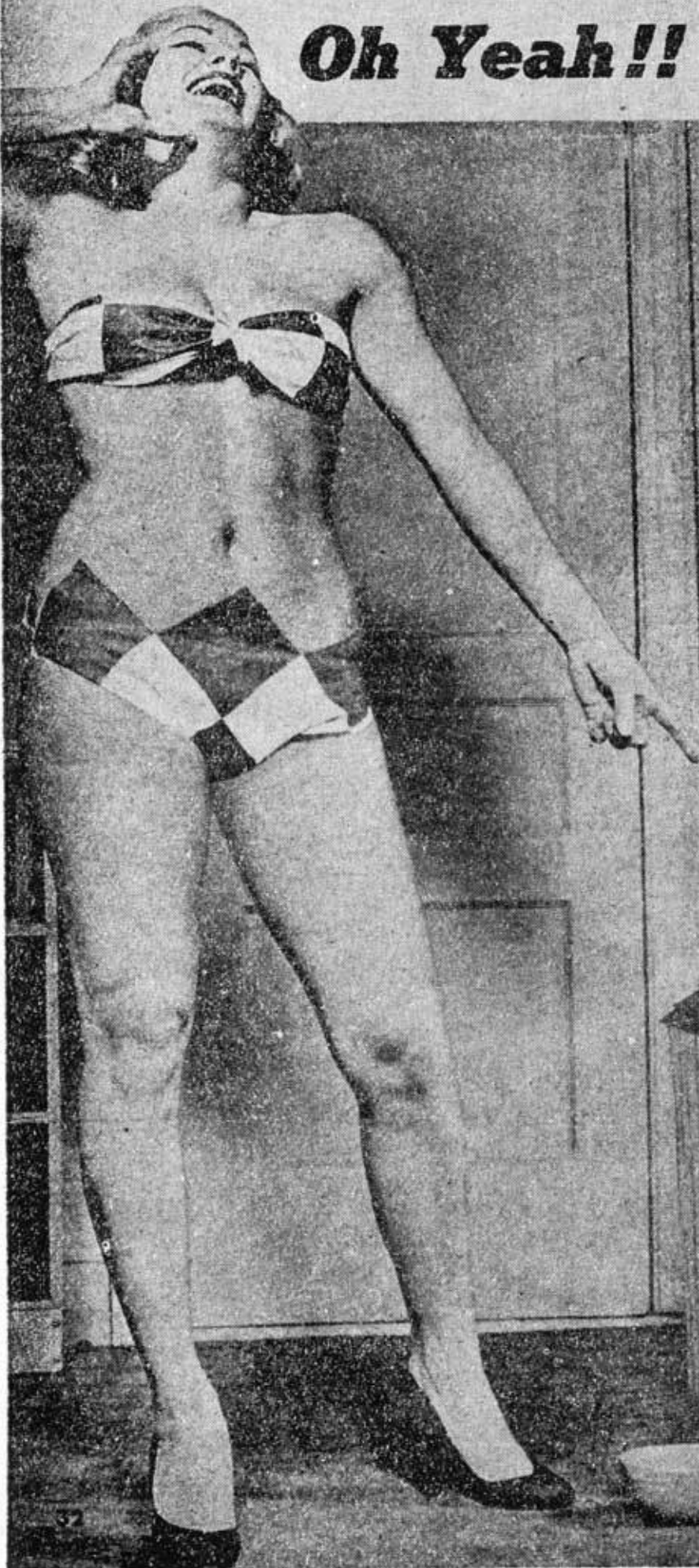
(真木不二夫氏提供)

米国家庭における夫の座

(アメリカ雑誌LAFFより)

Married man lives longer 'cause his home's his castle, and he relaxes. Yeah, he sure does—like this! An' ger that home-cooking!

DADDY





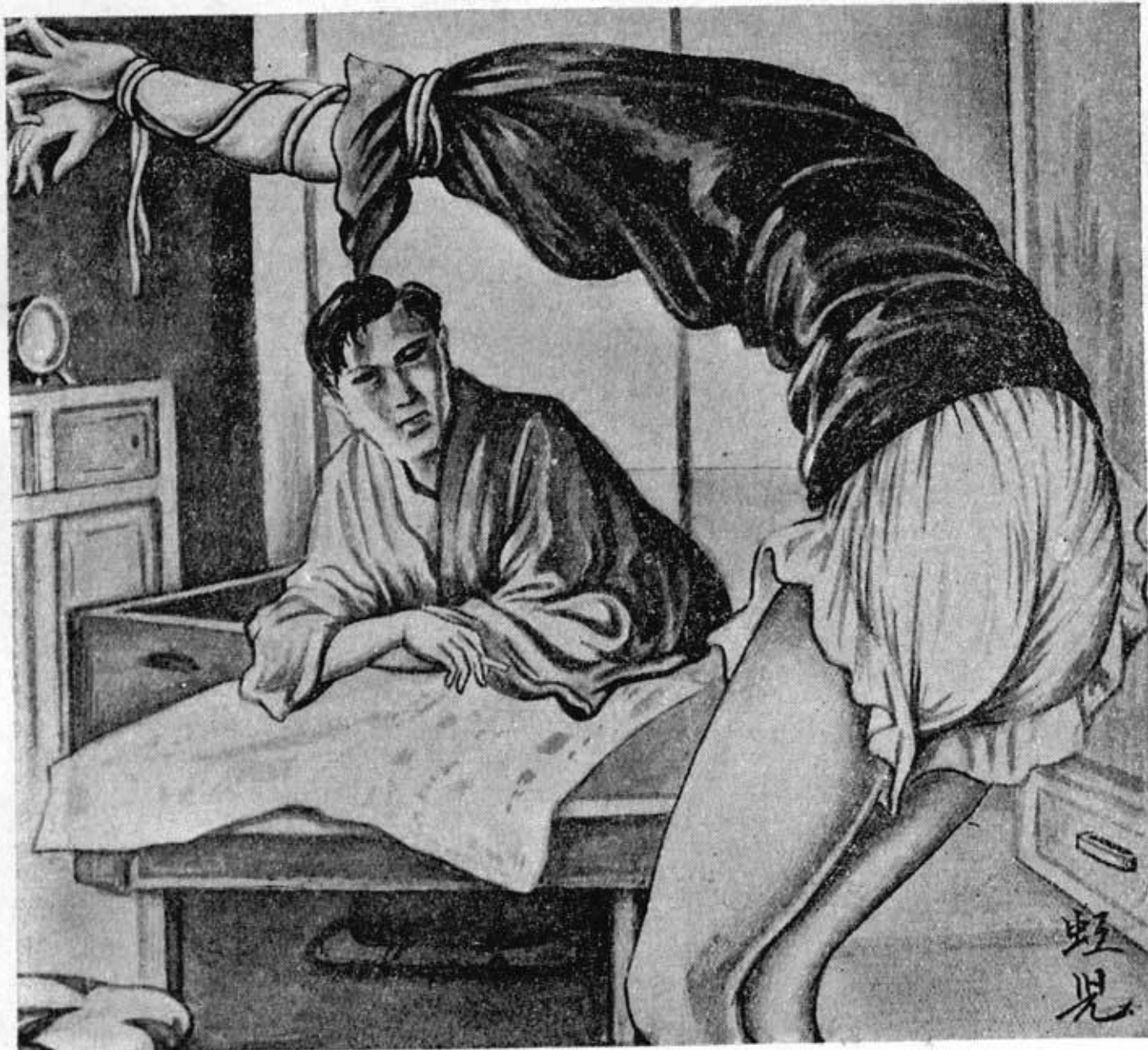
朝の出勤

(玄関にて)

シユミーズ一枚で後手に縛られて食事がすむと、夫の出勤です。口で靴は拭けますが、さて、これから？

(杉原虹兒・画)

虹兒



夕食後のひととき
「さあ、着てごらん」セーターと一緒に両手を縛られては、着ることが出来ません。夫の嗜虐的な眼はどこに？

虹兒

續物語

『裏切者』

四^シ馬^マ

孝^{タカシ}

文
と
画



何処へ行くのだろう、速力を早めた車はたつぷり一時間、暗い街並を走ると、やがて潮の香でそれと知れる海浜にそつた倉庫ばかり立ち並ぶ一廓で止つた。車を見送つた長谷は注意ぶかくあたりを見廻しながら、明子を背に、とある古びたコンクリートの建物の中へ入つた。恐らく彼以外誰も知らない隠れ家でもあるのだろう。さして広くはないがガラんとした中に、ちゃんと祕密の地下室が出来ていた。コックと彼はゆつくりその階段を下りて行つた。

昨夜の出来事がまざくと思ひ出された。誰も知らない筈の密輸の現場に手が入つた。そして彼は危ふくその場で捕まる所だつた。恐らく逃げのびたのは彼一人だつたに違いない。無我夢中で拳銃をぶつ発ちながら逃げのびた彼の頭に、その時、明子の美しい顔が、彼をあざ笑うかのように浮かんで消えた。——裏切者——まさかと思つたが、今日のこの事を事前に知つていたのは、自分の外は彼女だけだつた。冷静になつて考えれば考える程、彼の胸は怒りにふるえた。そういえば思ひあたるふしがないでもない此の頃の明子の態度——。ほん数時間程前、彼の事務所の東亜商事の三階建のビルの一室で、明子を連れだそうとした時、チラリと顔を見せた乾分の京次の顔も只事ではなかった。やつぱりそうだったのか、そう思うと、彼の冷たい心の底に気味悪い計画が無慈悲に頭をもたげてくるのだつた。



「明子、どうだい？気がついたか」
 どの位の時間だったろうか、明子は夢からさめたように、あたりを見廻したがすぐ眼の前につつ立っている長谷を見ると、瞬間、さつと身を引こうとしたが、身体は思うように自由にはならなかった。
 「フフムム、よくも俺を裏切ったナ、さんざん可愛がつてやつた恩も忘れてな」
 「し、知りません、そんなこと——」
 「馬鹿、この俺を盲だと思つてやがるのか、ちゃんと何もかも知っているんだ」

長谷は憎々しげに言いながら明子の見るも無惨に後手に縛り上げられてし片手を捉えた。彼女は逃れようと必死まつた。そして、更に苦しさにあえぐになって争つた。二人の身体は、もみ口にも強く猿ぐつわが、かまされてし合いながら、暫らく部屋の中をかけ廻まつた。
 「フフムム、こゝなら、どんなに騒荒々しくその場に引き倒された明子はいだつて二人つきりだ、心配するナ」
 着ているものまで次々にはぎとられて縛り上げた彼女を引き立てるようにしまつた。力つきた彼女は、どうするして、長谷は次は奥まつた小さな部屋ことも出来ず、なすがまゝに、やがてへ押し入れた。がらんとした何も道具



の置いてない小部屋には、古びた材木た。彼は部屋の奥に立っている煤けたやら縄の切れ端が隅にたまつているだ柱に後手のまゝ明子を身動き出来ないけだった。

「裏切者はどうなるか判っているだろに容赦のない荒縄が喰い込んでゆく。うな。まあ、お前のことだ、命まで取すつきりと脚線の伸びたその姿は、美ろうとは言わねえよ、そのかわり、たしいだけに余計痛々しかった。明子はつぶりと礼はさせて貰うからな」
長谷の冷たい心の底をよく知っている
今迄溜っていた怒りが、せきを切っだけに、この仕打ちがたまらなく恐ろ



しかった。彼が言った「裏切者」という言葉を聞いた時、彼女はハッと胸をつかれた。と同時に、京次の顔がすうと臉の奥をかすめた。長谷はゆっくり煙草に火をつけながら片頬を不気味にゆがませた。さつきまで何かに追われているような、いら／＼した気持も忘れて、さて、これからこの美しい獲物をどうしてやるうか、と考えめぐらしている風であつた。

身動き出来ないように足首から頸まで、柱に雁字搦目に縛り上げられている白いけにえに長谷は近づいた。





ズボンのふくらみへ動いた間一髪 京次の鉄拳が彼の左面で鳴った。二人の肉体は、にぶい音を立て、ぶつかり合った。組み合いながら京次は、見るも無惨に縛り上げられた明子の姿をチラリと眺める心の余裕を持っていた。間もなく殺

到するであろう警官達に見せたくなかつた。京次は長谷を必殺のパンチで倒すや、す早く、明子の縛しめを解いた。「京次さん」二人は、戸外に大勢の靴の音を聞きながらひしと抱きあっていた。

(おわり)



と、その時である。かすかな物音がドナーの外でした。長谷は思わずハッとして耳をすませた。誰も来る筈はない、鼠でいもあるんだろう、と思ったが、それでも気になった彼は、ドアに手をかけた。が、それより先に彼の眼の前に人影が立った。
「あッ、誰だ、てめえは？」
薄明りに映った人影は京次だった。

「兄貴、お楽しみのところ、すまなかっただな」
「なにしに來やがったんだ、お前にや用はねえ、さっさと帰れ」
「ふふ、そうはゆかねえ、兄貴、夢切者は俺だよ、とんだ濡れ衣で何も知らねえ人を苦しめちや申訳がねえ、責めるなら、この俺にやって貰いてえ」
怒りにふるえた長谷の手が、咄嗟に

無

題

(源谷清市画)



明治三十八年十二月廿四日、春陽堂ヨリ発行サレタ渡辺勝著「吉丁字」トイ
ウ本ノ口絵デアル、百合、撫子、女郎花ナドノ咲キ乱レタ庭ニテ後手ニ縛ラ
レテ猿グツワ迄サレタ婦女ノ絵デアル。

【特 別 増 大 号】

文化人の文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1955年 3月号

(第九卷 第三号 通刊第七十八号)



巻頭論稿

倒錯研究の

新展開について

成瀬 亮

一、倒錯の本体

奇譚クラブは戦後における日本唯一の倒錯研究誌であります。戦前には宮武外骨氏の主宰された変態風俗誌及び「グロテスク」などの同傾向誌も存在しましたが、いつの間にか姿を消し、また二三年来奇譚クラブの隆盛ぶりに眼をつけた群小の出版社が類

似誌を発行したこともありますが、やはり短かい寿命で終わりました。結局、倒錯研究誌としては、奇譚クラブが衆望に応えて独走していることになりました。元来、変態とか倒錯とかいう世界は、刺戟が強烈であるだけに行きづまりも早い、というのが従来

はやはり、現代人の求める官能や感覚に最もよくマッチするからだろうと思います。ところで、奇譚クラブを興味本位の立場から絶対支持する耽美派も、倫理や風紀の面から強く反対している派も、「倒錯」とは一体何を指すのか、その実体が何であるのか、という根本問題を理解して掛かっていないような一抹の不安があります。

嗜虐のサディズム、被虐のマゾヒズム、男性と男性あるいは女性と女性の同性愛、異性の体の一部またはそれに附接するものを対象とするフェティシズム、異性の服装をしたがる異装症、それらがいわゆる「倒錯」と見なされ、アブノーマルな愛情生活を端的に示しているわけですが、ではなぜ、そうした倒錯あるいは変態に現代人が魅惑されやすいのか、いや、実は太古から人間の愛情生活にそうした分子が執念深くつきまとい、現代人もやはりその範囲から脱出できないのか。

さらにまた、異常、倒錯、変態などと呼ばれるそれらは、一体、正常、本態、健康などと考えられている愛情生活と全く相容れない性質のものかどうか。では、なにが正常で何が異常なのか。そのハッキリした区別と限界が説明できるのかどうか。実のところ、倒錯反対の人々が躍起になっている言葉の中にも、一体どの程度の、いかなる倒錯行為が風俗や秩序を紊すというのかは至ってアイマイであります。

残念ですが、こうした問題については、「誰にもよくはわからない」と答えるのが

正しいのであります。わからないから、讚美派も反対派も各自の得手勝手な解決を投げつけあい結局滑稽な混乱が起るのです。これは酒や煙草の賛否論にも似ています。賛成派は酒や煙草の長所ばかりを褒め上げ反対派はその逆に欠点ばかりを挙げて攻撃したがる。とにかく、すてておいてはうるさいからいっそ禁酒法か禁煙法でも出して酒や煙草を社会から追放しまえがいい、と、いわゆるお偉方はすぐこう考えたがります。倒錯趣味だって亦然り。なにか新しい風紀取締法でも作ってピシピシやれば立ち所に消え失せるような軽率な早合点が多分にあるようです。だが、おっとどここいそう簡単には問屋が卸しません。昔、アメリカが禁酒法を出したために、いかに殺人的密造酒が氾濫し、ギャングが横行して、手を焼かす結果に終わったことか、を忘れてはならないのです。ムリな取締はやるべきではありません。

二、正常と異常の限界

倒錯の傾向は、ある一部の人々だけの悦びではなくて、実はわれわれ誰にだって多

少はあるのです。それをハッキリ意識しているかいなか、が違うだけのことで、普通のありふれた愛情生活から解放され、なんとか新奇で匂やかな刺激の味を加えたいと願っていないものはないはずです。愛情生活を「人類の繁殖と発展のため」にのみ営むというような聖人または偽善者でない限りは。われわれは種牛や種馬や種犬ではないし、たとえ「人類の繁殖と発展」に寄与したり貢献しなくても、愛情の対象を求めます。愛したいものを自由に愛する権利を、拘束されたり制肘されたりしては基本的人権もクソありません。

強制や命令や暴力では、人間は「愛し得ぬものを愛する」わけにも行かず「愛するものを愛さぬ」わけにもゆかないのです。アメリカを愛せ、ソ連を愛せ、ついでに原水爆とジェット超重爆を愛せよ、といわれたい、われわれは冷笑を酬ゆる他ないように、倒錯を愛するな、人間の矛盾を愛するな、といわれてもやはり冷笑を酬ゆる他ないでしょう。ムダで無用なお節介はよしなさい、と。

ただし、われわれは一つの社会集団に属

しています。上からの圧迫や命令はハネ返すけれども、善良で平和な隣人達に、不快さや醜怪さや嫌悪を抱かせてはいけません。自分の自由を主張すると同時に、善意の隣人達の自由を十分に尊重しなければならぬ。倒錯趣味がそれ自身はなんら隣人達の平和と秩序を傷つけないはずなのに、ともすれば招かざる非難を浴びやすいのは、倒錯趣味者達に深甚な配慮が足りないためかも知れません。たとえば、「純真な青少年に害毒を流す」などの飛んでもない非難だって、僅かな配慮によって十分避けられる性質のものであります。

本題に戻りましょう。

「人間には誰にだって多少の倒錯傾向がある」ということ。その多少だって、度量衡で計るとか、ガイガア計数管でカウント数を出す、というようなわけに行きません。たとえば、フエラチオやクニリングスだって、それ自体は、正常な夫妻や、熱愛しあう恋人の仲では、ちっとも異常行為に該当しない。別に相手から要求されなくたって、愛情の燃える際には何の醜怪感や不潔感も伴わずに行うことが出来ます。けれど

もしも全然愛情を感じない相手が、フエラチオ又はクニリングスを強要したとしたら、誰だって当然拒絶するはずです。喜んで応諾するとしたら、たしかに病的です。そしてまた、フエラチオやクニリングス自体で完全な満足を得る習慣性に陥ってしまうとか、それを行わせるためのみに相手を求める、としたら、これはもうハッキリと「異常なる愛情行為」と看做していいと、私はおもいます。

それからもう一つの例。誰にだって一つや二つ記憶のあることですが、恋人や異性とお互の身についているものを交換しあって、それをその人自身のように愛することです。遠く離れて住むとか、長い旅行に出るときに、「これを自分の代りと思って下さいね」とささやいて、ブローチやハンカチや指輪や腕時計を相手に渡す、あるいは一緒に写した写真などを残しておく。(どうも、いささか文学少年少女好みのあまい話で顔が赤くなりますが)これなど誰だってちよっとロマンチックで美しく感じるでしょう。だが、もしも、愛情を通い合わせしていない不特定多数の異性の持物を、(殊

に汗や脂のしみこんだ手袋や靴、さらにシユミーズやドロアースなど)集めて悦ぶ性癖があるとしたら、われわれがこれから、美しいロマンチックな印象を受けるでしようか。おそらく醜悪で不潔な病的印象を受けるはずです。本質的にいえば前者も後者も等しくフエティシズムに変わりはないのです。だがそこから受ける美醜の印象は天地の差を生じます。そうしてみると、正常と異常、本態と変態の差は、行為そのものではなく、その行為の環境と条件によるのだということがハッキリしてくるようです。環境と条件の変化に従って、正常が異常に見えるし、異常が正常に見える、ということ。この一番大切なことを、今まで指摘した論説は不幸にして私がはじめてかも知れません。

三、同性愛の素因と心理

論を進めましょう。倒錯行為を裏付ける心理の問題であります。原因がなしに結果は生まれない。心象がなくて現象がある、というのは納得できません。私は倒錯行為を官能や感覚の直反射とはおもいません。

巻頭論稿

フロイドをいまさら引っぱり出すのはどうも気が引けるのですが、「夢は抑圧された性本能の所産である」とし、各人の見た夢を告白させることによって、秘匿されている性本能の不満を発見する、という行き方でやれば、倒錯行為を鋭く追及し徹底的に解剖することによって、それを裏づける心理の秘密がハッキリ浮き上がってくるでしょう。こうしたきびしい科学性というものも従来の奇譚クラブでは未開拓のまま放置されているのが惜しめます。テクニクの微に入り細に入る研究もたしかに面白いことですが、こうした新しい面にもどしどし鉤を入れて行くべきでしょう。そうすることによって、奇譚クラブを支持する夥しい読者群の持つ「現代に生きるものの悩み」の共通性がハッキリしてくる筈なのです。それが果して現代社会の圧迫によるものなのか、それとも、あくまで個人そのものの性本能の抑圧から招来されたものなのか、

も明瞭になるでしょう。

倒錯研究誌（名実共に）たる以上これは欠かすべからざる課題のようです。その一例として、男性の直腸を、女性のヴァジナに代替せしめる愛情行為、つまりソドミイという倒錯等も解釈するのに実に難物であります。特に、パッシヴの側にまわる男性が、本来堪え忍び難い疼痛であるべきなのに、そうした倒錯行為を悦び、精神的女性化どころか、肉体的擬女性の状態を呈してくるという事実は一体どう解釈していいのでしょうか。同性は相反激し異性は相惹くというのが万物の実相なのであり、人類に限ってこうした反自然な行為が、現代のみならず、ずいぶん太古から連綿と行われ来たったという歴史の事実は、われわれをひどく悩ませます。

器管愛から出発して、自己愛、同性愛、そして異性愛へと成長してゆくのが普通の人間の愛情のプロセスでありますから、誰しも異性愛へ到達する以前の時期、すなわち青春前期の思春期に、きわめて短かい同性愛の期間を経ます。九州とか東北の一部のように、「女色に親しむは男子の恥辱」

というようなスパルタ式硬骨教育を施す土地では反動的に美少年趣味が風靡しますけれども、そうでなくても、人間は成長のプロセスの中に、同性愛の時期を持つことはたしかであります。同年輩あるいは少し年下の美少年を相手に奇妙な甘酸っぱい擬似恋愛行為を行った経験は誰しも持ったことでしょう。が、しかし、それは極めて短い期間であり、適当な異性を発見した瞬間、同性愛感情はたちまち薄れてゆきます。いわば、この時期の同性愛は恋愛へのトレーニングである、といってもよろしいでしょう。少年期に遭遇するそれは、自慰同様、過剰エネルギーの生理的放出にすぎませんから、ここでいう「解釈の難しい」同性愛には該当いたしません。また、軍隊や刑務所のように、異性を入れない特殊な環境においては、異性獲得の道が杜絶するためのやむを得ない代替同性愛で、そうした特殊例もそう大きな興味は惹かれません。

ここで論じたいのは、異性への接近、選択、獲得が全く自由な環境と条件に在りながら、なおかつ、同性愛に走る人々の問題であります。一番の謎なのは、同性愛に耽

ける人々が（アクティヴ側にせよ、パッシヴ側にせよ）、男性の条件と機能において何等欠除してないことであります。内分泌腺も健全だし、フロースにも異常はなく、生殖力も欠けていないが、ただ、異性に対しては愛情を感じない。つまり、肉体的、機能的には「完全な男性」でありながら、ただ一つ「精神的に異性を愛さない」のであります。そうすると、同性愛とは、決して「生理的かつ先天的」な倒錯ではなく、あくまで「心理的かつ後天的」な倒錯ということになります。

ではなぜ「心理的かつ後天的」にそういう状態に導かれるのか。いろいろな学説をずいぶん読み漁ってみました。ハッキリこれに相違ないと確信を与えてくれたものはまだありません。世間には「直腸粘膜の収縮や肛門括約筋の収縮は、ヴァジナの収縮よりもはるかに強い」という理由から、主として肉体的快美感の優秀を挙げて、同性愛の蔓延を説明するものが相当にあります。がしかし、同性反撥の原理は、そうした肉体的条件云々よりもはるかに深く根強いはずでありますし、現に同性愛趣味を全

く持たない者は、そういう種類の女性的男性が接近するだけでも、我慢ならぬ憐憫と醜悪と軽蔑を感じるのが常であります。

同性愛者の特殊心理とその素因を深く抉ってゆく研究、それも奇譚クラブの果さねばならぬ大きな課題のようであります。同性愛の耽美、告白の類にも、現象としては捉えられておっても、一番かんじんの心象と素因はどうも明らかにされていないのが普通であります。「こういう素因と心象によって、同性愛が成立する」という十分に明瞭で確実な理論の現われることを切に期待いたします。

四、芥川文学にある倒錯性

人間の愛情生活はきわめて機微に属します。なにを対象とし、いかなる手段方法によって愛情行為を営まねばならぬというような規定や標準は一切設けられません。

そういう観点からすれば、愛情行為を正常と異常に分けるとか、限界を設けようとする自身は滑稽なことになります。われわれは正常な心理で正常な行為を営み、異常な心理で異常な行為を営むのでなく、正

常な心理で営む行為であってもそれが半ば正常、半ば異常なものである場合がずいぶん多いのでありまして、その矛盾をすなおに容認できてこそ人生の面白味を理解できるのでしょう。

夏目漱石門下の鬼才芥川龍之介の文学には（谷崎潤一郎の文学とは全く異質ですが）少からぬ倒錯性を題材としているのがあります。芥川は決して耽美（唯美）派作家ではないとしても、鋭い人間解剖の方法として、人間が無意識に陥ってゆく愛情倒錯の心理過程を実に胸のすく鮮やかさで抉り出しております。ベニス映画祭でグラン・プリ賞を獲た「羅生門」は、芥川の原作「藪の中」を刻明に忠実に映画の世界に再現しています。が、平安朝に取材した「羅生門」「鼻」「芋粥」「蜘蛛の糸」「群盗」と共に芥川文学を代表する「好色」一篇は、倒錯耽美者として必読の小説でしょう。

お読みになっていない方のためにアウトラインを述べましょう。この小説の主人公は平仲というドンファン型の青年公卿であります。洛中洛外のいかなる女性でも一回逢えば必ず陥落させずにおかないし、また

卷頭論稿

かつて一度も女に拒絶された例がないことに満々たる誇と自信を持つこのドンファンが、あらゆる手練手管を尽くしてもついに一指をもふれさせなかった稀有な一姫君のことを書いてあります。平仲が根限り精限り書き送る夥しい恋文に対しても一本の返事も与えず、最後にたった一回平仲に返した文は、なんと、「一度逢いたい」と書いた平仲自身の恋文の文字を切り抜いて薄紙に貼りつけてありました。天に昇る悦びで訪れた平仲は全く灯をともしぬ暗闇の屋敷内で、彼女の髪と肌の手をふれるのであります。いざという間際に、「一枚の扉を閉め忘れました」と彼女は立ち去ってしまいます。それっきり再び平仲の許へは帰らないのであります。翻弄されていらだつ平仲はついに、「彼女の最も醜い排泄物を目撃すれば、ひどい幻滅を感じて、この苦しい恋を忘れられるかも知れぬ」と思い立ちます。そこで平仲は、ある日その姫君の小

間使の少女を襲い、泣き叫ぶ少女の手から、姫君の便器を奪います。（平安朝の貴族達は尿尿を便器に納めて召使に処理させる習慣だったのであります）「この中にわが煩惱を断つ最も醜いものがあるのだ」と、平仲は思い切って便器の蓋を払います。中には、薄黄いろい液体と、三寸あまりの柔かい固体が納められてありました。が、そこから立ち昇るのは世にも匂やかな芳香であります。はてな、と慌てた平仲は思わず、浮んでいる柔かい固体をつまみ出すと自分の口に入れてみます。みるみる口中に拡がる高貴な香料の匂いと、仄かに甘い香木の味。姫君は平仲の計画の裏を掻いて、香料と香木を用いて尿尿に似せたのであります。呆然と棒立ちになった平仲はやがて「あああなたは平仲を殺した！」と地に転がって慟哭する……という筋であります。芥川はドンファンに手痛い復讐を遂げる平安期貴族の女性の姿を実に鋭く描いております。さて、ここに一つの重大な問題が残ります。平仲の志した心理は、追い詰られてゆく男性の必然であります。想い人の尿尿を目撃し食ってみるという行為はまさに

異常病的であり、いわゆる「食糞倒錯」であります。けれども注視しなければならぬのは、この平仲は決して異常者でも倒錯者でもなく、ただ「醜い排泄物を見れば苦しい恋はさめるであろう」と考えて取った行為にすぎません。芥川は骨身に徹する冷酷さで、平仲の狂恋の生態を描写して、ここに玲瓏たる高い文学を成立させました。

私のいう「倒錯行為を営むに到る素因と心象の追求」とは、こういう芥川文学に見られるものを指しております。こうした芸術的把握と追求によって、倒錯行為の本質を見きわめてゆくことは、冷静で科学的な性心理学の立場からの倒錯追求と共に欠くべからざる態度でありましょう。

願くは、奇譚クラブにおける倒錯研究は芸術の眼からか、あるいは科学の眼からかそのいずれかしっかりした基盤をおくものであってもらいたいのであります。

五、社会常識への順応

私のドグマかも知れませんが、（と一応予防線を張っておきます。）実のところ、異常もしくは倒錯という言葉は必ずしも適

切な表現でないようです。なぜなら、人間の愛情生活に、なにが異常でなにが倒錯かという定義を下すことは不可能に近いからです。異常、倒錯、変態などという言葉を使うから、なにかそうしたものが別に独立して存在するような誤解や錯覚を自他共に起すので、本人は人間の愛情(心象と現象)の一部にすぎない。オールではないが確かにパートである。核心ではないが周辺であり一隅である。こういうふうに見るのが正しいのではないかと考えられます。

だから、F・S・カプリオ博士も指摘しているように、偏向(deviation)という正しい言葉で表現し、倒錯(Perversion)とか、異常(Abnormal)とかいう誤解されやすい表現からは早く脱却した方がいいように思います。(これについてはいずれ諸賢の高見を伺いたいと存じます。)

性的偏向は(むろん個人差はありますが)大体普遍的なものですし、それが常習化しない限り、これを変態、異常、倒錯と呼ぶことは妥当ではない。こういうふうな明確な認識と啓蒙を一般社会に与えて行かねばならぬ、と私は考えております。

それからもう一つは、社会常識を逸脱しないことの自戒。これもやはり相当に必要でありましょう。本日(二九・十一・二〇付)産業経済新聞に掲載されていますが大阪市住吉区の会社員S(十八才)が住吉署から窃盗容疑で身柄送付されております。

Sの容疑は銭湯の脱衣場専門の板場かせぎですが、同紙はこれについて「Sは変った趣味?があつて同性の着ているものを見れば何でも欲しくなり、せっせと盗んでは下宿へ運んでいた。別に売るとか着たりするのでなく、夜な夜なその収穫を取り出して眺めては悦んでいたという」と報じております。われわれの立場から判断すると、この青年はソドミイ傾向のあるフェティシストではありますが、性的偏向を行動に移した場合こういうような問題も起りやすいのであります。フェティシズム自体は前述のように、われわれが多分に持っている衝動でありますし、また周囲に危害を及ぼす因子を含んでおりません。しかし、われわれが青春期に経験したフェティシズムは、相愛する特定の異性とだけであつて、「相手が好きでたまらないから」という感情が無意

識にそうさせたのであります。Sの場合はそうではなく、そこに相手との愛情のつながりはなく、また不特定多数の同性の着衣や靴そのものが愛情の対象になっております。そして「盗む」という反社会的行為が附随しております。フェティシズムの本質では同じだが、われわれの行為は微笑ましく甘酸っぱい記憶を呼び起すのに反して、このSの場合は窃盗容疑として送付されてしまふ。つまり前者は社会常識としてお互に容認するが、後者は犯罪として指弾されるという結果になります。これは一見甚しい矛盾のようでありまして、われわれが等しく社会生活を営んでいる以上はやむを得ないのであります。

性的偏向が、その環境と条件によって、容認される場合もあり、そうでない場合もある、ということだけはお互いに銘記しておきたいとおもいます。つまり、性的偏向を許容されるのは、社会常識に順応する範囲内であるということ、であります。

(おわり)

告

白

縛り絵を描いて

鳴山能平

文と画



こんな題をつけると、鳴山は画家かと思われるかも知れませんが、決してそうではないのです。唯一生を、縛り絵を描いて送り度いと思っている男の、幼時より、人知れずたった一人で、頬を紅く染め乍ら、薄暗い燈の下で物狂わしげに、生硬なタッチで描いた情熱の思い出なのです。勿論、美校へなど入学出来ない才能、技術の持主である私は、絵を描く事が、自分の生活に経済的に、どの位ブラスするか考えて見た事ありませんでした。社会へ出てから、これといって職もなく親譲りの財産で食っていた私は、ダンスのうまい映画通の道楽息子の典型であった様です。

扱、私がどうして縛り絵を描く様になったのかと申しますと、今迄、奇クで数々の人が告白されて居ります事と大同小異であります。映画、芝居、雑誌の挿絵で刺激され、指向され、開発せられたからです。二十二、三才頃より私の縛り絵の蒐集は、狂気の沙汰であった様です。岩田、志村、富永、伊藤、井川、羽石、中、田代、鴨下、木俣氏等々戦前にも活躍していたそれら挿絵画家の挿絵を、暇にあかして切抜いたものです。たった一枚の絵の為に当時五十銭、七十銭という定価の大衆雑誌を買ったものでした。書店で雑誌を

めくって見て、縛り絵にぶつかる、さっと耳に血が昇るのが、どうしてもかくす事が出来ませんでした。

最初の中は、なんでもかんでも女が縛られてさえいれば、むやみやたらに集めていたものですが、その中に、自分の感情にピッタリしている縛り絵と、何となく嫌な感じがする絵と区別出来るようになりました。そんなわけを集めたり或は気にいらぬものは手元に置くのも嫌で焼き捨てたりしていましたが、私の氣にいった縛り絵と云いますと、先ず第一に描かれている対象は、美女でなければならぬという事であり、華麗な衣裳をアクセサリーとしてつけておるか、又その様な境遇にある事が前提として必要でありました。その反対として鞭打たれる、苦悶の表情とか、伊藤晴雨氏ばりの、リアルなサンバラ髪、残酷な責道具、グロテスクな姿態はどうしても自分の弱い神経ではついていけませんでした。此の意味に於て、縛り絵においても私にとっては優美性という事が、絶対不可欠であったのです。近代絵画では此の優美性という事は、むしろ排除されている感があります。理論的には解釈出来ても、私としては氣分的にどうもぴたりしないようでした。絵は理

論でなく、感情であると云います。そうです感情です。だから私は縛り絵の対象者にも、人間が生きてゆく事の出来ないような、生命の危険とか、耐え難い肉体の苦痛とかを求めたくなかったのです。そして次第に私はそういった他人の事から描かれる世界に満足出来なくなり、自分でオド／＼と筆をとって画を描く様になった訳です。

だからと云って、頭に描くイメージと、夢に抱く構想が、紙の上にそのまま、すらくと再現出来る筈はなく、描いては破り描いては破りして無意味な焦燥を加えていったに過ぎませんでした。或日、ふと思いついて、帯に手を廻している絵の上から、墨で縄をかけて見ました。表情まで変える事は出来ません

でしたが、此の思いつきに、私は大変興味をひかれ、今度は縄をかけても不自然でない様な、一寸何かの拍子に手を後方に廻している写真、絵画を集め、縄を描く外、時には、顔に狼轡のつもりで、口と鼻を塗り隠して見たりしました。やがて、ある洋画雑誌より「コラーシユ」という切り抜き絵の方法も知る様





になり、扱帯とか、縄とか、手拭とかの描いてある絵は、その部分だけ切取って、他の絵にそれぞれの役目を負わせて、貼りつけました。いたく気に入ると、そのカラーシユを写真にとって保存して置く事も、再三試みました。

若し現実に此の様な美女があり、「サディズム」に対する不快な重圧、人格的な汚損な

くして、許される環境にあるならば、あゝもし度い、こうもし度いと胸がうずく様々のイメージを表現する唯一の手段である、私の画は一向に進歩しなかったかもしれない。描き始めて、一年たった頃は、自分で見て

むしろ嫌悪する様な作品ばかりでした。人に見せて指導を乞うなどは、支那事変中のあの時勢に出来る筈はなかったし、又、自分の

描いた絵を人に見られるという事は、秘密

を白日の下に照らし出

される様な気がして、

とてもそんな勇気が起

らなかったものです。

時代物、現代の区別は

問いませんでした、が、

感覚的にはシユミーズ

姿より長襦袢姿の方に

ひかれました。

(そう、先ず美人を

一人作ろう)

私は、そうした自作

の責絵遍歴を経た末、

ふと、そんな事を思い

ついたのでした。

(自分が最も好ましい美人を)

私は一心に紙に向って、筆を揮いはじめました。

(顔は、瓜実か、丸か、目は一重か、鼻は、くちびるは)

自問自答しつつ、三月もたってようやく自分でも満足出来る作品を描き上げた私は、上半身だけの美人画を、学友に、隣人にありとあらゆる機会を通じて発表しました。

(鳴山は絵がうまい)

という無責任なお世辞が、その結果私の耳に入る様になっただけでしたが、それでも少しは私の絵をかく勇気が前より湧いた事は確かでした。何といっても人前に発表出来ないと思っていた絵ですし、深く研究すると云う事がないままに、ズル／＼と独りよがりの画法を続けていったのでした。

髪形の形はどうなっているか、人間の身体はどうなっているか、そんな事はどうでも良く唯、後手の姿態であれば良かったのが最初のうちでした。そのうちに、切実にモデルが必要になり、デッサンの不足を痛切に感じはじめました。表情のニュアンスが欲しくなりだした頃、戦は大東亜戦に突入し、やがて終戦となり、この間、学徒として一年半の従軍が

あり、戦災により過去一切の自分なりの労作は灰となってしまいました。戦後、妖奇、りべらる、千一夜、うきよ等々のおびただしいカストリ雑誌の続出は、私をして再び蒐集の念を起させました。そして二十七年の夏、奇譚クラブを発見する迄、私の縛り絵は机の奥深く、百枚、二百枚とためられてゆきました。奇クの出現は私をして秘画と信じていた罪悪感を一掃しました。

それでも恐る／＼投書した絵を、箕田編集長がわざ／＼自分から手紙を書いて激励してくれた事は忘れることが出来ません。恐らく奇ク二十八年十二月号の拙い画を御覧の方もあることと思います。二十一の年に筆をとり始めて、三十五になる現在迄十五年間、ポツチリ／＼描いて（何回か中断したが）未だ此の態たらくであります。然し拙いながらも一枚の絵が創作された時の喜びは、何にもまして貴いものであります。

先ずポーズを考えて、鉛筆で軽く入れる。対象は、娘か、腰元か、姫君か、ヴァンプか、を其の時の感興に応じた髪、衣裳、顔形で描く。次は縛しめを縄にするか、細帯か、紐にするかだが、私はた

いがい扱帯にします。猿轡は必ずかける。これがないと画龍点睛の感があります。猿轡は手拭か、白布です。画料は絵の具を使うのですが、最近はおっぱらペンと墨を利用します。一本一本の髪の毛のつけ根、かんざし、くし等、アクセサリーの次に眉と目を描きます。此の時一寸手がふるえると、もうお仕舞です。まして顔の輪部など一ぺんでおしやかであります。猿轡では皺をつけたりして、うまく切抜ける事が出来



ます。くびの線、そして二、三本の乱れ髪、襟足、等夢中になっていると、いつのまにか

全体のニュアンス、トーン、画質を損うて仕舞ってガツカリする事が度々あります。何か力仕事をした後など二、三日は、手先がふるえてどうにもなりません。全神経を筆先に込めて、気韻生動、骨法用筆、随類賦彩、更に応物象形、経営位置と頭の中は澄んでいる様で、混乱してどうにもならないのが十中九、十でありますから世話はありません。

かって、三年位前の話ですが、私の知っているパン嬢（巡查の娘だとか云っていました。）に勇氣



を出して（酒を飲んで）モデルを頼んだ事があります。気の弱い私は、何回かかたまったつばを飲んだ末、

「君、一寸縛らしてくれないか！」

といじけた声でいったものです。

（まだ奇クを見てなかった頃だったので、可哀想にびく／＼していたんです。）

とたんにパン嬢は、一寸得体のしれない笑いを浮べると、

「縛ってどうするの？」

「画に描き度いんだよ！」

「嫌だわ、泥棒に入られたみたいで！」

とか何とかいうのを、色仕掛にあらざる金

仕掛で、とうとう後手に恐る／＼痛くない様に縛る事が出来ました。

「手拭か、何かないの？」

「どうするの、口を縛るの？」

「うん一寸ね！」

「私、風邪引いてんのよ」

と中々云うことをきかない気配を見せたので、唇だけをほんの形ばかり塞いで、そのまゝ横倒しにして、長襦袢の裾をはね、胸元をひろげ、腰の線のしわをとり、さて、スケッチブックを拡げて約三十分、無我夢中で描いたものです。描き終ってみると、思ったより案外、おとなしいのです。

「うっ、痛い！」

此処で暴れられては一大事と肩をそっと抱いてみたのですが、結び目が髪を引っばったらしく、

「あんまり、ひどいわよ、痛いったら！」

と猿轡の下で大きな声になってしまいました。口の中に布でも入れておくんだったと思いました。初めてだからそんな無理も出来ない。どうせ金で買った女だと思いかえしました。が、とうとう負けてそのまゝ手拭も、縛しめの細紐もといて、不満足のまゝ、終りを告げたことがあります。そして、つくづく女房が欲しいと思いました。が、家庭というものに縛られる事が大嫌いだし、食わせる自信もない。唯小心翼翼としてそういった場面を期待し空想しているばかりです。従ってモデルはもっぱら写真によっています。が、なんとしても製作感をさくことが夥しいのが残念でなりません。私は声を大にして、同好の志より合って助け合ってゆこうではないかと叫び度い。

人生を歓喜あらしめ、やり度い事をやる、という人間解放のぜいたくを味うため、社会人類に迷惑が及ばぬ中で。

（おわり）

其処でよせばよいのに、堅縛感を出そうと思って、頬におそえ物のようにまとっている手拭を解き、今度は鼻孔迄掩って、キリキリと締めたのです。

連載 第六回

夜
光
島

いやな約束

海流の関係でもあろうか、佐渡の冬は思ったよりも寒くなく、めったに雪も降らないと健次郎は聞いている。まして夜光島は豆粒のような島だから、ことによったらもっと凌ぎいかもしれない。ただ困るのは海の荒れることだ。ボートの往復は、危険とは言えないにしても、かなり注意の要る仕事になった。したがって、どうしても天気の良い風のない日を選ぶことになる。ところがそんな日は一週に幾日もないし、欲を出してもっと穏かな日を待とうなどと思っている、翌日はもっと荒れたりする。

「島の生活もいいが、これだけが玉にキズだね」と、健次郎は言った。「モーターボートでもありや理想的なんだろうが、ちよっと手が出ないし」

吾 妻 新

栗 原 伸・画

「少しぐらい不自由でも、むりしないでね。もしものがあつたら、取り返しがつきやしないわ」

登枝は大真面目でそのことを心配した。それは彼女がいつも言うと思うことだった。

「そうになったら、ボートは一つしかないし、さしずめ君は女の俊寛島流しというところだな」

「私はあなたのことを言ってるのよ」

「ただどき、結果としては君の問題でもあるんだよ。溺れるところを見たならともかく、さもないければ佐渡の連中は、このごろ出て来なくなったと不思議に思うかもしれないが、一カ月も二カ月もたないかぎり、わざわざ行ってみようとは思えないからね。気が付くまでに君は飢え死んじやう。それとも菜ッ葉と水だけでなんとか生きられるかな」

「あなたが死ねば、私も死ぬわ」

「封建の美風だね。きつものすごい新聞種になるよ、——奇々怪々の大事件」

「どうして？」

「現地を調査せしところ、おどろくべきことに、女の死んだ建物中より精巧な嵌口具、手枷、足枷、鎖、鞭などを発見した。思うに速見健次郎なる男は異常な変態性慾者であって、甘言をもって彼女を誘惑したか或いは暴力で脅迫してこの島に連れ込み、表面は合意の結婚のようにみせかけて婚姻届をすませ、思うがままの残忍な行為を日夜加えていた模様である。しかも唯一の交通機関は男の手中に握られていたから、彼女はこの地獄から脱け出すことも訴えることもできなかった。やがて男は彼女を遺棄し、そのボートで逃走したため、食糧通信の道を絶たれて絶望の極、自殺するに至ったものであろう……」

「しかるにそのボートが発見されないのは奇妙である……」

二人は顔を見合せて笑いだした。

「冗談じゃないわ。ほんとうに注意してくれなくっちゃダメよ」

「もちろんさ」

冗談から駒が出ることがあるから、と言いかけようとして、あわてて彼は口をつぐんだ。これ以上登枝に心配をかけてはならない。日一日と愛が深まり、今では離れがたいきずなに結ばれてしまったのを感じる彼は、こんなことにも神経質になった。それで、月に出る回数を減らすために、なるべく一回にまとめて買い込むようにした。

めずらしく穏やかに風いだ日が二日つづいた。健次郎は二日とも

本島へ出かけて、ヤミ米や食糧を買いこんだ。

かねて註文しておいた書籍の小包を郵便局で受けとって、出ようとすると、「やあ」と声をかけられた。前に会ったことのある、尾崎という新聞記者である。

「いいところでお会いしましたね。これからお戻りですか？」

「ええ」

「島の生活はいかがですか？」

「まあね」

べつに毛嫌いするわけではないが、前にも根掘り葉掘り訊かれたことがあるから、あまりいい印象をもっていない。それに、この男が健次郎に興味をもつのは新聞記者という職業柄よりも、ろくに事件のない地方の小新聞の而らしめるところなのだから、尚更ら警戒しなくてはならない。

健次郎が歩きだすと、相手は肩をならべてついてきた。

「こんど御結婚なさったそうですが、それでもずっと島でお暮しになるんですか」

「いまのところ、その予定でいます」

「奥さんはそれを最初からご承知なんですね」

「もちろんじゃありませんか」

「ははあ、成程ねえ」

と、感心した様子で首をふった。健次郎は足を早めた。「こう言っちゃなんですが、よく、寂しいなんておっしゃいませんね」

「僕みたいにやっぱりどこか変ってるんでしような」

「失礼ですが、どういうご関係で、最初……」

「まったく失礼な質問ですよ」と彼はいそいでさげすんだ。「君の職業意識はわかるが、そんなことをきくもんじやない」

「いやいや、そりやもう、恋愛結婚だぐらいのことは承知してるんですがね、ただ……」

「ただ何です？」と彼は足をとめた。

「恋愛結婚であろうとなかろうと、また僕等がどんな関係で知り合おうと、プライヴェートな問題です。君らには関係のないことです。そんなことを君がたずねる権利はないし、僕に答える義務はない。それとも、知らねばならぬ理由でもあるんですか」

相手は慌てて微笑をつくった。

「怒っちゃ困りますよ。ただ率直に申せばですよ、あなたにとっては当然至極のことなんでしょうが、その、離れ小島に住むなんてことは、一般にはなにか大変珍らしいことなんですな。ましてそれがあなただけでなく、奥さんも一緒だということになると、ちょっと変ったケースのように感じるわけです。なんと言ったらいいか、すこぶるロマンチックで、……けっして失礼な意味じやなくね」

「さっきは失礼で、こんどは失礼じやないのか」と健次郎は苦笑した。

「まあ、そんなことはどうでもいいが、静かに余生を送りたい人間の邪魔をしないで下さい。べつに他人様に迷惑をかけるようなことじやないんだから」

「そりやあもう。ただねえ速見さん」と尾崎はしつこく食い下った。「なにも私は妙な意味でお伺いしてるんじやないんだから、誤解されちや困りますが、なにか記事を下さいよ」

「記事？」

「ええ。だって、あなたもごぞんじのとおり、この島は観光地ですからね。名のある人が来ても帰っちゃうので、住みつくことは絶対に無いと言ってもいいんです。だから、あなたみたいな知識人が気に入って住んで下さったとなれば、この佐渡の町だってひとつの話題だし、インタビュウしたくなるのも当然じやありませんか。まして無人島となれば尚さらですよ」

「僕は多少よんだり書いたりするけど、名のある人じやないぜ。煽てたってダメだ」

「それはあなたの言い分ですよ」

「とにかく、なにを書けっていうんです？」

「来島の感想でも、夜光島の生活記録みたいなものでも、なんでも結構です。それから、是非ひとつ、奥さんにも紹介してください」
(とうとう来やがった！)

漠然と予想はしていたものの、健次郎は少なからずあわてた。返事は難しかった。承諾するのは不安だし、拒めばますます疑うだろう。彼は相手を刺戟しないような言葉を探そうと焦った。

「平凡な妻だから会ったってなにもしゃべりやしませんよ。新聞記者が会いたいなんて言ったら怖がるかもしれない。大体、人中出现るのが嫌いなタチなんですね」

「ジャーナリストにたいする偏見を吹き込んじゃ困りますな」

「吹き込まなくてもそう思ってるんだから仕方ないよ。じやあ、こうしよう、今度来るときに一緒に連れてきて、君の社をお訪ねしよう」

「人中出现るのがお嫌いなら、こちらから伺いますよ」

「いやいや、そんなことをするとかえって物々しく感じるから、僕

が連れて出る。それに、一度は佐渡へ出てみたいなんて言っていたから、その序にふらッと寄ることにすればいいさ。そのほうが自然だ」



侵入者

登枝はすぐ納得したが、やはり全然平気というわけにはいかなかった。登枝はすぐ納得したが、やはり全然平気というわけにはいかなかった。登枝はすぐ納得したが、やはり全然平気というわけにはいかなかった。

やっとその場を切り抜けて、健次郎は記者と別れた。海岸に下る道を忙しく歩きながら、この程度の妥協は已むを得ないと自分に言ってきた。狭い土地と単調無味な生活のなかで、人々の関心から絶対に逃れることは不可能である。まして新聞記者だ。役場の連中と話し合うチャンスはいくちもあるし、彼の結婚登記は当然話題となったにそういない。だとすれば、いつまでも登枝が姿を見せなければ島に押し掛けてきたかもしれない。むしろ今日会ったためにこんな話をしたことがよかったとさえ言える。

(よし、はじめて島に渡ったときの戦法で積極的に好奇心を消してしまおう)
と決心した。

「きっとモルモットみたいに観察されるのね」

「そうでもあるまいが、まあ、物好きな女だぐらいには思うだろうよ」

「いろんなことを訊くわよ」

「平凡な主婦ということになってるから、平凡に答えればいいさ。まさか初夜の御感想はなんて訊く奴はないしね」

「あたりまえじゃないの、バカね。でも私はこれで気の小さい女なのよ。新聞記者なんかに会ったら、腹の底まで見透されそうな気がして固くなっちゃうわ。どんな質問をされるか、どう答えたらいいか、教えてちょうだい」

「総理大臣みたいなことを言うんじゃない」と健次郎は一蹴した。

「そんなことに神経を使うなんて、卑屈と思わないか。もうこの話はやめだ」

登枝の不安がなんのためか分っているだけに健次郎は腹を立てた。彼はじぶんが批難されているような心地がした。もし俺が卑屈でなく完全な自由人だったら、気のすまない妻をつれて「出頭」する必要がない。それをわざわざ出かけようというのは、田舎の小新聞のチンピラ記者の眼を無視できない証拠ではないか。

尾崎との約束はこんど来た時ということになっていて、日を決めたわけではなかった。二日つづけて食糧を運んだおかげで、さしあたり二週間、出まいと思えば半月でも出ずにいられる。当然、登枝は一日でも延ばそうとした。彼も反対しなかった。というのは、彼女のように恐れはしなかったが、ほかに用もないのにそれだけの目的でボートを漕ぎ出すのは自尊心に耐えがたかったからだ。なにも行かねばならぬ義務はない。ホンの序でに立ち寄ってやりさえすれ

ばいい。これが無視したくてもできない外界への子供っぽいレジスタンスだった。

十日あまり過ぎた。冬らしい暖い日があった。風もなかった。従来ならこんな日を見逃すことはないのだが、健次郎はもう一日見送ることにした。というのは、ふたりはここ暫く「謹厳な生活」を送っていたので、期せずして今日の一日を遊びたい気持ちに燃え上っていたからだ。

昼ちかい日は書斎の窓のカーテン越しに明るい光りをまきちらし、石油ストーヴの上ではアルマイトのヤカンが湯気を立てている。昨日も一昨日も、この時刻にはテーブルに紅茶茶碗が並び、健次郎は机にむかって原稿をかいているか、研究資料の写真や記事の切抜きの整理をやっている。登枝は椅子にもたれて好きな小説をよみながら、思わず砂糖をよけいに入れすぎて笑いだしたりするのである。平和な、静かな、どこにでもある家庭風景だ。だが今日は彼女は寢室のドアをあけて、よちよち歩きで近附いてくる。手には紅茶道具の代りに汚れた布と紐を持っている。

服装も背広でなく、いま起きたと言わんばかりにネルのパジャマを着ている。古い歴史を刻んでいたポプリンのとちがって、これは最近仕入れたものだからツギこそ当たっていないが、もう男の趣味が痕跡を残しはじめている。膝、腰の前とうしろが薄汚れているのは、自然と汚れるのを待ち切れないで湿った地面にころがしたり押しついたりしたためである。ネットリとした布地は拭いてもこすっても綺麗にならず、水気のある土はそのまま浸みついて奇妙な計画を助けるのだった。おそらくそんなつもりでかかれれば一カ月もするうちにみじめな男装は完成するであろう。

「おそいね、どうして言ったとおりにやらないんだ？」

「足をつながれていて、五つ数えるうちに往復するなんて出来やしないわ」

と登枝はもう来るものを期待して、興奮で上ずった声で答える。

「誠意がないからだよ。君はわざと怠けて僕を怒らせようというんだね」

「不可能だってこと、知ってるくせに。あ、こんなこと言っちゃいけないかったのね。ゴメンナサイ」

「何だそんな、ゴーマンナサイなんて、流行歌じゃないぞ」

「ごめんなさい」

「いけない、全然誠意がない。大体そのあやまり文句は軽っぽすぎるよ。もっと、真実をこめて言ってみたまえ」

「私が悪うございました。ゆるして下さい」

このへんになると、ふしぎに熱がこもって、登枝の声は真剣味をおびる。それが健次郎に反映して、彼は急速に夢の中に陥ちこんでいく。これは性格のせいとか、それとも本格的にマゾヒスティックな叫びは自然に響くからだろうか。それともこの種のせりふはサディストのそれとちがって不道德の印象を与えず、それだけ現実社会で用いられるから真実らしく聞えるのだろうか。とにかく登枝の声はいつでもすぐに切実な色を帯びて彼を刺戟するのだった。それに、何よりも視覚がものを言っている。みじめな服装で自分のための猿轡と紐を持ち哀願する姿は、亡き妻の場合でも要求することのできなかったポーズである。

「どうしてそう強情なのかなあ。しかたがない。君という人間は、徹底的にすることをされなくっちゃあ本気になれない女なんだ。さ

あ、本当の声が出るまでは、そのお芝居めいた叫びは聞えないようにするんだ」

言いながら彼は、寝室から登枝の運んできた品物を取り上げ、腰紐だけ残してあとを押しつけた。登枝はうつむいて、どちらが口に押しこめ、その上を掩うかを選び分けた後、永い間かかってじぶんで猿ぐっわをはめねばならなかった。その作業は非常に生々しく、表情に富んでいるので、いつものように二人を興奮させた。

それが終わると、彼は意地わるく言った。

「うまく出来たかどうか、さっさと験してみないか」

これも、幾度もやらされたことで、登枝は拒めなかった。彼女は腰をかぎめて、じぶんの腿をつねった。

「もっと強く！」

屈辱的な動作をくりかえして、彼女は顔をしかめてみせた。痛くても声は出ないという意志表示なのだ。

「場所がわるいんだよ。もっと内側を、こんなふうに」

彼は手を延ばして抓ってみせる。もちろんそのときは容謝しないのだから、呻き声が洩れずにはいない。

「みる、君はそのとおり不正直ものだ。だが、ごまかそうだったってそうはさせないよ。これからもっと験してやる。こっちへ来るんだ！」

わずかばかりの抵抗を苦もなく打ち砕いて、両手をうしろに縛り上げると、彼はせまい部屋を追い立ててテーブルの前の椅子に腰かけさせ、上体を括りつけた。脚を固定しないのは健次郎の好みで、毎度のことである。

これで第一段階は終了だった。あとはゆっくり一服しながら、一

種の教義問答が行われる。それはわざと糞真面目な問題を選ぶこともあれば、破廉恥なテーマもある。いずれにしても彼女は答えなければならぬが、首を振るだけしかできないのだから、相手の掛けた罠に落ちこむほかはない。そのたびに打たれたり、抓られたり、弄ばれたりする。その場句は腰かけたポーズでは償いきれない大罪を背負わされたことになって、あらためて寝室に追い込まれる段取りになる。以下、第三段階というわけである。

こうした遊びは、日常生活で摂生を守るようになってから、特別深い快楽となった。健康な肉体に恵まれた二人は、このようなデイトニエソスの祭日を適当に置くことによって、一般社会のなかの禁欲、孤島のなかの惑溺のどちらからも、たくみに逃れたということができる。それだけに彼等は過度な自由の脅迫を絶えず感じていたはじめのころよりも自然に酔うことができた。だから暖い書斎の部屋に椅子のきしむ音や、上ずった声や、押し殺された呻きが絶えず響いているとき、土間に入ってきた靴音に氣附かなかったのは当然と言わねばならなかった。

「ごめんください」

「速見さん、速見さん！」

「留守かな」

はじめ健次郎はじぶんの耳を疑った。次に、胸がつぶれるほどおどろいた。その瞬間に彼の頭に閃いたのは、あの不吉な新聞記者の言葉、「人中に出るのがお嫌いならこちらから伺いますよ」だった。

とっさに彼は、椅子の背にしっかりと縛りつけた紐をほどこうとあせつた。だが事情を察した登枝がもがきはじ

めたので、結び目は固く緊るばかりだった。

「居るんだよ、君、靴がある」という声がした。

「へんだねえ、どっか散歩に出たのかな」

「どうせ小さな島の中だよ。とにかく上ってみるか」

もう我慢できなかった。健次郎はドアの外にとびだした。

孤独 去る

土間に立っているのはやはり尾崎だったが、革のジャンパーに鳥打をかむった青年は見たことがない。やはり社の同僚なのだろう。

「なんだ、お留守じやないんですか」

「君らは何しに来たんだ？」と健次郎はきめつけた。

「だまって人の家に上ろうなんて、家宅侵入罪だぞ」

語気が荒いのにとちよと面くらって尾崎は口をつぐんだが、すぐ



に持ち前の馴れ馴れしさに戻った。

「聞えてるのに返事しないなんて、速見さんこそ人が悪い。それとも、とんでもないところへ伺ったのかな。ハハハ」

白い歯をみせて笑ったが、健次郎の頬の筋肉はこわばったままだった。

「いや、しかし大したものですよなあ。こんな島にこれだけの家をお建てになったとは思いませんでしたよ。そうと知ったらもっと早く来るべきだった」

「それよりも用件を言いたまえ。こないだの話なら、町で会う約束だったよ」

「ところが部長に話したら叱られちゃったんです。そりゃこっちからお伺いするのが礼儀で、わざわざ来て頂くテはない。だいたい新聞記者のくせにデスクにかじりついてるなんて以ての外だ、足で記事をとるのを忘れたかって」

言いながら振り返ると、ジャンパーの青年もうなずいて笑った。

「とにかく約束は約束だ。町でお会いしよう」

「お会いしようって、こうしてもう会ってるじゃありませんか。……そりゃあ、不意に上ったのはご迷惑かもしれないが、カンペンして下さいよ。わざわざ舟を借りてやって来たんですからねえ。それも一人じゃ疲れるだろうって、この館岡君が従いてきてくれたんだが、いや、久しぶりにボートを漕ぐなんて楽しありません」



健次郎は口ごもった。

彼も新聞記者の職業は知っている。不意打ちを食わせる位のこと
は朝飯前だし、必要とあれば無断侵入も平気でやる。ましてイシタ
ーヴエウは承知しているのだし、それっきり姿を見せないのだから
押し掛けてくるのは当然である。常識的に考えても、海を越えてや
ってきたものを門前払いするのはおかしい。だが、困ったことには
彼等の目的がじぶんでなく妻に会うことだ。

これがせめてふだんの日だったらよかった。猿轡はしていても大
抵両手は自由だから、こんな話をしていううちにさっさとほどこい
てしまふし、両手を縛られているにしても寢室に逃げ込むことができ
る。だが選りに選って今日は、登枝はご丁寧に椅子を背負っている
から歩くこともできない。ドア一重の向うで息を殺しているだけだ
それをどう処置するかが難関である。

額に汗のにじむのを感じながら彼は言葉をさがそうとあせった。

「君らにエチケットを説いたってはじまらないがね、僕達は人に会
いたくないからこそ、不自由を忍んでこんなところに住んでるんだ
よ。その自由をもう少し尊重してもらわないと困るね。部長の言う
ことも一理あるが、それは君らの……」

「分った、分りました」と尾崎は片手をあげて頓狂に拝む真似をし
た。「ま、お叱りはあとにして、頼みます、速見さん」

「なにをさ」

「奥さんにちよっと会わせて下さいよ」

「……………」

「どうせ相川でお会いするなら、ここだって同じことじやありませんか」

「そりやそうだが」

「だったらいいでしょう。お暇は取らせません。もちろん、オヴザ
ーバーとして速見さんにも同席して頂くとしてね。……これ以上隠
すとお為になりませんよ、ハハハハ」

絶対絶命だった。健次郎は館岡という青年の眼がさっきから食い
入るように注がれていて、気のせいか猜疑の色を帯びはじめてい
るのに気付いていた。

「じゃ、こうしよう」と、さりげなく額の汗に手をやりながら言っ
た。

「じつは女房、すこし気分がわるくって寝ているんだよ。せっかく
だから会ってもらうことにするが、服を着換える間、しばらく待っ
てくれたまえ。……そこらを散歩でもしてね」

上って待てと言うべきだろうが、不安だった。健次郎は妙な顔を
している二人にそれ以上の話す機会をあたえず、いそいで姿を消す
と、書斎との境のドアを念入りに閉めた。

登枝はさっきからの話を筒抜けに聞いていたから、こんどは石の
ようにからだを固くして、健次郎のほどくのを待った。どちらも焦
っていた。とにかく椅子から離れさえすれば……それだけで頭は一
杯だった。だから、内側にカーテンを引いた窓に鍵が掛っていない
ことも念頭になかった。

胸に廻した紐をやっと解き終ると、登枝は後ろ手のまま急いで立
ち上った。健次郎が屈んで紐を拾い上げたとき、明るい床の上に一
条の直射日光が落ちた。呻き声を上げて登枝のからだが半回転し、
走り出そうとして足の紐が張ると、みじめに俯伏せにころがった。
健次郎は電気に打たれたように感じた。緑色のカーテンが揺れてい

る——眼に映ったのはそれだけだった。

獣のようにドアにぶつかり、台所を横切つて土間におりると、戸外に飛び出した。書斎の窓から少し離れたところに立っている二人は、健次郎の姿を見ると逃げだしそうな恰好をしたが、すぐにそのまま棒立ちとなった。彼はおどろかかって尾崎の胸倉をつかんだ。

「おい、こら、きさま……」

血が逆流して声がかすれた。相手はよろめいて倒れかかったが、健次郎は力まかせに引きずり起し、更にぐいぐい押していった。

「約束を破ったな、おい！」

尾崎は恐怖でひしがれた眼を一杯にあけて、指で同僚をさした。

「ぼくじゃない、あ、あれだ……」

健次郎はふりかえった。館岡は蒼白な顔に眼を光らせて、じっと睨んでいた。

健次郎は飛んでいって、その前にたちはだかった。

「きさまか」

ポケットから顔を出している小型カメラに気がつく、彼は腕をのばしてそれを抜き取るが早い、地面に叩きつけた。

「なにをする？」

「だまれ、きさまこそ何をする気だ？」

「誤解しちゃ困る。見たただけだ、そこから覗いたただけだ」と青年は早口に言った。「しかし君は……あのひとをどうしようってんです？」

「どうしようだと！」

拳をかためて相手の肩を突いた。館岡は二三歩さがって身構えたが、健次郎がさらに進むと後ずさりした。

「どうもしないさ。だが、それが君となんの関係がある？ 俺たちは合意の夫婦だ。それに干渉する気か？」

「する。せずにいられない」

蒼白い頬をひきつらせて、青年は叫んだ。

「いくら夫婦だって、残虐な行為は許されないはずだ。あんたは奥さんを苛めて面白いのか？」

「いつ俺が残虐なことをしたと云うのだ？」

「あんな姿を見ればたくさんだ。……なぜあんたが人眼を恐れて、奥さんを会わせたくないかもよく分った。あんたは紳士の仮面をかぶったサディストだ！ 撲りたけりや、撲ったってかまわない。しかし、僕はこれでも新聞記者だぜ。へたなことをすると……」

その言葉の終わらないうちに健次郎は一撃を加えた。あおむけに倒れた青年は起き上ろうとして両腕を突いたが、殺気立った顔が近附いてくると観念したようにじっと動かなかった。口唇が裂けて血が流れていた。が、眼だけは敵意に燃えている。それはまるで、「俺は正義のために闘うぞ。暴力には屈しないぞ」と叫びつづけているようだった。

当惑して、健次郎は立ちすくんだ。この単純な正義感を鼓舞しているのが外ならぬじぶんだと思ふと、どうにもやりきれなくなってくる。この男は定めしかよい女を苦しめるあらゆる情景を、瞬間に垣間みた登枝の姿から引きだし、義憤を掻き立てたのだらう。そして、離れ小島の隠れ家にひきずりこみ、檻禁して暴虐をほしいままにする犯罪人をこの俺に見ているのだ。傷いて倒れているこの男は殉教者みたいなものだ。打ちのめされればされるほど、誇りで武装し、俺を賤しめることができる。

得体のしれぬ黒い雲が一時に周囲をとりまいた心地がする。その暗澹たる空の切れ目から覗いているのは社会の眼である。それを逃れる道はないのだ。

健次郎は腕をつかんで引き起した。それから、凍りついたように立ちすくんでいる尾崎の傍へ連れていった。

「警察へ訴えるつもりか」

カメラを拾って渡しながら、声を柔らげて云った。二人はじっと眼を据えたまま黙っていた。

「何をしようと君らの自由だが、訴えても事件にはなるまいよ。なぜなら僕たち夫婦は……」

このとき、奇妙な変化が起った。胃につかえたものを吐き出そう



として出来ないように、言葉が咽喉につまった。彼はふたたびそれを呑みくだした。

いまこの瞬間になつてはじめて、健次郎はじぶんの置かれた立場に気付いたといえる。——島に住みついてから二カ月近くなれば、土地の好奇心も消え去ったと思つたのは独り合点だった。口には出さなくても絶えず彼に関心をもっていたのだ。しかもその男が妻を持つた。佐渡で結婚式をあげたのならまだしも、いっどうして島に渡つたのか、それすら分つていない。その後の彼女の姿を見たものもない。結婚したというのは、ただ一片の婚姻届の紙切れだけにすぎない。これでは地方新聞の記者でなくとも疑いたくなる。

待ち切れなくなつて、彼等は島にやつてきた。なぜか男は会わせ

たがらない。そこで、ソツと窓から覗きこんだ。たしかに女はいた。だがそれは想像もつかぬ姿だった。汚れた服を着せられ、手を縛られ、足をつながれ、猿轡をはめられていた。これが見せたくない妻なのだ。男は見られたことに憤慨してじぶんたちを撲り、脅迫した……。

条件は揃いすぎている。この恐ろしい誤解から逃れるには——それも保証のかぎりではないが——ただ一つの方法しかない。真実を語ることだ。口を酸っぱくして恥を曝け出し、永久に消えない嘲笑と好奇心の泥沼に、じぶんたち夫婦を埋めることだ。

健次郎はそうしようとした。が、告白は咽喉から出なかった。

じぶんはいい。聞えるかもしれない。しかし登枝に

はできまい。忌まわしい変態性欲者の汚名を浴びせられて衆目の曝し者になることは死ぬより耐えがたいだろう。それは泥棒よりも詐欺よりも、いやパンパンよりも、いまの社会では恥ずべき醜名なのだ。



彼は語気を変えた。

「犬も食わない夫婦喧嘩という言葉がある。よけいなことに口を出すと笑われるぜ」

「だれが笑うんです？」と、ハンケチで口の血を拭きながら、館岡が逆襲した。尾崎は反対に、さっきの暴力に恐れをなして小さくなっていた。

「そりやあ、あんた方は、名目上は夫婦だろうさ。だが、よわい女をあんな目に会わせてよく良心に恥じないね。まるで獣じやないか」

「それがよけいなお節介というものだ。女房に許せないことがあるから折檻してるんだ」

「どんな落度があるかしらないが、あんたは人間じやないよ。それでよく芸術家ヅラできるな」

「ふん、なんとでも批評するさ。俺には俺の家庭のシステムがあるんだ」

「笑わせやがる」と、館岡は捨身だった。

「地方新聞だと思って甘く見るなよ。いまにその封建制度をひっくりかえしてやるから。こんな島だからあんなのような野蛮人から逃げ出したくても逃げられないんだ。そのうちに出るところへ引っ張りだして、きっと自由にしてやる。念のために云っとくが、それま

でに奥さんが死んだりしたら、殺人罪は免れないぜ。俺たちが証人だからな」

また撲り倒すのは容易だった。だが健次郎の眼は涙でいっぱいになった。ああ、じぶんもこの男の立場に立ったら、おなじセリフを

吐くだろう。

「話はすんだ。もう帰れ！」

「それこそよけいな世話だ。島はあんたの土地じゃないんだぜ」
あわてゝ尾崎が青年の腕をつかんだ。

「もういいよ、よせよ。……さあ、早く戻ろうぜ」

「なあに、僕はこいつを恐れてなんかいやしないんだ。獣が人間より強いからって、やっぱり軽蔑せずにやいられないものな」

「分った、分った、館岡君！ とにかくこのことは社に戻ってからね……」

また乱闘が始まりはしまいかと、尾崎はこの一本気な同僚の腕をかかえこみ、むりに引き立てた。館岡は二三歩あるいて立ち停まり振りかえった。青白い顔に憎悪の眼がきらきら燃えていた。それから、やっと歩きだした。

ふたりの姿が林の蔭に消えるのを見届けてから、健次郎は家に引返した。

書齋に登枝の姿は見えなかった。寝室との境のドアが半開きになっているのは、不自由な後ろ手で開けたに相違ない。俯伏せに倒れあわてて起き上り、ただ一つの隠れ場所に逃げ込む哀れな姿が眼に浮ぶのである。

仄暗い洞窟のベッドの上に、登枝は両脚をちぢめて横たわっていた。その足をつなぐ紐が垂れているのが印象的だった。彼が入ってくるのを見ると起き直ろうとして彼女はもがいた。するとその紐はたちまちみじめな直線を描いた。

健次郎は扶け起すかわりに、じぶんもベッドに上って、しずかに身を横たえた。

「いとしい登枝！」

からだを引き寄せると、両腕のない不具者のように擦り寄ってきた。それから物言えぬ顔を胸にうずめてすすり哭いた。その切ない動きと鳴咽には無限の絶望と慨きがこもっていた。

「心配するんじゃないよ。奴等は僕を野蛮人だと思って、君に同情しただけだから」

顎をおしあげ、つめたい涙に濡れた頬にじぶの頬を重ねながら、彼はささやいた。すると、はげしい怒りが彼を擲んだ。全世界とじぶんたち二人が対立するのを感じた。

「どんなことが起きたって、僕は君をまもってやる。断じて屈服するものか。負けてたまるか」

狂気のように頬ずりして、健次郎は眼に見えない敵にむかってさげんだ。

(次号完結)

【告知板】

○最近、絵画や写真を投稿される方が増えて参りましたが、必ず題名、解説、或は説明を添えて下さい。編集部や読者係宛の御便りで、誌上に掲載して困るものは「掲載禁止」通信を貰ってはいけない方は「通信無用」と附記して下さい。○封筒の名前が仮空のものであるときは、その旨文面に書いておいて下さい。宛先不明で返ってくるものがありますから。○投稿せられ

た原稿の中、有望なものが沢山ありますが、掲載可否かを急に決定しかねる場合が多い実情です。○同じ原稿を他所へも投稿された節は御一報願います。○執筆者、投稿者の住所照会にはお答え致しかねます故、御諒承下さい。○読者通信欄の書信転送は相手の方が通信を拒絶されない限りつとめて転送の労を取ることに致しますが、返事の有無、その他、事後の責任等は一切負いかねます。

大津事件とその後日譚 (二)

— 蝕まれゆく栄光 —

須藤 律夫

一、若き耽溺の日に

治三郎にとって、それは総て思いがけない事であった。身は一介の俤夫として、然し国賓にも等しい外国人の危難を救ったのである。仮令それが咄嗟の出来事であり、彼の正常な意志の発露ではなかったとは言え、結果に於ては正しい事でもあったし、又無上の光栄でもあったのだ。そしてそれ等の事を裏づけるかの様に、露帝よりは記念章、皇太子より一

時金三千五百円、日本政府よりは勲八等に叙せられ白色柏葉章の授章など、五尺の身に担い切れぬ程の榮譽を浴びたものである。就中一時金二千五百円と終身年金千円の下賜とは大きかった。(註當時の物価は米一俵が三円五十銭であった。)或は之が却って、彼の青春後期に對して、或る種の拍車となつて作用したのかも知れない。兎に角大金を持つての帰郷は危ぶまれ、彼は県庁の役人の勧めに従うとその金で為替を取り組み、雀躍して京都

へと歸つて行つた。
生れ故郷に於ける賞讃と、周囲の羨望も大きかったが、然し騒然とした幾日かど過ぎて自分の環境が次第に落ち着いて来ると、少しく忘れかけていた生来の欲求が勃然として鎌首を持ち上げて来るのだった。何時の頃からか彼が抱き始めていた——と云うよりもそれは彼の胸中の何処かに泌み込んでいたのである——暗い本能のかげ窃視症、拭えども拭い切れぬこの倒錯の欲求に、思えば彼は三十有余年もの間虐げられて来たのである。彼はふと、十三年前、京都祇園での或る夏の夜を想い出すのだった。

× × × × ×

その頃彼は祇園の或る芸者屋の抱え俤夫として、平凡な毎日を送つてはいたが、然し何故か迎える日々には薄暗いヴェールに包まれた悪の愉しみがあり、夜毎絃歌さんさめく柳暗の街は、ともすれば安逸を貪ぼる彼の心を楽しませて呉れるのだった。それもつい数日前の事である、或る御座敷に舞妓の忘れ物を取りに戻つた時、廊下を一つ隔てた向いの部屋に、彼は見る可らざる光景を見て仕舞つた

のだ。涼しい夕風に吹かれ乍ら、土地の織物問屋の若主人と、売れっ妓との情事——、それはむしろ日常の茶飯事にも等しく、別に珍らしい事ではないのだけれど、不思議にも彼はこの時、生来初めての強い衝動に駆られたのである。

薄暗い雪洞の陰に躍動する二つの人影、時としては激しく、又或る時は消え入る様に切ない鳴咽の声に、彼は未だ見ぬ心の敵と戦い乍らも所詮は不自然に自らを慰め、その心は徒らに錯乱して行くばかりだった。この事が一つの契機となって、彼はこの「禁ぜられた遊び」を、そしてその機会を事ごとに求める様になったが、然しそれは長くは続かなかつた、口さがない花柳の巷である。

『治三郎さんの様子、この頃変じやない?』
『何だか眼つきが怖い見度い——。それにこの頃は三味線を入れても直ぐ帰らないのよ』
そんな噂が人々の口の端にのぼり彼の「窃視症」と、暗い影のある行動とが漸く周囲に感づかれて来た或る日、彼は遂に逃れる可からざる現場を押えられて仕舞ったのだ。

——人の愉しみを窃かに覗く——よしそれが彼の本能の昇華であつたとしても、そして若し子供の中ならば、いわば純粋な形で観察出

来るかも知れないこの衝動ではあつたけれど良俗に反すると云う僅かばかりの抑圧を除いては、矢張りせき止める可き術もなかったのである。

殊に彼は、若い舞妓の所謂水揚げされる時等、常軌を逸した狂おしい迄の衝動を覚えるのだった。何等愛情の交流とでもなく仇に振り撒かれる黄白の前に、空しく失われて行くバージナリティ。散り行く花は哀れにも又可憐であつた。軽く噛みしめる紅の唇、僅かに顰める柳の眉、そして闇の衣ずれの響きには、儚い怨嗟の声すらも聞かれるのだ。

そうした状況をまのあたりに彼が独り慰め陶酔の夢を食っていた時、忽然と現われた破壊者の手に、彼の夢は脆くも潰え去り、二十五の年も空しく暮れて行くのだった。

× × × × ×

想えばそれから十余年も経っていた。勿論その間も生来の窃視欲は少しも退歩する事もなく、否、却つてその内面には鬱勃とした勢力を貯えていたのかも知れない、そして『現在こそ』と彼は思つても見たりした。『現在なら出来るのだ』それは倒錯した彼のアイデアに基く、彼の逞しき理想境の建設であつた。

二、見果てぬ夢

本能とは云え自己の窃視欲を誰憚る事もなく満足せしめる為め彼は思いがけなく手に入つた大金を注ぎ込むと、予ねての懸案、待合の建築を思い立ったのである。曾っては何夫として夜毎通い慣れた待合である。然し其処には彼にとつての回春室、秘められた空間があつた。勿論家人にもひた隠しにかくし、建築を請負つた者すらも当初はそれと知らなかつた。

新築成つた待合「まつかさ」は比較的に繁盛した。一つには彼の生れ故郷京都でもあつたし、それに何と云つても露国皇太子の危難を救つたと云う、云わば救世主としての彼の人気もあつたのであろう。そして一しきりさんざめいた絃歌の声も静まり、美女の嬌声の秘かに洩れる夜半ともなると、彼は押入れの中に調らえた段階子を音もなく昇つて行くのだった。手探ぐりで予ねて用意の天井板をずらすと、眼下には四畳半の狂態が手に取る様に見える——。彼は吐く息をすら押し泳ぐのだった。すると高鳴る胸の鼓動は脈々として鼓膜を打ち、眼は充血して貪る様に蠢めく軟体を葡つて行く——。最早や其処には何の

反省もなかった、又何の必要があろう。彼は唯この秘かなる欲望の中で燃え尽す丈燃えたなら、之に過ぎる好美感はないとすら思った痛い程の戦慄が彼の脳裡を掠めて行く――。

間もなく「不惑」の年齒に手の届く彼ではあったけれど、この衝動こそは逆も押え難いものなのだ。彼のこの回春室通いは夜毎の様に続けられて行ったが、凡そ何事によらず「不自然」な事は何時かは破綻を来すものと見える。何時とはなく妙な噂が立ち始めるとお馴染の客足も次第に遠のき待合「まつかさ」の灯光も段々と薄らいで行くのだった、それは兎に角として、

『あそこには覗きがある』――その噂は彼には致命的なものであった。巨財を投じての回春室も遂に空しいものとなった。でもそれによって彼はどれ程自分を慰め得た事であらう。

× × × × ×

悪銭身につかず――とか、然し彼が一日にして得た莫大な金は決して悪銭ではなかったけれど、その代償として彼の払った努力は？それは努力と云うよりも寧ろ僥倖に属するものであったらう。又一つには彼には巨富を保つ丈の器量がなかったのかも知れない。あれ

丈の大金も、然し無為徒食の生活には保える可くもなく次第に瘦せ細って行き、もうその頃は幾許も残ってはいなかった。時には何か利殖の手をと思わぬでもなかったが、見果てぬ夢を追う彼の未練は余りにも大きかったのである。土地の噂が喧しくなるにつけ、彼は話に聞いた東京に出て一旗上げる事を目論んだ。

そして身の振り方をあれこれと考え乍ら散策の道すがら、と或る町角迄来た時、彼は無心に遊ぶいたいけな少女の群を認めたのである。未だ夕暮には間のある午後ひるごきの一時、童唄に興じ乍ら円陣を描く子供達、彼の視線はその中の一入を執拗に追い求めるのであった。十歳前後の可愛らしい瞳の子、歳よりも大柄な少しおませな子供だった。

『小父さんも入れて呉れないか？』

そんなきっかけを作ると、結局は上手く言い含めて彼はその童女を誘い、秘かに自宅に引き入れる事に成功した。生来の窃視症は何時か童姦症にと移行していたのだろうか？四十に手の届く彼は曾ってない情欲の炎を燃やしたのである。

『誰にも話すんじゃないよ』

別れ際に幾許かの金を握らせると彼は少女

に云った。そして不甲斐ない自分の理性を考えると淋しく、悲しく、又無精に腹立しくさえもなるのだった。こうして彼は事もなく、遂に七人の少女を犯して仕舞った、そして当然の結果として、京都地裁で懲役七年の判決を受ける身とはなったが、曾っての華やかさに比較して、それは何と淋しい、不名誉な結末であつたらう。

憶えば前号にも誌した通り、大津事件は憂国婦人の切腹迄招いたが、それに反し、一時は救国の人として絶讃の脚光を浴びた身が、一朝にして一切の榮譽を剝奪さるゝとは、顧りみて感無量のものがある。

一度狂い咲いた倒錯の実は余りにも甘美であり、それを肯定す可く決して客かではないが、試みに一線を劃し、そのために正常の社会生活が営める程度であつたなら、彼も榮譽を全うし得たのではなからうか。因に彼と同じ榮譽を担った北賀市太郎（当時三十三歳）はこの資金を以て、郷里石川県に土地山林を買い求め、後に郡會議員に推され、又露帝に香炉を献上したのに対し、御紋章入りの煙草入を下賜されたと伝えられている。

被
虐
少
年
期

(第八部)

マ
ゾ
へ
の
胎
動三
根
耕
二

窓から射し込む明るい光線の中で、羞恥が悶えのた打ち廻り、屈辱の念が全身を熱く灼きつくしていました。しかし、これは一体どうしたことなのでしょう。辱しめに身も打ち震える怒りを感じ、口惜しさに顔色が蒼ざめている筈の私なのに、その私の心の奥にもかもし出されている微妙な感覚、奇妙な此の感じが私の身体の内を流れ出しているのです。

今の今まで額からタラ／＼と脂汗を滴らしていた私、猿轡の中で不自由な舌を操って、声にもならぬ呻きをあげていた私なのです。辛少年の指先が、私の肉体の隅々にまで、

その淫らな欲望を満足せしめている時に、私は無抵抗の身体で必死になって、身を振り回して執拗な苛みから逃れようとしていた筈なのです。宗島少年の冷たい指が、意地の悪い動きをした時、私は余りの辱しめに気の絶入りそうに喘いでいたに違いありません。でも厭わしいと思いつゝも私の反面にそれを待ち受ける心がなかったと云いきれたでしょうか。私の身体に加える、悪どい行為の一つ一つに、頬を紅潮させていた三人の少年以上に、私が興奮していなかったらうか、そうです。その時の私は全くその苦しみの中に、痺れる

ような歓びを感じていたのです。裸身に喰込む鞭の痕に湧き出る此の感覚、奇妙な愉悅の味わいは何故これほどに私の心臓を揺するのでしょうか。ドロ／＼の粘っこい感覚は私の五体を蕩かしているのです。官能の隅々に至る迄溶かし尽くさずにいないように、私はいつしかその中に身も心も、すっかり委ね切っていたのです。私自身の絶望が自らの心に歓喜を呼び起し、私自身の呻きが故知らぬ淫らの淵にと私自身を押しやり、突き沈めてゆくのです。私は咽び泣き乍らその中に溺れているのです。苦痛に耐え兼ねて私が逃れようと

すると、縄目がひし／＼肌に喰入る激しい痛み、その痛苦と併行して疼くような感能が背筋に走ってゆく、そして痛みよりその快感が大きいようにさえ感じ始めていた私でした。

辛少年のぶすぶすと、どす黒い嫉妬の苛責が私の投げ出された身体を、じりじりと痛めつけていました。ありとあらゆる冒瀆が加えられるのを、私は甘受して横たわっていたの



です。明るい白昼の陽光、その光線の中に曝されている私の哀しい姿態。青い長衣の襟も裾も、まくれ上りはだけて、腰から下の方も剥き出しにされていました。

何と云っても、数えて十六才と云う少年の裸身は不思議に清純さを示しているのです。童貞と云う貴重なものを守りつけている得難い肉体なのです。若さを証明する弾力のある筋肉の盛り上りは、さながら美しい精巧な玩具を思わせるのです。

三人の少年の熱い息吹が私の裸身に直接感ぜられるのです、痛い程の視線の刺さるのが分るのです。辛幸烈少年、宗島少年ら三人もそれ故に今迄、此の工場で大勢の年長の若者達に、つけ狙われたり追廻されたりしたのですし実力者から特別の底護を受けたのです。つまり玩具であり、貴重品であり、本能の対象としての被征服者の位置しか残っていないかったのです。しかしそれは飽迄も他からの強制に依って作り出されているにしか過ぎないのです。彼等とて私とて決して男性としての本能は失っていないであれば、やはり一定の年令に達すれば萌え出す欲望は抑える事が出来ないのです。征服する立場が本然の性なのでした。しかし度々申上げたように此の鉄窓

の中では、何と云っても実力が物を云う世界でした。力のある者、古参者や上級者の威勢には、弱い者や新入者にどれ丈の自由が許されているでしょう。しかし抑えられる丈、欲望は凄じい内攻をするのです。それが何かの拍子で吐け口をみつけると、噴き出してくるのでした。辛少年らの今の場合は正にそれでした。彼らは完全に征服者の位置に立ったのです。もとより弱い者である彼らの鋒先が强者へと向けられる事は不可能であり、結局、同じ弱者中でも最も年少である私に、その噴出口をみつめて襲い掛かっているのです。それ丈に彼等のする一つ一つの執拗さは全く異常なものであったのです。殊に辛幸烈のする行為は、書くことを憚る程の悪どいものであったのです。あの黒い美しい瞳を持つ美少年の何処に、此の悪魔のような考えがひそんでいるのでしょうか。私がその指先の攻撃に耐え兼ねて、猿轡の中に洩らす苦悶の呻きを感じると、彼のその形のよい唇が奇妙に歪み、頬がカアッと赧くなるのです。そして憑かれたように、無防備の私に、激しく襲い掛かるのです。キラキラと熱っぽく光る眼の輝き、羞しいこと、少年の身体のもっと羞恥の強い所、そう云う秘密を彼はよく知っているのです。

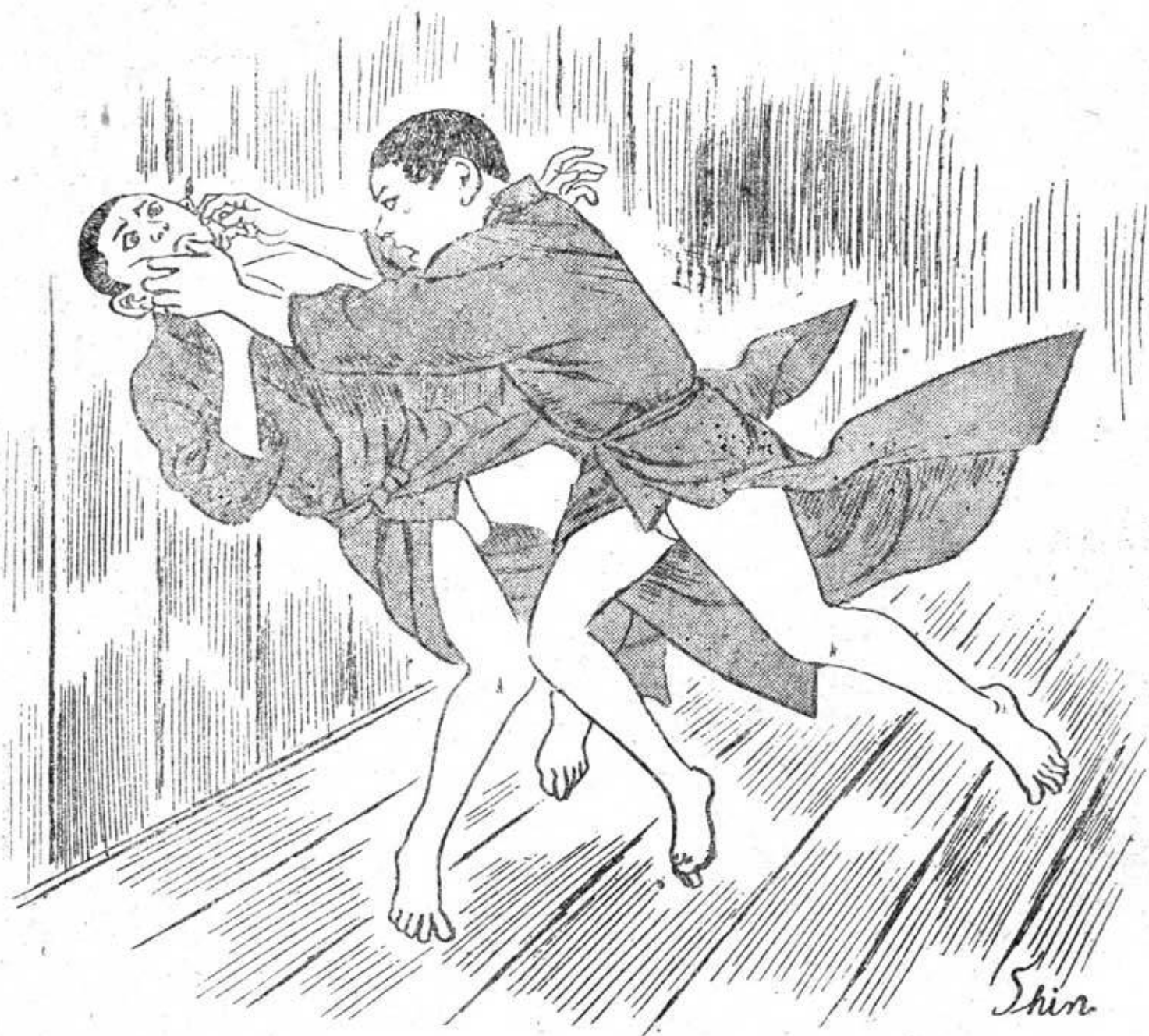
辛少年の十七年の生涯に、彼はどのような数奇の運命に弄ばれてきたのでしょうか、此の世の倫理も道徳もすべて無視したような性格は、果してどこで培ったのでしょうか。幼少から少年に至る十数年を彼は悪徳の中に過してきたのに違いありません。私はもう苦痛とそして奇妙な感覚の中で喘ぎ疲れて、全身はくたくたになっているのです。全身の無数の毛孔から滲み出した汗、私はぐったりとしてもう身をもがく気力も失っていました。彼らも満足したのでしよう。立上ってニヤニヤと顔を見合せていました。

そして洩らした「山崎さんに可愛がってもらえ云々」の言葉が私を亦不安に陥入れたのです。山崎、山崎と云えば三工場の一級者のことでしょうか。そう云えば私の連れ込まれている此の五舎は、一級者許りの監房であったのです。そしてここは或いは山崎の室ではないのだから、私の混乱した頭の中に此の想像が忙しく去来しました。その時でした。扉が微かな音を立て、開きました。私の想像した通りでした。一般の少年達と違って普通の（娑婆の意味で世間並み）縞の着物を着て黒い兵児帯を締めた男が入ってきたのです。私も此の山崎と云う男の顔は知っていました。

姫路少年刑務所六百の少年受刑者での大立者と云うか、十五年の刑期を三分の一も服役していて最古参の男。少年刑務所の規定では二十才未満の少年を収容しているのですが、特殊の場合として判決を受けた時二十才未満の長期刑の者は二十四才迄は少年刑務所に居る事を認めていたのです。彼山崎は二十二才であり、三工場の洋裁作業責任者として腕を振っていたのです。今では受持看守も作業技手も一目置く程の隠然たる勢力の持主であったのです。その当時、少年に死刑を課すと云う事は稀で、相当の兇悪犯であっても無期又は十五年の判決が下されていたのです。ですから制限年令に達しますと成年（一般）刑務所へと移されて、大人としての服役をする訳です。

さて二十二才と云えば立派な青年であり、私のような最年少の者からみれば小父さんとも呼びたくなる程の男でした。しかも工場の最高幹部であれば飽食しており、逞しい脂切った体格で圧倒されそうな感じでした。山崎は入ってくるとチラッと転がされている私を一瞥して、辛の方へ向いて「後三十分程すると部長がくるから、お前ら房へ帰ってろ」辛は頷くと宗島達と外へ出てゆきました。

出掛けに辛が私の方にチラリと意味ありげな視線を投げ、辛は扉の外へ出ていったのです。私は不安でじっと身体を固くして転がっていました。山崎は立った儘、暫らく私のあられもない姿態を見下ろしているのです。私の皮膚は敏感にその視線を感じ取って、身の竦むような悪感を覚えるのでした。彼の瞳に狂的な光が宿り貪婪な唇が濡れる、獣じみた体臭が蔽われている鼻孔に泌み込んで私の恐怖を煽り立てるのです。小さな獲物を前にして舌舐めずりをする狼のように、山崎は私の脅えるのを楽しんでいました。私はそのような視線に曝されている、露出された裸身に、たまらない羞恥を感じました。今更のように私は少しでもその視線から、身を隠そうとして渾身の力で暴れました。でも後手に縛られて



いて果してどれ丈のことが出来るのでしょうか。空しい努力でした。まくれた着物は身動きすると意地悪く却ってはだけてしまう丈です。

私はせめて股間だけでも蔽い隠したいと必死でした。汗の粒が噴きだして足の先までも羞恥でポツと染ってしまいました。そんな儚かないレジスタンスが却って彼の官能を刺戟したのでしょいか、山崎の頬にも血がのぼってきます。成熟した逞しい青年の欲情を挑発している哀しい私の姿態、私の口の中は唾液でねばねばしています。無性に喉が渴いてたまりません。

私は大声で叫びたい思いで幾度かそれを試みたのですが、意味の分らぬ呟きにしかならないのです。私はもう観念してしまいました。どうにもならない、私の空しい努力がどれ程効果をあげ得たでし

よう。私は眼を閉じてしまったのです、もう山崎のメラメラと燃えている視線をはね返す元氣すら消失していたのです。あゝ、白川の顔が、そして文や池田の顔が私の眼底に浮びました。誰かきて私を救い出して呉れないかな、と空しい希望を一生懸命に思っていました。あの辛や宗島達は同じ工場の仲間でありながら、私を騙してひどい目に逢わせ、しかも何のつもりか他工場の幹部に、括り上げたまゝの私を渡してしまった人間です、彼らが

白川達に私の危難を知らせて呉れる事は考えられません。眼を閉じている私の頬に熱い息吹が触れました。ハッとして眼を開けると私の顔に山崎がくっつかん許りに顔を寄せているのでした。私はそれでも怒りの思いをこめてじっと彼の顔を睨みつけました。精一杯、これが現在の私に出来る精一杯の反抗であったのです。彼はそんな私の態度にかえって嗾られるのでしよう、私の難詰するような視線にもたじろぎも、顔を赭らめもしないのです。そして、山崎は、「お前は可愛いゝな、俺の工場へ

来ていたらよかったのに、恐いことはないよ、フフ、」

低い声で私にそんな事を云うのです。此の男は今迄にも幾度もこんな悖徳の行為をやってきたのに違いありません。こうして私は彼の自由にされてしまったのです。彼に依って征服されてしまったのです。自らの意志に反して被征服者の位置に追いやられてしまったのです。同性に対する強制に依る暴行、これが現実には起きたのです、貴方方はこれを読ん

でーそんな馬鹿な事がーとおっしやるでしょうが、所が此のような事実は確かにあったのです。

私はもう誇りを汚されてしまったのです。矜持も心なき男によって木っ葉微塵に打ち砕かれてしまったのです。私は白川にすまないと思いました。白川と仲よくしていながらも私は白川に私の肌に手を触れることさえ許さなかったのです。それを辛少年達の企みによって私は汚れてしまった。私の眼からどっ

と涙が溢れ出してきました。口惜しさ、辱しさ。山崎は、そんな私に一寸慌てました。彼は、「お前、すまなかった、痛かったろう」

と云い乍ら私の腕の縄を解き始めました。私の此の時の気持が山崎に分る筈はないー此の獣めッー私は心の中で叫びました。辛に連れ込まれてから時間にして三十分程しか経っていません。それでも縄を解かれた両腕も両方の手首も縄の痕が肌に喰い込んでいて、しばらくは手も動かせない程の痛みと痺れが残っていました。猿轡も



取り除かれて、私は胸一杯に空気を吸込みました。甘い空気、それに比べて何と此の房内の汚辱にやどんだ空気でしょう。何も知らなかった無垢の少年の心と肉体に、何と云うドロドロの悪徳を浴せかけたのでしょうか。私は山崎に口を利きませんでした。黙って睨みつけてやりました。此の卑劣な男に口を利くなど思いも依らない事です。悪計を用いて抵抗の出来ぬようにしておいて、彼は私の汚れを知らぬ肉体に、拭い取れない淫らな痕を残したのです。私は黙って長衣の襟を直して帯をしめしました。私は何かくどくど云っている山崎の傍に近づく、いきなり彼の頬を力一杯に殴りつけると外に出ました。彼は一寸驚ろいたようでしたが、何も云いませんでした。或は多少は良心に咎める所があったのでしょうか。

私は廊下に出ると扉の錠前磨きをやっているような顔をして、自分の房の方へ行きました。皆何も気がついていないようです。私はほっと思いました。あの屈辱の最中に誰かが救



った彼はいつでもそうでした。私は辛の房の前を急いで通り抜けようと思いました。私をこんな辱しめの底に陥入れた、あの男の嘲けるような眼に逢うのを避けたかったです。

でも駄目でした、待ち構えていたらしい彼の視線に絡まれて、思わず、私はカアッとなっていました。此奴メ、此奴メ、私は訳も分らぬ怒りに彼に掴みかかっていたのです。

私はそれ迄、どちらかと云えば温和しいと云われていて、他人と喧嘩などすると云う事はなかったのです。でも今日は我慢出来ませんでした。あの冷笑するような驕慢な視線を真向うから浴せられて、私は先程のあの忌わしい出来事をいやでも思い出さねばならなかったのです。辛少年は十八才ですが小柄でした。私はまだ十六才です。しかし私は理性を失って怒り狂っているのです。幾度殴り又殴られたか二人共必死で取組み合っていたのです。

突然この騒ぎに、各房から大勢の顔が覗き

け出して呉れたら、と思っていたのに矛盾しているようですが、あの凌辱の最中に他の少年達に発見されていたら、私はどんなに恥かしい思いをした事でしょう。その点では人に知られなかったのが私に取っては救いであつたかも知れません。

川本看守は宿直室の中で肩を揉ましていました。こんな呑気なと云うか横着な役人もいたのです。ガスタンクと云われるまん丸く肥

ます。白川や文、それに大辻などの工場の幹部が飛んできて、私と辛とは引離されました。私は白川の腕の中で身悶えして暴れました。このやる方なき口惜しさに私の両の眼から大粒の涙がぼろぼろと滾れ落ちるのです。泳え切れない悲しさに私は嗚咽しました。まだ普通ならば友達と一緒に学校へ行ったり、ちやんばらでもして遊んでいる年頃なのです。

それがこうして罪を犯した許りに故郷を遠く離れ鉄格子の中に閉じこめられて、此のような屈辱を受けねばならない。両親を早く失った許りに歪んだ道へ入ってしまった私は、それでも此の時許りは「母さん——」と声をあげて泣いていたのです。此の騒ぎでは、いくら呑気者の川本看守でも、知らぬ顔は出来ません。

「こらっ、誰だ喧嘩なんかしやがってッ、出てこい焼きを入れてやるから」

度々書きましたように刑務所では、逃走、喧嘩、性の三つは重い反則なのです。辛も私も顔色が蒼白でした。川本看守に殴られるのも恐ろしいが、もしかして戒護課へ報告されると懲罰事犯として処罰されるでしょう。川本はツカツカとやってくると、辛と私の頬へ

いきなり平手打ちを食わせました。川本看守は物凄い力の持主でした。私も辛もふらふらとよろめきました、つづいて二回三回といわゆる往復ビンタです。口の中で切れたらしく辛の唇の所が赤く染まりました。私の唇の端からも血が筋を引きました。川本看守は二人の腕を掴むと、中央の広い所に引ずるようにして連れてゆきます。そうして幹部の者に向って、

「オイ、竹箒を二、三本持ってこい」

と、どなるように言いつけました。彼は二人を二尺位離れて立たせると箒の柄の方で力任せに殴りつけます、うっと息を呑むような激痛、私は今迄に幾度此の折檻を受けたことか、大抵の場合、尻を殴りつけられると身体が前の方に五六歩のめります、このことを私は吹飛ぶと云っています。こうして折檻されて苦痛に耐えかねて「許して下さい」などと音を上げることがあったと云うのです。

少年囚達は此の拷問で音を上げない事を誇りとする変な意地を持っていました。最初一撃された時は痛いッと感じますが、五、六度同じ所を打たれると、ただ灼熱感を感じるだけで痛みを感じなくなるものです。辛少年は五回目でへたへたとそのまま廊下の煉瓦の上に

座ってしまいました。私は歯を喰いしばって七つ迄我慢しました。何故なら、どうしても辛よりも先に音は上げたくなかったのです。そしてそれをやり遂げました。しかしそれが限度でした。ふうっと眼の前が暗くなってくると、私は、もうそのまゝ崩折れていたのです。

後ですぐ気がついたのですが、川本看守が戒護課に渡すと云うのを、工場幹部が頼み込んで呉れたらしいのです。その時の、白川の態度は物凄く熱心だったようですが、それはそうでしょう。いずれにしても、私にせよ、辛にしても戒護へ行けば懲罰も受けねばなりません。そうすると元の工場には帰れないのですから、彼等の慌てたのも無理はないことです。それに川本看守の怒りを静めたのは一級房から出てきた山崎の口利きが力があつたのです。でも私は山崎が戒護行きを喰止めて呉れた事に少しも感謝する気になれなかったのです。元はと云えば種を蒔いたのは山崎自身なのです。それを知っているのは私と山崎を除けば辛ら三人の少年だけなのです。でも私には山崎が謝って呉れなくてもよかったのです。戒護課に行つて取調べを受ければ、私が喧嘩した原因が明らかになるでしょう、そ

これは山崎が反則者として懲罰に附され、現在の一級者としての地位から転落する事になるのですから。それ故にこそ山崎も必死になって戒護課へ行くのを阻止したのです。だから私は山崎に対して感謝なんかする必要はなかったのです。

私は房に帰っても誰にも喧嘩の原因は打明けず口を噤んでいました。白川は私の房を覗いて優しく勧めてくれました。そして、「耕二は向う意気が強いなア、それに仲々うたわなかったのには驚ろいた」

しかし私の心の中の翳りは消える訳はありません。皆は知らないけれど私はもう汚されてしまったのだ。しかも暴力で自由を奪われて限らない屈辱を味わわれていたのだ。そう思うと又新たな怒りが湧き起ってくるのです。山崎もあの卑怯な辛達も赦すことは出来得ないのです。どれ程甘い言葉をかけてきても彼等のあの濁り切った行為は消す事は出来ないのです。私は白川のオドオドした態度にさえ反撥したくなっていました。何だいみんな一皮剥けば、けだものじやないか――

もとより暗い獄中です、美しい夢などある筈はないけれど、私はそれでも人の善意を信じていたものです。そして今日と云う今日

こそはその善意さえも粉々に毀されてしまったのです。私は周りの少年達のする事なす事に信を置くことが出来なくなってしまったのです。さてその日も暮れて夕食も済み、部長の点検も終って私共は再び鉄扉の内側へ閉じこめられてしまいました。ガチャン、ピシンと云う冷たい錠を下ろす音はたまらなく劣等感を刺戟します。免業日(休日)はこうして終ったけれど、私に取っては悪夢のような一日でした。臀部を殴られているので座っているのも辛いのです。私は黙々としていました。文や池田達が話掛けてきても、私は返事しかしませんでした。何を話すのもわずらわしいのです。正座、就寝用意、そして就寝ラップで固い綿布団にくるまると、私はそうと手をお尻へ持って行きました。触るとピクツと飛び上る程痛いのです。私はそうといつ迄もなぞていました。あの頃の私の経験した中では青竹で殴られるのが一番痛かったように思います。櫓の木剣や皮バンド、そして後に移送された岡崎ではロップと云って、細い皮紐を撚り合せたものが痛かったように思います。

でも戦時中、私が工場を欠勤したと云うので警察へ喚ばれて、打つ殴る蹴ると云う拷問

を受けたときも、私は遂に最後迄音を上げると云う事がありませんでしたが、やはり此の四年間の少年刑務所で我慢出来るだけに訓練されたからだだと思います。さて余談はさて置いて、私はその一夜を寝苦しい思いで過しました。しかし、あの屈辱的ないたずらをされそして苦痛を加えられていながら、私はどうして一瞬電流の走るような快感を感じていたのだろう。今でこそはっきりと云えます、それはお前がマゾだからサと、しかしその頃はマゾなどと云う言葉も意味も知らなかった私なのです。初めからマゾの素質であったのか、或いは度々苛責を受けている内に性格が歪められていったのか。いずれにしても苦痛の中でも私は痺れるような喜びを感じさえしていたのです。でも、その頃はまだそれ程強くはなかったようです。やはり苦痛の方が余計に感じたのです。その中から僅かの恍惚感に触れていたもので、いわば此の頃が私のマゾの芽生えであり胎動であったのに違いありません。こうして私はマゾヒストとしての道へ知らず知らずに辿っていたのです、疼痛の中から生れる微妙な掴みどころのない物に憧れ始めていたのです。

懸賞原稿入選〔第四席〕（賞金五千円）

汗について

みずしま・まもる

プロローグ

これから申し上げる或る夫婦の生活に関する三つの挿話は実は私自身の夫婦生活の一断面でもあります。私は幼い頃から所謂 water proof なるものに異状な憧れを持っておりました。

桐油紙、ゴム引防水布、薄ゴム、ビニール等、それ〴〵特質を持ちつゝ私を楽しませてくれました。特にそれ等の生地が人の身につけられている場合、私は人知れずその喜びに戦いたものです。

例えば雨の日の通勤電車でゴム引のレインコートを着た若い女の人を見かける時、或は

映画館で隣にビニールのレインコートを着た女の人が腰を下している時等、私は何かしらチャンスを見つけて一寸手を触れてみたりました。

赤ん坊のおしめカバーでさえ時には怪しく私の眼に映ることがありました。おしめカバーが洗濯されて物干竿に乾されているような時、そのテラ〴〵と光っている薄ゴムを見ると、私はそれを盗みとって尿の染みついた皮膜の中に顔を埋めて見たい衝動にかられることもありました。

世話をする人があって同じ区内の酒類問屋から、現在の妻の妙子が嫁いで参りましたのが三年前であります。

当初は、私の此の様な秘密を絶対に妻に漏らしてはならないと、戦々兢兢々としておりました。所が後で申し上げる通り妻にも私以上の秘め事があったのですが、妻も私同様それをひた隠しに隠しておりましたので、一年程の間はお互に何も知らずに過してしまいました。

私は丸の内のある貿易会社に勤めておりましたので、日曜祭日は一日中休み、土曜は半日で帰ると云った極く当り前の生活を無味乾燥に送って参りました。

所が結婚後一年ばかり経ったある雨の日曜日のことでした。全く偶然のことから私は妻の秘密を覗くことが出来ました。いや後で考

えて見ますと、それは鈍感な私に対して演じた妻の賢明なプレイだったかも知れませんが、然しその時の私の喜びは如何ばかりだったでしょう。

妻はもとく真赤なゴム引レインコートを



持っておりましたが、私はわざ／＼大分長目の地味な茶色のものを買って与えてありました。赤い色は何かケバケバしくて私の連想を壊すような気がしなからでした。

漸く初夏の緑も濃くなったある雨の日曜日

私は妻の妙子を伴って新宿まで映画を見ようと出かけました。映画は「情婦マノン」だったと記憶しています。折よく交替の時に入った為か、すぐに席を見つけることが出来ました。

漸く「情婦マノン」も終りに近づいて、既に一個の骸となったマノンが愛人の手によって逆さまに担がれて焼けつく南海の砂丘を運ばれます。

この時私は——ア、——と呟く妻に気がつきました。そして妻は私の手を強く握り緊めたのです。深々と被ったフードの中で妻の両眼が異様に輝くのがわかりました。こういう場合私の方から妻の手をとることがあっても、かって妻の方から積極的に私の手を握るなどということはこれまで全くありませんでした。然し勿論悪い気分の筈もなく、私はすぐに両手で優しく握り返してやりました。所がその時、それ程の陽気でもないのに妻の手がびっしりと汗に濡れているのに気が付き、訝しく思ってフードの中の妻の顔を覗き込むと、額から頬にかけてびっしりと汗の玉が浮いているのがスクリーンの反射でわかりました。

気分でも悪くなったのかと訊ねましたが、

端は只かぶりを強く横に振るだけでした。少し風を入れなければ毒だと思って妻の被っているフードを脱がしてやりました。すると突然妻は体を曲げると私の胸に顔を埋めたのです。綺麗な襟足がびっしりと汗に濡れているのがわかりました。

レインコートの為に蒸れて気分が悪くなっ

たのだと思ったので釦に手を掛けて外そうとしました。何故か妻は私の手を強く拒みました。その様な依怙地な妻に一寸憤りを感じた私は無理にもレインコートの釦を外そうと妻の胸元に手を入れました。そしてその時、始めて異様なことに気がついたのです。妻はゴム引のレインコートの下に文字通り一糸も身につけていないのです。そしてたまたま私の手に触れた乳房がぬる／＼と汗に濡れて、而も燃えるように熱しているのに気が付きました。

その時、ちょうど映画が

終って場内は明るくなりました。妻は外した釦を大急ぎで元の様にかけると又深々とフードを被り急に立上って出てゆこうとしました。私は然ししっかりと妻の手を離しませんでした。休憩の間中、妻の左手首を血の流れを止める程強く握りしめておりました。妻はもはや囚われの人の様に深々とフードに埋め



た顔をうつむけてじっと動きませんでした。その秘密を私に見られたことが、どんなに大きな衝撃を妻に与えたことでしょうか。開幕のベルが低く鳴って場内が再び暗くなりました。私は忽然と湧いて出た激情を抑えることが出来ず、暗くなった場内で秘かにうなだれる妻を抱き寄せました。私は妻のぬれ

た唇を、静かに吸い取ってやりました。周囲を囲む数多の人達は、もはや縁なき衆生でありました。妻は私の腕の中で、そのゴム引のレインコートとフードに包まれた裸身を、心ゆくまで悶え続けたのでした。

その夜から私は妻を愛しに愛しました。妻と一緒に楽しい計画に耽ったのです。

レインコート

そのレインコートの仕立を先ず説明しておく必要があるようです。

生地は無色透明のビニールを使ってあります。丈は非常に長く、踵までかぶります。身巾が極端に狭いので、従って裾巾も非常に狭く、そのレインコートを被って思い切り両足を開いても先ず四〇糎と開きません。

頭から被って着るようになっていたので、細長い袋の様に切れ目がありません。わずかに背中の上部にあたる所にチャックで開閉するようになった裂れ目があります。

尚、首の廻りと細い袖の先の手首にあたる所に丈夫なゴム紐が縫い込まれています。つまり首と両手首をびっちり締めつけようというわけです。それからウエストの所には念を入れて二巻、やはりゴム紐が縫い込まれて体

を充分しめつけます。又見た目にもしまりが出来て所謂コスチュームとして形が整うわけです。

この特殊なレインコートは私の苦心の作品でありました。と云っても私が自分の手で縫い上げたわけではありません。妻の妙子の体の各部分の寸法を詳細に書き出して、さるビニールの加工工場に注文をしたものです。

出来上って来た時に早速被せられて鏡の前に立った妙子は、これがレインコートだとはどうしても納得出来ませんでした。鏡に写された姿は、全くもって何とも云い様もない哀れにも又滑稽な姿でありました。然し流石に私が寸法を計ってあっただけあって、ピッタリと体についていました。

然し、まあ何と被ったり脱いだりするのに骨の折れる衣物なのでしょう。シュミーズ一枚になって頭から被って見ましたが、首を出し両手を辛うじて通すと後は胸の辺でつかえてしまつてどうにも私の手を借りなければ着こなせないものでありました。

私は更に此のレインコートに凝った細工をしていました。つまり背中の中をチャックを引上げて首の廻りをピツチ閉ざしてしまうと、そのチャックの開閉器を首の所で小さな南京錠

で固定してしまうのです。これで此のビニールの皮膚の中で閉じ込められた者は永久にそこから逃れることは出来ません。云い換えれば刃物等で裁り裂くのでなければ自分の手では絶対に脱げないというわけです。

これは心理的にこれを被せられた人を相当参らせます。一度被せられたら最後、自分では絶対に脱げない、四六時中、どんな場所でも絶対に身にまわっていないなければならない。此の場合此のレインコートはもはや「囚衣」であり「責め衣」であります。

而も全く通気孔一つない上に、首と両手と更に腰の所で外気を完全に遮断しているそれは、普通の気温以上であれば一時間も被せられていると目まいのする程息苦しくなり、体中の毛穴から吹き出る汗は完全にその「責め衣」の中に蓄積されて、云い様のない惨たらしさでもあります。

裾巾の極端に狭いのは、このレインコートを被せられた人の両足に鉄の鎖のついた足枷を嵌めたのと全く同じ効果をもたらします。

此の囚衣に包まれた人は、只よちよちと腰を屈めて歩くより他に動きようがありません。

それに中が丸で透けて見えるということが一層の惨めさを感じさせます。例えば裸身で

この囚衣に包まれた場合、どうということになるでしょう。着せられた人は体にふれる囚衣を皮膚で感じ取るのです。一方他人の目には何もつけていないのと同じなのです。そしてそのことをはっきりと意識しなければなりません。

昔ある国の王様が欺されて裸で自分の国中を歩き廻りました。然し此の王様は自分では非常にお洒落な服を着込んでいると思っていたのです。これと丁度同じで自分では何か衣物を着たかんじがあります。只他人はビニールが透けて見えることを知っているのです。

私は妙子が秘かに懼れていたことを実行すべく申渡しました。つまり裸の上にそのレインコートを被て散歩をしようと云い出したのです。流石に妙子は反対しましたが、これはあまり意味がありませんでした。只夕食後すぐに出掛けようという私の提案が十時過ぎということになり、行先を新宿（尤もこれは私の想像から生れた実現不能の思いつきでしたが）というのが神宮外苑ということに妙子からの妥協条件は容れられました。

夏も大分盛りになった夜でした。外は音もなく糠の様な雨が降り注いでいます。

私の目の前で、妙子はワンピースを脱ぎ、

ジュミーズをとりました。ブラジャーと薄いパンティーをつけて、とほくに暮れる妙子の逞しい桃色の裸身は、痛く私の目を刺戟します。これをも許さないのだろうか、恨めしうに彼女は自らの手でブラジャーをとりました。豊かに盛り上った乳房は百ワットの電燈の下で羞恥に戦っています。

最後に白いパンティーだけが残されました。これだけは離したくない。然し取り除かれずにはいないと、わかり切っている不可能なことを、妙子は思いつめます。然しそのパンティも無惨にも私の手で剥がされてしまったのです。

バサ／＼と音を立て、冷いビニールが見る／＼裸身を包みます。チャックが締め上げられ、ピチツと音を立てて南京錠が下されました。もはや妙子は哀れな一個の囚人でありました。腰と首を締めつけるゴム紐の感触は、縄一筋身にかけられなくとも、もはや充分でありました。

然し私は妙子を後ろ手にし、黒い皮の手錠をかけて、更にその囚衣の姿を完璧のものにします。銀色に光った細い鎖を妙子の後手の手首から延すとそれを鴨居にかけて、しばしビニールに包まれた裸身の立姿を見つめるの

でした。

何という美しさだろう。海底の人魚を見るように、妙子の膚はビニールを透けて青白く輝くのでした。飽くまで黒く長く、豊かな妙子の髪は、絶え入らんばかりの羞恥にうつむく紅の頬を覆って、幽かに慄え戦っています。双の乳房はその囚衣を突き破らんばかりにはりつめて、その先の朱色の乳首が打ち挫がれているのも無惨でした。

もと／＼發育のよい、よく均整のとれた体ではありましたが、そのビニールの囚衣を通してゆるやかに揺れる妙子の裸身は、全くこの世にない美しさと艶めかしさを発散するものでした。

私は鎖を妙子の手から解くと、夢中でそのレインコートの上から抱き締めました。そしてもはや薄く汗ばんで来た顔中を、ところ嫌わず吸い上げてゆくのでした。キラ／＼と鈍く、青白く光を発して怪しく揺れるビニールの囚衣の中で、既にじっとりと汗に濡れ始めた妙子の肌を柔かいそして冷いビニールの皮膜がぬる／＼とこするのです。

吹き出る汗は全身くまなく、べっとりとビニールの囚衣を膚に吸いつけてしまわれました。体全体に余す所なくゴム糊でビニールを

はりつけた様に、レインコートは妙子の裸身に密着しました。然し間もなくこの状態を通り越すことを彼女は知っています。ビニール

と皮膚との間の汗の層がもう少し厚くなるとあとはぬら／＼と摩擦をするのです。

ビニールのレインコートは、私の抱擁の赴



くまま、右に左に、上に下に、撫でさすり、擦って蠢くのでした。

糠の様な雨は未だ降り止んではいません。妙子は黒のハイヒールを、私はゴムの長靴をはいて二人は雨の深夜の街へ出ました。ハイヒールは私がはかせビニールのフードも被せました。

妙子には何も出来ません。悲しくも後ろ手に皮の手錠がはめられたまゝでした。細い銀色に光った鎖が私の手に握られました。レインコートの裾巾の狭いのが、如何に巧妙に計算されたものであるかを妙子は悟りました。歩行が出来るといふことの最少限度の巾であります。勢いチョコチョコと尻を立てゝ前屈みに歩かねばなりません。それは世にも哀れな姿でもありました。そして一足毎にバサバサと音を立てるビニールの囚衣。

深夜の神宮外苑は流石に人影はありませんでした。然しもはや自分の家の中ではないのです。バサ／＼と脚にからまるレインコートの音に、妙子はともすればはっと立停って人の気配を伺うのでした。

あるかなきかの光をも反射して、青白く光るビニールの囚衣、黒のハイヒールの足はともすれば乱れ勝ちになります。よろ／＼とよ

ろめくのです。その度に後ろ手を縛った鎖がチカ／＼と鈍く光りました。

黒々とした木立を通して時々街燈の灯がもれて来ます。妙子はそんな所は避けたいのでした。誰にこんな姿を見られないと保証出来ましょう。然し私は光に向って進ませます。

街燈の灯は鮮やかに妙子の姿を曝け出しました。内側は汗に、外側は雨に、全身あます所なくびしょぬれに濡れた囚衣の自分の姿に妙子は唇を噛みます。そしてよろよろと木立の影にその浅ましい姿を隠そうとするのでした。

雨に濡れたアスファルトの路が緩やかなカーブを画いて右に曲ろうとしている所へ二人が来かゝった時、突然前方から疾走してくるハイヤーのライトを見つけました。

——いけない。——

然し妙子の足は自分の意志とは何の関係もないものの様にビクとも動こうとはしないのです。忽ち近づいたハイヤーは、銀色に輝いたビニールの中の妙子の裸身のシルエットを瞬間、鮮やかに描いて通り過ぎてゆきました。

その光り輝くビニールの膜に描れた豊かな裸像は、全く瞬間に消え失せましたが、私の網膜には永遠に焼きつけられた美しい光景

でした。

どこをどう歩いているのか知ろうともせず雨の続く限り夜の続く限り二人は歩き続けました。

バサバサ、バサバサ、と悲しい音を立てて囚衣は脚にはためくのでした。ともすれば、よろめく足を引立てて、妙子は耐えました。

私は妙子をとある木立の中に連れ込むと一本の樫の木に後ろ手のまま縛りつけました。そこは背後から木の葉を漏れて街燈の光が淡く射し込んで来る所でした。たとえ縛りつけられていても妙子にとってはしばしの休息でした。

私は煙草に火をつけると、じっと立木に寄りかかった妻を見守ります。肩と胸で大きく息をつく妙子の裸身は、背後から淡い光を受けて妖しい美しさを漂わせております。滑らかなビニールの囚衣は、妙子の息づく度びにゆるやかに揺れて、青白く光っては消えるのでした。

私は一寸その場をはずして光に向って出掛けました。待つ間もなく帰って来た私の手には一匹の小さな雨蛙がもたれていました。

妙子は私の手の中で蠢いているのが何であるかわかると激しく身体を震わせて悶え出

しました。

——やめて、やめて、それだけはやめて——然し叫びは声にはなりません。誰かに聞えないとも限らないという意識が先に立ったのです。

私は腕く妙子の首から、その冷血動物を囚衣の懷ろに投げ込みました。

——うッう——ッ——

妙子は声もなく跳ぎます。雨蛙はビニールの囚衣の中で熱い妙子の肉体に冷い吸盤を押しつけて跳ね廻っていることでしよう。

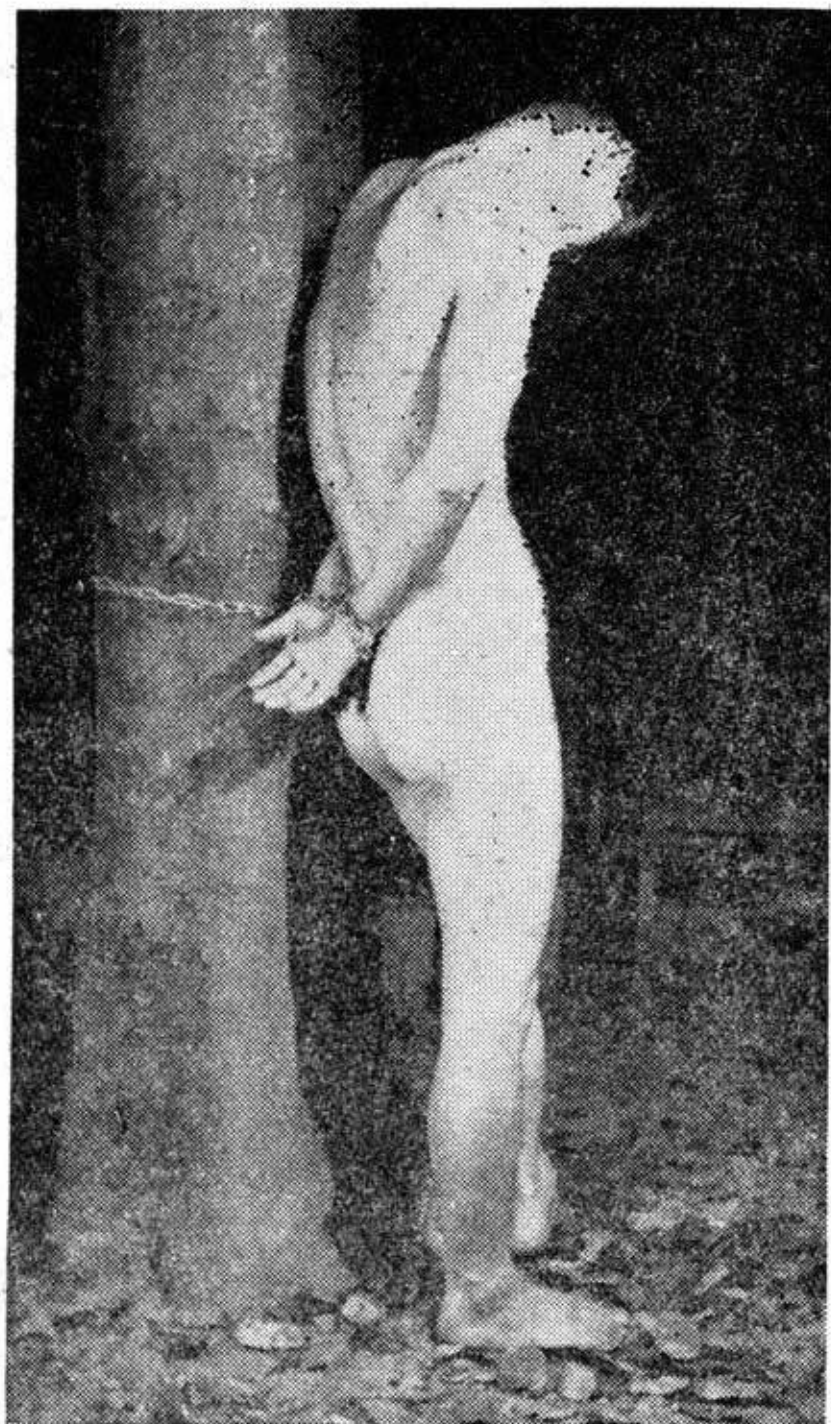
樫の木に結ばれた鎖が幽かにきしめいて音を立てます。妙子は縛られた腰を中心に前後左右にのたうち廻りました。どんなに気味悪く又撥ぐったいことでもありません。木の葉がゆれてばら／＼と雫を落します。後ろに廻された両手をなんとか解きほどうと必死に腕く度に、木の葉の雫はハラ／＼とこぼれました。

私はそうやって声もなくのたうち廻る妙子を飽かず眺めていました。棒立ちになって、唾えた煙草が灰になってゆくのも気づかず見惚れているのでした。やがて妙子の動きも静かになりました。ぐったりと縛られた木に上体をもたせて、がっくりとビニールのフード

(奇抜写真)

寒夜の庭の橋

撮影 大庭高視



全裸に剥かれた男の肌は、寒風に鳥肌立って戦きながら、やがて来る甘美な笞刑を、待っている。

データ

十一月中旬、午前一時、セミフ
アースト・ネオパンSS、絞F
五・六、一秒、三〇〇W

【評】男性ヌード及び男性の緊縛写真は、この外にも大分応募がありました、この写真が一

番雰囲気が出ていたようです。落葉を踏んで寒々とした夜の庭に晒者となった若い男の裸身が黒のバックの中で浮かび上がっているのは、わざわざ深夜を選んで撮影されただけの効果はあったようです。後手首のくさりだけで固定した点も、かえってすっきりとして成功していると思う。ライトを斜め上部から月光のように使えば又変わった趣が出たでしょう。

を俯向けていました。逃げ場のない雨蛙がレインコートの中で、圧死でもしたのでしようか、今や妙子は全く動かなくなりました。

私は近づくレインコートの背中を開き、手を突込んで雨蛙を出しました。レインコートの中は、汗と体温でまるで湯上りのようにベト／＼になって妙子の強い体臭がむっと私の鼻をつきました。窒息したのか押し殺されたか、私の掌の上の蛙は、やはり死んでおりました。縛りつけた木から妙子の体を解くと私はその儘抱き上げました。妙子は死んだものの様に動こうとはしませんでした。

然し気を失ったわけでもありません。私に抱き上げられた妙子の面上には一抹の喜悦の表情がありました。

私が軽くその額に唇をつけると、この甘美な拷問に打ち挫かれたビニールの囚人は漸く蘇りました。そして私の胸に深々と顔を埋めるとシク／＼と声を揚げて泣き出したのでした。

(未完)

【註】誌面の都合で分載しました。次は、

汗について(責め衣)―四月号、

(オシメカバー)―五月号の予定で掲載します。

SAPPHO 日本版

川合伊都子

— 切腹娘 —



桜の散ってしまった堤には、もう人の歩み
はちらほらで、まして多摩の裾山が薄墨を刷

いたようになって来た黄昏ともなると、これ
が都心から僅か一時間くらいで来られる処と

は思われない程の閑寂さである。

T温泉の旅館にはちらほらと灯が見え出した。濃いグリーンのスポンに藤紫のスエータ、丈の高いよし江は緋瑤子の肩を抱くようにして夕陽の堤を町の方へ歩いていった。

「緋瑤子、二人はもうお別れなのね」

「さっきから一言も語らず、放心したようにたゞ反射的に足を運んでいた二人だったが、橋の向うに私鉄の駅がくっきりと見え出した頃、よし江はこう言った。緋瑤子の黒耀石のような目には涙がいっぱいだったが、もうたまらなくなつて、よし江の肩に面を伏せてむせび泣いた。

「泣いちやだめ、ね、緋瑤子。さっきから言う通り結局私達はお互に女性なのよ、女は所詮は男と結婚するのが自然なのよ、ね、わかる?——だから私たちの愛なんてそれはいつまでもいっても少女趣味なのよ、ね、緋瑤子、もう泣かずに大人になって頂戴、お父さまやお母さまの仰言る通り結婚してね、私、淋しくってもいゝの、喜んでお祝いするわ。」

よし江は緋瑤子の背をしっかりと抱き締めながら彼女の耳元で囁くように、併し一言一言強い調子でこう言った。

「いや、いや、あたしお姉様にお別れするな

んで死んでもいや。」

「だめ！ そんなこと言っちゃ、私だって緋瑛子に別れたくない。いゝえ、緋瑛子を他所の人の手に抱かせたくないんだもの、それをじっと忖えているのに、ばか！ ばか！ 私まで気が狂いそうになっちゃうじゃないの。」
二人は再び抱き合せて熱い熱い接吻をしたまゝいつまでも離れようとしなかった。

よし江と緋瑛子とは女学校で同じクラスだった。しかしよし江は早生れなのと、胸を患って一年休学したことで緋瑛子より二つ年上だった。級友としての交際から、女学生らしい感傷的な同性愛に進み、卒業後も、映画に、音楽会に、散策に、いつも二人は形と影のようであった。

緋瑛子の母親が病後の静養のために蓼科高原の貸別荘に転地してから、二人もよくこの別荘に出かけて幾日か過ごすようになったが、去年の夏は母の病氣もすっかり快くなったので別荘は若い二人のために提供された。

二人はいつまでも少女ではなかった。男役は無論よし江である。真夏といっても夜は肌寒い高原の別荘の一間に展開された情痴の世界は、夜毎に深刻さを加えていった。

酌めども尽きぬ甘酒に陶醉し切った二人

は、どんなことがあっても異性との交渉は持つまいと心に決め、死ぬときは一緒に誓い合った。

処が去年の暮になって緋瑛子に結婚話が出たのである。彼女は言葉を左右にして必死に拒んだが、彼女の両親はもとよりよし江との仲など知るよしもなく、唯娘の我儘な気持とのみで、その話を進行させつゝある仕末だった。

緋瑛子はもう自分独りで頑張り切れない処へまで追いつめられてしまつて、今日よし江の勤め先へ電話して彼女を呼び出し、総てを話して相談したのだった。

「来る時が来た」とよし江は思った。そしてふと「緋瑛子を殺して死のうか」と考えた時、彼女は異常な興奮を覚えた。

母親を異にした彼女は、何かにつけて強くならなければならぬと自分を誡めていたことが、表面彼女を快活にさせていたが、心の中ではいつも孤独を感じていたのだった。その上、彼女の胸の病氣は決して癒ってはいなかった。「あの可憐な緋瑛子を思う存分に弄んだ上、殺して私も死ぬ、そうだ、刃物で思い切り惨酷に殺して自分も切腹して」とそんな衝動に駆られた。だが「いけない、そんな

残酷なこと」とすぐに彼女の理性が、こうした残酷性をおさえつけてしまった。そして緋瑛子をいろいろになだめて二人の関係を清算しようと思つたのだった。

この温泉町の名前と同じT旅館の一室——といつても一棟ずつ別々に植込で仕切られてあるバス、トレイ付きの建物である。

二人はせめて今宵一夜思い切り名残を惜しまないと、この旅館に泊つたのだった。連れ込み専門といつてもいゝこうした旅館に、この二人連れは女中の目を見張らせた。しかし物馴れたよし江は、余り歩き廻つて疲れてしまったから静かな処へ泊りたいのだとさり気なく快活な口調で言つて、女中に心付けまでしたので、殊更に奥まった別棟へ案内されたのだった。

二人は部屋に付いている風呂に入り浴衣に着かえた。食事を簡単にすませた後、二人は次の間との境の襖を開けて見た。赤い友禅模様のおかしき布団ではあったが、女同志なので女中が氣を利かせて二つの寢床が部屋一杯に敷かれていた。

「素敵！ 畳がまるで見えないわ」

緋瑛子は、これから繰り展げられる情景を

思い浮べてにっこりした。枕元の朱塗の行燈形のスタンドが柔かな光を投げて、床の上に坐った二人の影を大きく壁に映している。

よし江は物も言わずにいきなり緋瑤子を抱きしめた。そして熱い唇を彼女の唇に押し当てた。二人は抱き合ったまま緋瑤子を下に倒れた。浴衣の前が乱れて下着の裾から真白な脛から太股まで露わになった。

よし江は左手を緋瑤子の頸にからませたまゝ、右手だけで自分の浴衣の紐を解き捨てた。下にはパンティの外、何もしていない全く素肌だった。

「緋瑤子！」

と一言、同時に頸に巻いていた左手を放すや否や、今度は両手で緋瑤子の細紐を解き捨て荒々しく浴衣の襟を左右へ掻き開いてシュミーズの上から、むっちりとした両の乳房を平手で押さえ、唇を合せた。

「お姉さま、早くいつものように——」

よし江の手は、緋瑤子の乳房から離すと、そろそろと滑らすように胸からお臍へと撫で下ろしていった。

「お姉さま、一緒に死んで。緋瑤子、お姉さまと別れて生きていかれないの。ね、お姉さま御願ひ、一緒に死んで。緋瑤子を殺して頂

戴！」

どれ程時が経ったか、思ひのまゝに快楽に耽った後、緋瑤子はよし江の体に獅噛みついたまゝ、呟言のようにこう言って身悶えした。

よし江は無言でじっと緋瑤子の体を見つめていたが、その目は異様に輝いた。

「死のう。ね、緋瑤子」

よし江は緋瑤子の手を軽く払うと枕元に置いてあった彼女のハンドバッグを引寄せて中から一挺の西洋剃刀を取り出した。

「あ、お姉さま」

と緋瑤子が目を見張ると、

「知ってたわ、あんたがこんなもの持って来たのを——死ぬ覚悟で出て来たことよく知っていたわ。可愛い、緋瑤子、さ、こゝで一緒に死のうね。」

緋瑤子は無言で肯いた、目にはいっぱい涙をためていたが、それは悲しみの涙ではなく悦びのそれであった。

よし江は剃刀の刃を起して、その青白い光をじっと見入った。

「切腹」と心に叫びながら、それでも緋瑤子に向って

「緋瑤子、自分で死ねる？」と尋ねた。

「ええ、でもお姉さま、どこを切るの？」

「あたし？ あたしはここ。」

と言いながら、よし江は左手でゆっくりと自分の腹を撫で廻した。

「まあ！ お腹を？」

「そうよ、緋瑤子がいとも撫でてくれたこのお腹を切るの、おへその下をぐっと一文字に切るの、そうして腸を流し出して血塗れになって緋瑤子に抱きついて、のたうち廻りたいの。」

「お姉さま、私もお姉さまのするようにして死にます。」

緋瑤子は剃刀を右手に取るや否や、いきなり叩きつけるように左の下腹へ突き立ててしまった。

「あ、あつ！」

「緋瑤子！」

よし江は緋瑤子の体を後抱きにかゝえた。

「お姉さまお乳押えて、お腹を押えて——」

よし江は言われるまゝに右手で緋瑤子の右乳房を、左手で剃刀の突き刺さっている下腹の太股の付根のすぐ上にぐっと押えた。素肌と素肌の間を通う温みと押えた手の甲に傷口から流れ出した血汐の生温かさに、よし江は言い知れぬ悦びを味わいながら肩越しにじっ



と緋瑛子の下腹を見守った。頸を捻じ向けてよし江の顔を見上げた緋瑛子は、
「お姉さま、私が切り終えたらお姉さまもすぐ切ってね、きつとよ。」
と言いながら剃刀をぐいと臍の下まで引廻した。刃は意外に深く入っていた。
「うっ、うむ」

く御覧、私も、私も。」
剃刀を両手で持って、刃先を斜めに諸手突き、刃は左下腹に二寸ぐらい一気に突き刺した。激痛の来ないうちにと時を移さず右へ掻切ろうとしたが、刃が深すぎて引廻せない。仕損じてはと一旦刃を引抜くようにしてそのまゝきりきりと臍の下二寸のところまで、や

襲い来る激痛に
泳えかねた苦悶に
顰めた眉や齒を食
いしばった口元は
美しいだけに一層
凄惨な表情を見せ
た。

「早く、もうだめ
お姉さまも——」
よし江は緋瑛子
の手から剃刀を攬
ぎ取るようにして
腹から引き抜い
た。血は一度に吹
き出してよし江の
腕にまでしぶい
た。

「緋瑛子、ほらよ

ゝ斜め下へ一文字、左の傷口からはどくどくと間歇的に鮮血が迸り、灰色の腸がぶくりとはみ出して見えた。

「緋瑛子、見ていてよ。」

「お姉さま、嬉しい！」

緋瑛子は鮮血に塗れた手でよし江の腰に抱きついた。よし江はもう右へ引廻すだけの力を失ってしまった。気ばかり焦っても手が痺れ、ともすると目の前がぼっとかすんで来た。はっと気力を取り直し、剃刀を両手でぐいっと梃子のようにして臍まで切り上げた。
「うわっ！」

という叫びとも呻きともつかぬ異様な響きが咽から発せられると剃刀をぱっと抜き捨てゝ腰に抱きついたまゝうっとりとなつた緋瑛子をぐっと引起して抱きしめた。

「緋瑛子、さ、しっかり抱き合って——」

「お姉さま、抱いて——」

二人共もうはっきり声にはならなかった。白いシーツを真紅にそめた鮮血の中に、犇々と抱き合ったまゝ二つの肉体は、やがて白臘細工のように動かなくなったが、よし江の腹から露出した腸だけが無気味に蠕動をつづけていた。

(材を昭和九年四月三十日東京朝日新聞所載「同性愛情死—綱島温泉で」に採る。)

ボクの責め方

(浮気に対する罰責めの巻)

宝塚 二二三 夫

四 馬 孝・画

さて、今回はボクの女責めの内、浮気、姦通等による罰責めである。勿論、刑罰的なものではあるが、こゝで云っておくことは、そのリンチが一部の人の考えたり、空想的期待であるように、惨忍性の傷害であつたりするような不可能事例ではない事である。あくまで事実である点をよく飲込んで玩味して頂きたい！ いとも簡単に梁にキリキリツと吊り上げて、三日三晩の責め折檻に……等というような事は出て来ないから御諒承願いたい。

成程、斯道のマニアの内には、嘘でもよいからヒイヒイ声の連続を希望される方もあるかも知れぬが、ボクのこの書の中からは、

事実以外(中には希望的空想の描写文体も少しは出るだろうが)何も擱み出せない代り、女の心理、そして女の賞玩方法や女責めの参考になる点があつてほしいために、むづかしい各種の批判に対しても一笑に附してペンを進めているので、文句のある人、好まぬ人は読まずに居ればよいのである。テニオハ文法や文学論者はボクへの銚先をトニー・谷へでも振向けて、汗でも流して頂きたい、ハイ。

先ず、浮気篇のナンバー・ワンは、一番手近な小間使いの秋子であり、その相棒となつたD映画ニューフェイス当選者、元SKの、今はボクの紹介でMキャバレー劇場でステー

ジバレリーナをして、生活費のアンバランスをボクによって援けられている美智子(二十才)(オール読物美人コンクールに掲載)そして現TSKのみさ子(十九才)とのこの社会特有の伊達の張合いを利用した二人責めの面白さであろう。そして昨日、今日のホットニュースとして問題のたか子の浮気、それ以上の事件である。で、この三人とたか子のお仕置を浮気篇の代表として発表する。

姦通篇には代表者然として久呉よし子(二十三才)某二号夫人。滝外ふみ(三十才)人妻。小加居京子(二十三才)人妻。等があるが、この浮気、姦通の両篇とも多美子の待合

旅館内を主としたものは別である。何となれば、それは余りに多種多様の材料過剰であるからである。そしてそれらは最後を飾る絢爛たるフィナーレとして、ズラリと二十数名の名が列んでいる。

洋裁生のアルバイト？ ズベ公のズベ振りお玄人衆の御遊び？ 事務員様のお小遣いかせぎ等、それ等は総てボクには浮気利用の責めの良材であるから、一括上程という所か？ こゝで前に約束した五人差の類別も敢行する。浮気せぬ女といえば先ず秘書の松本、浜江令嬢の二人位のもので、後の七十数名は殆んど判然と断言は出来ぬものばかりである。

さて秋子であるが、これは漫画ミッキーマウスの相棒のガチョーと云ったもので、公休の翌日でも帰宅して来るのを引捕えての泊り込みの窮命と責問に、ボクのいわゆる泣き柱（最近造作した洋風和室の四帖半の中、半畳一角にあるもの、これは大工が柱を抜くのは感心せぬと云うので、上棚付の三・五角柱で、この他、事務室の観念柱、私宅のベツドルームの文弥柱、縁側の晒し柱等のある事は前述済であるが、偶然出来たこの柱はこんどの冬は堀こたつの一角にあるものとして、予期せざる期待ものである）へ、外出用の服の

まゝ立縛りする。と早速、

「イイツ、角い柱やから痛いナア……………」
御主人エライもんこしらえたナア！、アッ、
イッ……………」

ともかく第一声からガラ／＼お秋である。

黙っていると細い両脚も、そとわのまゝ踏張る女。

「やかましい！ どんな責め方してやろう」
「どうなと、どっちみち泊って来たのが悪いのやから……………」

こうした罰責めに前戯的愛撫やキス等がある筈はない。ボクの手は秋子のブラウスの胸ボタンを外して胸をかきわけける。これは腰縄だけにする理由の最大のもので、柱のうしろへ廻して縛った両手の指はバラ／＼に空を掴んで反応的にもだえる。

「アーン、アーン」と不貞腐った悲鳴をあげる秋子。そしてそのスタイルがいかに本能のアクションとは云え、低級な物腰、口調なので、つい新しい小間使兼秘書を必要とするのを、これでは全く下女秋の責めである。あごを出してガーガーがなり立てる下素っぼさは服を着せていてよい加減である。

「朝っぱらからイヤーン、なにもこんな事して来えへん！ フンフムーツ、アーン！ やめ

てエー、いやムッ」

「やかましい、それより白状するまでやめんゾ！」

「御主人、勝手にきめてるんやもの、もう勘忍……………」

「もう云うな、聞かん！」

秋の相手たるや場末のキャバレーのドアボーイらしいのである。ところが相手には問題にされていけないので、大したものではないのもホントらしい。

さてボクはこの秋子を余り好むスタイルではないが、素裸に剥くとせめて縄打だけでも折檻らしく凄くと考え、麻縄で高手小手首縄と本格的に縛り上げ、しめ上げたら、

「御主人、無茶や、勘忍してエナア、もう」
いつもに似合わぬ反抗的な手つきで、縄目の十指をシツカと握りしめている。小手の縄尻を引き上げる様にしめ上げつゝ、

「サ、行け！」

「どこへナア？」

「一々文句云わず、サア」

肩先を小突いて一歩前に引立てゝ、ボクのベツドルームへ、丁度四畳半の真中の辺なので、少し不安だが炬掛けの吊環に垂れた鉄瓶鎖に小手尻の縄目を鎌型のそれに引掛けて、

膝立の腰をおろせぬようにすると、今度は立ちも出来ぬようにキビス立の足首を縛り合わすと、炬縁の前にドツカとあぐらをかいて秋子の正面に座る。これで折檻ポーズは出来たわけである。

「ものすごい恰好さして……イタイナー」

目を細く唇かしさにまばゆそうにパチ／＼さして、唇を心なしか少しゆがめて、許しを乞う甘え口調で……。

「そんな甘え声出しても今日は許さん」

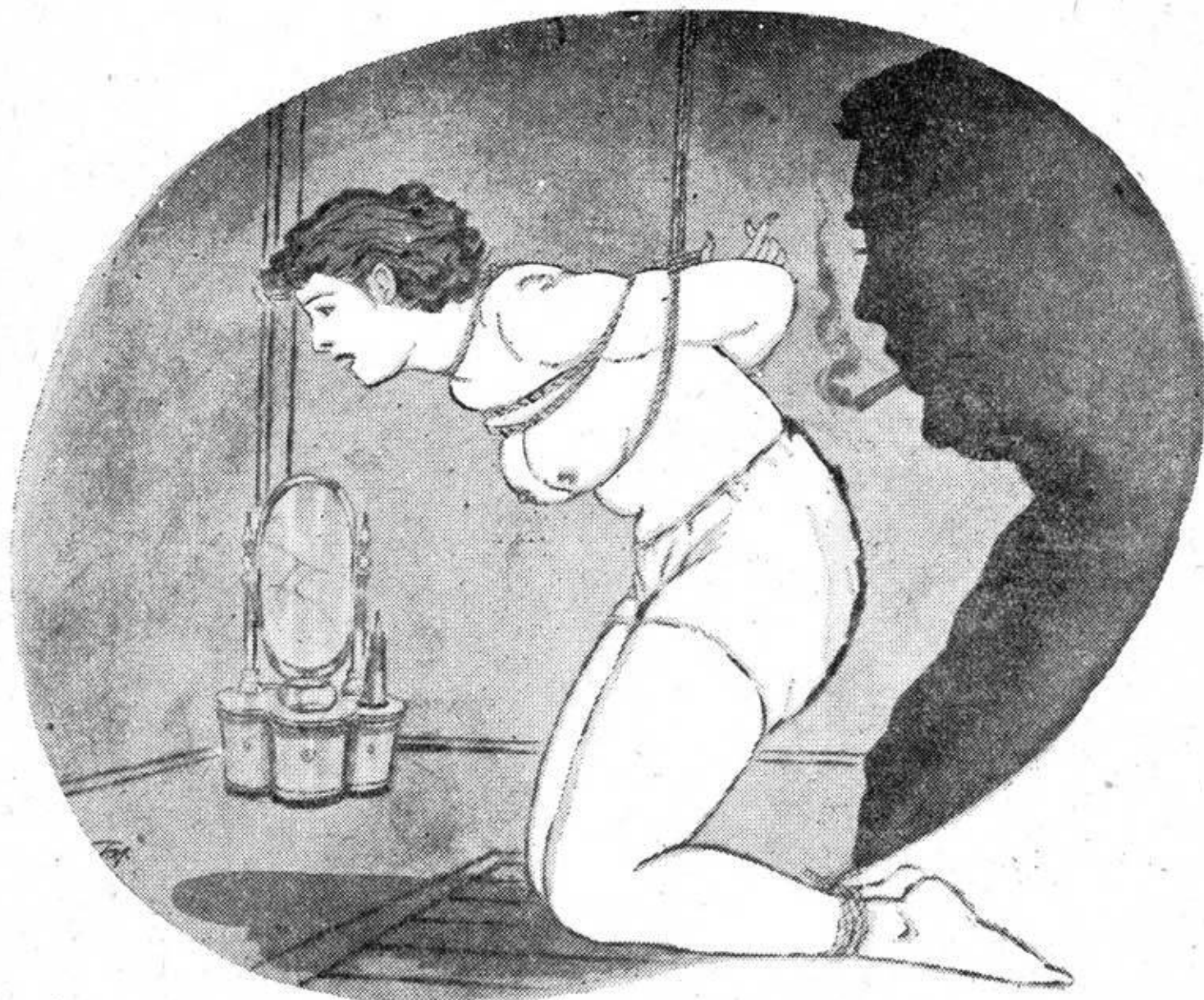
「勘忍……、昨日行っただけど留守やったんで、お母さんところへ帰って泊っただけやのに……」

「ウソ云え、ホントの事云わぬと足の裏くすぐるゾ！」

「ホント……、御主人、そしたらウソ云ったらえエの？」

この責め型の名は考えていないが、君江は、

「又炬ぶち吊りでしょう、残酷ネエ」と云うし、多美子は「酔



月流」だと云って、絶好のものだと云ってい

るが、ボクはそう大した責め型とも考えては居

ない。然し多美子に云わすと、部屋の真中で四方から見られる素裸体であり半吊りで、仲々許してもらえないし、首縄も上下に締められた感じであり、又前後から見られる上に、両足首の縄目は一切の自由に最後の止めを刺している上、全身何処へでも責め手が延ばせるので、唇かし、痛し、苦し（つらいこと）の三段構えだと云っている。考えると成程とも思う。

さて秋子としては常々の如く抱擁、愛撫、接吻、と前戯よろしくの責めでないので余程身に泌みて来たらしい。

「ギヤ！、ギヤア」と、あひるのよがり泣もなく、責め一本に「御主人ッ！」と甘えるより泣声で訴え出す。

「何だい仏頂面して、尻でも引っぱたいてほしいんか」

「何とかしてエナー」

「どうするんだ、こゝのしめ方

がまだ足らんのか」

「アーン、もう勘忍してエ、もうしびれて……」

仰向き目を閉じて喘ぐ秋子。

「昨日はホントに何もしえへん、逢ってないもん……」

息一杯にせき込む様に早口でしゃべると、

「ホントに、勘忍してエー」

流し目で、ボクに哀願表情である。

「キットか？」

「ハイ」

この女が「ハイ」と云うのは珍しい。そしてその日は遂にキス一つ与えなかった。

この場合等、多美子の館の時には後章で必ず述べるが、多美子は毒づきながら随分はつきりした責め方をするが、ボクは先ず色気に負けてしまうのである。いずれにしても責めの本調子は、この多美子との協同型まで暫く待って頂きたい。

それはさておき、この女先ず／＼うさ晴し気安めに気兼ねなく責められる女と云うので、ボクには必要な一人である。即ち、サジストだのマゾヒストだのというむづかしい文句拔で、責めたいから責める、と云うことの出来る女は実際問題としてそう手近にあるもので

はない点が、何よりの特長である。この秋子で思い浮ぶのは、先言のニューフェイスと云うか、美智子である。この場合、二人のだからけた運葉な対話も亦一興なので採り上げてみる。この美智子も私宅（今更云うのもおそろしか存ぜぬが、私宅には私と小間使が居るだけで、自宅には母△老母△、妻、妻の義姉とその娘、ボクの愛息△子供△二人の他、上△と下の女中、下男一人というやゝこしさであるので、ボクは孤独性の宅をかまえて既に十数年）に暫時寝泊りさしている時分である。そしてニューフェイスに入選しようとした前後の話をする。

その頃、梅田NHKビル（放送局でない）の四、五階の芸能屋ブローカーに誘惑されかけた時である。秋子の如く無断一泊して朝帰りのチャンス。キャバレーのステージダンサーをしてゐるから……と云うわけでもないが日頃からボクの膝を全くソファアの如く、いとも簡単に乗り掛けて来て、チョッピリ伊達気の内甘い来たるこの美智子め、ものあき性と云おうか、D映画へ入社する日に自信なといと帰って来る。SKでは、籍を抜きもせぬが、出もせぬ。一度はスターの代役相勤めたが、後続かずといった向意気強そうで実は気の

の弱い、やはり見かけによらぬ善人であり、自分でアプレを認めている所謂アプレ娘。たしか余り寒くなかったが、赤いオーバーをガウンして、赤い靴に藍色のアクセントのあるナイロン査下、純白丸型のハンドバッグとよろしくスタイル満足ながら、例により澄し込んでむっ／＼りした表情で帰って来る彼女。

私宅、玄関脇の洋小間に入ると、九時前でボクが既にソファアに掛けて新聞から目を離すと、オーバーを着たまゝ真面目くさった表情でボクの前に来て、

「おそくなりましてすみませんでした」

と歯切れよく云うと、すぐにボクのひざに乗つて来る美智子。ボクも言葉より先に両手首を掴むとすぐ後手にねじ上げ、十文字に組み合わせると、

「余り心配さすんじゃないよ、ヤンチャも程々にナ」

片手掴みに持ちかえた片手で、美智子の片頬をゆすり動かすようにして軽くひねる。

「ゆうべはどこで泊った？」

「南部さんところで……、もの凄い立派なお家で、ベッドではとても寝られないのよ、あたし寝られないから、じっと心配して起きていたの……」

「そして、どうだった？」

「何だかはっきりせんお話しばかり……、とても役なんかつくまでは大変らしいワ」

「あたりまえだよ、話しは別の目的にあったんだよ」

「そうかもしれないワ……、けれど……」

「けれど、どうした？」

「……………」

返事がないのでボクがひとしお手に力を入れて、彼女の後手に掴んだのを指先でしめ上げる。と、秋子がノックもせずにお茶を持ッて入って来ると、二人を見比べて、

「みっちゃん、何してたんや？」

「ほっというて……」

「そうやって、たまには折檻された方がよいヨ」

「やかましいお秋、あっちへ行っとり！」

「たすけてやらへんよ、おみつ！ 御主人御食事……………」

と茶目な目をキョトンとむける。この馬鹿さが又よき玩弄でもある。

「ヨーシ、その間立っとなれ……ハダシになつて……括るのは今勘忍してやる」

膝から突出すように降ろすと、

「お秋、覚えていゝや」

と秋に毒付くと、不精らしく沓下を脱いで

白い美しい肌の脚ではないが、血色のよいの

と均斉美の見事な脛と素足を出して、オーバ

ーのまゝ不逞々しく部屋の間へ行って、こ

ちら向いて立つ美智子。ボクの目から見れば

何と云ってもまだ玄人にはなり切れぬ生娘型

だ。一杯、二杯と秋子の給仕でのお茶漬の味

も、これからの責めものを眺め乍らでは落付

けないのが道理。

「どう、おなかへってる？」

と美智子の顔を見——下へ、ボクの気を知

った十指爪先揃えてのハダシ立たされの素足

へと目を落す。両手はタラリと垂れていたが

足の爪先を真赤にしたマニキュアの拇指と

小指がくっきりとボクの瞳から胸の奥、臍の

下までぐるぐると魅入らせる。それと知っ

た彼女、チラッと目を伏せると両手のマニキ

ュアもかくすように軽くうしろに廻すと、

すぐこちら向き、てれかくしで気を散らそう

と甘え声で、

「御主人、ハラペコ、フフッ……」

秋子はそばから、

「今日はおあずけ……」

「お秋のバカ！」

「助けてやれへん」

「イラン！ あっちへ行け！」

二人が口喧嘩している間に、ボクは美智子

に与える折檻責めを考えている。ともかく、

空腹のいら立と感情では彼女の超アブレ型で

はとても責めさえない。勿論、強引に責めあ

げるのはわけないが、それは又のチャンスに

「ともかく食事だ……秋子」

「なんや、御主人はすぐこれや」

と、秋子が不服そうに用意する。

「サ、こゝへ来てよろしい」

と、横斜め前を差す。

「クタ／＼」とジエスチュア／＼よろしく歩いて来るが、手をうしろに組んだまゝで腰かけ

ると、長い黒いまつ毛をパチ／＼さしたステ

ーシ表情よろしく、哀願の目（マニキュア

のことらしい）

「わかってるよ、虚栄の爪を延ばした赤鬼だ

よ」

「勘忍！」

「ボクがO・Kと云った時にうんとめかした

らいゝんだよ、わかった？ 勝手な事をした

時はいつも失敗だ！」

「……………」無言のうちにウンとうなずく、

「いただきますッ！」

現金なアブレ娘だ、早速パクついている。

「ともかく、あわてずチャンスを待って、今度こそは落付くんだよ。今の仕事は一日も早く切上げて、ナッ！初めは大部屋でも辛抱するか、又元のレヴェューへ戻るかだ、思い切ってお嫁に行ってしまう、第一、お母さんがよろこぶよ」

「イヤ！まだ五年位は早いよう」

「彼氏をこさえるのは別か？」

ウンとうなずくアブレ美智子。

「彼氏をこさえるのはよいが、誰れかれなしに泊り込んで……、ボクはどうなる？」

「勘忍、だけどあたし、御主人に砂かけないわ……」

「わかるもんか？」

「ウソだったら、わかるワ」

「あとでからだに聞いてやる！」

彼女は小さく小さくうなずくだけで、一寸置いた箸を又、動かし初める。食事をするにもオーバーを着たまゝの美智子。エチケットまでもアブレ型。

「ごちそうさま——」

と満腹してからオーバーをぬぐ彼女。キツチリ身についたグリーン系の男、仕立の背広



型のツーピース。良く云えば将にニユールツク。ボクの好みから云えばコステュームから色気の出ぬ服で、一刻も早く剥き脱がすべきだが……と考えていると、

「あゝ、ねむくなった……」

と茶目な眸をボクに向ける美智子。

「今にねむけ醒し、してやるから」

と云ったものゝ、最初から素ッ裸には剥がささぬだろう彼女。秋子もいることだし、本縄をかけるにしても少くとも二度掛け、三度

掛けでないと完全な縛り上げも出来ぬだろうしと、立ち上って上衣をぬがしにかゝる。

「おとなしいナア、ウン！」

「今日は負けやもん！」

口をトンガラしてペソをかく美智子。

「泣くナヨ」

「泣くもんか、御主人にいじめられるの今更じやナシ、一寸した事でもねじ上げる悪趣味があるもん……」

全く赤ちやんが服をぬがされるように、無抵抗一点張り。上衣、シャツ、そして素裸に剥ぐ時の用意にとシュミーズの肩掛け紐をぬがすと、やはり瞬間的に両手は胸を押える。

「あるべきものがあるのに、と云ってるじゃないか？」

「でも場所がちがう、フフン……」

さすがあやまりも抵抗もせぬ、その両手首を掴むと、観音開きよろしく両方からねじ開いてグイッとうしろ手にしてしまふと、高手小手逆十字に手首を組合わすと、前かがみになった彼女はやはり無言のまゝ、じっとしている。

「秋子、縄持って来い！」と云う間もなく、

「何？」と出て来た。

「アッ、もうやられてるんやナ」

「お秋はだまって！」

「ハイ、ハイ」と消えると、次の部屋の洋服ダンスから麻紐（太くないから）を二、三本持ってくる。

「サ、かけよ！」と美智子のからだを振り向けて、背を秋子の方に出す。

「それみいナ」と秋子は縄の端をボクの手つきによりしく美智子の手首に不器用ながら巻きつける二巻。それを引き受けて、ボクの好みの通りのネジ廻しネジ上げの触覚美味から今度は縛りしめ上げの美味感を自分で味うのがボクの楽しみ。それは箸で挟んで食べるにぎり寿司と手掴みで裏打込で口へほり込むにぎり鮓との美味しさの違いと同じである。

実際、例え三度掛けで本縛りにしても、一人で縛るよりもこうして手伝わして（君枝、多美子なら一層完璧）、即ち、ボクが最初、生肌をねじ上げて掴みつゝ適当な恰好に持つ快感を味いつゝ、基礎縄を命令する通りに一応自由を奪い、そして最後の仕上縄目はボクが得心ゆくように締め上げて縛り結ぶ、と云うのは、とても耐らぬ快さである。その瞬間ボクの縛りへのスタートは、本格的に責めを意識するのである。

さて、先ず細手麻縄による二重掛けで、美

智子の高手小手、首縄は完成する。血色のよい肌の彼女の手首より先は、早くも薄紅く充血して来ている。そして拇指立てゝ握りしめる両手の拇指の爪の血のマニキュアを見た瞬間！ ヤンチャらしい無言の反抗意識も又面白く、更にある事を次の手段に考えついたが、その儘知らん振りで独りほくそ笑む折、秋子があと片付けよろしく、

「御丁寧に首へまで縄をかけられて……」

「お秋のように毎日と違う、黙ってッ！」

「偉そうに云っとるが、今に泣くんとちがうか？」

「一寸目ざましの手初めに、上の方の有るべき処にあるものを出さしてもらおか」

と前へ廻ると、グンと胸を反らして空威張りのようにしている彼女の胸の二本の縄目を乳房の上と下へと分け開けると、キシムように喰込んだ細麻縄の中間へプリン！ と両乳房が、スプリング仕掛けのように飛び突き出る。縄目ありてこそその女責めの醍醐味の秀逸である。美智子の肌合いからして、全くリソゴの半割りを思い出す美しさ。

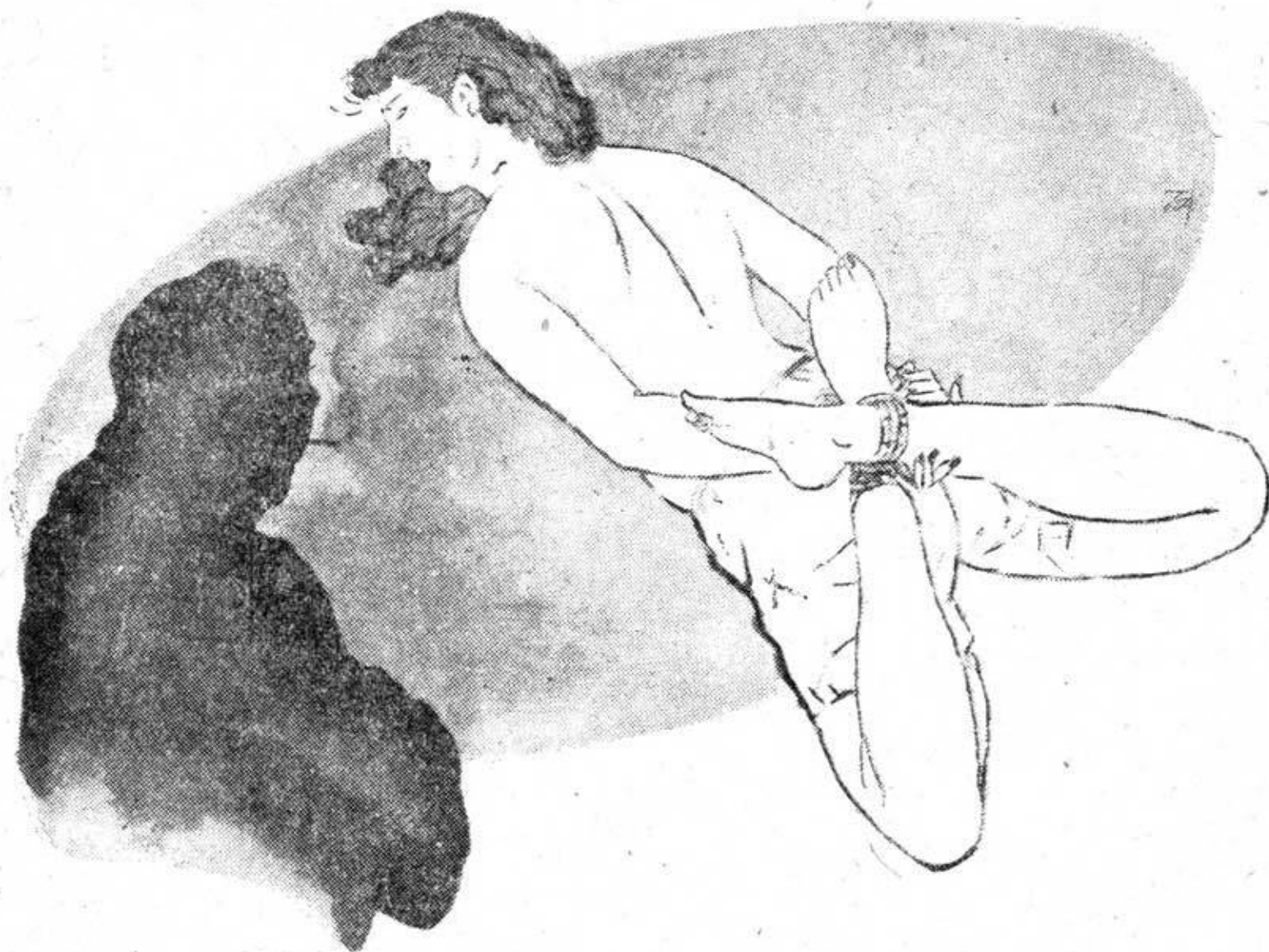
この有るべき処……云々は、彼女がレヴェエ！時代、幹部女優（生徒）と楽屋風呂で出喰わした時、つい前をかくそうとした時、その

先輩スター連から云われたのだ、と彼女から話した事である。

さてこゝで、さすがの彼女も、

「イイツ、さめますッ！ 御主人ッ！」

たったこれだけのセリフでも、その場合ボクには雑多な含み意味に受取れる。洋小間からベッド・ルームへ引立てるにも、彼女ボクの胸へ背をすりつけて来るが、背中の中両手が邪魔になって、いつものペツタリ引付く甘え振りが出来ないまゝ、ボクに押されるようにペタペタ歩きでじらして来る不敵なアブレ娘だ。いつもなら乳首にでも吸付いてやる前戯を初めるのだが、然し、これとてもやはりスカートを残して置いたボクの計画が的中したわけである。これはこの場合、又彼女だけに限らず、このスカート残しの引立ては、松本にしろ、新井正子にしろ、君江にしろ、郊外ですら出来る責めの可能範囲であり、又ボクの道すがら見た責場風景の内にも、京は東



山、元、久原氏大庭園の柵の内、神戸水源池横でも、尚他にもあり。(勿論、本縄かけではなかったが)

さて、浮気責めでは、ボクの方こそ辛抱してベッド・ルームに立たす。すぐスカートへ手をかける、そしてシュミーズ、ズロースと一気に引き降して足からすくい取る早業、と云うよりも興奮境内言葉なくペタリッ！と坐ってしまふ美智子。やはり一步おそい感。本能的に前かゞみになるため首縄は目に見えて締って、ピンと背中に弓づるの如く手首へと張っている。さすがのアブレも顔をうつむきながら赤くして、前戯なしの責め——には誰しも閉口するらしい。急に深刻なからだつきで全身をさらし出すとかたくする。

一声、悲鳴でもあげたいところへ現われたノールスの秋子、「フッ」とボクと美智子を見比べてくすぐったい馬鹿笑いで歯ぐきまで出す。気を取り直した如き美智

子、

「お秋、あっちへお行きッ！」

と毒付くと同時に、

「イイツ、イッ！ 御主人ゆるめてエー」

と渾声を出す美智子。秋子消える。

「そんなくそ真面目な坐り方するからだヨ、折檻はこれからだよ、フフフッ……」

ボク自身、ボクの笑い方が薄気味悪いのを自覚する位だから、まだ大丈夫だ！

「じゃ、どうすればいいの？」

一寸気がゆるむと箱根越さぬ江戸ッ子である上に、なまじっかなステージ句調を出すから、又にくたしくなる。

「こうするんだよ」

ボクの方でもセリフもどきで、早くもうしろから抱えるようにして、

「膝くずして、女あぐらをかくんだ！」

「こう？」

まるでステージのバレエ型よろしく、片足ずつ前に廻して軽いあぐらになると、やはりボクの手助け不要とばかりに前かゞみになる。ボクの目の下、背中の上にある首筋から吊った組合わされて喰入った手首と、空を掴む十指に散った桜桃のマニキュア^{マニキュア}。こゝでさっきの次の手段にはくそ笑む術とは、勿

論、エビ責めであるが、問題は足首にかける

縄である。アブレ娘の深紅の爪のマニキュア

ーにはビニールのコンジットチューブ線、と

は我れながら考えたり。色はやはり赤。ビニ

ール線を壁際の洋服ダンスから出して早速、

美智子のあぐらになった脚の足首を組合わし

て重ね、くるくるくると三、四度巻きつける

とぐいっと締め、更に前後自由を束縛のため

縦巻二重で十字搦めにする。美智子はパチク

リと目をしばたきウンともスツとも云わず。

マニキュアの大きい拇指をピンと反らすの

は、やはり痛さにたえるためだろう……

「スゴイもので」と、不自由そうにしてボク

を見上げる。美智子のような経歴になると、

ヌードに対する感覚が違う事は合点行くが、

このアブレは少し程度がひどいようだ。

ボクは興奮リズムに乗ってビニール線を継

ぎ合わせて、この赤いゴム状の柔らかい細い

線を首ッ玉にかけて、背中を押しつけるよう

に膝で押えながら首ッ玉のうしろで結ぶ。他

の女なら大変だろうが、職業柄大した驚異的

苦痛でもなさそうだ。然しエビ責めは完成し

た。

「御主人、手や足よりも背中が痛くなって来

「今のうちに早いとこ、昨夜の云うべきこと白状しておかぬと、いくらでも責め手を考え出すゾ！」

「もう沢山、辛抱しているけれど、どんな恰

好にされているくらい、自分でわかっているの

よ、御主人」

「わかってこそあたりまえだ、わかっていたら云わんか？」

「云うことないわよ、さっき云った事だけなの、御主人に云わずに泊った事でバツ受けて

るのよ、ホント、沓下一つぬがなかったの、

信じて……」

「じゃ、キスは？」

訴えるように、むりに仰向けていた顔がうつむく、

「それみよ！ 返事出来ないじゃないか！」

アブレらしく、急に辱かしくなった思い入

れよろしく、丸い背中の上の桜桃をビクビク

動かして、小さく（そうより動かぬが）ゆす

り、ゆすりつ、

「御主人、何でも云います。この恰好、勘忍

して……」

「勘忍してやるから、このエビ責めの恰好を

自分で云ってみよ、どうされているか云える

だけ云ってみよ、セリフだ、フフフッ」

「美智子、裸にされて手も足もくぐられてエビ責めにされています……」

こゝらあたり松本に云わすと、物凄くボクの胸をえぐり取るようにくわしく、マゾヒストらしい句調で長々とボクをのぼせ上らせるのだが（いずれ述べる）

「それだけか？」

「勘忍、早よ、あとでいくらでも御主人の云われる通りするッ！ 早よッ！」

泣き声を出し始める。ねぼけと気疲れで、今頃になって自分の股間をのぞくようなエビ責めの凄さがわかって来たのか、それともアプレのアプレたるどころか、ボクには不可解であるが、両方であると考えておく。ともかく首ツ玉のうしろのビニール線をほどこいてやる。

「イイツ、イタッ」

どうやら背骨と腰の痛さらしい。

「早よ、この恰好から許してエ」とせき立てると、自分で横倒れになってしまって腰を延ばす。両足首の十字搦めで片膝を開け起すスタイルのまゝ胸を張って「く」の字型でおさまる。エビ責めの苦痛による誰しものあえぎである。松本のように辛抱を甘受するまでには、まだまだであるこの美智子。ボクはすぐ

俯向けに転がし直すと、考えあつて高手小手のうち首縄も解いてやる。ぐたっと両手首は肩先への突上げから背腰のところで降りると、美智子も大きく肩息一つする。

「キッスだけか、何度したのだ？」

「チヨットだけなの……」

一息入れてはき出す口調で、片頬べチャンコにしたまゝ、ぐんなりとする。

「又、半端な白状だナッ！」

ボクの次の責め手は、うしろ四ツ手縛り、どうしてこうしてと説明するまでもなく、組合わして縛ってある両足首のエビ責めの縄を今度は膝を臀へと折曲げる。腓脛は全くヒラメかカレイの如くべチャンコになったぶざまな恰好で、手首の縄目へと継ぎ縛り合わせるので、これ又ビクッとも動けぬ緊縛の一法。

途端に爪の桜桃が二十ヶ寄り集まり、更に真赤なイヤリングまでが、これ又真赤なビニール線の縛り目と合致しての新感覚の趣あり。

「又、動けないの、チットモ」

と投げ出すように云う。

「何とか云わんか？」

「ホントニ、チヨットだけなの、いくら云ったら信じて下さるの？」

どうやら本気の泣声になって来る。と思うと泣き笑い声になって来て、

「御主人くらいにビシビシした人が他にあったらナア——」

「浮気を本気にするか？」

「フフフッ……浮気するなら、こんな姿にされて辛抱しないわヨ——」

「美智ちゃん、いつのまにマゾになったんだ？」

「マゾって何？ こんな残酷な事する事？」

「されてよろこぶ事だよ！」

「イヤヨ、誰がよろこんでなんか。バカにしてるワ」

今度は又、アプレ娘に早変わり。

「早よう、許して、もうイヤ」

後ろ四ツ手では、手足の指先をピクピク動かして胴を少し横ゆすりする外、全く動けぬながら足の指をピクピク、手の指は開閉して二十の桜桃が一齊に踊り跳ねるようにして動く。

ボクはくわえた煙草を灰皿に押しつけながら、近寄った。どうやら責めも終りになったらしい。

（未完）

懸賞入選作品〔第三席〕（賞金壹萬圓）

陰^{かげ}

の

花^{はな}

片矢

薫

—

正午近く、郁枝が炬燵に入って編物をしていると、玄関の横手に取りつけてある郵便受けの扉がちりと鳴った。咄嗟に旦那の塩山からだ、とは思ったのだが、よく落着いてみると、塩山は医学会の研究発表に出席するとかで昨夜大阪へ発ったばかりである。

だがさし当って塩山以外に今の郁枝に用事のあり相な心当りは全く無かった。昔の朋輩からかしら、とも思ってみたりしたが、塩山に囲われて以来、昔の仲間ともさっぱり往来も絶えてこゝ二、三年来そうした手紙などついぞ舞い込んだこともなかった。

それ以外に若し来るとすれば、鳥取の田舎に住んでいる老いた母親ぐらいのものであるが、それとてつい一週間程前に貰ったばかりである。

「一体誰からだろう？」

郁枝は独り住むようになってから、すっかり癖になった独りごとを呟き乍らゆっくりと炬燵から起き上った。

玄関へ出てみると、郵便受けの小さい木箱の中に矢張り白い封書が一通落ち込んでいた。早速裏を返すと、急いで書いたのか、平生の塩山とは凡そ似合わぬ乱暴な字で、麻布六本木の住所と塩山の名がしたゝめられてあった。

「なあんだ！」

大阪へ出掛けなかったのか、と先刻からあれこれ迷っていた自分が可笑しく、塩山からの手紙ですっかり嬉しくなった郁枝は封書を振り上げるようにして独りはしやいだ。

文面は簡単で、都合によって大阪への出張は取止めたこと、今日は学校の休暇を利用して妻が子供を連れて熱海へ出掛けたこと、そ

れで今晚は例の話を真剣に進め度いから是非こちらの自宅まで来て欲しい、ということが書かれてあった。そして最後に申訳のように患者が多くて手が空かないので、看護婦に代筆して貰ったから悪しからず、と付け加えてあった。

だが郁枝は読み終ると、一瞬何かしら得体の知れぬ不安のようなものが、胸の中をよぎって通りぬけるのを感じた。平生の塩山とは何処か違った感じが、僅か二、三行の手紙であるが、塩山の体臭まで知り尽した女の勘として、郁枝の頭にぴーんと響いたのであった。何処か違う、何か違う、と郁枝はしきりに心の中で呟いた。

だいいち塩山が郁枝を自宅へ呼ぶなどということは未だ嘗て一度もないことであった。郁枝との仲を家に知られることを極端に恐れていた塩山が郁枝を自宅へ呼ぶような危険を敢て冒すということがおかしい、そうであってみればこうした手紙を看護婦に代筆させること自体が既に塩山らしくない。

郁枝は手紙を手にした儘、素足の下から縁先の底冷えのする寒気がじわりじわりと這い上って来るのを意識し乍ら思い惑っていた。

だがそう云うものの、塩山以外にこうした手紙を書く者の万に一人も居よう筈が無かった。然も誰も知らない郁枝の住所である。塩山以外に誰も用事のない郁枝の身躰である。郁枝という存在が全く隠された塩山一人の秘密であってみれば、矢張りこの手紙は塩山からのものだと思わないわけにはいかないものであった。若し万一、塩山でないとなれば、まあなんという酔興な神のいたずらであろう。

郁枝は縁側を離れて居間へ帰って来ると、部屋の片隅の簞笥の抽出しから、アンプルの箱と注射器を取り出した。下らない不安など呼び起したのは、きつと薬が切れた故かも知れないと思ったのである。

る。

白い腕の裏側にくっきり浮び出した青い静脈から、薬が血管の中に融け込んで行くと、郁枝は眼を閉じた。快い陶酔感と、鮮かな爽快感が入り交って、郁枝の肉体の中で、何かしら逞しい力強い世界が生れ出るようであった。

やがて眼を開くと、郁枝はもう一度手紙を拵げて見た。気を取り直した故か、今度は便箋の上を走っている文字の一つ一つが先刻と違って変って塩山らしい生々しさで郁枝の胸の中に飛び込んで来るようであった。矢張り塩山なのだ。たかゞ字が違う位のこと、何という莫迦な取越苦勞をしたものであろうか、郁枝は炬燵の上で丁寧にいくらか皺になりかけた一枚の便箋を手で繰返し繰返し延ばした。

「そう云えば——」

郁枝は再び独りごちた。

例の件と云えば、塩山と郁枝と二人切りしか知らないことなのだ。二人以外に誰がこんな大それた秘密を知っているよう。

それにしても——。郁枝は再び思った。看護婦に代筆させるなどとは何という不誠意なことであろう。それが二人切りの深い帷の中に包まれていればいるだけ、郁枝はそっと大切に藏って置きたかった。塩山は何気なく考えたのであろうが、郁枝にして見れば、他人に窺い知ることの出来ない甘美な二人だけの世界へ眼に見えぬ何者か、泥足でそろそろと忍び寄ったような大げさな焦立しさを感ずるのだった。

「今晚逢ったら、うんと云ってやりましょう！」

既に塩山に甘え切っている気持が、郁枝を浮き浮きさせて、眼の

前に塩山がいるかのように云ってみるのだった。

窓の外は静かな冬である。今にも雪でも落ちて来そうなしんとした気配があった。障子の明り窓からは、粗末乍ら庭らしい植込みの小松、その向う側にこの家を取り巻く板塀とが、ひっそり佇んでいるのが見えた。

郁枝はその儘横になると、塩山がどこから買ってきた戸棚の上の博多人形を眺めていたが、やがて深々と眼を閉じた。

塩山はつい先頃から現在の妻との間に離婚の話を進めている筈であった。たゞこの話が容易に片附かないのは、妻の要求する慰養料が余り膨大な為であることも、郁枝はよく知っていた。金策がうまく運ばない夜など、疲れ切ったように郁枝にもたれる塩山を、郁枝は心を燃やして抱きしめてやるのだった。勿論足しになるものではないと判って居乍ら、自分はどこかのアパートでも借りて、この家を売ってしまったでもいい、と思ったりしてみるのだった。だがそれを口に出せば塩山がうんと云わないことは明らかだった。そんな時には逆に思い余った郁枝の方が、塩山にもたれて行くのだったが、所詮非力な女の身であることがふと悲しくなるのだった。

然し、今度こそはその話がうまくいったのかも知れない。郁枝は眼を閉じたまま、都合のいいようにも考えてみるのだった。きっとそうなのだ。それだからこそ、大ぴらに郁枝を自宅へ呼ぶ気にもなったのだし、大威張りで看護婦に代筆させることも出来たのだらう。然も一日も早く郁枝にそれを報せ度い為に、妻の留守を幸いに呼び出したのに違いない。とすると、思ってもみなかった妻の座が、幸福な安住の場所が、意外に早く郁枝の許にしつらえられることになるのだ。

郁枝はそう考えて行くと、もうそれに違いないという気がした。独り住居の退屈に馴れて、もうあれこれと物事を思い廻すこと以外に暇を潰す手段のなくなった郁枝は、楽しい想いを次々に拾い上げて、その中に浸って行くのが唯一の慰めになっていた。

急に眼の前が明るくなったように郁枝は眼を開けた。そうとなればぐずぐず出来ないものである。うんと化粧して、うんと着飾って、塩山が楽し相に眼を細くして手を広げて呉れるように仕向けなければならぬ。

郁枝は急いで炬燵の中から飛び起きると、先ず何から仕度にかかっているのか、とあたりを見廻した。

二

開いたばかりの銭湯は、郁枝の前に二人の女が置き忘れられたように、広い流し場にうずくまっていただけで、流石に閑散としていた。湯槽の中の湯も透き通って、タイルの壁にかかった絵模様の琵琶湖の風景も清々しい。郁枝は湯槽の中で思い切り身軀をのぼして見た。塩山と一緒にあってからは、ついぞ考えても見なかった自分の肉体というものを、まるで別の存在であるかのように、いとおしく眺めるようになっていた。身軀というものを塩山に教えられるまで、そうもいとしいものであると思っていなかった自分である。女ではなかったのだと思う。

白い圓筒が、ゆらゆらと波紋を画く湯の下で、陽炎のように揺れて見えた。郁枝は湯槽のふちにそっと首をのせて、もう一度眼を閉じた。

郁枝は三年程前、渋谷のとある料亭で仲居として働いていた。鳥

取の田舎から上京して中谷の姉の家に身を寄せた翌年のことであつた。姉の主人は自動車のセールスマンだと云つた。その頃、姉夫婦は僅か四畳半の居間に勝手と便所とを取りつけた、それでも一軒家と呼べる家に住んでいた。どこかの隠居が余生を送る為になけなしの金で建った二、三軒の家の一つだということであつた。そして隠居はそれ等の家から上る家賃でひっそり暮しているということでもあつた。

義兄の暮しはそれでも相当裕福であつた。セールスマンとしての腕はあつたらしく、生活には自信を持っていた。その故か、随分我儘勝手な暮しようで、酒に酔つて夜の遅いのはとに角として、帰つて来ると、必ず遮二無二姉の身軀を抱くのであつた。変態という言葉は、その時の郁枝には知る筈もなかったが、後で料亭で働くようになってから、若し変態ということが本当にあるとすれば、あんな時の義兄がそうなのだ、と思つたことがあつた。

義兄は姉の身軀を抱く時には、必ず姉に全裸になるように命じた。低いさゝやくような声ではなく、誰憚ることのない、恐らく傍に郁枝がいることも勘定にも入れない調子で云うのだつた。

そんな時、姉は二言三言抗弁して見るのだつ



たが、義兄の見暮と、平生の逞しい生活力とに圧倒されてしまうのか、顔を蔽って着物を脱ぐのだった。姉は身軀のくっつき相な近くに妹を置いて、夫に辱められるのが、どれ程の苦痛であったか、郁枝は今となって見れば堪え難い気がするのだが、その頃の郁枝は何も知らぬまゝ、たゞわけのわからぬ恐怖と羞恥に身軀をすくめて部屋の間隙にうずくまって、早く暴風の過ぎるのを待つより外なかった。

時たま、余りのことに耐えかねた姉が、執拗に拒んだりすると、義兄は、それこそ狂ったように、姉の身軀を踏んだり蹴ったりして拳句、姉が素直に着物を脱いでしまふまで決して止めようとしなかった。

そんなことがあって以来、郁枝はそんな時刻になると、必ず家を空けることにした。義兄が帰って来て、ともあれ寝ついてしまふまで、そこら辺りを独りぶらついて時間を過すのである。そうすることによって姉の苦痛も和げ、自分の遣り切れなさをまぎらそうと考えたのだった。

或る月のよい晩であった。何時ものようにそと家をぬけ出した郁枝は、少しばかり距った墓地の近くの竹垣の前に腰を下して義兄の帰って来るのを待っていた。月は背後にかかって、竹垣の影を弃げた模様は地面の上に落していた。郁枝は立派な会社のスマートな社員になることを夢として上京して来た自分のことを考えていた。だが実際はすべてが夢でしかなかった。おいそれと女事務員に備うような所がある筈もなく、若しあったとしても郁枝のような何の手蔓もない、そして田舎の娘にしか過ぎない女を、余程の物好きでない限り備って呉れよう道理もなかった。いっそ昨日行ってみた周旋

屋の云う通り、料亭の仲居にでもなってしまうのか、とに角早く姉の家を出なければ、姉も自分も耐え切れぬ生活なのだ。何も云わぬ姉の氣持が判るだけに郁枝は胸が押しつぶされるような焦燥に悶えて来るのだった。

と、立ち止った時であった。郁枝は背後からいきなり力任せに抱きすくめられて思わず悲鳴を上げた。

「郁ちゃん、俺だ」

その声を聞くと、郁枝は再び、氣も凍らんばかりに驚いた。義兄の声である。どうしてこんな所までやって来たものか、平生の姉に対する声とはまるで打って変った柔い声ではあったが、確かに義兄の声に違いなかった。

暫くもがく中に、郁枝の体内に生じた恐怖と驚きは、次第に激しい憤りに変わって行った。

「畜生！ 畜生！」

と云い乍ら、姉を犯し、又妹まで犯そうとする、まるで人の氣持を蹂躪して憚らぬ、男の得も云えぬ不逞不逞しさに、郁枝は全身の力で反抗した。

無論強か酒に酔っていた義兄は、真剣に刃向う郁枝の力にはねのけられて、ぐらぐらする上体をよろめかせ垣根の傍に崩れるように倒れた。

後も見ずその場を走り去った郁枝は、その夜から、周旋屋の云う通り渋谷の、「喜楽」という料亭に仲居として住み込んだ。

塩山はその常連であった。初めて逢った時、塩山は友人らしい男と二人連れであったが、何か清潔な感じと、一種独特な匂いで、すぐそれと判る肌合いを見せていた。

「やあ、新顔だな」

四十にやがて届くであろうか、塩山は幾分痩せすぎた顔をほころばせて、わざとらしくふざけるように云った。どうぞよろしく、と郁枝が応ずると、

「好きになり相なタイプだ、この娘は」
とお世辞を云って見せた。

だが、それが万更お世辞ばかりではなかったらしく、その後塩山は訪ねて来る毎に、郁枝を呼ぶようになった。先輩らしい年老いた医者連れて来ることもあれば、助手だという若い医者と一緒にこともあった。時々女連れでやって来ることもあったが、殆んど途中で飲んだ飲屋のお女将らしかった。

郁枝が塩山に好意を持つようになったのは、義兄のような男を見つめて来た眼に、塩山がまるで別世界の優雅な、それこそ本当に頼り甲斐のあり相な、上品な男に見えたからである。

郁枝は従って塩山にだけは、他の男のようにふしだらな下品な真似はして貰い度くないと思った。塩山がふとそんなことを口にする、と、むきになってそれをたしなめ、然も自分からは決して、塩山の持つ上品な育ちといったものが少しでも傷つけられるようなことは絶対に避けるようにつとめていた。それが塩山にとっても或る意味で郁枝を心の中でとらえ始めたことは確かだった。

郁枝が初めて塩山と交渉を持ったのは、郁枝が心臓を病んで塩山の病院に入院した時のことであった。どうせ診て貰うものなら、気の知れた塩山の方がよいと思ひ、又塩山も乗気になってそれを薦めて呉れたからでもあった。

郁枝は其処で平生の料亭で眺めなれた塩山と、まるで変わった一分

の隙もない凛とした医師としての塩山を見つめ、塩山は亦、水商売の仲居としてでなく、一個の女性としての郁枝を始めて発見したわけである。

もう一つは、その時塩山は、郁枝が麻薬の常習者であることを見抜いたことであつた。仲居という職業の忙しさから、疲れる身体を持て余した拳句、朋輩から押しつけられるように使つて見たのが初りで、何時の間にか習慣のようになっていたのを、塩山がそれと氣附いたのである。勿論悪い／＼と知り乍らのことであつたが、改めて塩山に聞かされると、身の毛のよだつような怖さであつた。その時、止めよう止めようと決心はしたのだが、薬が切れると、妙に遣り切れない頼り無さと、氣情のさきに襲われて、我を忘れて塩山にねだつた。幸い中毒とまでは行つていなかった為塩山もまあ一日に二、三本位なら、とこっそり分けて呉れるようになった。一つは郁枝という女に夢中な余り、つい医者としての分別を忘れたものであるが、塩山自体が麻薬の患者であつたとは、郁枝には夢にも知らぬことであつた。

退院して間もなく、塩山は郁枝の為に現在の家を買つた。最初はそんな心算ではなく、単に塩山らしい責任感の為であつたが、その儘二人の関係は／＼と続いて来ていた。

郁枝は、ふと女の話し声で我に帰つた。湯槽から出ると、先刻の二人が何事か、婦人会か何かの会のことについて話し合っているらしかつた。そして何の関りがあるのか、時折ちらりと郁枝の方を振り返つて見るのだった。貧弱な痩せた身軀の女達である。郁枝はその中でこうした眼に全く無頓着になつてしまつた自分を意識していた。最初の頃は、何となく射すくめられるような卑下が心の何処か

に巢喰っていたのだが、今となればそんな気持は跡形もなかった。貴女達の思っているような日陰者ではない。平凡な世の妻達以上の幸せもあるし、もう何時までも陰の花ではないのだ。という気持がぐっと郁枝の姿勢を立ち直らせていた。郁枝は思い切り身軀をのばすと、豊かな裸身を見せびらかすように、カランの前に坐った。

肢を折った下腹部の凹みに、水が溜って流れなければ、未だ女が老いない証拠だ、と何かの折に聞いた郁枝は乳房のあたりから湯を流した。きつく締めた両肢のつけ根に流れ残った湯が僅かに漂った。一つの小さな水溜りのように湯は微かに揺れ動いた。

風呂から上って、番台の前の鏡に向って立つと、其処に二十九の肉体が少しも衰えない張りを持って写った。豊かな乳房も誇らしげに頭をもたげ、何時か塩山が賞めて呉れた長い脚もすっきり伸びている。今が女の最盛期だ、と郁枝は思う。この身体を塩山の為にも、大切にしなければならぬ。

銭湯を出ると、午下りの往来はからからに乾いて、湯上りの素足にじんと響く寒気が大地の上を這っていた。

三

麻生六本木まではどうしても小一時間はかかるので、郁枝は漸く黄昏がれ始めた頃に家を出た。あれこれと着物を選んでみたのだが、結局一番好みに合った緋模様のお召を着込んだ。その上に白いショールを羽織って郁枝は丁度ラッシュの過ぎたばかりのバスに乗った。街の中はすっかり冬の景色であった。所々の軒先には、クリスマスセールや、歳暮の大売出しの広告などが目立って、その下をオーバーの襟を立てた勤め人らしい人波がざわめき歩いてい

た。

東京駅の前を過ぎて左へ折れ、いささか都心を外れた頃になると、日も漸く傾き始め、六本木の広いグラウンドが見え出したのは、それでもあたりは既に薄暗くなる頃であった。

バスから降りると、郁枝は思わずショールの前をかき合せた。いきなりじんとするような外気が全身を包んで、日が翳ると同時に気温も下ったようであった。

少し歩くと、目の前に見覚えのある白いコンクリート建ての病院が現れた。病棟の方の窓からは点々と灯りが見え、それがにじんだように闇にとけ込んで、何時か郁枝が入院していた頃のことを生き／＼と想い出された。何年ぶりだろう。と郁枝は暫く其処に佇んで窓の灯影を眺め入った。背後を一台の自動車が冷いあほりを立て乍ら通り過ぎた。

それから暫く経って、郁枝は病院の玄関の横に取りつけてあるベールを押していた。もうすぐ塩山の胸に顔を埋めて甘えることが出来るのだという期待が、丁度家を出る時に射って来た薬と一緒に、衝動のように郁枝の体内で燃えていた。

取次に出て来た看護婦は、郁枝の名を聞くと、何の不安げもなく待っていましたと云わんばかりに郁枝を招じ入れた。事の隅々まで塩山の配慮が届いているようで、郁枝は既に塩山の大きな腕の中に抱かれたかのように心が浮び立った。

病院の廊下を通りぬけると、庭一つ距てて居間との間は細い渡り廊下になっていた。塩山が待っているのか居間には暖かそうな灯りがついている。庭の植込みが居間の障子から洩れる明りにぼんやり闇の中に浮いて見えた。先に立った看護婦は、居間の前迄来ると、

立ち止って郁枝に、どうぞ、と云った。

さあ、愈々逢える、郁枝は飛び立つ思いで障子に手をかけた。

だが次に意外な事が起った。障子を開けた室内の様子は郁枝の想像したもの、まるで違っていた。

部屋は十畳もあろうか、郁枝にはひどく広いように感じられた。

その部屋の床を背にして二人の男女が炬燵に身軀を埋めて、盆の上に並べた盃で酒を汲み交している最中であつた。

部屋を間違えた、と咄嗟に郁枝は思った。凡そあり得べからざる事ではあつたのだが、郁枝はそう思った。

と思うのと、炬燵の中の女が声をかけるのと、殆んど同時であつた。

「こちらへいらっしやい。お待ちしましたよ。」

一瞬、郁枝の頭の中は云い様の無い混乱に渦巻いたが、次の一瞬、頭の中で閃いたのは、図られた、ということであつた。最初手紙を開いた時の不安そのままが、現実となつてここにある。何という迂濶なことか。

本能的に身を翻えそうとしたのだが、何時の間にか部屋の入口には先刻郁枝を案内した看護婦が、まるで獲物を見張りでもするような眼附で立ちはだかつていた。

郁枝は自分の顔から、さつと血が引いて行くのを感じ乍ら、其処に立ちすくんだ。

「驚かなくともいいじやありませんか。他人の夫を寝取る程の人が、可笑しいわよ。」

再び女は云った。そして盃を口に含んだまま、

「わたしは塩山の妻です。滝子、憶えてて頂戴。」と云った。

すると、後に立っていた看護婦がいきなり着物の上から郁枝の臀部を力任せに叩いた。郁枝はよろよろと二、三步前につのめって、手をついた。思わずかッとなって、

「何すんの！」

だが、看護婦は小気味よげに郁枝を見下したまま鼻であしらうように返事もなかった。郁枝は漸く落着いて来た気持の中で、容易なことではこの場を切りぬけることは出来まいという覚悟を持ち始めていた。

「一体、どうしたというんです？」

郁枝は必死に怖気と闘い乍ら顔を上げて云った。なんとか切りぬけねばならないと、勇気を振りしぼった。

だが、その言葉の終らぬ中に、滝子は手にしていた盃の酒を、郁枝の顔をめがけて浴びせ掛けた。酒は郁枝の顔を濡らし、首筋から襟元にかけてしたたった。

「生意気なことをお云いでないよ。盗人ただけだし。聞かせて上げるけど、今夜はね、とくとお前にお礼がし度いのさ。それ以外に何の用事があるものかね。ふん、手紙に誘い寄せられて、お前のような女には判るまいけど、この世の中にはね、興信所っていう便利なものがあるのさ。お前とうちの主人が、何時何処でどうやっていちゃついていたかってことまでちゃんと判っているんだ。」

滝子は最初とはがらりと形相を変えて喰いつくように喋った。いかにも有閑夫人といった感じの肥満した身軀に、顔の皺がひどく目立った。郁枝はそう云う滝子の眼を見ている中に、得体の知れぬ恐怖に膝頭がふるえ出すのを押え切れなかった。滝子の眼の中には、憎悪を剥き出した、一点の人情味も消えた、ほんの野獣そのものの



KT

輝きだけがかった。殺されるかも知れない。郁枝は本当にそう感じた。

「乱暴なされると、警察を呼びますよ」
郁枝はそう云ったのだが、既に声もかすれて、意気地なく震え声にしかならなかった。

郁枝は益々おびえた。麻薬のことまで知られているとすれば、もう郁枝の纏るつては完封されたも同然であった。絶望にひしがれた郁枝の頭の中を、塩山の和やかな顔が浮んでは消えた。だが矢張り本当に塩山は大阪へ出掛けているのだ。
「呼ばないのかい？」

「警察？」
滝子は云い直すと、さも軽蔑に絶えぬといった調子で、ふん、と嘲笑した。
「それはこちらの方で云い度い云い草だね。お前が密売の麻薬患者だってことは、ちゃんと調べ上げてあるんだよ。お前が毎日射っていた薬は、うちの主人が苦勞に苦勞して、危い橋を渡ってまで手に入れていた禁制品なんだよ。それとも知らず警察だって！ 呼ぶなら呼んで御覧。お前は病院行き。亭主は監獄行き。さあ、呼んで御覧」
滝子は益々いきり立ち

嵩にかかった滝子は、誇らしげに云った。その眼は岩壁の端にまで獲物を追いつめた牝豹のように輝いた。

火鉢の上の鉄瓶の湯が、しんとはりつめた沈黙の中で、独り微かな音を立てた。

四

「どうすればいいのです」

不気味な沈黙に耐え切れなくなった郁枝は恐怖から逃れるように口を切った。郁枝の顔にじっと視線を据えたまま盃をふくんでいた滝子は、

「二度と塩山に逢えないようにしてやるのさ」

一語一語念を押す様に、稍低めな声で云った。

「お前の顔に焼饅をあてて、二度と人の前に出られぬようにしてやるのさ」

一瞬、郁枝は軽い眩暈を感じて前に手をついた。顔を焼かれる。

ひきつゝて、ただれて、二度と見られぬ顔にされるのだ。若し本当の事だとすれば、何と恐ろしい苦痛であろう。然も本当にやり兼ねない滝子の見幕にぶつかると、郁枝は既に何もかも忘れ果てて、ただ募って来る恐怖に茫然となった。

此の家の門の前迄抱いていた幸せとは、一度に逆転して、何とか離れたことであろう。幸せはおろか、此の世に最も不幸な運命に突き落されてしまうのである。人に見せることの出来ない顔になって、どうして生きて行けよう。

郁枝は、がばと身を起した。何も考える余裕もなくただ早く逃げ出さなければと思ったのである。思ったというよりは、一つの衝動

のようなものであった。

だが、それもいち早く後に立っていた看護婦に突き放されて、再び畳の上に倒れ伏してしまふことで、あっけなく終わった。もうどうしても逃げ出すことは不可能と云えた。

「見苦しい真似は止しなさいよ」

滝子はやおら立ち上った。見ると何時の間に握ったか、言葉通り饅を手にしている。激しい戦慄が郁枝の背筋を閃光の如く走り過ぎた。

「止めて！ 止めて下さい。それだけは勘忍して下さい」

郁枝は思わず滝子の足に縋った。もうどうなろうとよかった。ただ顔を焼かれることだけはどうしても逃れ度かった。

滝子は足を上げて、縋りついた郁枝を蹴り放した。郁枝は不様な恰好で横に転った。

「何だね。威張った口を利用して置き乍ら、みっともないいったら呆れるよ」

滝子は再び郁枝の襟元を驚づかみにして、引きずり上げようとした。何の感情の変化もなく平静に残忍な復讐を遂げようとする滝子の恐ろしさが、気の動揺した郁枝には、すべての運命を呑み込んでしまふ一つの力となって感じられるのだった。

「どんなひどいことでも我慢します。だからそれだけは許して。頼みます。頼みます」

必死になって郁枝は哀願した。

滝子は暫らく饅を手にしたまま、足許に泣き伏している郁枝を見下していたが、やがてふと思ひ直したように、

「ふん、じゃこの方は我慢してやってもいいが、だが只じや帰さな

いよ。」

そう云う滝子の舌は幾分もつれて、相当酔いが廻っているらしかった。

「じゃ、お前の云う通り、どんなひどいことでも我慢するって云うんだね？」

「はい」

「じゃ、着物をお脱ぎ」

平生ならば、到底出来ることではなかったが、すっかり恐怖に囚われてしまった郁枝は羞恥も見栄も忘れたように帯を解いた。顔を焼かれるよりは、まだしも耐え易かった。

「全部だよ」

滝子は命じた。

郁枝は衣類を全部脱ぎ捨てると、流石に本能的に羞恥がかつと顔に上って来た。今迄忘れていた男の存在がきつく気附かれて来て、郁枝は全裸の自分の身軀を自分で抱くようにしてうずくまった。

「あの柱へお登り」

滝子は部屋の一隅の四角い柱を指さした。郁枝は次第に裸にされた自分が、これからどれだけかの時間、こうして滝子とその前の男とに弄ばれなければならないのだ、ということが判りかけて来た。だが躊躇する暇もなかった。看護婦は郁枝の髪を握むとその儘ずると柱の傍まで引きずって行った。そして、



「さ、木登りだよ」

と郁枝の裸身を柱に押しつけるように追いやるのだった。郁枝は柱に手をかけて、自分が柱にしがみついた時の恰好を想像すると、気も狂うばかりに情なかった、が登らなければならぬ。ともあれ命ぜられた通りしなければならぬ今の郁枝であった。

柱の冷い感覚が、腕から胸、胸から腹にかけて伝った。四角い柱は登りにくかった。だがいざ柱に取りついてみると、想像以上に破廉恥な姿勢にならなければ、一寸と云えども、よじ登ることは不可能だった。

郁枝は思い切り肢をひろげて足裏で柱を踏まえた。二人の男女は、背後からそうした郁枝の醜い恰好を酒を呑み乍ら眺めているのであろう。涙が頬を伝って肩にまでしたり落ちた。だが看護婦はもっと効果的であった。彼女は漸く少し登りかけた郁枝の後に立った儘、懸命に、肢をひろげて柱に取りついていてる為につきり無防備にさらされた郁枝の白い豊かな臀を、さも面白げに手の平で、ぴちゃぴちゃ叩き乍ら、

「もっと早く、もっと早く」とせき立てるのであった。

そう高くもない欄間まで、登りつめるのにそう時間はかからなかった。郁枝の手が欄間にかかる、滝子は、

「暫くそうやってお聞き、——塩山はね、今私に離婚話を持ちかけているんだよ。何故だか判るかい。みんなお前って女がいる為さ。お前がこうやって私達の間にいざこざを起させたんだよ。お前が居なけりや、みんなまるく収まっていることを、お前一人の為に何もかもがお終いさ。大体塩山はね、学生の頃、学資に困っていたのを私の家が助けたんだよ。そして立派に大学まで卒業させてやったんじゃないか。それが何だい。恩義も忘れて、ふん、お前みたいなあばずれに逢いやがって。私はね、塩山なんかにもう未練はないさ。」

だがお前みたいな女に見返られたことが口惜しいんだ——でも、もう塩山なんてどうでもいいんだ。ちゃんと代りの人も見



つけたし、塩山なんかもうさっさとこの病院から出て行って貰うんだ。この病院は私のものなんだからね」

代りの人というのは恐らく、滝子の前に坐っている男のことであろう。滝子はその男と一緒にあって郁枝を辱しめようと図ったのだ。

僅かな時間であったかも知れないが、滝子の話が終ると、郁枝はもう辛抱することの出来ない苦痛に喘ぎ始めていた。腕の節々がばらばらに外れてしまい相に痛み始めていたし、胸から腹にかけて柱の角が喰い入るように郁枝の肉体を責めていた。

「もう下して！」

郁枝は子供のように叫んだ。勝手に手を放したのでは又どんな目に遇うかも知れぬという不安が怖かった。

案の定、滝子はそれを聞くと、

「勝手に手を放したら、それこそ焼饅だからね。」
と嚇した。その時始めて男が口を開いた。

「仲々、いい身軀をしてるじゃないか」

郁枝は夢中な中にも、その男の声に何処か聞き覚えがあると思った。顔はしっかりと見えないのだったが、若し郁枝の記憶に間違いがなければ、何時か郁枝が仲居の頃「喜楽」へ塩山に連れられて来た助手という若い医者に違いなかった。あの若い医者も、恐らくは塩山と滝子の仲を利用して、うまくこの病院を乗っ取ろうとしているのだ。塩山はそうとも知らず高い慰藉料を払って、尚この病院から追い出されてしまうのであろう。可哀想な塩山！

郁枝は我を忘れて塩山の身を思い遣った。

だが今の郁枝に何をすることが出来るよう。醜い裸の身軀で蟬のように柱の上で泣くだけである。

苦痛が通り過ぎると、次第に両手に痺れがつのって来た。力を入れてみても、力にはならなかった。郁枝は柱にしがみついたままずるずると水でも流すように滑り落ちた。

「だらしないのねえ」

看護婦は舌打ちし乍ら、柱の下で崩れるように倒れ伏している郁枝の腹のあたりを蹴りつけた。

「こっちへ持つといで」

滝子は品物でも運ばせるように看護婦に云った。看護婦は手荒く再び郁枝の髪を指の間にまきつけると、ずるずると引きずった。郁枝の全身には寒い部屋の中にも拘らず、うっすらと汗がにじんでいる。

「云う通り聞いてやればいい気になって、どんなことでも我慢するって云った口は何処へ行ったのさ。」

滝子は忌々しくてならぬという風に毒付いたが、ふと男の方をふり向いて、

「どう？ 馬に乗ってみない？」

郁枝には滝子は何を考えているのか想像もつかないのだったが、ただ自分が滝子の思うままに苛まれ、痛めつけられるという予感に滝子が口を利く毎に全身をふるわせておののいた。

男は承知したらしく起ち上った。

「いいかい。この人を乗せて、この部屋の中をよしって云うまで廻るんだよ。今度こそ途中で怠けたら承知しないから。」

郁枝は又も四つ這いという耐えられぬ姿勢を取らされた。男の重味が四つ這いになった郁枝の背中にずんとこたえた。郁枝は顔面を紅潮させてどうにか持ち堪えたが、こうして歩き廻るなどとは到底出来相もなかった。

男は乗ってしまうと、我を忘れたように下品になった。郁枝の臀の肉をつねり上げて、

「はい、どう、どう」

と声をかけた。郁枝は渾身の力をふりしぼって二、三步進んだが、ともすると腕は圧力に支え切れずぐさぐさ歪み相になった。男はふざけ出すと面白くてならぬようにはしやぎ乍ら、絶え間もなく郁枝の全身をつねり上げた。

はっ、はっ、と郁枝は息をつぎ乍ら少し許り進んだが、太腿の内側をつねり上げられた時、思わず悲鳴を上げて、どうと倒れた。

途端に郁枝は、今度こそやられる、という恐怖で一杯になった。



『T』

早く起き上らなければ、と焦ってもがいたが、男の体重にのしかかられて、郁枝はただ裸身を醜くのたうち廻らせるだけでしかなかった。

看護婦は意地悪く、尚も執拗に郁枝の後に廻り込んで、所かまわず抓り続けた。途切れ途切れの悲鳴を上げて、郁枝は、

「あっ、勘忍して、勘忍して」
ともだえた。

五

五分程も過ぎたであろうか。部屋の中には相変らず滝子と男とが酒を酌み交していた。部屋の中央に立った看護婦の足許には、今度は全裸のまま、後手に縛られた郁枝が、ぐったりした身軀を投げ出すようにして転っていた。白い肌には縄目がきつい緊縛感で喰い込み、全身は冷えて鳥肌立っている。

三人の間で次の責め手が考えられたものか、看護婦は一寸領いて見せると、部屋の外へ姿を消して行った。後に残った二人の会話が疲れ果てた郁枝の耳に聞えて来た。

「私しや打ったり叩いたりするような野蛮な折檻は嫌いなさ」

「然し、これ位じや、そうこたえないだろう」
既に生獣の本能を露わにした男の声である。

「うんと辱しめてやるの。女にはこれが一番の手よ。女でございまして、羞恥の陰に隠れている醜い肉体を、人の前にさらけ出してやるの」

男は黙った。郁枝は滝子の云う通り、こんな辱しめを受ける位なら、少し位苦しくても打ったり蹴られたりする方が、どれ程容易なことであろうと思った。

だが滝子の云うお礼はまだ済んでいない。又何を考えているのだろう。郁枝には長い長い時間が経過したように思われた。夜が明けたらさっと帰って来るに違いない。然しそれまでに恥しさに狂い死んでしまうかも知れない。

看護婦が何か持って来たらしい。器具のふれ合う音がして、障子が明いた。

滝子は同時に立ち上ると、身体を海老のように曲げて横たわっている郁枝の髪をつかんで顔を起すと、

「色気狂いの女によく利く治療をしてやるからね」

うつ伏せになって腰を上げると云う。郁枝は瞬時ためらった。後手に縛り上げられた身体が自由にならなかったのと、何が起るのかという恐怖からとであった。が滝子の方は全く容赦もなかった。髪をつかんでいる反対の手で郁枝の頬を思い切りぴっぱらいた。

「早くしないか」

郁枝ははじめられたように身軀をふせた。そして顔を畳にすりつけるようにして膝を立てた。

その時である。郁枝は肉体の後から、冷い金属的な感觸のものが素早く挿入され、同時に或る液体が其処から体内に注入されたのを感じた。あっと思って身を引こうとしたが、既に万事が終わった後で

あった。手馴れたいかにも素早い動作であった。

浣腸液だ、と思うより早く、郁枝はもう腹を刺すような痛みを感じていた。余程多量に入っただけか、いきなり激しい痛みが襲って来たのである。

と同時に、体内では或る作用が起りつつあった。郁枝は慄然とした。一体これはどうなることか。こんな非道なことをしてまで、辱しめなければならぬのであろうか。

が何の猶予もなく、激しい作用は郁枝の下腹部に渦を巻いて押し寄せていた。あとどれだけ堪えることが出来るだろうか。滝子達は次に更に何かの陥弄を設けて待ち受けているに違いない。凌辱の泥沼は未だ涯て相もない。きりきりと錐でもまれる様な苦痛に郁枝はのたうち廻って苦しんだ。

三人の眼が、醜くもだえる郁枝の裸身を囲んで見守っている。その中を妖しくさながら波にもまれる岩陰の海花のように、郁枝は転々と悶え続けていた。

(終)

【読者通信】

昨日お送り下さった二月号楽しく拝見いたしました。特に大沢通子さんの告白文「腹部被虐の人妻の告白」は冒頭から次頁三頁と、これはまぎれもなく大沢さんの告白ですが、妾の事をすき見されたのかと思う程類似しているのに恐怖

感にふるえる思いで読破致しました。更に挿絵に至っては妾はアンマ男に手足こそ縛られませんが、いつもあの姿勢で強揉みを受けています。大沢さんはほんとに妾の事を書いて下さったのかと思う位です。

(大阪、岡崎達子)

Das Grausame Weib

Dr. Yohannes R. Birlinger

▽ 残虐なる女性達 ▽

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森 本 愛 造・訳

この様に、適当な素質と、充分な機会が日常の生活の中に多く得られた当時は、鞭打や

其の他の形で体刑は、教育の名の下に、思うまゝに利用されたのであった。殊に教師の親戚の者や、若い婦人が教師の代理をつとめる様な事があると、これらの代理人達は打擲に対して非常な熱心さを示すのだった。この事については多くの実例がある。又、余りにも熱心な鞭打が、当局に指摘された例も数多く探し出す事が出来る。前に、一寸触れた様に、多くの場合、女教師が、娘達に対する鞭打よりも、男の子に対する鞭打に執着したという事に注目すべきである。即ち、このような現象は明白に、女教師の教育活動に於ける性的感覚の付帯と、一般的な臀部性感を分析する端緒となるからである。

そこで、興味深い引用を一つの書簡によって提供しよう。この書簡は一九〇七年五月十二日付の柏林の新聞(Berliner Lokal anzeigers)の社説(Öffentlichen meinung)第二三七号として見出されるものである。

(著者註)この引用は現実には Eberhard H. ーベルハルト氏の著作より引用したものである。

この中で、何人かの女教師は、男生徒の鞭

の価値と、教育目的に対する正当さについて述べている。

「学校内で、肉体に加えられる刑罰や懲戒が必要であるか否か、或は、必要であるとしても、如何なる方法でなさるべきかについては医師に聞く事ではないと思います。丁度伯林ローカルアンツアイゲルス(訳者註本引用の掲載された新聞)の日曜号に、此の問題に対する医学的な立場からの医師の意見が掲載されました。(訳者註)「医学的な意見」については何も具体的な記述はないが、併し乍ら前後の関係から見ても、鞭打教育に反対の意見であろう事は推測される。」併し、私は今迄男子学校教育に用いられてきた鞭打懲戒が、明らかに有効であった事を力説したいのです。之まで、女教師達の手で科された鞭打懲戒は決して、いゝ加減なものではなかったのです。それらは、正しい目的の為に慎重に考慮されてから実施されて居ります。一方、女子学校に於ては、少くともこれまでは、女生徒に対する体罰は非常に稀にしか行われておりません。実際の経過を見ると、女生徒の場合は将来も、体罰による教育は行わない方がよいのだらうと思われまゝ。繰返す様ですが男子学校では、今後も鞭打教育なくして、教

育の成果を望む事は出来ないと思うのです。
(以上書簡、以下は社説の本文である。――訳者)

こゝに名を記した二人の女教師は、十五歳の時から男子学校に勤務、今までの間、大部分の期間中、授業をし、代理教師として、上級学校でも教えたのであるが、一般に男子学校教育では、鞭打懲戒が、最大の有効な方法であり、事実、授業日には必ず、二人や三人の生徒が鞭をうけた実例を挙げて、自分達の信念を開陳して居る。では、一体男子学校の鞭打懲戒とはどんな形で行われるのであるか、其を讀者諸賢に概要説明する事が必要であらう。第一に打擲をうける身体の部位について、つまり、第一に手のひら、第二に臀部が代表的なものである。特に後者は重要なものであると考えられている。医師達は健康上の問題として、手のひらだけの打擲をすゝめるが、打擲者は、手などの軽い打撃では、悪い心を持った生徒達に、十分な覚醒を与えられない、打擲はもっと、一度で思い知る様な広い部位に与えなければいけない。其の為には傷害の危険の全く無い広い部位、即ち臀部が一番好適であるという強硬な意見を述べるのである、或る鑑定人が危惧した臀部懲戒の

際鞭の先端が、男生徒の貴い部分(生殖器官)を傷つけるかも知れないという事は、鞭打の実際の場面を見れば、すぐに解決するのである。罰せらるべき生徒は、普通にはかゝんだ姿勢で、上体を机か椅子で支える様な体位を取るものである。打擲の際に重要な事は、椅子や、机の上にしっかり乗る事よりも、定まった体位の根本を変えないでいるという事である。最後に注意を喚起する為に或る校医がした報告の要点を記しておく。即ち、その学校では体罰は常に校長によってのみ実施されたという事である。之は恐らく誤りである。女教師が自分の「淑女性」を家へおいてくるという習慣を知らない、この様な報告に迷わされるのである。女教師達にとって、体罰はいつも、自分の義務である、彼女等は躊躇する事なく鞭を取り上げる。私達は只、体罰がその本来の目的の為に用いられる事を切望するのである。

エーベルハルトは右について、次の様に述べている。この二人の女教師が男子打擲の権利を弁護する情熱は異常なほどにはげしい、この感情は又直接に彼女等の異常性慾に結合しているものと考へねばならない。多くの女性サディスト(サディスティン=Sadistin)と

同様に彼女達は明白に同性への加虐を否定している。彼女達の慾望が、只管に男性を屈従させるといふ事にばかり指向しているからに他ならない。自分達が特に愛好している權利を失うかも知れないという懸念が不用意に本心をさらけ出させたのであると考えられる。この權利擁護の為には、彼女達はその鞭打の過程の細部にまで渉る詳細な叙述をもためらわないであらうと思われる。

一九〇四年の教育学新聞の中で、一人の女教師のもっとはっきりした発言の記録がある。これは、或る論説――(此の論説は、「教育学と教室での教育」という題である)。ブーネス嬢(Bounesse)の論文が再録されているが、その論文では、教育上の鞭打による、性的興奮についてのアデレ・シュライベル嬢(Adèle Schreiber)の説に反対を論じ、次の様に述べて居る。

「シュライベルの説く如く、教育上の鞭刑が性的興奮を伴うという論拠は一体どこに有るのでしよう。彼女はきつと、子供を鞭で打つて性的興奮を感じた事があるのでしよう。私にはそんな経験は一度もありません。屢々、私は立腹の為に、胆汁の上ってくるのを感じた事はあるが、胆汁は一体性的器官の分泌物

と呼ばれるだろうか、私は其の点に疑問を持って居ます。それでは、子供の方が感じるのでしょうか。少女は鞭を当てられると叫びます。「あゝ、私の指！」一体指は性器と呼ばれるものですか。少年を打つ時に、鞭をうける部分は性器ですか、そんな事は始めてです。「この発言については之以上註釈を要しないと思う。」

(訳者註) 著書は註釈の要なしとしているが、これは精神分析上の初歩であるが故にそう云うかも知れないが、私は、一寸註釈の必要があると思う。少女の場合、「私の指！」と叫ぶとブーネスは書いているが、この事の是非はもう一つ問題であるとしても、もし、「指」と叫ぶのなら、勿論、之は性的な関連を持っている。男性器についての連想——勿論潜在的なものであるが——が枝や棒という観念を形成する事は自明の理であろう。私は元来、高橋鉄氏の様に、言語上に表現されたもののを一々追究して、そこに性的な観念を押しつける事には賛成出来ないものである。こうした場合は当然、性的観念の連繫を発見出来ると思う。次に、少年の場合、臀部が打擲の部位であるならば、臀部性感は、明らかに一般的なものである故に、臀部を性感

絵と写真のアイデアを募る

本誌に発表する口絵やサジマゾ切腹等や代理部の分譲写真、或はアルバム、画帖、等について、こういった構図やポーズ、又は趣向で作成してほしいといった御希望がございましたら、何卒御遠慮なく編集部宛御申越し下さい。貴方の考案されたアイデアによって、誌上を飾り、又は分譲品中に加えたいと思います。採用の分、並に優秀なる企画に対しましては、写真又は画稿を差し上げます。詳細なる説明の外、必ず略画若しくは説明図を添えて下さるようお願い致します。

(企画係)

帯の一つと考える事は当然であると考えるのである。臀部性感について、又脚部性感については、本稿を脱稿後に、或は並行して、別を書く心算であるが、今は其を深く追究する事は遠慮しておく。併し、何れにせよ、ブーネスの説が、彼女自身が性的鞭打愛好者でなかった事の証明にはなっても、一般的に鞭打が性的観念を含まないという証明にはならな

い事を明らかにして、原著の不備を補っておく次第である。)

屢々、女性は孤児院や感化院に於ても、学校に於けると同じ様に活動したが、この場合は、子供達が、両親達の保護の下になく、全然彼女等教師や舎監達の手に其の心身を委ねていた為に、野放し同然の状態で、加虐本能が満足し得たという点が異っている。

クレーゲル (Kröger) は其の著「鞭打狂」(Die Fragellomanie, 1901, Dresden) の中で一七五三年にアルトナアル孤児院 (Altnaer waisen hause) で、子供達は、余りにも粗野な本能に支配される教師の下で、酷使されねばならなかったという事を報告している。

斯様な経験はドイツで幾度も、方々の街で繰返された。ロシアの尼僧達によって経営されていた孤児教育施設では、非常に厳しい躰付けが強制された。子供達は朝四時頃に起こされて、一日中、一生懸命に働かねばならなかった。夜の八時頃に、子供達は、懲罰を受ける為に、懲戒室へ出頭しなければならなかった。修道院の生活でも、尼は鞭の打擲を雨の様に降らせたのであった。

浣腸マニヤ恵美子の日記

花村 恵美子

哀しき独白

十三夜の淡い月光が、灯を消した室内を朧ろに照し、オルゴールから流れ出る「乙女の祈り」の旋律が、感傷的になった私を、夢見易き乙女の時代へ誘います。

処女の象徴とも云うべき、質素なデザインの中にも清楚な美を潜めた、セーラ服の襟の白線。ネクタイの、母の乳房を想起せる柔い絹の手触り。二度と還り来ぬ乙女時代への憧憬に、二十一才の私は柄にもなく心哀しく、頬を伝う白玉の露に、身の汚れ流し給えと祈

る儚なさ。

私だって、女性なのです。慎み深き女性なのです。私にだって、乳房を恋い慕って泣いた赤子の時代もあれば、秋風に散っていく紅葉にさえ涙を流し、野原の一隅に咲く可憐なスミレの花に恋をした、乙女の時代だってあったのです。それなのに、現在の私の体内には、異常の血が奔流し、軀も心も汚れ切ってしまった——。

お母様、恵美子はいけない悪い子なのでしょう。救いのない、異常性癖者なのでしょうか。

お友達の、無邪気な姿を見るたびに、自己

のけがらわしき悪癖に、恐れおののく可哀想な私。でも、でも私は、永久に常人にもどることは出来ないのだわ、すくなくとも現在の私には——。

何故って、私は浣腸器の俘虏なのですもの。

そうです、浣腸器が消滅しない限り、私と云う人間が存する限り、私は、浣腸器の奴隷と成らねばならないのです。そして、それが私に課せられた不変の運命なのです。

浣腸器——あゝ、此の言葉、胸を締めつけ心狂わす悪魔の言葉。浣腸器、イルリガートル。

若し、私と同年令の女性や女学生が、これらの言葉を聞いたり見たりしたら、恐らくは真赤になって、再び顔を上げ得ないであろうものを、まして自分で自分に浣腸するなんて想像だにしないことでしょう。そして、自分の軀に浣腸を施す女性の存在する事を知ったら、彼女達は一体どう解釈して下さるでしょうか。

でもお母様、恵美子だけが悪いのではないのです。

小学生の頃、蛔虫駆除と云って食酢の浣腸をして下さらなかったら、私の目の届く場所に浣腸器をしまっておかなかったのならば、

更に、婦人雑誌附録の医療

辞典と云う様な浣腸の方法や写真の出ている本を匿しておいて下さったら、或は恵美子、

浣腸マニヤとならなかったかも知れないのに

——。嘘です。今言った事は全部嘘なのです。た



とえお母様が恵美子に浣腸しなかったとしても、私は——。

一時たりともお母様に責任を転嫁しようとした罪深き恵美子をお許し下さい。誰のせいでもないのです。持って生まれた性癖なので

すから。私は、誰が何を言おうと、私だけの道を歩みます。Going my Wayです。

女学校を卒業する間際の頃、私、お母様に看護婦の試験受けるのだと、駄々をこね叱られたことがありました。その時、お母様は、
「若い年頃の貴女達には、白衣の看護婦と云うと、何か尊い聖職の様に思って憧れるものだけど——」と仰言いましたけど、本当のことを云いますと私、そんな純真な気持ではなかったのです。患者さんに浣腸して上げられる機会が十分に持てる職業だったからなのです。浣腸器が扱えるからだ

ったのです。女学校在学中位の、最も羞恥感の強い年頃の患者さんが対象。

——浣腸しようね。お時間ですから。別に痛くも何んともないのですよ。さあ、用意しましょう。恥しがらる必要なんて、お嬢様

少しもありませんわ。私も女性なんですもの。さあ、ね。

羞恥におののく患者の下着をそろそろと脱がせながら、——全部脱がないと、出来ませんわ、ええ、それで結構です。軀を横にし、左脚を出来るだけお腹に着けるようにして、お腹に力を入れてはいけませんのよ。口を大きくお開きになって。

春の目醒めを知った患者の、それでいて何人の眼にもされぬ美しい肌を凝視しながらびったりと寄りそった二つの両半球を押し開き、ゆっくりと薬液を注腸します。

——看護婦さん、もうお止しになって、私これ以上我慢出来ないの……。

——まだおわりませんのよ。子供だって我慢するのですから。

真赤にほてった顔をして、今にも泣き入るばかりの細い声で苦痛を許える患者の言葉も上の空、脱脂綿を当て、必要以上の我慢させた後、便器を当て、チヨロチヨロ流出する薬液に混って柔かな便が排泄されるのを、あたかも美しい女学生の品位を傷つけるような、サド的瞳で注視します。一刻も早くお腹のものを排出したいと思う患者も、そばに看護婦が附いていれば息することも出来ずに——。

こうしたサド的行爲(適当な言葉でないかも知れませんが)を想像するからこそ、看護婦になりたかったのです。私ってこんな女なのでした。どうしてもお許し下さらなかったお母様を、私、心から恨みましたわ。でも本当は成らなくて良かったのですけれども。

私が他の人に流腸して上げたことは、何度位になるでしょうか。流腸された経験に比して僅かですけど。矢張り無理してでも看護婦になれば良かったのにと思う時もありますわ。婦人科のせんせいが仰言っておりました。

——毎日、女の患者ばかりと接していると、僕達是一種の中性になってしまつて、女性という意識が持てなくなるのです。謂わば患者なんて、こわれた物体にしか過ぎませんわ。

それが本当だとすると、私、看護婦にならなくて良かったのだとも思いますけど。

毎日他人に流腸していたら、倦きてしまうかも知れませんが。不可能な願望を抱いているうちが楽しいのかも知れないわ。

最初の被害者? 津夜子お姉様だったわ。軽井沢での別荘の忘れられない夏季休暇が終

って、学校に通うようになってから。

何時だったかしら。木犀の香りが、部屋の中迄充滿してきて、甘酢ぱい雰囲気の中で、「木犀の花」なんて云う詩を創ったりしたのですから十月頃?

ピアノを弾かせて戴く約束で、一週間程泊りに行った時だったわ。最初はお姉様が私に何んでもないのに。

——面白いあそびでしょうね、と仰言つて、昼間から。

最初の時、私、それこそ、死ぬ程恥ずかしかったの。だって、ブローズをお脱がせになつて——唯、呆然自失の態で何をなされていくのか無我夢中。

二人目がA子さんなの。既に経験済みなのでいささかテクニクを弄して。

この程度の遊戯でしたら、良かったのですけど、そうした性癖を狂気の様に燃えたたせアブノーマルな人間に、根底から改造してしまつたのが岬冬彦なのです。私は、彼を憎みます。会ったことを後悔しています。表面ではそう叫ぶのですけれど、恵美子の内面では——。

憎み、呪咀、唾棄しながら、反面、倒錯の快楽に耽り、彼を忘れ得ぬ矛盾した二重人格

の哀れな性。そればかりか、私は、彼との過去に於ける多くの経験を綴ろうとさえしているのです。

秘密の写真

彼との交際期間は、決して長期間ではありませんでした。しかし、私という人間は、徹底的に彼に依って、マゾを目醒めさせられてしまったのです。私は、この間に於ける彼の教育？を、「アリスの人生学校」にあやかって浣腸教育と言っております。

高尚な、美術や音楽の話をまじえたのは僅かの一・二度で、それからと云うものは、浣腸、浣腸の連続なのでした。何故私が、彼の自由に（肉体関係という意味でなく）なったのか。その正確な心理の変化は現在でも判りません。蛙が蛇にいくめられるように、彼の軀から発散する妖しい力と、見せられた浣腸器の不思議な魅力の為に、理性が完全に麻痺され、操人形にされてしまったのでしょうか。私の持っていたエネマシリンジを最初の日に看破され、秘密の性癖を見すかされた弱味があったからでしょうか。ともあれ、彼と会っている時の私は、私であって私ではなかつたのです。

浣腸されている現場を彼の友達に見られたという屈辱を与えられながら何故離れることが出来なかったのか。外でもありません。写真の為だったのです。

自分の最も恥しい姿を見られる事に依って生ずるマゾ的な快感ばかりでなく、彼は浣腸する都度、必ず写真を撮り、そのネガを種にして強要するからなのです。若しその写真を暴露されたら、私はどうして生きて行けるでしょうか。厭でも従わねばならない苦痛（とは言いますものの、冷静に私の心理を分析してみますと、実はその強要ということを私の自尊心を傷つけない為の、一種のカモフラージュに利用していたのです。厭なのだけど仕方なしに、という口実がつくれますもの。私ってずるい女なのです）彼はキャノンを秘蔵していて、セルフタイマーで撮ってみたい、イリガートルの浣腸中を連続的に何枚も撮影してしまふのでした。

——恵美ちゃん、この間の写真、どう、見ない？ よく撮れているよ。

彼は、コーヒーをのみながら、薄笑いを浮かべ、平然とした態度で言うのです。

——厭な人。知らないわ私。

——もう一度怒ってごらん。僕はね、恵美ちゃんの怒った顔が好きなんだよ。一寸唇を噛む仕草なんて、女学生みたいだね。

——私、本当に怒ってよ。貴男なんて、大嫌い。変な意地悪するのなら、帰ってしまうわよ。今日だって、来たくはなかったんですもの。

——そう、お帰りになるんですか。どうぞ御自由に。別に僕は貴方の自由を束縛するなんて云う、非民主主義的なことはしませんから。ところで恵美ちゃん。若しもだよ、此の写真をね、お母さん宛で送ったら、どうだろう。実に面白い結果になると思うのだけれども。

そう言われては、完全に私の敗北です。厭でもなんでも私の自由意志とは全く無関係に、その写真を見なければならぬのです。あらわな姿態で浣腸されている自分の写真。客観的に、自分自身の浣腸されている写真を見ると云うことが、どんな効果を心理的にもたらすか御存知でしょうか。浣腸される以上に恥しい屈辱なのです。しかしそれは、マゾ的快楽と直結するのですから、嫌悪の中にある種の欲びを感じることは否定出来ないようです。

実際、その写真を見せられては、二度と浣腸される気にはなれません。眉を顰めて見なければならぬ私の表情を、うっとりとした瞳で眺めるのです。彼の立場は、私とは逆なサドの世界にあるようです。

彼にとっては、絶好の武器である写真も、私には、さるぐつわや枷と等しき責道具的役割を果すのです。その写真のある限り、私は彼の自由にならねばならないのです。

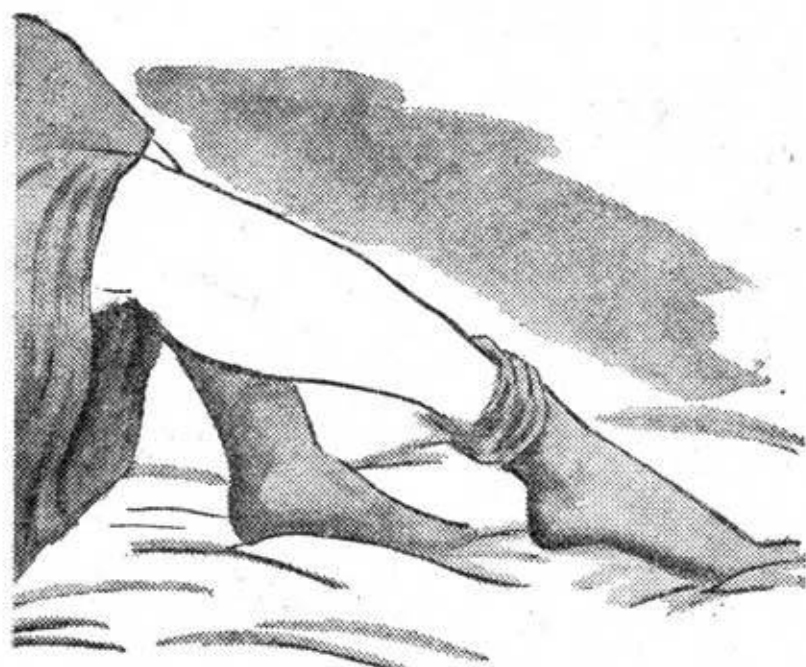
——私、お願いがあるの、肯いて下さるかしら。その代わり、私、どんな代償をお払い致しますけど。ねえ、この

お写真、私に全部下さらないかしら。全身の哀願を二つの瞳にこめ、必死に頼む私に、

——あげないこともないけど、取引きですよ。いいですか。本当に、どんな代償とでも交換するのなら、厭なこともないけども。

——でも私、肉体は絶対に厭よ、それから浣腸されることも。

——肉体か。そんなもの、少しも欲しくありませんよ。



第一興味ありませんからね。こうしよう。ここにコーヒ―茶碗があるだろう。カップ二はいの水を飲んだら写真一枚をあげようよ。どう、僕の思いつきは。

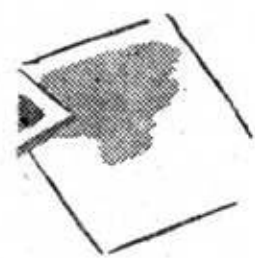
私は、安堵ほうきしました。何を要求されるのかと思ったら、水を飲めばいいのですから。

——ええ、可いわ。でも、写真だけでは厭よ。ネガも下さらなければ。そうでしょう？

——OK、約束した。じゃ、早速、始めるか。安易と思われる水飲みが、果してどんな結果を招くか。彼は何処迄も抜目がないのでした。その時既に

彼は今日のプレイを考案し、その第一歩を踏み出していたのです。

最初の一ぱい二はいはコーヒを啜んだ後のこととて美味しい水でした



が、六杯七杯と重ねるに従い、胃袋はその容積を増し、次第に苦痛を覚えるようになって行ったのです。十ぱい飲んで写真は僅か五枚だけ。二十枚以上もある写真全部を貰うだけ飲むとしたら——。おビールでしたら、私も

一リットル位はどうか飲めますが、水一リットル飲むのは容易なことではありません。しかし私は、苦痛を我慢し、空けていきまし。呼吸するのさえ、苦しいようです。最後には一口の水が、どうしても嚥下出来ないのです。喉元迄水が突き上げる感じ。何ばいお代わりしたのか記憶にありません。座っておられなくなり、横に臥してしまつたのです。そうになると、写真どころのさわぎではありません。いかにして楽にするか他の事を考える余地すらないのです。(水を沢山飲んだ時の苦痛を、上手く表現出来ないのが残念です。)

私は、彼が何をしようとしているのか判りませんでした。が、躰全体に、極度の重量感を覚えたのは、彼が仰臥した私のお腹の上に馬乗りになった時でした。多量の水に依って、張り切れんばかりに膨満した腹部の上に、彼の体重全部が加えられたのです。唯でさえ苦しいと云うのに——。

彼は馬乗りになったばかりでなく、身体を

動かし必要以上に重量を加えてくるです。止めて止めて、私は夢中で叫びました。しかし計算されていた予定の計画をどうして彼が中止するでしょう。気附いた時は遅かったのです。

彼は後で、五分位だったと申しておりますが、私には一時間も或はそれ以上長く感じたのです。私のマゾは、肉体的苦痛というより、精神的苦痛にその基礎を置くものであることは、前の作品をお読み下さった読者ならばお判りのことと思います。ヒップを露出して浣腸される事に依って生ずる耐え難き羞恥、これが最大の（私には）マゾなのです。

勿論、多量の液体を浣腸する際の肉体的苦痛も、羞恥と云うマゾの一部に含まれていることは否定し難い事実ですが、鞭打ち等による肉体的苦痛を目的とする行為は一度も経験はなく、私自身、そうした行為に対して、興



味は皆無だったのです。（現在でもそうです）ですから、この場合、私は純粹な苦痛のみを味わったことは、了解して戴けると思います。写真という好餌につられて、彼のサドを満足させる玩具にされてしまったのです。

液体で膨満した胃部の上に乗られる肉体的

苦痛もさることながら、彼が軀を動かす都度、こらえていた尿がでそうなのは、困ってしまいました。女性は男性と異り、排尿し度くなったら我慢する等という器用な芸当は出来ません。

——いやに変な顔しているじゃないか。どうしたの。言ってごらん。苦しい？

返答したつもりですけど、声にならない私の言葉は、彼の耳に聴こえないのです。

夢中で私は何度も何度も、それこそ恥も外聞も忘れ、もってしまうの、もってしまうのと叫びました。この苦痛から解放されるなら、写真もいらない、とに角、楽になりた

いと云うのが、その時の偽らざる心境だったのです。

——解放された瞬間、私は張りつめていた全身の気力が脱落してしまい、どういう状態にされているのか、考えるゆとりすらなく、彼の為すがまゝに従うばかりでした。（終）

き

も

の

シ

リ

ー

ズ

『潮^{いた}』来^こ』波^{なみ}』

白

金

紅

次

へ舟に落つ椿や潮来十二橋……とは小波先生の句のようだが、両国を夜汽車で発って、会社の注文取りは係長に大分毛の生えた頃だった。その係長が水に縁のある潮来の地に、水商売の三文芸者と落ち合おうとは、お釈迦様も存外粹な気のきかせ方をしたものである。

お盆が済んで太平の世の中は見渡す限りの稲の青波……車窓にあくびを噛み殺ろして、あれとあれとこゝとこゝとの取引行は凡そ考えでも無愛相なものだが、時たま乗り合やす手拭は、かむりの姉さん姿は、裾にちらつく赤い腰巻と共に旅に一興を……などと風流人めい

た気持は魚くさい籠の古さと相抹殺して、やっぱり一人旅は憂いもの辛いもの……。日をあらかた決めて駅で落ち合うかと……もっともこっちも一杯飲んだから来なくとも怒る訳にも行かぬ算談を、

『待ったんでしよう、本当によかった、あたしもこんな処初めてだから、安心したわ』

と田舎の駅前で安香水を匂わせ乍らこの話のヒロイン、芸者染千代はそゝくさと改札口から出て来た……となれば、この一篇は開巻劈頭タイトルと共に続くフィルムは次第に筋を追うて展開することを約束しなければなら

ない。

『柄にもなく鹿島、香取の神宮さん詣って来たから在外素直でしよう。かあさんには銚子の実家に帰えると云って出て来たんだけど……本当によかったわ、逢えて……』で間の延びて、軒燈も時代めいたお泊り宿「角屋」の玄関先をくぐったのは、流石に暮れにくい、いなムーとするひるまのほてりがどうやら揺らぐ頃であった。

『ええ時たま、演習帰えりの、海軍さんか知ら、お泊りになる位、賑やかなお客様と云え

ば……そうなんですよまあ、今日びはもう閑になりました。これから秋ですわね……」

とお神さんは、心得た連込みを無雑作に扱

って如采ない。家族風呂みたいな五衛門風呂に一浴びしてサーと部屋の障子を開けると、薄墨で塗りつぶしたような前景が下弦に近い



月の光に一際映えて、見るからに涼しいのは勿怪の幸い、たとい安酒安宿でも、男冥利に尽きたと云えようか、若し私が不幸にして有名な詩人であったとしたら、このまゝ美人？の膝を枕に寝込んだかも知れない——が、以て生れた凡人さは、おっとどっこいそうはさせなかったのである……

『潰し島田で何しにお詣りしたんだろうと思つたろうなあ、はたの人はきつと……』

『何よ、この鬚？　そうか知ら、でも丸鬚でなくてよかったでしょ……ホホ……』

私は冗談から駒が出て現在、只今、小説の殺し文句を地で行く態のいゝ逃避行を、処もあろうに真菰の水郷でやろうとは考えても見なかった。一夜の情けが夢のように消えようと、どのみち丸鬚じや大いに困るからなのである。

『型のように染ちやんを前にして、酒は髪とは云い度くないね、帯をとけよ……』

『あら、こんな処で……、まだ早いわよ』

『いゝから脱げよ、どうせさあ、裾を曳いた姐さんと云う訳けにやいかんしさなア、第一帯は暑いや』

『しようがない人ね、じや解くわ……』

旅の恥はかき棄てたって、別に他の旅行者

——お泊の客に迷惑のかゝる訳でもないし、天井の低いうらさびた二階はどうかすると身体の隅から盛上って来る情慾に、生きとし生ける人間の理性を真向からくつ返えそうとする。

『ねエ染ちやん、田舎の空気をうんと吸って一ッそのこと大自然の中に染坊を沈めちやうか……と俺が思っていると云ったら笑うかい』

『何んの事？それ？、嫌やよ、急に、六ヶしい文句なんかならべたりさ、あんたが好きだからあんたのいゝようにしたらいいんじやない？ 何処だってお沈めなさいよ、どうせ二、三日たったらまた東京へ戻らなければならぬんだから……それともあんたの仕草お神さん……恐いんですよ？ ホホ……』

『馬鹿を云え、先ず先ず仕事が片づいて、さて染ちやんをどう料理しようかと思ってるんだ』
『なら、いゝじやないの？ 特別上等の情人いんぐわいになってあげるわ、あやめ咲くとはしおらしや



ってね……』

『じや一つ怖ろしい男になって見ようか……』

両国を発つ時、破れ鞆から部品がこぼれないう意に持って来た細引を取り出した……

『馬鹿に派手な下着だナア、こりや麻の紹がい、こんなものの上に着物着たら、暑いだらう……』

『だってよそゆきだもの……珍らしくないわ、帯は博多織、よく見て頂戴……』

『向う向けよ、サア、これで染ちやんをちよいと達磨さんにして……と』

『痛い、胸が……締るわよ、少し緩めて、そう、それ位……』

坐興は一瞬にして夕宴の花を赤くする。その赤い花が媚をふくめてなすが儘の姿をすり寄せて、

『いゝお肴に見えて？ よかったらたんと召し上れ……』と笑うのを心の底から堪能し乍ら、

『いつ見てもいゝぞ、そんな恰好はさ、サア御飯食べさせてやろうか……』

抱いた肩の柔らかさ、その肩をぐっとかき寄せ、後手の縄目をじゃら／＼じやんと撫でて、左手で白い顎を上につんと突き上げると

『余ッ程物好きよ、あんたは……』

『のほせるないッ、好きなのはお互い様だろうよ…』

こゝまでの在り方は芸妓染千代の全貌ではない、その情緒は寧ろ真菰に在りと考える旅の遊興は、

『お早くお戻りの程を、行っぺいらっしやいませ』のお神さんの声を尻目に宿屋を出た事から始ったのである。

『いゝ月ね、静かだわ、やっぱ

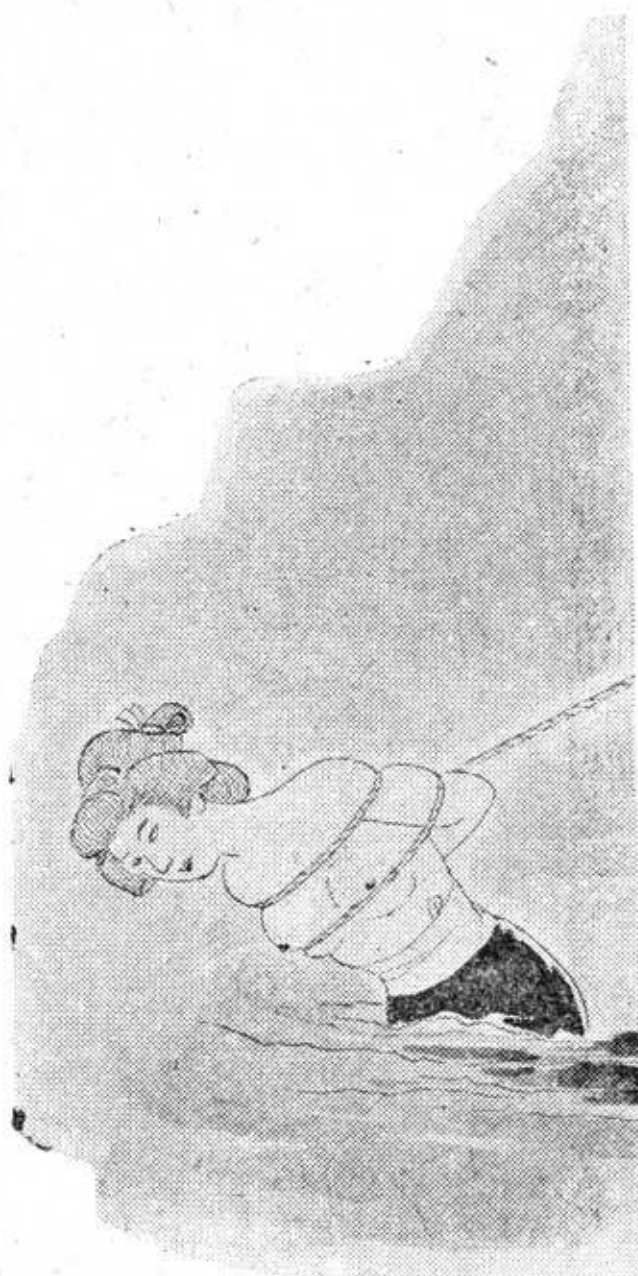
り東京は暑いね、とてもこんな着物着ちや歩けないわ、このあたり何処へ行っても川が知ら、わたしね、こんな処歩くといつも田舎にいた頃を想い出すの、久し振りよ、涼しい風に吹かれるのはせいせいするわね…』

『お盆はちだったらこの近辺賑やかだって云ってたナア』

『思い出した、そのお盆の晩よ、暗い処でからかわれたりするのは…ね、ほらよくあるでしょ、村の若い衆が娘さんを…ね?』

『染坊もそうだったんだらう』

『フツツ…、まあね、だからあたし東京で座敷へ出ても驚かないのよ、ほら、お客さんの中には時たま変なのがいるでしょ、御免な



い、あんたは別…出る早々頭から「おいッ染千代、こうやって俺の云う事を聞くかッ」

って、お寝間の仕度も出来ないうちから腰紐で縛ったりするのよ、だからそんな時…誰も見ちやいないか知ら、…こんな風に…』

『おいおい、手を縛られて出来るのかい、そんな真似?』

『どうせ紐なんかすぐ解けるでしょ、だからそんなにせくんならこれでも嗅いでなさいって、いきなりお腰を取って頭から冠せちやうのよ、ホホツ…、でもね、やっぱり心から腹が立たないわね、芸者って妙なもののよ、どうかすると、またその人来ないかって待ってるの…』

『じゃ、旋盤兄いの俺でも万更らでもネエ筈だ、先ず安心…』

『したでしよ、あらまた土堤に出ちやったわ、ねエ利根川ってあっちか知ら、キラキラ光ってとっても綺麗ねエ』

宿で借りた下駄が夜露に濡れて、雲間を渡る月の動きは正に舞台装置満点ではあるが都合によっては今晚は夜明し

でもいゝ、そこら近辺にどうせ小舟の一艘位は見付かるだろう…と、足に委せて歩くうちに、少々腰がだるくなって来た。

『ねエ染坊、暗くって誰も来ないから、裾を捲くれよ…露でびしゃびしゃするぜ』

『そうね、少し濡れたわ』

うつむいて裾をパタパタはたくと、染千代はくるりと裾をからげて帯にはさんだ。

『序でに、もう宿に帰るばかりだから、いゝだろう…』

『なあに…あら、こゝで、また? 好きね』

『立ったまゝでいゝから手を後に廻わして御覧…誰も来やせんよ、用意がいゝって? 染坊が好きなんだからよう…』

私は土堤の窪みで染千代の両手を後に廻わさせて、例の細引で後手に縛ると、その儘女の身体を抱くようにして、一面よしの生茂る河原を一瀉千里に滑り降りた。

天地悠久にして禁断の木の実はまだ甘からずや…の文句は、この期に及んで通用しないだろう。寧ろ一介の職人、一介のおなごと戯れて悔ゆる処なしと銘記すべきか…でない、『痛いね、よしの葉って…もういゝでしよ、あら、駄目？ まだ気が済まない？ 脱ぐの？ こゝで？ 同んなじよ…はだけちやったわ、じやこのまんま河原を少し歩きましたよ、でも一寸前を合わせてよ、手が後じやどうにも駄目、こんな恰好夜でよかったわネエ…』だの、

『誰か来るわよ、嫌やねネ、河岸の立木にこんなことして、お座敷の柱の代りに柳の木は…まるで女蛙の磔みたい、こんな恰好っていいのか知ら？ 紅さんでなかったら、あたし泣いちやうわよ、もういゝでしよ、これ位でお仕置き止めて頂戴、一寸休ませて…ね、また縛られてあげる、どう、あそこに舟があるじやないの？ あの舟の中で充分お仕置き受けてあげる、うんと苛めて…それこそひどい目にあわせてもかまわないわ…だから一寸煙草

でもつけさせてよ…』

などと云う事は単に木の実をしやぶったただけでは出て来ない代物だからである。水郷と芸者の関係はと云っても、茫漠過ぎる云い廻しだから、最初から焦点をぐっと絞る必要があったが、フエチシストとサディストの両者が水ときものだけに描くポイントを求めるとしたら、その酔いしれた視野はおよそ次の限られた画面、いな一幅の額内に盡めくことで充分であろう。

『少し水の中歩かなけやあの舟まで駄目だよ、どうやら満ち潮だ、染坊、帯んとこまでたぐれよ、今度こそ濡れちやうぞ』

『そうね、難行苦行みたい、この位？ 嫌やだわ、いくらあたしでも…』

『夜目遠目傘の内だよ、そら腰巻が水につかっているぜ、今少し上にしろよ…』

『何んとかの富士川渡り見たいね、まるでホホ』

染千代は帯こそ細帯の博多だったが、ビンの組の長袴襦にメリンスの赤い腰巻を今や七分三分に捲くり上げての敢闘が効を奏して…やと舟に迫りつく…。

『ホホッ…余ッ程物好き二人連れね、宿じや心中したかと思ってるわ、真菰ってこれ？

初めてお目にかゝります、どうぞ宜敷しく…』

『おいおい冗談云わずに…ちやんと坐れよ、揺れるぜ…』

縁は異な物で、時たま逢う場所はたとい場末の待合であろうとも、乃至は下すびた飲み屋の二階であろうとも、思い出した時に顔を合せて…それも他人の線香代のおこぼれを貰って、冗談云い合うのが関の山、それが斯う間近かに想う姫御前を拝しちや、徒ら氣があとからあとから出るのは…当ったり前でしょう…

『そう、そんなに嬉しい？ ならこゝで一ッその事殺されちやうか知ら、ホホ…、裸になつて見ようか』

女の切実な願いが、この場で何んであろうとも、

『夜で御免なさいね、どう？ 白いでしよ、こゝん処…肉があるって、肥とってるのね、おゝ涼しい』とばかりパラリと肩から落すきものを隅にかためて置くや、クルリとお尻を向けて坐り、

『さあ、どんなにでもして頂戴…』と下半分赤いメリンスのお腰し一枚のまゝでククツ…と忍び笑う芸妓染千代…。私はこの絶好のチ

ヤンスを逃すことなく痴情作家、為永春水が美女の肌を見たら斯うもしたろう……とばかりいきなり染千代の両腕をかたく握り締め、肌に喰い入るように二巻、三巻き細引のあらん限りの無惨さを以て高手小手に縛り上げた。そして美女水に戯むると自ら題して、先ず偽作否悪作『春色水辺の白花』？なる、今様艶本の第一頁を試みようとしたのである。

『サア、このまんま水にお入り……』と縄尻取って優しく水に放ち、心を鬼にして『何処へでも舟を曳いて行けッ』と命じた。

手を添えて船縁から傾く島田の髷を気にしながら、せつなく水面に降りて行く女の身

歡義先生醫學相談欄

◎御遠慮なく御相談下さい◎

一、相談文は出来るだけ詳細にデータ御記入の上、読者係宛御送り下さい。質問者の秘密は厳守し、絶対他へ洩らすような事はありません。

一、相談文及回答は漸次本誌上に掲載いたします。用紙はどんなものでも結構です。都合悪き時は住所氏名を明記されなくとも構いません。

体は、次第に浮いて展ろがる腰巻をいとうことなく、舟で縄尻を持つ縄のたるみをピーンと張って、尺一尺この奇妙な人力舟は波面を滑った……。狂った大名は更に第二頁を計画しなければならぬ。

『お腹が冷えちやったわ、もういゝ？この位で……』

静かな入江の水面に小さな波紋を画いてザボザボよしをかき分けて戻って来る染千代の冷え切った乳房に頬を寄せてぐっぐと抱き上げ『辛らかったろうサアお上り……』と雫滴たゝる下半身の紅蓮の腰布と共に水から引き上げると、心の鬼は更に冷めたく、

『サア今度はこゝへ坐る、いやこれを股いで脚を降ろして御覧……』

と染千代の身体を船の舳の出張った処に坐らせる……が後が斜めに傾むいているから前方にこじむことは出来ず、縛られた両手をかたく握って不安な姿勢……なすな恋か、ちと惨酷だ。矢つぎ早やにその第三は小舟の真中に仰向けに大の字に……と云っても両手は後手に縛ってあるから両手は張れないが、下半身を大の字形にさせて横たえた……。

私は怪しくも捕われの人魚の如く、豊満な肢体にまつわりつく赤い腰巻が月蔭っては黒

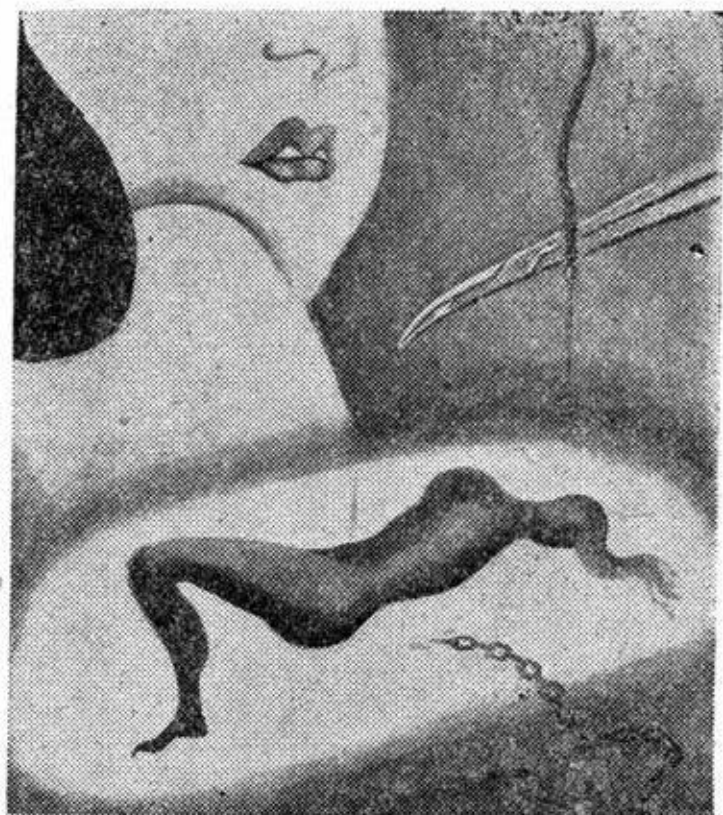
く、月光ってはほの赤く、よしの影を縞に織なすのを、その強いつ、好まれつ、広ろい水郷の里をこの一点に集めて、秘かに奏でる視覚の狂詩曲に、

『染坊ッ大揺れたッ……』と息もつかせず前後左右に小舟を揺すぶった……その波は、その波紋は生茂るよしからよしに次第に大きく広ろがって行ったのである……。

その後日譚——首に白いカーゼを巻き、心なしに小さな咳の二つ三つ、
『狙に乗った鯉が物を云って……御免なさいねホホ余んまり可愛がって頂いたんで……お蔭様で、ホラ……まだ冷えるのよ……』と崩した膝前からネルをのぞかせて染千代は微笑する……今は昔の物語り——。

(きものシリーズ第7話 終り)

【伝言板】OR・T(東京)氏へ、お便り拝見、最近の若い女性が身にびたりした緊縛感のあるブリーフ型の下着を好むのは事実でしょう。All Stretch doll Size blief とくうのはゴムの伸縮性を利用してギャダを入れであるのでしようが、肌に密着する事から考えて、一つのほゝえましい連想が湧きます。画を送られる際、お差支えなければアドレスも一緒に。



私のイメージ

手術室

(大好きな夢)

竹 谷 十 三

—まえがき—

御誌にイメージの企画の出来た事を心から喜ぶ一人です。私も常々いろいろのイメージを描いては消して楽しんで居りますが今日は、そのイメージから生れた夢の話をしてみましよう。十数年前妻のM子を失ってから、年に二、三回、多い時は、五、六回は見る夢なのです。内容は、大同小異で

すが、こゝ五、六年と言うもの、一つの完成された姿で同じ事を見ます。この夢は、妻を失った頃には全く見ず、新しい妻を迎えてから、ポツ／＼見出したもので、終戦後からは見る回数が多くなって来しました。夢の事ですから、矛盾、撞着の内容を持つて居りますが、私の潜在的なイメージを巧みに生かして呉れるので、私には忘れられない夢でもあります。

病院の廊下を私は小走りに走って居る。白いコンクリートの壁が監獄の様に続くのだ。M子がこのサナトリウムに入って居るとは、

今日の今日まで知らなかった。長い戦争中、M子は死んでしまったものとはかり思ってた私だった。それだからこそ、今の妻を迎え

たのだ。妻のS子は私を愛して呉れる。貧しいが子供も生れ平穏な生活が続いて居る今、突然、死んだと思っていたM子から、手紙が来たのだ。

「今、〇〇のサナトリウムに居ります。今度手術をすれば、完全に元気になれると思います。一日も早く、お側に帰える日を楽しみにして居ります。出来なれば、手術の日までに、入院費をお持ち下さい。……」

私は、ハッとした。大変な事をしてしまった。M子が生きて居るのに、S子を妻にするには二重結婚じゃないか。道徳的な問題より私は、今の妻S子も彼女との間にできた次女も

愛して居る。S子と別れる事は出来ない……
 と言って長女は、M子は。可哀そうなM子！
 あの病気の体で、戦争中、何処に居たのだから……何と言って、今の私の生活を説明したらよいのだろう……免に角、手術には立会わねばならない。

私は、苛立つ心を押え、走る様に暗い廊下を進んで行く。片側は病室、一方は窓があるのだが、全体が灰色で景色と言うものがない。

手術の前にM子に会って、話をせねばならない。私はM子の居ると言う病室のドアを開けた。そこは、施療患者の入る様な大部屋で、沢山の患者のベッドが並んで居る。

前は、妻の病室は個室だったのに、何時の間、こんな事になったのだろう。「そうだ。無理もない事だ。何年間と言うもの入院費を一銭も送ってやらなかったもの。キット、アルバイトをして入院費を稼いで居たのかも知れない。可哀そうなM子！生きてるなら、何故、もっと早く、知らせて来ないのだ。バカ！バカ！」と私は心で叫び、部屋の中をアチコチと目で探し廻った。居た！部屋の真中のあたりに、懐しいM子が、着物姿でベッドにチョコナンと坐って居る。傍に

は、白い服の看護婦が立って居た。私は、人々のベッドを掻き分けて近づく。「M子！」と叫んだ。M子は、血の気を失った白い唇でニツと笑った。「M子！話があるんだ」と私は、妻の細い手首を取ろうとした時、傍の看護婦が、私の手を払いのけた。

「もう、手術の時間ですから」と冷めたく言う。背の高い看護婦は、素晴らしい美人だが、何と言う冷めたい嘲笑をもって私を見るのだろう。

「あの……もう、手術のお時間なの。心配しないで……キットと元気になって帰えられるから」とM子が細い声で言う。「帰えられる？……そうだ……その事で、僕はお前に話があるんだ……」と私は、あえぎながら言った。

「手術の時間に遅れますから、奥さんは、病院の規則を破って居られるので、今日の手術は、普通の場合と違うのです……」

美人の看護婦は、もう一人の白衣の女が押して来た寝台車に、オロ／＼して居るM子が無理に乘せ、シーツを掛けるのだった。

「どうして……M子は病院の規則を破ったのですか……今日の手術は、何の手術です？」

看護婦達は、無言で寝台車を押して行く。私は、後を追った。廊下に出て、手術室の扉

の前まで来ると、美人の看護婦は、くると私の方に向いた。「オヤ！」と私は思った。何時の間にか、美人の看護婦は、K子になって居る。例の薄い唇に、限らない皮肉の笑いを浮べて私を見るのだ。

「ホホホ……そんなに奥さんが心配？　じゃこっちへ来るといゝわ。手術を見せて上げるから……」と私の手を取り、横の室に連れて行くのだ。私は、妻の寝台車が、手術室のドアに消えて行くのを見た。「元気で我慢するのだよ」と叫んだつもりだが、私の叫びは言葉にならないのだ。M子も、何か叫んだ様だが、聞えなかった。

横の室は、放送局のスタジオにある聴整室とそっくりで、暗く、二重の厚いガラス窓からは、前の手術室がよく見えた。医者と四、五人の看護婦が何かして居た。

「さあ、この椅子にかけて見て居るといゝわ。あんたは、私を捨てた罰よ。これから、あの女が、どんな苦しい目に会うか、楽しんで見るといゝ」とK子は憎悪をもった調子で言うと言から出て行った。

手術室には、まだM子が来て居なかった。キラ／＼光るメスだの、見た事もない怖ろしい道具が、中央のテーブルに並べてあった。

間もなく、K子の看護婦が、妻の寝台を押して入って来た。荒々しく、シーツを取られると妻は、素裸で、両手、両足は鎖で縛られて居るので。白い体と黒い鉄の台が印象的に見えた。

「手術の前に、冷水浴！」と医者の叫ぶ声が聞えた。この室はこちらから何を叫んでも向には聞えないのだが、向の声は、手に取る様に聞えた、K子を始め、看護婦

達は、M子を立たせ、天井から下った鎖で、両手を拡げて吊り下げた。M子は、長い病院生活の割に瘠せて居なかった。前から肥った方ではないが、スラッとした足、細い手首、しまった胸を除けば、全体に肉附きはよかった。特に、自慢の乳房は、美しく昔の様に黒々とした乳暈を持ち張り切って居た。

「奥さん、何をブルブルしてるの、口を大きく開けてるのよ、無料患者の癖に、手数を掛けさせて！」とK子は手に持った鞭で、ビシリ！とM子の背を打った。別の二人の看護婦は、前

と後から、ホースで、頭と言わず、腹と言わず、体中に水をシアジアと浴びせかけて居るのだ。M子の開いた口の近くに、K子は、別のホースで水を注ぎ込んで居る。M子の顔は、苦しそうにゆがみ、それでも、忠実に口を開いて居るのだ。髪は、ベットリと広い額から肩に濡れてかゝって居た。「バカ！ 口を閉じろ！ 水を飲んじや駄目だ！」と私は

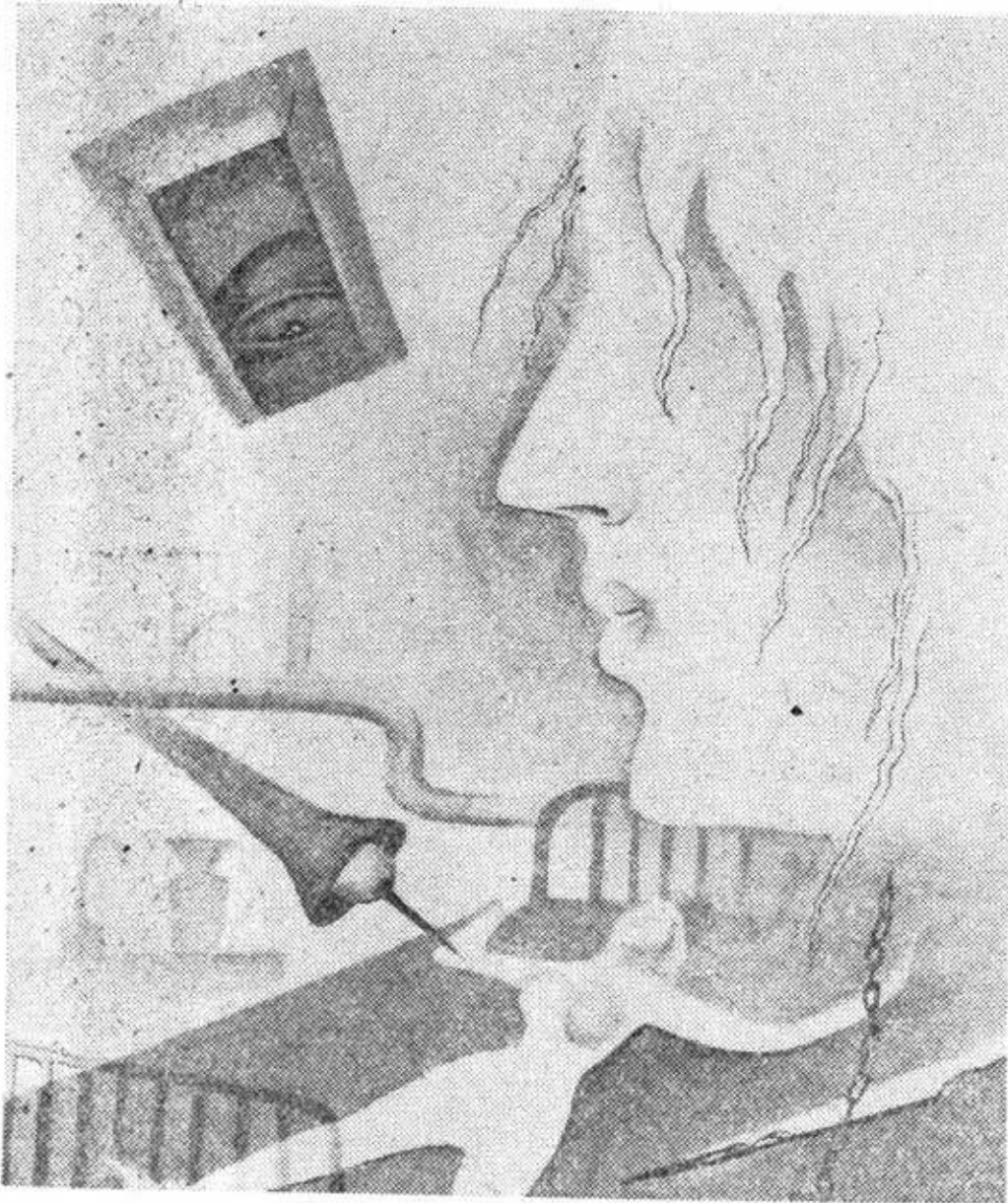
一生懸命に叫ぶのだが、勿論、妻には聞えない。

見る見る間に、M子の腹部は、臨月の様になる。水のため、ふくれ上って来た。

医者が独乙語で何か叫ぶ。やっと水責めは止った。M子は、ぐったりと鎖に吊り下って居る。手術台が持ち出された。それは、私の見ている窓の直ぐ前だった。M子は、看護婦達の手で、手術台に移され、首を低く、両足を拡げて、手術台が斜めになった。両手は台の脚に縛りつけられた。

「始めに、もう一度、気胸をやってみる！」と医者が言う。医者の顔は、よく見ると、私の友人三木だ。三木は、M子の前の恋人だった。三木の奴、何時の間、医者になったんだらう。そんな事を考える隙もない間に、大きなグロブの様な手で、M子の乳房をいじり廻して居る。そして、人工気胸の針をズブリと、右の乳首の真中に力一杯刺し入れるのだ。

「アツ！」とM子は、小さく叫ぶ。医者は、横のメーターを見て



居る。「どうだね、痛いかい。フッフ……少しも入らんない……よし、もう一方も、刺してみろ！」とK子に命令する。K子は、別の気胸針を乳首を力一杯曳いて、真中に刺し入れる。「先生……く……苦しい……アレッ……」とM子は悶える。医者も、K子も、手術台を離れ、別の仕事をして居る、M子の額には、玉の汗が流れる。褐色の両の乳首から細く血が流れて来た。両の乳首は、苦しそうな息使いで、上下して居る。

医者は独乙語で何か言う。皆、M子の臨月の様な下腹部に集った。一人の看護婦は、天井からの鎖にM子の両足を縛る。股を出来るだけ、広げさせて、何か機械を差し入れた。電気の流れるジイーと言う軽い音が聞えた。

「苦しい……もう、止めて……ウ……ウ……」とM子の両眼から涙をがとめどもなく流れて居る。「何故、手術するのに魔酔薬を使わないのだ。ひどい事をする。いくら、病院の規則を破ったって、余りだ」と私は、一人で憤慨して居るのだ。

「乳房に逆流電気を！」と医者が言う。K子が枕下に来て、何か気胸の機械を操作した。ブーン……ブルブルンと別の電気の音がすると共に、M子の針の刺さった両の乳房は、

次第に脹れ上って来るのだ。K子は、惨忍な顔でこれを見て居る。「アレ……電気は止めて止めて……お願いだから……」とM子が悲しそうに叫ぶ。乳房は、全体に桃色に充血して来た。そして、皮膚の下には青い静脈が痛々しく何本も見える。「奥さん、どう？、少しはこたえた？……ホホホ……こんな事では今日の手術は許されないんだよ。」とK子が下卑た調子で言う。M子の下腹部は、看護婦達が居なくなったのでよく見えた。臨月の様な腹には、太い針金が巻かれ、その処がクツキリとくびれて居る。両股の間には、何か電気機械がある。私は、目を再び、乳房に移した。乳房は益々大きくふくれ上って来た。皮膚には所々えみ割れて、血が流れ出て居る。

「もう、私は駄目……さよなら……アッ、苦しい、お乳がさける……」とM子が絶叫して居るのだ。

「本当だ！ もう、このまゝでは駄目だ。M子のバカ！ 何故、こんな手術をするんだ。電気を取れ！」

私は夢中で、ガラス窓を叩くのだ。可哀そうなM子！ 何も知らないで死んで行くなんて……いや、その方が幸福かも知れない。そ

れにしても、何と言う事だ。

医者は、平然と臨月のように膨れ上った腹にメスを入れる。ズブリと刺す。だが、不思議に血は出ない。皮膚が密柑の皮をむく様に取れ、腸や臓腑が見える。

「手術は、失敗だ！」と医者は、メスを投げると台を離れた。もうそこには、M子だけしか居ないのだ。乳房がクローズ・アップされる。も、ちがふくれて破れる様に、全体に桃色の乳房は、今にもパチリンと破れそうになつて居る。

「M子！」私は力一杯にガラス窓を打った。

目が覚めた。涙で枕が濡れて居るのだ。何時も、こうした場面で目が覚める。あれからどうなるだろう……私は、天井板を眺める。

そして、今の夢に、何とも言えない愛着を覚えるのだ。自分の手で、M子を葬ったのに何で、今頃まで、M子が生きてるなんて思ったのだろう。傍で、次女と妻のS子が、安らかに眠って居る。若し、夢の様に二重結婚して居たら、どんなに苦しいだろう。私は、再び夢ではなく、いろいろのイメージを描いてみるのだ。そして、再び、今の夢の続きを見ようと眠る。だが、それは見られないのだ。

『お天狗松、昔噺』

天^{てん}狗^ぐ鼻^{ばな}由^ゆ来^{らい}記^き

緑 猛 比 古

三 条 春 彦・画

——兄貴済まねえ、じやあ遠慮なく頂戴するぜ。今更兄貴に、天狗鼻の由来を話したって始まらねえが、これも酒の肴だ。春の夜の慰さみがてら、盃の間にくくぼつく話すとうしようか——。

あの時はもとく、あっしが悪いんだと云えばそれ迄だが……、この道でイカサマを使えば、指をつめるくらいのは事は未だやさしい方だ。江戸下谷、車坂の賭場で、このイカサマが曝れた時は、もう駄目かと思つたよ。この辺り一帯は、髭の仁吉親分の縄張りだが、その時の鉄火場のなぐさみは、例の丁半ばくちじやなくて、余り素人衆のやらねえ大目小目と云う、賽のうち四より六までを大目、一より三を小目と云う、三ツ賽を壺皿に入れて振るやつだった。江戸ッ子はいいつを大目と称んでいるが、上方辺りじやこの大目小目の

バクチを、小目の目を省いて、上の三字だけで呼ぶ変テコリンな呼び方をしているらしいが、こいつは女子衆が恥しがっていけねえ。あっしは手のこんだ、小目許りの出るカラクリ賽をうまくすりかえて、盆が廻ってくると、二度に一度は使っていたんだ。

見破つたのは、仁吉親分の横に座つていたお吟姐さんだったが、これが素を質せば凄惨な鉄火女で、女ばくち打ちでは姐さんの右に出る者がねえって程の凄腕だって話だ。何でも太腿の附根にかけて両股一面に、真赤なちらし紅葉が彫つてあるところから紅葉のお吟で通っている女だ。負けがこむと、白い脛からこのちらし紅葉をちらつかせて、紅葉の奥に眼を奪われる野郎共が、うろちよろする間に素早いとこ勝を占めようって段取りで、仲間も相当悩まされていた

そうだ。縁あってか仁吉親分の妾に納まって、その頃は姐さん／＼と奉まつられて、鉄火場のテラ銭を数えていたんだが、乾分共を顎で使って、荒くれ男にもまれていたから、あっしなんぞ屁とも思っ
てやしねえ。

あっしが、例のカラクリ賽を素早く嵌め込んで、今正に壺を掛声諸共あけ様とした時、するどい声で、「お待ち」と云う声がかゝった。失敗った！と思って、咄嗟に壺中の賽をすり替え様として手をそえた時、姐さんの白い手が、壺ごとぐっとあっしの手を上から押

えていたんだ。

相当に年季の入れた、あっしのいかさま賽も、お吟姐さんには飽気なく見破られちまったね。あとはおきまりでさあ――。

ローソクの炎が、ジワジワとあっしの足許から這い上つてきやがったから耐らねえ。宙ぶらりんのまゝ……………。



何とかその場を繕って、盆はつゞけられた様だったが、あっしは有金そっくり捲き上げられた挙句、その場から乾分共に引立られて、ボンと裏の土蔵にほり込まれた。逃げようたって、いきのいゝ若い衆にぐりりと囲れちや、暴れてみたって、どうなるものでもねえ。えゝい儘よ――、とゴロリと横になって、それからどれ程眠ったか……。

不意に、横ッ腹をいやと云う程蹴り上げられて、驚

いて飛び起ると、五、六人許り乾分を従がえた姐さんが、凄く悩ましい、そのくせ腹の底まで見透かす様な切長な眼付で、じーっとあしをにらんでいた。

「イカサマを使うと、どういう事になるか、勿論お知りの上だろうねえ——」

あしは一言もねえ。

「お客人衆をだまぐらかしたお仕置は、指をつめるくらいじゃ済まされないよ、それくらいは覚悟しているだろうねえ」

と念を押しやがる。あしも男だ。今更シタバタした処で始まらねえ。煮るなり焼くなり好きな様にしてくれと、ふて腐れて大胡坐をかくなり、ぐいっと姐さんをにらみ返してやった。

「フン、いゝ度胸だよ。見れば少しは苦味走ったいゝ男じゃないか。あたしや、お前の様ないゝ男を、責めてゝゝ、責め抜くのが大好きと云う因果な性分だねえ。仁吉親分も承知の上で、この役を買って出たのさ——」

尻尻巻に三日月額、抜ける様に色の白いこんないゝ器量の女が、こんな恐ろしいことを平気で云やがるから、一層ぞーつとして来やがった。こいつは一体どんな目に逢うんだらうと、腹をくゝっていたにも拘わらず、あしは胸がドキドキするのを押えられなかった。

姐さんは乾分共に命じて、あしの両手首を太い縄の一方でかく縛らせると、縄の端を土蔵の一抱えもありそうな垂木にかけて、ずるゝと引張り上げ、見るゝ宙にぶら下げた。足の爪先が、床から一尺許りも浮いていたかねえ。

「あたしが呼ぶ迄は、誰も這入ってくるんじゃないよ。いゝかえ……」

……

姐さんは乾分達を土蔵から追出すと、ガラゝゝと重い扉を閉めて、ピチンと内側から錠を下し、扉の網目から内側が覗けない様、ガラクタの戸板を扉に立てかけた上、あしに近附いて来た。

「さあ、そろゝ折檻にとりかゝるとしようかねえ」

にツと仇っぽい眼付で、あしの顔を見てから、まるで折檻するのが愉しくて耐らぬかの様に、じわじわとあしの帯を解き、袷せを剥ぎ、腹帯の三尺をぐるぐると外し、最後には褌までも外しちまって、素ッ裸にしてしまいがった。

「おや、見かけによらず、ふつくりしたいゝ体をしてるじゃないか——。こいつは責め甲斐があると云うものだよ。もっとも責めたって殺しはしないから安心おし。だけど、チツとは風当りが強いかも知れないから、覚悟はしておくさ。責めるあたしを恨まずに、手前のイカサマ根性をたんと恨んどくがいゝさ」

姐さんは、あしの体をしげしげと見つめ、平手でピシヤリピシヤリと尻ツペたを五、六度ぶってから、^{ガシッ}蠟燭の灯を、半分程に減った八ツ匁ローソクにうつした。

一瞬明るさをました土蔵中で、姐さんはキラキラ眼を輝かせ、そのローソクをあしの吊り上げられた足の下に置いたものだ。

炎の熱が、ジワジワとあしの足許から這い上って来たから耐らねえ。宙ぶらりんの儘、両足を踏めたり、縮めたり、開いたりして、空中で奇妙奇天烈な踊りをおどった事だらうよ。それを姐さんは、さも面白そうに、立膝を崩して下から眺めているんだから叶わねえ。思わずあしは悲鳴をあげたね。

「ホホ、大分温ったかくなってきたようだね。未だ春先だから、ち

っとは温たまる様にとの、あたしの親切な親心なんだよ。余んまりジタバタするのなら、熱くないようにしてやってもいいよ」

姐さんは袂から細引をとり出すと、あっしの足首を片方ずつ別々に縛って、土蔵の板壁に、股が裂ける程ぐっと引っぱって結いつけた。宙に両股が大きく開いた恰好で、身動きも出来ず、焦熱からは助かったが、手足がひきつれて喰い込み、千切れる様に痛い。

姐さんは弓折れを拾ってくると、そいつを片手に握った。

「ちよいと若い哥兄さん、これで叩いて、いくつ位まで辛抱出来るかい？」

ときゝやがる。業腹だから、えゝい気のすむだけなぐれ。叩くだけ叩いて早く降ろせ。と怒鳴ってやった。

「ホウ、いくつでもいゝのかい、いやに豪儀で威勢のいゝ哥兄さんだこと。じゃあ、お言葉通り気のすむ儘叩かせて頂くことにするよ」

ピシリピシリとどれ程擲られたか。あっしはもう体中の感覚がすっかり鈍ってきたから、いくら叩かれてもさしてこたえねえ程に痺れきつていたんだ。何だかふわふわと、雲の中を夢中で泳いでいる様な気持だった。ピシリピシリと皮膚にはねかえる弓折の音だけが、うつゝにどこか遠くで聞えている。痛いなんて神経は、もうとくくの昔にけし飛んで、うつらうつらと宙でさ迷っていたのだ。

流石に姐さんも、打擲の手を止めてハアハアと肩で息をし乍ら、みゝず腫れの一面に這った。真赤なあっしの体を、しばらくは凝っで見つめていた様子だった。が、それもブーツとした、微かな記憶にしか残ってはいねえ。

姐さんは何と思ったか、ソット踴むとハッ奴ローソクを手を持っ

て、あっしの身体に近づけた。熱さに蠕動する肉体に、シリシリと毛の焦げるいやな臭いが鼻をついたのを、うっすら覚えていたが、それから、どうされどうなったのかあっしは知らねえ。

ザブリと手桶の水を顔に浴びて、あっしはハッと気がついた。いつの間にか体は降されて、土蔵の板間に長く伸びて転がされていた。

股倉がピリピリと熱けつく様に痛みやがる。あっしが気を失ってからも、いろんな悪戯をしたらしい。腹ペコの癖に、妙な吐気が催おして胸苦しく、体中がカアツと熱をもってはれ上った様だ。気を失ってから未だいくらか刻が経ってはいなかったらしい。

「フン、案外意気地なしだねえ。これは未だ未だ序の口だよ。今夜はこれで勘弁しておいてやるけど、明日のお仕置がたんまりと残っているんだから、ゆっくり体を休めとくがいゝよ、おまんまだけはお情けで運んでおいたからね」

姐さんは弱りきったあっしを、邪慳に後手に振じ上げて、轟しと縛ると、腕の附根のもげる程に吊り上げ、長く余った縄を首に巻いて乳の上で一結びし、真直ぐに股に通して背に廻し、吊り上げた両手首につないで緊つく結んだ。手を下げると首が締まるし、上げりや股倉の焼け爛れが飛び上る程痛むし、身動き一つ出来っこねえ。前踴みになったあっしの体は、吐く息も苦しく、切なくあえいでいた。両脚も揃えて縛られ、その縄尻と大黒柱にまきつけて、解けぬ様上の環で結ぶと、姐さんは白い脛をチラリと覗かせて、ボンと軽く頭を蹴ると黙って出て行って仕舞った。

素ツ裸であっしは、深々と更けて行く夜寒に慄えて、一寸先も見えぬ闇に氷の様な体をソーッと横たえていた。フツと沢庵の匂が微

かにしたので首を振ると、顔すれすれの処に、皿にのせて大きな握飯と沢庵の切れっぱしがある事を知ったが、薩張り喰い気も起らず、第一この姿じや咽喉を通るもんじやない。

今迄こらえていたが、辛抱出来ず、その儘の姿でいばりを垂れた。あっしの体を生温かく伝い、それが見る見る冷えて、つめたく体半身を濡らした。

そんな哀れな姿でも、今日一日の極度の疲労に耐えかねて眠むったのか、うなされた我が身の声に眼を開けると、高い明り通りの小窓から、朝の洩陽がさし込んでいた。骨の髄までも、もがれる様に痛み、こんな身動きすら出来ぬ姿で、よくもまあ眠れたもんだと、我乍らつくづく感心したよ。多少は縄目もゆるんではいるが、喰い込んだ縄のため、手足とも、まるで死人のようにつめたく白くなって、何の感覚もなかった。

一人の乾分がねぼけ眼で、扉をあけて這入ってくると、又一ケの握り飯と沢庵を置き、戻りかけたが、何と思ったか、股ぐらを通した縄と首縄をとくと、後手を縛り直してくれた。あっしは死んだ様になって、薄目をあけてその様子を見ていたが、なすが儘に任せていた。奴さん、あっしのたれた尿を見て、鼻をつまんで出て行ってしまった。



夜がくる迄誰一人覗かねえ。もう性根も身体もくたくたになってしまったね。姐さんに縛られたのよりは、大分楽だが、後手に変りは

ねえ。まるで犬の様に口で握飯を噛み、味気ないシヤリをほうばっていた。

あっしは又垂れた。こいつ許りは我慢が出来ねえからな。我と我が身で気色悪く、腰の辺りを濡らし乍ら拭いも出来ねえ。悪臭はブーンと鼻をつくし、全く情なくなっちゃって、いつそバツサリと、あっさり殺られた方が、反ってラクな様な氣になって来やがる。

成の刻だろうか、遠くで五ツを告げる鐘の音が聞えた頃、姐さんが静かにあっしの前に立っていた。姐さんは大仰に顔をしかめると「厭だねえ、とんだ御馳走をならべたじやないか。フン、そうかえ、あたしのやった握り飯は不服だから、その腹いせにやったと云うんだね。」

チエツ、勝手にしやがれ。こいつが我慢出来るものならやって見ろい、いくらお面の綺麗な姐さんだって、排すものは同じじやねえか——。とあっしは啖呵をきった。

「云ったわね、莫迦におしでないよ。その憎い口を二度と云われぬ様にしてやるから——」

睨をつり上げて姐さんは出て行くと、一人の三ン下を引き連れて戻って来た。二人して縛ったあっしを太黒柱まで引曳いて、柱を背に、その上から尚も三重四重に柱ごと縛り上げて、一寸の身動きも出来ぬ様にしておいてから、

「半次、こいつにこの御馳走をたべさせておやり」

「へい、どうするんで……」

「莫迦だねえ。そこに落ちている板片で、お客人の御馳走を掬って喰べさせておやりと云っているんだよ」

三ン下の半次って野郎は、途迷った様子で、それでもやっと姐さ

んの云う意味がわかったのか、片方の手で鼻をつまみ乍ら、そいつを板片で掬い取ると、あっしの口許に差し出しやがった。

「おい、喰えてよ——」

あっしは齒を喰い縛って、今輪際口を開かぬつもりだった。

「おや、この御馳走が喰べられないって云うの。半次、ちよいとそいつの腋腹をこそそと擦ぐっておやり、そうしたら口を開くから……」

半次の手が、腋で動くのに耐らず、呀ツと口を開いた瞬間、齒と齒の合間に、姐さんの握っていた鉄火箸が素早くかまされて、半次の野郎は、あっしの下顎に手をかけて、力任せに口を開かせせようとした。

「口を動かすと面倒だから、中へ突つかい棒をしておやり」

半次奴、こじあけた口の中へ、短い木片を差し込もうとしやがったから、あっしは思い切り、やつの指先にガブリと噛みついてやった。糞ツ、死んだって離さねえぞと、ギリギリ力を入れたら、血が口中にたまり、奴のたまげた悲鳴もものかわと、遂に一心は恐ろしいもので、奴の中指を噛み切ってしまった。悲鳴をきいてかけつけた乾分が四五人、あっしを滅多打ちに、人相が変る程擲ぐった挙句、「こいつめこいつめ」と云い乍ら皆んなでよってたかって、例の御馳走を無理矢理口に押し込み、棒でグイグイ喉の奥へ通してしま

った。

「うふツ汚ねえ、ついでに掃除をさしてやろうじやねえか——」
その声であっしは皆なに押えつけられ、後手に縛られた儘這いつくばって、板間にこびりついた御馳走や、唇の辺りのを綺麗になめらされてしまった。

始終姐さんは、体も動かさずじっとこの態を見ていたね、度胸のいゝ女だよ。

「この糞ッ喰い奴、半次の事を考えりや、いくら責めても責めたりねえが……。どうしましよう姐さん——」

「いゝから、後は私には任せて出てお行きよ」

姐さんの声で、乾分等は渋々、そろそろと出て行った後、

「フフ、嚙かし美味しかったろうねえ、どれ喉が乾いただろうからいゝお茶なと差上げるとしようかねえ」

姐さんは土蔵の二階物置にあがる様にかけてあった梯子を、やっこさ外すと、ドスンと床に横たえて、あっしを仰向けに梯子の上に寝かせ、雁字搦目に縛りつけると、梯子の両端に箱をかませて、床から四、五寸程高くした。あっしの髻ツ節を掴んでサンバラ髪にした姐さんは、それを束ねて梯子の棧に巻きつけて結え、頭や顔がヒタとも動けないのを確かめてから、

「そうざらには見られないものを拝ませてやるからね、目を開いてたら罰が当ると云うものだよ。」

姐さんはそう云うと、あっしの両眼を指先でコツコツ叩いた。この上どんな事をされるのだろうと、あっしはもう生きた心地もなかったね。

緋ちりめんの湯文字があっしの眼の前で、パツと二つに割れたかと思うと、かねて噂にだけは聞いていた、ちらし紅葉の眼も綾な刺青が、思わずあっしの眼を奪った。姐さんは大胆に、あっしの顔の上に馬乗りになると、さっと、勢よくはね上げたものだ。

紅葉の散る岩窟の奥から、温かい泉がシューッと勢よく走り出す音がして、途端に、あっしの口から鼻孔から、苦味のある塩酸つぽ

いものが、避け様もなく一面に注がれ始めた。

ブーンと女くさい匂いがもうろうとした脳裡に嗅ぎとって、あっしは無心でされるが儘になっていた。

「口、口を開けるんだよ」

姐さんの上づつた声につられて、あっしは思わず口を開いていたね。

勢いよく流れ込む、いゝお茶を、あっしは無我夢中で顔をしかめ、ひきつらせ乍ら、ゴクゴクのど仏をならして、胃袋中へ送り込んでいた。

「どう、さっぱりしただろう。じゃあ又明日のことにして、今夜はこれで引揚るとするよ」

素早く身支度を整えた姐さんは、仇な眼付で、ふーつと何故ともなく溜息をついて、あっしを梯子に縛りつけた儘、よろめく足どりで出て行ってしまった。あっしはお吟と云う女の、つくづく変った反面を見せつけられて、この異常な女に、これから先どの様な責めを受けるのかと、そぞろに空恐ろしく、ぐったりと死んだ様になって伸びていた。

入れ換り扉の重い音がして、半次がのつそりと這入って来やがった。

「やいやい、よくもよくもおいらの指を噛切ったな、どうするか覚えていろ、姐さんさえ留めなけりや、鵬り殺しにしてやるんだが……」半次はあっしの髪を大掴みにすると、ゴツリゴツリと梯子の棧に何回もぶち当たった後、足許の方から梯子を立て掛けて、あっしは梯子に逆か縛りの恰好になった。ぶち当てられた頭がクラクラしているところへ逆さにされたものだから、あっしはうーんと気が遠くな

ってしまった。

再び息は絶え絶えだった。元の姿勢で寝かされていたが、半次奴殴りつけたのが、鼻血が顔一面を染めている様で、グスグスと鼻の奥がむず痛かった。馬糞くさい尻切れ草履で、あっしの顔をふみに



脊

じりやがったが、あっしの顔はどうせあんころ餅の様に、ふくれて歪んで汚れている事だろう。

ほんやりと霞のかゝった頭に、チカチカと姐さんの仇っぽい艶な眼付が浮んでくるさえ、我乍ら情なく思うのに、あれ程責めさいなんだ姐さんの、白い脛、ちらし紅葉の内股を、うつゝ幻に思い浮べるのが、不思議な気持だった。

夜がくると姐さんが重い扉を開けて、独りで這入ってきた。

「おやおや何だいその顔は、折角の色男が台無しじゃないか——。火責め、水責めで大分こたえただろう。さあ今夜は、最後のとどめを刺すとしようかね。と云っても命までとは云やしない。このあたしを思い出す様に、チツといゝ置土産を残しておいてやろうと思つてね」

縄をとかれても、すっかり抵抗する力を無くして、梯子からドサと丸太の様に転がり落ちたあっしを、姐さんは大黒柱まで引曳って行き、又も身動き出来ぬ様縛りつけると、袂から針の束ねたものと、墨皿をとり出してから、そいつであっしの体をあちこちブツブ

ツ突いて見た。

「まだ大丈夫らしいよ、じやあ、やるからね——」

姐さんはあっしの前に踏み込んで、臍の下二寸許りのところから針先を入れて、墨を含ませては、一気になにかを彫り始めた。ブツリブツリとふき上る血を濡手拭で拭うと、姐さんは懸命に仕事を続けた。もはや痛い、苦しいてな言葉で云い尽せぬ地獄の責苦に、あっしはヒューヒューと泣き続けていたよ。

「さあ、出来上ったよ、見たいだろう、ホレよく見るがい……」姐さんは懐ろ鏡をとり出して、あっしの眼につく様に、今彫った箇所を照らしてくれた。天狗の顔の輪郭と、眉、眼の荒彫りがそこに出来上っていたんだ。

「鼻はお前のその立派なので、丁度よく似合う筈だよ。ホホ、我乍らよく出来たこと——」

あつは本当に泣いてしまったね。何と云うことだ、これじや可愛い女に恥しくて覗かせも出来やしねえじやねえか。

「その鼻が、この天狗にふさわしい状態になった時は、嘸かしみものだろうよ、刺青自慢に出してやりたいくらいだねえ——。さあ、あたしのお仕置はこれでお仕舞だ。と云いたい、半次の指切りの貸しが未だあったわね。半次の半間な野郎に代って、あたしがおとしまえをつけといてあげるよ。いゝかい——」

姐さんは凄く笑いを浮べて、大黒柱の後側に廻ると、痺れきって何の感覚もないあつしの指先の、爪と肉との合間に、一本一本先程の刺青の針を抜いては差し込んでいった。ポトポト血のしたゝるのが分つてい乍ら、あっしの指先は既に痺れ切っているのか、さしたる痛みも感じなかった。それより下腹の、一気に仕上げた天狗の上

半面の荒彫りの跡が、気の狂いそうな激痛を呼び起していた。姐さんは縄をとくと、バツタリとその場に昏倒したあっしを尻目に、もうそれから二度と現われなかった。

乾分共がドヤドヤと入れ替りに入って来て、

「おや、こいつ意気な文身をして貰ったぜ。女が見たらキヤツと騒ぐぜ。ついでにこれからイカサマの出来ねえ様、こいつの腕に『この男いかさま師』と彫り込んでおこうじやねえか——」

わいわい騒ぐのを、うつすらと微かな意識の中で憶えていたが、乾分共はよってたかって、あっしの右腕にそんな彫り物をした後、爪と肉との間にさし込まれた針はその儘に、裸の上からボロの浴衣一枚かぶせられて、皆にかつがれて、上野山下辺りに捨てられたんだ。

よくもまあこの三日間、生き長らえて来られたと、我乍ら感心するよ。

まるで片輪見てえな姿だった。運よく情ある人に救われて、指先の傷も癒りや、うわべから見た処、どこがどうと云うことはねえ。すっかり江戸の地にいや気がさし、日本橋を七ツ立ちして、中仙道を西へ西へと突っ走ったが、行く先々の宿場でも、灯の入らねえ時は未だしも、已れ自身に気がさして、一向に深間の女も出来っこねえ。天狗がにらんでいたんじや、弱い女なら気絶もしかねまいからね。それでも人の噂は莫迦にやならねえ。宿場宿場の女のとりどりの噂が、あっしのこの天狗鼻を知っているのか、いつとはなしに宿場女郎や、あっし達仲間がお天狗の松と呼ぶ様になった。偶には物好きな女もいて、一度でいゝからその天狗鼻でこずかれて見たいなんて吐かしやがる。えゝい糞、こうなったら一層逆に、天狗鼻の

松お天狗松で通してやれと、その気になると気も楽で、別段自慢にもならねえが、隠しもしなくなったと云うわけさ、とんだ天狗鼻の由来さ。

お吟姐さんは、風の便りじゃ、何でも、いゝ情夫が出来て、手をたずさえて仁吉親分のところをずらかって、逃げ廻ってるって噂だ。親分カンカンになって、お吟をとつ捕えたら、唯じやおかないっていつてるそうだが、あっしも又いつかあの女と逢う時があれば、このお礼だけはしたいと思ってるね。

いかさまばくちを止めちや、おまんまの喰上げで相変らずだが、あれ以来めっきり気弱くなった様だ。それよりか、皮肉な事に天狗鼻が、反ってあっしを一つぱしの色事師にきたえ上げた様で、こい

つは姐さんに逢った時、礼を云わずばなるめえ。
紅葉狩に天狗じやお芝居にもなるめえが、しっぽりと散らし紅葉にはさまれて、可愛がってもらいてえと、天狗鼻がしきりにねだるのさ。

駿河辺りで、この天狗鼻が一騒動やらかした。こいつはイカサマじゃなかったが、そんな女出入の一悶着や、バツタリと上方でお吟姐さんに出くわしたその時の件りは、又この次に譲るとしましようかい。どうも兄貴、とんだ散財をかけちまったねえ——。

(第一話 終)

告白と手記と体験

懸 賞 募 集

★ 賞 金 ★

優 作	一篇に付き	三 千 円	若干篇
秀 作	一篇に付き	二 千 円	若干篇
佳 作	一篇に付き	一 千 円	若干篇

規 定

- 一、枚数は一篇十枚から三十枚程度まで。
- 一、必ず未発表のものたること。
- 一、原稿第一頁に懸賞告白と朱記のこと、原稿の返却は致しかねます。
- 一、締切は定めませんが入選作品は最近号に発表します
- 一、賞金は入賞作品発表後一カ月以内に御送りします。

◆ 告白記の募集 ◆

- 一、上記の懸賞とは別に月例通り皆様の真実あふれた告白記を募っておりますから、どしどしお寄せ下さい。
- 一、文章の長短、用紙、書き方等一切御自由です。
- 一、投稿者の本名や其の他一切の個人的秘密に関する事項は厳重に秘匿いたします。誌上への発表は匿名で結構です。御安心してお寄せ下さい。
- 一、誌上へ掲載した分は掲載後相当謝礼を差し上げます。
- 一、原稿は一切御返戻申し上げかねますが、係よりの連絡は出来る限り差し上げます。
- 一、原稿の御送付には開封の上第五種郵便百瓦迄八円にて御願ひします。

(編 集 部)

晴雨私稿

血染の毛綱 (三)

伊藤 晴雨

明治、大正、昭和の三代を通じて、被縛小説を書いた特異の文芸家の先駆を為すものは江見水蔭であろう。後には大衆文芸家の作品に現れた幾多のそれがあるが、それは戦後の流行(?)に便乗したもの計りである。

先日渡米して好評を博した日本舞踊の吾妻徳甫は日本舞踊が外人の好評を博したのは、日本髪のかつらの美しさに依ってだと、羽田飛行場で出迎えの人々に語った事は事実其物である。自然に生えた人間の髪を不自然な形に結んで、三百種以上に及んでいる事は世界に類例のない事で、日本髪は今日の若い人に

は何の感銘をも与えるものではないという一部の方々の御意見には賛成するが、外人が褒めたからといって、それが全面的見方だとはいえないにしても、櫛や簪の力を借りてその美を増す日本の結髪美術は世界に冠たるもので、高島田に振袖の美しさは結婚式場に於てのみ見る美しさであると私は信じている。

故人水蔭は私にこんな話をした。目黒不動の附近は昔は竹藪が多かったが、此処を歩いていると竹藪の中に縛られた女の悲鳴が聞えて来る様な気がするといった。(水蔭は一寸した画をかいた、最初は画家になろうと

して当時の東京美術学校の入学試験に落第して小説家になったという)而して此挿絵のよいうな裸体人物の戯画を私に送って来た事があった。

「娘巡礼」という、水蔭作の探偵小説は博文館の「太平洋」という週刊雑誌に掲載したもので、巡礼の娘が熊野の山奥で藤蔓で立木に縛られて殺されて居る。巡礼を連れて歩いて居た親爺が娘に惚れて居たので、犯人は親爺と見込みをつけた警察が其親爺を捕えて調べて見ると意外にも其犯人(?)は紀州の山中に住むゴリラ(其時分ソナ大猿が居たかどうか)で、強×された居る部分の毛によってそれが証拠立てられ、青年隊を組織して大猿退治をするという怪奇極まるテーマである。挿絵は故山中古洞で結綿に結った美しい娘が藤蔓で立木に縛られて居る図で、古洞の妹の某という女を縛って写生をして、当時としては極めて新しい描法で、問題作であった。後に浅草の常盤座で上演された事がある有名な作品で、今でも覚えて居る人があると思われる。

嘗て私が、「責の研究」というガリ版刷りの単行本を出版した当時は、警視庁が八ヶ間敷く、これが直接原因となって、私は検事拘

留十日間のお灸を据えられ、東京全市の古本商を驚かせた事があった。其本の冒頭に書いた或少年「五郎ちゃんの咄」という、女を縛って責め殺す見世物の咄を書いた事があったが、それと能く似た事を水蔭氏は考えて居た。其結構を思いだして挿絵にする事にした。

飯綱婆アの咄は水蔭氏が信州の戸隠山探険から得た材料を小説にしたもので、交通自在、天馬空を往くかの面白さがあって、我々被縛党にとっては奇想天外のものであるので、私がこれを書いて故人の腹稿に私の想像を加えて題名とした訳である。

原本を焼失してしまった事と、手元に日本小説年表がないので、著者名は忘れたが天保頃の読本（と覚えて居る）に本朝悪狐伝という股の姐妃を其儘日本の一国女と合併した様な悪狐が美女に化けて殿様をたぶらかし、領内の美女を縛って惨殺するという、一寸振驚亭を思わせる様な通俗小説がある。其中で一寸変って居るのは、二十人の美女を東西に別けて残らず白衣を着せて之に白刃を持たせて斬り合いをさせて、勝った方の命を助けてやるという、殿の面前で斬り合いをさせる所が凄惨である。

十人ずつの美女が髪を振り乱して斬られて

悲鳴を挙げるもの、傷けられて命を助かろうとして防ぎ戦うものが入り交って互に血を浴び、白衣が血の為に真ッ赤に染って、終に相方共刺し違えて死んで了うのを、一国女式の女は喜んで見て居るといふ場景が微妙に描かれて居るが、流石に原本の挿絵には血の流れて居る所は描かれて居ない。北斎か柳川重信でもあったら、一面に血を流した処を描いたかも知れないが、此本ではアッサリと至極綺麗にかいてある。恐らくは読者の興味を中心として凄惨な光景を避けたものであらうと思われる。

目黒の竹藪を私と二人で歩いて居る時、こんな咄を仕乍ら縛られた女の想像図を作って居た事があった。

現豊島区巣鴨町（巣鴨のとげぬき地蔵の裏手）にある旧水戸邸の一部に奇怪な石像が並んで居て、茲は白昼でもゾツとする様な場所である。国鉄駒込駅の手前を六義園の方へ出て、三叉路を右へ三丁程行った左側に役の行者を祀った小堂があって、某氏の邸内になつて居るが、参拝は自由になつて居る。茲は昔、水戸齊昭郷が幕府から幽居を命ぜられた邸趾の一部で此の役の小角の祀前に並べられた奇怪な石像は十数体ある。高サ八尺程ある

布袋だの、鬼又は寿老人（？）其他何れも醜惡な石像斗りが並んで居て、此の石像へ女を縛りつけたら物凄いに違いないからと水蔭を誘って見物に行った事があった。

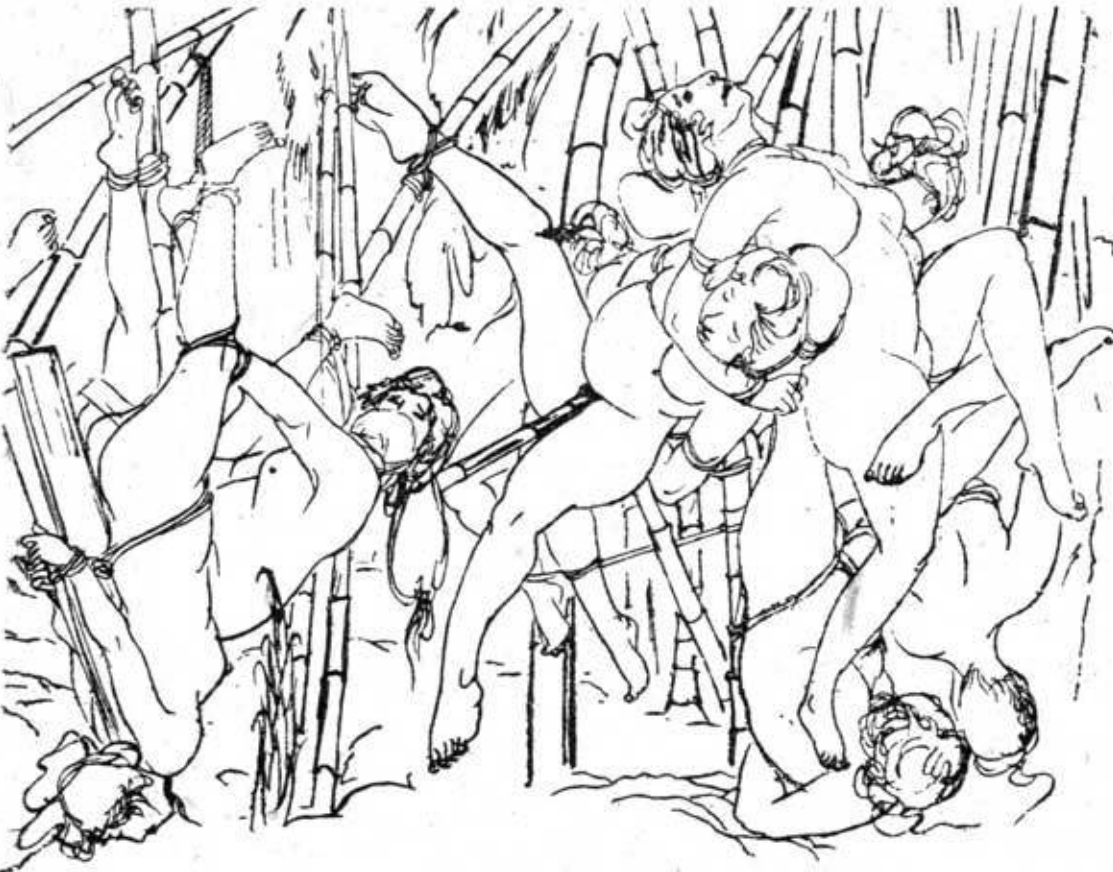
丁度其頃今の王子電車の梶原という駅の附近が一面の田圃であつた頃で、三角寛の材料になりそうな山窩のセブリがあつて、これを見て書いた水蔭の小説が牡丹族であつた。牡丹族という一群の山窩が文化の浪、文明の風に圧迫されて人を呪い、社会を呪い、山に入つて都会人と闘う生活を描いたもので、泉鏡花の風流線に出て来る正義人道の為に腐敗し切つた官僚政治に挑戦する鉄道工夫の一群が家を焼き、婦女を掠奪するのと符節を合せる様に一致して居る。山窩に捕われて凌辱されるのは、上流社会の虚偽な生活をして居る夫人や令嬢であるから正義観念があるのと、最後に警察の手に全部捕われてしまふ処で危なく上演禁止の厄に遇わずに通過さして居る。

.....

本誌の読者で自ら女装して縛られるのを楽しんで居るといふ記事や写真を見えるが、女の髪をかぶり、女の着物を着て、自ら喜びを感じる人は髪の色が匂いと、長い毛髪が自分の肌伝に伝わる感触に胸のときめくを感じ

る人であるに違いない。女形で責場に特に興味をもつ男性は自分の顔にかゝる乱れた髪の毛に異様な興奮を感じるといふ事は争われない事実である。

女の髪の毛から指頭に伝わる一種靈妙な感触は責場の女のみが持つ特殊のものであつ



て、それが或る人には強く態じる場合と、又或る人には全然感じないで、反対に髪の毛の油の匂いと、手にかからまる毛髪に嫌悪をさえ感じる人があるのは、私の多年の経験計りではハッキリ云い切る事は出来ないにしても、見当違いでは無いと思うのである。

女を責める場合、女の髪の毛を掴んで引く張ると女の頭の髪の毛の根に強痛を感じる。これが責めて居る人に一種の電流の様に感じる様になれば、責められる女と責める人との交流が完全に出来て、相方共楽しさを感じる時である。

こうした相方の合流した微妙な神経作用は実には人々によって周期的に相違するものであつて甲が責めを望んで居ても乙は必ずしも責めを望まない場合もある。云い替えれば「男の月経」とでも云う可きであろうが、医学上には男の月経は有る可き筈は無い訳であるが、俳優の女形にはそうした、月経に似たものを持つて居る者が多いのは事実で、私の体験は之を否定し得ないのであつて、此場合勿論責める者と責められるものは同性愛の関係があり、責

められ乍ら一種の分泌物を洩らす様な場合があるが、其分泌物を分析した結果を発表する程まだ責場に附いての研究は突ッ込んで居ないものと考えて居る。

責め場の髪にそうした特殊の神経の俳優（此場合暫く俳優といつておく、それが専門家であつても無くても）の手が触れた時、髪の毛の匂いは甘い温い感触があり、鬘を崩して俗にいう「サバキ」になった時、此乱れた髪の毛を自分の手にかからめて女を打つ快感は責めに興味を持つ人へのみ理解される興味で、此場合洋髪と日本髪の違いはあり得ないという事になるのであるから、婦人の髪それ自体が責め場と密接な関係を持ち、乱れた髪が責と不可離のものであるという事だけは否定する人は少なからうと思うのである。

銅の兜に、羽二重に毛を通したものを附着させた人工の髪でさえそれであるから、大正期迄の日本髪の女の髪をつかんで引摺り、鬘を壊し、髪の毛を掴んで打つ、叩く、そうした責を実際に行つた場合、女の髪の毛は其毛根に肉が附着した儘脱落して、皮膚には血が浸み、之を屢々すれば血染の毛髪が責める人の手に何本か残るもので、こうした場合の女の悲鳴は決して芝居のその様に快感を与え



るものではない。

日本髪の内が一番持久力のある、云い換えれば壊れる力の少ないのは其結髪方法が一番至難とされて居る高島田で、容易に壊れるものは「丸髷」と「いちよう返し」で当時の娘が好んで結って居た「桃割れ」という髪は何故か壊れ方が遅いという経験を私は持つて居る。

「飯綱つかい」という妖婆が仮りにあるとして置いても責めの研究者にとつては面白いと思うので、私は血染めの毛綱という題下にそうした日本髪と責との密接な関係から責めの体験談、其他に及ぼすつもりである。仮りに女を責殺しても法律上の罪人にならないという都合のいゝ国があったとしたら、巨億の財を投じて次の様な方法で責めの研究を行いたいと思う。空想を絶えず描いて居ると、空想から理想が生まれ、理想が実現される事は猶空中飛行機と同じ事であろうと思うから、或は他日責を実演するナイトクラブ風のものが或る都会に発生するかも知れないと思つて居る。(現在でもそうした事

を秘密に行つて居る或る料理屋の主人を私は知つて居る)

空中飛行機の画が(風船ではない)日本に紹介されたのは、専門家でない私の記憶によれば、明治廿三年頃博文館発行の「日本の少年」という少年雑誌に始めて記載された複葉形のものでそれから約三十年後には世界一周という様な事が実現を見るに到つたから、責の研究も単なる性慾的な立場を離れて法医学の上から、犯罪研究の上から、将又人道上の立場から、堂々且公然の発表機関を持つ様になつて、責専門の演劇を興行する様な機会に恵まれる様になるかも知れないと思つて居る。

反説女の毛髪に就いて徳川期のもと大正期の女の毛髪、及京阪地方と江戸の女、そうした事を書いて見たいと思う。仮令ば幕末の頃、近藤勇が壬生の新選組の陣屋で芸妓の君勇を拷問すると、其頃の京都婦人の日本髪は実に非衛生極まるもので、婦人が髪を洗うという事は一年に二度位しか無かつた。(花柳界はどうだか知らないが似たり寄つたりだと思ふ)鬘付け油で髪を固めて居るので、頭髪全部がコチコチに固まり、街頭で埃をかぶれば家へ帰つて手拭で油の上を拭いてとる位なもので、髪油と毛が岩の様に固まつて居た

から、拷問をしても櫛が飛び、簪が落ちる位な事はあろうが、髪乱れるという様な事は少なかったであろう。

之を江戸の方面から見ると、江戸の女は京阪地方の様に濃厚な化粧法を為さず、淡粧を主として居た。殊に花柳界に於ては芸妓は薄化粧で、髪は水髪といって「びんつけ」油を用いず、毛髪の一本一本迄油気なしで結ない上げてあるのを佳しとして居たから「鬢の

ほつれは枕の咎よ」という唄さえある位で一寸した事でも毛が乱れる。それであるから芸妓はお客と巫山戯る様な事は滅多に出事なかったし、町家の娘の髪は女髪結などの手に懸けずに母親が結って居た処が多かったというから、其結方法も明治大正時代とは凡そ違っていたためでもあり、武家の家庭や江戸の城中の結髪法も各々特殊のものがあつたから、責められる女が御殿女中の場合と、町芸妓の

場合では非常な相違があつた。髪の乱れる形などでも研究すべき事が頗る多いと思う。私は過去の日本髪に興味を持つ人と無関心な方とを問わず、私稿としてこうした研究を発表して見たいと思つて居る。一部の読者には叱られるかも知れないが、日本結髪史以外の「責め場の髪」に就いて愚見を述べるつもりである。

欽義先生医学相談欄



—— 質問 歡迎 ——

回答者

欽義先生

私は本年三十四才の男性ですが自分自身に変わった性癖のあるのをこの二、三年前からはっきり知りました。それは外でもありません

人。男性に物凄く縛られ責められたいという念願に日夜つきまといれることなのです。兄弟は一人、姉三人が三人あり、私は末子

です。只今は、兄は一家を別に構えて工場を経営し、三人の姉はそれぞれ嫁いで幸福な生活をしています。

今迄、縛られ責められた経験も少しはありますが、一回、二回と回を重ねるに従つて、その度がだんだんひどくなつてくるように自分で思ふのです。私は二十六才の時、結婚（養子）し、二人の子供の親なのですが、もともと生れつき女性には全然興味がなく、というより女性のヌード写真なんかを見ると、きたならしくさへ思う程です。そんなわけで夫婦生活もうまくゆかず、私自身夜になるのが恐ろしく、妻の側に敷いてある蒲団を自分で隣りの部屋へ持つてゆくといった仕末でしたので、と

うとう別居するようになってしまいました。妻は、私の性癖を知らず、もっと男らしくなつたら家に入れてやると云つていますが、それからずっと実家へ歸つて、母と二人きりで暮しております。

電車や汽車、又は映画館などで二十五六才位の逞ましい青年を見るとたまらなく興味がひかれ、あんな人に縛られてみたらどんなだろう、と空想したりします。又、男性のヌード、特に二十五六才から三十才位迄の男性の全裸写真に興味がいってくるのです。私は「自分はソドミアがかつてゐるマゾヒスト」だと思つてゐる次第ですが、これは、どう自分で気分を変えても此傾向は直らない、とそれとはなしに諦めてゐるものと、

どうかして出来れば、この変態的な気持ちから遠のきたいと、何度思ったかもしれません。

現在、母と二人きりの生活で、その母も私がこのような傾向の男であるということは、一年程前から知ってしまいました。(私が或る映画館で知り合った青年を家へ連れてきて泊めたのですが、その男がプロで、帰りぎわになって数千円の金を要求して、ごたごたした事件があってからです)

その時、私は一層のこと死んでしまおうかと決心しましたが、学校時代の友人のなぐさめで思い止まりました。今は芸をもって身を立てゝおりますが、一寸の暇でも、あると無性に縛られたく思い、僅かに自縛によって慰めておりますが、この強い欲望はそれくらいのことではおさまりそうにもありません。然し縛られるといつても、女性に縛られるというのは絶対にいやなのです。同性に縛られたいのです。相手を責めてみたいという気も少しはありますが、生れつき気が弱いのでそれは出来ません。

映画館へ一人で行ったりすると必ず、年長の同性から追いかけられます。五十過ぎの人と一緒に温

泉へ行ったこともあります。私はその人は嫌いなので、二階へ逃げたりしますが、見かけたら最後放しません。私は縛られるのは好きですが、ソドミアやぶたれるのはいやです。他の男性が縛られるのを見るのや、自分がヌードのモデルになるのは好きです。男性を縛り上げて責める男が現れたら、私は少々顔のまずい人でも辛抱して、その人の意のままになるでしょう。

私は今迄、自分のこの変わった気持を直すために、新興宗教に入ったり、又一人で深山に入って絶叫したり、いろいろ試みてみました。が、やはり駄目でした。先生、一体こういう人間はどうしたらいいのでしょうか。どうしたら直るのでしょうか、先生が御教え下されば、どのようなにでも従いますし、一度私の体を隅々まで診査してほしいと思います。

回答

此の人の希望を十分になんてあげる事は甚だ困難です。御自分では斯様な心理状態から抜け出たいと願って居られる様ですが、相反する二つの心が現在では「アブ

形式」の方が勝って居る風に感じられます。真実の精神病患者とは違ひましようが、変質者と言う診断は下し得る状況にあると思ひます。軽度な変質者と言うものは、世の中に沢山居りまして、誰でも多少共、変質な所を持って居る事も考えられる所ですが、此の人の場合はお説教や意見を述べた位では癒り相もない所迄進んで居ると思われまます。肉体的に生殖器の發育不全がないかどうか、一度診て貰う必要があると思うのですが、子供もある事でしたならば、何故に自分がその様な性的変態に陥ったかを幼時から反省してみる事も必要です。又、奇譚クラブの各冊を讀んでみても、直ちにその主人公に自分を置き換えないで批判的に見る必要がありましよう。

人間の生活感情と申します中には、あらゆる種類と程度がありまして、勿論性的感情を含めて何もかも自分の思い通りに、又世間一般並にあると言う事はありませぬ。唯々大切な事は「感情の使い分け」と言う事であります。食生活も衣服も趣味も職業も、まして性生活も混同してしまつては、それこそ味噌も糞も一緒と言うに同じでありましよう。夫婦生活に二

人が授つてある人として行くべき路は凡そ決つて居る筈です。その路を乱さぬ様に生活を確立して、然る後に自分の他人と異なる所を求めてみる。それも早急に焦つてはならないと思ひます。理窟は何とでもつきます。世間の口も七十幾日とか申します。その様な外面的な問題ではなく、もっとも深く内心に湧いて来る所を静かに反省してみれば自然と解消して来ると思ひます。

人間は誰でも強烈な性的刺激に耐え得る時間として考えれば、極く僅かな時間であると思ひます。その時間を人生の大半に迄影響させる事は貴男の母、妻子に不幸を來した理由であると思ひます。いつも申します通りに愛情の伴わない性的技巧と言うものは、只嫌悪でしかないのです。「自分を責めて呉れる男なら少々顔はまづくとも」と言われるのは、大変考えが行き過ぎて居ります。

貴男の人にも言えぬ心の秘事を、せめて奇譚クラブの写真、記事によつて昇華させ、一方母子の生活、夫婦生活の路を確立させ、そして普通の男子として生きる路を取得される様に祈ります。

幽 囚 十 ケ 月

受刑者の記録というものは、從來いろいろとあつたが、筆者の強い主観が災して、とかく真実が曲げられて読者に伝えられ勝ちであつた。この手記こそは、いささかの誇張もなく冷徹な眼で眺められた刑務所生活が、坦々と述べられている。そして筆者の人生に対する愛情が、豊かに盛り上げられているのだ。

春 田 一 郎
坪 内 篠 画

煙 草

刑務所に於て、最も厳しい禁制品は煙草である。煙草を吸ったり、持っていたり、授受したりしたのが発覚すれば、仮釈放が半年は延びると云う程、厳しい懲罰を受けなければならぬのである。然かも、受刑者にとって煙草程、誘惑の強いものはないのである。一本の煙草が、いや火をつければ指を焦す程の短いすがらでさえもが、受刑者にとってどんなに誘惑の種となるかは、恐らく、これを経験した人でないと、理解出来ないであらう。

う。煙草に対する需要の伸縮性は殆ど零に等しいものであるから、煙草が吸えないと云う苦しみ程大きいものはないのである。煙草をすっかり忘れる迄には余程、苦しみの過程を経なければならぬのであるが、この苦しさには耐え得ないで、反則を犯す受刑者が多いのである。

二舎の七房に於ても私のいる間に煙草の事件が一つあった。五月の初め、私達の七房に東野という男が転房して来た。東野君はある大都会の盛り場に巣喰っていたゴロツキらしく著にも棒にもかゝらぬ男であつた。大体新

しく房に入ってきた者は仮令古い受刑者であっても、一応は末席につき食器洗いや掃除を担当することはもとより、就寝時も末席に寝るのが不文律となつていたのであるが、東野君はこれをきらって、田村君と云う子供上りの受刑者をおどして寝る場所を取り替えさすと云う様なことをした。食器洗いや掃除は勿論一回もしたことがなかった。東野君は数年前、一度刑務所へ入ったのだが、健康を損ねて執行停止で出獄し、今回その残刑を勤めに入ってきたのだ。七房に私より十日余り遅れて入ってきた門田君は、この刑務所より十

里余り南にある小都会のチンピラで、気のよい朗らかな青年であったが、人の煽動に乗り易いオツチヨコチヨイの所があった。刑務所に服役しつつ他の刑事々件の被告になつてゐる者を「受刑被告」と云うが、門田君はこの「受刑被告」であつたため、時折公判に出廷する必要があつた。門田君の相被告は身柄不拘束のまゝ公判に附せられてゐるそうで、門田君は出廷から帰つては、その相被告が煙草を自由に吸つてゐるのを羨み、煙草を貰おうと思えば相被告から簡単に貰えると云うことを喋つた。これに取付いたのが東野君であつた。東野君は門田君を煽てたり脅迫したりして、次の公判には煙草を貰つて来ることを門田君に約束させた。

「おい、門田、お前なんかノミキンやから、よう煙草貰つて来えへんやろな、けど一ぺん約束をして貰つて来えへんだら、お前は男やあれへんで」「ノミキン」と云うのは蚤のきん玉程きも玉が小さいことである。この様に煽てられおどかされると、門田君は、

「まあ、まかせとき、どんと来いや」と答えるのだった。「まあ、まかせとき、どんと来いや」と云う言葉は、受刑者の好んで用ゐる流行言葉であつた。

「あの頼んだもの、うまくやってや」
 「まあ、まかせとき、どんと来いや」
 「三工場へ行くんだってね、しっかりやってくれ」

「まあ、まかせとき、どんと来いや」と云う風に使うのである。

五月二十日が門田君の何回目かの出廷日だった。その朝、門田君は東野君にハッパをかけられて出て行つた。「ハッパをかける」とは気合をかけるとか、活を入れると云う意味である。皆は門田君がうまく煙草を手に入れて来るかどうかについては、半信半疑で待つていたのであるが、夕方、門田君は意気揚々として歸つて来た。出廷の場合にも、歸つた時も検身があるのだが、門田君は帽子の中へうまく「光」を一本かくして持ち歸つたのであつた。

東野君は、口では「何だ一本か」と云つていたが、事實はニヤニヤして満足そうであつた。實際、二舎などに於ては、すいがらですら滅多に手に入るものではない。完全な一本の煙草などは、実に珍らしく貴重品だったのである。門田君が自慢して皆に話した所に依ると、身柄不拘束の被告に頼み、被告席に並んで座つてゐる時、監視の目を盗んで、煙草

を一本、帽子のびん皮の中へ忍ばせ、うまく検身を通過して房に持ち込んだのだった。

煙草を一本持ち込むと、それを吸う迄何処にこれをかくして置くかと云うことが問題であつた。煙草が房に置いてあることが見付つたら、それこそ文句なしに懲罰である。それに「ガサ」と云つて、抜打ちの検房が折々ある。その時のためにも余程上手にかくして置かねばならない。早く吸つてしまえば一番よいのだが、周囲の情勢をよく考えてやらないと飛んでもないことになる。煙草を持つて歸つたのはよいが、その保管は頗る厄介であつた。持て余して便所に捨てることも絶対出来ないのである。何故なら翌朝、便捨の係が来て、便所の桶を取出すと立所に露見するからである。とつおいつの末、権君がやつと考へてふとんの縫目を少し破り、綿の間にかくし込んでしまった。

持つて歸つた夜も、その翌日も夜勤の看守がうるさい人なので吸う機会がなかった。三日目の夜勤看守はおとなしい人なので、その夕方喫煙することに東野君達は相談した。時間は点検が済んで、そのおとなしい看守がその人の習慣として、担当台を離れず本を読んでいる時と決められた。

愈々これから始めようとする時、東野君は「皆に云々とくけどな。ホッコを吸うたこと若し分っても、絶対に口を割ったらあけへん

ぞ。証拠さえ残さなったら、知れる筈あれへんさかいな。もし知れたら、この中の誰かゞチンコロした云うことになるぞ」

である。「シケ大丈夫か」と念を押して、権君は発火にかゝった。ゴリゴリと床板の上で、別の板



と凄い目付で皆を見廻した。煙草は手に入ったとしても、一体どうして火を付けるのかと、一般の人々は考えるだろう。併し、刑務所には刑務所特有の発火方法があるのである。凡そ刑務所内に於ては特別の場合を除き火気厳禁である。特に二舎などに於てはマッチ一本、火のかけら一つ見る事が出来ない。そこで必要な場合はこの刑務所特有の方法に依って火を作るのである。発火役は権君が引受けた。他の者は夫々シケを張った。権君は箒のわらを二三本抜いて、それを折り曲げて芯とし、それに布団から取出した綿を巻いて長さ三、四寸の棒状の物を作り、その上を更にわらで固く巻いた、これを刑務所では「ゴリゴリ」と称しているのである。摩擦する時、ゴリゴリと音を立てることから起った名前であろう。芯にセルロイド粉を少し入れると発火が早いそう

片で押え乍ら強くこするのである。五回、十回、十五回、権君の額には汗がにじんで来た。二十回目あたりから、ブーンときな臭い匂いがして来た。権君は更に強くこする。きな臭さは急に強くなった。「よし」と云って権君はわらを解いた。中の綿が煙を立てゝいる。それを軽く吹くと、綿に完全に火が付いた。権君は積んである布団の陰で「ひかり」に火をつけた。皆は口々に「シケ、シケ」と云って急にバタバタした。権君はひかりを二服程吸い込んだ。便所の揚板をあげて、穴へ煙をはき出す。長い間忘れていた煙草の匂いが恐ろしく強烈に鼻をついた。権君は煙草を東野君に渡した。東野君は布団と壁の間に首を突込んで二三服吸った。次に島ヶ原君は便所にしやがんで、強く何服か吸った。ほの暗い片隅で強く吸われる度に煙草の火が美しく輝いた。島ヶ原君は久し振の煙草に酔ったのか、便所から這う様に出ると、フラフラと布団の山に倒れた。それから三、四人が次々と段々短くなる煙草を吸い廻した。煙が部屋一杯に拡まった。一人二人がジャンパーでそれを追い出そうと煽ぎ立てゝいる、同じ煙草を吸うなら、もっと静かに要領よくやればよいものを、皆の騒ぎ方はまるで煙草を吸って

ることを外の房へ広告している様なものであった。

この喫煙に最初から関係なかったのは老人の太田さん、少年上りの田村君、それに私の三人であつたが、三人は房の片隅に座って、この騒ぎを半ば呆れ、半ば氣遣い乍ら眺めていた。吸っている当人達は氣が付かないだらうが、私は皆が煙草を吸い初めると、向いや隣の房で「ネッコだ、七房だ」とガヤガヤ騒ぎ立てゝいるのを明らかに聞いた。併し、その夜はそれで無事に済んで、吸った連中は久しぶりの煙草の味と、スリルを満喫した満足感に興奮していた。よいことのあとには悪いことがある。皆は成功したと思つていたのである。豈はからんや、その晩すでに、このことは用務者や看守に知れてしまつていたのであつた。

翌朝、作業が始まつて暫く経つた頃、扉が開いて衛生夫の下田さんがツカリと房に入つて来て、鋭く皆を見廻した後、

「おい、みんなに聞くがな。ゆうべ、皆で何かしたやろ。分らんと思つてるかも知れないが、皆よりこっちの方が一寸懲役が古いんやぞ。それに今朝証拠もちゃんとあげてある。正直に言うのやったら、今のうちやで。ムシ

(刑務所)でネッコ(煙草)を吸ったらどんなことになるか位は皆分つてゐるやろ。今のうちに吸つたなら吸つたと正直に言えば内証にして貰うてやるぞ。今言わんで、言わされるようにされてから言うたんでは皆三舎やぞ。(三舎は懲罰事犯を取調べたり、懲罰を執行したりする舎房であつて、受刑者にとつては『三舎』と云う言葉と『懲罰』と云う言葉とはシノニムである)……さあ、どうや。言わんのか。今の中やぞ」

下田さんがこの様に、おどかしたり、すかしたりしても誰も一言も喋る者はなかった。下田さんは一人々々の顔を鋭い視線で刺す様に眺め乍ら、

「よし、誰も何とも言わないのやな。そんならそれで言わす様にするからな。その時になつて後悔するなよ」

と捨てぜりふを残して、荒々しく出て行つた。東野君はその後姿を彼特有の三白眼でにらみながら、

「チエツ。下田の奴。自分の手柄にしたもんやから、あんな事を云いやがって。おい、みんな、あんな手に乗つたらあかんで、知らんと云うてつゝぱつたらそれで済むのや。チンコロ(密告)するもんさえなかつたら分る

筈あれへんのや」

と憎々しげに舌打ちしたが、他の連中は明かにおじけ付いて動揺を初めていた。

四、五分して再び扉が開いた。今度は担当の看守が現れて、黙って皆の顔を見渡していたが、

「田村、出て来い」と云って、田村君を連れ出した。田村君が立上った時、東野君は凄いい目付で田村君に何か合図をした。

「チンコロしたら承知しないぞ」と無言の裡に脅したのだ。

それから二、三十分経って、煙草を吸った連中が次々と呼び出され、何処へ連れて行かれたのか、一時間以上経っても、一人も帰って来なかった。その中、太田さんが呼ばれ、暫くして最後に私も呼び出された。連れて行かれたのは二舎の端にある特警の調室であった。そこには田村君と太田さんとが椅子に坐っていた。二舎担当の看守と特警の看守が一人居って、机の上には昨夜の名残りのゴリゴリ



云



と短いすがらとが載っていた。

担当は私を椅子へ坐らせて口を切った。

「実は春田。お前に来て貰ったのは昨夜の七房の煙草についてだが、我々としてはお前や

こゝにいる田村や太田が関係のないことは分っている。併し煙草を吸ったと思われる他の連中の口がまちまちで、真実のことが分らない。喫煙と云うことが刑務所ではどんな反則

かと云うことはお前も知っていると思うが、これを公の問題にすれば必ず懲罰問題が起るし、現在の様に皆が出鱈目を云って真相が分らないとすると、七房全体が連帯責任となって、一応は全部を三舎に送らねばならず、二舎としては全く恥辱となる問題だから、一つお前が見たありの儘を話して呉れないか」私は七房の喫煙が昨夜中に発覚していたのを感じていたし、目の前には証拠品もならんでいる。これは最早、下手にかくして徒らに問題を大きくすべきではない。悪い事はわるいに違いないのだから、全部、有りの儘を話して取調べに協力し、犠牲を最少限度に止めるよう努力した方がよいと思ったので、太田さんと田村君にこの事を相

談したら、二人もそれに賛成だったので、三人で交々、昨夜の喫煙の経緯を話し、今回のことは煎じ詰めれば、東野君のために皆が引きずられたのであるから、出来る限り寛大な措置を取ってほしい旨を申述べた。

刑務所に於ては喫煙と云う反則を極めて重大視するので、東野君を始め、煙草を吸った連中の取調べは大がかりなものであった。私達三人は別として、他の者は一人ずつ各房に預けて、夫々取調べを行い、相互の口が合う迄追及するのである。昨夜、ゴリゴリで煙草に火をつけた後、そのゴリゴリを濡らして中庭に捨て、

煙草のすいがらは便所の桶に捨てると云う様な間の抜けたことをして、翌朝、これ等の証拠品を拾われたのみならず、昨夜、喫煙の時にあの様な大騒ぎをして他の房の者に感付かれていたのであるから、言を左右に托して言い抜けをしようとしても、既に無駄なことなのであった。これに加え、取調べの最初に年少の田村君を呼び出して証人を作ってしまった。



講 堂 受 刑 者 の 席 する 國

免 業 日

私自身も二舎の生活にだいぶ慣れて来た。作業も五月の初めからあん巻での床こすりがなくなつて、縫れた綿糸をほぐしてボールに巻くと云う仕事に変わっていたので、二舎の生活は相変わらず、「起床、点検、シヤリ三本」式の単調なもの乍らも、一日の大部分は作業で気が紛れる様になった。五月の初めには三人程訓練工場へ行き、代りに訓練から帰って来た三人が七房へ入って来たので、大分顔触れも変つた。

取調べが一段落ついたのはその日の夕方であつた。七房の者全部が担当の前へ並ばされ、厳重なお叱りを受け、特に今回に限って不問に附して貰うことに事件は落着いたのであつた。東野君初め皆は真にほつとした様であつた。その翌日、東野君は他の房へ転房させられてしまった。

作業はつらいとか、苦勞が多いとかいう様なものでは決してないのであるが、受刑者は矢張り免業日を大いに待っている。免業日は日曜と祭日であるが、この日は起床が一時遅くて、七時であり、就寝は一時遅くて午後六時である。サンマー・タイムの午後六時といえは陽がまだ可成り高い。一般の社会に於ては漸く一日の仕事が終つて、入浴をしたり、夕食をたべたりする時刻である。六時に

床に入っても太陽が沈む迄には二時間もあ
る。仲々寝付かれるものではない。小さい声
で雑談しながら、眠くなるのを待っている訳
であるが、ウトウトと一眠りして目を覚まし
てもまだ暮れ切っていないこともある。

日曜日の朝食を終わった頃から、「内掃」と
いう係の受刑者が一舎、二舎、三舎の廊下か
ら、一舎の階上にある講堂へかけて、幅一尺
程の長い真座を敷いて廻る。講堂へ行くのに
草履をはかなくても行けるようにするため
ある。運動会とか映画、演劇会などが朝から
開催される場合を除き、日曜日の午前には講
堂で宗教々誨が催される。講堂へ入る順序は
工場別、舎房別に決っていて、一番前に坐っ
た日の次には一番うしろへ廻り、それから順
次、前の席へ進んで行く様になっている。講
堂はつい一兩年前に建築された一舎の階上に
あり、受刑者全部を収容してもなおゆったり
している程の広さである。窓は極めて大きく
作ってあって、ここだけは受刑生活につきも
の鉄格子がはまっていない。天井は防響装
置をした格天井で、十数ケの質素乍ら美しい
シャンデリアがぶら下っている。舞台は相当
に広く、舞台両側の通路から登壇出来るよう
になっている。舞台の裏側には畳敷と板張り

との二つの控室があり、畳敷の部屋には立派
な仏壇が安置されてある。講堂は余計な装飾
は一つもないが、これが刑務所の講堂かと思
う程立派なものである。

教誨のある朝、各房毎に用務者が出席の有
無を聞いて廻る。教誨への出席は自由で、身
体の調子の悪い時とか、何かやむを得ぬ用事
のある場合は残房するのである。教誨へ繰込
みの順番が近付くと、「教誨準備」の号令が
かかる。扉が開けられると、廊下へ出て整列
し、一舎に向う。整列の順序は別になるので
他の房と連絡を取ったりするため夫々好きな
所へもぐり込むものが多い。やがて行列が動
き出して一舎に向う。二舎や三舎が薄暗くて
頑丈で如何にも監獄らしい感じがするのに対
して、一舎は木造のペンキ塗で、廊下が広く
て明るく、各房の窓は低くて大きく、洗面所
は立流しになって居り、その上便所はガラス
張のボックス式になっているので、鉄の格子
さえはまっていなかったら、アパートという
感じを与える。私達二舎の新入はこの美しい
一舎の房を羨望の目で眺め乍ら、何時になっ
たら一舎へ入れることだろうと秘かに思うの
である。

講堂の入口につくと、二十人宛に区切られ

て左右二つの方向に分れ、ぎっしり並べられ
た床几の左右から席に入るのである。一級の
受刑者だけは常に最前列の席に着くが、其他
は工場別、舎房別の順序に従って着席する。

舞台の上には部長が一人立つて居り、ホール
の左右には多数の看守が立って受刑者を監視
して居り、私語やよそ見は許さないのであ
る。講堂に最初の組が入り初めてから、最後
の組が入り終る迄には、どうしても三十分は
かかるのである。一級の囚衣は白いから最前
部の一級の席がくっきりと浮出した様に見え
る以外は満目すべて青一色である。丸刈の坊
主頭と青い囚衣の波、一千数百の受刑者が整
然と席に着いた光景は壮観でさえもある。

全員の入場が終ると、教育課長又は大山先
生の挨拶とその日の講師の紹介があって、教
誨が始まるのである。教誨の講師は云う迄も
なく宗教家ばかりであるが、仏教、神道、キ
リスト教其他の宗教の講師が交替で教誨を行
うのである。話の内容は所謂お説教式のもの
は全然なく、すべてが処世訓話である。私の
聞いた限りでは仏教のお坊さんが一番話し上
手であった。併し、一般的に言って大多數の
受刑者にとっては少し程度が高過ぎるように
感じた。それでも、受刑者達は神妙に傾聴し

ていた。矢張り、受刑生活をしていると心の糧がほしいのである。神仏の存在と云うものを単に迷信的でなしに、真剣に考えている受刑者も決して尠くない。尤も神仏に対する功利的な疑惑、即ち、世の中で悪いことをしているのは自分許りではない、寧ろ眞の悪人は刑務所の塀の外にいる。それに何故自分だけがこの様に圜圀の苦しみを受けなければならぬのか。若し神や仏が眞実存在し、何等かの超人間的な力を持っているならば、何故に或者はこれを社会に放任し、或者はこれを獄窓に繋ぐというが如き、愛と云い慈悲と云い神仏本然の姿に背く様な事実を黙過しているのか、という疑惑は一度は必ず受刑者の心に宿ることがあるのである。

併し、これを脱皮し、神仏を真剣に考える様になった受刑者の心理は純粹なものである。受刑者が現在の境遇に陥ったのは、その一人々々に夫々の特有の事情があるとは云え、共通する所は世の眞の道を見失い、運命に弄された、云わば不幸な人々であると言ふことである。彼等も一度は神や仏を恨んだことであろう。併し、諄々と自分の弱さが分つて来た時、自分の犯したことの眞の意味が分つて来るのである。そこで自分の弱さを救っ

てくれる者、自分が全身全霊を以て頼れる者がほしくなり、自分自身の心の孤独が恐ろしくなつて、こゝに神仏を考えるに至るものである。社会の秩序を乱し、社会に背いた受刑者であつても、彼等は矢張り、神の子であり、仏の子なのである。

五月の或る日曜日、私は教誨を聞き乍ら不図窓の外に目を遣つた。見慣れた煙突、見慣れた建物、見慣れた高塀、その高い塀の向う側に一本こんもりと繁つた木がある。うっかりするとともに今迄、気が付かなかつたが、この木がもう緑したる許りの若葉に包まれているのに気が付いた。何の木か私は知らない。私が入所したのは桜の眞盛りの頃であつた。既にそれから一ヶ月、世の中はすっかり新緑の初夏になっているのだつた。私は季節の変化を、この新緑に依つてまぎ／＼と教えられた。私は何となしに、その目に泌みる様な若々しい青さに心を惹かれ、何時迄もそれを眺めていた。

教誨が終ると、号令に従つて、前とは反対の順序に一列になつて退場する。房に帰つて来るのは十時半から十一時の間である。昼食は十一時過である。免業日は昼夕共になるべく手数のかゝらない副食物が出る。

免業日の午後は催物のない限り、自由の時間である。自由と云つても勿論、房の中だけの自由であるが、読書、将棋、雑誌、音信等に過す。夏の日曜日の午後、風の工合でふとアイスキヤンデー屋のりんと呼声が案外近くに聞えることがある。房の中にいて聞く娑婆の聲、これ程受刑者に対してノスタルジアを起さすものはない。免業日の夕食は四時頃である。そして六時に床につく。

(つゞく)

【読者通信】 新春二月号のグラビヤにてマゾヒスティック・フォト、翻弄の上部二組の禪をしめた中年男が縛られている写真はそれだけで百四十円の価値があります。まことに残念なのは下半身が切断されていることですが何故あんな事をしたのか、せめて大腿部を写して禪美の素晴らしさを堪能させてくれないか。さうなものです。モデル湖田氏の疲れたような表情は、その肉体と共に六尺禪をしめている男としては上出来です。編集の都合で肝じんな所を切り落したのでしようが、原画はある筈です。是非送つてほしいです。室内で晒の六尺に限ること。なお今後のグラビヤには男がでる場合は、必ずこの美しき日本古来の風俗を強調するよう六尺禪にして、広く日本国中に貴誌を通じて復活させて下さい。男女を問わず欧米の下着は蹴飛ばしてしまいたく思います。

(京都H・N生)



〔告白〕

自腹を切る

小田原 渡

私にとって人間の身体の中、ふくよかな白い腹程魅力を感じずるものはない。私は誰のでもふくよかで白い腹とその中央のヘソ、それらを思う存分虐げたいサジ兼マゾである。他人の腹を無理矢理に切ると云う事は、現在の私にとっては、医者か犯罪者になる以外、行えない事であるので「自分の腹を切る」つまり——自腹を切る——事に就いてこれから自身の体験を記して見よう。

私の腹は年中傷だらけで、今はその魅力さえ失われようとする惨めな存在である。そして男であり乍ら女性的体型と云おうか、色白く所謂デン腹である。よく屋外で見かける男性的な毛むくじやらの腹、又は無意識に出しているであろうボタンの外れから見える女性のふっくらとした腹の一部等を見ると、よく切れるメスでサッと一息に切って見たらと云う妄想に駆られる。

よく切れるメスでサッと切ったら、さぞ痛いだろう。その

痛さを自分で感じ得たら、どんなによいだろうと、第二の妄想に捉われる。

その第二の妄想が、私を現在迄悩ましていたのだ。自分の腹に人工的な痛苦を与える。又は他人の腹を責めた上、サッと切って見たい、という二つの目的であるが、前申す通り、現在の私には、自腹を切ってそのせつなくもおぞましい望を果す以外に方法は見付からないのだ。

殊に夏は自腹を切るには絶好の機会である。先ず私は台所で使う庖丁を用いた。誰もいない室の一隅の羽目板に素裸となつて直立する。背中を羽目板につけて直立すると、デン腹は私の眼下に膨らみを見せている。そこで庖丁の背に布片を当てて右手で握り、刃を体と直角に、刃の中心をヘソに当て徐々に力を加えて行く、庖丁はよく切れる程よく、痛さを腹に与える。庖丁の押し方が増すにつれて、刃の両端の痛みが際立って感じて来る。右手で押せなくなったら左手も添え、



上半身を前に曲げる。その時、誰か不意にサッと私の手を押しにくれたらとの妄想に駆られるが、次第に自分一人では押せなくなる。痛さは庖丁を動かす度に感じて来るが、アッ切れると云う際どい感は一切出ない。

そこで第二段階に入る。床上に立てゝヘソ位の高さの一寸角の棒を用意する。そして今度は右手に握った庖丁の背を自分の立っている五寸位前の処に直立させたその棒を、徐々とヘソの処に近づけ、その上にのせる。その時は両足を約一尺位開き、棒の上端に布を当てゝその上に庖丁の背を握った拳がのる。

今度は庖丁の刃をヘソを中心にして横に当てる。そうすると庖丁はヘソを中心に腹を横に切るべく刃が当る。そこで右手に庖丁を握りつゝはだけた両足を前にすべらせる。全身はだんだん下り庖丁は腹の肉を虐む、痛い、今度は切れるかと思うが中々切れない。誰か不意に足をさらってくれたらと痛さの中に妄想を逞しうするが、元気を出してヤッと両足を床から離す。瞬間、刃の両端の痛みはグツと感じて来るが、ヘソの辺りは未だ切れそうもない。

自腹を切る——その境地を求めて足をバタバタさせるが、右手で庖丁を握っている限り、否、意識して行く限り庖丁は腹の皮を切らなかつた。私はそれを何回も試みたが、刃の両端の傷が後に残るだけで、私の思う境地にはゆけない。

そこで第三の段階に入る。その角棒の上端を鋸で庖丁の半分位入る溝を切る。その溝に庖丁の刃を上に向けてさし込

み、棒をやゝ斜めに今度は庖丁を体と同じ様、縦にヘソに当てる。棒が斜めになっているので両足を離すと、自分の体重で庖丁が腹の皮に喰い込んで行く、徐々に足を離そうとするが、今度は痛さと共に切れたら不安を感じ初めた。腹がグーグー鳴って、今迄と違った痛みを感じ出した。痛い、切れる。助けて——と責められている空想が現実化して、思わず口から洩れる。その瞬間、切ってやるんだ、と、もう一方の聲が洩れ、同時に両足をパツと離れた。嗚呼、一人の男性がヘソ中心に縦に庖丁を当てられ、正に切られようとしている。痛い、腹の皮ではなく直接腸に刃が当たっている様だ。だが次の瞬間、無意識の中にサツと両足をついてしまった。

自分で幾ら切ろうと思ひ、望みの境地に到っても、本望を達する前に、それをさえぎる強い力がある。あゝ誰か相手が欲しい、私の腹を充分責めてサツと切ってくれる人が、と思ひ乍らそれを中止して、次の第四段階に達する。

今度は、その上向き刃の庖丁を挟んだ棒を床の上に直立固定させる。そして自分がその直立の棒の前に立ち、腰から上を前に曲げ庖丁の上向き刃を下向きヘソの中心に当てる。そして両手を更に前から下にやり、そこに用意した固定した物を両手で握む、その際両手で握む前、両足が上がりそうになり痛さが増し中々握めない。が思ひ切って両手でその物を握む。同時に足が上り、今度は一人では味えない痛さとスリルを感じた。そして刃の両端が腹の肉に遠慮なく少し喰い入った事を感じた。と同時に、前述の力が伝き、手が離れ足が着



いてしまった。離れたからにはと考え、サッと直立する。腹の皮から庖丁の刃が離れる瞬間、鋭い痛さに見舞われたが、直立する力の方が大きく、直立してしまった。そして両手で腹をさすり見ると、刃の両端の処が二ヶ所切れて血が滲み出ていた。血が一滴、床の上にぼとりと落ちると私はもう夢中だった。

「畜生、切ってやるんだ」

次の瞬間、私は夢中で上半身を前に曲げヘソに刃を当てると同時に、両手で固定したものを掴み、サッと両足を後方に伸した。もう痛さより、その境地に突入すべく、最後の努力なのだ。

見よ、私は庖丁の刃の上にヘソを当て足を伸したのだ。一人で行っていても驚異のポーズ。私はその境地に足を時々下し乍ら夢中になって行った。そして遂に勇を鼓して、両手でしっかり掴み乍ら両足をグンと後上方に上げた。無茶である。庖丁の一端が足の上がると同時に腹の皮から離れたと思う次の瞬間、私は腹の皮が完全に切れたと感じた。そしてサッと立上ると私の腹からは血が、庖丁の刃の跡を伝い乍ら下に流れた。ヘソから下が切れたのである。

私は直ぐ上向きにねて、両手で布を当て傷口を押えた。違った痛みが刺戟して来る。時々布をとり傷口を開くと白い皮ハダがのぞく、私は刃に血のついた庖丁や棒の後始末をするのも忘れて約二時間、自腹を切った——境地に彷徨した。私は勤めをそのため約一週間休み、風呂に入れず家族に怪しま

れた。

その様な体験をして切って来た私の腹、近頃は、もっと静かに充分痛さを味わい乍ら切る方法を行っている。それを述べて見よう。

素裸で直立するのは前と同じ、今度は電気コンロをヘソの中心に当て、我慢出来る限り腹の皮に熱さを加える。約三十分位、皮は真赤になり跡がクッキリ付く、その際も、もし相手がいたらと思うのであるが致し方がない。充分腹の皮がアイロンの熱で痛め付けられたら、左手にブライヤーを持ちヘソ中心に非常に強く挟む。我慢が出来なくなる位迄ギュッと緊めたら、右手に安全カミソリの刃を持ち、はさみ持ち上げたヘソの廻りを徐々と切っていく。ブライヤーで挟む強さが強い程、切る痛さは感じない。私は自腹を切る方法としてこれが一番よい方法だと思っている。

最近ではアイロンの熱さも切り方も物凄くなって来た。だが徐々の訓練で内臓に今の処何ともないらしい。四頁の新聞を二頁に半分に切り、やわらかく丸めて火を付けヘソの上で燃やす、ほんの少しやけどする位となってしまう。自分が盲腸を手術する際、腹部にマスイ薬をかけなくとも良いいのではないかなと思う位である。

私は自腹を切ることがその様に好きであるが、妻は一寸も調和してくれない。只私の行っている自腹虐待法は、妻に対し受胎調節に幾分役立った事は否めない。私が相手に女性を求める所以はそこにもある。



最後に、私は目下病院のベッドの上にいる。新聞に書かれぬ切腹自殺未遂者としてである。その事を述べて見よう。

同じ事に飽きた私は、別の方法を考えた。それは先月の二十五日の事である。家人が皆不在の機を得、又もや怪しい欲望が私をそゝったので自腹を切ることにした。

一間許りの角材を用意し、一端を動く様に固定し、その角材が一定の角度から一定に倒れる様に装置した。そして上端の方に庖丁を付け、紐を離すとその角材は一定に倒れる。つまり地につく瞬間、庖丁は横になった私の腹をサツと切ると云う方法である。その時、初めてその方法をやったので慎重に計画をした。

庖丁が自分の腹のどの辺りをサツと切るか、そして紐を引いたら約二分位で材木が倒れ、不意に私の腹をサツと切ってしまう計画なのである。間違えば本当の自殺となってしまうからである。従って事慎重に準備した。

さて私は一定の間隔を離れた椅子に横臥し、腹の処だけ庖丁が倒れる様にした。私は怖しい感じがした。もしも庖丁が間違つて私の腹をサツと深く切ってしまったら万事休すであるからだ。でも私の好奇心はそれを敢えて行わせた。私は素裸になり離れた椅子の上に横になり、腹を切られる運命を味わった。

丁度サイレンが鳴った。お昼である。私は意を決して紐をサツと引いた。いつ倒れて来て私の腹を横にさつと切るか分らない材木に付いた庖丁の刃、私は棒が倒れてくるのを待ち

ながらジツと思った。もし深く切れたら僕は本望だと、突然玄関の方で「今日は」と云う声が聞えて来た。聞き覚えのある声だ、そうだ、だまっていたいよう。そしてその人の声を三回目に聞いた次の瞬間、私はヘソの中心に横なぐりに庖丁によって切られ激痛を感じ「シマッタ」と思った。全くの不意だった。

私が気付いた時は、病院の中であった。私はその時訪問した至って親しい友人に、私の思わず立てたうめき声に依って助けられ病院に運ばれたのだ。病院に運ばれたのも最初だったが、自分一人では手当出来ぬ位ひどく自腹を切ったのも最初であった。

私は日増しに快方に向う自分の腹をさすり乍らも、次は安全でその目的を達する方法を考えている。私の自腹を切りたという性癖は最後に自殺の手段となるかもしれないという凶り知れない運命を、私は病床の中で考えている。(終)

緊縛女体のアルバム

「美しき縛しめ」(第三集)について

縛られた女ばかりのアルバム「美しき縛しめ」の第一集、第二集は同好者の方々の絶讃裡に残部僅少となりましたので、こゝに第三集を企画することになりました。第三集のプラクは大体を樹てゝおりますが、マニアの方々の御希望も入れたく思いますので、御智恵を拝借させて頂き。優秀なプラン提供者には、アルバムを贈呈いたします。

私の体験記

年下の女性をいじめたいというサジ

ストの女性のいつわらざる告白の記

長瀬 昭子

女だてらに、あられもない私の秘密を、よもやと思って読者欄に投稿致しましたのが、即刻誌上にでかかとのせられたのを発見しまして、私は恥しいやら嬉しいやら、二三日は夜もおちおち眠れない程そわそわして、人にあやしまれやしないかと心配致しました。其の上、告知欄に、

「長瀬昭子様、体験談の詳細お送り下さい」と書いてあるのですから、ほんとに私、気が変になりそうでしたわ。全く貴誌の御親切なこと、スピーディーなことは、驚くばかりだと感激にたえません。

私の様なアブノーマルで、はしたない、そして残酷な楽しみを持ち乍ら、不断は常人と少しも変らない若くて美しい(つもりです)女性って又とあるでしょうか。私の秘密をこっそり告白することによって、全国の読者の方々の内、何人様かでも喜んで頂ければ、此んな嬉しいことはありません。文章のまずい点は何卒おゆるし下さい。時は五箇月程前にさかのぼります。

今日は七月もなかば過ぎ、うっとうしかった長雨も二三日前からと晴れて、本格的な夏の訪れに、稍でさわぐせみの声もうるさい程に感ぜられます。

私は洋子と二人、二階の座敷で、シユミーズ一枚になったまゝ、お菓子をつまみ乍ら雑談に花を咲かせています。それに今日は両親とも旅行に出かけ、一人娘の私は、るす番役なので朝からのびのびして晴れやかな気持ちでした。一人であるす番役は、私にとっては願ったりかなったりの嬉しい日、だって誰か友人を呼んできて、好き勝手なことが平気で出来るんですもの、此んな素敵なことってありません。

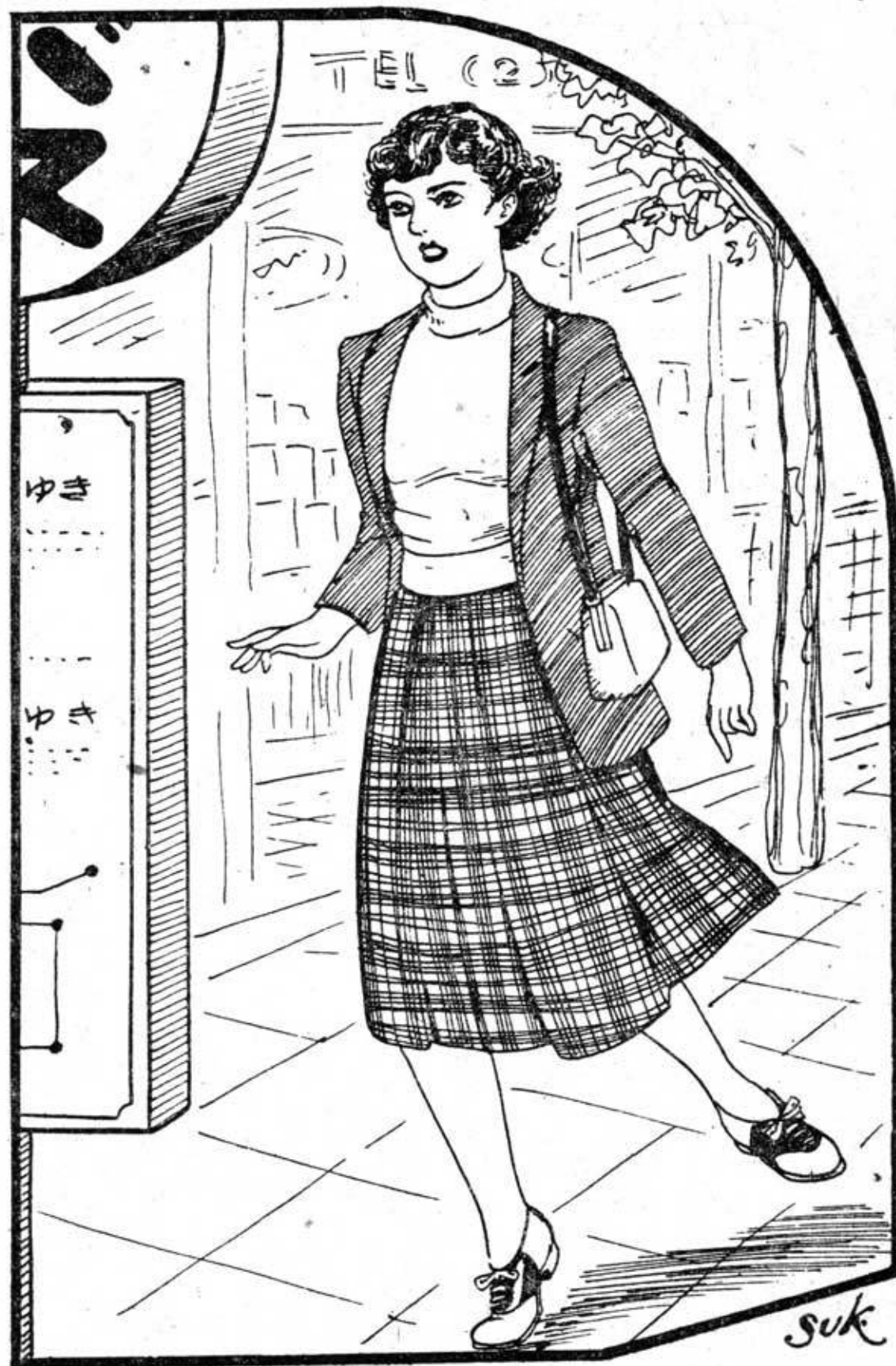
私自身、自分でも随分変な女だって考えることもよくあります。でも自分で自分が何うにもならなくて本当に困ります。

一番最初は、高校の三年生だった頃、良子と云う仲良しと二人で、ふざけ半分にお角力のまねをしたことがありました。良子は身体が小柄で力も弱かったものですから、私が勝って良子を転したのですが、此の時、私は何と云うことなしに、とてもとても云い表わせない程の快さを感じました。その後も、時々ま人目のない場所で良子とお角力をしましたが、或る日のこと、

「今度は押え付けっこしようよ」と云うのです。私はびっくりしましたが勿論異存はありません。取組んで良子を転が

し、襟のあたりを押え付けて起きられない様にしました。其の時の気持が又格別でしたし、それに良子が少しもいやがらなかったものですから、再々くりかえす内、とうとう馬乗りに組み敷く味を覚えてしまいました。所が間もなく卒業式、私と良子は遠くはなれば

なれになってしまいましたので、そんな真似がすっかり出来なくなり、長いこととても淋しい気持でした。其の頃、貴誌を発見して人知れず夢中になって読みふけりましたが、やがてもう一度女性を組み敷いて見なくては、居ても立っても居られない様な気持になり、



何うして此の計画を実現させようかと日夜頭をなやます程になったのです。良子ならまだしも、初めての女性に此んなことをして、若し人に知られたらと思うと恥しさと恐しさで胸が一ぱいでした。

でも私は思い切って見ました。誰も居ない所で、友人の一人を転して馬乗りに組み敷いたのです。其の女性はいやがって、とうとう泣き出してしまいました。久方ぶりに何と云う快さだったことでしょう。今でも忘れることが出来ません。それから一週間位の何と恐しかったことでしょう。ひどく悪いことをした様な気持でのおどおどしました。でも恐しいと思っただけのことで、其の女性には誰にも云わなかったにちがいないありません。又恥しくて人には云えなかったのです。唯其の後、私と顔が合うと恥しそうに私をさける位なので、私もほんと安心致しました。其の後は段々大胆になって、次々に友人を一人ずつ組み敷いていじめなくては、何うにもこうにもやり切れなくなっていました。それも誰でも構わないと

云うわけには参りません。矢張り可愛らしくて、身体付きが何となくなよしい女性でないといやなのです。いくら同性でも私がなぐり倒されそうな逞しい人では困ります。年下の可憐な女学生とか、淑かなお嬢さんタイプでないとい向に気乗りが致しません。

こう書いてきますと、もうお分りのことでしょう。洋子も其の一人、私は家人のるすをよいことにして、今から思うさまいじめようとしているのです。洋子は私より二つ年下の洋品店のお嬢さん、もう大分以前のこと、洋子がバスに乗ろうとして紺色のスカートをひらひらさせ乍ら走っている時、すんなりした脚が活潑にかわされるのを見て、ほんとに美しいと思いました。顔立ちは丸顔で断髪のよく似合う、殆ど目立ちはしませんが、幾分そばかすのあるのが欠点と云えば欠点でしょうが。其の時以来、私は一生懸命洋子と仲良しになることに努めました。其のかいあって、とうとう今日願ひ通りに誰も居ない二階で二人きりになれたんですから嬉しくて嬉しくてたまりません。それに私の家は隣家から可成りはなれていますので、大きな声を出したり、どたんばたん暴れた位では、絶対に聞えないのが好都合です。勿論洋子は何にも知り

ません。私に変な計画がある等とは夢にも氣付いていないのでしよう。私と同じ様に、ワンピースを脱いでシューミズ一枚のまゝ、足をくずして愉快そうにはしゃいでいます。私は洋子の愛らしい表情や、すっきりした肢体を眼の前にしますと、直ぐにも飛びかゝって行き度くなりますが、あわてゝはいけなさと強く自分に云いきかせて、何気なく話題を或る方向へ持って行きます。

「洋子さん、貴女レスリングって御存知？」
「えゝ、新聞で読みましたわ、力道山が強いんでしよう。」

「アメリカでは、女のレスリングが盛んですって、此の前、あたし映画で見たわ」

「あら、女のレスリング？」

「えゝ、そうよ、一寸すごかったわ」

「まあ、いやね、面白いかしら？」

「スリルがあつて面白いわ。おかげであたし色んな手を覚えちゃった。」

「ホッホ……まあ、あきれた。レスリングにも色々手があるのね。」

「そうなの。一寸実演して見せましょうか」

「えゝ、ホホ……」

「でも笑っちゃいやよ。よくって」

「いゝわ」

「じや待って、シューミズ脱いじやうから。」と云って、私は素早くシューミズを脱ぎすてます。下は細いブラジャーに短いパンティ一枚、勿論今日の用意に真新しいのをぴちちりと身につけています。洋子は私の思い切った仕草を何も知らずに、あっけにとられた様にして見つめています。

「用意が出来たわ。一寸お立ちになって」と私は右手を差し上げました。洋子はびっくりして

「あら、あたしも？」

と目を丸くしています。

「そうよ、あたし一人じや出来っこないわ。一寸だけ相手役になって下さらなくちや」

「いやあ、恥しいわ。」

「いゝわよ、誰も居ないんだから、さあ、い

らっしゃい。」

私は洋子の手をとって立たせました。

「いやねえ」

洋子は恥しそうに、ほんのりと頬をほてらし乍ら仕方なく立上ります。

「始めはね、こうして組むのよ」

と私は腕を伸ばして、洋子の腰のあたりに組み付けました。

「洋子さん、思い切ってあたしをこかして見

ない？」

「あら、いやですわ」

「じゃ、あたしがこかすわよ。いゝわね」

「まあ、いやだわ」

「ごめんなさい」

と私は右足を洋子の足にからませて、引き倒しにかゝります。女性はこのことには不馴れですし、それに本気になってはいないのですから、転がす位は何でもありません。右足に力を入れて、ぐっと引き寄せ乍ら身体を横にひねりますと、大ていの女性是他愛もなく転ってしまいます。洋子も、

「あっ」

と小さい声を立て、どっと横倒しに転りました。ぱっとシユミーズの裾がめくれて、あのすんなりした素足が真白い太もものあたりまで、ちらっとあらわになります。

「まあ！ ひどいわ」

洋子を見る見る頬を真赤にして恥じらい乍ら、あわてゝ起上ろうとします。髪がほつれて、細そりした首筋に乱れるのが、ほんとうに美しいと思いました。でも、ここで起しては何にもなりません。私はすぐさま、がばとのしかゝって、洋子の首筋を押え、ぐっと仰向けにひっくりかえしました。

「あらッ！ いやッ」

洋子はびっくりして、私を突きつけようとします。私は構わず足を開いて、むんずと馬乗りに跨りました。もうこうなれば、しめたものです。いくらじたばたしても起きられっこありません。私は洋子のおなかの上にずっしりとお尻をのせて

「ごめんなさい。あたしの勝よ」

と云いますと、洋子は

「いやよ、もういゝわ。放してちょうだい」

と身をくねらせています。柔い感触がお尻に伝わる気持は悪くありません。私は態と意地悪く、

「あら、放さないわよ。今日は思いきりいじめて上げるの」

「まあ、どうして？」

「だって、あたし可愛い女の人いじめるのがほんとに大好きなの。いくらもがいたってだめよ」

と私は両手で洋子のきゃしゃな手首をぎゅっとつかんで、力一ぱい万歳をさす様に畳に押し付けます。そして少しずつお尻をずらせてにじり上げました。始めはおなかの上に跨っていたのが、段々胸の上へ位置が変ります。そしてとうとう、ふっくりした乳房の上

に跨りました。それにつれて、私の両膝が洋子の肩を越えて柔い二の腕をしっかりとふまえ

てしまいます。

「あっ！」

洋子は痛そうに眉をしかめて、二三度足をばたつかせました。でも、上半身はびくともしません。私も次第に興奮して参りました。そしてもう一度ぐいとお尻をずり上らせて、洋子の愛らしい顔を太ももの間にぎゅっとはさみこみます。こうすると、自然身体の重味が股にかゝって相手の喉がじりじり締まることになります。

この型は、いつか貴誌で読んだ時、私は興奮のあまり全身がぶるぶるふるえましたのを今でもはっきり覚えて居ります。確か女性が男性を責める記事でしたが、それ以来私は何時も女性に応用しまして、素ばらしい快感を満喫する様になりました。私はいくら女性を組み敷いても抵抗さえしないようでは、全くがっかり致します。それではスリルも刺激もありませんから、必死に抵抗してもらいたい気持ちで一ぱいです。それには此の型が一番すぐれている様ですわ。普通の女性は組み敷かれるのさえ始めてでしょうから、其の上、顔を太ももにはさまれたり股で首をしめられて

はたまりません。あまりの苦しさとやらしさに、かーっとなって、どんなに淑かなお嬢さんでも、無我夢中に暴れもがき始めます。いくらもがかれても私の方は平気で、ゆっくり相手のくやしそうな表情を見下し乍ら心ゆくまで楽しめますから、こんなよい方法はありません。

所で私は、今までに何人かの女性を此の型で苦しめて参りましたが、今日の洋子には別な或種の期待を持っていました。と申しますのは、私がブラジャーにパンティ！だけになるのは今度が始めてなのです。それまではスカートをつけてばかりでしたので、今までとはちがった一層の快感を期待していました。それにパンティも態々思い切り短い、まるでストリッブにでも出て来そうなものを自分で入念に作って身に付けて居ります。

この期待は見事に適中致しました。洋子もシユミーズ一枚ですか



ら、首から胸へかけて殆ど裸体同様ですし、私のパンティは、あるかないかの短いものですので私の太ももは勿論、股からお尻まで洋子のすべすべした肌にぴったりと密着したわけです。私がこの姿勢をとると、すぐ洋子の顔は忽ち真赤になって苦痛に歪んできます。次の瞬間には「まあッ！いやらしいことしないでッ！」

と云う声と共に洋子の肢体は烈しく波打って暴れ始めました。足で畳を蹴る音がドタンバタンと耳の後の方で聞えます。其の度に相手の身体がゆれて女性特有の快い感触がお尻に伝わってきます。膝に敷いたしなやかな腕に力が入ってピクピク動く度に膝をくすぐられる様な錯覚を起します。殊に太ももにしっかりとさはさみこんだ顔が、右に左にくやしそうな表情でねじむけられる度に、股にあたっている相手のあごがくりくりと動

いて、くすぐったい様な、しびれる様な気持は、何とも云いあらわしようがありません。私は得も云われぬ快感に何もかも忘れてしまつて天にも昇る心地にひたり乍ら此のまゝの姿勢で相手が力つきて動けなくなるまでゆっくり楽しみます。

人に依つて随分ちがいますけど、すぐに参つて、しくしく泣かれるのはいやですわ。それより、齒を食いしばつて半時間でも一時間でも、根気よく頑張つてもらう方が、張合いが出て面白いのです。

それから、どの位の時間がたったでしょう、か、ひどく短い様でもあり、可成り長い様な気もしましたが、次第に洋子の暴れ方が弱くなり、ついに力つきたのか、ぐったりと動かなくなつてしまいました。見ると洋子は顔からも身体からも玉の様な汗をびっしょり流してハアハアと息づかいも苦しそうです。勿論此の暑さですから私も汗だらけ、パンティーはぐっしょりぬれて、まるで歩き通る様になつています。洋子の顔から流れ落ちる汗の玉がすじを引いて次々に私の股にかゝります。洋子は見かけに似合わず気の勝つた所があると思えて、まだ涙を見せません。私は満足感

と優越感で胸をときめかしつゝ、いよいよこれから最後の責めにかゝります。



くれ上つて参ります。
「うッ！」

かすかな苦もんのうめき声もれると、洋子の身体は最後の力をふりしぼつて、のたうちます。相手の息で股のあたりがジーンとやけつく様な熱さを感じます。

「ああッ！」

私は飛び上る程の快感に、思わず叫声を上げて両手を放しました。洋子の喉は苦しうに、ぜいぜい鳴って血走った瞳からどと涙があふれています。

私はやっと洋子を放して、シユミーズに腕を通しました。でも、私もくたくたになつて其の場に座りこんだまゝ、動くのもいやになりました。でも何と云う快い疲労でしょう。洋子は座る気力もなく、うっぷしたまゝ肩をふるわせて泣きくずれています。しきりに唇のあたりを手でぬぐっているのを見ますと可愛そうになつてきました。余程いやらしかったのでしょう。

「洋子さん、御免なさいね。つい身が入っちゃまってかんにんね。」

平あやまりにわび乍ら、何とかして御きげんをとろうとするのでした。

すんでしまつてからは、止せばよかったと云う後悔と、ほのぼのとした満足感がごっちやになって妙な気持が続きますが、しばらくすると又新しい相手を見つけ始めるのですから、ほんとに困ります。

私の様な女性には、どうすればよいのでしょうか。早く結婚してこんな遊戯は、キツパリと

清算したい気持はありますが、それが出来るかどうかあまり自信がありませんし、私と結婚する男性であるかしらと、これも不安です。そして一人悩んでいますと、気晴らしに又女性をいじめて見たくなりますから、ほんとに救われません。

今まで、十数人の女性をこんな風にして、

次々に征服して参りましたが、洋子との後日物語として突然夢想も出来ない事態に出あいました。生命が三年位は縮んだ様な経験を致しましたが、これは又、次の機会にゆずることにしましょう。

(おわり)

口絵の解説

責の見世物百種の内

火の車

伊藤 晴雨

静岡から江尻の方へ約二軒の地点に「軍人坊」という社がある。土地の人や静岡の人はグンジョボサンといっているが、何を祀ったか聞き洩したが、原の中にある一座の森で、毎年八月の五日に此附近の人々が集つて烟火大会をやる。其花火たるや頗る野趣を帯びたもので畠の中に木製の竹のタガをはめた筒を立て五寸玉や一尺玉を続けだまに筒の中に放り込む、そして若い男が其烟火の筒の上に立って口火をつけるのだが口火をつけて飛び下り損じて花火が吹き出して片腕もげちゃったなどという事はザラであるという。それは打ち揚げの早いと遅いので村方で勝負をつけるので競争になるからだという。野蠻だといつてしまえばそれ

っ切りだが其の勇ましい事は実見者でなければ判らない。此軍人坊の社の境内の花火は天下の奇観といつていふと思う。私の見た時は本能寺の焼打ちの仕掛花火である、まず振鈴を合図に社の前に芝居の大道具風に作った本能寺。長サ二十米実程の家体に火が附く、一方より武者人形を持って(明智方)行く、人形から火を吹き出すと本能寺の家体の中から信長の人形が、これも火を吹いて現れる。明智方の人形と信長の人形と火の吹きツコをする中、信長の人形の腹が爆発して火を吹き明智方の軍兵を焼いて了うと一面の火になって本能寺の屋体が崩れ落ちる。信長の人形の頭から火が出て此火事は終る。次には神社の中にある大樹(神

木であろう)の頂上より火の滝が落ちる。これは花火を逆に落すので火の滝のように火の粉が落ちる六尺計りの大滝である。滝が落ちていく中に八尺計りもあると思われ布製の鯉が口から火を吹いて滝へ上って行く処で此花火を終るのである。而して此花火の火では決して火傷をしないと信じられて見物の頭の上に盛んに火の粉が落ちてくる、実に壯観である。

花火の説明が長くなつたが、女の責場の見世物に此方法を応用して女を車に縛りつけて円心力を利用して車を回転させて火をつける、勿論女は人間でなく人形でこれを焼いてしまふ。針金で宙釣りにした女の人形は火の中へ投げ込む女の悲鳴は人間が叫ぶこうした見世物が出来たらば猟奇的なもので差し詰め江戸川乱歩さんや野村胡堂君などの材料になる事受合ひである。因に云う私は今浅草公園のある興行師と合同して女の責め場計りの見世物を作りつゝあるが開場の暁には其光景を本誌に寄稿するつもりである。

小生は東京の一町工場に勤めている青年です。奇譚クラブは昨年の五月号よりずっと愛読して居ります。他の雑誌と比べてみると奇譚クラブの方がずっと面白く、毎月の発刊が待たれて仕方ありません。

実は昨日昼休みに日本橋の三越に出かけ、帰り道に私用の速達を出すのを思い出して、近くの小船町郵便局へ出かけました。速達の窓口に着いた女性が居り、封書を係のものに差し出していました。何気なくその封書の表書を見た途端、思わずハッとしました。曙書房と箕田京二氏の字を見たからです。確かに目違いではありません。四角い封筒でした。その差出人の女性は年の頃二十二、三で、背の高く横顔だけしか見ませんでした。見たが、とても美しい人でした。小生はワクワクする胸を押えて、彼女が郵便局を出ると自分の速達を係のものに頼んで、大急ぎでその後を追いかけてきました。

彼女は昭和通りを渡り、日本橋の交叉点にかかりました。小生も又無我夢中で追跡しましたら、運よく赤信号が出ていてとうとう彼女と一緒になってしまうました。小生はなるだけ分らないように彼

奇妙な便り

—読者通信の塵籠から—

女の右側に立ってそっと彼女の顔を盗見していました。ところがまづい事に小生が見ていることに気がついたらしく、急に小生に顔を向けたので視線がピタリと会ってしまいました。その時の彼女の目があんなまりキツとして小生をとがめているような表情だったので思わず目を伏せて顔が赤くなるのを感じました。

やがて信号が青になって彼女はのです。よく考えてみると、彼女が小生を振り向いたのは偶然だったかも知れません。普通の女性だったらもっと心臓強く追っかけたのですが、その女性が余り近づき難いような気持がして、つい気遣れがしてしまったのです。

封書の表書を見た時、曙書房はすぐ、あゝ奇譚クラブの発行所だとピンと来たのですが、箕田氏の名前は覚えていたのですが、何ん

歩き始めましたが、小生はもうすっかり勇気がなくなってしまうてゆっくり歩きながら彼女の後姿を見ていたのですが、彼女はそのまま正面の入口から三越の中へ入って行ってしまいました。その日は一日中彼女のことと頭が一杯になり、後になつてなせもっと勇気を出して追いかけてなかつたかと考えると残念でたまりませんでした。しかし、あの時は実に穴があつたら入りたいと思う程恥かしかった

な人か分りませんでしたので、家へ帰って奇クを開いて見て編集者だったことが分りました。奇譚クラブには相当大勢の女性読者が居るのでしようが、彼女のような美しい女性が奇譚クラブのような雑誌を読むのだらうかと思うと、一寸不思議です。

もしかししたら箕田氏のお知合いの方だったら大変失礼になりますので、一晩中考えました。しかしどうしてもあの女性が愛読者に思

えてなりません。奇譚クラブの愛読者なら同じ東京に住んでいるのですから、是非おつき合いたいと思いましたが、せめて、手紙のやりとりだけで満足ですから、思いあまって箕田氏にお手紙を出した次第です。

その夜、蒲団に入っても今日見た女性の姿がちらついて、なかなか寝つかれませんでした。小生はそんなに内気な方ではありませんが、やっぱり美しい女性だと気がおくれがします。白いブラウスに同じく白いピタリしたスカートで女性としては背が高く肉付きも豊かでした。顔は交叉点の所で瞬間的に正面から見ましたが、つんと澄ました態度で、いわゆる近づき難くどちらかと云えば細面で眉が濃く、一寸きついところがあります。が、きつても美人で、きちんとした服装から云って割合に高級のオフィスガールのタイプです。

大変御無理なお願いですが、以上書いた理由でどうか彼女の名前と住所をお知らせして頂けませんか。勿論、絶対に御迷惑はおかけしませんし、秘密を守ります。七日の日、日本橋の小船町郵便局から速達を出した女性で、すぐお



手記

導尿される令嬢

田村 仁一

僕は小さい時から浣腸に多大の興味を持っていた。誰の感化という程の判然とした動機も無いから恐らく先天的性質なのだろう。未だ小学校へ入学しない頃から、近所の同年輩の子達と、押入の中や二階のタンスの陰等で浣腸ゴツコをした。向いの家の女の子に四つんばいや仰臥拳足の姿勢をとらせ

「はい、浣腸しますよ」と言って遊んだりしたことを憶えている。

中学生になると、百科辞典の浣腸とかイルリガートルの項、英和

辞典の enema とか clyster をひいて読んだ。中学三年頃、隣家の小母さん（未亡人）から、夫婦の性生活の話を初めて聞かされて驚いたけれど、自分でそれを実行し度い等という欲望は全く起きなかった。（この傾向は現在も同様でノルマルな intercourse にはさして欲求を感じない）唯、小母さんが婦人科医に内診を受けた話や、病院で浣腸された時の話には非常に興奮させられ、その後度々彼女を訪ねて、

「どんな風にして下着を脱いだの？ どのような工合に検診台に上っ

たの？ 足はどうしたの？」と根掘り葉掘り質問して、身振り上手な小母さんの詳細な説明を聞くことが出来たが、期待した実物教育は、遂に彼女はしてくれなかった。

四、五年前には、内診の写真、挿絵、記事の載った雑誌がよく出廻っていたので、手当り次第に読んだもののだが、近頃は見当らず、僅かに「奇ク」の浣腸記事あるのみ。羽村さん、花村さん、角さん達の手記を熟読している。ただ「奇ク」には縛りや切腹等、僕の興味を全然引かない記事の方が多

虹放言集

三島 俊夫

○ 自然の暴威は、最も抵抗の弱い個処に於て爆發する。人間社会でも最近弱きに強い公務員や、町の紳士がのさばりかえっている。

○ 集団強盗がその家の娘に暴行したと書いた新聞と只、強盗とだけ書いた新聞があつた。相手の迷惑を考えない新聞は、目に見えない新しい暴力の一つである。

○ 世の中で、最も純真で仏のような心の持主は、自分の性癖に劣等感と羞恥とで孤獨を感じている人である。今の世は余りにも厚顔鉄面の者がかり集まり過ぎる。

○ 「お富さん」の唄を下劣きわまりないといきどおつていたお役人が宴会の席上で、上半身裸になつて「お富さん」の流行歌に合せて踊つた。道学者はとかくこんなものだ。表と裏の使い分けか？

○ ヘツパーンの髪を許すとか許

いので困る。僕は浣腸や内診の受動者よりも、能動者になる方を望むけれど、受動者をいじめたり、傷けたりするのは嫌で、能受共に楽しむのでなければ意味ないと思う。さて、自己紹介はこれ位にして先日僕を欣喜雀躍させた導尿管視のお話をしましょう。それは初冬にしては温い小春日和に晴れた日のお昼前のことであった。僕は数日来、胃酸過多に苦しんだ挙句近所の病院に診察受けに行った。待合室で順番を待っている時、診察室の扉が開いて、黒いビロードのワンピースを着た二十才前後のかわいなお嬢さんが出て来て、僕の隣へ腰掛けた。バラ色のあどけない丸顔に、白いレースの襟飾がよく似合う上品なお嬢さんだった。何処が悪いのだろうと思いつつ、漂ってくるヘリオトロップの香にうっとりしていると、再び診察室の扉が開いて、看護婦が、ゴムの導尿カテーテルと試験管の入った膿盤を手にして現われ、隣のお嬢さんに向かって言った。

「Hさん、では、お小水をお取りしますから、此方へお出で下さい」

令嬢は黙って立上って看護婦の後から廊下へ出て行った、僕はこ

の時、彼女がHという名であることを知った、

此の病院の内科診察室は比較的に開放的で人の出入が多いので、其処のベッドでは、若い女の人のカテーテルによる導尿等は出来ないから、別室でするのでないと気が付いた僕は、つと立って、さりげなく後をつけて行くと、二人は二階へ上って三つ目の部屋へ入って行った。ところが、発条でもゆるくなっていたのか、Hさんが念入りに閉めた扉が間もなく半開きになってしまった、一人は楽に入れる。妖しくも不逞な野心が浮かび上って、途端に僕は胸がドキドキして来た。暫く躊躇したが、思い切ってそっと中へ首を入れてみた。若し、とがめられたら、部屋を間違えたといえはい。眼前は木製の衝立で遮ぎられていて、二人の姿はない。衝立は右手の壁に對して直角に置かれていたのだ。が、壁との間に五厘位の隙間がある。僕は早鐘の様に胸をおさえてその隙間に顔をくっつけた。見える。見える。壁に沿って置かれた黒いレザーの敷いた寝台の上には、既にワンピースの裾を引上げられたHさんが、心持ち上げた膝を伸し、瞬きもせず真上の天井

を凝視している。若し視線を上げたら、足下から覗いている僕に気づく筈だが、極度の羞恥に青ざめた彼女は微動だもしない。純白のシユミーズの縁取りのレースと、滑らかな素足の白さが僕の眼をくらくとさせた。

間もなく左側から看護婦が現われ、脱脂綿を以て消毒を始めるとHさんは右腕で眼を覆ってしまった。看護婦は僕に背を向けて蹲み慣れた手つきでカテーテルを取上げた。

僕は只じっと息をこらしているばかりだった。手に汗を握るといふのは、こんな一瞬を言うのだから。やがて試験管に黄色の尿が八分目位溜った。

「さあ済みました。下の待合室でお待ち下さい」

と言う看護婦の声に、はっと我に返った僕は、慌てて廊下へ出て行った。

僕は現在(1)30ccのガラス浣腸器(2)クスコー氏子宮鏡(3)ダツチベツサリ(4)タンポンを持っている。(2)―(4)は避妊法の映画「愛の道標」を見た時刺戟されて買ったのだが、実際使用した経験は残念ながらない。(1)のみは独りで色々な体位をとりつゝ使用している。

さないとか、或る女学校の校長が言っていたが、きまらぬうちに、その髪型はすたれてしまった。世の中の流れというものは、それ位早いものさ、おバアちゃん。

読んでいて一番ムシズの走るものは、新聞の社説、世の中で自分位偉い者はないという威張りようは全く鼻もちならぬ、若し殺人罪というのが法律の中になかつたら第一番に社説を書く男の首をしめているだろう。

名譽も金も地位もほしくてたまらぬ人間共に中で、そんなものは何もいらぬという人の一群がある。総理大臣になりたくてたまらぬ男や選挙運動に走り廻る男は、彼等の爪の垢でも煎じて飲むといふだろう。少しは日本もよくなる彼等の名はアブ・マニア。

日本人は由来、「娯楽」というと蔑む風がある。苦勞するのを尊み愉快に暮らすのを卑しむ、貧乏性に出来ているらしい。戦争で焦土と化しても、辛苦を求めるのがお好きらしい。どうも辻褄の合わない話ではあるが。

【ローカル・レポート】

腰巻専門の窃盗男捕わる

春 木 俊 野 提 供

十二月三日午前一時頃、東京で別紙、新聞切抜きの様な極めて面白い事件がありました。私はマゾ癖性愛者ですから、此の記事を見た途端に何かしら嬉しいとも楽しいともつかぬ思いになり、いろいろと想像を逞ましくしているのです。地方のマゾの方もこんな事件なら思わず微笑をもって、私と同じ気持ちになるのではないのでしょうかしら。

余り風采のあがらない四十男が、丑満時には一寸前の夜半の一時、やっとこさ忍び入った芸者置屋の部屋から盗み出した衣類を持って逃れようとして、美しい脂の乗りきった中年女に見つかり、逃げようとした隙もあらばこそ「誰っ! あんたは何よっ! 泥棒だねッ!」ときめつけられたかと思うと、いきなりドシンと体当りを喰らわされ、相手は弱い女とは云

え、盗み出してホッとした処なので見事に機先を制されて、ハッとなつて思わず男はヘタヘタと腰をぬかしてしまつた。さあそれからが大変。「みんな来てエッ! 泥棒よッ泥棒よ!」と女の甲高い悲鳴にも似た怒号に、部屋のはちこちから飛び出して来たのは肌もあらわに、赤色、水色の色とりどりに艶めかしい寝巻のまゝの姐さん達、はね起きて逃げようとする男に組みついて、組みつぽぐれつの朋輩をみつけるや、それと黄色い声をはりあげて男に突進。忽ち男は組み敷かれて、寝巻姿のあでな姐さん達は真白な大腿もあらわに、男の上にどっかと馬乗りに跨ってしまった。一人は足の上にしかかと馬乗りになつて後の二人は腰紐や扱帯を集めて、今はもう勇敢な姐さん達のお尻の下に身動も出来ず、潰された蛙のように組み

敷かれています男の両手を振上げ、後手にして縛り上げてしまつた。縛り上げられながらも男は頭、顔、腰を散々姐さん達の素足で蹴られ、踏まれ、首をしめられて、やがて彌次馬の前で六人の女性に後手に縛られ、縄尻をとられて引きすえられてしまつた。全くマゾの我々を喜ばした珍事件だ。過日、映画女優の木村美津子さんが自宅へ金ゆすりに来た男の腕を振上げて、矢張り掴えた事件があつたが、全の眼の前にその再演を繰りひろげたいものである。以下同事件を取扱った三新聞を御紹介します。

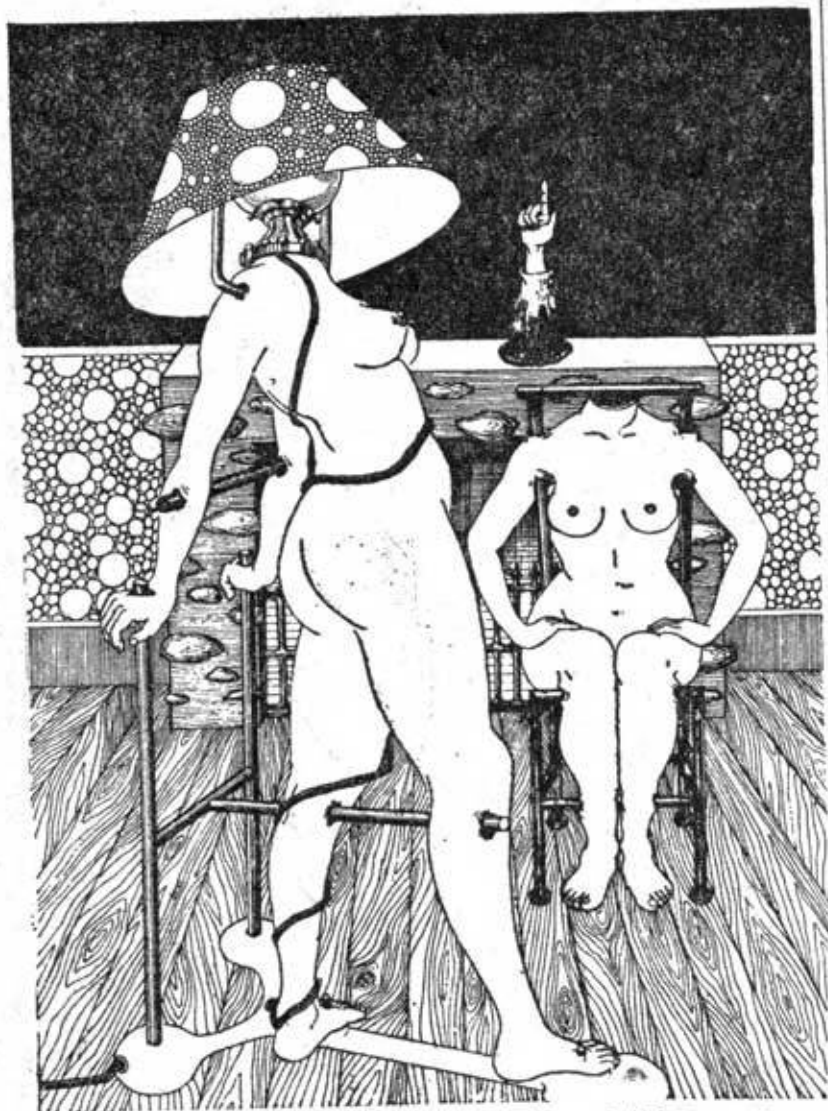
男板橋区板橋三の九〇無職斎藤清(四三)で、廿日夜豊島区池袋二の九六五芸妓置屋明石すみえさん(三一)方からメリヤス腰巻四枚を盗み、これを自分の下半身に巻付けて逃げようとしたところを捕われたもの。○同三業地では十一月上旬からひんびんと起る腰巻の盗難にキツトあの禿が臭いとニラミ、芸妓衆が協力して張り込み捕えたもの、この変態男「オコシの奥で上玉か下玉かすぐ判る」とボヤいていた。

十二月三日附、東京新聞(夕刊)に、姐さん連賊にタックル、花街荒しを取り押う、という見出しで、〃三日午前一時ごろ豊島池袋二ノ九五六芸者置屋「きよのぶ」こと明石すみえさん(三一)は裏木戸に怪しい物音がするのでぞいてみるとハゲ頭の男がごっそり着

強姦夜話

三 島 俊 夫

うちと太田の婆ちゃん松下さんと、鈴木家の嫁はんと四人で、山へ薪採りに行つたんやわ。山の中で男が一人出てきてよ、ニヤニヤ笑つて、うち等に近づいたんやわ、鈴木家の嫁はんに、鎌貸して呉れへ



(投稿挿絵) 人間家具 小坂みのる

物をかゝえて逃げようとしていたので思わず賊の足にとびつき押し倒した。奥座敷でお茶を飲んでいたら同置屋芸者の乙まり(二二)清葉(二三)らん子(二〇)さんら三人はこの騒ぎにとび出し賊に馬乗りになり腕、首などを絞め上げパトロール中の池袋署員に引き渡した。同署の調べではこの男は板橋三ノ九〇元駐当軍警備員齋藤清(四三)といふこの春失職、妻に死別さびしさから女の着替え姿に興味をもちこっそり池袋芸者置屋に行きスキをみては女の着物を盗んでいた

もので去る九月同三業内の置屋「分湖月」こと中原志津江さん(四五)方からキンシヤの着物など七点(三万円相当)を盗んだのをはじめ置屋専門に八軒約百万円相当の盗みをしていた。すみえさんは賊を捕えた芸者三名とまだ興奮のさめない表情で「とにかく夢中でしたよ、芸者衆の力って大したものでしょう」と大はしゃぎだった。「(こんな工合に……と武勇伝を語る姐さん連と犯人齋藤という説明で四人の姐さん連の写真と犯人の写真が載って居ります)

十二月三日附、産業経済新聞

(夕刊)に、勇み肌、東芸者捕物帳、六人が大立回り、見ん事置屋の賊を捕う、という見出しで、

置屋から衣類を盗んで逃げだすコソ泥を芸者さん六人が大立回りのすえ取押え、さすがお江戸の芸者衆——とお巡りさんをうならせた。三日あき九時半ごろ豊島区池袋二ノ九五六芸妓置屋「きよすみ」と明石スミエさんの裏口から顔を出し、あたりをうかがって、こそそ逃げ出すあやしい男を同家の芸者君梅こと飯島仁子さん(二四)が発見、日ごろからハゲ頭の中年男がチョコチョコ現われ、君梅さんらの大事なお座敷着や、下着類を盗んでいくにつつきドロボウと直感。「コノヤロウツ」と勇敢に首っ玉にしがみついた。居間で朝のお化粧をしていた同輩の清葉、てまり、菊子さんら五名も君梅さんの声にとび出し、便所に逃げこもうとする男を、てまりさんが「ヤツ」と急所をおさえて引きもどし六人ですそもあらわに大立回り、ついに男を腰ひもやシゴキでがんじがらめにしりあげ池袋署につき出した。この男板橋区板橋三ノ九、元進駐軍警備員齋藤清(四二)でこの春失職してから芸者

んか言うさかいに、鈴木のはんが貸したんよ、いきなり、鈴木のはんは胸倉掴まえてよ、うち等に向って、こらッ、言うて鎌振り上げるさかいに、うち等びっくりして飛んで山を下りたんよ。今度登って行ったら、鈴木のはんは解かれた紐を結んでいたわ。

置屋専門に約卅件百廿万円もの盗みを働いていたが、「芸者さんたちの、すさまじいのはおどろきました」としよんぼり。お手柄の君梅さんらは「あの男、案外弱いののでガツカリしました。忘年会なんかでもいやなお客にはこの手でウンとこらしめてやりましょう」と意気けんこう。(コソ泥逮捕に協力した芸者衆という説明で三人の芸者の写真が載って居ります)ローカル・レポートについて

課題原稿の募集以来、各地から貴重な資料の提供を頂いておりますが、御手数ながら、どんな些細な事件でも本誌の資料性を増すため御協力下さるよう御依頼いたします。敢て、新旧は問いません。

女性願望の青年の手紙



中 津 直

始めてお手紙を差し上げ、失礼をお許し下さい。私は貴誌の愛好者の一人として以前から愛読して居ります。さて、此の度考えに考えた上、勇気を出して今日迄誰にも云えなかった自分の変わった性格を、ありのまま申し述べたいと存じ、乱筆拙文ながら筆を執った次第でございます。

生れ落ちるとその要素があったのかも知れませんが、何時も私の胸に湧いて来るのは女性志願のことです。明けても暮れても鏡台の前で化粧に身をやつし、美しい着物を付け、お好みの頭髪を結い遅ましい男性達に可愛がられて居る女性こそ、私の少年時代からのあこがれの的であります。しかし毎夜女装に身を化して男色を売る男娼の行動には余り好感がもてません。だがしかし、一人淋しく欲望に悩んだりする折、いっそ男娼にでもなってしまうかと思つた時はないとは云えません。

今日までに色々な男性と男色関係で交際して来ました。現在でも一青年とおつきあひして居ります。でも単なる同性愛に結ばれて外面は普通の友達同志の様なお付き合いです。私はこれでは不満足でたまりません。又、彼氏だってまさか私の内心まで知るわけはありません。互に住所が離れ離れです。で、逢瀬は一ヶ月の中一回乃至二回位です。私に対する彼の愛情ぶりはとっても激しく、それ故あまり好きでもない彼と手を切れず、今でも交際して居ります。でも、折を見て別れ様と思つて居ります。

私自身幾分か多情性をもつて居り、現在相手が居ても自分の好きなタイプの青年を見ると、胸が高鳴って仕方がありません。旅行中車内で同席して好きなタイプの男に出合ったりする折があります。が、そんな時には嬉しいのと恥かしいので胸が一杯で、乙女の心理とでも云うのでしょうか？ 私のすぐ上に姉とすぐ下に妹が居り、現に姉達夫婦と同居して居ります。姉の夫君というのは私の好きなタイプの人ですから、別段何の興味もありません。只、お姉さんは女に生れておしあわせだなア

と思う程度です。又、妹は私が云うのもどうかと思いますが、近所でも評判の美人です。兄の私ですら可愛い娘だと思つて居ります。その上兄妹の内大の仲良しで、この事も近所の評判です。その可愛い妹でも青年達に騒がれて居ると、私の胸は何となく嫉妬心が湧いて荒波の如く高波を打つて来ます。自分が女であれば妹なんかには負けないのにと馬鹿げた考えが浮かんでくるのです。自己惚れとでも云うのでしょうか、肌の色こそ白くはありませんが、容貌は決して女性に負けないだけの自信をもつて居ります。

私の職業は踊を教えて居りますので、時折舞台で女装して出ますと、誰一人として私を男性だと思つて居りません。平素外出して居りますと、他人が私を女みたいネとかからかったりして仕方ありません。外面にでも女性的に見られて居り、特に田舎町ですと、私の様な変り者は話題の的とでも云えましょう。それと反対に、大分以前の事です。或る女性に首ったけ惚れ込まれて、私も好奇心と、これを機会に普通の男性になつてしまおうという気持ちからその女と関係してしまいました。でも、そ

の男性へ立返えるという気持は裏切られてしまいました。その柔らかい女の肌、そして女の香りとでもいうのでしようか、女の体内から出る匂いは嫌悪感でした。それでも一度位では駄目だと思ひ、二度三度と情をかわしましたが、いづれも裏切られて、その度に逞ましい男性の体を対象に置きかえねばなりません。それ以後一切女性には見向きもしません。如何にしても自分の変わった性格は治らないと観念して、此の頃ではあきらめて居ります。そして女

性になりたい一念です。私は女性以上に気が小さく内気な方です。もし軍国時代で兵隊にとられたりしたら、それこそ私は死の苦しみを受けることでしょう。女性として生活出来るなれば、どんな女にも負けないだけの自信と愛情をもつて居ります。

街を散歩して居ても、呉服屋に時季の変わった着物類が出て居ると、用もないのに立止まって見つめて居ります。それも婦人着です。書店へ参りましても貴誌以外に目を通す書は婦人雑誌です。はたの人々が変な目つきで私を見て居ります。でもその時の私は別に恥かしく感じません。

ありませんが、和服が女性的な自分にあつて居る様に思えて、ずっと和服で通して居ります。現今のところ将来のことまで決心しておりませんが、私の様な変わった男性で、女性志願の者でも理解して下さる逞ましい男性の方となれば、お互い愛しあつた上で現在の職業を捨てずに精進して行きたいと思つて居ります。以上が私の願望、女性志願です。では貴誌の御発展を蔭ながらお祈り致します。草々

昭和二十九年十二月十日

編集者に対する公開状

(アイデアを含む)

菅原春夫

本誌の様な誤解され易い特異な而も貴重な文献を今日迄営々としつて続刊されて来た御努力には全く頭が下ります。私達にとっては何物にも代え難い座右の友を毎月欠かさず御出版下さる御苦勞には深く感謝を挙げます。その御努力がむくいられ、いよいよ他誌を圧倒して斯界唯一の王座を確保されま

したことを全読者としておよろこび申し上げます。扱てその貴重な本誌が更に充実した内容となり、その信用と地位とをゆるがないものにするため私は次に御忠言と御注文とを申し上げます。歯の浮く様なお世辞は誰でも云えますが、それは何の足しにもならないと存じますし、真に本誌の前途

先ず第一に本誌は我々にとって唯一の存在ですから一頁と雖も無駄があつては惜しいと存じます。頁数の増加するばかりが内容の充実ではありません。往々にしてどんな雑誌でも大冊になるに従つて無駄が多くなり、執筆者もお座なりの作品即ちマンネリズムに随ひてしまふものです。折角本誌は増頁をし始めたところですから今後

その轍をふまないよう今のうちからお願いしておきます。それには他誌で読めるような記事や挿絵や写真は一切のせない事、すみからすみまでスキのない編集をして頂きたいのです。現在でもやゝ散慢な様子が見えます。殊に挿画やイラストは悦虐等に無関係な普通の雑誌にあるような絵はむしろ廃して下さい。そのため或る記事には挿絵がなくても差支えないと存じます。総花的な編集では特異誌としての味が失われると失ひます。悦虐作品(責写真や縛り絵)のあり方については別に小篇で申し上げますが、たゞ盛沢山というのでは

なく、真にマニヤを喜ばせる資格のある作品だけ厳選して下さい。それから口絵にはなるべく色刷のもの、出来れば大判の傑作を一つ位入れて下さい。目次裏などは相当広いスペースがあるので、小さい絵を沢山入れるより、大作を一つ入れて頂きたいのです。出来得れば「附録」として掛軸用になる位の美人画をつけて貰えれば理想的です。これは本誌でなければ行えない、他の雑誌に期待できないことなので、多少減頁しても又は値上げしてもやって頂きたいことではありますが、如何でしょうか。

これに関連して一つのアイデアですが「悦唐ダイジェスト」ともいふべき頁の設定を提案いたします。新年号に諏訪氏が述べていられるように、過去の大衆雑誌には縛絵の傑作がずい分あります。勿論今でも縛絵のある雑誌は沢山あり、これらを全部集めることは到底いかにマニヤでも不可能です。これらを新旧論ぜず、見当り次第本誌に再録し、出来ればその場面に關係ある個所だけ原文も添えておけば完璧です。かような責めのダイジェストはおそらく全読者の要望だと思いますし、これが実現

すれば、その資料は必ず全国各地から読者の手で提供されることゝ存じます。本誌の作品だけで満足しろと云われるかもしれませんが、他にもなかなか捨て難いものがあり、マニヤとしてはやはり多ければ多い程嬉しいわけであります。そしてこの企ての実現によって本誌の執筆陣も必ず参考となり鞭撻ともなり、作品が充実に上ると信じます。これには著作権の問題があつて厄介だとしたらその出所だけでも紹介して頂けたらよいと存じます。しかし、以前本誌に戦後に現れた責の挿絵集としての二面ばかり紹介されたことがあるので、やれば必ずできると思ふのですが、如何でしょうか。それから、これは絵に限らず、責芝居の舞台写真や、映画の責場面のスチールなどを加えることが出来れば更に充実すると思ひます。

次に記事の割ふりについて、読者層の多いものから順に頁の割合をきめるのが妥当ですから、常に読者の傾向、例えばサドが何割マゾが何割、ソドミが何%という様に統計をとり、出来れば誌上に公開して頂きたく存じます。それによつて読者は必ず自分の好む記事の多少について納得すると

思ひます。これが不平不満の起らぬ最良の方法であり、編集者が独善に陥らぬ方途だと存じます。

次にこれは我が国の現状では無理かと思ひますが我々は余りに世間を憚り、秘密的に自ら偏狭に陥っているようです。どうしても住所氏名を厳秘にせねばならぬ人を除き、他の娯楽雑誌の如く会員名簿を作成して相互の交通及連絡をはかり、更に地区毎に支部を結成して本誌の発展と充実にために、各種の催しを行うべきだと存じます。如何でしょうか。徒らに秘密々々といつて殻に閉じこもつていては「やはり変態のグループだ」と世間から誤解を深める原因になりはしないかと思ひます。現在の段階では、投稿者の住所の問合せに応じないという誌上の断り書は止むをえないと思ひますが、どうしても暗い感じを与えられるのは私だけでは無いと存じます。現段階で全読者の公表は勿論無理でしょうから、希望者だけでも公然と交歓し合うように計つて頂きたいものです。如何でしょうか。

次にこれと関連したことですが、毎号発行所を訪れては困ると注意書がしてありますけれども、勿論御多忙中読者の応待までされ

るのは不可能と存じますが、これも又読者としては不明朗な感じを抱くのではないのでしょうか、かような特殊な世界であるだけに、又読者としては直接編集の諸先生に面接して色々御指導を受けたいと思ふ心が強いのでありますから、出来れば直接面接日を設定して相談に依つて頂くようにされたらどんなによいでしょう。そして出来れば東京に分室なり支社なりを設置して註文や相談に依つて頂きたいのです。これは本誌の名実共に発展した証拠ともなるものです。是非実現して頂きたいのです。こうして本誌を中心として我々のグループが直接固く團結することをお願いします。我々東京在住のファンもこれが実現の暁には御協力を惜しまないつもりです。

以上いろいろ勝手なことを申し上げましたが御多忙中余り長くなつても御迷惑と存じますので此位にしておきます。大変云いたい放題のことを云う奴だとお怒りかと存じますが、おそろく私の今申し上げましたことは全読者の声であると思ひて居りますので、出来ても出来なくても、その御返事を誌上に賜りますよう切にお願い申し上げます。御無理な注文ばかりかと思

いますが、読者は元来勝手な者、我がまゝな者なのです。しかし編集の諸先生を信じるからこそ甘えるのでありますから、何卒その点お汲みとり下さいまして宜しくお願い申し上げます。では向寒の折柄いよいよ御自愛下さいまして、よりよき本誌の出現のため御健闘下さいませ。

奇々編集長

箕田京二先生

菅原春夫氏へ

編集子

貴下からの公開状は、今迄多く



T. SIMADA

の読者諸氏から受けた御問合せの数々を極めて端的に要領よく指摘しておられますので、この際一括してお答えしたいと考えます。第一の件は、挿絵や写真は掲載する以上は、アブに集中せよ、という御意向だと思えます。これは本誌の本来の性格上、当然そうあるべきだし、又そういう根本方針で進めておりますが、時にそうでないものが混っているのは、おしるこの中へ入れる一つまみの食塩の効果を狙っているともいえるのであります。こゝで考えなければい

(投稿挿画)

島田卓郎

けないことは、元来が極めて狭い範囲の読者層を対象している本誌のことですから、知らず知らずのうち尖鋭化してゆくこととあります。従って私たちとしましては、貴下が御心配される件とは逆に、行き過ぎを警戒している次第です。色刷口絵は出来れば実現したいです。只、そのために値上げということは、現在、特大号で限界まで上げておりますから、口絵か本文を減頁の上、実施しなければならなと思います。単色でも頁数を保持して盛沢山にせよ、という相当強い御意見もありますので、今後十分研究の上、実現を計りたいと思えます。

思いますが、記事の割ふりについては、十分調査した読者層の色別けの上に立って、真剣に考えてやっております。文獻誌を標榜している以上、時には極めて稀少なケースの傾向であっても、それが稀少であればあるだけに珍重して取扱う場合があります。特異雑誌であるだけに決して安易な気持ちに走ったり、編集者の独断でやったりはしていません。

次に会員名簿の発行、各地の支部結成については賛成される方々が、名簿の発行や支部の結成に耐えうるに足る数があるようでしたら実行したいですが、只今迄のところ、そういった御希望は余りないようです。世間を憚ったり偏狭に陥ってはいけないという御意見には賛成ですが、秘密の殻に閉じ込まっているから「変態グループ」だと世間から呼ばれるのではなく、社会全般がそこまで啓発されていらないからなのではないでしょうか。本誌も嘗て或る日刊新聞紙上に五段抜き位で「害があつて益のない雑誌」と大々的に攻撃されたことがあります。その紙面で「全国に販売網を持ち北海道から九州まで、堂々と一流書店の店頭陳列し云々」とありました。私

たち一人一人が劣等感と孤独感に悩んでいたって、表面に現れない以上、誰もその存在さえ知らないことでしょう。少くとも月刊雑誌として発行するとなれば「変態雑誌、出しやばるな」ということになるわけですね。彼等の私たちに對する態度は現在の段階では、全く罪人扱いなのです。雑誌にして然り、個人にして尙更ひどいことでしょう。「投稿者の住所の問合せに応じない」という件については誤解していただけるようなので、はっきり弁明しておきます。大体編集者がその職務上知り得た個人的な秘密を嚴重に守るべきことは、当然のモラルでありまして事新しく断るべき事柄ではありませんが、かゝる性格の雑誌では殊に厳守されねばなりません。私たちは「投稿者の住所照会に応じない」というのではありません。若し御本人から「自分の住所本名について読者から照会があった節は知らせてくれて差支えない」という御許しがありますれば、喜んでその労はとりましょう。仮に貴下が、この公開状に責任の所在を明らかにするため、特に住所本名を誌上に掲載するという御申出があったとすれば、発表するのに躊躇はい

たしません。たしかに貴下の住所氏名は明記してありました。しかし、編集者の立場として貴下の御承諾なしに、どうしてこれを印刷にしたり他人に漏洩したりするところが出来るでしょうか。照会がありさえすれば誰彼なしに公開するということとは許されなれないことなのです。これは新聞の投書欄等についても同じことなのです。では、そんなわかりきった事を誌上でなぜわざわざ断るのかと疑われるでしょうが、殆どの方が本名を秘せられておられますので夥しい照会者に一々その旨御返事する煩にたえないのと、いらぬ浪費をして頂きたくないという気持ちからで、決して私たちが中断しているのではないということをお断りしてほしいと思います。

貴地への進出は念願ではありませんが、これには十二分の準備が必要でありますので、絶対不壊の基礎を確立の上、実現を企りたく考えております。最後に発行所を訪問の件、これは投稿原稿の採否の問合せ、文通交際の幹旋、分譲品の購入やコレクションの鑑賞等々その御主旨はよくわかります。他の雑誌では、発行所の訪問をわざわざ禁止はしていません。しか

し、それは書いていないからといって、編集者や筆者が、訪問した読者の方々全部に、いつでも一々逢うというわけではないでしよう。皆さんが逢いたいという以上は、少くとも原稿採否の決定権を持つてゐる者とか、全貌に通曉してゐる者を目的としていられると思います。實際上、そういった掌にある者は、東西奔走、席の温まる閑がないのが現実です。突然、何の前ぶれもなく訪問される方々に御満足のゆく回答や応待の出来る立場の者が、のんびんだらりと煙草をくわえてゐるというようなことは有り得ないことなのです。わざわざ遠路期待を抱いて御足労願った方々に、失望を味って頂きたくない気持ちが、かくいう揭示になつたわけで、私たちとしては却つてその良心的な処置を諒として頂きたい位なのです。然し、私たちは誰にも逢わないというのではありません。雑誌の発行に支障のない限りつとめてお逢いし、広く、いろいろの方々の新知識を受け入れて啓発されたいと念願しております。どうぞ、事前に書面で十分御打合せ下さるようお願いいたします。尙、私個人としての気持ちでは、貴地はじめ各地での「座談

会」や「撮影会」の開催、コレクションの展示会や各種傾向のグループのクラブ結成、或は文通幹旋機関の設置、等々の夢を抱いてはおりますが、微力のためと公表できないう種々の困難な条件山積のため、御期待にそい得ないのを残念に思います。今後、若しその一部でも実現出来ました節は、御協力下さるよう御願ひ致します。

以上、簡単に回答を書いてみました。が、或はこれを讀まれて、意氣込んでいたのに、と失望を抱かれたかもしれません。然し、私達としましては、次号こそは、来年こそはという大きな夢を抱いてはおりますが、早速実現出来るあてのない事を大風呂敷をひろげて読者の方々を欺くということとは良心が許しません。然し、出来得る限りの事は、誠心誠意、全力を挙げてやるつもりであります。

日本でも数少い傾向の雑誌でありますから、編集者として十分その責任を痛感し、苟しくも独断に走ったり、良薬を化して毒薬となさしめたりすることのなきよう注意いたします。若し、私たちに誤りがあれば、御叱正賜らんことをお願い致します。

(終)

(絵画、写真)を対象とした

責めのアイデア

八 郎



一、誘蛾燈。電柱に後手を廻して縛られたバタフラがだけをつけた女性。両腋窩に小誘蛾燈、股間に大きい誘蛾燈を燈し、集る虫に女体をなぶらせ、晒しておく。繩は細繩、乳房のまわりを二巻き位にする。足はやゝ開き固定。尙、高く電燈をつけて蚊がよらぬようにする。

二、カガシ。水田又は畑でもよい。十字に交叉した稲ぐいを立て、それにバタフライだけをつけてた女体を縛りつけて晒す。帽子(小さな麦藁帽)を冠せ、腕首、腋窩を横木に細繩で結ぶ。首を縦木に軽く結び、胴の細くくびれたところを二重に結ぶ。そして右足首

を結びつけ、右腿のつけ根を同様に縦木に結びつける。更に首から縦に股を通る繩を張り廻し、左足首に繩をつけて、後部に少し上げ首繩にゆわえつける。首うなだれて観念した表情。出来るなら写真がいゝ。

三、水責め。タイル張りの浴室の中での新妻とその夫の遊戯。右側にバスの一部が見える。水道の管に妻の後手を縛った手拭の端が結びつけられる。風呂から上った全裸の妻が(風呂桶に腰かけ)半ば仰臥し縛られた後手をつき、足を伸して床より少し低いバスのへりへかける。足は余りバタつかないように少し拵げて一本の竹の両

端へ両足首をくゝりつける。夫の姿は見えず、手と蛇口から引いたゴム管だけが見える。まだ身体の熱い妻の足趾、腿の内側、臍、乳首、腋窩、股間に、適当に水量を調節させた水がかけられるという構図。後手を縛り横に転がせば、背中、臀部、アヌスも狙える。足先だけは風呂に入れておいてもよい。

四、虫責め。こんもりした涼しい森の中、楓の小さな木蔭でバタフライだけの女体が秋草の中に仰臥している(絵の時は全裸でもよい)。両腕は頭の上で交叉して縛られ、その先は楓の根元に結びつけられる。両脚はやゝ開いてまっすぐに伸し、附近の木の根に両足を打って足首、胸、首、胴部をしっかりと結び、動かぬよう固定する。背中が痛い時は脱いだ服を敷いてもよい。完全な黒い目隠しをし、女には何んの暗示も与えない。不安と期待の裸の女体の上、乳房の間、肩、臍、腿など出来るだけ多くの箇所、胡瓜や茄子の細かく切ったものを乗せておく。女体へは決して材料をこぼしてはならない。男は静かに傍にしゃがむ。するとその香をしたらってバツタ、コオロギ、スイツチヨ、クツ

ラムシ、その他いろんな虫が腋の下を通り、腿をつたい、乳房のまわりを歩きまわる。柔肌の上を歩く虫の脚は目隠しをされた女には見えな。大きな虫に恐怖を感じ、小さいものにはたまらないくすぐったさを感じるが、払いのけることは出来ない。女はしきりと身もだえするという寸法。更に面白くするには蜂蜜又は砂糖を水でこねた粘液を女の乳首、腋窩、臍、股間、アヌス、足趾にぬるといゝ。蟻、蜂、その他小さな虫が沢山集ってくる(もともと蜂は追払う方がいゝ)。蟻が乳房や腋窩を歩いたら、そのくすぐったさは一寸想像もつかない。虫の歩く経路を考えて材料を置けばいい。この際、楓の木に少し蜂蜜をぬっておくとよく虫が集り易い。女が身もだえして毛虫や蜘蛛が楓から降りて来たりしたら尙のこと一興。こういう時は首を少し上げさせて目隠しをとると却って効果がある。曇った日は虫が集らない。前にて蟻の存在を地定めして曇り日を選べば、蟻や小さな虫だけのくすぐり刺戟をうけることが出来る。余り虫の集りが悪い時には野菜屑と複合してやればよい。唯、余り虫が多過ぎると刺戟が散漫となるから注意しなければならぬ。縛る時は繩ではなく、白布などをを用いると身もだえしてもゆるまず縄目も残らない。



萩千恵子論

——口絵写真を中心として——

鳴海文雄

私は昭和二十九年新年号から、昭和三十年新年号までの口絵写真だけによってこの論を書いた。編集部作成の写真も見ていないし、写真を通じてのみの論であるから、皮相的な見方を免れないかもしれない。

十二月号、新年号と続いて萩千恵子さんの写真が載った。「腰巻」及び「薄羅をまといて」は、近頃の本誌の口絵写真中でも、最も洗練された美しいものの一つであろう。

彼女との対面は八月号の「片足吊り」に始まった。「片足吊り」に於ては動きが少く、しかもコスチュームが旧式で、凡そ魅力のな

いものであった。続いて九月号に「えび縛り」が載った。一応まとまっていたものは「野外縛り」(伊吹嬢)「観念」(村田嬢)などの傑作に較べて、遙かに見劣りがした。これは勿論、彼女の罪だけではない。ところが十二月号の「腰巻」を見てびっくりした。後手両膝を揃えた縛り、別に変った縛り方ではない。が、両股をしっかりと内に合せて、肌にくい込んだ紐に抗っている姿。そこには少女らしい羞恥心がある。これが画面一杯にあふれて迫力ある佳作となっている。かくれていた彼女の個性が巧みに生きだされたのである。「薄羅をまといて」は「腰

巻」に続くヒットだった。薄い紗に強調されたヒップ、丸い半円形にしきるくぼみは何んという魅力であろう。しかも両腕は後ろにきっちり縛られ、さるぐつわによって声もたてることが出来ない。これからどんな凌辱が行われようとするか、おびえた彼女の眼がそれを語っている。肩から腕にかけて線のあたりに残る可憐さ。「薄羅をまといて」は「観念」「野外縛り」「海老しぼり」「柱しぼり」「半吊り」等と共に忘れられない傑作となる。薄羅はたしかにヴェールというアイデアに恵まれたことは云う迄もないが、彼女のもつ個性が現れたのも事実

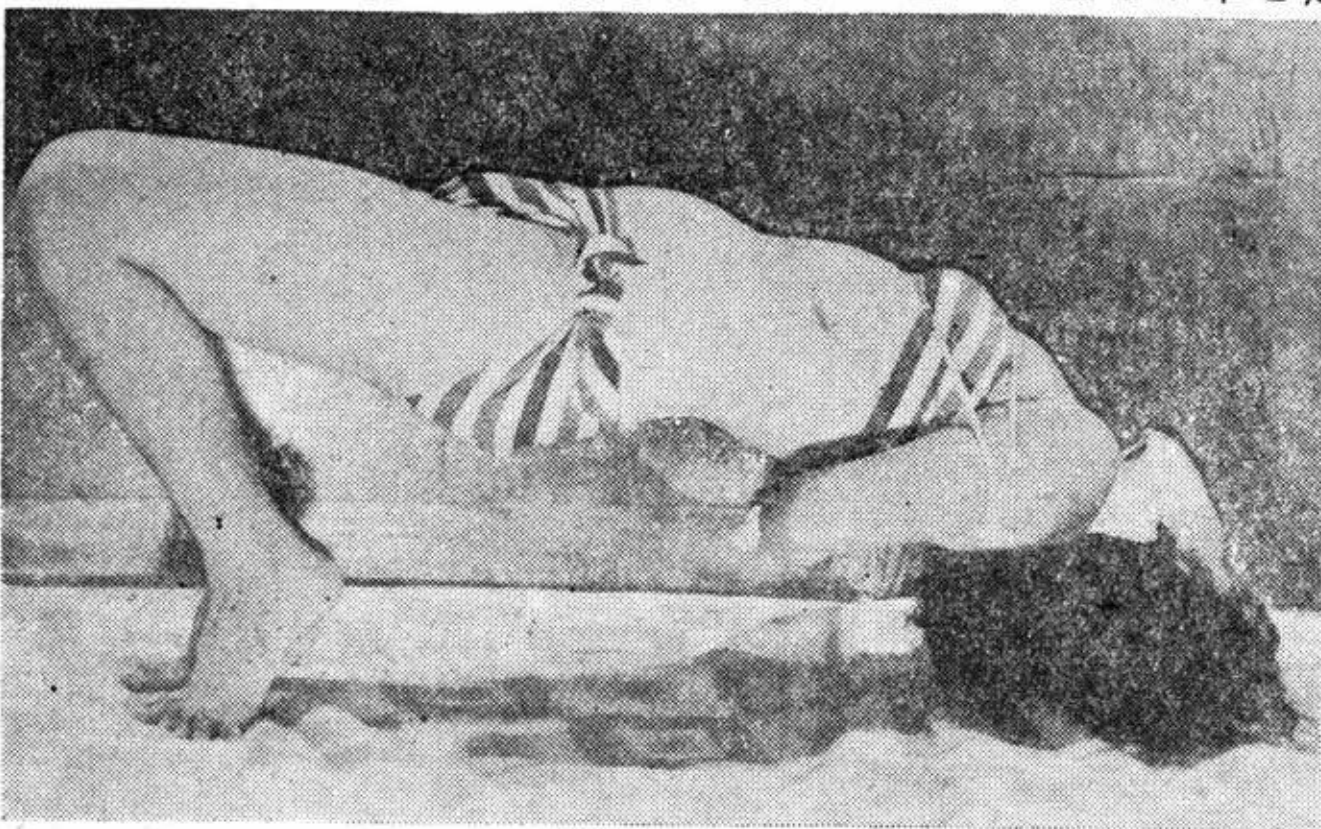
である。柔軟で若々しい肢体、これが彼女の魅力なのだ。これはモデルとしての必須条件だろうが、案外モデル中には太って鈍重な感じのするのが多い。「薄羅」に於て細い腕をきつく縛られ、こぶしを固く握りしめている可憐さは、彼女の柔軟さから来ているものだ。この可憐さは村田嬢や中富嬢などにも通ずるものである。伊吹嬢は繊細な情感を示すには余りにも肥りすぎた。春日嬢との一連のコンビ写真は凡そ盛り上りのない遊戯でしかなかった。モデルは柔軟なスタイルをもたなければならぬ。無駄な肉をつけてはいけぬ。

彼女の第二の特徴は大きく開かれた黒い瞳である。「腰巻」及び「薄羅」に於て、猿ぐつわによつて強調された瞳を見給え、「濃艶」や「海老縛り」に於ける坂口



利子嬢の悦慮に満ちた瞳と、本質的に違うおどおどした可愛らしさである。この可愛らしさは現代的なお嬢さんのものである。可憐さに於て共通していても、やゝ淋しげな村田嬢とおっとりとした中富嬢とはこの点に於て区別される。だから、腰巻よりも白いブローズや洋装がふさわしい。よく腰巻が使われるが、ヒップの曲線をかくしてしまふし、何か古臭い雰囲気さえ感じて歓迎出来ない。彼女が被虐モデルとして尊いのは、これらの身体的特徴だけからではない。生来もっている少女らしい羞恥心、はにかみ、これらがもっとも大切なのだ。「薄羅」に於る足指、蹠の表情や、「腰巻」に於てびったり合せた両腿の自然なのは、この処女性から来ているのだ。彼女は幾才

であるか、どんな経歴をもっているか、マゾヒストか否か、これは千恵子論のためにはどうしても必要なのだが、私は資料を全くもっていない。だが、処女らしいはにかみをもっている限り、単純な縛りでも吊りや股間しばりのような強烈なものでも、立派に通用するモデルであると断言しよう。難を云えば髪型がなげやりすぎる。パーマをあんなにかけずに軟くカールするか、ポニテイル、或はショートカットすればもつと少女らしくなる。これは彼女への進言である。マスクも悪くなく、特写々真にも沢山出ているようだし、先ず「奇ク」モデルのホープと云えるだろう。



と強烈な縛り、例えば十一月号の「柱背負い」や「柱抱き」「逆十字」等や、セーラ服の女学生を扮すること等に大いに期待する。

載語
連物

百合子の冒険

作村崎 明
画 畔亭 数久

(第四回)



——黒豹の巻続き——

(37) 夜が明けた。西崎は眼がさめるとすぐ百合子の事が気になった。まだ寝ているのかそれとも起きて身じまいでもしているのかわらうか? 前夜と打って変って彼はおそれるおそれる次の部屋をのぞいて見た。居ない。はて顔でも洗いに行ったのか? 洞窟を出て見たが温泉にも百合子は見えなかった。ふと崖のあたりを見ると、断崖の岩角に白い晒布がひっかかっている。彼女の腰布だ。しかもそのあたりはおびただしい鮮血だ。大変!



(38) 西崎は殆んど崖から墜落するばかりのり出して下をのぞいた。崖下の広場には早くも数人の黒人が来ていたが西崎を見つけると大声で叫んだ。「おーい西崎! 降りて来い。昨日の女の子が墜ちて死んでいる。」それはタローだ。西崎はどうして崖下へ降りたか覚えていない。豹の屍骸には目もくれず、上半身血みどろの百合子にすがりつく様にして異状を調べた。頭蓋骨がくだけているのを予想した。咽喉笛が喰い裂かれているのを想像した。豊かな乳房の下で肋骨が無残に折れているに違いないと思った。少くとも三十米の高所から落ちて無事である筈がないと確信していた。だが予想を裏切って彼女はかすり傷一つ負っていないかった。



(39) そうだ。豹の身体が緩衝物の役目をしたのだ。彼は狂喜した。心配そうにのぞき込んでいたタローに向かって彼は言った。「おい生きてるよ。有難い。上へ運んで介抱する」「それはよかった。処で豹はどうする?」「そんなもの、好きな様にするがいゝさ。」「そうか、こいつには手古摺っていた。退治られて有難い。」西崎はその言葉も上の空に聞いて百合子を抱き上げると、飛ぶ様に崖をかけ登った。そして温泉の湯で彼女の全身の血をたんねんに洗い浄めるのだった。體々となめらかな十九の乙女の白い肉体を。そして百合子が最も恥じ、かくしていた秘密をこの世で一人、西崎は見た。

百合子はやがて眼を睜いた。「おゝ、気がついたかい。百合子君。大変な目に逢ったね。」「あたし一体どうしたのかしら。」「豹だよ。豹に襲われて崖から落ちたのだよ。」「彼女はやっぱり今朝の恐ろしかった出来事に思いついた。」

(40) 百合子が自殺を決意したという、その真因はこゝにあったのだ。かわいそうに、そんな事を苦にしていたのか。百合子よ。何でもないではないか。幸いにもお前は死ななかった。そして幾度もお前は死ななかったのだ。お前は神に祝福された乙女だ。生きるのだ。強く、強く生きるのだよ……



(41) そしてハッと気がついて彼女は忙て腰のあたりを見た。そこにはきちんと晒が巻かれていた。しかも彼女の手順とは違った方法で……「あゝ……」西崎がぐったりとした百合子に苦心して巻きつけているさまを想像して彼女は火の様に赤くなって突伏した。一方黒人部落では大騒ぎだった。今までに何十人かの黒人を喰い殺した黒豹が遂に死んだのである。忽ち盛大なお祭が行われる事になった、タローもジャボも歯が立たなかったものをかよわい百合子が仕止めたのである、彼女は一躍して島の英雄になった。その日の午後、彼女は西崎と共に招待されて島の長老の家に迎えられ、下にも置かぬもてなしを受けた。

(読者諸賢へ) 百合子はかくて危機を切り抜け、一応身の安全を保証された様に見えました。彼女が、彼女の受難は更に形を変えて現れて来るのでした。中編「イボンスの巻」以下はいつか機会があれば又御紹介いたします。御声援下さった皆様に感謝いたします。

(前編終)

(42) 黒い顔が次から次へと彼女の前に現れて訳のわからぬ祝辞を述べた。美しい子豹の皮が彼女の腰布として贈られ、おびたしい花で彼女の身体は飾られ、祝の酒が酌まれ、豹の肉が供された。狂喜する黒人たちは百合子は悲鳴をあげた。「西崎さん、助けて……」

前編終



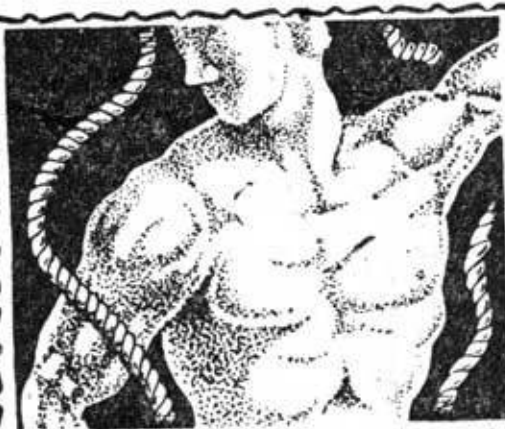
(村崎 明)

小生は北国の田舎町に住む一青年であり、先日、ふとした事より偶然にも「奇ク」を拝読する機会を得、深い感銘を覚えて読破した次第です。現在、この日本にこの様な深い理解と勇気を持つて編集された雑誌のある事を、小生は今迄知りませんでした。

初めて拝読したのは新年号でしたが、グラビアの春日嬢に鎖で後手に縛り上げられた青年。読物では「ソドミーの祭壇」「秘虐」等小生の性情と全く一致しているのに驚き入りました。

小生の恥を申し上げねばなりません、幼少より異性に対して少しも関心を抱いた事がなく、遅ましかし男性の裸体に深い憧憬をもつ者です。異性に魅力を感じない、それは倒錯的同性愛とも言えましょうか……。世の中に私程不幸な人間はないと、常々悲観して居りました、日常の激しい生存競争、友人とのトラブル、立身出世のための勉強、或は会社のスポーツ選手としての錬磨、これは皆異性への愛、極端に言えば男性と女性の結びつけの努力による奮起に外ならないと、私は考えています。遅ましい男性への憧れ、それは友人にも勿論、両親にも訴えられ

ぬ悩みです。一人、毎日悶々として生活して来ました。日常生活の努力も皆「空転」の外ありません。自殺しようとも考えました。否、その前に自分の恥すべき性向を異性の方へ関心が向く様に、死んだ気になって努力しました。女性の裸体も見ました。ストリップへも日参しました。その努力も空しく、現在まで女性に対して性感



編集者への手紙

／或る読者から／

を抱く事がなかったのです。

この様に、毎日暗い気持ちで灰色の人生を過して来ました。でも、性の衝動は如何ともなし難く、中学時代の陸軍少佐や禪一本の水泳教師の遅ましい裸体を思い浮べ、毎夜の如く自流行為に耽る次第です。恥かしい私の性癖と肉体……。深い自己嫌悪に悩まされ、此の世に生きる甲斐もなくなった小生が

生と死の境地を求めつゝあった時偶然にも「奇ク」を読む機会を得たのです。暗黒の私の心にも一糸の光明が見出されました。自分と一緒の欲望が立派な雑誌に、社会に堂々と発表されている、この感激と驚異に思わず御誌を抱きしめて感謝の涙を流した次第です。

私は嬉しさのあまり夜も眠られず、毎日の仕事にも張りが出て来る様になりました。遅ましい男性を裸体にする。禪を脱がせる、細引か鎖で後手に縛り上げる等々あゝ夢ではないでしょうか……。編集長殿、先生は私の様な性向の青年に充分な同情と理解がある事と存じます。実は御迷惑でしょうが、是非一度お目にかゝりたいのです。上阪して先生にお目にかゝりたい小生の一生の御願いです。

決して御迷惑はおかけしません。一時間でも、十分間でもいい、魂の脱けがらの人生の敗残者の私に一言暖かいお言葉が戴けたら……。もっともお許し下さいますならば——中略——先生の高い理智のひらめきと、社会に対する勇気と、暖かい同情心が、私の汚れた肉体を健全に導いて来れる様な気がします。先生、どうか私の願いを聞き入れて下さい。私の様な青年がこんな馬鹿氣な男が、世の中に二人といふでしようか。

未だ一度もお目にかゝらない先生。初めて「奇ク」のファンとして御手紙を差し上げるのに、失礼な事を書きまして何卒お許し下さい。先生の遅ましい肉体を想像するだけでも私の肉体は張り切ります。

私は何度も書いては破り、書いては破りしましたが、一生に一度の勇猛心を奮ってお手紙を書きました。下手な汚い字でさぞ御迷惑でしょうが、これが自己の理性を踏みにじった最後の方法なのです。先生、勝手ですが御返事下さい。住所は左記の通りです。

十二月十四日

齒車の狂った男

奇ク編集長殿

Ab. Conte

トウキョウの一夜

R · G · S

ミルトンという名の国連軍の兵士が、T戦線から五日間の休暇で東京へ休養に来た。そして、東京のA地区で二人のボン引きに誘われ異常な一夜の愉悅を経験した。そのミルトン一等兵の述懐がこれである。外人相手の売淫も、遂に此処まで変ったものが出て来ているものであろうか。事の真偽は読者の想像に委せる。

釜山から二時間半、立川の基地まで運ばれ

て、飛行場内の事務所で僅かな手間の手続きを済ませ、それから東京のファイナンスビル迄がバス。その日の夕刻、最早や街にネオンライトの明るい頃、私は向う五日間、いや、正確に云って四日と十二時間の楽しい休暇に踏み込んだ。

先ず美味しい食事と酒だ。それから……それからは何も最初から計画を樹てようとしたって無駄だ。この世界何番目かの大都会トウキョウの夜には、行き当りばったりで、どんなにでも素晴らしい事があるだろう。女？ 勿論！ もうこんな早い時刻の時間でも私の歩いている左右に、綺麗な娘さんが私に意味深長なウインクを投げかけているではないか。銀座という物凄い雑踏の街で素晴らしい支那料理をやりながら、日本のビールを三本飲んだ。長らくのT戦線での野戦料理に比べて、これは天国の食卓ともいふべきであった。さ

て、ビールの酔いが全身に快く廻り、私は、長い間忘れていたあの化粧品匂い、女の肌の香りを尋ねなければならなかった。

「スキャブリッチ！ そこまで私は歩いて行った。そして、そこで二人連の日本人のボン引きに逢った、私は、ともかく出来るだけ綺麗で、而もセクスアピールのあるパンパン嬢を得たいと思った」けななのだったが、それが私の願望を超えて、大変な、おそらくその後二度と再び求めても得られない経験となってしまったのである。

二人連のあまり人相のよくないボン引きが歩いて行く私のそばへ寄って来た。そして、下手なビジョニンググリッシュで、「ヘイ、ユー、面白い処へ行かないか」というお定りの声を掛けて来た。色々と言葉のやりとりがあったが、私は金は充分出すから一番良い娘を紹介しろ、と申し込んだ。すると本当に金を沢山払うか、と云うのである。そこで、私は立川で両替して来た日本の千円札を太く丸めた大束をポケットから掴み出して見せた。「この通り、俺はケチケチしないよ。休暇で来たんだ。値打ちのあるものなら、全部一と晩で費っても良いんだ」

「OK、それじゃ本当に良い処へ案内する。然し、俺達はボン引きの中でも一流なのだから、決してインチキはやらない、信用してくれ。とにかくタクシーへ乗ろう、車の中で話

する」

と云うので、二人と私の一行はタクシーに乗った。彼等は私には判らない場所の名を運転手に告げた。車は走り出した。美しい灯の海のトウキョウの街を――。

「GIさん、あんたは廿歳になる綺麗な処女を強姦して見たことはないか」

「冗談じゃないよ。そんな事をしたらM・Pにふんづかまって、大変な目にあわされる」

「いや、そう思うのはもっともだが、それがM・Pの心配はないんだ。責任は全部俺達が負うし、GIのあんたは、済んだらそのまゝ帰れば良いんだ。お互に名も知らんし、相手の娘は決して逃げたり、叫んだりしないのだから」

どうも話が妙だが、然し、仮りに廿歳の美女で、而もヴァージンを刺戟的なやりかたで楽しめるなら……。彼等は更に云った。

「ともかく一緒に来給え。来て見れば総て判るんだ」

タクシーは三十分位も走った。道は段々と郊外へ向った。途中で二人のうち一名が自動電話を掛けに下車し、暫く、何処かと連絡をとって車へ戻って来た。

やがて車は静かな裏通りの一隅へ停った。

「さあ、降りますよ」

そして彼等と私は、一軒の二階建の事務所と倉庫の間子風なコンクリートの小ビルの裏

口から中へ入った。

小さな室内は割合いに小綺麗であり、所謂ギャングの巣という様な不安な空気もない。中に又一人の若い男が我々を待っていた。この男の英語は相当なものであった。以下その男の説明によると、

「階段を登って突き当りの室に娘は居る。あ



んたの来るのを待っている。然し、恐れ、羞かしがり、きつと泣きながら待っているだろう。あんたは此処へ金を払ってから上って行って、まあ良い様にするんだね。明日の朝までゆっくりやって良いよ。我々か？ 我々はこの部屋でボーカールだ。朝まで待っていて、あんたの用が済んだら、あんたを無事に送り出す。それまで責任は持つよ。何しろ、あんたは今晚一夜に十万円も気持ちよく払ってくれるお客様だもの。おっと、これだけは必ず忘れないで下さいよ。脚の縄は解いても良いけれど、両腕だけは決して解かないこと。それと、猿轡も脱しては絶対いけない」

私は此処でびっくりした。この話によるとその娘は階上の一室に、両手両足を縛られ、口には猿轡を嵌められてゐるらしい。私の好奇心は勃然と昂まった。云われた金を支払うと、私はその階段を登った。私は期待と好奇心に昂ぶりながら、その一室の扉をあけた。

中は割合に清潔で、何の装飾もないが、寢室の様な作りであった。窓はなく、一隅に小卓と椅子が二つ三つ置かれてあり、正面の一番奥に飾り気のないベッドが一つある。そし

てそのベッドには、明らかに一人の人間が寝ているらしく、巾の広い毛布がすっぽりと覆っているが、その毛布は人の姿態を包んでいる形を見せている。そして又、その毛布の下に人間はかすかに身動きをしている。いや私が扉を開けて入って来た気配を感じてムクムクと動き始めたといつて良い。『これだな』と思って、私は真実、恐る恐るベッドに近づき、先ず頭にかぶさっている毛布を、そーッと取り除けた。

美しい若い女であった。たしかに美しい。口には一杯につめ物をされて、更に真白な絹の布を口にくわえさせられて、後頭部でしっかりと結ばれ、頬にそれが喰い込み、唇は半ば開いて絹布をくわえているが、長い睫毛の両眼を大きく恐怖と羞恥に見開き、私という侵入者を震えながら凝視していた。そして、身を起して逃れ様ともがいているが、全身を覆った毛布の下で僅かに軀をくねらせるだけで、逃げ出すことも、起き上ることも出来ない。私はゴクリと固唾をのみ、毛布をパッと取り除けてしまった。

美しい若い女は裸体であった。そして、両手を高手小手に背に緊縛され、仰向けに寝台に縛り付けられ、両脚は一樣に左右に開いて縛られていたのだ。「ウーム」と女は唸った。猿轡からそれだけが洩れた。「助けて！」とか「いやッ」とか叫ぼうとしたのである。

ろう。

女は裸体だと云ったが、全くの裸体ではなかった。彼女は非常に短いナイロンのブリーフパンツをはいている。殆んど男子の水泳用のバイクか、又はストリップガールの使用する下ツンパと同じなもので、而もナイロンであり、此れがきっちり肌を喰い込んでいる程にタイトなので、半透明なこの薄い布は、かすかにその下の肉体を見せていた。真裸よりもそのツンパ一枚あるだけ、反ってこのあられもない姿を更に恥かしい恰好にしている。

彼女の両手、両足を縛り上げている縄は、絹らしい桃色の布片を撚りあげて作った、柔らかくて、そして強い細引である。彼女は美しく若く、そして見事な整った軀である。ポン引きが云った廿歳の処女とは、嘘ではなかった。

私の目の前に、全く軀の自由を奪われ、口には固く猿轡を嵌められ、そして仰向けに縛られて寝台の上にある美少女が居たのである。彼女は私の視線を逃がれ様と必死にもがいた。然しそれだけである。

私は暫く彼女を眺めていた。それから手を延ばして彼女の上半身を固定してあった縄だけを取り去り、後手になっている彼女の両手が、大丈夫解けぬ様にシッカリ縛ってあるかを点検した。暖かく、香ばしい娘の裸の胸

には縄は掛けられていず、ピンとんがった桃色の乳首のお乳は、何の妨げもなく視線の中にとび込んでくる。猿轡も大丈夫か？ これもきっちり嵌まっている。さて下半身だ両足首は寝台の下を廻わした縄でちゃんと左右に縛られてある。あとはパンツイを取ってしまえば……、そのパンツイは腰の両側がボタンで止めてある式なのだ。つまり両足を解かずにはパンツイを脱がすことは出来る。

私はふと気がついた。その寝台の枕脇には小さなサイドテーブルがあり、その上にいろいろな品が乗せてあるのだ。それは日本のコケシ人形が一つ、柔かい毛のついた刷毛が一本、羽根のブラシ、それから何かは判らないが油の様なもの、グリースであろう。

その品々をどうするか……、私はすぐに想像がついた。サジズムの悦び！ 私は確かにサジストであるのだ。唯、その様な実行の機会は恵まれなかっただけである。今、此処にどんな事をし様とも抵抗出来ぬ様にされた若い裸の女と、そしていろいろな道具が揃えられているのだ。

そしてその一夜は明け、私は立ち去った。彼女はそのままの姿、即ち、緊縛され、猿轡姿のまゝで、毛布をかけてやって来た。

懸賞入選作品 第二席 (賞金貳万円)

「ヴィナスの重石^{おもし}」

(百枚読切)

眞砂 十四郎

(1)

山口課長はにがい顔をして、末席の鈴宮郁子をにらみつけた。無断で席をたってから一時間。他の事務員たちの忙がしい帳簿整理をよそに、面会人か、トイレットかしらないが、一時間近い行先不明のあげくが一事の釈明もなく、すまして着席したかと思うと、コンパクトを取出して口紅の塗り直しである。

大たい彼女の傲慢ちきな、とりすました顔もさることながら、あの真赤なワンピースが気に入らぬ。質実穩健をもって誇る本社の男女事務員の間にあって、郁子一人が薔薇のように華やかに浮出ていることは、どうも平衡を失したような感じで、この社の零囲氣にふさわしくない。古参事務員の武村みつ子や小林富枝が彼女のことをよく云わないのは、あの服装のせいもあるのだろうが、しかし彼女の仕事に対する勤怠ぶりも半年前の彼女の入社このかた山口課長のトラックリストにずっと×印のチェックが重なっているのである。

「鈴宮君ッ」

山口課長は我慢がなくなつて、鈴宮郁子に声をかけた。郁子は口紅をなどる小指を真紅な唇から離して山口へ流し目を向ける。

「ちよっと」

コンパクトをパチンと音をたてて閉じた郁子は、うるさそうな表情で席をたって山口の前へ来た。

「君、今まで何処へ行っていたんだ」

「……トイレットへ行っていました」

「トイレットって、君、もう一時間になるんだぜ。一時間もトイレットに行ってたのか？」

「一時間なんて、なりませんわ」

「なるよ。僕はちやんと時計を見てるんだから。君が席をたったのは三時五十分だぜ。いま四時四十分じやないか」

「それは課長さんの思い違いですわ。私、その前にちよっとは立たたかもしれないけど、トイレットへ行ったのは四時二十分ごろで

すわ」

「いや、四時前に君は席を外している」

「そんなことありません。四時二十分ごろです」

「強情だな、君は……。ま、ともかくトイレットへ行くのがいかなというんじゃないんだ。他の若い者がみんな一生懸命に仕事をしているんだから、そう長時間仕事を放擲されたら困るから注意しているんだ。君が居なければ、それだけ他の者が迷惑するんだからね」

「でも、今はあたしの仕事ありませんもの。数字の引合は武村さんと小林さんですし、受註整理は、富田さんと浅井さんがやっていますから……」

山口課長は社会的な制約がなかったら、郁子の頬ぺたをピシヤツとひっぱたいてやりたい衝動にかられた。なんという強情な女なのだろう。普通の社員なら、課長に注意されたらペコペコ頭を下げてあやまるか、近ごろの学校出の若い社員にしても首をうなだれて恐縮の意を表するぐらいのしおらしさは見せるのだが、鈴宮郁子の態度にいたっては、まったく言語同断である。山口課長は思わず大きな声をはりあげた。

「黙りたまえ。たとえ直接自分の仕事がないとしても、同じ机に仕事をしている以上、勝手な真似は許されんのだ。自分の仕事がないったら他の人の仕事を手伝ったらどうだ。数字整理にしたって武村君一人が見ているより、君も一緒に見ている方がそれだけ間違いないも少くなる勘定じゃないか。大たい今だけの話じゃないよ、君は……。いつでもそうだから注意しているんだ」

他の課の社員たちの視線が一せいに郁子の方に注がれたのを意識してか、さすがに郁子も首をうなだれて黙ってしまった。大ぜいの

前で叱責されて、じっと下を向いた郁子の耳もとが恥らしいのためかポツと赤くなった。その耳もとのイヤーリングの金環がかすかに揺れている。

山口課長は郁子の大ぜいの目の前で正面きって叱責したことに対して、相手がまだうら若い、いわば妙齡の女性であるだけにいささか気の毒な気もしないでもなかったが、しかし当然叱責に値する郁子の勤務ぶりであり、課長として注意することは当然であると考えていたから後悔はしなかった。山口は机の上の書類をボタンと閉じて立ちあがった。そして、口許を一文字に引締め、不満の意志を歴然と顔色に出してうつ向いている郁子を残してトイレットへたって行った。

余憤なお冷めやらぬ心持で用を足している山口の隣へ、人事課の古参社員末松が同じく並んだ。

「課長、部屋中に響きわたりましたな、大喝一声が」

「いやア、すまんすまん。つい大きな声を出してしまつて……」

連続動作で二人手洗いの前に並んだ末松は、前の鏡でネクタイを直しながら

「本当を云うと、もう少しお目玉を期待していたんですがね。大たいあの鈴宮って娘はいけませんよ。人事課でも注意人物なんです、あの娘は……」

「どうも勤務成績不良だな」

「勤務成績ばかりじゃないんですよ。一週間ほど前にきいたんですがね。あの娘はキヤバレーのダンサーに出てるって話ですぜ」

「なに？ ダンサー？」

「ほら、アルバイト・サロンってやつがあるでしょう。これは噂を

きいただけで、まだ確かめてはいないんですがね。女事務員が夜、アルバイトにキヤバレーで傍らくっていう……方々にあるでしょ最近」

「ふうむ……、本當かい君、それは」

「本當か嘘か、私自身、まだ見たわけじゃないんですが、しかし課長、火のないところに煙はたちませんよ」

山口課長は洗った手をハンカチで拭くのを忘れて、そこに佇立してしまった。なるほど、あり得ることだ。彼女の給料は七千円である。きくところによるとアパートで一人で暮しているそうである。それでいてあの服装は社の給料だけではちよっと出来ない相談である。ナイロンの靴下、キッドのハイヒール。このくらいは近ごろの若い娘として誰でも調達するだろうが、他の女事務員がいつも同じ服装であるのに較べて、彼女は山口の記憶にあるだけでもこの一カ月ほどの間で二、三回は変っている。クレードレシンのブラウスに八枚つぎのゴアードスカート。パフスリーブのナイロンブラウスに、裾に薔薇のアップリケを散らしたギャザースカート。その一つ一つの名前は知らないが、そのブラウスから覗く郁子の胸許の豊かさと、スカートに包まれるヒップの線のボリュームに、瞬間盗み見するような恰好になって、あわてて視線を反らした覚えが山口課長にも何度あった。

何か他に収入がなかったら、あれだけ新調することは不可能である。とすると、キヤバレーに出ているということは或いは本當かもしれない。いや、そうでなくては帳尻が合わない。山口課長の脳裡に、あのとりすました鈴宮郁子が、大きな息づかいをしながら客の男の腕の中に抱きしめられている情景が画き出されて、ぶるっとな

わてて打消した。

「けしからん……」

最近では組合関係もあって、いきなり誹首というわけにもいかないが、しかし彼女は当然誹首されなければならぬ存在である。大たい他の組合員も揃って彼女を非難しているではないか。仕事は不熱心。同僚との折合いも悪い。あまつさえ、わが社の体面を汚す行為を平然と行っている。組合との契約にも、その他本社の体面を汚す行為のあったときとはっきり解雇条件に明文化されているではないか。解雇しようと思えば、いつでも解雇出来るわけである。これは人事課から正式の注意書が廻ってくるのを待つまでもなく、自分のところで目立たぬように処理してしまっておく方が本當だろう。そう考えて山口課長はもう一ぺん苦々しげに舌打ちをしてゴシゴシと手を洗った。

(2)

「あのオ、伯母が病氣なので、あした休ませて戴きたいのですけど……」

「ふーん、伯母さんって、何処に居るのかね？」

「牛込の新小川町ですけど」

「病氣は？ どんな？」

「腎臓らしいんですの」

「で、欠勤届は？」

「書きますわ」

「じゃあ、きよう出しておき給え」

「はい……」

郁子は自分の席へ下って、欠勤届に所要事項を記入し、山口の許に提出した。それが昨夕のことであった。

「あ、あゝあ……」

山口課長は椅子の背に反りかえるようにして一つ大きなのびをした。五月晴れの初夏の空は明るく澄みわたって、事務所の窓に小鳥が二羽、飛びかう姿がちらりと映った。

大同商事へ行ってくるかな。……最近新しく創設した小会社だがこの広和商事と同系会社であり、彼も一べんは出向いて挨拶しておかなければならない義理のある会社である。

「武村君、ちよっと大同商事へ電話してくれないか。専務さんが居たら、山口ですが今お伺いしますが御都合はいかがでしょう、って……」

電話の結果はOKであった。山口課長は会社の自動車のやわらかいクッションにふかふかと腰をおろし、フリップモリスをうまさうに吸いながら、久しぶりの昼間外出に走りゆく街の景色を新鮮なもののように眺め廻したのである。

その車が渋谷の駅をちよっと越したところで山口課長は「オヤ」と思わず身体をのり出した。

「あ、ちよっと停めてくれ給え」

車は急停車した。山口課長はしばらく首をすくめて窓の内側に隠れるようにしていたが、やがて静かにドアをあけて外へ出た。

「運転手君、此処から僕、歩いて行くから君は帰ってくれ給え。なに、もうこの坂をのぼった上なんだから、もうすぐだ」

山口課長は吸いさしの煙草を捨てて、道玄坂をつつとこのぼり

はじめた。その山口課長の視線の十メートルほど前に手を組み合せて寄添って歩いて行くカップルの若い男女。男はウーステッドのピンチエックで仕立てたシングルの背広。コバルトとグレーの明るいネクタイに無帽、チヨコレート色のキッドシューズ。女は真赤なスリーブレスのワンピースにウエストに灰色のナイロンベルト。同じく灰色のハンドバックに灰色のカクテルシューズ。云わずとしたきよう会社を欠勤した鈴宮郁子なのである。

郁子は若い男の左肩に身体をもたせるように寄添って、しっかりと腕を組合せている。なんの話か、若い男の言葉に郁子は「あははゝゝゝ」と大きな声をあげて笑っている。山口課長は首をすくめて、うつ向き加減に、そして眼だけギョロリと三白眼にしながら二人の跡をつけて行った。

尾行という名の通り、山口課長には前に行く郁子のお臀ばかりが目についた。いつか見た「ナイヤガラ」というアメリカ映画。妖婦女優というふれこみに期待を持って見たマリリン・モンローが、意外に小娘じみていて失望した記憶があるが、そのマリリン・モンローの歩く腰つきと、あの郁子の腰つきはなんとよく似ているではないか。ベルトでウエストをきつく締めているのと、裾でつまり気味のスカートの線との加減で、彼女のお臀は圧倒的に他の部分から強調されて目に入る。そして坂道だけに、歩くごとにブル、ブルと右に左におまんじゆうのような小丘がゆれるのである。

二人は装身具店のウィンドウの前で立止った。首飾り、イヤーリング、コンパクトなどが並んでいる。いくつか並べられたネックレスを指さして、郁子がなにやら若い男に話しかけている。若い男は「うん、うん」とうなずいている。また歩きだした。今度は喫茶店

の前で立止った。一こと、二こと話合って二人はその店のドアを押して内部へ入って行った。山口課長はその喫茶店の前を一たん通り越して、また振返って店の看板を見上げた。「ラトール」と書いてあ

った。フランス語だろう。なんという意味か判らない。「ふーむ……」

思わず溜息をついて山口課長はしばらく立止っていたが、思いか

えしてまた坂道をスタスタとのぼって行った。訪問先の大同商事はこの坂の上にあるのである。

翌日、山口課長は鈴宮郁子を応接室に呼んだ。

郁子は自分の嘘を山口に指摘されても、ふてくされたように冷然としていた。殆んど返事もせず、山口の顔も見ず、横の壁を見つめたままじっとしていた。

「とにかく善処することなたな、自分自身で……」

退社を匂わせて山口は外へ出た。郁子は応接室にじっと腰をかけたまま、中々席へ戻って来なかった。そして鈴宮郁子はその翌日から会社へ来なくなったのである。



(3)

さて、鈴宮郁子は観念したか、それっきり退社してしまったのであるが、その後一カ月ほどして、山口課長は偶然の機会から郁子と再会した。そしてそれから再度、再々度と相会うようになったのであるが、最初は奇遇としても、二度目、三度目となると、これはまったく山口の意志で、山口が自ら求めて郁子に会いに行くようになったのである。小生意気で、高慢で、淑やかさもなければおらしさもない、まったくもって何一つとりどころのない女としか感じていなかった鈴宮郁子に対して、山口課長は何故自ら好んでわざわざ会いに行くようになったのか？……そのプロセスを最初の段階から詳述することは徒らに長々となるばかりなので省略して、一応前後のつながりだけを略記して筋道をたてておくことにしよう。

山口は大阪支店の尾崎受註課長と一緒に偶然入った池袋の「すらん」というアルバイトサロンで、若い男と笑い興じながらタンゴを踊っている郁子を発見した。山口の席に坐った受持の女給の話によると、彼女は昼間は広和商事という貿易会社に勤務しており、夜の店へアルバイトに勤めているというのである。アルバイト女給という名のために自分の会社の名を利用されていることに憤慨した山口は郁子を自席へ呼び、彼女を面詰した。しかし彼女はいささか酒に酔っていて、山口の抗議の相手にならず、同じく酔っている初対面の尾崎の膝の上になだれかかる。そこで山口課長は苦虫をかみつぶし、尾崎をうながして早々にその店を出たのである。

ウ・ニにしろコ・ノ・ワ・タにしろ、ああした「珍味」というものは、最初口にしたときはその嫌らしい味にへきえきして吐き出したくなる

ほどのものであるが、いつかふとその味が舌の先によみがえって、もう一ぺん食べてみたくなる。また食べてみる。さらに食べてみる。と次第になんともいえない旨味が感じられるようになり、それから以後、完全にその妙味にとりつかれてしまう……といったものであるが、山口課長の郁子に対する場合も、この「珍味」の翫味過程に似たものがあつたようである。

十日ほど過ぎた宴会帰りの一夜、ほろ酔いの山口はなんとなく郁子のいるアルバイトサロンに足が向いてしまい、気恥かしさを感じたが思いきって郁子を指名する。彼の席へ来た郁子は自分を呼んだ客が山口課長なので意外のおももちであつたが、指名だけに仕方なく席へ坐って山口に酌をする。しかし、この日は一方の席に郁子の馴染みの男がいたが、その男こそ、いつぞやの道玄坂で山口が跡をつけた郁子とアベックのあの青年であつた。郁子は山口を放つておいて、その男のそばで多く語り、多く笑い、はては青年の膝に抱かれたりする。山口は嫉妬に似た苦々しい感じを受けるが、二人がふざけ合っている嬌態をみて、ふと電撃のように郁子恋慕の感情がこみあがる。「可愛さあまって憎さが百倍」という言葉があるが、逆もまた真で、山口の場合は、郁子に対して「憎さあまって可愛さ百倍」となつたのである。

帰る青年を送り出してから、思い出したように山口の席へ来た郁子に山口はつとめて朗らかにふるまい、郁子の機嫌をとるが、酔っている郁子は山口の感情の動きを無視しているかの如くである。

(4)

「もうじきラストよ。ラストは課長さんと踊りましょうか」

「課長、課長って云うのはやめてくれよ。もう君もうちの社員じやなし、僕だって単なるお客にすぎないじゃないか」

「そんなら山口さん……。やあさん……。ごめんなさいネ、あたし……酔っちゃって」

「さっきの人、あれ、誰？……君の彼氏？」

「あの人？ さあ……彼氏かしら。彼氏だったらどうする？ やける？……もっとも成績不良でお払い箱の女事務員に彼氏があらうとなかろうと、課長さんには御関係ないことでしようけど……」

「会社のことは云いっこなし。此処へ来たら僕だって一人前にやかせてもらいたいのサ」

「まア……調子がいいったらないわ。課長さんはあたしがお嫌いのくせに……」

「おいおい、公私混同するなよ。嫌いならわざわざ御指名でくるわけがないじゃないか」

「じゃア好きなの？……好きになったの？」

「……」

「どっちなの？ 好きか嫌いか。あたし中途半ばはきらいよ。どっちかにしてよ」

「……好きサ」

「あらア……嬉しい。何処かへ一緒に行きましようか」

「え？……ほんとかい？」

「熱海でも、箱根でも……。課長さんのお好み次第」

酒が云わせる冗談とは思うが、それでも山口は内心ドキッとした。それなら誘ったら郁子は一たい彼についてくるのであろうか……。

バンドが「螢の光」を奏しはじめた。

「ほら、ラストよ。踊りましようよ」

山口は慣れぬ手つきで郁子を抱いてホールに出た。相当酔っている郁子は山口の肩にもたれかかるようにして踊っている。山口の胸にブル、ブルと感ずる彼女の乳房の弾力。背中からウエスト、ヒップと、くっきり彎曲した弓形の線。イブニングの下はコルセットもなく、おそらくシユミーズだけなのではないだろうか。白粉の匂いと香水の匂い。そして初めて吸いこむ百合の花のような郁子の体臭に山口は叢林の中で新種の花を発見した植物学者のようなときめきを味わった。

「ねえ、さっき云ったこと、本当かい？」

「なにが……？」

「熱海でも、箱根でも……って」

郁子は山口の肩にあてた右手をひきつけるようにして胸と胸と押しつけた。

「ほほ、……課長さんがお望みでしたら……」

山口はドキドキと心臓がおどった。料理屋の仲居相手などとは全然違う感覚である。今は退社しているとはいえ、自分の会社に勤めていたオフィスガールである。山口のステップが乱れて思わず立止った。

「じやあ、店の外で待ってるよ……。いゝかい？」

「えゝ、いゝわ」

郁子はこともなげに云い放った。

「たゞし、あたし、お風呂に入って、寝るだけよ。あなたに身をまかせるわけじゃなくてよ。……よくて？」

「オーケー」

男に応ずる際のバツのわるさのていさいつくろいとしか受取れない郁子の言葉は軽く受け流して、やがて山口は勘定をすませて外に出た。梅雨ばれの空に三日月がゴンドラのように浮いていた。

「お待ちどうさま」

うしろから山口に声をかけて、郁子はそのまゝスッスツと先に歩いて行く。そのあとを山口は二メートルほどの間隔をおいてついて行った。イブニングをふだん着に着換えて出て来た郁子は、かって山口の会社に居たときの通勤帰りの姿そのまゝであった。V字型にネックラインをあけた純白のブラウス。縦ひだを綺麗に揃えたブリーツスカート、ウエストを赤い四インチ巾の黒いナイロンベルトで締めて、白、赤、黒のアンサンブルは最前のイブニングの顔癪さからガラリと趣きをかえて、極めて清楚で、極めてスポーティで、長い髪を無雑作にリボンでくくった、所謂ポニテイルが十八、九の小娘のごとく愛らしかった。

店からだいぶ離れてから二人は並んで歩いた。四十一才の山口課長は、二十二才のこの乙女が彼のはじめての恋人のごとく感じられた。流しのタクシーを拾って、二人は車上の人となった。

「千駄ヶ谷へ……」

車は夜の道をまっしぐらに走って行く。郁子は車のシートにもたれて、じっと眼をつぶっている。まったく酔っているのか、あるいは正気なのか、山口にははっきり判らない。判らなくともいゝ。とにかく郁子は彼と行動を共にし、彼のすることに何の抗議もさしはさまないのである。

鳩森神社の附近で山口は車をとめ、二人はまた夜の道を歩いた。

「熱海……だったって、もう遅すぎるだろう。だから熱海はこんどにして、きょうは、もう直ぐ先にちよっとした山荘風の家があるんだ。そこでいゝだろう？」

郁子は「ふふ、ふふ」と笑って

「熱海まで行けないわ、あたしだって……。おつとめがあるんですもの」

「おつとめ……って、何処？」

「広和商事」

「え？……」

「ほほ、ふふ、あたし、昼間は広和商事に勤めてるのよ。課長さんの会社へ。もっともお仕事はなまけて、いつも課長さんに叱られるけど……」

「おいおい、冗談云うなよ。うちの会社のことはもう云いっこなしサ。君は「すざらん」の郁ちゃん、僕はその郁ちゃんのところへ来たお客の山口じゃないか」

「その家、いゝお風呂ある？」

「あゝ、あるよ。岩風呂になってるんだ。お湯の滝が流れて、その滝に五色のネオンなんかついてゐる」

「あたし、お風呂へ入って寝るわ、ねえ、云々ときますけど、それだけよ」

「もちろんサ、君がイヤだということを無理に強いるような僕はパリストじゃありませんよ」

二人は松風荘という旅館の門をくぐった。離れの座敷へ通されて、郁子はハンドバックを鏡台のわきへ置き、出された坐布団の上へスカートをつまんでふわっとさせながら行儀よく坐った。うしろ

の鏡台の真赤な掛布、朱塗りの手拭掛けなどに対して郁子のブラウスの白、スカートの黒が清楚そのものであった。山口は胸のときめきを禁ずることが出来なかった。このとりすました乙女が、もう一、二時間もすれば一つ蒲団の中に自分と枕を並べるのだ、しかも会社の事務員だった彼女が……。

山口は一緒に岩風呂に入るつもりだったが、郁子は承知しなかった。最初のことでもあり、恥かしいのも無理はないと思って、あえて固執もせず、山口は一人で風呂につかったが、そうそうにして部屋へ帰ると、郁子はすでに浴衣に着かえていた。

「じゃ失礼、入って来ますわ」

「あゝ、ごゆっくり」

郁子が部屋を出て行ったあと、山口はひとり煙草に火をつけたが、まだなかなか落ちついた気持にならない。襖をあけて廊下をのぞいてみた。電灯がポツンと点いて、たゞ黙々とにぶい光が廊下に反射しているのみである。

山口はまた坐ってみた。鏡台の横の衣装箱に郁子の脱いだ服が重なっている。山口は衣装箱の側ににじりよって郁子の服を手にとってみた。ブラウス、スカート、ブラジャー、コルセット……。スリッパとパンティはない。靴下がある。小麦色、ほとんど肉色の絹靴下。山口はその靴下をそっと手にとった。生意気で、高慢ちきで、あんなに嫌いだった鈴宮郁子の、足にはいている靴下……。山口はその靴



下をそっと握りしめて鼻にあてゝみた。靴下の中には彼女の足の匂いがこもっていた。それはなんとも云いようのない蒸せるような香ぐわしい匂いであった。

「あゝ、いゝ気持だった」

郁子が戻って来た。湯上りで暑かったか、浴衣と伊達巻を片手に

かゝえて、スリッパ一枚の姿で帰って来た郁子は、浴衣を座敷へ放り出すと、鏡台の前にストンと横坐りになり、ハンドバックから小型のヘヤーブラシを取り出して、襟許までたわわに垂れ下っている髪の毛をすきはじめた。そのうしろ姿を山口はしょうそうにかられた気分で眺め入った。いつぞや道玄坂で郁子を尾行したとき目に入った彼女のお臀、そのお臀がいま、同じふくらみと曲線で坐布団の上にべたんとおって、その曲線をつつんだ絹のスリッパがはちきれるように緊張している。そしてその横から斜めにのぞいている郁子の足の裏、足の指……。下の赤い坐布団がその形に添ったくぼみをつけて、高価な宝物を捧げているかのように支えている。

山口は郁子のうしろへにじり寄って、そっと彼女の肩を抱きしめた。

「ねえ……」

「なアに……？」

山口はそれに答えず郁子の身体の向きをかえて、いきなり接吻しようとした。その手の下を、するりと、くぐり抜けて郁子は立ち上った。

「なにするのよ……」

山口も立ち上って彼女の前に立った。

「ねえ、いいだろう。キスぐらい……」

「アラ、そんなこと約束しないわよ」

「約束はしないサ。しないけど、だけど、判ってるじゃないか」



「まあ……。あたし、判ってなんかいないわ」

山口は無言で右手を郁子の肩にかけ、左手を右脇から背中へ廻して郁子を抱こうとした。その途端、彼女の右手があがって山口は頬ぺたをイヤというほどひどくひっぱたかれた。

「あッ……」

山口は驚いて郁子から手を放した。

「ふふふ、」

郁子は鏡台のベルを押した。そしてくるりと向直って男のように腕ぐみをし、両手で赤くなった頬をおさえて呆然と突立っている山口と対峙したのである。

「お呼びでございますか……」

女中が襖の外で声をかけた。

「どうぞ……。這入ってちょうだい」

山口はあわてて後退した。女中が襖をあけた。

「お蒲団、敷いて……」

「はあ、かしこまりました」

「あのネ、お蒲団は二つ別々に敷いてちょうだいよ」

「……はあ」

女中はげんそうな顔をして山口の顔を見上げたが、何も言葉がないので、黙って控えの間の押入をあけて、二つ並べて蒲団を敷いた。女中が去ってから、郁子はさらに蒲団をひっぱって二つの蒲団の間を一メートルほど離して

「痛かった？……ごめんなさいね。だって約束にないことなさるからよ」

「そりや、約束にないけど……、だけど、そのくらいは許してくれと思うたからさ」

「はは、、あたし、約束したことは約束通りするわ。その点あたし、きっちりしてるのよ。約束したことで、しないことは、はっきり区別するのがあたしの主義なの。きようはあたし、お風呂に入っで、一緒のお部屋で眠るだけ……。そうだったでしょう、お約束が。違う……？」

「そりやそうさ」

二人はいくばくかの言葉のやりとりを交したが、郁子は遂にやさしい顔を見せなかった。結局、別々の床に横になり、割りきれぬ気持でじっと天井を眺めていた山口も、やがていつの間にか眠りこんでしまったのである。

何時かな……？

ふと目が覚めた山口は枕許の腕時計を見た。七時である。郁子は……？ 隣の蒲団を見た。まだスヤスヤと寝入っている。

山口はそっと身体を起して、郁子の寝ている姿を盗み見た。仰向けになって、両腕を頭の上にあげて半ば大の字といった恰好。胸は豊かに張りきって、お乳のふくらみが大きく盛上っている。掛蒲団が薄めなので、彼女の姿態の曲線が蒲団を通して東山のようにくっきりとなだらかな山脈を画いている。両足が解放的に開いているので、曲線が下腹部の中心点でぐっとくぼみ、それから左右に太くふくらみが二つに分れて、間のくぼみは足の先に到るまでに一尺ほどにひろがって終っている。あの蒲団の中に彼女のまよっているシュミーズは乱れてまくれあがっているのであろう。掛蒲団の横から郁子の右足がわずかに覗いていた。

山口はやがて匍いづくばった身体を、少しずつずらすように乗出し、郁子の足許に顔を近づけた。そして虫眼鏡で覗くような恰好で彼女の足に見入ったのである。

ふくらはぎから柔かい線が細まってゆき、可愛らしく引締ってくびれている足首。その足首から強い線で盛りあがっている足の甲、踵。再びそれがせめられて爪先に達するまで、オークル色の肌はつやつやと光り輝き、いまは緊張をといて、どうにでもしろといったように投げ出されている。その足の裏は土ふまずを残してやゝ黒めに濃色を帯びて、これを平然とさらけ出したように山口の眼の前にあるのである。山口はその肌の若々しさに若き女性のこよいな優

しさを感じ、その張りきった肉体に若い女の逞しさを同時に感じて、怪しくも胸がときめいた。

「鈴宮君……。郁ちゃん……」

そっと声をかけてみたが、返事のかわりに未だ暁を覚えぬ郁子の寢息が返ってくるのみであった。

山口はかつて瀬戸内海航路の夜行便の三等が好きであった。大阪の天保山から四国の小松島へ渡るにも、或は今治、多度津への出張旅行にも、特に夏の船旅には彼は好んで三等に乗った。なぜ三等が好きだったか。大ぜいの船客が雑然と坐りこむ狭い三等船室で、若い奥さん風の女、それが一人でも、夫婦連れでも彼には関係がなかった。なるべくツンととりすましたような若夫人の足許に席をとるのである。十二時を過ぎると船客たちはほとんど押し合いへし合いの状態で横になる。彼も巧い具合に寝られぬので困ったという恰好で横になる。すると、これは決して偶然ではないのであるが、彼の頭の横にはその若夫人の足があるのである。彼はその足に後を向けてじっと眼をつぶっている。若夫人はその夫と何やら睦まじそうに話しているが、やがてスヤスヤと寝入ってしまう。と今まで遠慮がちに縮めていた若夫人の足から謙譲の気配が影をひき、それからまったく性格の変った足となって彼の頭の横に平然として投出されるのである。このとき彼はそっと寝返りをうつ。すると彼の目の前三寸ほどに「さあ拝み」と言わんばかりの若夫人の汚れた足の裏が君臨しているのである。彼は薄目をあけて若夫人の足指の指紋から、踵の汚れの濃淡、皺のあり具合。等々を文字通り食い入るように目をすえるのである。ごく稀に、まったく好運にもその夫人が彼の顔をぎゅっと蹴ってくれることがある。そのときの山口の躍りあ

がるような胸のときめき。彼はまったく身の幸福に有頂天になるのである。

この旅館の部屋には、他の船客も居ない、彼と鈴宮郁子の二人きりである。そして彼の目の前に郁子の足がぬっと伸びている。

山口はどうにもならぬ誘惑に心が乱れて、その足先から顔を離すことが出来なかった。彼女に知らせたらそれこそ恥かしい。こんな小娘の足に、堂々たる紳士が、いま何をなさんとするか。山口のそのような自省は、こみあげてくる激情に次第に敗退して行くのをどうすることも出来なかった。

山口は荒々しくなる息づかいをおさえて、郁子の足へ顔を近づけて行った。そして足の拇指のところこそと唇を押し当てゝみた。依然として郁子の足は投げ出されたまゝである。山口はホッと安心したが、そのまゝ顔を引くことは出来なかった。口をあゝんと開けて、そっと郁子の足の拇指を口の中にほおぼり、そして舌の先を指の裏に当てゝペロリと嘗めてみたのである。

「う、うーん……」

郁子は息を吐いて、足をあげた。膝を立てたので、足首は山口の口の中からスポリと抜かれ、蒲団の中へするりと隠れてしまった。山口はギクリとして、その場に平蜘蛛のようにへたばった。お屋敷に忍びこんだ曲者が物音にハッとして畳に伏し、じっと様子をうかがうといった、あの恰好のまゝしばらくは動けなかった。

見つかったか。……知られたか……。しばらくしてから山口は徐々に首をあげて郁子の様子を見たが、郁子は相変らず平然として眠ったまゝだった。掛蒲団の山脈が形を変えて、一方の足はそのまゝ、片方の足の山脈はひとときわそびえ立った高山になり、両山脈の

間は広い深い谷間を形成した。

山口は後ずさりに後退して、そっと立ち上った。もう七時半である。運悪く、きようは会社で早朝会議がある日だった。山口は郁子を目覚まさぬように気をくばりながら廊下に出て顔を洗い、静かに洋服に着換え、階下へ下りて勘定を払った。「用があるから一足先に出る。女が目覚めたら朝食を出してくれ」と注文しておいて、山口は明るい陽光が店々の屋根に斜めにさす朝の街に、まぶしい表情でとび出したのである。

(6)

山口は会社に出勤してからも、郁子の寝姿が頭一ぱいに拡がっていて、仕事の手につかなかった。郁子よりはるかに頭がよく、はるかに勤勉な武村みつ子や小林富枝が真面目くさって仕事大事に励んでいるあのもっさりした姿……。それにひきかえ鈴宮郁子は、ひる近くゆっくり目を覚まして、そしてもう一ぺんお風呂へ入って、それからお化粧して……。それから夕方「すざらん」へ行くまでの時間をどう過すのか。或いは今ごろ例の道玄坂を、あのときの若い男と一緒に手を組みあって散歩して、喫茶店で足を組んで腰かけて、ゆっくりコーヒを飲み合っているかもしれない。山口のことなど何処の馬の骨と忘れ去って、男と甘い囁きを交しているかもしれないのである。

朝の会議の第二次会というか、その夜はまた目黒の雅叙園で幹部懇談会があった。芸者が侍って「ちよいと、ヤアさん」とか「あら、ビールがこぼれた。拭いたげるわ」などとしきりに男の機嫌を

とっている。が昨夜の郁子の態度はまったくどうだ。冷然と腕ぐみして彼と対峙した郁子の高慢ちきな顔。……全然オレをなめていやる。準社員七千円の女事務員が課長に向かって「約束したことゝしないことは、はっきり区別するのがあたしの主義なの」などゝぬけぬけと言いつ返す。その生意気な女の、足を開いて寝そべっているだらしない寝姿……。それが山口の脳裡に一ぱいにのさばって消え去らないのである。

きのは最初のことだったし、若い女として無理もない。きようというきようは一つ……。

山口は都々逸と小唄の雰囲気からそっと逃れて、ふたゝび池袋の「すざらん」へ足が向いてしまったのである。

「きのうは失礼しました。アラ、けさね……ふゝゝゝ」

郁子は山口の隣へどしんと坐ってハンカチを口にあてた。

山口が「すざらん」の店へ入ったのは、もう看板近い時刻だった。

「よかったら外で飯でも一緒に食べないか」

郁子の帰りを待って、彼はもう一ぺん誘いをかけた。今夜こそ……。彼は自分が女たらしのドンファンであるかのような錯覚を胸につゝんで彼女に言いよった。

「もう遅いんですもの……」

「遅い……ったって、君。一人で暮しているんだろ。早かろうが、遅かろうが、或いは他処で泊ったところで誰も文句を言う人が居るわけじやなし……。もっとも、アパートで君の帰りを待っている彼氏が居るんだったら別だがね」

「アラ、居ませんわ、そんな人……」

「それだったら、つき合ってくれたっていいじゃないか、ちょっとぐらい……」

郁子はしばらく考えながら歩いていたが、靴先で小石をボンと蹴った。

「そんなら課長さん、アパートまで送ってくれる？ 紅茶ぐらい御馳走したげるわ」

「え？ 君のアパート……？」

「え……。それとも、いや？」

山口は目をみはった。

「いやじゃないよ。結構さ……。何処だい？ 君のアパート……」

「渋谷よ」

「渋谷……？」

道玄坂を若い男と二人で歩いていた郁子の姿が脳裡をサツとかすめた。

「紅茶の御馳走はありがたいけど、ドアを開けたとたん、彼氏がニュツと出てくると違いか？」

「彼氏の居ないところ見せたげるわ」

これは俺を信頼している。

山口はぞくぞくするような嬉



しきにかられて、走ってきた自動車を呼びとめた。

渋谷の商店街をだいぶはずれた、こんな通りがあったのかと思わせるような閑静な高台——。思ったより大きなアパートだった。造作も悪くない。最近新築したらしい堂々たる三階建の鉄筋アパートである。

門を入ってから棟に添って左へ折れて、その一番奥の一劃。一階から三階まで縦一列を一区劃として、その一區劃ごとに入口がついているらしい。

「あたしのとこ、三階よ」

山口はコンクリートの階段を上って行く郁子のあとについてのぼった。郁子はハンドバッグから鍵を取り出してドアを開け、中へ山口を引入れてから壁のスイッチを押した。パツと電灯がついた。一畳ほどの半分土間、半分板の間の玄関になっている。

「靴は此処へ入れてちょうだい」

郁子はパンプスを脱いで、下駄箱の上に置いてあるスリッパと履きかえた。山口も郁子の隣へ自分の靴を押込んで、さてスリッパもないので靴下のまゝ郁子に従った。ロウケツ染風のカーテンをくぐると更に一間ほどの廊下。右側はピンク色のカーテンが引いてあるが、その奥は台所や洗面所らしい。そして次のドアをあけると、そこが十畳ほどの広間である。右の壁に添って造りつけのベッド。左の壁側に洋服ダンス。三面鏡。コケシなどが並んでいる飾り茶簞笥。板の間には赤い絨緞が敷いてある。

「ほう……。いゝ部屋だな」

山口は周囲を見まわすと同時に天井を見上げた。

「天井も高いね」

杉板とかベニヤ板とか、普通の所謂天井板はなくて、十尺ほど上までずっと高く天井をとり、その間に大きな丸い棟木が横に露出して貫いているコテージ風というか山荘風というか、厚いコンクリートの上に張ったマホガニーまがいの黒い光沢のある壁板とマツチして、一種荘重な味があり、その側に置いてある三面鏡とか飾り簞笥が強いアクセントとなって浮出ている。

「ちよっと趣きがあっていいでしょ。天井がこんな風になってるの三階だけよ」

郁子はベッドにどすんと腰かけて、足をブラブラさせながら山口に言った。

山口は窓際の籐椅子に腰かけて、まぶしそうに郁子の腰をおろしているベッドを眺めた。弾力のあるスプリング。その上の敷蒲団と白い柔かいシート。裾の方にはねのけられてある赤い羽根蒲団。郁子が足をブラブラさせるたびにスプリングがブルンブルンと振動して、郁子のお臀が上下に揺れる。

「待ってゝね。いま紅茶わかしてくるから……」

郁子は立って廊下へ出、台所の方へ姿をかくした。山口は煙草を取出して火をつけてみたが、はじめて郁子のプライベートルームに入って感動でどうにも落ちつかなかった。その上この部屋は郁子のベッドルームでもある。目の前に郁子の寝蒲団がふかふかとさらけ出て、郁子が身体の上にかけて寝る柔かい羽根蒲団がまくれあがっている。その枕許の飾り棚にフラスコとコップのセットが置いてあり、何やら桃色のハンカチのような絹のものがクシヤクシヤにまゐる。その横に桜紙が放り出されている。香水瓶がのっている。そういう女のものが、とり乱したまゝ雑然と放置されてある。

光景は山口の胸をかき乱さずにはおかなかった。

山口はそっと立ち上り、唾をのみこんでベッドに近づいた。台所の方の気配をうかづってから、いま彼女が腰かけていたあたりの蒲団にゴボツと顔を押しつけた。そして口を大きくあけて思いきり息を吸いこんでみた。それは甘くて、すっぱいような芳香であった。山口はさらに身体をずらして、このへんが彼女が寝て腰のいくあたりとおぼしい部分に顔を押し当て、再びその秘められたかぐわしの香りを吸いこんだのである。

「なにしてるの？」

山口は電気に打たれたように跳ね起きた。いつの間にか、うしろに郁子が立っていたのである。

「いや……ちよっと……」

山口はどぎまぎして籐椅子に腰をおろした。

「ふふふふ」

知ってか知らずか、郁子は含み笑いをしながら山口の前に紅茶を置いた。そしてふたゝびベッドに腰かけて山口と相對した。

郁子に見つめられて、山口は紅茶どころではなかった。顔が力とほてっている。

「あゝ、くたびれた」

郁子は両手を頭のうしろに当て、足をブラブラさせたまゝで、そのまゝベッドの上へ仰向けにひっくり返った。その足の方から真正面に相對した山口は、まともに郁子を見ていられたかった。仰向けの身体全体から一番頂点に盛上っている郁子の下腹部の小丘。その両側からブランとぶら下った張りのある両腿、両脚。

「あんなとこで仿いてるの、楽そうにみえて、相当疲れるのよ。毎

晩々々、何里って道を歩いてるのと同じなんですもの」

「そうだろうな。でも、会社に居たころよりは幾分ましだろう」

「なぜ？」

「昼間遊んでいられるじゃないか。うちの会社に居たときは、昼間会社で仿いて、夜は夜でダンスなんだから……」

「あらア、あのときはたいぶ休んだわ。そんなに毎晩行ってたわけじゃなかったのよ。もっとも近ごろは休まないけど……。こゝのところ精勤なの」

「それはそれは。一つ優良社員として表彰するか」

「皮肉言わないでよ。勤務成績極めて不良の事務員なんじゃないの、あたし……」

「そういうわけじゃないけど……。でも、昼と夜と二つの仕事じゃ、身体をこわしちゃうよ。どっちかやめなきや」

「それで広和商事をクビってわけね」

「かなわんなあ、そのことはもう言いっこなしサ。今はもうお互いに立場が違うじゃないか。今はもう、対等さ。その証拠に、きのう、僕の頬べた、パチンとやったじゃないか」

「……痛かった？」

「いや、痛かないさ。女にちよっと叩かれたぐらい、こたえんよ」

「まあ、こたえないの？……そんなら、こたえるようにしたげましようか」

郁子は仰向けに寝たまゝ「ふふふふ」と笑った。

「さあさあ、スカートが皺くちやになっちゃうぜ、そんな恰好で寝ころがってたら。よしよし、僕がひとつ脱がしてやろう」

さりげなく軽口でごまかしながら山口は郁子のそばへ寄って郁子

のスカートに手をかけた。

「最初に靴下……」

郁子は仰向けになったそのまゝの姿で、山口の言葉にうけこたえするといふよりも、むしろ命令するような口調で山口の行動を遮った。

「あ、そうか……」

山口は郁子の足許に膝まずいた。郁子の両足が投げだされたまゝで山口にその処置をまかしている。

「あらア、そんなとこ引っぱったって脱げやしないわ。上で留めてあるのよ。ガーターのホック、外してくれなきゃ」

山口は震える手をおし静めて、郁子のスカートの下に手を入れた。「ずいぶん上まであるんだね？」

ガーターを外して、その靴下をくるくると下へ引っぱりおろした。若い女の若鮎のような張りきった素足が露出して、後光がさしたように山口の目を射た。

ようやく両方の靴下を脱がせた山口は、その逞しい素足に釘づけにされて、立ち上ることが出来なくなってしまった。今こそ郁子も半ば許している。この部屋は自分と郁子と二人きりである。山口は半ばおどおどと、半ば夢中で郁子の足に抱きついた。

「まア……」

とたんに郁子はその足で山口の胸をどんと蹴った。山口は思わずうしろへ引っくり返って、あわてゝ飛起きた。こと、こゝまで到っては山口も自制を失った。ふたゝび郁子の足許にすがりついた。そして哀願するように

「ねえ、許してくれよ、一ぺんぐらい、この足に、この足にキッス

させて……」

郁子は上から豹のような目をして山口を見下した。

「あんた、あたしが好きなの？」

「あゝ好きだよ。白状するが、好きで好きでたまらないんだ。ねえ、たのむから一ぺんぐらいキッスさせてくれ。そのかわり僕は、君の言うこと、なんでもきくよ。お金だってあげる。……君が馬になれって言うなら、僕は喜んで君の馬にもなる」

郁子はじつと山口を見下したまゝだった。

「ふーん、それ、本当……？」

「あゝ、本当だとも。本当も本当も、僕は前から君が好きだったんだ」

「ふーん……、そんなら、あたしの言うこと、なんでもきく？」

「あゝ、きくとも。……どんなことでもきく」

郁子の眼はあやしく輝いた。

「じゃあ、そこで、そのまゝの姿勢で、目をつぶって」

山口は胸をおどらせて目をつむった。郁子はやおら立ち上った。

「それから、手を前に出して組み合せて」

「こうかい……」

郁子は洋服ダンスの中から腰紐様のものを数本とりだすと、その一本を組み合わされた山口の両腕の間にに入れて、くるくると巻きつけたかと思うと、ぎゅっと紐を引締めて、固く山口の両腕を縛りつけてしまった。

「足を前に出して」

山口は尻餅をついたように絨緞の上に坐って、両足を前に出した。郁子は今度はその両足を別の紐できっちりくくりつけた。

「それから、手を足のところに伸ばして」

山口が身体を海老のように曲げて足首のところに持ってきた両手を郁子はさらに手と足を一緒にして幾重にもぐる／＼巻きに縛りつけてしまったのである。

生獲りになった猪のように、丸められてく／＼つけられてしまった山口は、郁子の意図がはかりかねて、其処へゴロリと転がされたまゝ彼の横に両足をひろげて立ちはだかっている郁子を見上げた。

「こんなことして、一たい何をするの？」

「どう？……ちよっと動いてみてよ」

「動けったって、動けんよ、これじゃア」

「ふふふふ。それから、と……。声を出されると困るな……」

郁子はあたりを物色したが、ベッドの枕許にある桃色のハンカチをとって引返し、山口の髪の毛をつかんで顔をひっぱりあげた。

「口をアーンとあけて」

開かれた口の中にいきなりそのハンカチがおしこまれた。

「アワ、ワ」ともがく山口に有無を言わさずその口の上から更に細紐でひとく／＼りし、完全に猿ぐつわをはめてしまったのである。

手足をひとまとめにしてく／＼られて、猿ぐつわまでされてしまった山口は身体はもちろん身動きならず、そのうえ声をたてることも封じられて、頭の上に立ちはだかって冷笑を浮べている郁子を、たゞギラギラと目ばかり大きく見開いて見上げるよりほかにどうすることも出来なくなってしまった。

郁子は、さらに洋服ダンスの抽出しから太い麻縄を取出した。そして山口のく／＼りつけられた手と足の間にその麻縄を通して、しっかりと結びつけ、縄の一端を天井の棟木に放り投げてひっかけると

垂れ下ったその一方の端を力一ぱい引っ張りだした。縄がピンと張ると同時に、横向に転がっていた山口の身体は否応なしに手足を上にあげた仰向けの姿勢に変えさせられた。しかし、それでも郁子は力をゆるめず、少しずつ縄をたぐりあげて行く。天井の梁が滑車の役目をして、女の力でもこと足りた。山口の背中が遂に床から離れて、絨緞の上五寸ほどのところでブラリとぶら下ってしまったのである。

その縄のはしをベッドの足にく／＼りつけてから郁子は立上り、ホツと息をついた。

「どう？ 宙ぶらりんの感想は……？」

山口は感想どころか、ウンともスウとも言えなかった。手足を吊上げられて、自分の身体で重石をつけているようなものであり、一寸の身動きも出来なかった。

郁子は山口の有様をあざけるように眺めながら、静かにスカートを脱ぎ捨てた。それからブラウスも脱いで、ベッドの上に放り投げ柔かいスリッパ一枚のなんの遠慮もない姿になってから、山口の横にかゞみこんで、天井から吊下げられたこの醜い獣と対峙したのである。

「課長さん、どんなことをされてもい／＼って言ったでしょ。だから吊下げられたって文句は言えないわよ……。それとも、文句ある？」

「……」

文句があるにもないにも、一言の声も出せない山口である。

「文句があるのか、ないのか、どっちなのサ」

郁子は憎々しげに言い放ったかと思うと、いきなり山口の頬を平手でピシヤツとひっぱたたいた。

「う、うッ」



山口の顔がぐらりとゆらいだ。

「会社で、大ぜいの前であたしを叱りつけた、そのお返しなのサ、これが……。判った？あたしの意にさかったことをした報いがこれなのよ。よく覚えておおき。この口であたしに文句を言ったのネ。そういう生意気な口は、こうしてやるわ」

山口の猿ぐつわの口許を郁子は思いきりつねりあげた。

「あ、あーッ」

「痛いのか？当り前だわ。痛いくらい、なにヨ。当然の御神罰じゃないの」

郁子は山口の頬をもう一ぺんピシヤツと撲りつけておいて立ち上った。

今やこの小娘は、山口に対して絶対権力をふるま

う暴虐な女王として彼の上に君臨したのである。

「あんたはあたしの馬になるって言ったんでしょ。本当に馬になるか、返事をおし」

郁子はベッドに腰かけてブラン／＼させていた片足をあげて山口の顔をぐんと押し蹴った。一本の縄で吊下げられている山口は、郁子の軽い足の力だけで、身体ごとくると一回転した。その廻転して元に戻ってきたところを郁子は足の先をのばして山口の顔をとめた。そしてまた軽く蹴って前へ押出した。山口の身体は左へ四、五寸動き、反動でまた右へ返ってくる。それを足で受けとめて、さらに前へ一蹴りする。山口の身体は右へ、左へと揺れて、まさに時計の振子となったのである。郁子は、それを気持よさそうに見下して「これから、あたしの家来になるか？」

「……」

「いやか……？」

「……」

「それとも、なるか？」

郁子は振動する山口の顔を足でなぶるように蹴りながら

「なるんだったら、首をタテに動かして、ウンとお言い」

山口は形容のしようなないまなざしで郁子を見上げた。そして、力をふりしぼって自分の首をもちあげ、ぶらんぶらんしながら「ウン」とこっくりしたのである。

山口の返事をきいて、郁子はあざけるような、さげすむような冷笑を頬に浮べた。

「ほほ／＼／＼。じゃあ許してやるわ。これからはあたしの言うこと、なんでもきくのよ」

山口の縄は解かれた。山口はしびれるような手足の痛みをこらえ

て、郁子の足許ににじりよった。そしてエジプトの奴隷がクレオパトラの足の下にひれ伏すような恰好をして、こわばった口から感激の言葉をほとぼらした。

「鈴宮君、まったく君は素晴らしい。僕は、僕は喜んで郁ちゃんの家来になる」

ベッドに腰かけたまゝ、まったく征服させられた山口の哀れな有様を、満足そうに腕組みをして見下した郁子の姿は「浮気なカロー／＼」や「ボルジャ家の毒薬」のマルチーヌ・キヤロルのように小生意気で、可愛くて、あでやかだった。

「郁ちゃんなんて心易そうに、なにサ。今まではあんたは課長で、あたしは事務員だったかしれないけど、今はあたしが女王で、あんたは家来じゃないの。家来だったら家来としての言葉をおつかい」

「だったら、どう言ったらいいの？」

「鈴宮郁子女王様……ってお言い」

「鈴宮郁子女王様……」

「あたしはあんたのこと『お前』って呼ぶわよ。よくって？」

「うん、もちろん、いゝとも」

「なにサ、その言葉。『はい、もちろん結構でございます、女王様』って言うのよ」

「……」

「お言いよ」

「はい、もちろん結構でございます、女王様」

「ほほ／＼／＼」

山口を足の下に見下して、郁子は勝ち誇ったように哄笑した。

「じゃあ、きようはもう許してあげるから、あたしに最敬礼してお

帰り。あたしは一人でゆっくり寝るんだから……」

山口は、縄やら紐の跡始末をさせられ、郁子のブラウスやスカートをきちんと畳まされてからアパートを追出された。彼は何とも言いようのないときめきで、しびれるような胸を一人おししずめてタクシーを呼びとめた。

(7)

なんとという破廉恥^{はれんち}。なんとという不甲斐なさ……。あんな小娘に、好き勝手放題に扱われた昨夜の醜態に、山口はわれながらあいそがつきた。もう二度と会うまい。郁子とのこしかたの交渉も、ひっきりよう狂った一夜の夢にしかすぎなかったのだ。

翌日、山口はほぞをかむ思いで会社の仕事に没頭したが、なんとかしたことであろう、その理性のかげからうつぽつとして湧きあがってくる郁子への愛着は、山口の脳裡にあまりにも強く焼きつけられていて、如何にしても追い払うことが出来なかった。

午後六時。社員が帰ったあと、一人残って山口は武村や小林が整理した帳簿の数字に目を通したが、文字通り目を通していているというだけで、一行の数字も頭に入らなかった。男のような腕組みをして山口を見下している郁子の冷笑が、彼の顔の上を踏みつけた郁子の逞しい素足が帳簿の数字の上に一ぱいに蔽いかぶさって、ひろがって消えないのである。

会社を出た山口は、どうにもならない力に引きずられて、ふたたび「サロンすざらん」のドアを押した。

「あ、きょうは郁子さん、生憎とお休みでして……。ほかの誰かへ

御指名願えませんか」

郁子は店を休んでいた。案内のボーイの言葉に山口はがっかりしたような、ホッとしたような、相交錯する落ちつかない気持でシートに着いたが、郁子のいない席は砂をかむような思いであった。

一三五七番……。郁子のアパートの電話番号である。昨夜、アパートの玄関でふと目に入った番号が一から三、五、七と奇数のみが順番に並んでいたのが印象に残っていた。

躊躇したあげく、山口は郁子のアパートへ電話をかけたのである。やゝしばらくして電話口に郁子の声があった。

「あら、課長さんね……。なんか御用？」

「う、うん。いま「すざらん」からかけてるんだけどね。お休みでがっかりしたよ」

「別にがっかりすることないでしょ。もうコリコリしたんじやないの？」

「コリコリしたかどうか、自分でもはっきり判らないんだよ。ねえ、どうだろう？ これからそっちへ行っちゃいけないかな？」

「あたしの家へきたいっていうの？」

「あゝ、……行きたいんだよ」

電話口で郁子の声がしばしとだえた。

「しよこりもなく、またあんなめに会いたいの？」

「そうきかれると、ちよっと返答に窮するがね。つまりまあ、もう

一べん君の顔が見たくなったっていうわけさ」

郁子の声がまた瞬間とだえた。

「……あんたがどうしてもきたいっていうなら、きたらいいわ。そのかわり九時ジャストよ。九時になったらあたしの部屋のドアをノ

ツクして頂戴。花束を持って……。お花、買ってくるのよ、訪問者のエチケツトとして……。忘れたらひどいめにあわすわよ、ほほゝゝ」

「オー、ケイ、九時だね？　いま八時だから、これから花屋へよってぶらぶらそっちへ行ったら九時になる。じゃ、待ってゝくれたまゑよ」

山口は急に元気になって「すぐらん」を出た。薔薇、カーネーション、グラジオラスなど、特別に念を入れた花束を買い調べ、時間を調節しながら、うろ覚えの道をたどりたどって郁子のアパートへ着いたのが九時五分過ぎだった。一カ月前には、自分の許へしおらしい様子をして通ってきていた鈴宮郁子。その顔を見るのも不愉快だった鈴宮郁子の許へ……。あまつさえ、あろうことかあるまいことか、縛られたり、時計の振子にさせられたり、言語に絶する恥辱を与えられた鈴宮郁子の許へ、いそいそと花束を持って、胸おどらせで訪問する自分の愚かしさに、階段をのぼりながら、ひとり赤面しながらも山口は磁石にひきずられる折釘のように彼女の部屋のドアをノックしたのである。

「おはいり……」

最前の電話の調子とガラリと変った凛然たる彼女の声をきいて、とたんに山口はしゅんと萎縮してしまった。昨夜の女王の前に再びいま拝謁を賜らんとするのである。

山口はおずおずとドアを開けて中へ入った。なんの変哲もない玄関が、廊下が、宮殿のごとく彼を威圧し、彼女のベッドルームへのカーテンが大理石の壁のように厚く重かった。

「這入ってもいいかね？」

「いゝわ」

山口はそっとカーテンをくぐって、一步中へ這入った。その目の前の籐椅子に郁子がゆったりと腰をかけていた。

「あゝ！」

万糸の中の一点の紅くれないというか、群鴨の中の一鶴というか、郁子のあまりにも美しいあでやかさに、山口は金の鶏きこりに目がくらんだ賊兵のように立ちすくんでしまった。

白い毛糸のセーターに、紅色の七分スラックス。スラックスというよりパンタロンといった方がいゝかもしれない。彼女のお臀から腿にかけてぴったり密着して、豊かな曲線がふっくりと浮出ている。あらわに露出したふくらはぎから下の素足に、銀塗りのサンダル、そして肩からふわりとはおったサマーコート風の前開きのガウン。銀地に大きく薔薇の花を紋抜きした表模様に対して桃色一色の裏地がまた彼女のからだに燃えるようにまといついている。

訪問者がアメリカ人だったら「おゝピウティフル」とか「おゝ、スプレンドイッド」とか感嘆の声をあげるところであろうが、山口はポカンと口をあけたまま、「昨夜はどうも」とも「こんばんわ」ともひとことも口がきけなかった。

うすい粉白粉、ほのかな頬紅、軽くひいた眉……。ほとんど素顔に等しい薄化粧だが、口紅だけが鮮かに濃く真紅に輝いて、強いアクセントを構成している。まったくもって美の女神とはかくやとばかりの姿である。これが会社における山口課長と鈴宮事務員であつたならば、山口は顔をしかめて「なんだ君のその姿は。アメリカ将校のオンリーみたいな恰好はやめてもらいたいな」というところであらうが、昨夜、この郁子にこの部屋で完全に屈服させられてしま

「た今の山口にとっては、このとりすました小娘の姿がお部屋様のごとく美しく、巫女のごとく厳かで、なろうことなら自ら郁子の足の下に「うへッ」と平伏して、彼女の姿を伏拝みたくなる心情に圧倒されてしまった。」

「七分、遅かったわネ」

「え？」

「あたしのところへくるのが、七分おくれたっていうのよ」

「あゝ、九時になって云ってた……」

「そうサ。あたし、九時ジャストって云ったでしょ。その云いつけにそむいて、あんた何処にうろうろしてたの？」

「うろうろって、別に……、道がちよっと判りにくかったんで……」

「お黙り。九時にこいっていったら九時にきたらいいじゃないか。」

「よけいな弁解はきくたくないわ。あたしにおこられたら、恐れいってあやまったらいいじゃないの」

「……」

「そこへ坐って、両手をついておあやまり。すみませんでしたって」
かって時間のルーズさを叱りつけた課長と、叱られた女事務員とは、まったく位置を転倒して、山口課長は鈴宮郁子の前で首うなだれて恐れいらなければならなくなってしまった。昨夜、郁子に踏みつけられて「これから郁子様の家来になります」と、宣誓させられた事実がまざまざと再現されて、山口は再びきょうも郁子の云うまゝ、お気に召すまゝ、動きまわらなければならぬ空気におし倒されてしまった。

山口は花束をテーブルの上に置き、足を投げだして腰をかけている郁子の前に悄然と坐ってかしまった。

「すみませんでした……」

両手をついてお辞儀した山口の頭の上に郁子は右足をのせたかと思うと、ぐっと下へ押えつけた。

「もっと額を床につけてあやまるのよ」

山口の頭は郁子の足の下に押しつぶされて、彼女の前に平蜘蛛のようにへたばってしまった。

いまはもう、この男を完全に自分の奴隷にしたという彼女の自信が、郁子をますます図にのらせ、奔放にした。と同時にまた山口も完膚なきまでに郁子に征服された自分に対して、うずくような愉悅の情がわきあがるのを禁ずることができなかった。

「山口……」

「ハイ。……鈴宮郁子女王様」

「ほほゝゝ、その調子、その調子。その意気を忘れちゃいけないわよ。……じゃあ許してあげるから、その花束をあたしのベッドの前の花瓶に挿しなさい。それから、そのセロハンは下の屑籠に入れて。ベッドの上にあたしの脱いだ靴下があるわ、それは綺麗に揃えて向うの小椅子の上に掛けとくのよ。……それがすんだら、台所へ行ってコップに水を一杯入れてきて、あたしが飲むのよ。……すんだコップはまた台所へ置いてきて……」

山口は次から次と発せられる郁子の命令にしばしキリキリ舞いをさせられた。

流し台に置いたまゝになっているコーヒータ碗とケーキ皿を洗わされて……それは二つずつあった……ふきんで綺麗に拭いて、かたづけて部屋へ戻ると、郁子は煙草をくわえながら新聞の小説を読んでいた。こうなると山口はもはや自主性というものをすっかり失っ

ていた。次に何をしていゝか判らないのである。主人の命令を待つよりほかに自分の行動のとりようのない奴隷人間でしかなくなってしまった。

「全部かたずけてきたよ」山口は次の命令を待つかのように郁子に声をかけた。チラリと一瞥つを与えた郁子は新聞を放り出して立ちあがると、両手を上へのぼしてノビをするように軽くあくびをし、はおっているガウンを脱ぎ捨てた。ハーフスリーブの毛糸のセーターとスラックスだけの姿は彼女を一ぺんにスポーティにし、軽快にした。

「そういう姿もいゝもんだな。乗馬服みたいな感じだね」

「あら、これは家庭着よ。ディオールディオールのショールなんかにもずいぶんあったでしょう？」

「ディオール？」

「フランスのデザイナーよ。クリスチャン・ディオール。あんたなんか知らないでしょう。近ごろ日本人でも、だいぶはいこういうのが流行って



きたわ。もっともこれは着る人が美人じゃないとダメよ。あんたところの武村や小林じゃダメだね。あたしが着てこそ、似合うんだわ。どう？ あんた、どう思う？」

「うん、素晴らしいよ。まったく素的だ。お臀のあたりなんか実に魅力的だ」

「お臀の形がはっきり出てるからでしょ。バカ」

郁子は山口に手つだわせて、セーターを脱ぎ、スラックスを脱いだ。その下のシュミーズが白く鮮かにひろがって、その変化の妙が山口の目をしばしくらつかせた。

「台所のお湯、もうさめてると思うから、金盥に半分ほど入れて持ってきて」

山口を台所へやらして、郁子は鏡台の引出しから二つ三つ瓶やら小さなケースを取り出してベッドの上へ置き、その横に腰かけて山口を待った。山口は微温湯を真鍮の金盥に入れて両手にささげて戻ってきた。

「これから、あたしの足のお化粧するのよ。よくって、あたしの云う通りするのよ」

「ふーん、足のお化粧ってのもあるのか。それでこんなに綺麗なんだね」

「その金盥をあたしの足の下に置いて、あんたは、あたしの足の前に坐って」

郁子は片足を金盥の上につき出して、

「この石鹸で、よく洗うのよ」

山口は上衣を脱ぎすて、郁子の足許に坐った。そして郁子の足を微温湯ですゝぎ、石鹸をつけて、両手で撫ぜるように洗いはじめ

た。

郁子は山口に新聞をとらせて、足を彼にまかせたまゝ再び社会面を読みはじめた。山口は彼女の足を両手で捧げるようにして丁寧に洗っていった。特に踵の部分は手のひらだけでは充分に汚れを洗い落せないうらみもあったので、指先で石鹸の泡を踵の指紋というか踵紋というか、横に流れている筋目に添ってすりこむようにたんねんにこすった。指の股の部分は一つ一つ人さし指を差込んで、郁子に痛みを与えないように注意をはらいながら洗っていった。

「ふん、それでよし。簡単に石鹸をおとして。それからこのブラシで爪の間の垢を落すのよ。あんたが朝、自分の歯を磨く要領でこすったらいいのよ。……よく洗い落したら、そのお湯、流しへ捨てゝきて、もう一ぺんいゝお湯を入れてきてちょうだい」

山口はまた金盥を捧げて台所へ下り、新しい微温湯と入れかえて再び郁子の前に坐った。

「よく洗って石鹸分をとってちょうだい。……そのタオルで拭いて。水分がすっかりなくなるようによく拭き取るのよ。……それからコールド」

次々に命令する郁子の言葉のまゝ、山口はコールドクリームをつけて、指先で一生懸命彼女の足をマッサージし、ふたゝびタオルでよく拭いて脂肪分を取去り、その上へアストリンゼンを手のひらで軽く叩くようにしたいた。

アストリンゼンをつけ終ったあとの郁子の足は、さわやかで、つやつやとして、輝くばかり美しかった。若い女性の弾力のある肌はピンと引締って張りきって、真珠のような光沢を放散している。

「爪、のびてるかしら……」

「たいしてのびてないよ。でも切ってあげようかね」

「うゝん、いゝわ。足の爪にこのパウダーつけて、マニキュアブラシできゅっきゅっと横にこすって頂戴。あんたが靴墨つけてからブラシで靴を磨くでしょ。あの要領で、こすりつけるように磨くの。……見てごらん、艶が出てきたでしょ。エナメルつけてもいゝんだけど、却っていやらしいでしょ。それよりパウダーで磨いとくだけの方が自然の艶が出て、ずっといいのよ」

「昔、深川芸者は冬でも足袋をはかなかったんで、足については注意をはらったそうだが、その頃は爪に紅をさすというようなことはやってたかもしれんが、あとはどんなことをしてたんだろうね」

「深川芸者って、なにサ？」

「江戸時代に深川方面にいた芸者たちで、江戸中で一ばん粹な女とされていたものなんだ」

「芸者なんかと、あたしと較べものになると思うの」

「もちろん、なりはしないさ」

「だいたい、あんたあたしをどう思ってるの？ 綺麗だと思ってる？」

「もちろん思ってるとも」

「伊東絹子と、どう？」

「伊東絹子……？」

「ミス・ユニバースのよ」

「あゝあれか。あれはなかなかいゝな。直接見たことはないけど、写真で見ても、やっぱり世界第三位だけのことはあると思うね」

「……」

「顔も綺麗だけど、首から胸の線がいゝな。足が長いとか、胴が細

いとかいうのは近ごろのファッションモデルあたりにはザラにいるけれど、胸の線のあれだけ豊かなのは他にちよっといないよ。豊かなというのとは、堂々としてるといふのとまたちよっと違うんだね。たゞボリュームだけの話なら、肥っている女の人や、中年の婦人などにくらでも見られるんだが、娘らしい可憐さのある豊かさ、可愛らしい豊かさなんだな、伊東絹子の胸の線は……」

「娘らしい、って……娘だかどうか判らないわ」

「いや、あれは娘だよ。決して男を知っている身体じゃないね。あの腰から太腿にかけての線なんか、豊満ではあるけど、あくまでも男を知らない線だ。重い軽いという言葉で区別するのもおかしいけど、つまり軽快な豊満さなんだな」

「じゃあ、あたしはどうなの？」

「君か？……さあ、君は……アッ！」

山口はいきなり、うしろへステンとひっくり返った。郁子が足をあげて山口を力一ぱい蹴りたおしたのである。郁子はベッドから腰をずりおろして、山口の前に立ちはだかった。

「伊東絹子がなにサ。男を知らない線だから、どうしたっていうのサ。だったらあたしは男を知ってる線だっていうの？」

山口は仰向けになった身体を半身起して、あわてゝ弁解した。

「いや、そういうわけじゃないんだ。別に比較してる意味じゃないんだ。たゞ、伊東絹子はミス・ユニバースだけに、いゝ身体の線を持っているというのを、単なる感想として云ったままで、君が男を知っている線か、知らない線か、そんなことは問題じゃないんだよ」

「じゃあ、改めてきくわ。あたしはどっちの線なのサ？」

「さあ……。どっちの線か……。よく判らないけど……」

「伊東絹子のこと、そんなに詳しく判るんなら、あたしのことだって判るでしょ。あたしのお臀は大きいのか？ 小さいのか？」

「それは大きいよ。しかし、大きい方がもちろんいいんで……。豊満であるところに美があるんだから」

「どういう豊満なのサ？ あんたに云わしたら、いろいろあるんでしょ、同じ豊満でも……。軽い豊満なのか、重い豊満なのか、あたしはどっちだっていうの？」

「さあ、……。それはどっちだか……。しかし、今もいうとおり、そんなこと、どっちだって問題じゃないんで……」

山口の言葉を待たず、郁子はふたゝび彼の胸を蹴り倒した。ストンとひっくり返ってあわてゝ起き直ろうとする山口の上に飛びこんできた郁子は、彼の胸の上へいきなりどすんと馬乗りになたがってしまった。踏みつぶされた蛙のように山口は郁子のお臀の下に押しひしがれて、郁子の両腿の間から首だけ辛うじて覗いている恰好でアッパアッパあがいた。その口の上まで郁子はさらにお尻をずらせて、見も出来ぬように押えつけてしまったのである。

「あたしのお尻が重いのか、軽いのか、よく判るようにしてやるわ。サア、重いのか、軽いのか、どっちなのサ」

山口はひっくり返された亀そのまゝに、身動きも出来ず、大きな口をあけて苦しい息を吸いこみながら、上からぐっとのしかゝっている郁子を見上げた。口をあけている上へまたがっている郁子の逞しい重みのため、山口はアゴが外れそうな重圧を受けて、軽いにも重いにも、一語も発することが出来なかった。

「あわあわ、あわ……」

わけのわからぬうめき声しか出ないのである。

「黙ってきいていれればいゝ気になって、なにさ、バカ。お前はあたしの家来なんだろ。家来だったら家来らしく、女王様だけあがめていたらいゝんじゃないの。伊東絹子のお尻がどうしたのサ。たとえ、あたしがきいたって、お前の返事はきまってるんだよ。あたしが男を知っているお尻であろうとなかろうと、お前に知らせるわけじやあるまいし、どっちにしたって、お前にはこれが分相応なんだ。……。どう？ 少しはこたえたか」

こたえました……。というかわりに、山口は目ばかりギョロつかせて、こっくりをした。なんとという快い重みであろう。十二貫五百か、十三貫か。それは自分で形容出来ない重量感である。ヴィナスの重石というものがもしあるとするならば、郁子に乗せた山口の姿は、まさに美の女神ヴィナスから与えられた重石を歓喜にふるえて身に受けている姿であった。

まくれたシュミーズの裾が山口の鼻の辺でかたまつて、かすかに郁子の身体の部分から外れている目だけが恍惚として郁子を見上げている。それは井戸の底から望遠鏡で上の人を眺めたような、びっくりするほど目の前に美しの小山がそびえ立っているのである。

郁子はお臀をわずかに下になぞらしてくれた。山口は窒息しそうになった呼吸をようやく許されて「はアー」と大きく息を吸いこんだ。そのあえぎを快よさそうに見下しながら郁子はシュミーズの裾をまゐめて、赤ん坊のよだれかけのように山口の首のところにたくりこんだ。

「すこしは身にしみたか？」

「身にしました」

「そんなら、もう、あたしに逆らわないか？」

「逆らいません」

「あたしの言うことは、何でもその通りするか？」

「その通りします」

「ちよっと、お前の財布、見てやる」

郁子は馬乗りになったまゝで、手をのばして側の山口の上衣をとりあげた。内ポケットから財布を取り出した、中を調らべていたが「八千円しか持っていないのネ。これで全部？」

「うん、さっき『すぐらん』で勘定払って、花屋へ寄って……それで全財産なんだ」

「じゃあ、七千円、あたし貰っとくわよ。可哀そうだから千円だけ残しといてやるわ」

「千円……？」

「文句あるの？」

「う、うゝん……文句はないよ」

「当り前サ。何をしようとあたしの勝手じゃないの。千円残しといてやるんだって特別のお情よ。お前はあたしの犬なんだからね。そうだろ？」

「……」

「私は郁子女王様の犬でございます……ってお云い」

「私は郁子女王様の犬でございます」

「ほほゝゝゝ。……本当に、犬にしてやろうか」

郁子はようやく立ち上った。首から胸への圧迫感がすうっと抜けて、山口は大きく深呼吸した。

「ズボンをお脱ぎ」

山口はおずおずと起き上って郁子の顔を見上げたが郁子は厳然として顔色をやわらげず、彼女の命令の履行されるのを待っている。山口は仕方なくズボンを脱いだ。

「それから、ワイシャツも」

山口はランニングシャツとズボン下という恰好になって、しよんぼり彼女の前にかしこまった。郁子は洋服簞笥の抽出しをあけて、彼女の腰紐をとり出し、その端を山口の首にひと巻き巻いて首輪にし、その一端を持って凜然と云い放った。

「さあ、犬におなり」

山口は屈辱の愉悦に、今やすべての自制を失った。鈴宮郁子女王様、私は郁子様の犬でございます。殺そうと生かそうと、私をどうなさろうと、郁子様のお勝手でございます。犬である私は、郁子様の御命令のまゝ、いかなるいやしい勤めでも、いかなる無理なお云いつけでも、喜んでつとめさせて戴きます。……『口に出さねど、心のうち』という言葉があるが、山口は歓喜にうちふるえて郁子の玉体を仰ぎ見た。ようやく二十才過ぎたばかりの若い小娘が、かつての上長だった課長を犬にして、シュミーズ一枚の姿で立ちはだかっているその足許に、山口課長は首輪につながれて、両手、両膝を地につけて、恥も外聞もなく四つ這いになったのである。

「三べん廻って、ワンとお云い」

山口は郁子の前で神妙にくるくるくると三べん廻った。

「ワン」

「犬にされて、嬉しいか？」

「ワン」

「これからはもうお前はあたしの犬なんだよ。犬は御主人様の命令

をまもるばかりでなく、御主人様のすることは、どんなことでも喜んで眺めていなきやいけないんだよ。今こそあたし、お前に思い知らせてやるんだから。これからどんなことが起るか、犬としての覚悟は出来ているだろうね」

このうえ何をされるか……？犬にまでなり下った以上、どんなことをされようが同じことである。山口は神妙に首をふってうなずいた。郁子は何を思ったか、腰紐の端をベッドの足にくくりつけておいて、カーテンの外へ出たが、また思い直してとって返した。

「留守の間に部屋の中なんかかきまわされたらかなわないわ。ちょっと縛っとくからおとなしく待っておいで」

郁子は昨夜の紐をふたゝび取出して、山口の手をうしろへ廻させひとくくり縛って、その端を一直線に下へおろし、更に両足を縛って二つを結び合せ、膝立ちしていた山口を足でポンと蹴って横倒しにした。そしてその上へ彼女のガウンをふわりとかぶせてしまったのである。山口は彼女のナイトガウンに蔽われた暗闇の中で、身動きならず、芋虫のようにモソモソと身体をもがくことだけしか出来なくなってしまった。

ドアの開く音。閉る音。郁子はシュミーズ姿のまま外へ出て行ってしまったのである。

(8)

何処へ行ったのか？山口は身動きならぬのと、周囲が全然見えぬだけに不安な気になられてじっとしていた。山の奥深く一人取残されたような、うずくような孤独感の中に、十分たつたろうか、十

五分たつたろうか……。コトコトと人の上ってくる足音が聞えてきた。あゝ、帰ってきた。ホッとすると同時に山口はオヤツと耳をかしげた。一人の足音ではない。それは二人の足音である。ドアが開いた。ふたゝびドアが閉され、カチリと鍵をかける音がきこえた。一人じやない。誰か居る。郁子以外にもう一人、誰か居る、ガウンの下は山口は云いようのない不安と緊張で総毛だつように身がひきしまった。しかし一寸といえど動くことも出来なければ、ガウンをとりつけることも出来ないのだ。

「ふふふふ」

郁子の含み笑いが聞えた。

「ね、このガウンの中がそれよ」

郁子が誰かに説明しているのである。

「いゝのかい、僕が来ても……」

男である。誰か男が、小さな声で郁子にきいている。

「もちろんよ。あんたに見せるために連れてきたんだもの」

ギイツと籐椅子が鳴って、男がそれに腰かけたようである。パツとガウンがまくられた。奇術の品を取出すように、郁子が大仰にガウンを手にとって跳ねのけたのである。

「あッ」

あの男だ。それは昨夜「すゞらん」に来ていた郁子のもう一人の客。さらに云い足せば、道玄坂を郁子と仲睦まじく歩いていたあのアベックの青年だったのである。

青年は瞬間緊張して、山口を見据えた。山口の方は到底青年の方へ視線を向けられなかった。どこへ視線のやりばもなく、是非なく「うつろなまなざし」という状態にするより他に方法がなかった。

堂々たる年配の紳士が縛りつけられて、ランニングシャツにズボン下という醜い姿態が、若い二人の男女の目の前に今まざく／＼とさらけ出されたのである。

同じアパートに居るのだ。二人は完全に恋人同士だ。このアパートの何処の部屋にいるのか。郁子が出て行ったのは、このカリカチュア・ショウを見物させるため彼を呼びに行ったのである。

「素的でしよ、健ちゃん。これが昼間話したあたしの犬よ。絶対あたしの命令のまゝなんだから心配御無用。あんたがあんまり焼餅やから、見てもらうまでの話なのサ。そこで見てゝネ。いま証拠をお目にかけるから……」

郁子は山口の側へきて、手と足の紐を解いた。のど首に腰紐の首輪を巻かれて、犬の姿にさせられた山口は、居ても立ってもいられぬ恥かしさに、たぐ／＼たりとして、あらぬ方を見つめていた。

郁子は山口の首の紐の端を手にして、ぎゅ／＼と引っばった。

「う、うッ」

息をつめられて山口は四つ這いになって郁子の足もとに手繰り寄せられるのを防ぐことが出来なかった。その伸びた首筋に郁子は右足をあげて思いきり踏みつけた。ふた／＼びべシャンと床にへしゃげつけられた山口を踏んまえたまゝ郁子は憎々しげに云い放った。

「お前はあたしの犬なんだろ。犬だったらワンとお云い」

「……」

郁子と二人きりの世界ならばともかく、男の見物人を目の前にして、山口は恥辱感で一ぱいになって一言も発することが出来なかった。

「オヤ、云わないの？ 云わなきゃ云わしてやるから、見ているが

いゝ」

郁子は山口の首筋から横顔の上へ足を移して、捨てた吸殻を踏みつぶすように足の裏をぐいぐいにじらせながら力まかせに踏みつけた。

「さあ、これでも云わないか。云わなかったらもっと恥かしいめを見せてやるから……。云うか、云わないか……」

「うゝ……ワン」

山口は、もう恥も外聞も消失してしまった。郁子の足の裏から彼に伝わるそれは痛みではない。放射能のような圧迫感のため、ジキール博士がハイドになるときのような、急速度に理性を削りとられて、今やふた／＼び完全な彼女の犬として山口はシャンと張り切ったのである。

郁子は山口の啼声をきいて、満足そうに青年をかえりみた。

「ほら、ネ。あたしの犬ですって云ってるでしょ。なんでもあたしの云う通りなのよ。今、ちよ／＼とエサをやるから見てゝね」

郁子は飾り簞笥の中から一つまみのおかきを出してきて、その一個を自分の足の指にはさんで山口の前に突出した。

「ふん、お食べ」

毒をくらえば皿まである。山口はピンと一跳ねして首をあげ、郁子の足のおかきをくわえ取ろうとした。郁子はその足をす／＼と横へそらせた。

「おあずけ……」

山口はアーンと口をあけた首のやりばがなくなり、仕方なくそのまゝ舌をだらりと出して「うゝ、うゝ」とうなった。

「ほはゝゝゝ。……チン／＼をおし」

勝手放題になぶられて、山口はもう正気の沙汰でなくなった。両手をくるとまるめて膝で立ってチン／＼をしながら郁子の次の言葉を待った。呆れたように眺めていた青年の緊張が次第にゆるむと同時に、さげすみの表情が徐々にその口許に浮んできた。

「よし、おあがり」

応揚にうなずいて山口の鼻先にふたたび突出した郁子の足に、山口はむさぼるようにかぶりついて、指の間からおかきをくわえ取り、カリカリとうまそうに頬ばったのである。郁子は首紐の端を手にもったまゝ青年に近づいた。

「ネ、判ったでしょ。この男、あたしの行ってた会社の課長なの。そのときはとてもえらそうにしたのよ。ところが今はこの通り。」

この男はあたしの犬で、あたしの彼氏はいつもあんだ」

青年はニヤ／＼笑いながら立上った。

「ねえ、見せてやりましょうよ、二人の仲のいゝところを」

郁子は青年の胸にもたれかゝって彼を見上げた。それをがっしり抱きかゝえた青年と、二人の顔と顔が合った。相重なった唇と唇。青年は両腕で郁子を抱きかゝえ、郁子は山口の首紐を持ったまゝ彼の背中へ手を廻し、二人ははげしいキッスを交したのである。長い長い間であった。山口は四つ這いのまゝ郁子の足許で茫然として二人を見上げているより仕方がなかった。

音をたてゝ二人の唇が離れた。

「あんだ、此処へ泊ってってよ。この男はベッドの下へつないどくから勝手に板敷の上で寝るわ。人間はあんだとあたしと二人きり。見てるのは犬だけなんだから、二人で何をしても構わないのよ」

山口はベッドの足につながれた。今やまったく安心しきって服を

脱いだ青年は郁子と一しよにベッドの中に入った。

首輪につながれて床の上に匍っている山口をベッドの上から見下して郁子は勝ちほこった嘲笑を彼の上に投げかけながらこう云うのであった。

「あたしが男を知っているヒップか、知らないヒップか、ミス・ユニバースのヒップと較べて何処が違うのか、そこでおとなしく拝観しながら研究したらいいわ」

(完)

【伝言板】 ○白石稔氏へ、御住所をお知らせ下されば雑誌をお送りします。匿名のまゝの方がいいのでしたら、それでも構いませんが、お知らせ下さっても、他へ洩らすようなことはしませんから御安心下さい。○内外タイムス紙上の「マゾヒストの会潜入記」の新聞切抜を多数の方々から頂きましたが、「手帖速報欄」で取扱いましたので掲載いたしませんでした。御知らせの方々へは厚く御礼申し上げます。○編集者並に執筆者に対する公開状をはじめ、沢山頂いた課題原稿の中、誌面の都合で掲載出来ない分もありました。が今後の誌上で御紹介しますか

ら御諒解下さい。○マゾ・フォトに出演希望で全身を撮影されても構わないという方は年令、身長、体重、略歴等記載の上、御申込み下さい。○最近、口絵や挿画をお送り下さる方が増えて参りましたが、なるべく「題名」「解説」といったものを附記願います。○「読者通信」の中へお金を入れて来られる方がありますが、読者通信は広告ではありませんので、現金を同封されたいようにお願いいたします。○長瀬昭子さん、戸破貞子さんから、出来れば転送して下さい。通信を拒絶しておられましたので一応お知らせいたします。

寄 宿 舎 で の 体 験

緑 川 純 子

私はその頃、K市の女子高校に在学して、その寄宿舎に入っていました。来年は卒業という三年生の秋、二学期が初まって間もない或る日、私は突然激しい下痢と腹痛に襲われました。呼ばれてかけつけた校医は私の身体を診察すると、伝染病かも知れないからすぐ入院するようにと命じました。私は迎いに来た看護婦さんに扶けられて、寝台車で病院へはこばれました。

病院は校医の経営する私立病院ですが、この街でも相当大きな方で、病室も完備していて清潔でした。私は伝染病の疑いがあるというので個室の隔離病舎へ入れられました。診察の時、校医がしてくれた注射がきいたのか痛みも少し和いで私はうとうとしていました。

「洗腸ですよ」

と云いながら肩をたたくナースの声に目をさまさされました。見るとベッドの傍にスタンドが立てられ、それに約二立くらいの液体を満たした大きなイルリガートルが吊され、黒いゴム管がそれに続いています。私は衛生の時間に教えられた洗腸のことを思い出しました。肛門から薬液を注入して排便させるのを洗腸というが、腸を洗う目的で多量の洗滌液を注入することもあるということを知り、間、教わったばかりでした。お尻を出さねばならない、黒いゴム管の先には私の体内へ挿

入されるための三〇センチ位ある赤い直腸管が続いています。私は思わず顔がほてるのを覚えました。どんな姿勢をとらされるのだろうか、いくら同性だといっても自分と同じ年頃のナース達の前でそんな所を見られるのはいやでした。結婚すれば何時かは婦人科の門をくぐらねばならない。お友達がよく話していた断頭台のような検診台にも上らなければならぬのだということはよく知っていました。が、それはずっと先のことだと思っていたのに、今同じようなところを人前にさらさねばならないことは、気持の上で大変苦痛でした。

しかし、ナース達はそんな私の気持にはおかまいなく、覆いの毛布をまくって私の足許にたぐむと、私の着ているパンツを膝までずりおろし、それから足をまげて横を向かせました。私は両脚をひろげなければならぬのかと思っていたのに、両膝はくっつけたまま、で横向きにされたことは、一応ほっとしました。しかし、次の処置は容赦なく行われました。ナースの指先が私のお尻にふれるとグツと左右に押し開かれ、アルコールをふくませた綿で消毒されます。一瞬スーッとした皮膚の感じと共に全身が電気を掛けられたようにピリリとします。続いて油剤が塗られ、次にあの太い直腸管がブスリと肛門に入れられます。思わず、「アーッ」と声が出て、手足が



ビクリと動きます。
「口をあいて、楽に呼吸をするのよ」

そう云いながら、ナースは管を直腸の奥深くズンズン差し入れます。痛さはありませんが、こそばゆいような、何とも云えない感じです。「もう止めて」思わず声が出そうになりました。挿入と同時に洗滌液の流入は初められ、生温い感じが私のおなかの中にひろがるのが感じられます。だんだんおなかの中が重くなって来ます。グルグルという音が腸で鳴り初めます。私はそろそろ便意を催して来ました。もうどの位入れられるのか知ら、と横向きになっている顔をそっとねじ向けて見ると、イルリガートルの液体はまだ三分の一位残っていて、水位は緩慢な下向をつづけています。私は目をつぶってじっとこらえることに一生懸命になりました。私のおなかはどんどん張って行きます。横向きでいるとおなかを圧迫するので却って苦しく、いくらはずかしくても仰臥の方

が楽なのではないかと思いましたが、でもやがて注入が終ると、管は引き出され、お尻には綿がはさまれて、私は上向きに向きを変えさへれました。私は思わずパンツをずり上げようとすると、

「パンツすると苦しいですよ」

とナースに止められました。

「お願い、苦しくてもいゝから」

そう云って私は自分でパンツをおへその所まであげました。ほんとうでした。今まで感じたこともなかったパンツのウエストのゴムが今日は大変な力になって私のおなかを圧迫するのです。私は息遣い荒く必死になってこのおなかの魔物と戦いました。ナースはイルリガートルは取片付けていますが私には中々排出させてくれません、時々腕時計を見ながら時間を計っています。五分だったか十分だったかわかりませんが、私には大変永い時間に思えました。漸く便器が私の腰の下に置かれ、またパンツが膝までずりおろされ、今度は仰向いて両脚を開いた姿勢で排出するように命ぜられました。ナースが両側から、私の股の間をのぞき込むようにして見ています。私は恥しさをこらえながら、高い音をたて、おなかの中の魔物を出してしまいました。私の病気は、幸に伝染病ではないことが判りましたが、粘液便が多いため、毎日服薬注射の外に朝晩二回洗腸されることになりました。

た。

初めはいやでいやでたまらなかった洗腸も毎日されていると、だんだん馴れて来て一種の期待を覚えるようになりました。カテーテルを肛門に挿入されることもあまり苦痛でなくなり、ナースの手がお尻にふれるのを楽しみで待つようになりました。

洗腸には、いつもの婦長、Cさんと中学校出立位位のNさんの二人が来るのがきまりでした。Cさんは色白、面長できりっと締った顔をして、純白のシャツカラーの制服がよく似合っている二十六、七才の人でした。

五日目の晩のことです。

「今晚の洗腸はあちらの室でしますから、すぐ来て下さい」

そう云ってNさんが呼びにきました。その頃はもう痛みもすっかりとれ、下痢も止って診察室なんかへも時々遊びに行けるようになっていました。私はねまきを花模様のワンピースに着かえ、Nさんの後について出て行きました。

私が連れて行かれたのは手術室でした。婦長のCさんは、もう待っていて私が入って行くのと、

「院長先生があなたのおなかを大掃除するよりに云われたから、今日は一寸苦しいことをするのよ」

そう云って、私に服を脱ぐように云いまし

た。私はパンツも脱がされ、袖なしの短いスリーマーだけになって中央の手術台に上るよりに云われました。思わず胸がどきどきして来ました。何をされるのか知ら、いま目の前にある手術台は私の体をのせるところは上半身しかなく、足を片足ずつのせる金属のピカピカ光る保脚器がその両側に備えつけられています。怖れていたことがとうとうやって来たのです。これが話にきいていた、婦人科の検診台と同じものだということがわかりました。私はあの上で何物にも被われない私の下肢を左右にひろく広げねばならないのです。

ナースはためらっている私をせかして台の上を上らせました。黒いレザーで作った枕の上に頭をのせると、私のお尻は台の端から少し出でしまいます。私が自分で宙に浮いた両足を開くののためらっていると、たちまち、CさんとNさんが左右から私の脚をとって保脚台にのせてしまいます。そしてその膝のところは皮のベルトで固く縛られてしまいました。次に私の両手は高くあげて頭の上で組合わされ、これも皮ベルトで固定されました。「これから、洗滌液がとうめいになるまで洗腸するのよ、よくって」

Cさんは私にそう宣告すると、すぐ処置に取りかかりました。いつものように肛門が消毒され、油剤が塗られ、直腸管が挿入されます。しかし今日は今までと違って両手は頭の

上で縛られ、両脚は左右に大きく開かれていてその悲壮な気持というものは何にたとえ様もありません。今までは故意か、偶然か、注入される時は両膝をびたり合わせたまゝで横向きでされましたし、排出する時に両脚をひろげるといっても、丁度たぐりおろしたパンツの陰にかくれて、人前にさらされないですみました。しかし、今は被うものとして何もありません。私の手が自由ならば掌で覆ったでしょう。しかし、その手は無慙にも縛られているのです。ガーゼでも置いてくれたら、そう思ってもみたのですが、頼んでもきいてくれないCさんではありません。私はすっかりあきらめて、なすがまゝに任せる外はないのでした。

何回か洗滌液が注入され、排出され、洗腸は終わりました。私は腰から下が抜けるようにだるく半分死んだようになっていました。Nさんがカテーテルの細いのを持って来てCさんに手渡します。Cさんは私の両脚の間で、手を延ばしてそれを受取りました。私は上半身が少し高くされているのでCさんの操作はよく見えます。

「あゝ、いや、……いや、許して」

私は身もたえするのですが、Cさんは冷然と処置を進めます。

「アーン」

私は絶望的な叫びを立て、目から大粒の涙

がポロポロ流れます。何回も洗腸される間に自然に腸から吸収された水分のため膀胱は相当張っていたようです。

排尿処置は一回で終わりました。もうこれで解放せられるのかと思っていると、まだ中々そうでもないらしいのです。CさんはNさんに、

「あなたはあっちへ行っていて」

と室から出すと、ドアに鍵を掛けました。室の中は台の上に縛り付けられている私の外にはCさんだけです。Cさんが男だったらどんなことになるかも知れない、女だからよいようなものを、と思いつつも、女だつてはげしいことをする人もあるだろうし、これから何が行われるのだろうかとは底知れない不安に引入れられて来ました。

洗腸に使われたイルリガートルには白い濁った液体が注ぎ込まれました。直腸カテーテルは外され、その代りにNさんは傍の台の上に並べてある金属の器具の一つをとって取りつけようとしながら、フト手を止めて私の方を向きました。大きく開かれた私の両腿の間にイルリガートルが吊され、それに続く黒いゴム管の端をにぎって、純白の制服を着て立っているCさんの姿は神々しい様子でした。Cさんは微笑も浮べずにキッと私の顔を見ながら、

「清水さん」

と私の名を呼んで、

「私のいうことに答えてね、あなた、男の人の体を知っています？ それともまだなの？ はっきり云って頂戴」

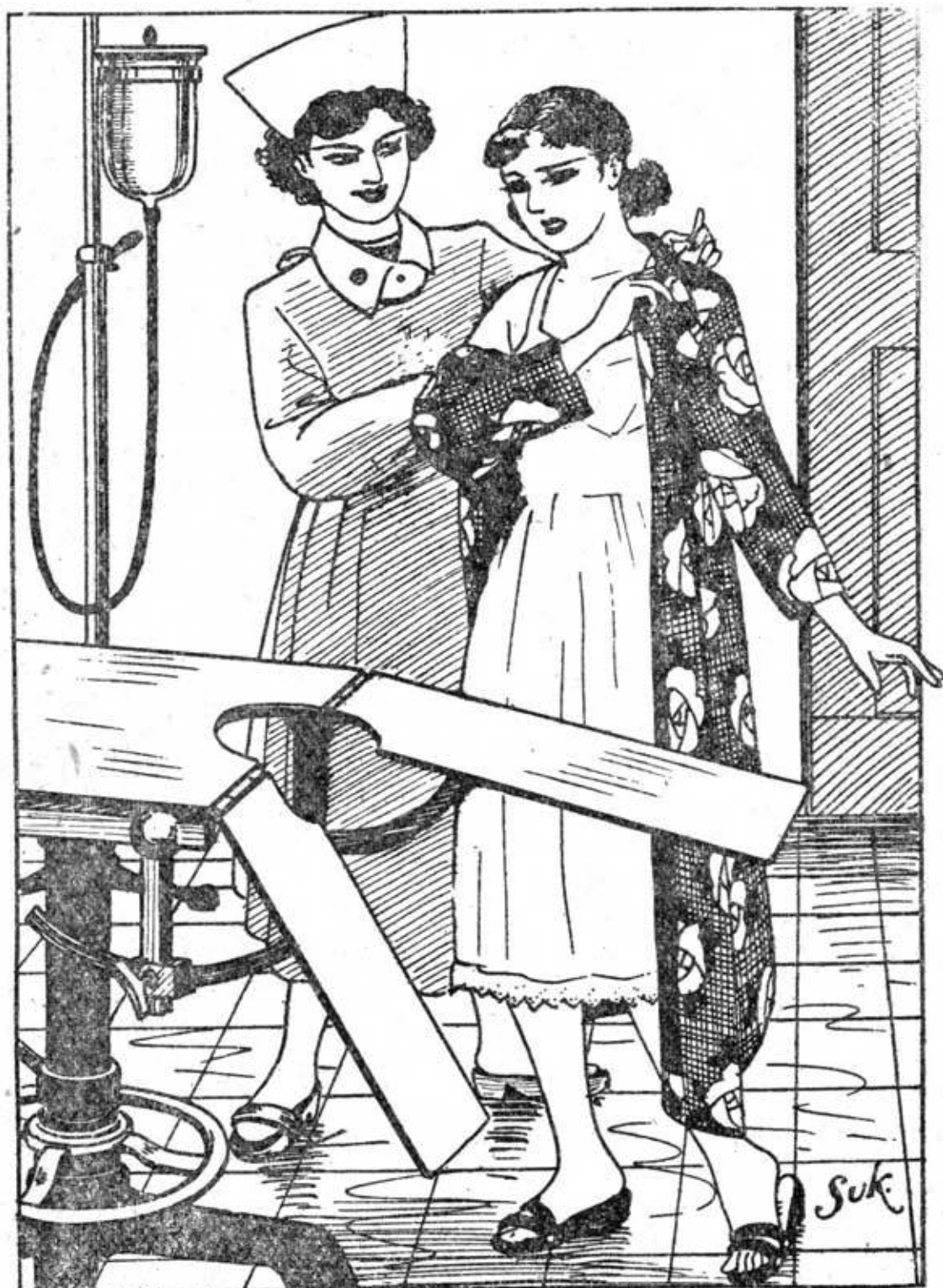
そういうのです。私は何の必要があつて、こんなことをナースから聞かれねばならないのだろうかといふかりました。しかし、何かお

ゝい難い威厳を持ってCさんはきくのです。

「いゝえ、ございません」

私は検事の前へ出た罪人のような気持で、思わず言葉も改まって答えました。

「ほんとう、いゝですわね、これから調べればすぐわかるんですから、若し、嘘を云うたら、ひどい目にあうのよ」



Cさんの目はだんだん輝きを帯びて来ました。

「じや初めだから、この一番小さいのから使いましようね」

Cさんは並べられた器具の中から一つを取上げるとイルリガートルの黒いゴム管に取付けました。

「ねえ、どうしてそんなことをするの、私の病気とは関係ないじやありません？」

私は抗議しました。Cさんは頬に冷かな笑いを浮べて、

「これは私の趣味なの、美しいお嬢さんが入院して来るたびに私はいつも調べるのよ、そうして、その結果に依って次の処置をするの。それはもうすぐわかるわ、どんなことをするのか、たのしみにして待ってなさいね」

Cさんは、そういゝながら私の方へ向き直りました。私は必死です、何かしら反抗せずには居られないものを身体の内を感じて、

Cさんをにらみつけながら、

「人を呼ぶわよ、そんなことをするなら」
私は大声を出そうとすると、Cさんはとっさに洗滌器を置くと、傍の海綿をとって、私の頭の傍に立ちました。

「さあ、叫びなさい。この海綿を口の中に入れてバンドをしてあげるから、さあ、叫ぶのよ」

Cさんは大きな海綿を私の鼻の先に突つけ

て、いうのです。私は口をあけることも出来ません、あければすぐ海綿を押し込まれるでしょう。

「今、人を呼ぶといったじやないの、呼びなさいよ、呼んだらいゝわ、なぜ呼ばないの」
私は金輪際口をあけるものと力みかえりました。

「強情ね。私の前で強情を通し了せた人はないのよ。あきらめて覚悟すればいゝのに。殺すといってるんじゃないのよ」

Cさんは、そう云いながら機械皿の上からアヒルの口ばしのような子宮鏡を取り上げると、海綿を持った手で私の鼻を押さえました。赤子の手をねじるとはこのことでしょう。私は他愛もなく、口を少しあけて呼吸をしなければなりません。やにわに子宮鏡が私の口に押し込まれました。

「あーっ」

という間もなく、子宮鏡の口ばしは上下に開かれ、私の口には丁度「アーン」をしたと同じような状態になってしまいました。Cさんは、やおら私の鼻から手をはなすと、子宮鏡の口から海綿を押し込みました。そして細い皮バンドを私の口に噛ませ首の後を通して固く縛ると、子宮鏡を口から外してくれました。

「バカねえ、おとなしくしていればこんなにされなくてもすむのに」

Cさんは冷やかにいうと、また私の足許へ廻りました。

それから先は私にとって生れて初めての体験でした。もうどうすることも出来ません、すべてはCさんのするがまゝにされたのです。

しかしCさんはさすがに看護婦ですから、ちっとも手荒なことはしないで、医学的な順序と注意をもって事をはこびました。

「どう？ 心配したこともないでしょ。これから何でも私のいうことをきく？ 口のバンドとって欲しい？」

私は力なくうなずきました。

バンドがはずされると私は大きな息を初めて吸いこみました。しかし、手足はまだ縛られたまゝです。

「さあ次の処置よ。大きな声を立てたら許さないけれど、自然に出る声はかまわないわ」
間髪を入れないでCさんは次の動作に取りかゝります。しかし、Cさん自身は相変らず冷然として、取乱した様子はありません。淡々として処置をするいつもの婦長さんと変りませんでした。

気がついた時は、もう手足のベルトも外され、いつもの病室の柔いベッドの上へねかされていて、私の手は傍に腰を掛けたCさんの手に固く握られていました。(おわり)

—私の少年時代の告白—

巨 根 崇 拝

森

太

一

—

店の若い者の厚司と前掛をこっそり持ち出して風呂敷包みにした太一は、土曜日の昼過ぎ父母に怪しまれぬように細心の注意を払って家を出た。決心して家を出たものの、果してうまく行くかどうか甚だ心配であったが、目的の市民病院の前迄やって来た。用を済ませて出て来る人や、診察を受ける人達が入れかわり立ちかわり玄関を出入りして居た。太一は、玄関で下駄を預けて番号札を受取り、受付の前に立った。係員の女の人が太一の顔を覗くようにして、カルテを前にして事務的に質問した。

「お名前は？」

「森太一です」

「お所は？」

太一は出鱈目な住所を言おうとしたが、とっさに口には出ず、本当の住所を言ってしまった。後で自分が困るのではないかと心配であったが、訂正するわけにも行かず、あきらめた。

「何処が悪いんですか」

「あのう、お腹です」

と言って、しまったと思った。その時迄、脱腸と言おうと思っていたのに、事実よく腹痛を起していたので、ついそう口から出てしまった。カルテに記入し終えた係員の指図で

内科と示された病室の場所を確めた上、便所に入った。そして、中学の制服と厚司を取りかえて、丁稚小僧になりすました。病室のドアを押して中に入ると、待合室になって居た。診察室には、誰か診察を受けて居るのかすりガラスを透して人影があった。附添らしい母親の聲が、かん高く聞こえ子供に何か言いついて聞かせている話振りだった。やがて何回も首振り人形のように頭を下げ乍ら、四、五才位の女の子の手を引いた母親の顔が現われ、続いて看護婦が、太一の前につかつかと近寄ると、カルテを見て、

「どうぞ」

と入室を促した。太一は、愈々、のっぴき

ならぬ破目となり、非常にみじめな姿で看護婦の後についた。
「裸になって」

と、白い服の医者が言った。太一は、丁稚小僧に対する見下ろした冷たい態度を感じ、制服の方が良かったと思っても見た。太一としては、裸になる前に、自分の厚司姿を見て



欲しかった。丁稚小僧になりました自分をどう医者が思うか、又、冒険をして此処迄やって来た自分が、どんな気持になるかをわざわざに試したかったのに、そっけなく、着物を脱げと言われたのは、小馬鹿にされたようで心中不快であった。太一は仕方なく、なれない手付きを如何にも厚司や前掛を着慣れた者

のように振舞ったつもりで、ズボンだけになりオズオズと医者の前に立った。容態をフンフン尋ねる医者には、今まで経験した腹痛の状態を混ぜて答えた。仮病であるが為に、自分でも、うまくつじ棲の合わせぬ返答になって仮病を感付かれ、怪しまれはしないか、ビクビクしたが、黒いレザーの張った寝台に横になれと言われて、医者も自分の容態を認めて呉れたようでホッとした。その時、太一は、バンドをはずして置いた。運よくば、自分の懇願する場所に手が触れる事を期待したからだ。ズボンの下は、水泳褌をして居た。医者は、太一の気持など察する筈がなく、下腹こそ押したが、太一にとっては、誠に物足りない触診であっけなく終わった。後は、医者の注意を殊勝らしく聞いて病室を出た。払わされた薬代が馬鹿らしく、再び便所で元の中学の制服に着かえて病院を出ると、近くの溝の中に、薬瓶を投げ捨ててしまった。

——ああ、馬鹿な事をした。僕は何故、はつきりと脱腸と言わなかったのだろう。それに、水泳褌をして居たのがまずかった。大胆に医者に見られるようにして置けばよかった——。

——僕はこうしてこう意気地がないんだろ

う。だからいつも損をする。今度は、絶対に脱腸の診察をして貰わなければ——
 帰り途は、せっかく勇を鼓して持ち出した厚司と前垂がのろわしくなり、家へ帰ってうまく気付かれずに済むかどうか心もとなかった。

小学六年の時の校医に脱腸を触診された時の事が蘇って、その時の興奮が忘れられず、太一は自ら求めんとして仮病をつかって診察を受ける事を決意したのであった。

この計画は、第二回目、性病と言う事にしゝやになって実費診療所を訪れたが、附添と一緒に来るように言われ、とり合せて呉れず、太一は、馬鹿を見たような気になって、二度と実行する勇気がなくなってしまった。

二

病院の奥深き一室、静寂にして神聖、全く騒音を放れた別世界、明かるい病室に、整然と医療器具が置かれ、滑るようなリニューム張りの床の上に、白いベッドが一つある。厳肅な気持で診察を待つ一人の美少年。身には一糸もまとわず平然と寝て居る。彼の全身は、力溢れ、清純な血が流れている。ベッドの傍のガラス窓から明かるい日ざしが、柔ら

かくふりそぐ。脱衣籠には、真新しい、厚司と紺の前掛けが脱ぎ捨てられてあり、赤い越中褌が乗っている。少年の体の一部が既に少年とおよそかけはなれた發育を遂げ、これから始まろうとする治療を想像して逞ましい姿を見せている。やがて少年に或る診察と治療が行われるのか、威厳のある老練な院長が優しい看護婦を指揮して、いろいろの医療器具を整えているのが少年に解かる。カチカチと云う金属性の鋭い音も少年にとっては快い響きをもって耳に伝って来る。消毒用の湯が湧いた。次々とベッドの横に金具が並べられた。少年の目には、どれもこれも珍らしい器具ばかりであった。

太一はその少年と自分の位置を置き換えて想像に耽り始めた。

やがて、静かにそして重々しい機械の動く音がして、ベッドはいつの間にか手術台に変わり、両手両足が縛られ、台に固定された。両股が直角以上に拡げられたかと思うと、天井から、円筒型のピカピカした金属性の器具が徐々



に降下して、少年の体………にスッポリとかぶさった。すると、弱い電流が体全体に伝わり、快い境地に少年を陥し入れた。不思議な事に、天井に大きな鏡がはっきりと、その光景を写して居た。少年は、自分の体でもないような、あるような錯覚を覚えその鏡の一点に魅せられまばたきもせず凝視した。よく見ている裡に、それが、自分の特徴をよく現わして居るのに気が付くと、益々幼き胸をいやが上にも高鳴らせた。或る時は、たこの足の如く、或る時はくらげの如く、又或る時は、気味の悪い迄に松の木のように、生きた動物の姿を如実に現わした。二分三分と時間が経

つにつれて、愈々猛り立った体は、今にも皮がさけ、肉が破れ赤い血潮がほと走るのではないかと思われ、生命の危険が迫って来たように見えた。鏡の一方からメスを握った手がせまり、鋭く尖った先端が体に向けられた。少年は、片唾を呑んで見守る裡に、無残にも突き差したメスが、スーッと根元まで、赤い筋を残して引かれた。さけた傷口からは、体の内臓其儘のぐちゃぐちゃした物が覗かれた。少年は何の痛みも感ぜられなかった。まるで魚のはらわたを解剖用具で検べているように思え、予期したものとはあまり違った構造に失望した。

——とりかえしのつかぬ事だ——
頭をかすめた心配も、一瞬、元の形に戻った体を見て安心に変わった。

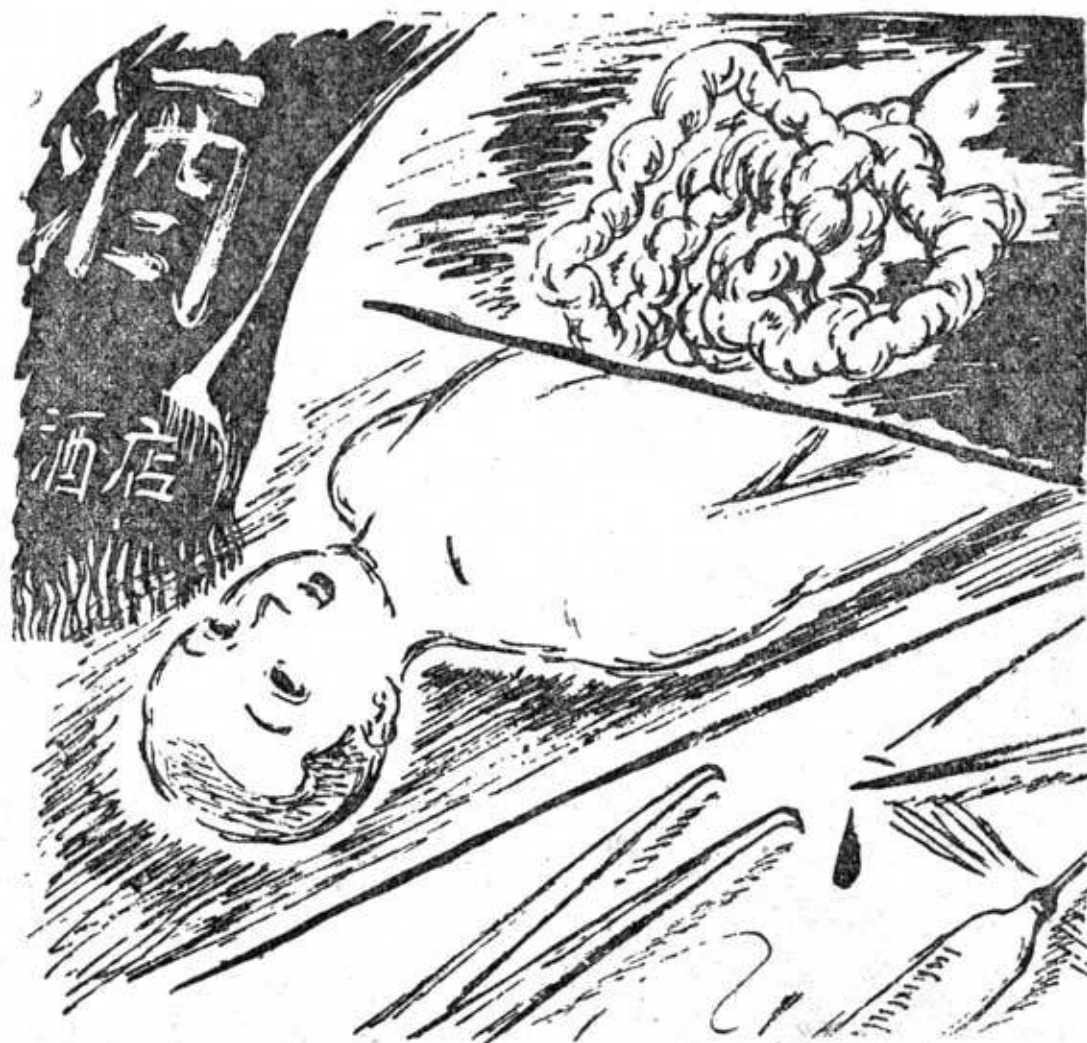
——世の中の少年よ、僕を手本にせよ——
太一の頭の中にはこうした幾つもの偶像があった。最初は極く単純な組立が次第に複雑になり、慎重に、より煽情的に自分を主人公に置いた。然し、一層熱中すると、物語の主人公では満足出来なくなり、たといその一端でも、実際に試みてみなければ承知しなかった。

小学校の時、身体検査で脱腸を触診せられ

た残像が意外に長く印象づけられ、これまで根を引こうとは思わなかった。それに一層拍車をかけたのは、太一が包茎である事実だった。始めて雑誌で見た形態、彼は、一人前ならざる自分の体を知り、一生片輪者として日陰の人間であるのかと思うと、じっとして居れなくなり、四六時中考えてろくろく勉強に手が付かなかった。手術によって容易に整形される事を知ったが果した自分のような年頃の少年が、手術を受けても医者に変に思われやしないかと心配であったし、金もなかった。

両親に訴えるなどんでもない話で、一笑に附されるにきまって居た。

太一は完全に整形する事によって、体が更に發育するに違いないと思った。悶々とした日が過ぎた。勿論、銭湯で見る同年輩でも又一つ二つ上の青年でも、大抵は同様であり、今の年頃としては当然こうだと知りつゝ一度燃え上がった欲望は押さえられず、あまりに



も子供じみた型態がのろわしくなった。

所が、太一をして火に油を注いだものは、新聞広告で見た、真空水治器なる増大具であった。太一は、広告を切抜いて机の抽出し奥深く秘め、時折読みかえしては、求むべきか求むべからざるものかと思案し続けた。価格が、太一の一ヶ月分の小遣いに相当する金額



であるだけに、咽喉から手の出る程欲しくても、容易に決心がつかなかったが、遂に、郵便局から振替で送金した。待ち遠しい十日間が過ぎて届けられた小包を手にした太一はどんなに胸がわくわくした事か知れなかった。その前に説明書を取って実物を知って居たので凡その見当が付いて居たが、簡単なもので少し失望した。が、第一回の操作の素晴らしい実験感は、終生忘れ得ない、力強い希望を与えて呉れた。口径約四糎、長さ約十五六糎の円筒型のガラス製の器具。口径に吸ゴムがはめられるようになって居り、ガラス管の尖端に二つの小さい口が

付いて、一方は、排気ポンプ、一方は吸入ゴム管に連絡するように装置されて居た。操作は、排気ポンプのハンドルを押すと、円筒内の空気が徐々に排され吸入ゴムからスルスルとすべり込むと云う寸法である。

確かに真空水治器は効用があった。回を重ねる毎に、伸長した結果を読む事が出来た。この水治器を手に入れる迄、消耗する事ばかり考えて居たのに、蓄積し乍ら快楽を得る方法を知り、家に帰って秘密な健康法に時を過ごす新鮮な喜びに何か知ら、希望が湧いて来るのであった。太一は、外にあっては、六尺褌を愛用し、内にあっては真空水治器でせつせと精力を培い蓄積して居ると自認して居た。

うっとうしい梅雨が訪れた。太一は、或る晴れた日曜日の夜、散髪屋に行った。十時近くで太一が一人きりであった。その頃、よく顔を剃られている時、体の一部が、辱しい状態になる事があり、行きつけの店を止めて、別の店へ行った。親父は、いなせふうで太一の好む人相ではなかったが、たとえ、辱しい状態になっても、見知らぬ者であるという立場なら、済まされそうな気がした。

電気バリカンの音がしばらく続いて、太一

は体をぐっと寝かされた。思うまい思うまいとすればする程、尚更、忽ちの裡、覆いたくなる状態になり、親父に発見されはしないかと気が気ではなく、うかつにも、禪を緊く締めてこなかったのを後悔した。太一は、気を紛らせようと、かけ放れた事へと回想を廻らせるのであったが、収まりそうになく、夏の白ズボンは、あられもない姿を呈し、どうする術もなかった。この時ばかりは、とりつかれた習慣がのろわしくなり、自分乍ら甚だ情ない少年だと思った。

「君、中学生？」

「ふん」

「何年生や」

「二年生」

「今頃は何んでも辱しい時分やな」

親父は既に気付いているのであろう。太一は親父が、心の中で笑っているのではないかと思つて、早く、顔が終ればよいと、もどかしくてならなかったが、その日ばかりは、いやに馬鹿丁寧に剃られ、遅い気がした。

どうかして強大にすべきと、水治器の使用を頻繁にやる外、又太一は、栄養物による体力増強を思い、当時、宣伝の盛んであった、わかもとや、ネオネオギーなる栄養剤を服用

した。中学二年では、所謂強精剤なるものは廻うのに勇気が要ることと、それ程までの思いきった行動は出来なかった。

この頃、羽太銳次著の性典を手に入れ、幾分読めぬ、理解出来ぬ所もあったが、知識を体し、どんなに胸を躍らせた事であろう。

太一はいつかかつての映画館の一件がふと蘇つて、再びスリルを求めて或る夜、N館に入った。この時は普段着の和服に着かえていた。太一はこの時、相手を誘発させるように後手に組む男の背後に体をびったりとつけた。そして間もなく、その男から、

「外へ出よう」

と耳打ちされて後に続いた。男は太一の体を抱えるようにして公園の暗闇の中へ連れ込んだ。ベンチに白い軽装の人影が見え、赤い煙草の火が点々としていた。人通りの少ない場所を選んだ二人は、ベンチの一つに腰を下ろした。この夜の事が病み付きとなり、毎夜の如く公園のベンチにたたずんで、待ち受けた。帰途、今宵限り強く思い乍らも、翌日夕飯が済むと、落着かなく、公園に近いのを幸いにして、足はその方へ向つてしまうのであった。太一は、その後、一風呂浴びれば、汚れた体や心がすっかり洗われてさっぱりし

た。そして何事もなかったように家に帰るのが日課のようになってしまった。或る晩などは、太一より年少の少年を発見し、この少年をスタンドの一隅へ連れて行ったが、少年は怒ったようにすくと立って行ってしまったので、まるで自分の姿を見せつけられたような気がした。又、或る時は、家から持ち出した厚司と紺の前掛を着けて、

——〇〇サックを下さい——

と鉛筆書きした紙片を持って煙草屋の前に立った。早鐘のように打つ胸を押さえて、小さい箱を手にした時の興奮は忘れる事の出来ないものであった。紙包みの中にあった白いゴム製品を手にして、ベンチの横の公衆便所の薄暗い灯のもとで眺めたとき、奇妙な形がひどく太一の心をそゝった。

丁稚小僧の厚司と前掛、禪、柔道具、水治器、映画館、夜の公園と、身辺益々多忙を極めたが、中学二年の学業は、大した支障もなく続けられ、学校でも、近所でも、真面目な生徒として通っていた。

(未完)

次号は——

昆布と少年

あるマゾヒストの手帖から

第八十五 若いマゾヒストの告白

本誌二十九年十二月号春木俊野氏の「マゾ・スクラップ帳」は、
 こういふ熱心な同好者の存在を知り得たことで嬉しいばかりでな
 く、いわゆるカストリ雑誌にも多くの知られざるマゾヒズム作
 品があったことを教えられた点で、面白く読んだ一文だった。
 それで思うのだが、泡沫のように消えてしまったこの種雑誌に
 掲載された諸作品は結局後世の人にとっては全然資料とならぬ
 ことになってしまふのは本当に惜しい。勿論大部分は愚にもつ
 かぬ駄文だったが、マゾヒズムものだけは少くとも稀少価値が
 あった筈。これらを全文の再録とまではできぬまでも、梗概や
 要部抜萃によって、面目の伝えられる程度にして、本誌に紹介
 されたらどうであろうか。原作者名さえ明らかにすれば、再録
 により少しでも多くの人に知られることではあり、本誌によっ
 て図書館で後世の人の利用も期し得られることになるのだから

沼

正

三

ら、原作者も不足はなからうと思うのである。ハイライト誌、スリ
 ル誌などの作品について春木氏にお願いしたいし、その他にもこの
 種雑誌の余り知られぬマゾヒズム作品についての本誌への紹介を一
 般に提唱したいと思う。



隗より始めよ、というから本項は猶奇誌から引用する。カストリ雑誌の先駆的存在としては「赤と黒」と「猶奇」とをあげるべきだろう。後者はその第二号に「H大佐夫人」という北川千代三の作品を載せて発禁となり、却って名を売った（因に、この作品を知らぬ人のために書いておくが、年増女とうぶな少年の関係を扱っているのでもマゾヒスティックな状況設定ができるのに、作者が好まぬためか少しもそんな場面がなく夫が風呂場で「くらげのように」夫人にクニリングスするのを少年が覗き見る場面がアブノーマルといえる位のもの。マゾヒストとして特に読む必要はない）。

その猶奇誌の三号に「若いマゾヒストの告白」と題して載っていた匿名の文章を本項で紹介したい。私はこの種雑誌は大抵は目を通すだけでメモもスクラップもしてないので、内容の記憶あるものも正確には引用し得ぬが多い（後に引用したいと思っている江戸城大奥地下の人間競馬を扱った作品など）が、この「告白」だけは、資料的意味から切抜いて置いたので、全文を紹介することにしよう。

x x x

是の告白書は大分以前に寄送されたもので、当人健在なれば今頃は中年の働き盛りであるが、終戦混迷の現代には、此種患者は寧ろ多くなつて居ようと思われる。彼は年少の頃から狂的なマゾヒストで、若い美人の痰、唾、鼻汁、経血、糞尿などに憧憬して、貪り呑むことを欲求し、遂には自身を颯り斬り殺して、生き作りに料理し、うまそうな肉片を刺身に、三ぱい酢に、なますに、また鋤焼にして、貴婦人や美しい姫君達の口に啖わりたい



という極端な妄想に胸の血を湧かすのである。彼は其頃某派出所看護婦会の奴隷に甘んじて、便所の掃除や湯文字

の洗濯に快感をそえられる。会主を初め女世帯の玩弄物となって虐使され、惨酷な凌辱に遭うほど喜んで性慾を満足させて居るのだ。殊に彼女等が代る代る排泄するとき尿をひっかけられて、その余滴を舐めるときは快感は何とも云えぬと告白する。

彼が冒険の第一歩は、母と二人の侍女暮しの某一流女優の便所へ夜中掃除口から忍び込んで、彼女等の実演振り（註。これを剽窃したし誌掲載の文では、この実演振り、というのを女子同性愛行為と解していたが、誤りで、これは勿論排泄行為を指しているのである。）に陶醉した。夜更を待って這出し、わざと音を立てたのはねおきた彼女等のために、腰紐で縛られるように仕向けた。そして存分に私刑して呉れと願い上げると、女優は持前の芝居気を出して、母親の不在を幸いに、彼を丸裸体にして、馬になれ、座布団になれ、お厠になれ（註。最近F K誌に出た剽窃文では、このお厠になれと単に顔の上に跨って用便の真似をするだけのように解しているが、忠実に読めば、むしろ実際にお厠として使用したもののよう解される。お厠は虎子おまるの関西語である。）と面白がって、この柔順な侵入者を廻り廻し、最後に短刀で十六ヶ所弄り斬りにされた。苦痛ははげしかったが、異常な性欲がそれを抹殺して、嬉しさに堪えられなかった。五六時間も美人連に玩弄され、女王様から五十両の治療費を頂戴して、いそいそと性欲の満足に歓喜して帰宅したというのだ。

それに味を占めた彼は、やゝ大胆になり、往来で実演したいと思った。或晩人通りのない淋しい場所で、市街自動車の女車掌に出会った。此のときとばかり三人の女に突き当り、痰を吐きかけ、髪を撚ってやったので、すっかり怒った彼女等は、三人を力に組付いて

引き倒し、半時間も袋叩きにし、靴で蹴りつけ、散々に責めさいなんだ上、面白半分は傍の立木へ縛りつけ、三女は代り番に、万年筆で自分の年令の数だけ、腕や腿にチクチク突立て、丁度六十五ヶ所刺青を入れて呉れた。さらに茶目気を出した彼女等は、あられもなやスカートを捲り、ズロースを脱して、温いおしっこを顔上へ放出し、彼の口中へ飛沫をあげて浸入するのを面白がった。

先日のこと、会長の不在に非番の看護婦三人が、縫合の実習をするから試験台になれとの仰せ、畏って候と裸体になる。手足を縛って仰向けに転がされ、一人は顔の上に跨り、（七字削除）押し当てられて息が苦しい。一人は脚部に腰掛け、他の一人はメスで彼の腿を一寸ぐらい十文字に斬り、笑いながら是れが試し斬り、次は縫合の実習だとさゝやき、外科用の絲針でチクチク工作すること三時間云うに忍びぬほど数々に弄られたが彼は唯々諾々自由になった。此んな調子で随分ヒドイ目に遭わされながら僅かに欲望を満足せしめている。丸で嘘のような事実で、自分ながら因果な生れつきと呆れつゝも、どうにも仕様がないのである。このまゝ昂進すれば、美しい毒婦さまにでも、生命を捧げて往生するであろう。またそれを渴望しているというのだから物凄。此の療法あれば御教示願いたい。自分のようなマゾヒストの福音にもなりますからというのである。

× × ×
 以上で全文である。責任者の認証のない匿名報告だから、今迄紹介した性科学書所収の「手紙」と異り、全幅的に事実報告として信用するわけには行かない。女優のうちではお厠にされる、女車掌三人の尿も口中に注がれる、看護婦達のも「代る代る排泄するとき」



というのだから、全員の尿の味を知っているような口吻だ。然し男に平気で尿を引掛ける女性がこんなにいるわけはないから、かりに事実報告記としても誇張のあることは明らかである。むしろマゾヒストの空想を述べたものと見た方がよい。緊縛、女上位、尿愛好とお膳立ては揃っている。

然し、私が特にこれを切抜いておいたのはもっと別な理由からだ。説明の便宜上、これを剽窃した文章と比較して見よう。文中に註記した外にも、これの剽窃文は戦後よく見受けた。(本誌二十七年七月号に染田玄氏が紹介された葉村宏君の「色情倒錯者の手紙」もその一つである。その続きが二十八年二月号の「痴愚者の手紙」で、これによると両者間に文通がある。染田氏は編集関係の方だから、葉村君の投稿のあったことは疑いがない。)旧号を所持の方はついて見られたい。

一読して剽窃は明らかであるが、変改が加えられている。女優さんは女中と二人暮しになっている。看護婦会の代りに婦人科医院に勤めている。女車掌との経験は省略され、その代り医院の主任女医に奉仕している(葉村君は彼女が便所にゆく時お伴をして、さて排泄物を飲食しているというのだ)。更に「痴愚者の手紙」では、某会社社長邸の掃除夫として美しい奥様に仕える。……これから分るのは、葉村君は、女主人としての一人の貴婦人に対する奉仕を主として欲望する人だ、ということで、これはマゾヒストの常道である。

ところが、本項の文では、女車掌達、看護婦達と常に女群によって暴行されている。だから女優邸での女優も女群の一人として見た方がよい。マゾヒズム小説では一人の女主人を尊重するため、女群

による暴行のテーマは割合珍しい。私はここにこの報告の資料的価値を認めたのである。

更に云えば、女群が常に三人で構成されていることも偶然ではあるまい。筆者自身は意識していないかも知れないが、フロイトによれば無意識においては、三は男性を象徴する。だからこゝにマゾヒスト特有の女主人への男性付与の心理（私が妻のストラックスを喜ぶのもその一例である。）の隠微な表現を見出しても恐らく誤りでない。女優の短刀、女車掌の万年筆、看護婦のメスと、いつも尖ったものを女に持たせているのは、これらをペニスと同一視する男性付与である。放出する尿流もまたペニスの象徴と見得る。この文の筆者は二重三重に女を男にしようとする無意識的努力を重ねているのである。

最後に、「湯文字」とか「市街自動車」とかいう文中の用語の古さから見ると、この文が戦前何かの雑誌に載っていて、それが戦後の猟奇誌に転載されたものとも疑えることを指摘しておく。もし戦前のより古い出典の御存じの方あらば御教示願いたい。

第八十六 ある涙汁讃歌をめぐって

四つに畳まれた手巾は、どす黒い板のように濡れて癒着くっいて、中を開けると、鼻感冒かぜの特有な臭気が発散した。水涙が滲み透して、くちやくちやになった冷めたい布を、（中略）、犬のようにぺろぺろと舐め始めた。

……これが涙の味なんだ。何だかむっとした生臭い匂を舐めるようで、淡い、塩辛い味が、舌の先に残るばかりだ。しかし不思議に辛辣な、怪しからぬ程面白いことを、己は見付け出したもの

だ。人間の歓楽世界の裏面に、こんな秘密な、奇妙な樂園が潜んで居るんだ。……彼は口中に溜る唾液を、思い切って滾々と飲み下した。一種掻き撈られるような快感が、煙草の酔の如く脳味噌に浸潤して、ハッと気狂いの谷底へ、突き落されるような恐怖に追い立てられつゝ、夢中になって、唯一生懸命ペラペラと舐める。

御存じの方も多からうが、谷崎の名作「悪魔」の一節で、学生佐伯が令嬢照子の涙をかんだ汚い手巾を、「己は斯うやってだんだん照子に踏み躪られて行くのだ」と暗澹とした物思いに耽りつゝ、「水涙の糟も残らず綺麗に」舐めてしまうという条りである。（批評家は遠慮して居けれども、この描写が谷崎自身の体験に基くことは、私はマゾヒストとして、殊に自ら実践した一人として、断言してよい。）

涙汁の魅力を書いた作品は、東西の文学にも甚だ稀なように思える。次に示すものは、この谷崎の文章に比較するに足るものではないが、短いなりに二脚韻の詩形を備えている点で、一寸珍らしいと思われるので、紹介しよう。英文は直接読める方が多いだろうから訳文と共に特に原文をも併せ示しておく。

おお、甘く美しく可愛らしい鼻よ、私をこんなにもひきつける鼻よ。

おお、私がとても好い香のするバラの花でさえあったなら、私の芳香をあなたに嗅いで戴けたでしょうに。

おお、その鼻を甘い蜜で一杯にして下さい、私はそれをすっきり吸いとりましょうから。

私にはそれが最大の御馳走です、それこそまことの饗宴です。いとしいあなたのお鼻は、何と美味し^{おい}そうに、何と滋養^{えい}たっぷりに見えることでしょう。

それは苺クリームよりもずっと風味があるでしょう。

Oh sweet and pretty little nose, so charming unto me,

Oh, were I but the sweetest rose, I'd give my scent to thee.

Oh, make it full with honey sweet, that I may suck it all;

I'd would be for me the greatest treat, a real festival.
How sweet and how nutritious your darlig nose does seem.

It would be more delicious, than strawberries and cream.

これは「病的性心理」の「フェチズム」の章に、珍らしい鼻フェチズムの例としてあげられているものだ。エビングの説明によると、英国から直接彼の所へ送られたもので、始めから、こういう断片又は未完成作品として送られて来たらしい。原作者名もあげていない。

ところでこの数行にはマゾヒズムを直接に感ぜさせるものはない。だから、鼻及び澳汁に対する異常感覚を除いては、この作者はノーマルであったとする見方も勿論可能である。

然しズンプはこれを疑った。澳汁は汚いものである。特定の人の澳汁を口にすることはその人への卑下感と平行せずには起り得ない筈である。とすれば、この作者はマゾヒストではなからうか。この詩はマゾヒストが女主人の身体の各部分について作った讃歌の一節なのではあるまいか。それにしても何故これは断片のまゝエビングの所に送られて来たのか。

ズンプが「マゾヒストの研究」で語るところによると、彼はエビングから、送主が英国のミセス・Lという婦人であることを聞き、直接英国に渡って彼女に面会し、この詩の成立の由来を確かめたのである。それによると彼の推測は当り、半ば外れた。作者はたしかにマゾヒストであった。然しこの詩は全身を讀めた詩の一部ではなく初めからこれだけしかなかったのだ。これはある東洋人の留学生が慣れぬ異国語の文藻を傾けてやと作った数行なのであった。この韻文の稚拙さ、素人臭い語の重複なども、それで納得が行く。

ズンプの報告の要旨は次のとおりである。――

L夫人は当時三十才位の未亡人であった。食うに困らぬ遺産はあったが、亡夫の書齋だった部屋を外国からの留学生に貸すことにしていた。Mという東洋人が借りたことがあった。三十五六才、国では大学教授で、妻を残して来ているということで、礼儀正しく、金払いよく、申分のない下宿人であった。

さてL夫人は蓄膿症で、一日に何度となく黄色い膿の混った澳汁をかまねばならなかった。手巾を何枚も用意していて、一度かむと居間の籠に入れる、それを女中が毎朝下げて洗う。ところが何時の間にか、手巾の枚数が不足してしまったので、夫人は女中がルーズなのだと叱った。

その後暫らくして、女中が夫人に、M氏が手巾泥棒なのだと報告した。無実で叱られたのが口惜しいので、悪いと思つたが、掃除の時押入の中から彼の手筐を空けて見たら、失くした三枚が入っていたというのだ。夫人もいって調べてみると、或程三枚、それも漬汁をかんだ汚いのを洗わぬまゝ置いたらしく黄色に変色している。夫人には何のことか見当がつかなかった。盗む値打ちのあるものではない。彼女が好きで（夫人は自分の容姿には自信があつた）彼女の身に付けたものが欲しいというなら、汚い手巾よりは適當なものがありそうなものだ。何の必要があつて漬汁のついた手巾を選んだのか？

無理もないことだが、彼女は呪咀のためであらうと考えた。呪咀のためには身体から出たものを用いた方がよいのだ。何か東洋の魔法ではないのか？ だが一体何の理由があつて、自分を呪うのか？ それが分らぬ中はこの氣持の悪い下宿人を断ろうにも理由がない。手巾泥棒の件を云い出せば、留守中に勝手に手筐を開けたことで、逆に非難されかねない。

そこで彼女は、Mが手巾を盗む現場を掴めることにし、女中に口止して、積極的に機会を作り出した。食卓で鼻をかんだ手巾を床に落し、食後カーテンの蔭で見張っていて、Mが果して戻つて来てそれをそうと拾い上げる瞬間、姿を現した。そして警察を呼んでMの部屋を搜索させると脅かすと、Mはひとたまりもなく降参して、彼女を自分の部屋に案内し、今迄の自分の犯行を自白し、警察を呼ぶことは勘弁してくれと哀願した。

何のための呪咀であるのかという問に対し、彼は多大の躊躇の後、彼の行為が呪咀どころか、彼女への最も深い愛情に由来するもの

のだと告白した。彼女を愛する余り、その手巾を盗み、それについた漬汁を舐め取つたというのだ。黄色に変色した三枚の手巾は、成程漬汁が洗濯以外の方法で取除かれた様子を示していた。

事の意外に呆れ、彼の告白を信じようとしないう彼女に、彼は更に数行の詩句を示した。彼が彼女の鼻を讃えて作つた未完成の詩というものであつた。その中で彼女の漬汁は美味しい蜂蜜や苺クリームに喩えられていた。然しこれによって彼女を説得して、彼が警察の厄介になるべき泥棒ではないのだということを飲み込ますためには、Mはその詩が彼の本心から出たものであるということを、実行によつて示さねばならなかつた。

M夫人は即日この下宿人を追出したが、彼を警察に引渡すことはしなかつた。彼の手から没収したかの詩篇を後に彼女はクラフト・エビング教授に一資料として寄贈したのであつた。

x

x

x

このズンプの報告は多くの示唆に富む。

私はこの東洋人というのを日本人と考える。エビングの生きていた十九世紀の後半期は、清朝支那はまだ事大思想揺がず、留学生を送らなかつたが、明治政府は続々優秀人士を渡欧留学させていた。だから黄色の東洋人留学生といえば日本人に違いない。そして当時の日本の國勢を考えると、留学生の中に白人への劣等感からする一種のマゾヒズムに陥つたものがあつたとしても不思議はない。

その日本人がこの詩を作つたというのがまた面白い。幕末攘夷思想の下では、白人の鼻は天狗に比せられた、その鼻は高過ぎたのだ。然るに一度後進國の劣等感から万事の標準を先進西欧諸國に求めるようになつて見ると、今度は日本人の鼻が低過ぎるように考えられ

て来る。白人への劣等感が、恰好のよい隆い鼻への醜い低い鼻の劣等感として表現されて来る。ここにこの珍らしい鼻の讃歌が生れたわけなのだろう。

エビングはこれを鼻フェチズムの例としてあげているのだが、右のような成立の由来を知ると、これはむしろ、マゾヒスト詩に分類すべきものである。女主人の鼻（ここではその隆さよりも恰好の良さが pretty little の語で強調されている）に対する劣等感と、渾汁に対するコブログニクな憧憬が表現されているのである。

ズンプの報告によると、このM氏はL夫人の疑を釈くために、詩の文句が本心であることを実行によって示さねばならなかったという。この光景は私を甚だ興奮させる――。

Mの個室。一つきりない椅子には美しいL夫人が傲然と足を組んで掛けている。その前の床にMが膝を揃えて両手について畏まっている。詩を記した紙片を握って彼女は嘲笑する。

「こんな下手くそな詩で妾をごまかそうっての？」

「……………」

「ひとを呪う以上用心深くする筈だわ。発覚した時の用心にこんな詩を作ったに違いないわ。本心なものですか？」

「マダム、誓って本心なのです、神かけて」

「なら、この通りやれる？ 本心だというならやれる筈だわね」

「……………」

「やっぱり、嘘なのね」

「マダム……………」

何の、夫人の疑はとくに釈けているのだ。自分がこの男の変態的な情熱の対象になったことは、もうこの詩を見た時からよく分っ

ていた。愛せられたということは彼女の自尊心をくすぐった。しかしこの黄色い顔の小男の変態的な愛の告白は、彼女に正常な愛の反応を惹き起さなかった。自分の前に土下座して謝まる有色人種の姿を見るのが、彼女の中に眠っていた奴隷所有者の意識を喚び覚したのでもあったろうか。とにかくこの留学生の弱点を握っていることの意味を彼女は理解した。警察に訴えられることを彼が何より恐れていること、それを免れるためには、どんなことでもするだろうことを彼女は知った。そして一方に彼の奇妙な愛情の表現が果して実現しうるかどうか、それが彼女の魅力のテストになるのだという内心の声を聞いた。羞恥心はそのテストへの欲望の前にかき消された。Mへの軽蔑と嫌悪が化して膿汁となって鼻腔に満ちている、それを詩の文句の通りにMに口ずから吸わせようというのだ。Mの本心のテストにかこつけて、実は彼女の魅力をテストするために。Mはそのテストのための滑稽な道具にされるのだ。

夫人の侮辱的な意図を知らぬMは本気である。身の証しを立てるためには、彼女の要求に応じて渾汁を吸うしかない。警察に連絡されてすべての地位を失うよりは、彼女の前に自己の変態性を表白して軽蔑される方がましである。決心した彼は進み寄って彼女の横に跪き、顔を彼女の顔へと近づける。接吻？ だが彼女の唇は固く閉じられたまゝだ。彼の口が彼女の鼻の下にさしあてられ、下唇が鼻の孔を蔽う。可哀そうに、彼は慄えている。

彼女は指で片鼻宛押えて、強く渾汁をかんだ。彼は見るにそれを啜り出し吸い取って飲み込んだ。そして舌を伸して鼻の孔の縁を拭いた。彼女はもう軽蔑を隠し切れぬ口調で、眉をひそめつつ、

「どう？ 妾の蜂蜜の味は」

「はい……」彼は昂奮のあまり答えることもできない。
 「どうやら、呪咀ではなかったらしいわね、それは分ったわ。それ
 と日本人が妙なものを珍重するってことも……」

「マダム、私は……」

「あんた、とても上手にやってのけたけれど、初めて
 なの？」

「勿論、こんなことは今迄に……」

「これからもやる気あって？」

「……」

「もう妾の蜂蜜が嫌になったの？」

「いえ、これからも喜んで致します」

「じゃつまり、あんたは妾が漢汁をかむ手巾になりた
 いわけね」

「はい……」

「だけどお生憎と、妾は黄色の手巾は嫌いな。漢汁
 かんてから洗ったって白くならないから、いつまでも
 漢汁がくっついていて見たいでね。この手筐の中の三
 枚見たいに」

「……」

「分って？ 折角手巾になりたいってお望みだけど、
 妾は黄色の手巾は使い捨てするのよ。あんたはもう一
 度漢汁をかんで汚くなった手布だから、妾は二度と使
 いたくないの。すぐこのうちを出て行って頂戴！」

「マダム、私は……」

「あんたは妾の手巾よ。自分からそう望んだじゃない

K.S.



の？ それを漢汁かんで妾が捨てたからって、手巾の方から不足が
 云えて？」

「……」
「この詩は、珍らしい手巾を使った記念に、妾が貰ったといたげるわ」

茫然と跪いたまゝの日本人留学生M氏の前から、驕慢な美女は立ち去っていった。彼の耳には侮辱を極めた彼女の捨てぜりふの快い響が残り、彼の舌には、彼女の蜂蜜の甘美な味わいが永久に忘れられぬものとして残っていたのだが……

附記第一。鼻フェチシズムについては私は興味がないので、今後手帖で取上げるつもりもないが、本文のついでに一寸言及しておく。「病的性心理」にはペニスを挿入できる位大きな鼻孔をもった女性に異常な執心を感じた男の症例が出ているが、外には本項の詩をあげている丈でクラフト・エビングは鼻フェチシズムは極めて稀であるとしており以来性学者の定説になっている。ヒルシュフェルトは、極めて稀とはいっていないが「性学」において、鼻フェチシズムが眼フェチシズムに比して稀であり、余り拡がっていないことを断じている。ところが本誌読者諸君には明らかなように、日本人には鼻フェチシズムが少くない。(尤も昨年八月号春山唯一氏の言のように、ハイヒールに次いで鼻のフェチシズムが多いといえるかどうかは甚だ疑わしい。殊に、それが西洋に於て然りとする氏の説は、右のように、全く誤りである。)この相異は、やはり、日本人が現在文明国民中での低鼻種族に属すること、そして吾々に立派な顔、美しい顔の必須要件として鼻の隆さを要求する習俗があることに帰因すると見なければならぬ。——勿論、鼻フェチシズムが隆い鼻だけを尊重するのではなく、一般的に日本人には

鼻に対する関心がコンプレックスとなり易いということを描している。直接の現象としては、例えば鼻孔に対する執着は女陰に対するものの転位と見るのが当然である。——鼻については外にも語るべきことは多々ある。男の鼻で一物が判り、女の口で裂目が判るという。もっと詳しく、鼻の三倍があれの長さ、であり、女の脚の間に口と同じ大いさのものあり、である。パーソンは千一夜物語中の佻儻譚の註で、これらの俚言を経験に基いて肯定している。然しそういう鼻の大いさとか、また鼻の形とかだけでなく、嗅覚にまで考察を進めなければ本当でない。ここではゼーレンフロイトが鼻フェチシズムといわれるものの中には、本来それと区別せられるべき匂香フェチシズムに属するもののあることを指摘している(性科学雑誌十八巻五号「鼻と性帯域との相関について」)ことを紹介しておくに止める。

附記第二本項で引いたズンプ(Ernst Ebdendritt von Sumpf)は殆んど知られていないので、もう少し述べておく。彼は自身マゾヒストでもあったマゾヒズム研究家で、「マゾヒズム空想の体系」及び「マゾヒストの研究」の二書を残した。いずれもマゾヒストやサディスティンの手記を蒐集したものだが、後者では、エビングやプロッホの著書にある著名症例について、その患者の日記や書簡を入手して紹介しているので、原著者が公開を憚って省略した部分を調べるのには便利な書物である。二書共私家版しか出ていないし、ズンプ自身が専門学者でなくアマチュアであり、又手記の入手経路が記されていないのが多いというような理由から、信憑性に疑問を懐く向きが多く、アカデミーの学者には従来一顧もされていないが、内容が内容だから、手記の入手経路など

示せるわけではないので、私は多分にズンプに同情的に見ている。少くともマゾヒストの空想を示している点で、資料として価値あることは確かである。以前抜萃しておいたメモがあるのでこれからも適宜紹介したいと思う。

第八十七 月 光

近頃大いに私を喜ばせた作品を一つ紹介しよう。直木賞を受けた有馬頼義氏の小説集「終身未決囚」の中に収められた「月光」という一篇である。

深川木場丹生家の令嬢阿也子は保尊中尉に強姦され、結局彼の妻として北満に赴く。中尉は大西という当番兵に身の廻りを世話させていたのだが、そこへ阿也子を迎える。中尉は阿也子に家事をさせない、暖房の石炭焚き、寒い戸外への買出し、食事の支度、掃除、洗濯……一切大西にさせる。大西の仕事が今迄の二倍になっただけで阿也子のする仕事は何もない。普通の主婦の仕事を期待して来た阿也子は始め驚くが、まもなく大西の便利さに慣れて、下着の洗濯まで大西にさせ、自分はペチカで暖かい部屋で本をよんだりうたたねしたりして暮すようになる。

保尊中尉はすごいサディストで、阿也子のとめるのもきかずよく大西を殴る。大西がひそかに阿也子を恋い慕っているのを知ると、積極的に苦しめるため、阿也子の肌を風呂場で洗わせたり、二人で寝てる所へ呼んで阿也子の肩を揉ませたりする。さなくとも大西のいる三帖からは夫婦の夜の営みは全部聞える、聞かせて保尊は楽しむのだ。阿也子も次第に背中を流させることになれ、三帖の大西を気にせずに夜を過せるようになり、やがて彼女自身大西を苦しめて

いることに快感を覚え始める。

終戦になる。保尊は阿也子を先に内地に帰らせようとし、大西を護衛に附ける。最後の営みをしながら彼は阿也子に向って「この女を俺と思え」ときびしく命令する。二人は苦心して帰国するが、その間表向きは夫婦となり、いくらでも機会はあるのに、大西は確く主従の礼儀を守り、決して阿也子の肉体に触れようとしない。

やっと帰国したが阿也子の実家は全滅しているので、二人は大西の家にゆく。ところが大西の妻は大西と阿也子の仲を邪推し、阿也子に対し大西同様の主従の礼をとることを拒む。大西は妻の松枝よりも阿也子を大切とし、離れに阿也子を案内すると、自分も離れの三帖に寝て、官舎の時と同様に阿也子の身の廻り一切を引受けてかしく始める。阿也子は大西の家に来ると共に主従観念を捨てようとしていたので、大西が妻と争ってまで自分に仕えてくれるのを気の毒に思うが、彼のそういう忠義が実は保尊の暴力への恐怖に基くことを知ると共に、彼を軽蔑し、もう一度上官の妻として女主人の座に坐りなす。彼女は水一ついじらずすべて大西にさせる。

その中に保尊が復員して来る。彼も離れに暮す二人を見て関係があると思ひ込む。その復讐なのか大西の妻松枝は保尊の為に妊娠させらる。……がやがて保尊と松枝は心中し、阿也子は大西と共に母屋に引き移った。

九月の、月の良い夜だ。大西に風呂を焚てさせて阿也子は入浴した。以下原文に語らせよう。

阿也子は大西を呼んだ。大西は阿也子が黙って背を向けると、おずおずと流しへおりて阿也子の背中を流した。しかし大西に流させているうちに、^{はら}肚が立って来た。何故だか分らなかった。阿



也子は突然立上って大西の方を向くと、右手で力まかせに大西を殴った。大西は歪んだような顔になり、それから黙って出ていった……。

阿也子が暫らくして座敷へ出て行くと、月のさしている縁側に大西がうずくまっていた。阿也子は少し離れたところに黙って坐った。ながい時間のあとで、阿也子は明るい空を眺めながら言った。

「大西とながい間一緒に暮していると、誰でもみんな保尊のようになるのよ」(註、二字削る)
 言い終ってしばらくたってから、阿也子が大西の方を見ると、大西はあわてて泣くような顔で笑って見せた。

(終)

マゾヒストとして私はこの作品を高く評価する。類似の男女関係を男の側から描いたものは、ある意味では食傷する位多いのであるが、このようにサディズムに開眼してゆく女性の心理を主としたものは、それだけで稀少価値がある。奴隷小説ではなく、女主人小説なのである。はじめは保尊が大西を殴るのを止めた阿也子が、遂に自分の手で大西を殴るまで——私達は「残虐な女性」に引用された、はじめ黒人奴隷への鞭の使用を非難していた白人女性が自ら鞭を揮い出すに至るまでの変化の現代日本版をここに見出すことができる。

阿也子は大西を何故殴ったか。答えは必ずしも容易でない。

阿也子も大西も長い間禁欲生活を送って来た。

阿也子の肉体は既に女の喜びを知っている。若い男を側にしてそれが疼かなかつた筈がない。たゞ頑固な大西の主従觀念が障壁となつて求めても拒まれるのを知っていたからこそ彼女は敢て求めなかつたのだ。今保尊と松枝が死んで二人は共に解放された。母屋に移つた。二人きりになった。今こそ男性の力強い抱擁を期待できる。その切かけを作るために裸かになつて大西をよんだ……然るに何事ぞ男は依然として遠慮深く背中を流すのみ。女の全身が何を求めているかを察しようとしな。その氣の利かなさに腹が立って、思わず殴りつけた。——これが一つの解釈であらう。

然し私はもう少し別の解釈をとっている。大西を呪縛して阿也子の奴隷としていたのは、保尊中尉の「この女を俺と思え」という命令であり、大西の保尊に対する恐怖であつた。今保尊は死んだ。呪縛は解けた筈だ。母屋での新しい生活においては大西が主人の座をとり返すことが予想された。

然し阿也子は既に大西の人格を知っている。保尊の暴力を恐れて卑屈な犬となる大西を軽蔑し、彼が自分の夫とするに足らぬ男であることを知っている。彼女の肉体は男性を求めたかも知れぬが、彼女は大西を夫としようとは思わなかつた。然し行くに所なき彼女は、ずるずるに大西の家に止まり、いつか大西を主人の座に座らせてしまふかも知れない。それが彼女には堪え難かつた。大西を今迄通り奴隷の地位に置いておく必要があつた。「保尊が死んでも、お前の地位は變つていないのだよ」と知らせるために、「この女を俺と思え」との保尊の權威を借りるのではなく、改めて女主人としての彼女自身の權威を確立するために、彼女は彼を呼んで三助をさせ、彼を殴つた、そして「誰でも大西に対しては保尊見たいになる」とい

うことばでそれを宣言した……私はこんな風に解釈する。

「腹が立った。何故だか分らなかつた」というのが彼女の意識だつたとしても、無意識の叡知は常に万全の行動をとらせるものだ。

月光の夜はこうして母屋に移つた二人の初夜となつたであらう。しかし果してどのような初夜だつたか。小説の紹介からだんだん脱線してしまふけれども、もう少し考えてみよう。

私は阿也子が失望した公算が大きいと思う。つまり大西は心理的に不能に陥っていたのではないかと思う。帰国途上以来の長い同棲に一度も過ちを起さなかつたというのは、それだけで既に大西が不能に陥っていたことの証拠である。彼がオナニーで性欲を処理し売春婦を買おうとしなかつたというのもそれを裏付ける。妻の松枝に対する恐怖が婚外性交一般への不能を惹起した位なのだから、保尊中尉への絶大な恐怖が阿也子に対しての完全な心理的不能を招来したと見ることは少しも不自然でない。この二つの不能原因は保尊と松枝の心中によって消滅したわけだ。だからもし阿也子がおとなしくしていれば、彼は彼女に対する性能力を恢復し得たかも知れなかつた。ところが、彼女は彼をもう一度奴隷の地位に追い戻し、女主人の座を確保した。欲情を懷いた不運な奴隷のパロスが女主人の鞭の一撃で萎縮するように、大西のそれもまた阿也子の一撃で小さくなくなつてしまつたのではなかつたらうか。

更に考えると、大西はもう阿也子に対しては正常の性欲を感じなくなつていたのかも知れない。保尊は阿也子と寝ながら、その場は大西を呼んで阿也子の肩を揉ませた。さなくとも三帖の大西は彼女が他の男に抱かれるのを毎晩見聞させられていた。これは、愛する

女性に対して自ら性交せんとする欲望を感じず、彼女が他の男に抱かれるのを知る時にのみ性的興奮を覚えるような、一種のマゾヒストに大西を訓練したに等しいのだ。保尊が大西を阿也子の護衛につけて躊躇しなかったのは、大西がそういう安全無比な男になっていくことを知っていたからかも知れない。(又もしそうすると松枝を保尊の所にやったのは或いは大西自身の希望であったのかも知れない)。

とにかくこのように大西が阿也子を失望させたとしたら、その後のことは殆んど予想もつかない。彼女は身の廻りを世話する奴隷として大西を必要とし、一方彼女の女を満足させるもう一人の男性をも必要とする。後日譚は更に一篇の小説を要求しよう。

然しこれは思い過して、大西は阿也子を充分満足させたかも知れない。その場合勿論夫として能動的にその性欲を処理したのでなく、奴隷として愛情的に女主人の性欲の処理に奉仕させられたのだ。春琴と佐助のように肉体は結ばれても夫婦ではなく主従に止まったであろう。この場合には後日譚は必要ない。私達は春琴抄を考えればよい。炊事掃除洗濯ばかりでなく、入浴や上廁の時の世話まで見るような完全な奴隷として大西が恐らく生涯阿也子に侍ることになるであろう。

マゾヒストとしてこの小説からはまだまだ

奇譚クラブとKK通信の旧号在庫

文献的価値を高価に標価されております本誌を、何卒欠号のないよう皆さまの本箱へきれいにお揃え下さい。

本誌のバックナンバーはお買い洩れの方々の為に、左記の通り在庫いたしておりますから、御入用の方は直接発行所へ御申込み下さい。尚、旧号の総目次は、新年号並に昨年十月特大号誌上に四頁に亘って掲載しております。内容の豊富を誇る本誌は、一回の休刊もなく、毎月確実に発行されておりますから、是非お揃え下さるよう御申込みをお待ちいたします。

○奇譚クラブ○

昭和二十七年、十月号、十一月号

お申込みは発行所へ、御送金次第嚴重包装の上急送します

○KK通信○

(一部送共九十円) 十二月号は売切九月号以前も売切、昭和二十八年新年号より昭和二十九年九月号まで、各月号共在庫(一部送共百円) 昭和二十九年十月特大号より昭和三十年二月特大号まで(各一部送共百四十円) 六冊分以上まとめ御申込みの方へは景品贈呈いたします。

第十四号より第二十三号まで各号在庫(一部送共二十円、六回分送共百円) KK通信は第二十三号迄にて廃刊になっております。

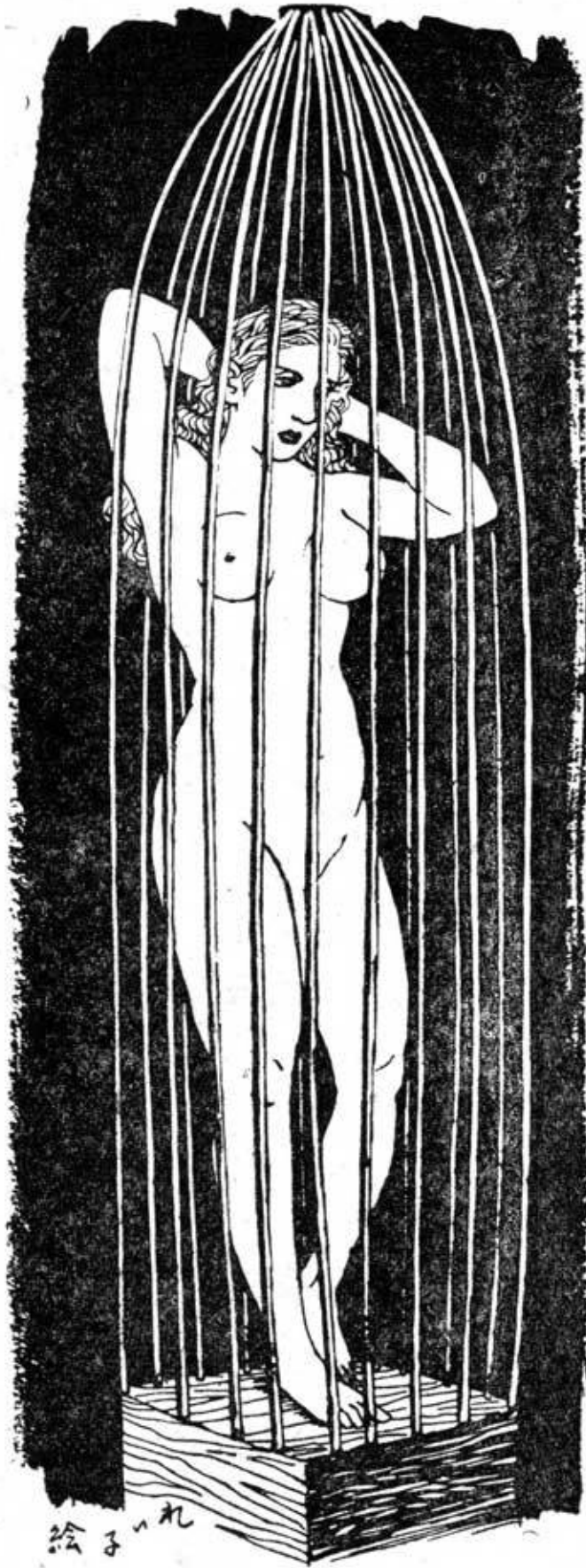
色々なものを拾い出せるけれども、本項ではこの位にする。最後にマゾヒストの諸君は、是非原作をお読みなさいと、おすすめしてく。

【註】「マゾヒストの手帖」速報欄は、編集部への到着が遅れましたので、二八六頁へ掲載いたしましたから御承知下さい。

縄のない縛しめ

二 俣 志 津 子

滝 麗 子・画



気が乳房にもふれてくる。彼女は痼性なので真冬でも素裸で寝る。

廊下に松葉杖の音がして、ドアの前で止った。軽いノックがする。

「カミ」

「何だい」

三郎がねむそうな顔で入って来た。

「寒いじゃないの」

「うん。寒いね」

一、美しきとりこ

志津子はベルを押した。素裸の肩口が寒い

ので、ふとんを頭の上までかけて煙草を喫いながら、いつまでもストーブを焚かない三郎に対して、しきりに腹をたてゝいた。冷い空

「寒いねじゃないわよ。風邪ひいちゃうわ」
「石炭がないんだよ。それに煙突がつまって
いるんで、薪を燃すと志津子のクン製が出来

「ちやうからな」

「ちよっと、こゝへ来て頂戴」

「いやだよ。朝っぱらからのされたくないからな」

「神経が太くなったのね。シユーラのおかげね」

志津子は、三郎がいつの間にかシユーラと云う白系ロシヤの女を家に引っ張り込んで、いることに不快な感情を持っていた。父の遺産をすっぱり分けて、三郎がその金で建てた家だから、彼が誰を連れて来ようと勝手であるが、志津子は三郎を自分だけのものにしておきたかった。彼女の言うことなら何でも聞いた兄、その三郎が、最近志津子を見視しはじめてきた。それが彼女をいらつかせる。

「シユーラ？ あゝ、あの女か」

「ゆうべ泊った？」

「あゝ」

「一寸、紹介してくれないこと？」

「まだ寝てるよ」

志津子は夜具をぱっとはねのけると、雌豹のように裸形を三郎の上に躍らせ、彼をベッドのところへ引きずって来て、戸棚から紐を取り出し、ベッドに縛りつけてしまった。

志津子は素肌の上からガウンをひっかけ、

三郎の上にも毛布をかけて部屋を出た。窓外一面の霜である。彼女は足音もたてずに三郎の部屋の前まで来ると、立止って耳を澄した。森としている。静かにドアを開けると、暖気が柔く全身にからんで来た。

（馬鹿にしている。）

志津子はドアを閉め、ベッドを見た。栗色の髪をした、肌が少し赤いロシヤの女が寝ている。三郎がさっき迄、その側に寝ていたらしい。志津子はガウンを脱ぎ捨て、稚びたかげの残っているシユーラの傍に入った。

（三公、どこからこんな女を見付けて来たのだろう？）

シユーラのパジャマのズボンがない。ブルームも何もない。シユーラが胸の方にまでまくれ上っている。楽しんでいたに違いない。志津子は左腕をシユーラの首の下に深く入れて、彼女の全身を初めは柔かく、それからだん／＼固く抱きしめていた。

「オー・マイ・サプロー」

シユーラは志津子に抱きついて来る。

（何がオー・マイ・三郎だ。いやらしい。それにしても何て柔い毛なんだろう。それに、長すぎるわ。）

「シユーラ」

「はい。まだねむい」

「シユーラ」

シユーラは自分を抱いているのが三郎でないことに気付いて、はっ、と、逃げようとした。志津子は微笑した。

「三郎だと思った？」

「おー、お前、誰」

「志津子」

「志津子？ 三郎のお姉さん」

「妹よ」

「妹？」

「三郎。どこへ行った」

「お使い。ね、その間、私が三郎の代り。わかる」

シユーラは頬を染め、両手で顔を掩った。

「代り？ あなた女、男ない」

（いやらしい女だ。代りと云ったならあれのことだと思っている。そのことしか考えが浮かないのかしら？）

「あんた、いくつ？」

「十八」

「十八、ねえ。どこに居るの？」

「横浜」

「お父さんやお母さんは？」

シユーラは顔から手を離して、かぶりを振

った。大きな眼に涙がみる／＼湧いて耳へ落ちていった。

「どうしてこゝへ来たの？」

シユーラは又かぶりを振った。知らない、と云う意味だ。彼女が次第に興奮してくるのが、志津子にもよくわかった。

「いゝ顔してんのね。キスしてもいゝ？」

シユーラは唇をつき出した。

「私、絵を書いているのよ。あなた、モデルになって下さらない？」

「モデル？」

「えゝゝ、いゝわね？ 可愛いゝ子」

「こゝで書く？」

「いえ、私の家。いゝでしょ。あなた、いゝ身体ね」

志津子はシユーラの乳房を探った。が、彼女は両手を固く胸に当てゝ、それを拒んだ。志津子は笑った。声をあげて笑った。

「バカチカ」

「え？」

「シユーラは、バカチカね」

「どうして？」

シユーラはすっかりうろたえてしまった。その隙に志津子はシユーラの服を脱して、

ふとんをはね除けた。

「ザ・エンド・シユーラ、服を着なさい。これから私のアトリエへ行くの」

志津子はガウンを羽織って、どぎまぎしているシユーラを残して部屋を出た。心は楽しかった。「とりこ」がふえた。わが玩具、秘かな自分だけの芸術品が、わが触角にかゝった。佐登子は魔触と云ったっけ。などと胸のうちに呟きながら部屋に帰った。三郎が寒さにふるえている。

「どう。寒いのがわかった？ 妹をこんな手段でいじめるものじゃないわよ」

「紐を解いてくれ」

「私が服を来てからね」

「どこへ行っていたんだ」

「きまっているじゃないの。トイレよ。おゝ寒む」

志津子は身仕度をとゝのえるとシユーラの処へ行った。彼女もすっかり身づくろいが終っていた。

「三郎は？」

「一寸、待って」

志津子は紙にいゝ加減な文句を書いて、それを三郎の机の上に置いた。

「よく書いておいたから心配しなくていゝわよ。さ、行きましょう」

それでもためらっているシユーラの腕をとって、志津子は玄関へ出た。タクシーを呼止め、シユーラを乗せると、志津子は家へ馳け帰って三郎のいましめを解いた。

「ごめんなさい。忘れたんじやないのよ」

志津子は悪戯児のような笑いをもらして戸外へ飛び出し、タクシーに乗ってしまった。

「どちらへ」

「上野駅」

志津子もきっぱりと無表情な声で答えた。シユーラは彼女の横顔を不安そうに眺めた。

二、新らしいアイデアの誕生

志津子は妙な才能を持っている。それは貸家を探す才能である。一家四人が殺された畑中の一軒家を月二百円。物置を百円。水車の動かなくな



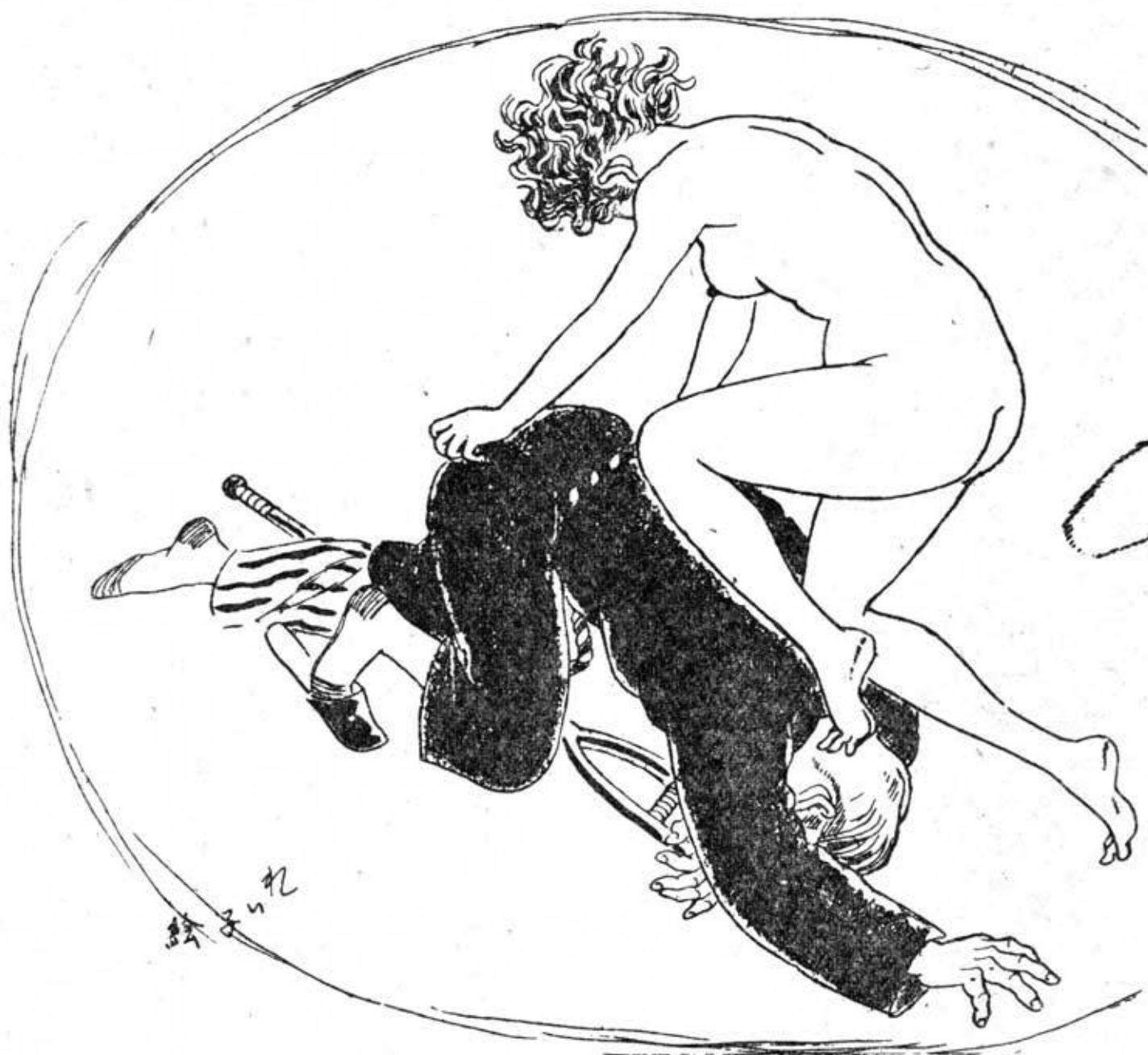
った水車小屋を月百円。と云う風にあちらこちらに借りている。無料のところもある。シューラを連れて来た処がそうだ。その家の見取図を書こう。屋根裏も腰を屈めれば充分に歩ける大きな白壁の納屋で、南と北の部屋は住めるようになっていた。が、北の部屋は暗く陰気で、気の弱い者は一晩で降参してしまう。約一反の土地で二十万円あれば全部買取ることが出来る。周囲に家はなし、四方に高い垣根がめぐらされているので、志津子は金の都合がつけば買取りたいと思っているのだ。犬小屋も気に入った。あそこへは誰を入れよう。などと、つまらぬ空想をしている。

シューラは納屋の前まで来た時、志津子の腕を振放そうとした。彼女の顔にはありありと恐怖の色が浮んでいた。

志津子はシューラの腕を逆手にとって動かさ

ない。彼女は柔道ではなく、黒川流と云うや、

「モデルよ」



絵子

わらを知っていた。この流派は明治中期に久保家の老婆で絶えている筈であった。江戸城の奥女中がよく使った柔術で、どこの城の奥女中でも、この柔術には関心を持っていた。武術試合には出なかったために世には知られていないが、それを志津子は極めている。

彼女はシューラを部屋の中に入れると、内から錠を下してランプをつけた。

「私をどうしますか？」

「バカチカ」

志津子はベッドに腰掛けて煙草をふかした。戸外は冬の陽がさん／＼と輝いているのに、こゝは夜だ。

「そこへおかけ」

志津子は犬小屋を指さした。

「どうするか、話をして下さい」

「絵の道具、何もない」
「そうね」

志津子は煙草を捨て、部屋の真中で焚火をはじめた。煙が部屋一杯にこもってシューラはむせた。

「そら、そんな高いところに居ないで、地べたに、はりつきなさい」

「服、よごれる」

「そうく。その小屋に莖が敷いてある。そこへお入り」

シューラはちらっとそれを見た。気のすまぬ様子だ。しかし、たまらない。志津子もむせた。が、彼女はボキ／＼柴を折っては焚きつづける。

シューラはとう／＼こらえられなくなって犬小屋に入った。と、志津は小屋の戸口を閉めて鍵をかけてしまった。それから納屋の戸をあけて煙を出した。煙は小火でもあったように軒を這って冬の陽の中に流れて行った。

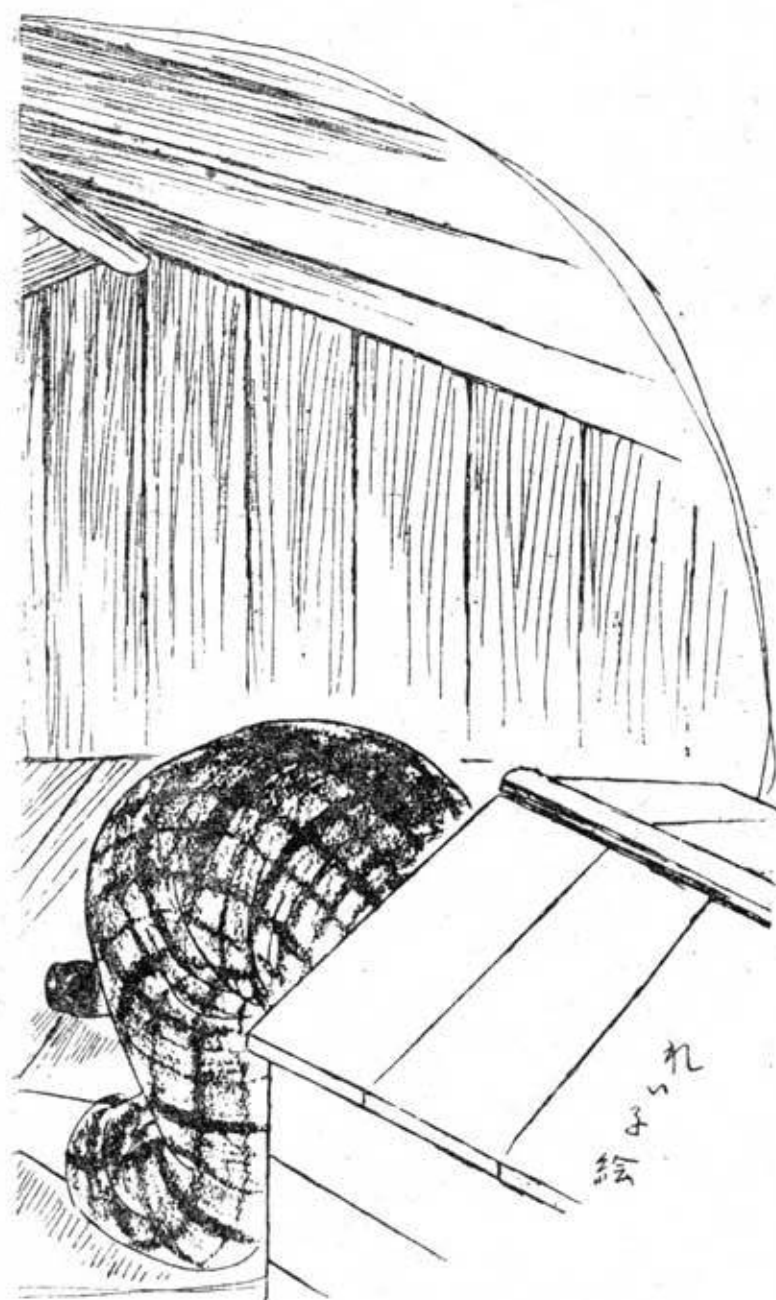
「志津子、開けて下さい。出して、出して、出して」

志津子は聞えないふりをし

て納屋から出ると、納屋の戸を閉めてしまった。納屋の中ではシューラが犬小屋の板壁を叩いて、ロシヤ語で泣き喚いている。

（私は、あの女をどうしようと云うのだろう。あの可愛らしいロシヤの女を——）

志津子は裸身を簾で巻きあげることにもあきて来ていた。それは、あまりにも非人間的であるからだ。殊に首から上を全然束縛せず自由に行っていること。そして、全身の自由を全く束縛していると云うこと。つまり首と手、足首だけが生きている籐人形なのだ。腹部の起伏も、つや／＼かな籐の肌である



れい子 絵

し、腕のくねりも、脚のふくらみも籐の肌でそれは、いさ／＼も動かすことは出来ない。わずかに乳房が息付いているだけである。それから男共の放射線を満す個処、その湿地帯。志津子は飽くこともなくそれに見入ることがある。何と云う醜悪な、又、何と云う、そうだバラよりも美しい変化に豊んだ表情をするのだろう。キリストもそれを愛したに違いない。バイブルに彼のロマンスが幾つか記されている。例えば、ルカ伝第十章の最後の行がそれだ。マルタとマリヤと云う姉妹が居り、マリヤがイエスの脚を抱いて髪をすりつけている。マルタが嫉妬して

私が台所で働いているのに、何故マリヤも働かせないのか。と、なじる。イエスは、マリヤは恋人を得た。彼女からそれを奪ってはいけない。と、云う。これはプラトニック・ラブではない。それにしてもイエスと云う男は何と云う勝手な男だ。人間的な男だろう。と、志津子は男の手前勝手な理窟に苦笑する。

彼女は空腹を感じた。と共

に素晴らしいアイデアが生れた。彼女は自分の着想にすっかり夢中になってしまった。炊事道具を出して飯を炊きながらも考え続けた。それは、自由な、明るい、束縛なき束縛だ。

食事を持って納屋に入ると、喚き疲れたシユーラがすゝり泣いていた。

「シユーラ、ごめんなさい。

お腹が空いたでしょう」

「出して下さい。こゝから出して下さい」

「はい」

志津子は犬小屋の戸を開けた。シユーラは涙で汚れた顔のまゝ這い出して来た。志津子は逃げようとする彼女を捉えて、ハンカチでその顔を拭き、食事を示した。シユーラは首を振った。が、明らかにそれを欲していた。

「召し上れ」

「ほしくない」

「おや、そう。じゃ私だけいたゞくわ」



「帰して下さい」

「どこへ」

「私の家へ」

「あら、あんたに家あったの。一寸待って」

ね。私、喰べちゃったら、あんたを汽車へ乗

せてやるわ。上野行のね」

志津子はうまそうに喰べた。それをわざとシユーラに見せているのだ。シユーラは脇を向いていた。もう昼近。そして、二人共朝飯も喰べずに来たのだ。シユーラは時々横目で食事を見た。何の変哲もない野菜料理だ。だがシユーラはたまらなくなつて志津子へ向直った。志津子は知らぬ顔で喰べ続けている。

「志津子」

「一寸待って、ね。もうすぐだから」

「志津子、シユーラは……」

「えゝ、すぐよ」

「シユーラ、たべたい」

「あら、そうだったの。ごめんなさい」

志津子は声をたてゝ笑った。シユーラは差出されたものを急いで喰べはじめた。

三、緊縛なき緊縛

志津子とシユーラが、荻窪の志津子の家に

着いたのは夕方であった。シユーラは幾度か志津子の手から逃げようとした。が、志津子は離さない。微笑している眼がシユーラをしつかりと捉える。柔らかく女らしい手が、強靱な革紐のように、シユーラの腕に巻かれてある。

家へ着いて放されたシユーラは、もうぐったりして玄関の廊下に坐ってしまった。彼女は涙ぐんでいた。が、泣くことはしなかった。犬小屋の中で泣きつくしてしまったようだ。

志津子は食事が済むと、シユーラをアトリエへ連れて行った。様々な完成した、或は未完の塑像や芸術品が部屋一杯にある。志津子はシユーラにモデル台を示した。シユーラはおとなしく服を脱いで全裸になり、その上に立った。志津子はそこではじめてシユーラの……が艶のない金色であるのに気付いて、奇妙な感情に捉われた。柔かく垂れて不潔な感じである。それが全体の調和をこわして、志津子の美意識を踏みにじっている。

志津子はつか／＼とシユーラに近付き、その毛をつまんだ。シユーラは、あっ、と屈んだ。志津子は剃刃を持って来て、シユーラを押え、それを剃り落してしまった。

「今度いゝわ。こうして」

志津子は両手を後頭部に組んで、シユーラにポーズを作ってみせた。シユーラはその通りにする。

「そう／＼。今日はそれ迄。また明日」

その夜、志津子はシユーラを抱いて寝た。そして、シユーラの生活や生いたち、ロシアの伝説などを聞きながら眠った。何のわだかまりもなく、安らかに眠った。

志津子の仕事はその翌日から始まった。

彼女は様々な籐をアトリエに運んで来た。志津子はノコギリを使い、カンナで板を削り、男のように汗を流して働いた。シユーラはぼんやりそれを見ているだけである。志津子は又手伝ってくれ、とは言わない。夢中だ。そして、シユーラの立つ台を作り上げると、彼女をそこに立たした。志津子は籐を焼いて、うん／＼力んで曲げたり、ノコギリで切ったりしていたが、やがてシユーラの周囲に曲線と直線の籐を、シユーラの肌に触れないように打ちつけはじめた。シユーラは次第に奇妙な籐の林の中に包まれていった。彼女がそこから脱け出るのに非常な苦心をしなければならず、遂に志津子に手伝ってもらってやっと出た。

次の日、やっとのことで台の中心に入ると

志津子は曲線と直線をシユーラの頭の上にまで組み上げてしまった。籐は少しもシユーラの肌にふれていない。が、シユーラが少し動けば乳房は籐に引っかかった。腕を下すことは出来ない。身体を屈めようすると籐が股の真中に喰込む。顔は左右に動かせる。それから、ほんの僅かに身動きが出来る。疲れ、ば籐によりかゝって休むことが出来る。が、姿勢は崩せなかった。

「さあ、出来上った」

「志津子、終った？」

「えゝ」

「じゃ、出して下さい」

「あら、出るの、駄目よ。出さないのよ。休みたければそのまゝ休むといゝわ。横になれたければ寝かしてあげる。痛いめにあいたければ、屈めば、ほら、籐が股を刺すし、乳房がひっかかるし、腕がからまるし、どんな苦痛だって自分で得られるわ。お小水が出たければしてもいゝし、部屋は暖めてあるし、お食事は私が運んでやるし、いゝじゃないの。全く、何にも触れられなくなければそうやってじいっと立っていればいゝし」

シユーラはやっと自分がどんな状態の中に居るかに気付いた。顔は怒りは燃え、志津子

に啖を飛ばし、暴れようとした。しかし、籐に引っかゝって暴れることが出来なかった。ひよっと腹に籐が喰い込んだりして、どうにもならない。シュエラは再び喚きもがいた。

志津子は眼を細めてそれを眺めつゝけた。

「いゝアイデアだし、こんなに変化に豊んだ自由な緊縛ってないわ」

「志津子、シュエラを帰して下さい」

「いや」

「シュエラをどうする？ 売るの」

「おゝ勿体ない。私はまだ自分の芸術品を一度も売ったことないのよ。それだから、いつも貧乏なのよ」

「では、どうするの」

「私の陳列室に飾るのよ。いろ／＼なのがあるわ」

「みんな人を使ってあるのですか」

「そう」

「あなた、悪い人。警察につかまる」

「おゝ恐い。だけど、シュエラもそのうちに横浜家庭裁判所から失踪宣告を受けるのよ。」

そして戸籍から消されてしまう。もっとも私があきてしまったら、人間がしなびちゃったら解放してやるわ」

「さんごく。志津子さんごくの人」

「そう。私はさんごくの人です。私はこれからもっとさんごくになるの。それは男性に対してよ。女の敵は男、その男に戦をいどむ。私が負ければ男の奴隷になる。地を這っていい。だけど私は負けない。私は今迄、女に対していろ／＼さんごくなことをして来た。それは男に対する戦いの準備運動です。女の敵はまず女自身の中にある女らしさであり、その次に男性です。私はこれから触角を男性にのばして行く」

「あなたは悪魔です」

「そう悪魔の魔触です。昔、大昔。女性がこの地上、人類の主権者であったことがあった。私はそれを取りもどす。私は行く。勞働する。そして、女性を傷つけ、凌辱し。踏みにじる男性共を凌辱し踏みにじる。シュエラあなた達は間もなく解放してやる。私にはあなた達は興味がない。いくら可愛いくとも、いくら美しくても、いくら魅力的でも、私の行動の真の対象じゃあない。あなた達は私のよい味方でさえあるの。私の闘いはこれかなのよ。私達女性の闘いはね。私は実行する。共産主義への闘いでもあるの。その理論はあなたに云ったって仕方がないわね。もっと知性の高い男性共にぶっかった時に言ってやるわ。シュエラさん。私の戦いの準備が終る迄、そうやっていて下さいね」

志津子は喋り終えると、アトリエを出て行った。シュエラは全裸のまゝ籐の中に立ちつくして、熱情的に語り、かつ、かつと確かな足取りで去って行く志津子の後姿を眺めた。

シュエラは始めて志津子と云う女にひかれるのを感じた。ぐい／＼と引っぱられる。シュエラは籐を掴んだまゝ叫んだ。

「志津子。シュエラ、お前好きよ」

ドアは志津子の姿をさらって閉った。シュエラは泣き出した。彼女は自分が小便小僧のように小水を吹き出しているのに気付かず泣き続けた。

【読者通信】二月号は特別に面白い記事が集まり、よい出来であった。第一に古田吉郎氏の「鼻責めについての実験」は、その思いもかけぬ新奇さに圧倒された。肉体に加工するというポイントが、どうも嫌味だが、いい責めのアイデアだった。森太一氏の「少年の体臭」は、上品なソドミアンの品格を持った読物だ、本誌もこのようなものばかりで誌面を充せないものかと思う。篇中の全裸体操の空想場面は、ソドミアの持つ憧れを表現して秀抜、次号にも大いに期待する。

懸賞〔告白と手記と体験〕入選

わが半生の記

——告白に代えて福本時三氏へ——

喜多島佳月

一月号の「綿ネルの妄想」嬉しく拝読しました。先ず私は貴方の勇氣と純情に搏たれました。物がものだけにこの種の告白というものは容易に発表出来ないものですが、貴方は敢然とこれを実行されました。私は貴方の純情と勇氣に動かされ、つたない事をもかえりみず、自分の告白を聞いていただくと思います。

誰でも先天的に素質はあると思いますが、特に思い当る動機というものがある様です。貴方が野球の玉を拾いに物干の赤い物の下をくぐった時に、可成りの衝動を受け、それが終生の性癖の萌芽となった事は否めません。私の動機は少しく変っていて、絵から来ています。それは私の十四五歳の頃でしょうか。叔父が古道具を弄っていて、どこで手に入れたものか、美術新報という古い雑誌を十数冊持って来て私に見せて呉れました。その中に

故橋田五葉氏の浮世絵の話が出ていて、哥麿や清長の絵が相当数、原色版や写真版で載っていました。その中で特に目を惹いたのは哥麿の三枚続き、あわび採りの図でした。写真版ながら、その妖艶な姿態、特に立って腰巻を絞っている海女の図は少年のころをときめかせずにはいませんでした。

私が現在でも若干の浮世絵を愛蔵し、鑑賞を怠らないそもその動機は、このあわび採り図を見た時に確立されたと思っています。叔父は私が浮世絵に興味を覚えた様子なので、その後複製品を十枚程どこかで借り受け見せて呉れました。その中に初代豊国の有名な提灯をともして芸妓を送って行く仲居の図があり、その芸妓の裳裾からこぼれ出た緋の蹴出しが複製乍ら妙に目をそめました。私は之に興を覚えて、其の後市中の本屋で浮世絵を持っていそうなところを漁り廻り、特に腰巻そのものを扱った石川豊信の湯文字を纏うの図や、清長の浴場図二種、国周の三枚続温泉の図等を買集めて、悦に入っていました。

芳年の有名な一つ家の妊み女逆さ吊り図等も見えて、その凄さに一驚したものでした。こうした時代が数年続いて完全に腰巻マニアの

素地を築いた頃、私のこの悲しむべき性癖を
 昂進させる様な場面に遭遇してしまいました
 た。それは私の家がバザーに店を持っていた
 頃のことです、私の店は表通りに面していて
 矢張り表通りに面した向う側の店とはバザー
 の通路をへだて、よく見えるので時に話しも
 し心安くしていましたが、その蓄音器屋さん
 の主人が尺八の先生で、最初の奥さんが自殺
 とかで亡くなり、（以前）二度目の奥さんを
 迎えられたのです。その奥さんは元料亭に女



中をしていたとかいう人で、一寸婀娜っぽい
 感じのひとでした。朝掃除する時には姉さん
 冠りをして、裾を端折り、赤いお腰を覗かす
 等、総て料理屋での習慣が抜けず附近の人の
 目にも付く程でした。

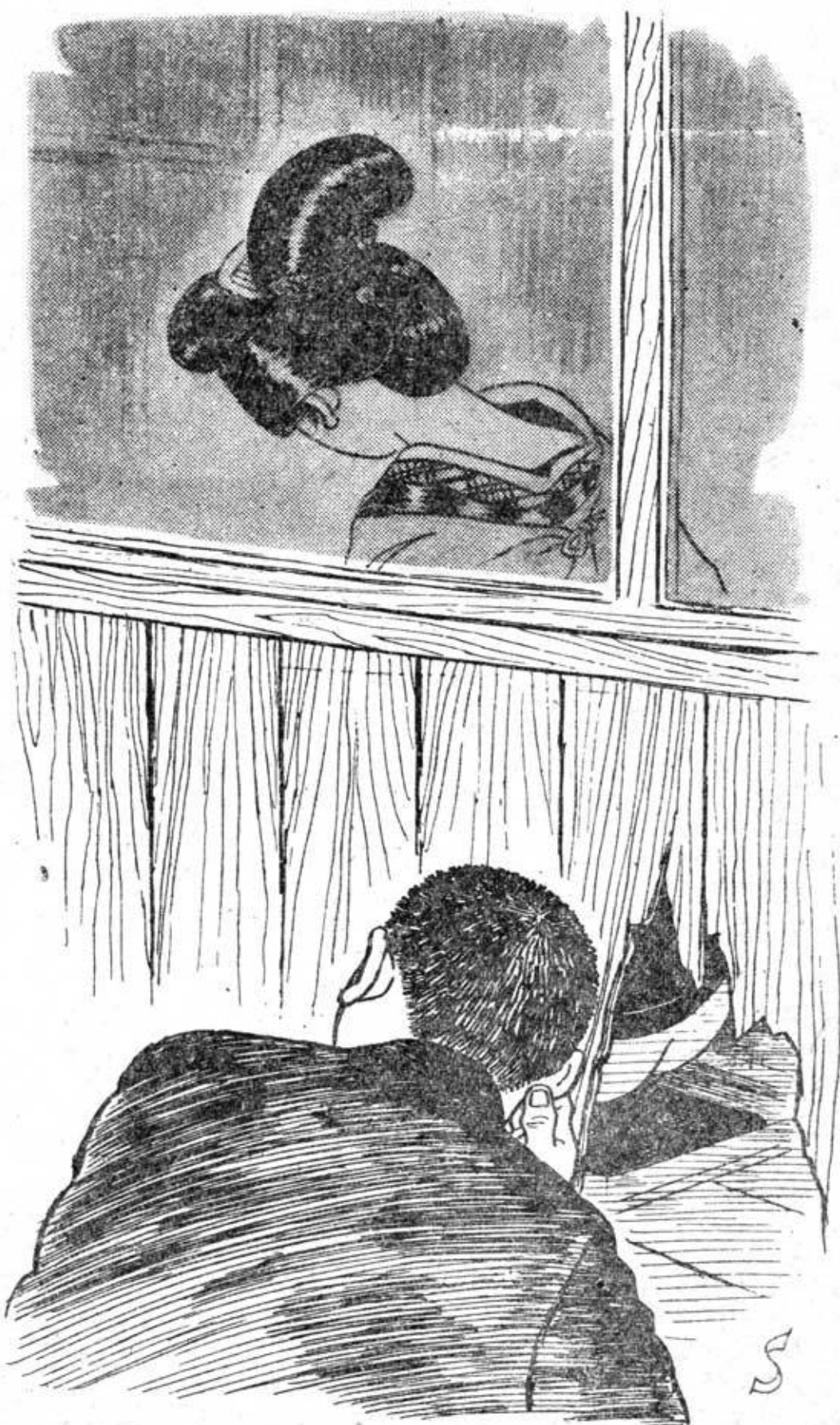
夏の暑い昼下りの頃でした。私は二階で昼
 寝をしていたのですが、ふと目が覚めて、何
 気なく向いへの二階を見たのです。暑い時で
 窓は開け放されてあり内らの様子がまる見え
 といつてよい程でした。丁度何処からか今帰

ったところらしく、丸鬚姿の奥さんは純白の
 晒布の付いた真ッ赤な腰巻一つで汗の身体を
 乾かしているところでした。窓から見た加減
 が、その腰巻の彩が目には泌みる程あざやかに
 感じられ、ふくよかな肉体と相俟って私はし
 ばし恍惚と見とれていました。窃視症とい
 ますか、覗き見することの愉しさを覚えたの
 は実にこの時だと思っています。それから若
 干の日が経ても、私の網膜にはあの鮮紅色が
 しゆうねん深く、残って忘れ難い印象とな
 りました。

そして或日の事その蓄音器屋さんが家を頼
 んで外出された日中の事でした。私は大胆に
 も私の二階と向うの二階とに渡してある鉄の
 欄間を伝って向うの二階へ忍び込んだもので
 す。今から思うと随分無茶な事をしたもので
 すが、その時は夢中でした。それから貴方
 もせられた様に行李の中を掻き廻して月経帯
 なんかと一緒にになっていた、赤のモスリンの
 お腰を一筋見付けると、鬼の首でも取った様
 に逸る心を押えつゝそゝくさと又鉄の欄間を
 渡って戻って来ました。先日奥さんがしてい
 たのより稍薄い赤でしたが、甘酢っぽい様な
 匂いがして胸をわくわくさせたのは全く貴兄
 と同様です。普段から石鹼の匂いには無感覚

なのですが、その腰巻に籠っている石鹼の匂いというものは実に煽情的なものです。私がその腰巻を纏ひひそかに女性の気分を味ったのは又貴兄と同様ですが、私は大胆にも、それを始終していたので到頭母に見されてしまう破目に陥りました。母は、始めて知る子の病癖に驚き、且つ心配し、懇々とさとして呉れ、その腰巻を又向いが留守になった時を見計らいそと返して呉れました。私は自己の悲しむべき病癖に悩みつゝも、その欲望に堪え兼ねそれからは家の簞笥に蔵ってある母の水浅黄の湯文字、姉の緋縮緬の長いのを取り出しては時折そとと締めて、そのやわらかい感触に浸っていました。

貴方は綿ネルの腰巻に特に心惹かれて居られる様ですが、私はこの時の印象が未だに糸を引いて、そのちりめん物に人一倍の誘惑を感じます。現在この縮緬のお腰は余程減少して、花柳界か、明治時代のお婆さん連位しか



使用されていない様ですが、稀に道行く人の裳裾からこぼれ出る魅力は一種特有なものがあつた、つい私は尾行せずにはいられません。この点、風の吹く日などは効果百二十パーセントです。私はその後、主人と別れて一時家へ戻って来ていた二番目の姉の腰巻をふとした機会で見えてしまいました。勿論貴方の好きな

淡紅色のネルもありましたが、それらにも増して心ときめかしたのは羽二重の波に千鳥の柄模様の裾除でした。之は姉が一番大切にしていたのですが、後に洗濯屋へ洗い出して紛失されたとかで目下は無い様です。私は前の失敗に懲りず、又そろ之を巻いて仕事をしていたので今度は兄に見付けられてしま

いました。母に発見された場合も恥しかったですが、同性の兄に発見された時は、全く穴があつたら入りたい心地でした。兄も私の異常性癖には困り心配もした様ですが、女では苦勞している兄だけに甚だしい叱責も受けませんでした。只、この為、私の結婚が早くなつたことは事実です。

バザー時代には、この外印象に残っていることに便所覗き事件というのがあります。それはこのバザーの共同便所で、通行人でも入れる様になっていたので、自然荒廢し随分汚ない便所で、大便の方なんか金隠しもなかった様です。大便所は二つあって、その間は上部がガラス下部は板で仕切りがしてあるのですが、之がいつの間にか後の方から見て右よりの部分が一寸か一寸五分程めくれているのです。共同便所ですので相当出入も頻繁で、よく板ガラス一枚を隔て、両方がにらめっこしながら用を足す事があるのです。之が同性同志なれば別に問題は起らないのですが、性が異つて来ると一寸困るのです。石部金吉ならいざしらず、シャーというあの妙音が聞え出すと、思わず知らずその部分へ目が行くのは人情です。面白い事にはその妙音の大小に依つてバザー内のどの店のどの人が入ったか

さえ分るのです。

或日の事、例に依り用を足していると下駄の音がして上廻して来る様子なので息を殺して、そっと覗いて見ました。派手好みの着物の柄で一目で蓄音器屋の奥さんということが分りました。ほの暗い便所でしたが衣摺れの音がすると奥さんのいつぞや見た赤い腰巻が腰部にたくれあがつてかすかに見えました。奥さんは見られているのを知るか知らずや、心地よい小水の音を立て、やがて降廻して行きました。私は見てならぬものを見たという感じがして懺悔に堪えませんでした。この事があつてから、一層向いの奥さんに親近感を覚えました。板剝のいたずらは矢張痴漢の仕業で後に現場を押えられた後日談もあるのですが、お蔭で私は目の正月を当分させて貰つた訳です。バザーの中には色んな商店があつてその中に一軒刃物屋さんがあつたのですが、そこに白鞘の匕首が二三本並んでいたのが妙に魅力的で或日こっそり一本手頃なのを失敬、腹切の真似事をした事もあります。而し之も終始懷に呑んでいたのに兄に見付かれ、この方はそれきり止まりましたが、奇クを毎日見て、この種の傾向の人が男女にわたつて相当あるのに驚いています。

バザー時代は約八年程で終りを告げていますが、私はこの間、前記浮世絵の外、谷崎潤一郎の小説等で異常感覚を養われました。「秘密」という初期のもので主人公が女装しちりめんの腰巻の感触をかなしみつゝ歩くところなんか、暗誦する程よく読み返したものです。

バザーが時代後れになつて閉鎖されることになり立退きの上、昭和八年、バザーから半丁程のビルへ引越しました。ビルと云つても三階建て、私はもと書画屋の跡へ入つたのです。向いの蓄音器屋さんは商売が思わしくないので、尺八の先生で、三階へ住まわれました。後この先生は亡くなられて、奥さんは散々苦勞された揚句、御主人の借金を背負われ市内の某料亭へ再び女中奉公、三年程でその借金も返えた上、或人に懇望されて二号さんに納つてゐるといふ頃、久し振りに見たことがありますが、縁ぶちに腰掛けて母と話されてゆかれましたが、しどけなくほつれた裾前から淡紅色のメリンスのお腰がのぞいていたのは風情のあるものでした。

ビルへ移ってから家が狭いので二、三町先に宅を一軒借り受け、そこから毎日店へ通ふことになりましたが、この道中で目に触れる

物干が又目の毒になり、又ぞろ私の悪い病気が再発することになりました。往來の通行の激しい所ではそんな気にもなりません、露路なんかにうす暗くなっても入れ忘れられた赤ネルや桃色のメリンスのお腰がぶら下っている、何だか自分の為置いてある様な錯覚を起し遂フラフラと手を掛けてしまいたくなるのです。只見る丈で満足して居られる貴方なんか羨しいと思います。私には何に依らず見る丈で済まず、どうしても入手して見たい欲望が首をもたげるのです。こんな風で私は心の誘惑に負けて、三四点のネルやメリンスを失敬してしまつたのですが、この隠トク場所にはすっかり困り、額縁の後等へ突込んでひたすら家人の目に触れることを避けたのですが、之も又母に発見される時が来て、いつかの様に元の干竿へ母がこっそり返しに行つて呉れました。こんなことやなんかで私はすっかり神経をすり減らしてしまい甚しい神経衰弱に罹り、電車の音を聞いても怖い不眠症に陥り、約四十日の床に就いてしまいました。兄も大変心配して呉れ、一度気分転換に東京へでも連れて行ってやろうかと、いうので私もその気になり、出掛けることになりました。夜行でいったのですが、夜明けの車

窓に靈峯富士が見えた時は思わず心の清まるものを覚えました。東京へ着いて姉の家に逗留厄介になる事になったのですが、丁度姉の家が御成道に添った裏筋にあり、始めて東京の浮世絵屋を見学することになりました。

御成道には数軒の浮世絵屋があつて、それぞれ店に応じた様な品物が並べ且つ置いてありました。物の廉い時代で十円も出せば可成樂しめる五渡亭のあぶな絵が買えたのですが、何しろかかりうどの身でそういう高級品は買えず、僅かに保存の悪い五渡亭の芸者の寝巻姿の片膝立てゝ坐っている図、白い内股があらわになつて五渡亭特有の微妙な線の湯文字がからんでるのが妙に気に入つてたしか一円五十銭で買つたのが病み付き、続いて同じ五渡亭の仲居が屏風越しにうちの睦言を聞いている図、これはしゃがみ腰で水浅黄縮緬の端が割れた膝前からのぞかれる頗る妖艶な図、之は少し高く五円程でした。それと広重の新吉原の図が気分的に爽やかなもので之も一点、計三点買つたのが浮世絵の原画を買つた最初で、その品物は結局交換して目下はありませんが、今でも網膜にありありと蘇つて来ます。こうして浮世絵をひやかし歩いている内にすっかり神経衰弱を忘れて約一ヶ月

程で元の古巣へ帰つて来ました。神経衰弱は結局浮世絵が癒して呉れた様なものですが、今度は浮世絵熱にうかされる様になり、閑さえあれば、浮世絵店だとか夜店を歩いたものです。

ここで私の一寸奇妙な嗜好を御披露して置きましょう。浮世絵のあぶな絵系統のものと腰巻の描写に念の入れてあるのに注目した事は申すまでもありませんが、その色彩には神経質と云つてよい程、注文があるのです。先ず私の最もよろこぶのは白で、之に縮緬じわの空刷りでも施されていようものなら、何を置いても入手したものです。其の理由が何によるものか一寸適当な言葉が出て来ませんが、清純なるエロチシズムとでも申しましようか、そういうものが私の嗜好にぴったり合ふのです。赤いのを嫌う訳ではありませんがどうも刺激が強過ぎて一つ版面特有の慈味がない様に思ふのです。それが白とか水浅黄になると十二分に心ゆく迄楽しむ事が出来るのです。白とか水浅黄を締めるのは先ず年増で、従つて私の蒐めた江戸絵の女は其の九十パーセントが年増で占められています。いくら良い絵でも前記条件に外れた絵は見向きもしませんでした。此の点、貴君の赤若しくは

淡紅を好むと少しく異なる様ですが、同一趣味の仲にも多少の相違はあるものだと言感しています。

貴君はネルの腰巻の下方の線が魅力的らしいですが、私にはあまり魅力が感じられません。只貴君の云われた上部の晒布は広い程魅力を感じる事は全く同一です。紐のあるのも結構ですが、あの晒布の端の部分の本布より四五寸も余分に出してあるのは、紐替りかも知れませんが何となく豊かな感じがして非常に好きです。腰巻そのものを見る事も嬉しいですが、あれを纏く姿は一層魅力的だと思います。現在のヌードが全裸若しくはブロース程度でごまかしているのは何と言っても物足らぬ感じですが、戦災で全部鳥有に帰しましたが、映画や演劇のスクリーンにも貴重なものがありました。花園桃子と云う女剣劇の傘を差して真黒な薄物の裾を端折り、白の裾除をあ

らわにしたはだし姿は絶品で特に同僚に手紙で申込み貰ったものでしたが惜しくも焼失しました。この外、映画物では切られお富のこ



うもり安を殺す墓場の場面は或映画館のを失敬したのでしたが一寸着色があつて、迫真的魅力あり、お富の片膝付いた方がお端折になつていて、之又、白縮緬の味無類のものでした。こうして気を付けていると相当、腰巻に關するよき参考品はある様です。色彩物では何と云つても浮世絵ですが、現在高価になり過ぎて手に乗りません。浮世絵の春画にも、ものが露出的なものだけに、ふんだんに楽しめるものがあります。おかしい事に春画でも全裸的なものにはあまり興味が持てません

が、ほんの一寸でもお腰の彩が見えると頗る情緒が出て来るから妙です。春画でも腰巻の彩は赤が大部分ですが、十圓あるものならその中に必ずといってよい程、白か水浅黄が入っています。之は変化を付ける為に入れていると思えますが、私にとっては有難いことなのです。

以上の様な経過で目下の私は内攻的ですが浮世絵の世界で一応自己の奇なる性癖を満足させています。現実的には貴方の指摘される物干場で白日の下堂々

とたのしめる訳ですし、夜ともなれば女湯の垣間見というこの世の極楽もある訳でわれわれフェチシストに取ってはまだまだこの世は捨てたものではありません。貴方が杞憂されている様な世の中が全部洋装に替つてしまふなどという事も、先ず我々の生きている中は大丈夫でしょう。結局われわれは通常人が持っているものを余計に一つ持ち合わせている訳で、考え様に依つては神に感謝しなければならぬかと存じます。貴方が良き奥さんを買われ幸福な日を送られる様お祈りします。

倒錯の英雄・織田信長を完膚なきまでに揅挾した新研究

倒錯の英雄、織田信長

笠 置 俊 郎 ・ 作

第四章

信長のソドミアに対する考察

信長のソドミアについて、若干の研究をまとめてみたい。戦国時代の社会的風潮の一つとして、ソドミアが殊に武将の間において熾んに流行したことは世人の知るところであって、後に、徳川全期を通じて、文化の爛熟と共に封建社会の上下に溺蔓した魅をなしたものだと言えよう。

すでに、戦国時代にあつては、仏教家の間においても半ば公然と

した風習となつていたし、武家の間においては、続武家閑談にも見えるように、長井甲斐守と日比野下野守が、美濃に來りし江州の猿樂師の若衆の中から、美童を撰んで買ったとあるように、熱烈に娼童を求める士も多かったようである。

また、別伝によると、加藤清正だの、池田輝政、大久保長安などという勇将は、男色や女色に溺れて、そのために病を得て死んだとも云われている程で、それは戦国の暗黒時代における、ぎりぎりの救いが、反動的に享樂追及に向つてゐることを物語るのだが——とまれ、ソドミアは、この時代において倒錯であつたかどうか疑問である。

いや、謂うなれば、それは当時の社会通念としては怪しむに足り

ぬ風習とみてよからうと思う。

だから信長が、譜代の臣、森三左衛門の子、蘭丸を愛したからと云って、直ちに、信長だけが男色愛好家のように受取るにも当たらないのではないか。

むしろ、将が主君たるの権力で、美童を寵愛するということは、我々にとって、いっこうに興味ある問題ではないので、信長の倒錯性としてのソドミアも、これでは平凡過ぎるのである。

ところが信長のような、一世の偉人英雄が、自ら美童として、娼童として、屈強な男性を求め抜いていたとすれば、これは確に、面白い事柄である。

白昼は、絶世の権力を振る暴君信長が、夜ともなれば、妖しくも紅燈の影に、荒くれた男に身を委ねて、一夜の歓心を求めて情熱に狂う姿を想像したとき……西教記にあるように、女のような優男の、美男信長のもつ、ソドミアの情炎に、灼きつけられたように、私は眩暈を覚える。これは、私の勝手な想像に過ぎないのだろうか——読者は、次の史料によって判断を与えて欲しいと思う。

信長記に——信長が幼童の頃、帷に男根の図柄を染め抜いたのを着用して歩いた、とある。この信長の男根崇拜は、従来の宗教的なものでなく、ソドミア的なものであったと私は断定しているのである。

同じく信長記によるのだが、かの桶狭間役の永祿三年の前年に、信長は津島の堀田道空の庭先で踊りの会を催したことがあった。

当時、盆踊りとも云うべき風流踊りが全国的に流行の兆をみせていたもので、史的に云えば、多年の戦乱に反撥して、庶民階級の抬頭的傾向の現れとしての民衆的享樂の一つで、下級の武門から屈起

した信長が、踊りを好んだのは当然であろうが、とは云え、この時は、天下の豪族今川義元との宿命的決戦を余儀なくされていた桶狭間の前年というだけに、これは、単なる娯樂の催しではなかったと思われる。

謂わば、信長にとっての今生一期の、踊りの催しであった。

殊に、信長が歓待のために津島五ヶ村の村民を招き、家中の錚々の士をして踊らせ、笛を鳴らし、太鼓をたたいて、舞謡したのみか、村民に酒肴を添えたというから、随分、大がかりな催しであった。時に信長は二十六歳の青年である。家中の士は。

青鬼に備中守、赤鬼に平手内膳、餓鬼に滝川左近、地藏に織田太郎左衛門、弁慶踊りには前野但馬守、伊東夫兵衛、市橋伝左衛門、飯尾近江守、鷺に一悦弥三郎——こう云った配役で、信長麾下の勇将が各々の得意の芸を踊った。

最後に、信長自ら、天女に扮して舞ったのである。

信長の女装は、さぞ艶麗であっただろう、舞う手の撓やかさ、脂粉の香り、伽羅の匂い、まことに、天女の下り舞うような姿であったと思われる。

それにしても、信長の、この時の女に扮した心情はどうであっただろう。女装を愉しむ男の心は、同性愛者の耽美であり、秘密であることに異存はないと思う。私には、そうした耽美的情绪に酔う信長の遺瀨ないまでの情感が、ずきん！と心を刺してくるのである。

また、有力な史料としては、信長の角力好きを挙げねばなるまい。三將物語覚書に

「信長公の好きなものは、第一に武者咄、第二に鷹野と川狩、第三

に馬」

とあり、殊に角力を好んだと書かれている。即ち天正六年二月二十九日に、近江の国中に住む本職の力士三百人を集めて大相撲を催し、同年八月十五日には近江、京都の全力士を集めて安土の山で角力をとらせた。集う力士千五百人の盛観であったといわれている。

そののみか、本職の力士を、百石ずつの知行で召抱え、東辰次郎、助五郎、荒鹿などという力士をこよなく寵愛したとある。

角力好きというのは、一見すると、いかにも戦国の武将らしい好みであるが、それでは信長が角力を士道鼓吹のために奨励したのだろうかと思ふに、私はそうでないと思ふ。

信長は、戦術家としては天才である。例えば三間半の長柄の槍組編成をしたのも彼だし、舶来の新兵器、鉄砲を重要視して鉄砲組を強化したのも彼であり、完全に、旧来の兵法を圧倒して、新戦術を編み出し、近代的戦術の端を開いたのも実に彼であった。

そうした信長にとって、裸で力技を争う角力を、戦力の一つとして推奨するという風な陳腐な考えをもつ筈がないので、これは飽くまでも、信長の趣好の一つであつたわけだ。

では、信長は、土俵での力技を觀賞して悦んでいたのだろうか。ここが私にとっては、重大な研究のポイントである。

信長は、当時、まだ南戦北伐、軍旅を解くいとまもない時代で、信長打倒の敵勢力は信長の「天下布武」

を阻んで、各地に餓狼の牙を磨いていた頃だ、どうして信長が、悠長に相撲の技などを觀賞する閑暇があろう。

寸暇を惜んで、信長は戦術、戦略の研究に没頭し、新占領地の行政に施策を立てていたのだから、そんな意味で信長が角力を愛したとは思われない。

恐らく―信長は、潜めもつソドミアの感情を満足させるために、隆々たる男性の肉体美を、土俵の上で觀賞したのではなかろうか―いや、そう解釈を下した時に、はじめて信長の相撲愛好の心理が理



解されるのである。

その他に、信長と光秀の男色関係、信長と鬼柴田との男色関係、信長と蘭丸との男色関係など、これらは、孰れも想像説の域を出ないので、敢て、ここに詳述するを避けたが、一つ、信長は蘭丸が、すでに寵童の年配を過ぎてても、側近に置いて離さなかったというのは、二人の間には、蘭丸が寵童であったと云うよりも、或は、信長の女性的感情が、蘭丸によって慰められていたのではないだろうか、と思われる節がある。蘭丸は衆に勝れた力量をもつ屈強の青年であったことと思ひ合せて、私はそう想像したい。

だが、孰れにしても、信長の男性崇拜は、彼自身が、天賦の英雄性をもっていただけに、自己の内部で矛盾撞着し、葛藤して、その生涯、懊悩煩悶したであろうことは、痛々しく私の史眼に映るのである。

信長が孤独の英雄と云われるのも、こうした心情の、妖しい暗影が彼の行動を彩るからでもあらうかと思う。

信長の残忍酷薄は天性でない

梧窓漫筆の著者、太田錦城は

「信長は猜疑頼朝より勝れり。其残暴は、頼朝の所不為なり。仏法を破るは、英明に似たれ共、其実は残忍の心の所為なり。一向の徒を救い給ひて、信長を殺したまへば、天道の所不与、昭明なり。猜疑の二字にて、遂には其の身を亡し玉ふ。総明秀出の処は有れ共、局量の狭小なるには遙に諸將に劣れり」



と評しているが、史家の観るところ、大同小異、孰れも信長の天性を残忍酷薄と決めているようである。

果して、信長は残忍か、酷薄か、ここにおいて、信長のサディズムを究明することは、本論の主目的なのである。

前章まで、私は信長の幼童期から青年期への生活をみてきた。しかし、その史伝の中で信長が残忍であったとする事実には少しも行き当らなかった。

信長が、家中の反信長派を弾圧したのは、これは信長としては当然の措置で、自分を殺そうとする反逆派を許すことは、たとえ、どんな寛大な実権者にだってあり得ないことである。云わば、弟信行

一人を殺したのも、犠牲者を少くしようとした信長の深い配慮であって、しかも信長にとっては、正当防衛的な行動であったと云える。

戦闘における権謀駭引は、むしろ、戦略家としての当然のことである。

しからば、何をもって、信長が天性の残忍者だというのか。一般に史家が挙げる事例は次の通りだ。

A 家臣の成敗

(1) 佐久間信盛、林信勝、荒木村重の功臣を追放したこと。

(2) 明智光秀を虐待したこと。

(3) 天正九年三月十日の桑実寺事件で、安土の女房達十数名を庭前の松の木に縛って、信長自身が刀をふるって斬殺したこと。

等

B 敵に対する残忍

(1) 天正十年武田勝頼を亡ぼした時に、恵林寺に火を放ち、快川国師らを焚死させたこと。

(2) 比叡山を焼夷して一炬に付したこと。

(3) 武田の家臣殺戮

(4) 稲葉一鉄に対する謀殺

(5) 小笠原信嶺に対する謀殺

(6) 天正二年、正月の宴に、勁敵朝倉義景、浅井長政の首を薄濃うすだみにして酒宴の肴としたこと。

(7) 長島の一向宗徒の屠殺（村民も加えて二万と称せられる。）が主なものであるが、いずれも、信長が、天下統一の大業を成就せんとする途上における障碍に対する残忍であって、かって無辜の

民を殺戮する如き暴君的残忍は見当らない。

それも、天性のものでないことは、信長の幼童期には、残忍の事実が無いのにみても、後天性のものであることが分る。

いや、むしろ、信長は社会正義に対する、熱心なる為政者であったことを証する史実が多いのだ。信長は、一面に「天下布武」を目標として、乱世の榮達利欲の権謀の渦と騒乱に断を与えつつ、一面において深く民生を慈しんだことは隠れなき事実である。

それについて、少し語ろう。

一、信長が軍を率いて京師に入った時、猛将来ると人心が不安に戦いた。恐らく、木曾義仲の乱暴を思い浮べたのであろうが、このとき信長は、東福寺で連歌の宗匠紹巴が、扇を二本台にすえて献上し二本手に入るけふのよろこびと歌えば、信長は即座に

舞いあそぶ千代万代の扇にて

と詠み返したので、京の人心は安堵したと云われている。

また一洛中の軍規も厳正で、織田軍所属の兵卒が町で商人と利を争って喧嘩したのを菅谷九右衛門尉から報告をうけ、信長自身が詮議したが非が兵卒にあったので即座に斬罪に処した。

二、下京で町の役をする者の女房が、婦女子の人身売買の常習者で、この女房が和泉の堺に売った女だけでも八十人に上った。これを知った信長は、直ちに罪状明白を待って斬罪に処した（天正七年九月二十八日のこと、信長記に見える）

三、前章でも盗人の杜での乞食に食を与えたことを書いたが、同じような話が、天正三年の六月頃に、信長が美濃と近江の国境を通じて、山中というところに、猿と呼ばれる乞食が居て、村八分の扱い

を受けているのを聞いて不惑と思い、木綿二十反を猿に与え、また村民には、米などを与えてやるように命じて、救済したことがあった。(信長記)

枚挙すれば、こんな事例は沢山あろう。だが、本文に関係がないので省くが、信長の一面の、温情と人間味は十分立証し得られたと思う。

こう観てくると、信長の残忍さの限界や、その暴発してくる心理経過というものが、ほぼ理解されてくるのである。

まず一、家臣の成敗について論じよう。

信長は、亡父の跡目を承けてから十年、つまり桶狭間役に至るまで、織田同族の内紛に労したので、やっと、新鋭織田軍を組織立てたのは、桶狭間に至る三年程前からであろうと思われる。

むろん、その頃は、まだ尾張の東部は、今川と一向宗徒の勢力が蟠居して、信長は、同族を統一したりと雖も、尾張の半分を領有支配したに止まり、二十万石の貧弱な地方大名に過ぎなかった。

したがって、信長としては、装備の点でも常備軍設置の点でも、不十分なもので、やがて対決する百万石の今川軍、その兵力六万と比較しては、まさに霄壤の差があった。

合理的に鋭い信長の頭脳は、今川軍との一戦に、敵の本営を一挙に衝く作戦以外に、万に一つの勝利を博する道のないことを知っていた。

大軍を相手に奇襲する織田軍は、勇猛でなくてはならない。不惜身命の闘魂に燃えておらねばならない。時に応じ、事に臨んで、俊敏でなくてはならない。そして、最も大切なことは、軍令絶対服従の軍紀に筋金が入っておらねばならないことだ。

利欲のためには離合集散し、権謀表裏に生きるのが、戦国時代の人心の特徴である。士道だの、武士道だのとは、乱が治まり、封建的太平の代の道義であって、乱世には通用しないことだ。

信長が、建軍の最初に、最も厳にしたものは、即ち軍紀を乱す者に対する仮借なき成敗であった。

信長は、諸將を制禦するのに、軍紀を緩くしなかった。それだけに、奉公の実のある者に対しては、行賞を吝まなかった。

実力本位、人物本位、情実や門閥は、織田では名を成す手立てにはならなかった。おのずから、新興の鋭気に溢れていたのである。

こうした信長の建軍精神は、批判の余地のないまでに立派であり、進歩的であり、革新的であったが、問題は、信長の成敗の主観とそのやり方である。

信長の怠惰を憎む心は、異常なまでに烈しかったが、いったん憎むと、蛇の如く執念深く、相手の非を責め抜いて已まなかった。

恐らく、光秀もこの執念さに恐れをなした末に逆心を燃すに至ったのであろうが、林通勝に二十数年前の反逆を責めて追放したのも、この執念さ故であっただろう。

この憎悪の執念は、史家によって、猜疑心だと誤られているようだが、私は信長が頼朝以上の猜疑心をもっていたとは思わない。

信長は、むしろ武將を信じる点では、度量広潤な将器であった。かつては、自分の寝首を掻こうとした柴田勝家を信じて麾下随一の重臣としたし、下賤より成り上った秀吉を信じて大軍を授けていたではないか。

ただ、人間的に、あまりにも人間的に、憎悪の感情が、粘っこく深刻であったのだが、それも一信長のソドミアで一瞥したように、

女性的な、娼童的なヒステリー性格のためであったと私は思う。
嫁いじめに共通したヒステリーの心理が、信長の血の中にあった
とすれば、それを人格上の欠点といい、猜疑心だとする人物評は、
まったく皮相であると思ふべきだ。



工人達が戦慄して、忽ち、怠業気分が一掃されたというのである。
同じようなケースの話が、先にも挙げたが、永祿十一年に將軍の
宮殿造営中に、信長がやはり工事現場を巡視中、一人の卒が、折柄
ここを通りかかった一婦人の日覆をめくって顔をのぞいてひやかし

信長の「折檻と成敗」は、建車と
同時に、軍紀の保持上絶対のもので
あって、桶狭間役前から本格的に、
信長の行動のうちに火を吐いたので
ある。

例えば、太閤記にある。藤吉郎の
三日普請の話の中で、秀吉が抜刀し
て工事を督励したとあるが、事実は
信長がそれを行ったのである。

あの話は、桶狭間役の前年、永祿
二年八月のことで、同月の十八日か
ら十九日にかけて猛颱風が清洲城下
を通過し、清洲城の大手の櫓の石垣
が三百メートルばかり崩壊したこと
があった。

復旧工事が難工事で捗らないので
信長が藤吉郎に工事奉行を命じたの
だが、信長自身も現場に出て監督し
た。その折に、怠けている石工を見
つけて、一刀の下に斬り捨てたの
で、信長の瘡癥と容赦のない成敗に

ていた。これをみた信長は、その場で、卒を斬り捨てた（西教史）ことがある。

信長の怠惰を憎むの情は斯くの如きものがあつたわけだが、これ、これを短気粗暴だとみるのは、信長の心事を知らない輩の戯語としか取れない。

では桑実寺の一件はどうであろうか。この話は、信長研究の貴重な史料なので、少し詳しく語ろう。

天正九年三月十日のことである。信長はこの日、湖畔の春に馬を駆って江州の竹生島に参詣して、帰路―羽柴秀吉の居城長浜に立寄るスケジュールで安土城を出た。

その行程は、陸路十里、湖上五里、往復の里程三十里である。誰が考えても、信長の日帰りは難しい、恐らく、今日は長浜城に泊るものと思われた。

そこで安土城の女房連（侍女のこと）が、こんな折にこそ、かねて宿願の、桑実寺の薬師に参詣しようと打ち連れて城を出たのである。ところが一方信長は、呑気に湖畔の春を楽しんでいたのではなかった。これぞ、信長の騎馬訓練で、馬は汗に濡れ、泡を啗んで、その日の暮れ近く―安土城に帰ってきたのだ。

帰ってみると、女房連は無断で城を出て薬師詣りをして未だに帰城しておらなかった。

見る見る信長の怒気が膨れ上った。

信長の大業は未だ途上にある。四面には強敵がひしめき、いつ何時、安土城に攻め込んでくるか知れない。夢々、懈怠油断があつてはならない。

それに、城の女房が、春に浮れて遊山とは何事か、しかも主君の

許しもないのに、城を出るとは何事。それで城中の士気が弛緩なしと云えようか。信長が怒ったのは当然である。

キリキリと齒を噛み鳴すと、信長は、執拗な疝癖の鬼となった。憎しみの執念がふつと頭を拾ってきたのだ。

「早々立ち帰れ」

信長から嚴命を受けて使者が桑実寺に疾った、主命を伝え聞かされて、十八人の女房連は、さっと顔色を変えた。

信長の癇癖を知るだけに、いかなる勘気に会うものかと、生きた心地もなく戦慄した。

これをみて桑実寺の長老光然上人は、

「儂は、かねて信長公のお目通りも願う身であるから、儂からお詫びを言上すれば、よも成敗はありますまい。安心して帰られよ、」

そう云って、慰めながら、光然上人が附添って女房連は帰城した。すぐさま、庭前に引き出され、信長が雪洞の灯に囲れて姿を見せ、激怒して

「打首じゃ」

と怒鳴った。そこへ、まかり出て平伏した光然上人が、信長を仰ぎながら

「女房共の輕卒を何卒御寛大に、愚老の坊主首に免じてお恕し下され」

と數願に及んだ。信長は、ちらつと光然上人の顔をみて

「坊主、その言葉に違背はないか」

と妙に念を押したが、光然は、これで恕されるものと合点して「いかさま、」

そう云って平伏した瞬間、信長はさっと佩刀を抜いて光然の首を打ち落した。万座は、ぎくツ、と声を呑み、思わず女房達は悲鳴を挙げて逃げようとするのへ、信長は、

「女共！ 動くな」

と叱咤すると、家臣に命じて一人一人庭の松の木に縛りつけ信長自身で血刀を掲げ、次々と斬り捨てて行った。

ああ、天魔破旬か、外道か、提婆達多か、無残なるかな、信長は、顔を反けて仰ぎみることすらできぬ家臣達を冷く見遣って、月の光りに濡れそぼっていた。

いかにも惨、いかにも暴である。それに光然上人まで斬り捨てるとは何事だろうか。

現代の感覚からすれば、精神錯乱としか思えまい、だが―戦国時代の、堅城を守る土風からみれば、城を明けた罪は死に相当しよう。

それは、かって日本軍が、兵器尊重の精神をもって軍紀とし、銃を不用意に、いや、不可抗力にせよ紛失したり、損傷したら軍法によって断じた、あの非常識な峻厳さと一脈通じるのである。

軍紀背反者を責め抜く―その執念さが、やはり信長のように、ヒステリカルに徹底したればこそ、一軍の生脈が保てたと云えよう。

報復、暴虐のバルチザン精神は、革命には不可欠の要素であることを想起すれば、信長の如く、戦乱の統一に、荆棘を切りひらいた英雄に、このヒステリー性の、憎しみの執念さは、また、不可欠の要素であったと、私は思うのだ。

信長の残忍性―それは、人を斬ったり、苦しめたりして悦ぶ、市井無頼の、無智と無教養からくる、あの反社会的な残忍さでないことを、我々はこの英雄を理解する上に、十分知っておかねばならぬ

と思う。

信長の死生観の倒錯が桶狭間の勝利であった

信長を理解するために、今一つ、その死生観を探っておく必要があろう。

戦国の世にある強兵共が、死を敢て恐れなかったのは当り前かも知れない。攻城野戦は到るところに演ぜられ、屍山血河の殺戮が習しであってみれば、それもよしないことであっただろう。

しかし、その反面、この暗黒時代の急激なる変転と、時世の推移に生の哀れさを悲しむ哀韻をこめた人生観があり、その証左に武士をやめて仏門に帰する者が多かったことにみても分るのである。

こうした世相の中で、信長の死生観はどうであったか。ただ、武将らしい諦観だけではない、もっと痛切なもの、云い換えれば、死を悦んで生きるという、生死観の倒錯が匂っているのである。

信長は幸若の舞曲を好んだ。このことは、信長記にも強調してあるから、余程気に入った舞曲だったのだろう。

幸若の舞曲というのは、能楽の傍系とも云うべきもので、源義家八代の後胤桃井直常の三男、幸若丸が叡山の稚児をしていた時に創始したもので、信長は、そのうちの敦盛の舞曲を好んだのである。

あの「死のうは一定」という哀調の舞曲には、人間の因果が謳い尽されているのである、信長は、常に敦盛を舞い歌った。

桶狭間の出陣の前に、これを舞いおさめて、「螺ふけ具足よこせよ」と、具足を被りつつ、立ちながら食事をすませて、小姓衆五人を卒いて駆け出したのは有名だが、信長の生々として死地に馳せ

る、その姿が鮮かに映るのである。

今川軍は、その前夜（永祿三年五月十八日）すでに数万の兵力を以て、尾張の前線基地である大高、鳴海、鷺津、丸根等の砦や城を奪取していたのであるから、颱風の如く群り起って、怒濤の如く侵入してきたのである。

これを迎撃する信長が、僅か六騎で、駆け向って行ったのは、すでに人智を絶した行動であるが、信長はいかにも、死地に立つを喜び勇んでいたのだ。

清洲から熱田まで三里一を駆ける間に、二千数百騎の兵が続いたというのであるから、随分妙な現象である。

むろん、信長は道々今川軍が敗走するときは、これを追うて武器などの他の掠奪は思いのままに許すぞ、と云い布らしたから、竹槍など持った農民兵もこれに加っていたのは想像に難くない。

これらの雑兵を巧みに引具統率して、今川義元の本営を田楽狭間に衝いて、遂に総大将義元の首を挙げたのは、まったく信長の、倒錯した死生観から転び出た奇蹟であったのではなからうか。

だが、その間にあって、信長直属の常備軍は、中核体として、めざましく奮戦したのである。

その中核体が、雲の如く天地を覆うて迫り来る今川軍の圧力を前にして、一糸乱れず、信長の統率下に、血戦場に奮闘したのは、大きく信長の軍紀保持が効いている。

もし、これが信長に非ずんば、恐らく、裏切り、内通、脱走者を出して、戦う前に自壊し去っていたであらう。

一軍の上に、信長の破天荒な、超人的病癖と、その憎しみの執念が、秋霜の軍律を保たしめたのだ。

信長は、遂に迎撃の一瞬まで「作戰と決戦の覚悟」を側近にも漏さなかったのは、そのために、内部の動揺を招くことを極度に警戒したからであらう。

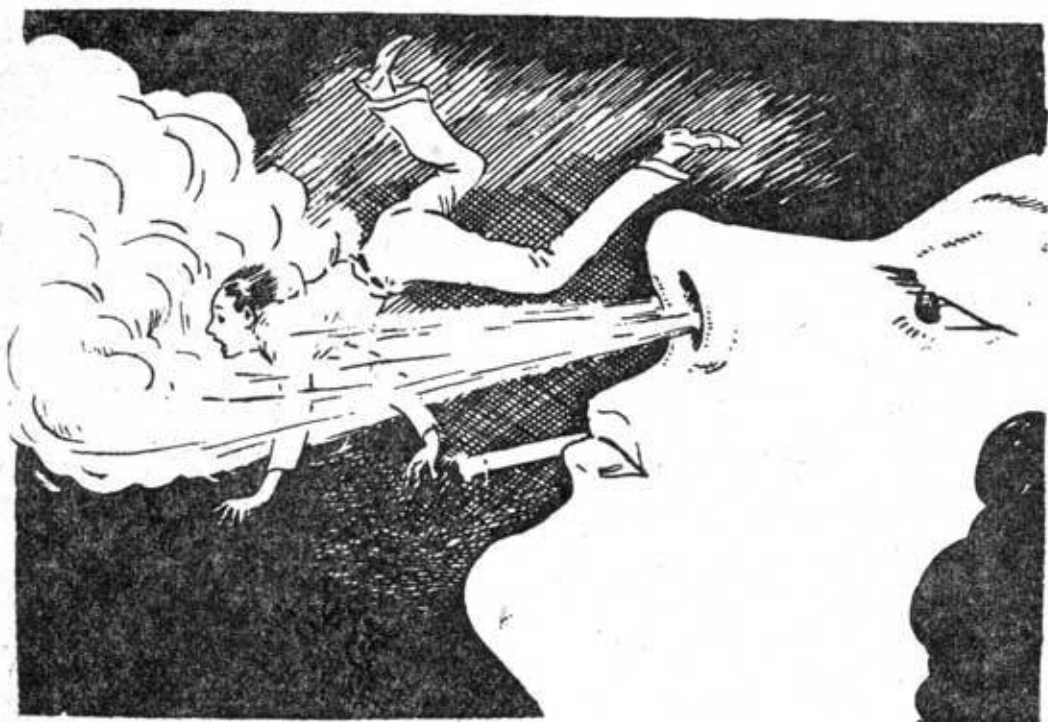
死中に活在りとも云う。また当時すでに武人にして禅道に悟入した者もある。三河の士鈴木正三（まさみつ）は、僧侶輩のことを仏法商人と貶した人だが、「侍は鯨波の中に用いる座禅を仕習はで叶わず、云々」と云っているように、武士的禅法もあった。だが、信長は、絶対の不信心者であり、無神論者であったから、およそ、仏法には縁がない。

信長の死生観は、死の悦びを知るところから来ているのだ。信長には、常に、自分を死の座に着かせて眺めるスリルを喜んでいたのである。後生日本軍の得意とした、寡兵よく敵の大軍を打ち破る奇襲戦法なるものは、実に範をこの桶狭間の電撃作戰に受けていたので、陸大に於ける戦術講座の中でも、この戦史は極めて重きをなしていたのである。特攻精神等に見る日本人の死生観も信長の死生観を研究することによって新しい解釈が与えられるかもしれない。

かつて、林や柴田の反乱軍の手中に、身一つを投入したように、ここに再び今川の大軍の真只中に、身一つを突ッ込んで行ったのである。

そこに、ぽっかりと、快勝の緒口が開いたのだと云える。軍事的には、桶狭間合戦について、なお多くの所見はあるが、本文に関係がないので省くこととする。

桶狭間を境として、信長のサディズムは、いよいよ奇怪を極めるが、それらの事件を追うて信長の本質に触れていこう。



アブ追求三十年の回顧

山田正実

女優の鼻

新年号に妻の拙作『夫婦の倒錯遊戯』が掲載され、暫時遠慮しようかと考えたが、十二月号と新年号を熟読してゆくうちに矢も盾もたまらなくなり、又々悪筆をほしきまゝにして見た。

先ず十二月号、加佐和氏の『女の首狂崇』に就いて申上げ度いと思う。

此れは女の首と云うよりも究極的には女の顔面に対する崇拜と征服慾の融合したものはなからうか。そしてその性的衝動となる原

因は完全な自由且つ支配的立場から行われる観察、愛撫、加虐と云った行為に根底があると考えられる。実は私自身も美人を見ると「あんな女が、自分の顔を私のもてあそぶ道具かなんそのように、暫らくの間でよいから自由にさせては呉れないものだろうか？」と云った願望を一切ならず起こしたものである。

一見したところ加佐和氏は可成り強いサディストのように思われるが、単純にそうとばかりも解釈出来ない問題がある。と云うのは氏が相手の女性に完全な「首」になり切る事を要求して居られ、羞恥を表現する発言、或い

は表情の変化さえも禁じる如く述べて居られる事は興味深い点である。何故ならば此れを反対に相手役の女の立場から考えると、如何に相手が自分の顔を玩弄物にしようとも、平然として何ら羞恥を表示しない冷然たる女：と云う事が想像されるからである。「フン、そうしてあたしの顔をもてあそぶのが貴男の願望なのでしょう。あたしの顔の魅力はそれ程貴男の心を征服し切っている訳ね。まあいゝわよ。それ程貴男が望むならたとあたしの顔をいじくり廻しなさい。あら、今どこをのぞいているの？ 鼻の腔？ そを……。それであたしの鼻の腔をのぞいた貴男の御気分はどうなの？」。興奮にふるえる男をよそ目に冷然と無表情にすまし込んでいる美貌の女。その女の男に対する絶対的な自信の強さ。その自信の強さを示すものこそ羞恥なき美女の「首」そのものではないだろうか。或いは此の解釈は加佐和氏の性向にマゾをプラスした私独りの所感が発展したものに過ぎぬかも知れないが……。

次に私は春木俊野氏の「マゾヒストのスクラップ帖」を読んで、機会があれば一度実物を拝見したいと思った。春木氏が此の上今一つ「鼻マニア」であったなら……と願うのは無理だろうか。勝ち誇って男を組敷く女。性的にも力倆に於ても男よりも強い女。その女の不敵な自信を表徴している高い鼻。その女の高く美しい鼻に想いを致される時、春木氏の胸に何んの反響も現われないのであろうか。ともあれ、私の性癖は確かに春木氏の近くに位置して居り、此の事については同好諸賢をはじめ、特に田村実氏辺りからも一度御教示賜り度いと思う。

さて北谷氏十二月号「四つの鼻」は全面的に賛同する。末記の編集に対する希望写真の春山氏案に修正を加えられた点も結構だと思う。又私がマゾヒストとして触感的にもそれ本来の機能的にも鋭敏そうな形態の、女としては強い感じの鼻型を好む事も氏の眼力の前で再自認する、唯問題の性質が違ふけれども氏の御意見で疑問に思われるのはスーザン・

ヘイワードの鼻の事である。氏も又「少し調和が崩れている……」と断わって居られるが、私は唯こゝで別図Aに於けるb型の鼻腔がヘイワードのものであると云う事実を御報知申し上げ度い。私は此れを或る映画で確認して以来、私の脳中にある鼻美人の名簿中からヘイワードの名前を放り出してしまった。実は私もそれまでは美しい部類だとばかり思っていたのである。美しい鼻と云われる以上何はともあれa型の鼻腔であって欲しい。此れは北谷氏もきつと同じ御意見であらうと思つてゐる。氏の云われるエリザベス・テイラーの類似鼻を求めるなら、私としてはジェニファ・ジョーンズを挙げ度い。顔の魅力は幾らか劣るがジーン・ピータースもつまみ上げ型である。ヘイワードの鼻腔は単にb型であるのみか、極度に細くて鼻頭に近い箇處で中央へ鍵型に折れ曲つた形となり、他部分の肉がいやに厚く、鼻頭は肥大である。此の鼻の為に顔全体が仰向いた時、痴呆的な印象をさえ与える。此れは同好の先覚者北谷氏が単にへ



イワードの鼻腔を観察する機会にうまく出合
わされなかったゞけの事と私は考えている。
筆罪を幾重にも御詫び申上げる。

十一月号春山氏の「一フエチシストの見た
鼻」を読んで、実に親しい知己を得た心地が
し愉快の情を禁じ得ない。氏の提示された条
件のうち鼻前庭の露出やその色。ハイライト
や分泌物の存在と云った辺り総べて同感であ
って、強いて問題とするならば鼻前庭の露出
面積の程度と云った事柄になってくる。春山
氏が手近かな映画女優にでも例をとって論じ
て下さればよかったのに……と云っている。

真鍋氏は多年米国に居住され、白人女性の
スッキリと高い鼻を見馴れて居られる為か流
石に点が辛く、日本女優ではわずかに京マチ
子一人を選んで居られる。私も又たしかに京
マチ子の鼻は日本人には珍らしい理想形であ
ると思うが、それは均整美を求める上から
云った理想そのものに過ぎない点もあるよう
だし、又京マチ子にない魅力が山口淑子にも
あり、女の鼻なるものは結局格別無残なもの
でない限り各々個有の美なり魅力なりを備え
ていると考え度い。「そりや君は君の相棒美
智子夫人の鼻が一番好きなんだろう」なんて
半畳を入れちゃ困る。私にも公論の立場と私

論のそれとの区別ぐらゐはさせて頂き度い。
さりながら先輩真鍋氏の京マチ子の鼻に対す
る感覚は、一種の正確さを以て四十の声近い
筆者の胸に響いて来るものがある。御健勝を
祈ると共に、又誌上で活躍されん事を期待し
てやまない。

北谷氏は久我美子を挙げて居られる。久我
は此の際ちよって目立たない存在の様だが、
その鼻の美しさは、私もつとに認める処であ
った。北谷氏が此れに着目して居られたのは
流石だと実際敬服した。久我に関しては某雑
誌(平凡だったと思うが……)にその記者との一
問一答が写真入りで掲載された事があり、「貴
女の顔の中で、一番気になるのは何処です
か?」と云う質問に、「此処ですの」と彼女は左
手の指先で、自分の左の鼻翼を摘まみ上げて、
鼻腔を示している写真が出ていたのを覚えて
いる。面白い問題である。彼女は恐らく自分
の鼻腔について極度に強い羞恥感を持ってい
るか、でなければその反対であろうと思う。
そして或いはマゾヒストかも知れない。私が
見たところでは彼女の美貌に唯一つ惜しむら
くは、歯並びの悪い点が気になるのだが……。
さて、ではどう云う事になるかと云うと、
京マチ子 均整美 真鍋氏推選

久我美子 情感美 北谷氏推選
山口淑子 官能美 私

まあざっと此んな結果になった。さてその
次に私は宮城千賀子の鼻に御注目を煩わし度
い。此の大年増女優の鼻こそは「鼻と云うも
のは、即ち斯う云う形のものにて候」と云わ
ぬばかりの感じで、一つの典型的な模範を示
しているような印象をうけるのである。でそ
の次に、

宮城千賀子 標準美

とし度く思うが、余り主観が強過ぎるだろ
うか。

私はグリア・ガースンの鼻にも、大体宮城
千賀子と同じような典型的なものを感じるの
である。ガースンの場合鼻前庭が相当大きく
露出されて居り、春山氏にとっても御注文通
りとなるが如何。

又春山氏の云われた鼻頭部の溝……此の「溝」
と云う条件ではリタ・ヘイワースが素晴ら
しい。大体此の鼻頭溝は男は童貞を、女は処
女を各々失なった時から鮮明に表われて来る
とか聞いた事がある。一概には云えない事だ
が性的にエネルギッシュな性質の人程深くて
鮮明に見えるように私には思えてならない。
此の意味で米メトロの肥大漢の悪漢役ウオー

レス・ベアリーの溝こそ、女の場合としてアリ・カーンとの情事に浮名を流した性的女優リタ・ヘイワースのそれに、一脈通じるものを私は意識するのである。

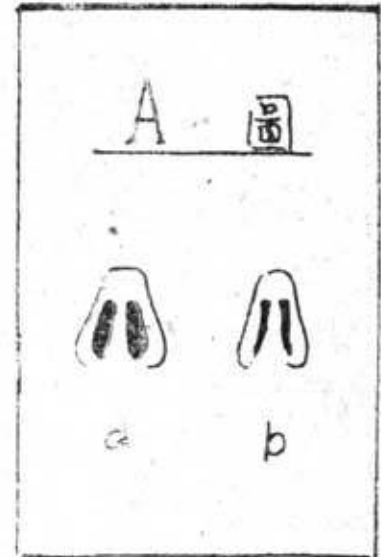
何？ 「美智子夫人の溝

は」だって…。

妻の鼻については、又あとでいくらでものろけるから…。

総じて美しい鼻と云うものは、同時に高くで、それ相応に腔も大きくなくてはたのもしくない。今どうしたか知らないが、米女優ガートルード・マイケルの鼻腔なんぞ、形態が立派な上に大きい事驚くばかりで、私なんぞ一度見ただけで偉容辺りを払う彼女の鼻腔のとりこになり、同じ映画を何度も見に行ったものである。

元来日本の女優は鼻腔を露出する事を嫌う為か、スクリーンで鼻腔美を観賞する機会に至って少ないが、山口淑子と云うサムライは



胆な点があり、鼻の演技力では何んと云っても日本女優中の第一人者である。

鼻も単に高さだけを云うならば日本女優中で津島恵子などは相当高い方だが、その割合に興味を湧かないのは細過ぎるからである。

高くて細い鼻は腔が細長きに過ぎて鼻全体が少しも鼻らしい感じを与えない場合がある。

既に鼻である以上は鼻汁の一滴も落ちて来そうな、本来の機能上からも鋭敏そうな鼻であつてもらい度い。耳を近づければ空気の入つてかすかな音も聞こえると云う鼻らしい鼻であつてこそ生きた鼻として、接吻と同時に舌端で腔の掃除もし度くなる訳で、いやにシヨロリとしたねん土細工そのままの感じ

では何んの趣もないではないか。

私は今、面白い夢を見ている。その夢とは「全日本ミス鼻コンクールの開催」である。そして私はその審査員となつて天下の鼻美人を一堂に会せしめ、その鼻及び腔の美を飽く事なく觀賞し、肚の虫——ではなかった——身体の何処かにいる虫を納得せしめ度いものだと。

女 覆 面

さて此処等で話題を変えて見よう。

覆面すると云う事は窃視と通じる要素を持っている。唯普通に云われる窃視者は物陰に全身をひそめるのに対し、覆面の場合は顔と云っても別に裸になる訳ではないが、結局身長、恰幅、服装から受ける印象以外に、その覆面者の特徴のとらえどころがない。覆面者はその利点を応用して刺客、間諜、強盗、強姦等の物騒な目的を遂げんとする訳で、特にそれが女の覆面者である場合、その女の姿



がサディスティックな目的を暗示しているが故に、筆者の如きマゾ男にとって興味の対象となってくる訳である。

勿論、覆面と云っても、その目的が必ずしもサディスティックなものとは限らない。大分以前、江戸川乱歩氏の小説に「覆面舞踏会」と云う作品があった。此れに表現されている目的は単に覆面者が他の会員に自分の正体を知られまいとする受身的なものであり、又此れに対する作者の心理描写の手法も、その観点が極めて客観的な立場からなされていたに過ぎなかった。

此れを主観的に覆面者の立場から述べるならば、大分に変った問題を含んでくる事になる。即ち単なる窃視者の場合、物陰から窃視し得る目的物は或るせまい範囲に限定されているのに対し、覆面者はその行動の自由性の故に自己以外の世間全部、広く云えば宇宙の万象の全部を堂々と窃視する事になる。そして自分の正体を知る者は自分一人だけである……と云う自覚は、一種の孤立感とスリルをもたせて来る訳で、私の妻の美智子などは、奇怪な覆面姿で月夜の山道を散歩したがる癖があり、その心理が又此処に於てうなずけると云うものである。

話は飛ぶが昭和六年頃だったか、当時東京の読売新聞に野村胡堂作の「身代り紋三」と云う大衆的な小説が連載されていた。此の小説の中に白い頭巾で覆面した怪剣士白縫虎五郎と云う謎の人物が現われ、しきりに勤王の志士を斬り殺すが、遂に自分が斬られて始めて覆面を脱ぎ正体を現わすと、意外にも此れが美しい若い女で或る幕府要人の娘である。女ながらも剣道に慢心し人を斬る事に一種の快感を覚え、父の任務を助勢する為に仮名の覆面男装で活躍したと云う訳である。彼女を斬るのが何とか紋三郎と云う勤王の志士で、此れが物語りの主人公なのであるが、ストーリーの上ではむしろ謎の怪剣士虎五郎に興味の中心があつて、読者を引きずったものである。ところが此の小説が映画化される事になった。幕府要人の娘……即ち白縫虎五郎に扮する女優は誰か……と思つたら、何んと此れが浦辺糸子である。尤もその頃はまだ若くて娘役をしていた。

そして偶然にも、私は京都太奏の新興キネマ撮影所で「身代り紋三」の撮影を見物する機会にめぐまれたが、此れが又ガツカリする結果となつてしまった。と云うのはあの小柄な浦辺糸子が白覆面で颯爽と立廻りをやる場

面を想像していたのに、実際は五尺七寸もあろうかと云う大部屋の男優が終始替玉をつとめていたからである。

此の小説の中にこんな場面があつた。

白縫虎五郎の為に深傷を負った勤王の志士兵藤兵馬と云う人物が、「もう斯うなればどうせお前に殺されて死んでゆくのだから、せめて今世のみやげに謎と云われているお前が誰であるか、一と目顔を見せてくれ」と苦しい息の下から頼むのである。虎五郎は無言でうなずき、自ら頭巾の一部をとり外して顔を見せる。勿論小説では此の辺が中間どころであるから、作者はわざと虎五郎の正体に触れず、その顔を見せられて驚く兵馬の方を一方的に描写している。「意外だ。白縫虎五郎とはお前か……お前であつたか」。兵馬の驚きの言葉を冷然と聞き流した虎五郎——実は若い美しい女——は、正体を見せたからにはその秘密を守る為にも兵馬の止めを刺さねばならぬ訳で、再び目深かに覆面をし直し、僅かに見える瞳にサディスティックな光りを見せ、無言のうちに必殺の気合を籠めて双手突きに兵馬の胸板を貫ぬく。その太刀の切っ先が背中今まで突き出していると云つた状景である。元来野村胡堂の小説には時折り女覆面のサデ

イストで、殺人マニアであるところの女主人公が登場するが、此の作家、殊によると私とその方面に於ける傾向を一にするのかも知れない。

此の外にも女の覆面人物が主役を演じる小説として、「落花の舞」「覆面の女將軍」「神変麝香猫」等があるが、もう一つ文章の上の写実だけではどうも興奮がうすい。

原駒子と云う女優は春木俊野氏もちょっと引例されたが、マゾ男性にとっては誠に嬉しい女優である。私が小学校五年生頃、近所の遊び仲間に兵児帯で覆面する事の大好きなT子と云うお転婆がいた。今でも子供の間でチヤンバラっこが流行っているが、その頃は映画でもチヤンバラ全盛時代で、子供の遊びと云えば棒切れを振り廻す事にきまっていたものだ。そしてT子は必らず斯う云ったものである。「あたしは覆面しているから原駒子よ。あんたは阪妻で、あんたは月形龍之介だわね。それじゃ始まりよ。さあかかって来やがれ。幕府の犬ども……」。実際のところ原駒

子の覆面姿はそれ程ファンに親しまれていたものだ。当時は東亜キネマのピカ一女優でその後日活へ入社してからも覆面映画に出演している。よくよく覆面頭巾を被る事が好きかでなければ覆面に縁のある、云わば覆面チヤンバラ女優のナンバーワンの存在であった。唯一つ容貌に今一步女らしい魅力に欠ける点があったのは惜しまれる。

そこへ行くと御大省三の愛娘マキノ輝子（後に智子と改名）は、妖艶な美貌に覆面男装で盛んに活躍したものだ。何だか題名は忘れたが火消型の頭巾で男装帯刀と云う扮装で出演し、その頭巾の一部が輝子の形の良い鼻にグイッと引っかけられた写真が、映画雑誌にまで載っていたのを覚えている。何しろ懐しい思い出の事で、当時は尾上松之助が死ぬ前後、市川小文治が二枚目をつとめていたと云えば、今の若い人達にはちょっと見当のつきかねる状況であろうか。高木新平や武井龍三なんて役者に人気があり、阪妻は売出しのホヤホヤ、千恵蔵に長三郎（後の寛寿郎）がど

うやら顔を出し、月形が前記マキノ輝子と浮名を流し、市川百々之助が帝国キネマで一人威張り出していた。その頃の現代劇なんでものは感傷的な年頃の女が見るものと限られたみたいで、全盛のチヤンバラ映画の前では、焼け鉄を水に入れる時のシュンと云う音さえ出ない有様であった。

東亜キネマに帝国キネマが姿を消し、新興キネマが設立されると化け猫専門女優面がアルバイトの如き姐御鈴木澄子が登場した。私は澄子の顔は余り好きではないが、覆面で出てくる映画だけは一応見に行ったものだ。その代表的なものは阪妻プロ提携第一回超特作吉川英治原作「神変麝香猫」前後篇と云うヤツである。天草残党の女首領に扮した鈴木澄子は終始覆面帯刀の男装でバツバツと男共を斬り殺す。余り沢山殺すので仕舞いに憎らしくなって来た。

その頃、大都キネマに三条輝子と云う女優が現われて、覆面は勿論の事、あの女のいやがる手拭の盗人被りまでやって見せた。此の



女優の顔はちょっと愛嬌のある丸顔で、鼻は大きくて高かったから頬被りもそれだけ興味があつた。トーキー初期の頃で盗人被りをした鼻声が、そのまま録音されて実感が満点であつた。その後長い間映画では女優の盗人被りにお目にかからなかったが、戦後「快盗火の玉小僧」で特別出演の翼ひかると云う宝塚女優がやった。

此の映画を見て感じた事はそのストーリーいや人物の性格に随分無理が多いと云う事である。斎藤寅次郎と云う監督は、元々男が弱くて女が強いと云う倒錯的な人物の扱い方をし、其処に喜劇的要素を求めたがる傾向を持っている人だが、それにしても此の映画は余りにもゆがめ過ぎた難があり、無理に無理をこじつけたギグシヤグと音のしそうな中途半端な喜劇になってしまっている。強くて賢明な女の目明かし、義賊火の玉小僧とは実はその妹で正体をかくして姉と共に暮している。最後に妹は正体を曝露して姉に召捕られる。此れだけでも相当無理な筋書で然も悲劇的である上に女ばかりに片づけさせているみたいな感じだし、伴淳や堺などの当代喜劇の人気者は何の為に出演しているのかちよつと見当がつかねる。妙な映画もあつたものだが、

斎藤監督が何故此んな映画を作ったかと云う疑問：そこに何か曰くがありそう。そしてそれは私にとって嬉しい曰くであるかも知れない。

此れについて私はヨゼフ・フォン・スタンバークを思い出し、彼がデイトリツヒを使つて監督した数々の名画を思い出し、そしてあの最後の作品「スペイン狂想曲」に彼が示した第三期的病症：白痴的演出を考えると、デイトリツヒの魅力に映画監督の立場からする極端な崇拜の感情の為に、遂に名監督としての命脈を自から絶つに至つた、彼スタンバークの苦衷が理解出来るような気がするのである。

さて戦後の映画で覆面した女優は長谷川裕見子、宮城千賀子、喜多川千鶴等であるが、容貌の点では原駒子や鈴木澄子よりも皆上等であるにもかゝらず、その覆面の扮装に大胆さがなく、立廻りにもサディスティックな積極性を欠き、かえって私には魅力がとぼしく感じられた。

さて舞台に眼を転じて見よう。

演劇では女優の男装はあつても覆面は殆んど見られない。唯手拭の盗人被りだけは時折り見受けられる。その代表的なものに大江

美智子の「雪之亟変化」一人二役三十六回早替りーと云うのがある。俠盗闇太郎に扮した美智子が豆絞りの手拭で盗人被りをして登場すると、必らずと云つてよい程、此の場面では「大江っ」と客席から声がかかる。私は東京の新橋演舞場で一回、京都の南座で二回、大阪で一回と合計四回も見ただのであるが、その四回が四回共、例外なく此の場面で声がかつた。

実際女優の覆面のマニアは中々たくさんあるものであつて、常日頃は念頭に無くても不意に映画や演劇で覆面した女優を見ると、ふと興味を呼び起こされると云う程度の人や、或いは私の如き鼻偏執マニア兼業の多忙家に至るま



映画 マタ・マタの仮面

で、その数だけは決して馬鹿にならない事が予想出来るのである。

親しい間柄の若い女をつかまえて「ちよつと君、女の鼠小僧になって御覧」と、有り合わせの日本手拭を持ち出して見る。

「そんな事……いや」

と、至って真剣な表情で嫌悪し、飽くまで拒否の態度を示す女と……

「あら、凄いわ」

といさゝか興味を抱く女とがある。

処が前者の「いや」と拒絶する女でも、他の女が被って見せた場合は熱心にその顔を観察するものである。後者の場合は好奇心と悪戯気分が半々で、自分で態々鏡の前に立ち、ためつすがめつ自分の男装顔を賞味する。いずれにせよ「仮装狂」的変質性が呼び覚まされるから中々面白い。

外国映画で一つ忘れられない話をつけ加えよう。

たしか昭和五年頃に封切られたメトロ作品で、セシル・B・デミル監督の「マダム・サ

タン」である。

夫が他の女に心をひかれ妻をかえりみなくなる。妻は夫の愛情を取り戻すべく苦心するうちに、或る富豪の所有する大飛行船上で仮装舞踏会が催され、夫妻は互いに秘密で招待に応じる事となる。さて妻は舞踏会の席上へ大胆奇抜な「悪魔」の扮装で、仮面に顔をかくして乗り込み満場の紳士を悩殺する。彼女の発散する妖艶な魅力にひきつけられた男の中に、それが自分の妻である事に気付かない彼女の夫も加わっている……と云う訳だ。夫は情婦の存在も忘れ果て、只管「マダム・サタン」に近づき色々と微妙なやりとりがある。

処が最後に飛行船に事故が発生し、招待客達は各自落下傘で飛び降りる事になる。その時初めて妻は夫の前で仮面を脱いで、自分の魅力が情婦よりも勝れている事を宣言する。今更ら自分の妻を再認識させられた夫は大急ぎで落下傘で妻のあとを追う。そして目出度し……と云う筋である。此の映画で主役の妻に扮するは名女優ケイ・ジョンソン（その後はベ

ティ・デヴィスやレスリー・ハワード等と、「痴人の愛」に共演した以外、映画では余り活躍はしなかった）。彼女が舞踏会で被る問題の仮面は、宝石らしいものを一面にちりばめた豪華なもので、眼の周囲や鼻の辺りの構造はいかにも悪魔の面らしい凄みがあつた。大きく顔の上半面を覆った仮面の奥にきらめく情炎の瞳。仮面から僅かにのぞき見える高い鼻頭や形のよい鼻腔が、表情の変化に伴って示すデリケートなうごめき……と云った辺り、サタン・ジョンソンの顔は今でも私の眼前にちらついている。私が日本式の覆面以外にアチラ式の仮面にも注目し始めたのは此の映画を見て以来だった。

（以下次号へ）

【読者通信】 二月号は文字通り素晴らしいものでした。特に四馬孝氏の編上靴をつけた女の責絵は一番私の気に入ったものゝ一つでした。これからも四馬氏にどん／＼描いて頂けると御願ひ致します。

（Y・M生）



緊縛モデルの素顔 (その一)

辻 村 隆

本誌に掲載されたものや、アルバム「美しき縛しめ」並に分譲の写真集を通じて、諸氏がお馴染みの緊縛モデル嬢については、その都度小文や雑文で紹介して来たが、今以て、交際、お問合せ、私的の交通を希む方が跡を絶たない。

彼女達のプライベートな面を、完全に剔抉し、御満足のゆく様書き現わしたいのは山々であるが、彼女達のうち、一、二のモデルを専業とする人たちを除いては、殆んどが普通の娘さんであり、家庭的に、対外的に差支えのある人達許りなので、私も彼女達のプライベートの面に関しては、今迄殆んど触れた事がなかった。

度重なる諸氏の懇望もあり、編集長にも一

応の諒解を得たので、私が今迄緊縛したモデルの、その許される範囲内に於て、彼女達の性癖、趣味、素描を、赤裸々に掘り下げて見たいと思う。

——川端多奈子——

緊縛モデルには、何を措いても先ず一番に川端さんを挙げねばなるまい。

事実、私は川端さんを緊縛した回数が最も多い。(川端多奈子という名は勿論本名ではないが、始めの二、三回の外、私も編集部の人々も川端さんと呼ぶ様になった。誌上に、又読者の通信に川端の名が宣伝されてからはその方が反ってピッタリしたからだ)

始めて川端さんと逢ったのは、昭和廿七年の六月中旬頃だった。恰度奇クがB5判の大

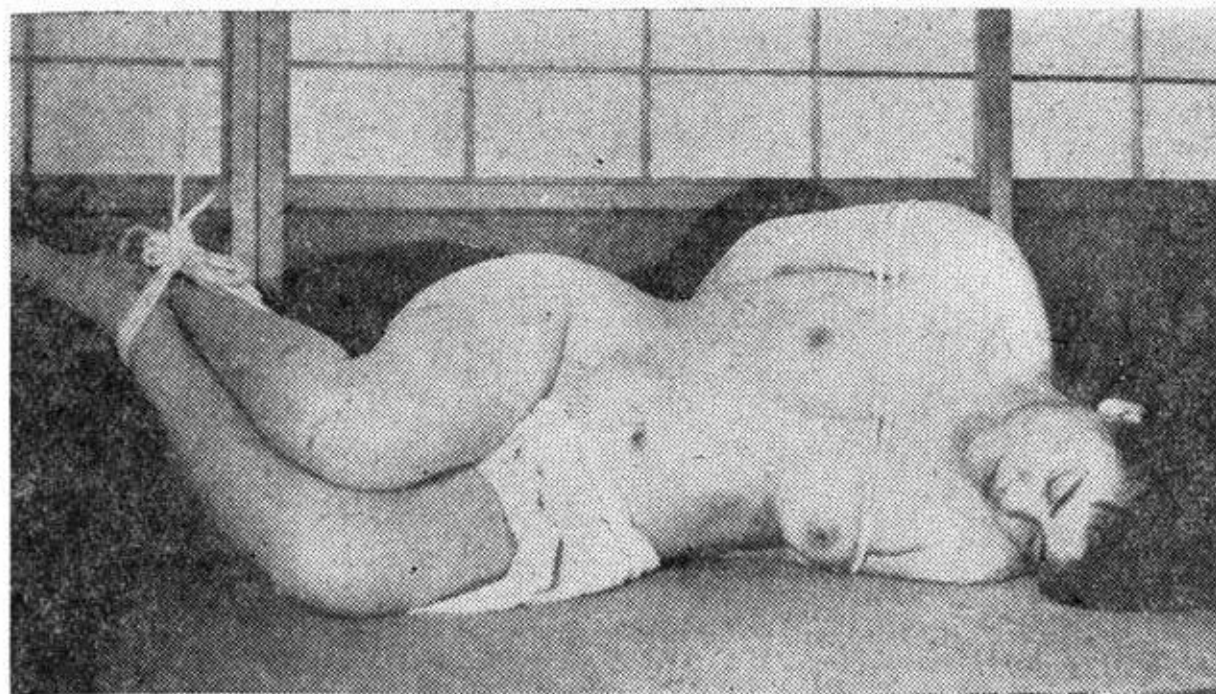
型に行き詰り、A5判本に移行した当時だったと覚えていいる。当時の懐かしい思い出として、今も私の記憶を去らないのは、川端さんが緊縛の本格的構成をした最初の人だからでそれ迄にも立花郁子さんを縛ってはいるが(廿九年十月号「モデル女のマゾヒズム」参照)立花さんの場合、未だ実験的な試みに過ぎず、構成を考える迄には至っていなかったのである。

郊外電車の或る駅で、私はその日の午前十一時頃、途中で落合った編集長の箕田氏と共に彼女を待った。

「彼女には因果を含めて、同行者があるとは云っておきましたがねえ」

と、それ迄一、二度ヌードに彼女を使った

一番最初に撮影したもの（川端多奈子嬢）



ことのある箕田氏は、既に約束の時間を二十分許り過ぎた腕時計を見て、些さか不安そうにした。

——ヒョツとしたら、私の出現を恥かしがって来ないのではなからうか——。

私は彼女への、初の計画的緊縛構成の期待に胸を疼かせ乍ら、多分の焦燥と危惧にかられていた。

「来た来た。矢張り来ましたよ」

伸び上げる様にして箕田氏は、今着いた急行の電車から、ドヤドヤ吐き出される群衆の中に、逸早く彼女を見付けて小さく叫んだ。

水玉のワンピースの軽装に白のサンダル、つばの広い紫のリボンをつけた帽子にかくれたはにかんだ微笑——、それが川端さんの最初の印象だった。

紹介された瞬間、川端さんは目に見えて顔を赤くパツと染めた。私も恐らくはドキマギして、顔を赤らめたのではなからうか——。

今にして思うと、如何にもうぶな初会で、大人しくて口数も少なかった彼女が、あの様に典型的マゾヒストになろうとは、其の時は夢想だにもしなかったのである。

川端さん自身、容貌には自信なかった様であるが、事実余り美人とは云えなかった。特にニヤツと笑った時など、顔中が皺になり、眼が細くなって、すきまの多い味噌っ歯が剥き出されるのには閉口した。年に似ぬ唄れ声

も奇妙に感じた。（川端さんが初期だっただけに、殆んどメーキャップらしきものを施さなかったのは、確かに私達の手落ちで、ヌードにも、馬子にも衣裳の必要があったとは後々気付いたことである。その当時緊縛ヌードは縛りさえすればと云う先走った観念が、こうした心配りを忘却させていた）

にも拘わらず、彼女の牝鹿の如くキュツと引緊った肉体は、緊縛に最もふさわしい条件をすべて備えていた。体重も十三貫少々で頃合だし、皮膚にたるみのあった立花さんに較べては、全く素晴らしいと思った。

箕田氏の緊縛の説明に、彼女は無言でコックリうなずいただけだった。

予め約束していた××荘で、四、五時間に亘る五本の緊縛のフィルムを撮り終る迄、私は無我夢中のうちに、かねての思い通りのものを十二分に駆使した。

ぐっ和张った胸のふくらみ、くびれた胴、堅くしまった双臀もさる事ながら、緊縛に対する驚く程の忍従力の強さ、柔軟な骨格、如何なるポーズに対しても無言の許容——すべては緊縛のモデルにピッタリと嵌っていた。

それが川端さんをマゾヒストにかり立てる一里塚とも知らずに、私と箕田氏は、互に顔

を見合せて、その成功を喜び合った。

それからは室内で五回、野外で一回と、都合六回に亘って、私は川端さんを凡ゆる角度から、今迄持っていたアイデアを駆使してさまざまなに緊縛した。回を追うに従って、あたかも階段を一步一步昇りつめる様に、時には逆吊り専門に、或る日は海老責、雁字搦目にアクロバチックそのものの姿に縛り上げて、緊縛の頂上にと昇りつめて来た。

その間、彼女が四国の松山の生れで、友達に誘われて来阪し、一、二度職を転々し、今は某商事会社の事務員である事も知り得た。

川端さんは内気で温馴しく素直であった。その素直さ故に、凡ゆるポーズにも易々として拒むことなく、相当の肉体の苦痛をもこらえて盲従した。彼女の体内に多分に沈潜されていたマゾの要素が、緊縛によって抽出せられ芽をふいて、典型的マゾヒストに変貌し果てたのかもしれない。

始めて緊縛を頼んだ時、誰しも一応それに躊躇するか、拒絶するのが普通であるが、川端さんに限っては、無言の肯定が、寧ろその行為を迎合したのではないかと思うふしさえ多分に感じとられた。彼女としては衷心より人知れず、希むところであったのかも知れな

い。

殊に激しい緊縛の場合、例えば逆吊りや不自然なポーズによる緊縛の、長時間に亘った時、彼女は屢々マゾヒスティックの境地に陥った。眼を細め、唇を少し開き気味に、薄すら笑った様な顔になって、そのトキとトコロをわきまえての、懸命の抑制にも拘わらず、無意識に吐く嘆息は激しく、口を洩る動物的な小声の叫びは、私達もドキリとする程の生々しさをこめて耳をつく事があった。

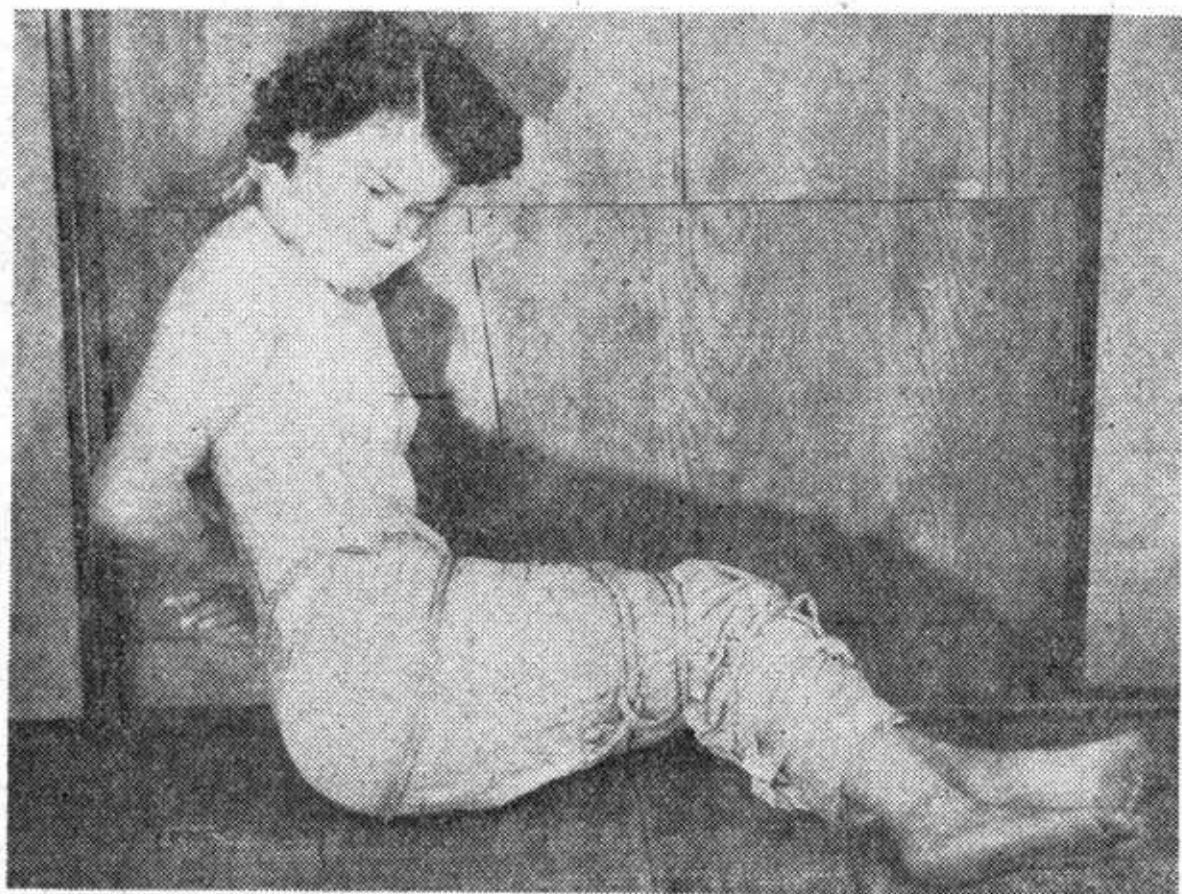
川端さんは勤務の都合から、大抵は日曜日と定めてあったが、はては自ら進んで如何なる日でも、編集部側の要求に応じる様になって、遂には度々欠勤するところから、勤めをやめねばならなくなって、あっさりとその会社を退社してしまった。

二十七年九月号(羽村さんの狂い咲くカンナが掲載されていた)辺りから二十八年六月号辺りまでの緊縛写真は、あたかも川端さん一辺倒になっっているし、二十八年九月号に発表された、緊縛美のオンパレードの

特集は、いかにその間、川端さんを緊縛し続けてきたかを物語る集大成でもある。川端さんの緊縛によってその後の雑誌奇譚クラブの

次第にマゾの兆候をあらわした頃

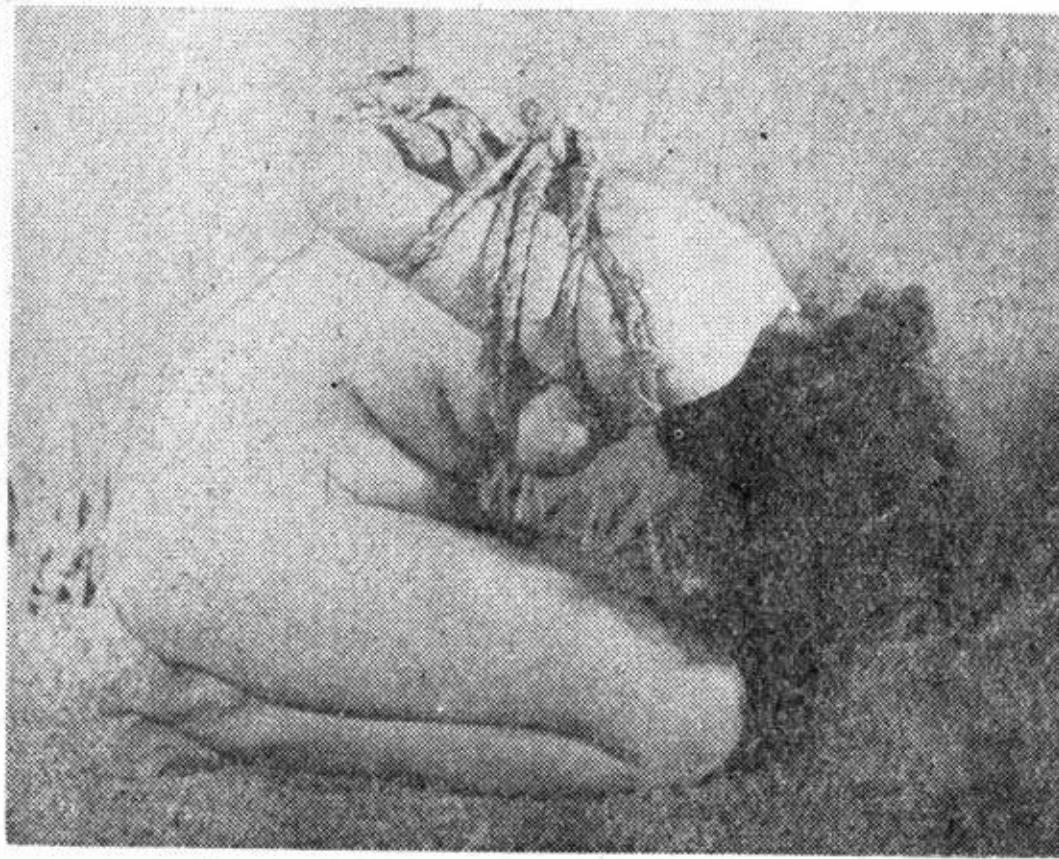
(川端多奈子嬢)



在り方、行き方を決定したと云っても過言ではない。それ程に川端さんの緊縛のポーズは読者に反響があったのである。

勿論それ迄にも立花さんや僅か一回限りで終った人達は、外数人、緊縛の写真も撮るには撮ったが、到底川端さんのものに較べては

完全にマゾ化した頃（川端多奈子嬢）



序の序にも行きつかない、ほんの形式程度なものだけだった。

けれど読者は、より以上の変化を求めたがる。いつも同じ川端さん許りに、漸く飽かれ出したと気付いた編集部側は川端さんに代る嶄新なモデルを探しにかかった。事実、緊縛を要求し、緊縛にのみ生甲斐を感じている川端さんの存在は、編集部としても重荷となりつつあったのだ。

自然、川端さんを使わぬ日々が続いて、新たなモデルの登場で、編集室がそれに力を入れ出したのが、彼女には手にとる様に分った。彼女は瞭らかに焦燥し、落胆し、皆が自分のマゾの亢進を恐れて躊躇している事には思い当らず、恨む気配すら見せた。

頻々とする読者通信を整理するうち、彼女は淡路島岩〇の読者某氏の川端礼讃とモデルになってほしいという声にひかれ、やむにやまれぬマゾの吐け口をそこに見出し、又一つには儚ないレジスタンスから、編集室には内緒で便りを出したらしい。

本年の七月末、川端さんは、突然

故郷の四国へ結婚するという理由で帰った。

それから、約三ヶ月許り経って、旅館らしきベッドにひしひしと緊縛された、川端さん自身の裸身のあられた素人撮りと思われる照明の不備な密着写真三葉が、編集室宛に送られてきた。宛名の文字は正しく川端さん自身の筆跡である。一行の文すら書かず、この緊縛の写真のみ三葉を送って寄越した、川端さんの心境は奈辺にあるのだろうか。

故郷の四国に落着いて結婚したということだが、単純で素直で、寧ろ愚直とも云える川端多奈子さんは、今、この広い青空のどこかでこの一文を、どんな気持で読んでいる事だろう。彼女の多幸を祈ってこの項のペンを置こう。

——杉 芙 美——

杉さんは数あるモデルのうちでも、一番肉体が貧弱で目方も軽く、おっぱいも少なくて所謂ポリウムと云うものが全然ない。

それでいて、彼女の化粧は最も巧みで、見る人をして惹きつけずにはおかぬ、カメラフエイスをつくり出す妙味を持っている。

下手な化粧をするより素顔の方が綺麗な伊吹さん辺りから較べると、杉さんは職業柄、きめの荒い肌や、鼻の線が、メーキャップに

よって、実に生々と浮彫され妖艶味を帯びてくるから大したものである。

始めて杉さんに逢った時も、彼女は些かも憶した風はなく、平気で私に会釈した。

撮影場所に到着して、カメラの準備を整える間、彼女はショルダールバッグから、数葉のヌード写真を取り出して私に示してくれた。

人に見せうるだけの自信を持っていたのだろう。勿論単なるヌードだけのものではあったが：鉄環やナイロン縄の縛り。それに襲われる女の、縛られる迄をシリーズとして、一枚々々順序を追って撮ったのも、杉さんが初の試みであった。

最初、私が黙って縄を数条出した時、杉さんは一寸いつもとは勝手の違った表情で、マジマジと私と、握られた手許の縄とを交互に見つめていた。

「一体どうするの？ 何だか気味が悪いわ——」

杉さんは箕田氏に、大丈夫かしらと云う不安な表情をして見せた。

「単なる今迄式のヌードでは、既に飽かっているんでね。縄はいわばアクセサリーだよ、心配いらないから——。痛かったら云ってくれればすぐ解くよ。さあ——」

彼女には、川端さんの様なマゾ傾向は余り見受けられなかった。緊縛ヌードも彼女にとっては、箕田氏の云うアクセサリーと単純に考えたのかも知れない。それで、少々強く縛っても、不自然なポーズに緊縛しても敢えて逆わず意の儘になってくれた。

お灸を据えたのは杉さんが始めてだった。

「熱くないかしら——。お灸なんて据えられるの、私生れて始めてよ……」

「大丈夫、パチリとやればすぐ火を消すからね。これもアクセサリー——」

総てアクセサリーで片附けてこんな条件のもとに「灸責めの女」を撮る事になった。

私も事実、今迄灸を据えた経験がなかったが、人聞きや、見様見真似で、糊で固めた大きな艾を、杉さんのお臀にとれぬ様やっこさくっつけ、線香で火を点じた。

艾の燃える匂いが鼻をつく。カメラの位置を定め、ポーズをつける間も、艾はどんどん燃



杉美美嬢の緊縛フェース（初めて縛ったとき）

えて、

「あッ、あ、熱ッ——とって、とって……」

と、ものの二分も経たないうち、早くも火は彼女の皮膚に迫っていた。咄嗟に慌てて、ぐっと火のついたのをその儘掴みとると灰皿に捨てたが、成程杉さんの熱がるのも無理ではなく、既に皮膚のその部分は、桃色に赤く色づいていた。

「懲りこりよ、こんなの……」

後手に縛られた杉さんは、恨めしそうに腰を曲げてその個所を見つめて、真実やり切れぬ様な顔でつぶやいた。

それを漸くなだめて、数枚撮った灸責めの構図も、背景の悪さから、も一つ映えなかったのは残念であった。

その杉さんも、三人連縛の時は、最も積極的でリーダー格であった。

もともと二人の連縛を撮る予定であったが万一に一方が都合悪い場合を考慮して、杉さんの外、村田、坂口の諸嬢にも連絡しておいた処、その日は誰も皆都合がついたのか、次々と三人共皆来てしまったので、今更一人だけ帰れと云う訳にも行かず、急拠予定を変更して三人連縛となったが、流石に構成もたじたじの体で、金のかかった割にいいものが出

来なかった。

互いに初会同志の事とて、相手を牽制し合ってたか、もじもじして、誰も脱衣しない。杉さんはその時、思い切った様に、

「三人で縛られるんですよ。ぐずぐずしていつたって時が経つ許りだわ。始めましょうよ」と躊躇する二人をせき立てるようにして、構成、撮影者側に背を向けると、逸早くパツとシユミーズを捲くり上げた。

三人を漸くにして縛り終り、パチリとやっかかと思うと三人を解き、又改めて縛り直してポーズをつけると云う重労働で、あの時は真実、私はヘトヘトに草臥れた。

若い裸女三人を自在に縛るなんてと、諸氏に羨望されそうだが、初会同志の彼女達の気持を付度しつ々の行動は、多人数の緊縛が如何にやり難いかわくづく思い知らされた。

杉さんと村田さん、村田さんと坂口さん、杉さんと坂口さんと、こうしたコンビによってサドとマゾの対照のものを撮ったが、誰の場合も縛られた方が気楽そうで、反って縛らずに、縛った女を責める者の方がやり難そうにぎこちなかった。

所詮、女性は先天的に受身の立場にあるものだろうか——。(春日さんの如き特殊な例

もあるが……)

杉さんは特に困った顔付で、ポーズもびったりと来なかった。坂口さんが一番まじだった様だ。

その折、手の空いた一人が、じっと私の構成振りや、二人の態を傍らで眺めているのが何とも眼障りでならず、その気持が私の動作を抑圧して、意の儘にならぬ事夥だしかった。

前後三回程杉さんを緊縛したが、話がブライベートに触れると、巧みに話題を外らしてしまうので彼女に関しては詳しいこともわからなかったし、又知ろうともしなかった。

支那料理や油濃いものが好きで、撮影後はよく支那料理を食べに行く慣わしだったが、快活に喋べる杉さんが、一旦ブライベートの事になると、亀の子の様に首をすくめ、舌を出して笑ってごまかしてしまう。

三人連縛が終ってから杉さんが一番軽いところから、彼女独りを滅多に縛って、他の両嬢で吊り上げたり逆吊りにしたりしたのが身にとたえたのか、縄をといてからも暫くはじっとした儘起き上らなかった。

(未完)

「マゾヒストの手帖」速報欄

沼 正 三

一六 江戸川乱歩「影男」

(面白倶楽部新年号)「化人幻戯」と並ぶ乱歩の新作。冒頭「断末魔の牡獅子」の章にマゾ・

プレイの場面がある。旧作「猥奇の果」中「兩人奇妙な曲馬を覗き見すること」の章で偽の品川が貴婦人の馬になる場面の類想だが迫力は数倍する。主人公が覗く鏡張りの室内で美人猛獣使が五十男の牡獅子を仕込む。

「ジャンゴ! もう参ったのか、チンチンだ。ホラ、チンチンだ」

……「よろしい、今度はお馬だ」

……「もっと早く、もっと早く」

……ジャンゴは乗り潰され、顔を踏み付け踏み潰された上、女の尻で口と鼻に蓋されて悶絶してしまふ。尙二月号では有閑婦人達が全裸の美青年二人を決闘させて刺戟を求める「闘人」の場面もある。

一七 アン・ブライヤー夫人

手記「火災の抱擁」(傑作倶楽部新年号) テキサス農場主令嬢である白人女医がインディアン青年が負傷して担ぎ込まれたのに対し、「まあ、犬なんか抱え込んで来て。いやよ、私、犬の治療なんか」と嫌がり、泊めてやっていると頼まれても、犬小屋以

外の場所は許さない。これがテレビの普及した現代のこととして書かれている。

一八 陣出達朗「まぼろし姫」

(同誌十月号より連載中) 大衆誌によくある女剣豪ものに属するが、この作者のこの種作品は先の「女左膳」など以来、妙に倒錯的な味がある。美女としての資質を強調し、それに剣技をプラスするためか。ゴーチェ

「モーパン嬢」の低俗な日本版ともいえる。村松梢風「女侠剣豪伝」(読売新聞連載、名勝負物語第十三話)となると、同じく女剣士でも実録(日下秀雄)で倒錯感がない。

一九 野村胡堂著「美男狩」上下 戦前春陽堂文庫に入っていたのが同光社版で出た。「風流活人剣」が続巻として出るがこれはマゾには不要。屋敷内の十二の小部屋に人檻を造って中に美男を飼ひ、淫楽の赴くまに彼等を弄み殺したり、決闘させたりするのを娯楽とする將軍の娘と、犠牲にする美男達を江戸中から狩り集める役の女催眠術者。共に美貌のサディストである。尙マゾヒストの船頭

が愛人にマゾ的な口説きをする場面もある。

二〇 菊池寛著「火華」

これにも有名なものが東方社版で再刊された。ヒロイン美津子は女性の作者の好んで描いた支配階級女性の一入だが、その驕慢さに於ては第一等かも知れぬ。ピケを張る労働者群の真中に自動車走らせることを命ずる彼女の眼中には、労働者は人間として写っていない。一方労働者達の意識が戦後と異って甚だ低調なものとして描かれ、すぐ彼女の膝下に跪かされるので楽しい。パギストの方にすゝめる。

二一 マゾッホ作戸川貞雄抄

訳「獅子使いの女」「城の中の女」(リベラる二月号) マゾッホの作品の訳ということでは先ず珍重すべきものである。短篇集からの抄訳だが、原文を知らないので、訳文については何ともいえない。内容は前者の方がよく、後者は余り面白くないが、前者もマゾッホの真の面目を伝えるものではないようだ。然しとにかく、訳出自体を大いに多としたい。

二二 小島信夫「犬」(文芸新年号) この作者のマゾヒズム

が真物かどうかは、神西、中村「小説診断書」(文学界新年号)に云うように疑問はあるが、作品の基調にいつも独特の劣等感があって、マゾヒストを喜ばせることは確かである。「狸」(新日本文学新年号)にもそれが見られるが、「犬」は犬との同一化のモチーフも入るので魅せられる。犬の品評会に行つて犬に変身し、知人から嗤笑される幻想の場面は見逃せない。因に、阿部知二編「犬」という新書本は、雑文のみで、マゾ的には価値がない。

二三「女に強姦される男」(愛情生活二月号)

これは本号手帖第八十五に紹介した原文を剽窃したものである。手帖本文に書いたような剽窃の例が又一つ追加されたわけだ。女優の代りにマダムにするなど僅かの改変のみで、あとは引伸しただけである。

二四 泉三彦著「動物風流

ばなし」第四話「令嬢笑うと失尿するの巻」で、太宰治「斜陽」にある貴婦人の立小便について著者の知合の某貴婦人が「妾もしよっちゅうよ」と平然肯定したことを録したあと、パリに学

(三 月 号 の 分)

んでいたさる貧乏画家の話が出ている。女を買いに行った筈なのに、容器に黄金色の液体を貰って持ち帰って来たので、訊ねると、「肉が高かったから、スープで我慢したよ」と答えたという。実は始めからスープが目的だったのだが、恥かしいので、一応肉を目的としたように洒落で誤魔化したのだと読める。因に佐藤弘著「はだか隨筆」も放尿のテーマを扱っており、世評高いものだが、マゾヒストとしては読む価値全くなし。却って、雑文ではあるが、「おばさま族流行す」(リベラ二月号)にコール・ボーイとしての学生を愛用する富豪令夫人のことばとして「今の学生さん、何でも、ハイハイっていうこときくから。——この間の子なんか、トイレにまで、ついでこようとすのよ。……本当よ、マダム……」とあるのなどが、スーパ党にはピンと来る。

二五、村松梢風「男装の麗人は生きている」(オール読物二月号)川島芳子が上海でT(田中)中佐と関係していた頃の実見談として、彼女が彼を呼びつけ、叱りつけ、土下座して謝罪させたりしたことを記している。男を奴隷のようにする冷たい愛人だったらしい。



内外タイムス 十二月十二日附
「マゾヒスト・クラブ潜入記」の写真

二六、レオ・ヒューバーマン著小林・雪山訳「アメリカ人民の歴史」上巻(岩波新書)本誌新年号手帖第七十九で引用した菊池著「黒人奴隷制度と南北戦争」は近時刊行された専門書だが、そこまで専門的に読めない方のために、この本の第九章「農業の南部」をすゝめる。南部諸州における家畜としての奴隷の飼育ぶりが、小冊子としては良く纏まっている。奴隷売買否、ニグロと牛馬を一緒にしての家畜売買の新開広告の例や、黒人奴隷用の牧師説教集の抜萃なども紹介されている。「神はお前達の上に、自らの代りとして主人や女主人を置き給い、お前達が神に対して振舞うごとく彼等に対して振舞うことを期待し給うのだ……」

二七、丹羽文雄「街の草」(新潮新年号)畸形侏儒が出てくる。人間犬テーマに通ずるので私としては非常に感銘が深かった。乱歩の一六の作品と共に今月の収穫。近く手帖に取り上げる予定。

号外、内外タイムス十二月十二日附「マゾヒスト・クラブ潜入記」具体性のある文章で興味本位の虚構記事ではないことが推測される。紹介されている「鞭を持つ美女」の写真も珍とするに足りよう。(写真参照)

号外、科学小説誌「星雲」の創刊 前月号手帖で取り上げた空想科学小説の専門誌が誕生した。創刊号の出来栄は、翻訳作品の選択も最上といえぬし、巻頭のハイインラインものなど新読者に当然必要な解説(氏の諸作品は独特の未来史構想を共通の背景とするので、その一つたる本号の「緑なす地球の丘」は二十一世紀初頭の物語。この一連の諸作品には他星人が出て来ない。他星人ものとしては別に「人形使い」の名作がある)を缺いているなど不満も多いが、ともあれ、健全な発展を祈りたい。そのうちにはマゾヒストを喜ばせるに足る作品も取り上げられるようになるう。



M への手紙

二 俣 志 津 子

— 第一 信 —

M、お手紙有難う、志津子は今原稿用紙持っていない、で、ノートに書く。

随分「奇ク」を見なかった。その期間だけ流転していたんです、流転と云ったつて、肉体を売ったり、裸になったりなどはしない。乞食はした、乞食をしたってブライドを持っていた。ファッション・ショウのモデルやデパートで海水着を着たモデルを見ただけで、何も買わなかったって罪にはならない、乞食が飢えたって通行人の責任じゃない。大体、微温な同情なんて私は悪だと思っています。非情か熱情です。ね、そうでしょう？ Mは最初私を男だと思っていたね。男とは云わなかった、誰かゝあなたを男だと云っている。と、書いて来た。その文を見た時、直感した

んだ。Mも私を男だと思っていたな。とね。あの頃は弱った。私がエロ小説を発表したのがバレて、縁談には差支えるし、友達は色眼鏡で見えるようになるし。まあ、ウブだったんだ。今だってウブだけれどね、一応結婚と云う過程を通ったけれど、また一人になれば一人の心にかえる。処女だって処女性を持たない女だっているし、娼婦だって処女性を失わない女も居る。

「奇ク」も変ったね。執筆者にいい人が堅実にペンを執るようになったのを感じる。例えば吾妻新氏ね。立派だよ、同人雑誌や純文学畑に居る青くさい作家よりも、大人であり、確乎とした文学精神を持っている、八月号の「コンピネーション随想に答えて」の最後の

章「然し、ローレンスは実際の性生活を親友の前に持ち出しません、私達も同様です。」その「私達も同様です」に磨かれた、強靱な精神を見て嬉しくなった、こう云う精神のあるところには腐敗がない。お世辞じゃない。私はこの人の文はこれだけしかまだ読んでいない。が、文学する者は特殊な直感を持っている、そう自負している、そして吾妻氏をライバルとして意識する。

沼氏のも、新年号の「あるマゾヒストの手帖から」しか読んでいないが確かな人です。たゞ沼氏は焦点を合せようとして正確さを、と云うよりは、真実をくもらせているのを見る。と云うのは「始めに先ずこの被征服者が犁を引いた」のではない。始めに犁を引いた

のは……と、私はこゝで沼氏と論争する気はない。始めに被征服者が犁を引いたのにはちがいない。が、私は沼氏にモルガンの「古代社会」ペーベルの「婦人論」及びエンゲルスの論文を読み返していただきたいと思う。勿論、私には私としての意見もある。が、この号に書かれてある限りではドグマが覆いかくせない。多分、多くの人も意識的にも無意識的にも承服し難いものを、その文にもった事と思う。更に私に云わしめれば、沼氏にオットー・ワイニゲルの「性と性格」も読み返していただきたい。と、ねがう。

私はこの夏、曲玉だとかハニワだとか古墳を掘る手伝をした。私は沼氏の文を読みながら、天皇族がエゾ、アイヌ、其の他この日本列島に土着の住民を、その文化もろ共に滅ぼしながら、手前勝手な神話、伝説を書き散らし、自己の権力を確立していったプロセスを考えた。古墳や出土器——事実は神話や伝説を覆しているのをじかにふれて来ている。自己の主義、思想、哲学、等を主張するのはいい。自から得た新しい理念は、たとえ貧しくとも輝くであろう。しかし、他人のものをスクラップして、それに自分の歩調を合わせる場合には、より多く、広く、深く読み、且つ理解してから後に書いてもらいたい。と、ねがう、生意気だろうか？

Mよ。デブ君の、そして神経の細く行きとどいたMよ、あなたは便箋の第一枚目を手紙の最初に使い、手紙の最後に便箋の最後を使ったね。私はそれを見落すほどまだ神経がすりへっていやあしない。若し、あなたがそれを意識して使ったのだとしたら、Mよ。あなたは女たらしだ。私の恋人としての資格はある。残念ながら恋人じゃない、エスペラント語で云う ANIKO だ。そして指導者でもある。Mが書いているように、私はMにかゝった抵抗する暇もなく縛り上げられ、フオートに撮られてしまうだろう。遠くに居るといふことは、何といふだろう。甲府連峰が遙かに見え、富士の頭がその上にちよっぴり白く見え、Mはその先の先に居るのだ。大阪にでも居れば私はまる裸にされて縛られ、「奇ク」の誌上で衆目にさらされていたかも知れぬ。私はこの距離に感謝する。私は真面目な、貧しい、ノーマルな女の子にすぎない。素朴な平凡な、嘘をつかない、いっどこでも自分が正しいと思ったことを正しいと云える、「天裂くるとも正義行わるべし」を実行しようとする愚かな女の子にすぎない。

Mよ。少し長い手紙になったが、もう少しこの面白くない手紙を読みつゞけてほしい。こんな文ばかりではなくなるし。又、私は「奇ク」が続くかぎり、そしてMがそこに微笑して、時々私に手紙をくれる限り、この手

紙を続けようと思うのです。

Mよ、私は少しあやまりたいことがある。それは「魔触」と「籐人間」を書き切らずに失踪してしまったことです。あなたは、その二篇の載っている雑誌を送ってくれて、続きを是非書くようすゝめてくれました。私は意を新たに喜んで書きたいのです。が、書く前に一言断っておかねばならぬことがあるのです。それは「籐」についてです。籐と云う植物は雨に打たれてもなかなか腐らない。竹よりは遙かに強靱な植物なのです。挿画を見ましたが、私の作品の中にあるのは、あのように巻くのではないのです。確かに私の説明不足もありましたが、が、あれでは、あの挿画では意味をなさないので。もっと具体的に云うと、あなたは籐椅子を知っているでしょう。あの籐椅子の編目に使っているものをゲンロクと云う。うば車などにはハンシンを使います、骨格に使っているのがタイミン及びチュウミンと云うのです。ゲンロクを水にしめて肌に巻いてみる。やがて籐が乾くと締って、もう少しでも動かそうとすれば皮膚が切れてします、装飾用として籐を使って人形を作ると、顔、手首、足首は籐では出来ません。それから、乳房とデルタ地帯の肌は生地のまま出る。乳房などはふくら編みに編めばいいが、デルタは何としても駄目です。腕、脚、胴を別々に籐で巻き、前記の部分の肌を

あらわにする。せざるを得ない、そう云う人形、何と云うおかしい人形だろう、これを生きた人間に実際にやったら大変です、くさりやその他の責め道具とはちがい、容易に解除出来ない。解除するのはとんでもない時間と困難を要し、しかも傷だらけになります。

あの作品に現われた第一号とも云うべきがそれであり、更にその上からタイミンで骨をつくり網代編に編む、実際には網代編は人間を包む形態では編めないが、あの、びっしりと一分のすきもない編方で、女の子をカイコのように籐の中に包んでしまう。それを書きたかったのです。籐は軽くて細工が利くから日常的な責具が作れると思いますが、実際に作られることを私は望んでいません。私は籐を扱う技術も習った、安い給料を貰ってこき使われて覚えました。そういう知識の裏付けがあるからこそ書けるので、もっとじっくりよく説明をしながら書かねばならないと思っています。私はそう云う特異なものを売物にしたい。私は私の持っている貧しい才能で、モデル、倫理を底にふまえて「性」ととり組みたい。それは人類ある限り新しいテーマであろうと思います、私は自分を裏切りたくないと共に、読者も裏切りたくない。

Mも知っているでしょう、且て私に読者から多くの手紙が来しました。それは真面目な、可哀想な位真面目な、真剣な手紙ばかりでし

た。中には、私のヌード・フォトがほしいとか、男だろうとか云うのもありました。九十九%は嘘のない、真情のあふれたものばかりでした。私はその手紙の山の中で、この人達を裏切りたくない。と、切実に思った、今でも忘れません。私は書ける限り返事を書いて、しまいいには書き切れなくなり、やめていたゞきました。私はその時、小説と云うものを考え直しました、私は告白を書くまいと思う。あくまでも小説は小説であり、私の小説の中に出てくる二俣志津子は絶対に私ではないことを断っておきたいのです。私は、本当の私はこのような手紙や、自伝や、随筆の中で顔を出します。読者はその私に呼掛けて貰いたいのです、想像して貰いたのです、理解して貰いたのです。小説に実物の私は居ません。私の理念や思想等があります。その点くれぐれも申し上げておきたいのです。M、あなたにもよ、私は作者と作中の人物とを密着させていません。

もう五、六行書いたら寝ます。

M、私の生活はMや他の人が考えているよりもより逼迫した生活をしています。同情を買いいたためにこんなことを云っているのではないのです。事実を云っているのです、こゝは三坪の床もない物置です、雨戸を閉めると暗れた真昼でも夜同様です。そして、夜は名古屋駅の待合室よりも寒い。私はこの部屋

の隅に犬の訓練バシゴをリング箱の上に乗せて、その上に蓆を敷いて寝ています。今、この手紙をその上に腹這いになって書いています。二、三日前まで、室の中で枯葉を焚いて部屋を暖めていましたが、家主に禁ぜられてしまいました。ベッドの側に犬の箱が置いてあります。その中に入って寝てみました。が、土は冷えます、でやめました。家主は病院に入り、主家には人も居ず、大声で歌を唄っても、誰にも迷惑を及ぼしません。多分この物置はこれから私の小説の中に出て来るでしょうが、やはりそれは小説の中の物置です。

志津子は今ひもじい、志津子はひとりぼっちだ。小人閑居して不善をなす。と云うが、志津子はもの自からを潰さない、こらえる。ワイニンゲルが、女は孤独であり得ないし、またそれを理解することも出来ない。と、きびしく云っている。今それを「女」一般として私は反駁出来ないけれど、私は自己をそれに対している。

近く、私のところへ来て一緒に暮したいと云う少女が来るかも知れません。こゝではしっかり抱き合って寝る以外、場がない。私が犬箱に入りたくはないし、私を頼ってくる少女を犬箱に入れることも出来ない。その子は少し絵を書くから、挿画を画かしてみます。お見せしますから、ものになれそうでしたら

励ましてやって下さい。

M、又書きます。お休み。明日髪を売って食物を買うつもりです。四、五日経ったら作品を送れると思います。やはりノートに書きますが、今のところ許して下さい。やっといンキとノートを買えたのですから。

十二月五日夜

かしこ

私のM様

拝復

僕はこゝに丁度百五十字の誌面を買って、君に返事を書くことにした。だから簡単に要点だけを摘んでの書きぶりをお許し頂く。

「二俣志津子」という名前は、僕にとって懐かしいものゝ一つだ。いつだったか、君が本誌に本名で小説を書いていた頃、贈呈誌が発送係の手落ちで君の勤務先の方へ行ってしまった、会社内で雑誌が回覧されたことがあったね、もう大分以前のことだが、あの時は流石の心臓娘の君も弱ったらしかった。でも「すました顔で奇譚クラブを受けとる私を御想像下さい」といった余裕綽々ぶりを示した便りを寄こしたことがあった。そこで、適当なペンネームを作ってくれというので、二俣局の二俣と、静岡の志津とを咄嗟に組合せたのが「二俣志津子」だった。あの頃は君も純情だったね、「あんな小説を書いているとお嫁にも行けない」とお母さんに叱られた、と真剣

になって相談してきたんだからね。だが、最近は変わった、文字だけは少しも変わらないように思うのだけれど、内容は二俣志津子の天邪鬼が一層輪をかけてきたようだね、君が吾妻新氏をライバル呼ばわりしたり、沼正三氏の手帖にケチをつけたりしたことについては、嘴の黄いろい雛鶏として、穏健な両先生は許して下さるだろうが、君は僕のことを公然とデブ君と罵ったね、この事については僕は十分なお礼をしたいと思っている。君は、大阪と関東中部の君の住居の距離感到感謝しているらしい。然し、それは君が近代の交通機関の異常な発達を計算にいられていない誤算だ。

僕に若しその意志さえあれば、明日にでも君の家の前に立つことが出来る。この前「魔触」を書いてきたとき、東京の君の家迄の詳しい地図と家の見取図迄書いて送ってくれたね、そして上京した際は立ち寄って下さいと在宅時間まで書いてあった、僕は忙しいから行けなかったと大分たってから返事したら、「とうとう来てくれなかったのね」と半ば安心したような返事が来たのを覚えている。

は、あ、君は知らなかったんだね、僕が何度も君の前に姿を現したのを、今後、いっつ忽然と君の眼の前に姿を現すかもしれない。それでいて君は僕であることを見破られないのだ、どうだ面白いだろう。君は正直で本当な意味で真面目な人だと思う。はっきり

結婚生活を経験したと公言している、君のこの正直さが今後の文章の上にどのように表われてくるかが大変楽しみだ。

君はサドでもマゾでもない平凡な女だといっている。然し僕が今まで貰った数十通の便りを読んだ範囲では、どうしても平凡な女だとは思われない。「こんなタイプの女を一度縛り上げてみたら」という興味を持たず部類に属する女だ。君にすれば冗談だというかもしれないが、奇クの口絵に出演してもいいと云ってきた。そして、僕が怒りにまかせて何の抵抗も感じずに、君を縛り上げるような御膳立てまでもした。訪ねてくれればよし、訪ねて来なくなったら、いつか、口絵の巻頭に二俣志津子の素裸にむかれて縛り上げられたフोटを載せたい念願だ、そして、その時の感想を君自身の手で本文に書かせるのだ。マゾでもサドでもなくてよい、君なれば、きっと巧みにポーズし、初めて縛られたときの感想や縛る方の側の態度についても鋭い観察眼を持って誌上に再現してくれるだろう。

挿画を描く少女が来る由、習作が出来たら送らせて下さい。いゝものだったら誌上に紹介しよう。

十二月十日

二俣志津子様

Mと呼ばれた男より

責 画 の 回 想

依 田 精 二 文 並 画



挿 画 (1)

そう。もうあれから、十年も経ってしまいました。当時、比較的厳格な家風の中に、育てられた故か、私の「性」への目覚めは、一

般の人よりも遅れていて、徴兵検査を間近かに控えた、専門学校に在学中の頃でした。そして、その方向も、普通の人とは若干違って

いました。それは、専攻の科目以外に、趣味として習った画を、内気で外に発散の出来なかった青春の血の吐け口として、秘かに自室の勉強机の上で、家人の眼を避け乍ら利用したのでしたが、それがいつか、責画の道へと私を追いこんでしまったのです。

拙ない筆から生れる、それら美女の様々の緊縛の姿態は、私をこよなく満足さし、貴重なコレクションとして、今でも大切に残してあります。しかし、その間、私の生活様式の変動と環境の変化が、どの様に自分の描く画面を変えさせて、来たのか、画帖を繰りながら、常時の思い出を辿りつゝこの一文を書いて見ました。

青 春 時 代

私は丁度、二十才の頃の夏―或る街角で、当時サーベルを腰に吊った制服の巡査(警官)が、一人の若い女を、連行して行く姿を見かけました。白いブラウスに、黒いフレヤーのスカートを身につけた、二十二、三才のその娘は、何をしたのか、肩口から露れた、白い両腕の手首を、前に重ねるようにして、捕縄で幾重にもまかれ、固く縛られ、その縄尻を巡査の手にしっかりと握られていました。うつむいて歩を運ぶ、その娘の理智的な顔は、



挿 画 (2)

けられた五人の人影が、眼にうつりました。夫々が、高手小手に、後手に縛られ、どう言う風に繋がっているのか、素人にはわかりませんでした。丁度それらが一本の縄でもあるかの如きかけ縄の妙味に眼を見張ったのです。そして若い四人の男達の間に交って、一人の女性の姿があった事は、私の心をいやが上にも曳

きつけずにはいませんでした。その若い女の髪は当時の電髪（パーマメント）で、矢張りシャツとスカートの洋装でした。他の男達が全部、後手に、首にまで縄が、かけられていましたのに、女はそれと反対に、両手を前にして、手首、胸それから首へと、キューツと絞られるような形で、縄がかけられ、前後の者の間にはさまってヨロ／＼と曳かれて行きました。それは長いまつ毛に、羞恥と、憂いをこめて、辱しさにあえいでいるかの様でした。

その様な、忘れ得ぬ不思議な魅力が、私の眼底に焼きついて私をして責画をかゝした第

蒼白く澄んで夜目にも、美しく感じられました。人々は、立止り、顧っては、それぞれ違った思いで見送っていました。私は（どうして、手錠を使わないのだろうか……。持っていないなかったのかも知れない……。しかし、わざわざ縄付の姿を衆目の前にさらさなくても良いのじやないのだろうか）と、その巡査の非常識に義憤らしいものをさえ感じましたが、又一方、彼女の自由を奪っていた、白い手首に喰い込んだ捕縄に、その時、異様な魅力を感じました。

それから
又数週間後
学校から団
体で或る法
延の傍聴に
出かけた折
その検察庁
の中庭で、
文字通り、
珠数つなぎ
に、縄をか

挿 画 (3)



一の原因だったのかも知れませ
ん。私は、思い立つと、近所の
文房具店から、スケッチブック
を買い求めて来て、まぶたの裏
に忘れようとしても忘れずに、
はっきり残っていた、刺激ある
情景の影を追って、絵筆を走ら
せました。

そしてその時、描いた当時の
作品は、年令的の若さから来た
のでしょうか、自分より二三才
位、年上の程女を好んで対象と
して描き、その出来は、今から
思えば、お世辞にも「責」と言
う言葉を使えない、ほんとうの初歩的なもの
でした。次にその代表的の作品の構図につい
て若干書いて見をした。

連行される女——洋装で、その頃流行し出
したバーマの髪形の、近代的女性の手首に、
鎖で連繫されて手錠を、前手にかけてもの、
又は白い腕を組むようにして、両腕に固く縄
をまきつけたものを多く描きました。(1)

逮捕される女——これは、占領地帯にもぐ
り込んだ、女工員員の逮捕される情景で、酒
場又はキヤバレー風の背景でのた。追手に捻



挿 画

丁度逆でしたが、当時はサジ的
なものより、只女の自由を奪っ
ただけの姿で、充分に、男の征
服感が充たされ、片方では、
「男装の麗人」と言うものに憧れ
た、若いロマンチズムがこの
様な構成を形造らしたのかも知
れません。(2)

十字架上の女——十字架もこ
の当時、好きなものの一つでし
た。そしてそれ等の対象は多く
洋画上に姿を現す女優達の肢体
でした。そして、その当時、女
性の下着類としては、パンツ程
度のものしか知識をもたなかった私は、外国
の金髪女を描く時でも、その域を脱していな
かったのです。地上に立てられた十字架の柱
に、妖艶な肉体をさらして、苦しみにあえぐ
女——仰向いた白い顔に真紅の唇、横に開いた
両腕の、二の腕と手首は、シッカリと横木に
固く結ばれ、開かされた両脚の足首も又、下
段の横木にくくられて、動くことすら出来な
いで、ジット運命に身をまかしている姿、そ
してこの場合黒い目かくしを書き添えると、
更に刺激が強くなります。(3) (4)

『残虐なる女性達』画集

解 説

ルドルフ・ヘゲマン特集

Rudolf Hegemann

森 本 愛 造

一 『アルゼンティンのアマゾン』
(Argentinsche Amazone.)

原画が甚だ汚損して居るらしく、採録した写真版が大変に不鮮明である。右側の奥に微かにヤシの樹が二本かいてあるし、その樹の下と、左側、騎手たる女性の左腕の辺りとに夫々全裸の男が描いてある。前者はうずくまり、後者はひざまづいているのだが恐らく見えないだろうと思う。この画は、ヘゲマンの独得の筆法は余り見出せない、併し彼が後に至って奔放な幻想を馳せたと同じ様に、異国的な雰囲気を追って居る事は見逃せない。この構図は、私達にこの画家がマゾヒスティックな傾向を持って居た事のみならず、彼がこうした遊びの実験者であった事を示している。前回のパウル・カムの作品には実行できない態位、構図が散見されるのであるが、ヘゲマンに於ては、悉くといってよい位実行容易な形ばかりである。此の図については、新馬として女に仕えたい願望を持つ人々に、新

らしい、有意義な指針となっている事に注目されたいと思う。四つ足になりたい願望がいくらか強くとも、人間の手と足の形状、大きさの相違等のために、強行実施しても、想像したもの、或は、本物の馬の場合とは甚だ異った物足りない効果しか与えられないのである。実際に馬に乗る場合と異り、肩車の形では、乗られる側の具象感は十分に満足されるし、鞭や脚での示唆が、容易であり、且つ、被虐者の嗜好に適切な強度を得やすい等の実際的な長所があるのである。そして、こゝに示された人間用の鞍は乗馬鞍とは大変に違つたものであることに注意して頂きたい。(四脚の場合には前脚即ち手に補足具を必要とする訳である。)猶、画面右下方にはフランス語で L'Amazone de l'Argentine. と書いてある。勿論、最後の ie は e だけの誤りであるが、こうして作品に自国語でない言葉で表題をつけることも、マゾヒスティックなさゝやかな遊びである。(ヘゲマンは独乙人)

二 『力のはいったマツサアン』
(Energische Massage.)

マツサアジというのは単なる按摩のことだけを指すのではない。フランスの「ほゝえみ」とか「パリジェンヌの暮し」(Sourire; La Vie Parisienne) などという艶笑絵入雑誌広告欄には、よくマツサアジという名目でサディスティン、というよりは職業的女主人

が広告を出している。従つて、マツサアジとは性的な快感を目的とした加虐行為を指す一つの暗号と考えてよいのである。画面右側の女性に帽子に赤十字のマークをつけているから看護婦である。中央寝台の上には白樺管、男は今やシャツを脱いでいる。左下方にはヘゲマンのサインが見える。(一)のものとは年代的には余り離れては居ない様に思われる。序でに一言触れておくが、看護婦という職業の女性にマゾヒストの多くの者が、或程度の興味を惹かれるという事を考えてみると、現在アメリカの単行本に小説の一つのジャンルとしての看護婦小説(Nurse Novel)というのがある事とも考え合せて、面白い事と考える。人が精神的にも肉体的にも特別に弱っているときに、健康な肉体と、冷静な精神の持主であり、医学上の有識者である看護婦に何等かの形で、加虐感を与えられぬものはあるまい。ヘゲマンの作には時々看護婦特に従軍看護婦が現われるので、前以て付記しておく次第である。

三 『女首斬役人』
(Die Scharfrichterin.)

漸くヘゲマンらしくなつて来たわけである。力感の籠った画調、右側で死刑を見る女王らしき人物が裸馬に跨っていることに注意されたい。裸馬に跨ることが如何に女性外陰部に強烈な刺激となるかを考えて。斧による斬首に題材をとったこと、支那の

弁髪にヒントを得たこと、女達の衣裳、これらの幾つかの要素は、一丸となって。高貴にして肉感的なこの一幅を作り上げている。蓋しヘエゲマンの作品中の白眉であろう。

四 『サーカスの練習』

(Zirkusdressur.)

現在、器具を用いて、不自然な肢体を要求する加虐が、特に米国では好まれていらい。アーヴィング・クラウ社のフォトやカルトウにはこの種のものが多い。ヘエゲマンは場面をサーカスに採って、見事に緊迫した情緒を作り上げた。右手の位置の奇妙さが、特に画調を盛り上げていると思われる。ヘエゲマンにしては、女性対女性というのは珍しいのであるが十分に成功した作品である。

五 『看護婦』

(Die Krankenschwester.)

(二)と同じ観点からの作品、こうして日常生活に起る事件もこうした作品となると充分にマゾヒストを喜ばせる為に役立つのである。男の逞しい身体と、対象的な表情、特に女性の眼に注意されたい。まことに眼千両である。こういった題材を扱って猶ヘエゲマンは詩を失っていない。僅かな部分に至るまで彼はサディステインに対する夢と敬慕の情を尽きるところを知らぬ氣に歌いつづける。この作品などは、眺めれば眺めるだけ、作者の

執拗な讃歌が聴えて来る様に思う。

六 『鞭打女の責め苦』

(Der Gesangene der

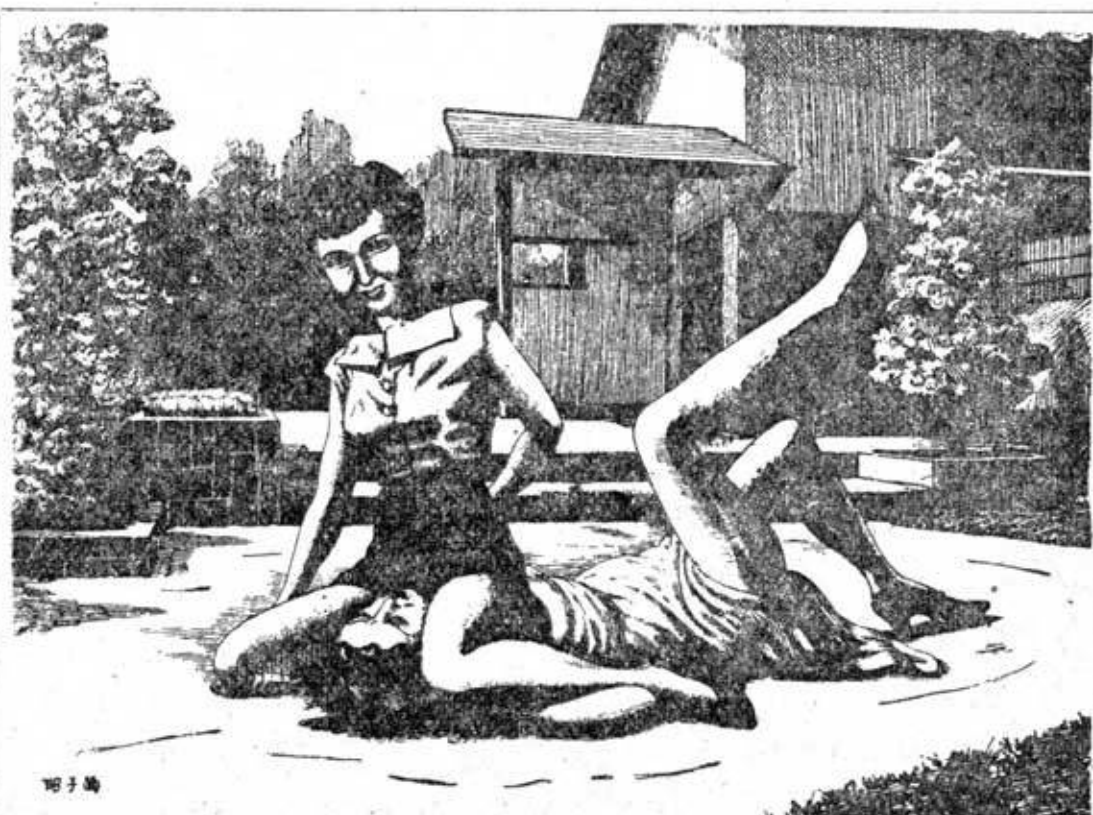
Tatarin.)

本篇中の最高の傑作と思われる一葉である。唯ヘエゲマンに止まらず、幾多のこうした挿絵画家達の作品の中でも、一、二を争うだけの品格と烈しい魅力を含んだ作品といえよう。先ず、女王の豪華なガウン、王冠と耳飾り、太い革鞭(これが「九本の尾を持った猫」の異名を以って恐れられた刑罰用の鞭である。)それを逆手に握った手の力感、脚の位置、鋭い拍車の付いた上品な長靴、冷厳、高貴な眼光と容姿一点として非の打ち処とて無く、一つとしてマゾヒストの夢ならざるはない。沼正三氏あたりの御感想を特に伺いたい作品の一つである。緊迫した空氣というものは、仲々描き出す事が容易でない。けれども、この作品は、前述の様な諸点の他に、理想的な空氣を伝えている。この点こそ、他に卓絶したと考えられる所以である。

七 『彼女は鞍上の人となった』

(Sie steigt in den Sattel.)

ひきつづいて、ヘエゲマンの秀逸の作であ



あら、いい気味だわ

長瀬昭子画

る。左側の兵士は両手に女主人(恐らくは上官の妻であろうが)の靴を支えている。彼女は下着もつけずに乗馬を楽しもうとしている。彼方の建物の上には旗が風に翻り、空は明るく晴れている。こうした幾つかの対照的な想定の上に組み立てられた一枚の挿絵が、異様な蒸気を発散している。この香りを汲むものは独り、マゾヒスティックな精神と広大

無辺な想像力とを持つ者のみである。所謂ポルノグラフィアとしての一切の要件をみたす事なく、彼ヘゲマンはかくの如くギャラントな場面を一枚の紙の上に移植する。

八「さあ、ひざまづいて」お宥し下さい」とお云い！
 (“Auf die knie und um



どちらが先にのびるでしょう

長瀬昭子画

母と女中、又は女教師達、何れにしてもこの題材は、昔日常生活の一部となっていた児童虐待と云うか児童懲戒の一つの場面である。特に注意を喚起したいのは、右側の女性の姿勢と、左側の女性が上半身裸体であること、児童の臀部を全裸にしていること、それと、二人の女性の表情の険悪さである。ヘゲマンとしては珍らしく材を家庭内に求めて居るが、矢張り彼らしく充分に効果的な作品となって居ると云えると思ふ。

Verzeihung bitten")

九『崇敬』

(Anbetung)

筆致題材共にヘゲマンとしては異色のものである。老人の眼はまくられた臀部に注がれて居るのではなく、只管にハイヒールにそまがれて居る。女の表情はもとよりの事、こうした情景は独仏の職業的女主人の処で、最も簡単に見られたものである。この老人の身なりからも、又女性との年令差から考えてもこの絵が前述の様に職業的な女主人を描いたのかも知れないと私は思う。

十『不思議な訓練』

(Strenge Dressur)

再び題材は支那に転じた。二人の女の

衣裳は、丁度グスタフ・マアレル（II ヴェーグナー）の作曲家、支那の唐詩からの靈感に基いて長大な管絃伴奏の歌曲『Das Lied von dem Erde』—大地の歌—を書いた。唐代の詩人達の品に盛られた荘大、森厳なロマンティズムを、ツ風の音楽に移し植えた。Gustav Mahler)の先例にならう、凡そ支那的ではないが、この挿絵が支那的なものである事は事実である。黒人を檻に飼う事、背景に、大変うすいので見えないかも知れないが幾つもの器具が見える事、特に男の情ない「無援」の表情、これらは、本篇中の大作として、考えられるに充分である。パギスムの傾向のある向きに対しては好個のものである。

一先ず、今月号はこれで終るが、ヘゲマンの作はこの他に更に同量位の手持ちがあるので、次回パウル・カムの補遺二葉と共に次の様に予定して居る。

○「残酷なる女性達」画集予告

- (1) Klavierstunde.
- (2) Strafstunde. in der Volksschule.
- (3) Die strenge Lehrerin.
- (4) Das Weib als Mare.
- (5) Wochenabrechnung in der Schule.
- (6) Die Strenge Dioktrice.

(以上 ヘゲマン)

- (7) パウル・カム補遺
- (8) 次々回、素人画家、写真愛好者達に拠る

マゾヒスム画集—第一回

(以上)

[映画・雑誌] 通信

最近の映画から

白石 稔

「指紋なき男」(二月号予告)

縛られる女優はP・キャッスル
終末近く悪事の露見を怖れた殺人
犯のため囹として空建物へ連れ込
まれ、細紐で前手に縛られ転がさ
れている所へ、後を追って来た無
実の罪をきせられた男も捕えられ
る。最後の接吻をとの願いをかな
えられた女は、椅子に縛られた男
に必死に近づこうとする。手ばか
りでなく足首も縛られているので
思う様に進まない。やっと傍へ近
寄りキッスとなるが、前手に縛ら
れた女と後手に縛られた男とのキ
ッスシーンは珍らしい。相手の油
断を見すまして、男のズボンの下
に隠してあったピストルを縛られ
た両手に持って悪漢を射殺し、男
の縄目をも射ち自由にする。この
間破られたスカートからのぞく太
股、手足の表情などなかなか捨て
難いものがあった。

「覆面髑髏隊」(二月号予告)

野性の女に扮した長谷川裕見子
は賊に捕われた父を探し求めて居

る内に捕えられ、後手に縛られ地
下道を引き立てられるシーン。次
いで女首領の前に引き出され縛を
解かれるが、このシーンでは後手
のクローズ・アップにより縄目が
はっきり見える。又、ラスト近く
一旦助け出された彼女は再び捕わ
れ後手姿。火あぶりの用意を始め
た所で救われる。

「照る日くもる日」(前篇)

(二月号予告)

南悠子扮する勤皇芸者は横恋慕
する旗本のためにその屋敷の一室
に監禁される。扱帯で後手縛り、
手拭で猿轡をはめられた姿で転が
されている。折りしも火事となり
迫り来る炎に必死に身もたえず
る。裾は乱れたまゝであるが足首
の縛りも想像される。この映画は
原作によると雅章子扮する女賊も
縛られ責められると記憶していま
したが、彼女の方は単に牢に入っ
ているだけでした。

「黄金弁天」(二月号予告)

月丘夢路は夫(高田浩吉)と瓜

二つの悪侍に捕えられる。物置の
中で細引で後手、胸へも縄は廻さ
れ、黒布で猿轡をつわ。悪侍が別室
へ引き上げて密談中をその姿のま

ゝ壁に身をつけて盗み聞いている
が、しばらくして不自由な後手に
刃物を持ち添えて苦心の拳句、縄
を切り脱走する。

縛られ映画落穂集

鈴木 千年

私は映画ファン、又写真マニア
として、最近貴誌上に発表されま
した女優の縛られた映画につきま
して、私の観たものの中、重複を
さけて発表いたします。

「黒鷲」(イギリス映画)

亡命したタラカノヴァの姫君エ
リザベス(ヴァレンティナ・コル
テサ)が、再びロシアに侵入して
捕えられ、ロシア帝王の正統でな
いと云わせようとして死刑の前夜
拷問される所があります。これは
スクリーン十二月号に出ています
から御覧になって下さい。

「花咲ける騎士道」

(フランス映画)

これは平凡ですが、ジナ・ロロ
ブリジダがルイ十五世の部下に捕
えられ馬車に乗せられる所、前手
に縛られ猿轡をかまされていた。

「タルファ駐屯兵」

これはかなり美しい女優が縛ら
れる。しかも後手、猿轡の馬上姿

を見せてくれたが、女優の名も場
面もあり思い出せませんのが残
念です。

「東京ファイナル二二二」

この映画は戦後初の日・米合作
と思います。終戦後、東京にいる
国際スパイ団の女スパイが手錠を
はめられる(後手錠)所がある。

「フエザー河の襲撃」

これは単なる西部劇ですが、縛
られた女優が、これ程長く出てく
る映画は他にありません。たゞし
余り迫力がないので残念でした。
女優はヴェラ・マイズルが前手に
縛られる。

「戦場を駆ける男」

ラスト近くでナチのスパイを椅
子に縛り、猿轡をはめる所あり。

「ネバタ決死隊」

これも「戦場を駆ける男」と同
じように、無名の女優が椅子に縛
られる所がある。
「あきれた迷探偵」

〔映画・雑誌〕通信

これは短篇立体映画で、女優が医者の使用する手術台に縛りつけられる所があります。

「ノックは無用」

これは子供であるが、猿轡、後手、足まで縛られている。

「トマホーク峡谷の待伏せ」
これは前手だけで、女優の名は忘れしました。

「タンガニイカ」

これはスチール写真だけで画面にはありませんでした。

日本映画では大体発表済ですの
であまりありませんが、最近の
のだけお知らせします。

「鉄仮面」第一部

女優名は忘れましたが、後手、猿轡の場面がちょっと出る。

「怪傑鷹」第一部
これも後手に縛られた女優が
ちょっと出る。

「お坊主天狗」後篇

喜多川千鶴が後手で二、三回出てくるが、縛り方は普通。

「知性」の「我が愛の記」(三条朝子)について

津島比呂史 提供

「知性」を創刊号以来読んでい
る「奇ク」の一愛読者ですが、
今日、一寸興味をひかれる記事
を「知性」(昭和三十年一月号)
から見つけましたので通信を致
します。

これは「東京都千代田区神田
駿河台三ノ四河出書房分室」知
性編集部気付、三条朝子」と
いう人の書かれた手記で、同誌
上に毎号設けられている「わが
愛の記」と名づけられた読者原
稿(十枚以内)の頁に「——一
修道尼のノート」というサブ・
タイトルのついた「黒き衣の下
に」と題する一文です。この文
章の中から「奇ク」にも向くの
ではないかと思われる一部を
(あとは大変に抽象的なのです)

抜き書してみよう。以下は
原文のまゝを忠実にうつしまし
た。(念の為)

「鞭撻の苦行。それは修道者だ
けが覗くことを許されている秘
密の世界である。日毎、犯され
ている罪人の罪を償ふために、
又、自分の中に日毎宿り襲い来
る肉の欲情にうち勝つために進
んで我が身をうち殺し、神の花
嫁が最愛の主へ捧げる唯一の愛
の証しである。初夏ともなれば
私の臥す藁蒲団の上にも曙の光
がたゞよい始めるが、冬は全
くの闇の中に、起床を告げる鐘
の音にとび起きる。夜の続きが
まだ私の独房に匂っている時、私
は「キリストとの秘密」とよば
れる行為に入るためにいそし

で身仕度を整える。右手に堅く
編んだ綱を握りしめる。そし
て今まとった聖衣の裾の下半身
をあらはにたくしあげる。昼間
は貴婦人の如く裾ひくこの衣も
今はその影なく、包み隠さねば
ならない肉体が誇らしげに顔を
現す。私は臀部の肉に鞭を入れ
始める。初めはさすがに痛く、
苦痛である。床に眼を落せば私
の脚が二本、怪物のようにつ
たっている。打たれている肉が
熱を持ち始める頃から痛みは次
第に遠のいてゆく。私の肉体を
何物かぐすぶっているという
快感が襲って来る。そうすると
私の腕にはいよいよ熱が加り狂
気の如く打ち続ける。そして最
後にマゾヒズムの陶酔が私を虜
にしてしまう。

私は前に、修道尼が尻を鞭打
たれている外国の絵等を見て、
実際にこういうことがあるのか
と疑っていたのですが、この一

文を読むに至って、外国のみで
なく日本の修道尼達の間にもこ
の様な掟があることを知り、そ
して同時に「……最後にマゾヒ
ズムの陶酔が私を虜にしてしま
う」と、修道尼自身が書いてい
らっしゃるのを見て、人間の性
欲というものの偉大な、正に悪
魔的な力に心からの驚きをおぼ
えました。私もカトリックでは
ありませんが、キリスト教徒の
一人ですので(十年前に洗礼を
うけました)この様な非人間的
な制度を掟として強制する修道
院なるものに深い疑問を持ちま
した。また、この前記の文章の
あとには、具体的ではありません
んが同性愛の存在を暗示される
様なところもありました。

昭和三十年度を更に充実せん
とする「奇ク」の内容上に何ら
かのプラスにでもなったらと思
って、ペンを執った次第です。
(おわり)



奇ク二月号は私共にとって何よりもすばらしいクリスマス・プレゼント。新年号は一寸物足りなかつた感じがしたが、今月号は全く豊富な内容でどっしりとした充実したものでした。二度三度と繰返えして読んでも味わいが深いすばらしさです。フォトでは四馬孝さんの「悦慮の部屋」が私を魅きつけてしまいました。あのような皮具で身動き出来ぬようにされてみたいと思うのは私一人だけでしょいか。滝麗子さんの「処刑される日本娘」とも表情がその感情を出していいと思えました。新人責絵、依田精二さんの私の好きな絵です。どしどし新人責絵画家を発掘していただきたいものです。「足輪」も大変私の興味を引きました。私も後手に縛られ足輪をはめられて管で追立てられてみたい——。今月は読物も豊富で大

変態応えを感じました。懸賞入選第三席、小竹氏の「颯然れもの」地味な文章ながら最後まで読ませるし、さすがだなアと思わせられました。その他、私の好みにあつたと云いますか、面白かつたものを並べますと、二木氏の「鉦山の少年思春期録」春田氏の「幽囚十ヶ月」白金氏の「姑娘来了」森氏の「少年の体臭」などがあります。新企画で大変よかつたものに「編集者（執筆）に対する公開状」で色々教えられるものがありますし、編集部の実剣な態度は大変に力強い感じを読者に与えると思います。これからどしどし新しい企画を読者に公開して頂きたいと期待致しております。読者の為に勇敢に誌上を開放されたことは、編集者と読者を結びつけ、今後の発展飛躍に大いに寄与することでしょう。

（京都、三根耕二）

奇ク二月号を受取り非常に嬉しく思う。一に配本期日（二十日）が、正確な事である。奇クに対する信頼感を益々深める。第二に希望が多分に取上げられている事である。絵物語や怪奇実録、好みの画家、モデル（畔亭、四馬、中富）等々、挙げると限りがない。次に

内容が一段と充実し好みに合ったものが多い事である。本月号中特に好きなものを挙げると、口絵の畔亭、四馬、伊藤、都築の諸画伯のもの、写真では中富嬢の「観念」萩嬢の「海老しばり」春日、伊吹両嬢のコンビ写真、外国物「下着」等で、特に伊藤氏の「血染の毛綱」と四馬氏の「嫉妬」は興味深かつた。本文の方では「鉦山の少年思春期録」「露出願望の少女の告白」「北埔事変」「百合子の冒険」「裸にされた美人通訳」「嫉妬する少年たち」「強盗に入られた時のこと」「A感覚の秘密」「猥らな虫」等で、連載の「残酷なる女性達」は「非常な傑作」だと思うので、完結後には是非単行本として発行してほしい。「女斗美」と、予告された狩井氏の女プロレス観戦記のないのは物足らぬ。このような真剣味の溢れた明るい読物は読後爽快な気分になり健康なアブノーマルな感情が湧くこれに反し無暗にサド、マゾに持つて行くものはじめじめした暗い不健康な感じが後に残る。読者通信や写真、お灸、映画雑誌通信等は面白く有意義に拝見しました。特に毎号最も好きな写真を沢山お送り下さる狩井氏には感謝してい

ます。私が希望した懸賞予選通過作品の読者投票を計画している旨有難く存じます。尚、今後の希望としては探偵小説、怪奇小説、新しい事件、興行（アブノーマル的）の詳報等お願いします。又、代理部分譲写真は五枚三百円のものも多く作って下さい。悪条件の重なる時世に夫々趣向の異なる読者を抱えて、しかも全読者が満足出来るよう次から次へと新案を工夫研究下さる編集の方々の御苦勞に深謝致します。（茨城、T・M生）

○ 長瀬昭子様——貴女様の読者通信欄の御投稿は何て素晴らしいんでしょう。私すっかり感激して何度もうりかえしうりかえし読ませて頂いたか知れません。読者通信欄はいつも男性にばかり独占されてる様で淋しく思っていましたのに、貴女様の思い切った大胆な御投稿ですっかりうれしくなり、私も晴れ晴れした様でございます。昭子様！何をかくし致しましたよう私も貴女様と同様に同性をいじめのを秘かな楽しみにしております。でもまだまだ貴女様には遠く及びもつきません。恥しさが先に立って馬乗りになんぞ敷くこと等、とてもとても出来そうにありません。

ん。せいぜい転して押えついたり腕をねじったりする位が精一杯でございませう。でも貴女様の御経験はほんとに私にとりましては此の上もない参考になりました。深く深く御礼申し上げます。私も早く貴女様の様に可愛い女性を馬乗りになり、顔を太ももの間にはさんだり、肢で喉をしめたり、思いのまゝに快感を味わいたいとそればかりを念願して居ります。殊に終りの方で相手の頭を両手でぐっと持ち上げると「うっ」と苦しそうなうめき声を出して一しきりもがくって云う所、そして股のあたりがじんと熱くなつて飛び上る程の快さを味われるって所は、すっかり興奮して思わず全身がふるえてしまいました。きつと私も近いうちに貴女様の真似をして見ようと思つていますから、よろしく御指導下さいませ。それから勝手な御願いで恐縮に存じますが、貴女様の手記を誌上に発表して頂けませんでしょうか、どんなにか血湧き肉躍ることでしょう、今から楽しみにして居ります。最後に編集部へ御願いがございませうか。それは絶世の美人が二人、一人は寸分のす

きもない洋装にハイヒール、一人はあでやかな和服にフェルトの草履、此の二人が格闘の末、和服の女性が洋装の女性に組み敷かれ、顔を太ももの間にはさまれて股で首をしめられて居る写真を誌上にのせて下さいませんか。勿論、衣服は乱れて二人ともしどけない姿になり、組み敷かれた女性は無念の形相すさまじく必死に抵抗している場面でないといけません。女だてらにひどいお願いですが是非御願い申し上げます。では長瀬昭子様、編集部の皆様御機嫌よう、さようなら（佐世保、山田百合枝）

○

であり、萩さんを包んだ布や縄が大きな息吹きを与えてくれます。○（熊本T・Y生）

貴誌近來に見る大発展を心からお慶び申し上げます。一重に編集部各位の涙ぐまじき一層の御努力によるものと推察する次第です。更に誌面の月毎の充実には全く見るべきものがあり、只々感嘆するのみであります。しかし乍ら、小生についてやゝ難を云えば、性愛にからんだアブノーマルな種々のテクニクのみが強く表面に押し上げられ、編集部の方針にかゝるものかも知れませんが余りにも研究的な専門語としての性格が濃過ぎる様に思えるのです。もとより他誌にない貴重な文獻にもなり得る読物は、それだけに充分に定価に倍する価値ありしめるものと云えましょう。それで、それと併行してアブノーマルな人間の心理を深く鋭くえぐり出した創作を望みたいのです。同性愛、サディズム、マゾヒズム等は何れも人間の愛の最も絶望的な姿

○読者通信をお寄せ下さい

読者通信欄は孤独に悩む方々のこよなき慰めの場として、広く同好の士のため誌面を開放しております。本名其の他の秘密は固く守りますから、御安心の上、御遠慮なく、ドシドシとお寄せ下さい。

○

（京都、H・K生）

態であって、それ自身、心理として謂わば一個の極限であると考えたく思ふのです。それらには共通して人間の或る痛ましさが含まれているのではないのでしょうか。単なる好色読物は唾棄すべきです。仏蘭西コント風の軽い味わいも悪くありませんが、貴誌にとっては純文学のカテゴリーにも属すべき真に今日的なアブノーマルな主題を持つ創作がふさしく思えます。小生、実は先日意を決して「熱れ過ぎた果実」と題するレスポス物を書き上げ、一昨日投稿致しました。一応御閲読を賜わり、御高評の一端たりとお洩し頂ければ今後、更に芸術味豊かなアブノーマルな創作を勉強する上の励ましとさせて頂きます。

突然のお手紙お許し下さい。私は夫を戦争で失い、今は或る場所で酒場を開いている三十過ぎの女です。お店は二人の娘を使つてどうにかやって居りますが、このデフレの世の中では仲々思うようには

参りません。でもお店が本店です。からいろいろと変った事があり、どうにか気もまぎれます。「奇譚クラブ」という雑誌があるというところ。最初読んだ時は本当にびっくり致しました。女の人が裸で縛られてゐる写真が眼に入つたので慌てゝ本を閉じてしまいました。でも一冊ゆくりくり読んでみると仲々面白くて、いろいろなことを知りました。それから毎月号自分です。分を買って来て読むようになりました。若い娘達もいつしか読むようになってしまいました。いろいろのことも知りました。共にも自分にもマゾヒズムという気が持たれることが分りました。古川裕子さんは丁度私と同じ年頃と思われ、その方、あの方の記事が一番身近に感じられます。でも私は未だ古川さんの様な経験はございません。お店に来るお客さんの中にも女の人を縛るのが好きな方もいらつしやいます。「手を縛ったまゝお酒をついでみてうまくお酌が出来たらいいものをあげるよ

新人挿絵画家を求む

雑誌の口絵、挿絵につき関心をお持ちの方々は、男女に限らず作品、略歴をお寄せ下さい。見込みのある方は誌上で紹介の上、本誌挿絵陣の一員として活躍して頂きます。

どうだマダムやってみないか」なんて云つて、私や店の娘にそんな事をやらせるお客もいます。初めのうちはいやいやながら、それでも商売の手前仕方なく手を後に縛って貰つてお客さんにお酌をしていました。そういうお客さんはお店に来ると早速ネクタイをはずして用意をします。縛られたまゝでお酌をするのはむづかしい様ですが、横目で見ながらお酌をするので案外簡単です。すると「今夜は眼かくしをしよ」なんて云つて眼迄手拭で覆われてしまふこともあります。何しろ他のお客さんの見ている前ですから、いくらなんでも恥しくて、私はまだしも若い娘達は困っています。そういうお客さんは又お酒の飲み方もおそくて、いくら経つても手の紐を解いてくれません。チビチビやりながらジロジロ見ているので、何だか晒し者にでもされている様な気がします。この夏でしたか、そのお客さんが腰紐みたいなもので店の里子という娘を酔った勢で後手に相当強く

縛り、その上どうしても猿ぐつわをはめると云つて、いやがる娘を無理に手拭で口まで縛つたので里子は泣き出すし、私は奥に居たのですが、可哀想になつて「若い娘をこんな目にあわせなくても、私が縛られてあげますよ」って里子を逃がしてやつた事があります。その時に初めて猿ぐつわというものをさせられました。これも本式のものではありません。他にお客さんが居なくてよかったようなものゝ、全くだ、恰好だったことと思ひます。そんな私を「そうするとマダムも一段と綺麗に見える」なんて云うのですから、男の人ってどうしてあゝいう事が好きなのでしょう。ところが私も又、そんな事をされるのが別にいやでもないで、矢張り少し変なのかも知れません。奇譚クラブを読んでいるうちに、麻縄が何かで身動きも出来ない程手足を縛られ、本式の猿ぐつわをはめられてみたい様な気分もするのですが、実際にそんなにされたら我慢出来ないかも知れません。猿ぐつわというものは本当に声が出せないのでしょうか？又自分の手足を自分で縛る方法はあるのでしょうか？最近はそのお客さんは余り来られませんが忘

年会とか新年宴会だとかには必ずこういう方も来られることでしょう。それを心の中で待っているなんてますます変でしょう。つまらぬ事を書きました。今日はこれにて失礼致します。

(東京、中村加寿江)

一月号読者通信欄の長瀬昭子様不躰もかえみずお呼びかけ申し上げました。妾は二十才の会社事務員であります。貴女と同じく女性を組織く事に無上の喜びを感じて居ります。矢張り純情可憐型が一番好きです。妾時々造化の神様が間違つて女性の体に男性の魂を入れたのではないかと思うのよ、でも外観だけは他の女性に負けない位女らしいつもりよ。五尺二寸十四貫、ちよつと肥り過ぎでしょう。か、でも妾の年を知らない人は二つ三つ若く見えているらしいわ。この喜びを始めて覚えたのは高校三年の夏休みに級友五六人(女性ばかり)と泊りがけで海水浴に行った時なのよ。夜、親しい家の離室ではあるし同性ばかりの気易さから、水着、パンティ、とりどりの半裸でアイスキャンデーを喰つたり、煎餅を喰べたりして雑談に余念のない時うっかり持って行った詩集の間のボーイフレンドの写

真が見つかって、さあ、それからが大変、友達の手から手へ渡る写真を追っかけて大騒動よ。その頃未だ純情な妾は（今でも余りすれっからしではないつもりですが）もう半泣きになっていたので、大部分の人は止めたのですが一番お茶びいのK子だけはどうしても離さないで、とうとう腰のあたりへタックルして押し倒し、お腹の上へ馬乗りになったのですが、K子はそれでも渡すまいと手を伸ばすので、一寸ずり、二寸ずりしてとうとうお茶碗を伏せた様なお乳のまだ上の方に跨がっていました。一層足をばたばたさせてはね返そうとするK子に、お茶びいの方でも人後に落ちない私は業を煮やして「えいっ」と許りK子の顔に跨り太股でうんと首を締めつけて、とうとう写真を取り返したのです。そう時、「はっ、はっ」と速く呼吸するK子の息が薄いパンティ一枚を通して密着する妾の下腹部に熱く感じた時、まるで電気に打たれた様に全身の血が逆流するのでもないかと感じました。写真を胸に抱きしめて顔から火の出る様な思いで暫し呆然としていた妾は気がついた時、K子とはとくに太股の間からすりぬけて皆と一緒に

「貞子に大変な所を嗅されちゃった」なんて冷かしているのです。妾はもう恥しさで顔も上げられないのです。それからはその時の事が忘れられず、もう一度実行したいと云う衝動に駆られるのですが、故意に行う事は仲々出来ないのです。しかし四年の間には四、五度経験があります。一度は極く親しい友人に打明けて行ったのですがそれっ切り妾との交際は切れませんでした。それから偶然の風を装う事にしました。例えば寝転んでいる友人の傍を通るとき、つまずいた風をして首に跨るのです。その時には前もって冬でもパンティは感じ易い様に極く薄い絹のものを使い、スカートの裾はぱっと開く様に注意するのです。しかし、これも同一人には二度と出来ないし友人の数も限度があるので平均一年に一度程度しか実行出来ないのです。貴女が羨しいわ。妾も思い切ったからばりぱりやっちゃおかしら。それから妾、貴女と違って男の方に出来たらどんなに素晴らしいだろうなんて考えているのよ。活潑な様で案外内気な妾です。結婚しても夫にそんな要求は出来そうにありません。誰か私の相手を下さる男性の方ないか知

ら。兎に角是非貴女にお会いしたいわ。東京、大阪の間なら必ず行けると思いますのよ。失礼も顧みませず、つい同好の方のある喜びにとりのぼせてこんなお手紙差し上げました。

（富山、戸破貞子）

馬族保様。奇譚クラブ新年号読者通信にての御手紙、有難く拝見させて頂きました。実は小生も貴方様の「美しい暴君」を拝読した折、ふと此の作者は同じではないかと直感的に感じていた次第です。其処へ御手紙を戴いて本当に未だ見知らぬ間柄では御座います。が、百年の知己の如く感ぜられ懐しい気がしています。「モダン読物」では青柳環となつて居りますが、二回で都合に依り中止となつた時、今でこそ申しますが匿名であの小説を続ける様にと編集部宛手紙を出した事を覚えています。事実、本当に残念でたまらなかつたのです。然しあの時、自分で何とかあの続きを書いて等と思つた程の残念さを、今此処に貴方様を知つて、其の上統篇を拝見出来たのですから六、七年振りに目的願就と云う処です。御承知の通り小生もマゾ性愛者ですが、マゾ関係

のものを必死に蒐集するだけに其の経験は余り御座いません。其の点、貴方様が経験豊富、然も文筆のすぐれていらっしゃる事など美しい限りです。「女性恐怖症」も文章の流麗さから同一作者でないか存じていたのですが、「脚を抱かせて」のがらりと筆法の変つた洒脱なテンポの速さ、巧さ等、改めて感歎しております。「美しい暴君」を貴方様があの時の作者と断定し得た一つは、十二月号誌上で予選通過作品発表中「牛乳風呂の饗宴」の貴方様が福岡となつていた事でした。これを機縁に同性癖のよしみで何卒よろしく御願ひ申上げたく存じます。小生も外地引揚げですが、昭和二十四年に鹿児島から上京、現在に到つて居ります。大したものではないのですが機会があれば是非小生の集めたものを見て戴き、いろいろ御批判を仰いだり又、経験豊かな貴方様のお話を伺いたく存じています。「私のマゾスクラップ帳より」は御批評通り一ツ一ツ梗概をつけてスクラップしたものをとととと多く載せて書けばよかったのだと、今になって残念に思つていますが、機会をみて集大成？と云う程でもありませんが書いてみたい

と思っています。然し本当に「モダン読物」当時の作者に間接乍ら御目にかゝれるとは全く嬉しい限りです。何卒、小生住所は編集部で判りますから、御手紙下さいませ。尤も先輩に対して手紙を書く等とは失礼の限りですが何卒よろしく。東京に御出での折は是非御寄り下さい。一夜、ゆっくりと語りあかしたいものです。小生も又、一年に一度は帰郷致して居ります。其の中、九州随一の貴兄のいらっしやる処で降りてみたいと思っております。では又、これで失礼させて戴きます。今後共、もっともっと強烈なマゾ読物を書いて下さいませ。御願致します。

(春木俊野)

○ 首を長くして待ちあぐねていた二月号をやっと入手致しました。愈々三月号には「私の体験記」が載せて頂ける由、面はゆい様な嬉しい様な気持で一ぱいです。二月号の記事の中、白木近子様御投稿を最も興味深く拝読致しました。何だか同好の知己を得た様でうれしくてなりません。ほんとうにか弱い女性の手足をばたばたさせてもだえる処を馬乗りに跨って思うさまいじめ抜く時程、ぞくぞ

くする様な興奮を覚えることはございませぬ。お説の通り私も女性を相手にするのでなくてはいいやなのです。でも私はみにくい少女をいじめる気にはなれません。矢張り二十才前後の妙令の美人が一番私の好みにぴったりして居ります。出来れば私より数段優れた絶世の美人を力づくで征服して、プライドをはぎとってしまいたい気持があります。私の理想は伊東絹子さんの様な美人中の美人を一条まとわぬ全裸にして、私自身も真裸になり取組み合いの末、相手を馬乗りになり組み敷いて息の根がとまるまで残酷な責めを続けることなのです。例えば相手の目もさめる程美しい顔をぺったりお尻に敷いて、眼も鼻も唇もびったり股でふさいでしまったら何んなに素晴しいでしょう。突きのけられても押しつけられても、此の責めを何度でもくりかえし、遂には断末魔のうめき声をもらし乍らのびてしまふ光景を、私は秘かに空想して居ります。それから白木様は一人の少女を何度も相手にされたそうですが、私の場合そんなマゾ的女性にはお目にかゝれませんし、それに未だ一度も同性から転がされた経験さえない始めての女性を、い

きなり想像もつかない位の残酷さでしいたげる所に、得も云われないうか。私も始めの内は身体が大きき女性を相手にするのが恐しくて小柄で、きやしゃな女性ばかりを選んで居りましたが、此の頃では可成り豊満な感じのする女性でも相手にする様になりました。いくらか肉付のよい女性でも、はじめのことです。それから馬乗りになり組み敷かれるまでは、恥しきで真赤になるばかりで大した抵抗も出来ませんでした。たまりかねてじたばたする頃にはもう私が完全に跨って押え込んで居りますから、絶対に跳ね返される心配はない様です。それにやせた女性よりもふっくりした女性の方が感触の点です。私自身は身長五尺二寸五分、体重十三貫五百で、女性としては可成り大柄に生れついたのをしあわせに思っています。それからレスリングでは相手を座らせて後から胴を両脚の間にさみ込み、ぐうっとかゝえ上げる様にして自分は上体を後に倒し乍ら相手の身体を逆さにすり上げそれから反動をつけて上体を起こすと同時に相手のお尻をドシン

と、したゝか床に叩きつける手がありますわね。私はあれにとっても魅力を感じてやって見たいと思います。中々六ヶ敷くて簡単には出来ません。此の間は後にひっきりかえったまゝ起きられなくなりほんとに困りました。(長瀬昭子)

○ 最近号に於て私の拙文「女性の腕狂崇について」及び「女性美としての腕について」をお載せ下さい、それ以来というものの、私は「腕」の分野が拓かれるのを今度か今度かと毎号期待して参りましたが、一向に後続せず正直のところ非常にがっかりして居ります。果してその反響は一通もなかったものでしょうか。写真でも、口絵でも女性の腕を責めて居るものに加えて戴きたいのです。又、短篇ものでもいゝし、僅か一行でもよいから「腕」に関する記事を載せて欲しいのです。これが「腕マニヤ」私の切なるお願いです。もし今後、こういうものが出ないとなると、遂に私は「奇ク」を離れざるを得なくなるでしょう。

(京都、森卓志)

○ 「女性の腕」に関しての読者からの便りは、数は少いがあります。いずれ載せましょう。



御誌の御繁栄、甚だ同慶に堪えません。毎号の興味ある記事の満載はまさに貴重なる珍本の名を恥かしめず、末長く御発展の程を祈らずには居られません。殊に肥満体の頁こそ小生の最も待ち望むものです。恐らく稀な性癖ですから、それをもっと殖やして頂きたいなどと生意気なことは申しません。しかしながら、兎角マゾヒズム、サディズム、ソドミーと列挙して見ても、マンネリズムに墮しておそれがないわけでもありません。そこで、男が男を凌辱するという倒錯の頁がもう少しあってもいいのではないでしようか。肥満した男性のハルンをうやうやしく飲ませられている図とか、その太鼓腹の下敷になっているのうち廻りつゝ苦悶する男の図とか、とにかくそうした哀れむべき男性の姿こそ小生を最も夢中にさせます。それから小生は肥満した男性の特長のパンツや褌は勿論、太鼓腹や臀部などに限らない尊崇をもって居ります。いや、それなしには生き

られない男といってもいいのです。小生に実際こういう幸運を与えてくれる人が居られたら、どんなにいいかと思つて居りますが、これは夢として半ばあきらめて居ります。小生に興味をおもちの方はお便り下さればうれしい限りです。小生は二十九才、近い将来医師となるべき人間です。身長五尺三寸十二貫半、平凡な容貌の持主です。
(静岡、H・N生)

貴誌の発展と充実を心からお慶び申し上げます。小生も被虐的なものに興味を持つものゝ一人ですが、出来ましたら一寸変った小生の願いを奇巧に反映させて戴きたく、勇気をもってお便りする次第です。それは単なるマゾではありません。立派な体格の女性が、よく訓練された子供を相手に繰り展げる惨酷な、又、淫乱な地獄図。そんな状景を想像することによって、異様な興奮を覚える者です。「オール読物」の八月号だったと思ひますが、「アフリカの体臭」と題して、且つてのフランス映画女優コリーヌ・シユシエールが、南アフリカのジブチの魔窟でニグロの男の子を相手に、凄惨な淫蕩な見世物を演じている話が載って

居りました。非常に珍しい読物であると共に、全く我が意を得たものでした。此れに似た様な読物、又はこの様な種類の状景を書いた小説乃至秘密出版物はないものでしようか。フオートはともかくとして、貴誌の強力な且つ広範囲な資料網によつて誌上に発表して戴けないものでしようか。特に小生のイメージにあるものを申し上げるなら、白人の豊満艶麗な美女と黒人の子供、又黒人の精力的な女と白人の男の子、白人の淫乱な売笑婦と日本人の子供、そんな組合せの上に行われる地獄図を期待して居ります。奇妙な告白ですが、小生のようなのは云わば間接マゾとでも云うのでしよう。同好者の方がもし居られる様でしたら文通致したく思つて居ります。性の快楽の為に、全く非力な子供をその奉仕者として酷使する女、この狭い日本の何処かにアフリカのそれのような見世物はないものでしょうか、否、きっと何処かで毎夜怪しい営みが行われている筈です。願わくば奇巧がその代弁者となつて登場して戴きたいものです。
(東京、布井立夫)

○
小学生の頃父に連れられて銭草

の江川の玉乗り見物をしてから、軽業少年のキヤルマタ姿にすっかり魅せられて仕舞い、以来、一週間に一度は独りこっそりと通い続け、その日は終日飽かず玉乗りや綱渡り、さては足芸の太夫の足の先で弄ばれる少年達の肉色のタイツとキヤルマタだけの姿態に堪能したものでしたが、今ではあの江川の玉乗りの如き雰囲気を持ったサーカス一座は無くなったようです。中学生の頃になつて人知れず洋品店で売って居た黒や紺のキヤルマタ、それもなるべく股の附根迄切れ上った、そしてピツタリと股と臀部に喰ひ込む様なものを求めては密かにはいて楽しんでいました。終戦後物資が豊富になつたのを幸い、今では色々な生地を買ひ求めて来ては、自分で作製して着用して居ます。家に誰も居ない時などこのキヤルマタ一つの全裸の姿を独り鏡に映しては楽しんで居るのですが、僕の宿願は穿くだけでは物足りなく、誰か美少年の方が僕の臀を鞭打って呉れるのを渴望しているのです。丁度、サーカスの親方が、軽業の稽古をつける時、鞭を振る時のあの様な状景を実現させて頂き度いのです。
(神奈川、K・M生)

○ 森山美歌様へ。貴女様の奴隷にしていたければ一生でも貴女様の奴隷としてつかえます。慈悲深い女王様、恭順な奴隷たる私は女王様の仰せには絶対服従致すことを約束申し上げます。女王様たる貴女様の前に土下座して跪き、どうぞとお願ひ致します。私は女王様に無条件に盲目的服従をお誓いします。御命令を問い返すこともしません。まして反抗など思いもありません。恐れおのゝきなながらも楽しい期待に満ちて、奴隷の肉体をばどうぞ女王様の気まぐれのまゝになさって下さいと、厳しい女王様の前に差出すのです。私の感情、思考、情念のすべては、既に私が捜して漸く求め得た女王様の御傍に行っておりませう。慈悲深い女王様、是非奴隷にして下さい。私は高貴な慈悲深い女王様の忠実な奴隷でございます。奴隷にして下さる様でしたらいつでも出向ます。此れをお読みになったら是非、誌上で御返事下さい。お待ち致しております。

(神戸 石本宗治)

○ 私は一昨年より貴誌を愛読致して居る者ですが、特に女性より貴

められる事を喜びとする強烈なマゾ傾向の男です。だから何時も貴誌を手に入れると、先ず春日ルミ嬢の男に対する責め場を長い間眺めては、これが自分であつたらと相手の男性に対する美望と激しい嫉妬におかされます。私の様な者でも春日ルミ嬢が奴隷として否、一匹の犬として酷使してやろうと思ひ下さるなれば、何時でも嬉んでルミ嬢の足許にひれ伏します。私は現在失業中で毎日暇な軀をもてあまして居ります。他の女性の方で男を責めてみたいと思われる人がありましたら御一報下さい。ついでに私の身許を紹介致しておきます。私は現在親も兄弟も親類もない一人者で、身長は五尺二寸体重十三貫七八百から十四貫の間を何時も上下して居ります。男としてははまことに恥しい小男ですが軀は強健で今迄病氣等した事はありません。十七才の時、ふとした事から街の不良仲間にはいりましてが、現在は堅気です。喧嘩はよくやりましたが、負けた事は一度しかないのです。と云つても女性とではありません。今迄女性に一寸した事を云われても何も云い返さず事も出来ず、只真赤になつて謝りますが、男なら不思議な程強

気になります。

(大阪 東川二夫)

○ 私は女性の排泄物の飲食に興味を持つ二十五才の工員ですが、毎月の奇譚クラブを読んだ後いつも感じる事は、奇譚クラブには女性の排泄物の飲食に就いての記事のない淋しさです。どうしてこうも排泄物の飲食に就いての記事がないのですか、今後は是非この点に触れた読物をどしどし掲載して下さい。尚、私は女性の方に排泄物だけで飼育されたいと思つています。他食物を与えられず、唯糞尿だけを飲食して、肉体の続くかぎり奴隷として、一匹の忠実なる獣として、女性に奉仕して見たいと思つています。全裸の体を鎖で緊がれ、糞尿だけを頂戴し、鞭に追使われて飼育されたらどんなに素晴らしいでしょう。こんな妄想に耽る私が、時折り夜中に全裸となり洗面器を持ち出し、その中に放尿脱糞して、そして四ツ這いになつて自分の糞尿を飲食する私の姿を想像して下さい。世の女性の中に私のために排泄物を提供して下さいる女性はいないものだろうか。排泄物を提供して下さいる方に対して私は女性の命ずる誓約書に、それ

がどんな内容のものであつても書きたいと思つています。「女性の便所」になりたい、これが一生をかける私の希望です。

(T・M生)

○ 先ず奇クが毎月毎月飛躍的向上をして居る事を、編集者初め執筆者及びモデル嬢の皆様に感謝すると共に、今後の発展をお祈りして居ります。私の希望を申し上げるならば、サド女にマゾ男(しかも女装に限る)の組合せは如何でしょうか。この希望は多くの女装マニヤも希望して居るのではないのでしょうか。口絵写真の二嬢コンビの責めも良いですが、私から見ると同性同志ではつまらないと思ひます。これが責められる方が女装の男だつたら何時も思ひます。女装して居るならば春日ルミ嬢の奴隷として醜い事はないと思ひます。春日様も女を緊縛している写真が前に出ていましたが、これが私が女装して責められていたら無上の光栄と思つた程です。編集者はこのような構図をどんな風に思われているでしょうか。若し、この企画をお取り上げ下されるならば私がモデルになつても良いと思ひますし、大阪迄かけつけます。

私は五尺二寸、女装しても不恰好ではなく、又顔も女形しても充分と思つて居ります。白木近子様。二月号で記事拝見しました。春日嬢の外に多くの女王様が居られる事は私達マゾには大いに力強い次第です。春日、伊吹嬢を礼讃の様ですが、貴女が女王様、そして私がその奴隷、何んと素的でしよう。私としてはこれ程光榮な事はありません。貴女が春日嬢以上に振舞つても、私は甘んじて受けまきと満足な事をしよう。

(新潟 関口 正)

初めてお便り致します。二月号には初めてお目にかゝります初の写真版に、春日、伊吹嬢による弱者征服というものより、マゾヒスト一男性を登場させ、その男性をやつつける様な場面をこしらえ、これを写真版にすればマゾヒスト最大の喜びと云つても過言ではありません。二月号と同じ様なポーズで側面、前面、後面よりのポーズがあれば変化があつて良いと思ひます。そして最後に男性が春日嬢に完全に征服されるという企画も面白いと思うのですが、出来得れば三月号に載せて頂きたく思ひ

ます。それから、裸体の女賊なるものをこしらえ、二月号にあった如く手に革むち、足に半長靴をはいて、男性を力づくで裸にし、荒縄で柱に縛り上げ、激しくむち打つ、そして最後に男の上に馬乗りになつて、彼女の奴隷としての誓をたてさせられる様なもの、これも十回位の場面に分けて撮影されると感じが出来ると思ひます。(1)最初に男の後から首をしめて気絶させる。(2)意識不明の男に馬乗りになつて服を脱がす。(3)肌着、パンツ等すべてを取り去る(これは女性の顔の表情が見られる様、前面から撮つたもの)。(4)両腕を後にしめ上げ、荒縄でくくする。(5)男の意識が回復し動くこうとするのを押え込み、両足首、くるぶし、太もも等を雁字搦目にする。(6)素早く柱の所迄引張つて行く、そして柱に胴体をくくくつけ、両腕を柱を抱く様に外から廻させ両手首をくくする。(5)で後手にくくられたのを解いて柱を抱かせるこの場合は、女性が後から抱く様にして両手で男の手首を揃えてから縛る。これは側面より写す。(7)左右より激しくむち打つ、男は苦しもうにもだえるが、彼女のむちは空を切つて激しく鳴る(これは左右より撮

る。やゝ前面より写せば女性の表情、男の表情も見られる)。(8)激しいむち打ちに男はぐったりする。そこで男を横たえ女性がその上に乗る(男は又、後手に縛り上げる)。(9)彼女の奴隷となることを誓う。そこで女性はのしるしに男の顔を畳に強くこすりつけ、完全に奴隷たることを認めさせる。(10)最後に彼女の奴隷たることのしるしに背中に入墨をほす。(6)(7)、(8)は二場面ずつ写した方が感じが出ると思ひますから、全部で十三場面。これを三月号に写真にして載せて頂きたく是非御願ひする次第です。春日嬢の表情が良いから彼女に登場してもらつてほしいと思ひます。又、女性による男性征服手記等、三月号はオールマゾヒズム号に近いものを御願ひ出来ないのでしようか。女性が男を股間しばかりにしている実演写真等も良いと思ひます。

(布施、A・D生)

サディズム通信

早い店では毎月二十三日頃、まづ二十五日ともなれば唯一の恋人

「奇ク」に会えるのであるが、二月号はその日になつても店頭に現れず、いさゝか心配させられた。暮の事で輸送関係で二三日遅れた事が判つてホツとした。毎号口絵や写真をたのしみに行っているのであるが、二月号は仲々よきものが多かつた。久しぶりで都築峯子氏のをなつかしく拝見した。目次裏の川柳も結構(縛りものゝ少きは淋し)。海外文献紹介も傑作。説明にある通りアチラのもものはゴテ(縛り)括るといった方がよいが)上げてあり、美しさが無い。むしろ手拭、ハンカチ、ネクタイ革バンド等であつたりしたもの。後手に縛つたものが、むしろ日本的な簡素味を感じる。四馬氏の絵物語「嫉妬」は絵、文共にいたゞけました。今後共よろしく御提供下さい。モデル諸嬢の表情も段々と真に迫つて来て大変よろしい(大いに勉強願ひします)。男の縛りものはどうも縛られてゐる同性が馬鹿に見えて仕方がない。第一「美しさ」がないのでイヤハヤである。内容では俳句、短歌、マンガ等縛り芸術の開拓面は大いに広い。我等の奇クに栄光あれ。春日、伊吹の名コンビも只格闘だけでは困ります。やっぱ縛らして

下さい。女性が女性を縛って責めるといふのは、男から見るとたまらない魅力なのです。伊吹さん仲々ヘッパバーンがよく似合いますね、長襦袢もよく見えます。第二面の木刀で顔を押さえられている所は猿轡が欲しいと思います。どうですか。(東京、R・O生)

最近洋画「砂漠の鷹」というのを見ましたが、その中で奴隷の女達(奴隷にしては美人すぎたが)が市場で売られる場面で、大きな手錠をはめられているのが実に美しく、感心してみました。残念なことには鎖が長すぎて両手の自由がきくすぎる所が迫力を減退していました。兎に角、私としてはいつも後手しぱりばかりでは変化がなさすぎる様に考えますが、いかゞでしょう。私のアイデアとしては、各種の服装で手錠姿をコレクトしてみるとどうでしょう。画集の中でペン画として扱ってみたい。尚、このポーズは、両手を下へのぼしているのが一番のようです。二頁に六態位出してもらえると結構です。又、多少難しいけれども、いやがる女に無理に手錠をかけている所片手にはすではまっている……

という様なものです。これを物語風にストーリーをつけるならば、トバク行為をやっている中に清纯な娘が巻き込まれている。そこへ手入れがあり検挙される。取調べの結果事情が分って許される……。こんなのはいかゞですか。娘スリ等も恰好の材料でしょう。又、順に手錠をかけられる画……。すっかりあきらめて両手を前へ出して待っているポーズ等は実にすばらしいものです。とにかく、今まで手錠ものは実に少いので、実に多い縛りの中にたまにはこうしたものをに入れて新風を注いで下さい。そうしてサディ方面にも出来る限り力を入れて下さい。形式はサディでも内容はマゾ乃至はなれあい的なものは困ります。扱い方がよければ手錠は後手しぱりよりも、何ともいえない魅力があるので。この方面の開拓を大いに期待しております。(I・J生)

私は昭和二十七年十月号からの愛読者で、徹底的なサジストです。この方が男らしく最も健康的であると思います。私の友人も現在六人ばかり貴誌の愛読者があります。勿論彼等もサジストです。最近の貴誌についての批評、又、

是非共試していただきたい事を申し述べます。縛り写真は非常に多くなり質もよく結構と存じますが、いわずの縛り絵なるものがたくさん少なくなっているのはどうしたのでしょうか。例えば紙質がよくない、画家のタッチが荒くなり丁寧でなく、絵そのものが小さい。絵等は幻想的なモチーフ主体であって私等もそれが欲しいのです。例えば写真は全部八等身ではありませんが、絵に於ては顔、体は勿論理想的に画けます。絵も昔から現代に至るまで画いて欲しいのです。勿論、全裸でも半裸でもよいから後手縛りをお願いします。一年位前に一度提案しましたが、短かい告白(僕の書いたものではありませぬ)として少し出たのですが、再び提案します。私も貴誌の愛読者である以上、これは満足するまで幾度でも提案するつもりです。それは「煙草責め」についてです。具体的に申し述べますと、若い女性(女学生らしくおさげの髪にした方が一層よい)を全裸、半裸、制服、いずれもよいから後手に縛り上げて(横縄も二、三重にして)柱につなぐか、縄尻を取って引きすえて口に煙草をくわえさせる(勿論火のついたもの)。こ

の煙草は巻煙草よりもパイプや煙管の方が一層よい。絵や写真は煙管をくわえたまま水平、又は少し下げて、煙をくわえた煙草の間からゆら／＼と出している所。表情はいたって恥かしそうに、にがそうにした方がよい。これにヴァリエーションを加えて下さい。私もこれは一度或る女性を了解済みで手拭で簡単に後手に縛り、煙管で吸わせて見たことがあります。写真にもとれず、その女性も地方大学に去ってしまったので、毎月貴誌が出る毎に出ないか出ないかと心待ちしています。未だ全然グラビアに出て来ませんね。權威ある貴誌に三度目の提案をいたします。又これが出版出来ないとしたら、その意味を読者ページにでも載せていたゞければ幸に存じます。(京都、立大生)

先日「奇ク」一月号を読み、読者通信欄に東京T・Y生君のゴムマリに就ての寄稿を見て、私も又ゴムマリに就て非常な興味を感じている者なので、世の中には同じ趣向の人も居るものだ。非常に心強く感じ、他にも同様な方々が居られるならばどしどし「奇ク」に寄稿するなり、アイデアを発表す

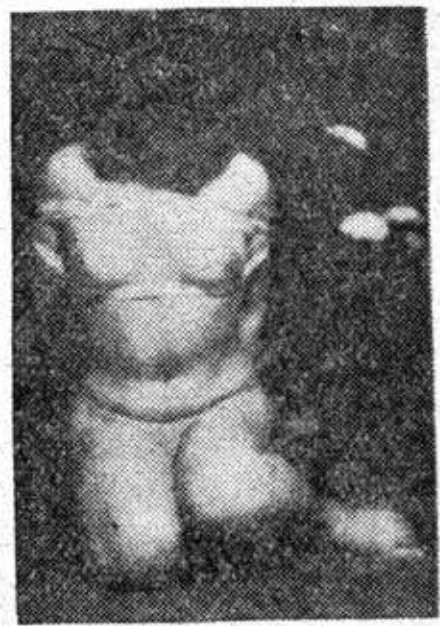
るなりして頂きたいと思い、又、「奇ク」の編集に当られる方々に御願ひして、こう云った趣向の写真や絵を載せて頂きたく敢て拙文を物しました。T・Y君の云われる如く、ゴムマリが性的興奮を助長するのはその手ざわりの滑らかさや、適度の弾力性が女性の臀部や乳のそれに似ている事、特にまん丸くふくれ上ったゴムマリが臀部の盛りを思わす為でしょう。その為にT・Y君のいう様に十二時以上十六時、或は二十時等極めて大きいゴムマリに私はその感を深くしています。しかし、手触りの感じから云って、私はT・Y君とは反対に継目のあるゴムマリ（ビーチボール）を特に愛好しています。継目のない方は大きさは十時迄しかない、手触りも固くて膨脹の度合を加減することが出来ません。膨脹の度合を加減するという事は、奇クによく寄稿されて私達を魅了してくれている羽村京子さんの空気浣腸のお話を実行する為にも不可欠の事柄です。この羽村さんの趣向等も特に私の心を捉えましたが、こういう趣向でこれに色々な縛りを併用して責めのアイデアとして取上げて頂き写真なり絵なりにして掲載して頂

いたらと切望する次第です。二月号には又、ゴムマリを下腹に当てゝこれを中心として縛って温泉の湯の中に女性を浸けて、その盛り上った臀部に浣腸する話も出て居りましたが、こういう写真や絵等をもって掲載して頂きたく思います。女性の股の間にボールを挟んで縛り（柱、棒等）、此れに空気を圧入するとか、ボールを抱かせて縛るとか、いろいろありますが是非一つ御願ひ致し度いと思います。T・Y生君始め、ゴムマリに興味を持つ人達の活潑なる投稿を要望します。（徳島、A・K生）

初めてお便りします。伏屋春江様へ、二月号の「自分で自分を後手に縛る方法」は全くよく考えつかれましたね、感心して居ります。図解入り説明で申し分なく不明な点は一つもありません。全く素晴らしい創案です。貴女の様子が手に取る様に浮んで来ます。特に結び目が解けなくなり困って居られた様子や表情を想像すると胸がドキ／＼して来ます。他に縛り方を思いつかれたら又発表して下さい。しかし惜しいですね女性同志では張り合いのない事です。ね。お許しさえあれば私が縛ってやりたい位です。貴女との文通出来ればと思つて居ります。（新潟、山口正彦）

二月号原稿募集の項に実写々真という課題がありますので、拙作ですがお送り致します。モデルは二十三才、四尺九寸八分十二貫五百、小柄ですが肉附のよい人です。この写真は私もモデルも初めてでした。私も今迄奇クを見ていたので、一度はこの様にして見たいと思つていた処、彼女も奇ク等で多分にマゾ的な処もあったので、話はトン／＼拍子に進みました。それでも初めてなので縄を持った手が少しふるえしました。私の理想の女性美は胸の隆起とヒップです。オレンジを二つに切った様な乳房と、程よく出たヒップです。これに何となく魅力を感じます。この点を考え乍ら実行したので、初めて見る全裸の女性の前では、只ぼろ然とするばかりでしたので、緊縛とまではいきませんでした。写真では分りませんが、モデルは雪国育ち独得のつる／＼した、いわゆる餅肌とでもいうのでしょうか、とにかく素晴らしい肌です。照明等の関係で良い写真とは申せませんが、掲載してもらえれば幸甚と存じます。尚、モデルはその後殆んど不治の病におかされ、二度と逢えず、逢つてもこの様な事は絶対に出来ませんので非常に残念です。初めが最後かと思うとくやしくてなりません。合意の上で縛られて見たいという女性にめぐり合わないかと考えて居ります。（M・Y生）

◎写真は三枚お送り下さいました。が、ポーズの関係で修整出来ない分など割愛いたしました。貴方によりきアフレンドが出来ることを祈ります。



切腹通信

突然此の様なお便り差し上げる事を御許し下さい。私一愛読者として感じた儘を述べさせて戴きま

す。扱、最初に私の興味あるものは女性同志の同性愛に関する記事と、同じく女性の切腹物語です。

最近此の種のものが少くなつて参りましたが、どうかしたのでしようか。此の二つを組合わせて幕末、若しくは戦国時代に取材して物語を作られては如何でしようか。又、毎号多くの頁を占めるグラビヤページに、もっと同性愛並に切腹の絵や写真がある事を希望致します。同性愛は女学校の寄宿舎の夜等と云うテーマで、又、切腹は単独の場合は介錯人を、集団の場合の切腹絵(例えば女の白虎隊と云ったテーマ)で女性集団切腹の素晴らしさを表したものを願ひ致します。以前から感じていた事です。切腹通信にもある如く私も是非色刷の豪華な切腹面帖を望みます。どうも写真は迫力に乏しいので、色刷の絵により初めて白と赤のコントラストが強く表れて迫力ある絵が出来上る事と思ひます。尚、一度時代物として幕末会津の娘子軍及び西郷一家の女性の自刃をテーマとした作品を御願ひ致します。その際、脚色で結構ですから切腹を取り入れて下さる様御願ひ致します。二月号の「男子の切腹を追想して」や、その他

の切腹物語、絵、写真等を期待して居ります。(東京、家田潔)

私は昨年の春より奇巧の愛読者となり、毎月店頭に見られるのを待焦がれて居る者の一人です。私は切腹の写真や画に一番興味を持つもので、殊に女性の切腹マニアで他の記事や写真には余り関心がありませんが、女性の切腹の記事や写真、画は夢中で読んで居ります。一月号の向井芙佐子様の記事を見て、かねて私も希望して居りましたことですので、同じマニアが居ると思うと嬉しくてたまりません。第一景から第五景までの構想図は私も是非望んで居たのですから。殊に四景と五景はたまらなく私に興奮を感じさせるものです。一人の腰元風に髪を結い上げた美しい女性が、豊麗な下腹部を充分に露わして、右手に持つ九寸五分に左手を持ち添えつゝ、真一文字に左脇腹から右脇腹をかき切り、苦痛と歓喜は美しい顔をゆがめつゝ、更に抜きとった九寸五分の切先を、ふっくらと盛上った左の乳房に突き立てんとする第四景と、最後の力を両腕にこめてグサツと突立て、女性として男性にも仲々出来ぬであろう切腹を見事

やりとげ、満足と苦痛と法悦にひたり乍ら、正に絶息せんとする第五景はなんと云うロマンチズムと凄愴美の極地でしょうか。乳房が女性美のシンボルであり、最後のピリオドを打つ場所として切先を乳房の左下に突き立てた姿が、最も悲愴美を現わしていると思ひます。是非五景を組んで口絵に載せて下さい。毎号口絵に切腹画がありませんと物足りぬ感じがするので、二頁か四頁を是非御願ひします。又、津島比呂史様の女性の切腹面帖は色刷りにして実現して頂きたいと希望してやみません。矢張り写真はリアルチックであり、モデルの肉体に影響を受けて切実感やロマンチックに乏しいので、諸先生に画いて頂いたものが方がよいと存じます。代理部の方に採算の合う価格で結構ですから是非御願ひ致します。切腹マニアの愛読者諸兄姉はきっと歓喜して申込む事と存じます。

(東京 木村むつみ)

一月号切腹通信に寄せて東京向井芙佐子様。貴女の組写真の御趣向は、大変結構で是非実現させたいと思ひますが、私としては是非とも白無垢姿でお願いしたいもの

です。最近の例では原桐咲代様の白無垢姿の切腹写真の素晴らしさは何にたとえ様もありません。南区F生様。貴男の御説には確かに一理あると思ひます。例の井上中尉夫人の自刃は当時新聞にも出ましたし―残念乍ら切抜きを亡失―映画も見ましたし、又其時用いられた短刀と座布団も拝見しましたので、私も深い感銘を受けています。実際、女性の自刃は白無垢で両膝を扱帯で縛り、袂で刀身を握って咽喉又は胸を突いて前へ倒れるつゝ、美しい仕草が好ましいと思ひます。然しヌードやパンティ或は腰巻姿では困りますが、白無垢の前を寛げて乳房から下腹迄の曲線美を露わにした可憐な姿態、浅く一文字に掻切るポーズは激痛をこらえ苦悶に耐える悲壮美となつて、グロでも非現実でも又艶消しでもないと思ひます。貴男に女切腹をそう云う風に感じさせるのは或は奇巧に発表される女性切腹図の多くが不必要に四肢を露出して日本女性の美しさ―和服によって昇華された―を減退させている為かと思ひます。東京津島比呂史様。貴男の御提唱になる女性切腹面帖は私も亦渴望しているもので一九五五年度の新企画として奇巧

代理部月報

(大好評目下分譲中)

◎萩千恵子嬢悦虐集◎

手札型 五枚一組 三百円

斬新なアイデアにより千恵子嬢の柔軟な姿態に加えられる繩の暴虐、川端嬢、伊吹嬢、村田嬢に続いた悦虐集の新版。

◎浣腸シリーズ五態◎

キヤビネ判五枚一組 五百円

イチジク浣腸、二〇〇〇浣腸器三〇〇〇浣腸器、イルリガートル等を動員しての辻村隆実演の浣腸フォトの決定版、モデルは阪口利子嬢、一、診察、二、イチジク浣腸、三、グリセリン浣腸、四、イルリガートルによる石鹼浣腸、五、縛り浣腸

◎連続縛り「強盗」◎

キヤビネ判五枚一組 五百円

①ジャックナイフを持って兇悪な強盗が侵入、読書中の乙女に襲いかかった。②ナイフを畳に突き刺し、声を立てようとした

ところを猿ぐつわをかける。③両手を縛り上げてタンスの環に縛りつける。④シユミーズとズロースをはぎとろうとする。絶望的な乙女の表情。⑤裸のまま乙女をタンスに縛りつけた強盗は、悠々と抽出を開けて中のもを物色している。

◎アクロバット五態◎

手札型 五枚一組 三百円

萩嬢の柔軟な姿態に着目して不自然なアクロバットの曲芸的なポーズを沢山の繩を用いて強行することについて快諾を得て実施。最初は優美なポーズを演じていた萩嬢も遂には、痛い痛い悲鳴を挙げるに至った程、恋態的なポーズに亘って御披露した作品、先月の口絵に紹介する筈が遂に中止にきめたもの。

◎浴室での浣腸五態◎

手札型 五枚一組 三百円

今迄試みられなかった浴室での浣腸五ポーズを一枚一枚、変った姿態で狙ったもの。皆さまの要望により特に手札型として御紹介します。浣腸マニアの方々の必見のものと存じます。

編集部が是非取上げて欲しいと思います。私としては切腹だけでなく前文の様に慎ましい女性の非切腹自刃の悲壮美をも含ませた物であって欲しいです。(兵頭庫一)



二月号の「奇ク」を見て第一にうれしく思った事は、読者の要望がすぐその儘編集部方針に反映していることでした。その最よい例は巻頭グラビアの六尺ふんどしをした男の緊縛写真でした。あれを見た時僕は思わずぞくぞくとした位興奮してしまいました。恐らく「ふんどしマニア」であれを見て興奮しないものはありません。晒木綿で覆れた股間の盛り上りといい、細引で強く引き締められた筋骨質の男の太腕といい、又後手に縛られた姿のむごたらしさとい、後に結んだ六尺ふんどしの結び目と尻のあたりの対照といい、何時迄見ても飽きない男の六尺ふんどし姿の美しさは、本当に格別だと思いました。どうかこれからどしどしこのような六尺ふんどし姿の緊縛写真をお載せ下さい。

唯、欲を云えば全身の写真がほしかったことと、その下の「蘇弄」のモデルにも白の六尺褌をしめさせてもらいたかったことです。最近のソドミア通信にふんどしマニアが続々現れて来て喜んでいます。しかしその方々の中には六尺ふんどしの締め方の知らない方がいるらしいので、僕が締めている締め方を参考までに御披露いたします。よう。(1)、先ず第一にふんどしの長さの三分の一の辺を下腹部に当てがい、長い方を股間に通して後へ廻す。(2)その先を横から前に廻し、前の残りの布を押えてから再び後に廻す。(3)そして前の布の下を通して上へひねり上げる。(4)そうすると初めて下腹部がしまります(5)前にのこった布を再び股間を通して後から上へ上げ、ひねった晒しの残りと互い違いにして両方の腰にたばさみます。六尺ふんどしの締め方には色々あるようですが、いろいろと試した結果この締め方が僕が一番気に入った方法です。ふんどしは余り高く締めてはいけません。お臍の少し下の方を締めるのが一番よいようです。出来得ればこの他いろいろの締め方の連続写真又は絵を紹介して戴きたいと思ひます。山口氏の「読者

通信に現れたる禪美愛好家の傾向」という一文の中で、些か疑問の点があるので質問します。六七頁の中段四行目の「腹巻の付いた六尺褌で前垂れの付いた方が良く（勇雄のには前垂れがない）、常時締める為の褌である事を明示することが必要である。そうでなければ、水泳用等に一時的に使用するものと混同する恐れがある」と云々」とあります。これを読みますと常時しめる六尺ふんどしには前垂れがあり、水泳等にしめるふんどしには垂れがないというようですが、これは何かの間違いではないでしょうか？私達が普通しめてゐる六尺ふんどしには（勿論、夜寝る時でもしめてゐるのです）垂れはありません。垂れをつくってはゆるんでしまつて六尺ふんどしの役をしません。第一私たちがふんどしマニアが好んで六尺ふんどしをしめる理由は、先ず股間縛りの役をしてゐるという事、即ち、常に股間に緊縛感を感じることによる性的快感があるからです。第二はこれは人によって違いますが、露出面積が他のふんどしやパンツに比べて大きいことにより、それからもう一つ「腹巻の付いたふんどし」とはどんなものでしょうか

？六尺ふんどしと腹巻とがついてゐるのですか、それとも別なのですか、一寸お伺い致します。（六尺ふんどし愛用者より）

○ 前略、永らく貴誌を愛読致して居りますが初めてお便り差し上げます。人に云えぬ性癖のため今日迄悩みましたが、先頃より禪美に就ての読物が載る様になり、漸く自分の性癖の凡そが分る様になりました。厚く御礼申し上げます。十二月号のソドミア通信で吉本さんが述べられた事は、私の云わんとして語り得なかつた告白を余す処なく書かれて居ります。私は都内に永いこと住んでおりましたので、ソドミアの集る処は殆ど知り尽し、再々訪れました。然し、私と同じ趣味をもつ人には一人も逢いませんでした。私はエゴイストなのでしようか、単なる男色者には興味不起きず、何時も中途半端な気持ちで歸らざるを得ませんでした。男色趣味に全然同調しないのかと思ひますが、そうでもありません。併し純然たる男色趣味者でもありません。私のような趣味の者は各地に潜在して居るものと思われ、何にしても他聞をはばかるので独り秘かに悩み続け

代理部月報

（今月の新版）

◎浅野末乃嬢悦虐集◎

手札型 五枚一組 三百円

堂々たるボリウム、雪白の肌初めて縛り上げた浅野嬢の示す羞恥の表情とポーズ、各モデル嬢の悦虐集をコレクションされる方々へ贈る異色ある一集、一正面高小手、ズロースもシユミーズもワンピースも取り去られて足首にまといつく。二、

息苦しい猿ぐつわに悩む。三、側面より後手しぱりを見せる。四、乳房に喰い込む紐、観念した悦虐の表情。五、柔肌に麻縄がじわじわと絞めつけてゆく。

◎バンド着用の縛り◎

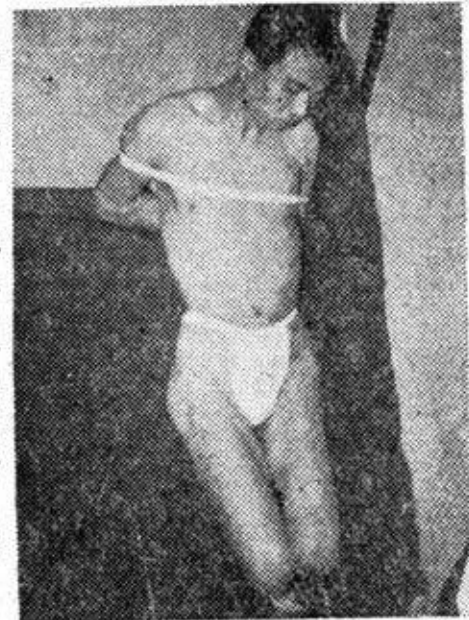
手札型 五枚一組 三百円
モデル、川辺砂登子嬢、全部メンスバンド着用のベッド上のポーズ、バンドの着脱に狙いをつけて、横臥側面一枚、横臥背面一枚、横臥正面二枚、正面胡坐一枚。

と参りました。私も都内某大学に籍を置き、来年卒業予定でありまして、すけれど、なまじ教育があるばかりに身を落せず、赤裸々に六尺褌着用を出来ぬのを悲しんで居ります。若し私に許されるなら漁師とか職人になって六尺褌を締め、びっちりしたのも引をはいて大道狭しと歩きたく思います。又、背中に一面にほりものをして、見様によれば簪にも棒にもかからぬ無頼漢の様ですが、一面男の中の男とも見られます。風呂屋などに行く時は六尺褌をして必ず学生服を着て行きます。その時は見せたい気持ちと見せたくない気持ちが半々です。そんな訳で、自分だけでなく他人が褌をしているか、いないかにも興味をもって居ります。東宝の「潮騒」等五回も見ました。芸術云々よりもあの少年の禪美にひきつけられたからでした。褌、パッチ、これ程男性的な美しい姿は外にみられないと思つておられます。私は女性的な男色者を見るのも嫌で、傍へ寄つて来られるとゾッとしてしまいます。私の希望は既に同好者がお願ひした外にありませんが、出来たら特集号のようなものを発行して欲しいです。モデル



がなければ及ばず乍ら私もいささか御力を添え度いと思ひます。私達悩める者の心の灯を絶やさぬ様是非共願ひします。十二月号ソドミア通信の吉本一郎様、K・Y生、I生等と御交際致し度く思います。同好諸氏のお便りお待ち致して居ります。(埼玉、F・T生)

○ 拜啓 師走の候本当に何かとお忙しい事と存じます。又、貴誌の益々の御発展心からお慶び致します。扱、貴誌の読者通信欄に一度投稿してみようかと思ひながら、文章を書く事は大のにがてで、どうしても思うように書けませんので、本当に残念です。私は先日東京へ学校の試験に参りました際、知り合った友人と同封の写真の撮影を行いました。少々未熟が害してピンボケみたいになりました



たが出来たら誌上の片隅にでも出していただけたらとお送りしてみます。私はサドとかマゾとかいうのでなく、ソドミアの一人です。で縄の掛け方など余り良く判りませんので、そういった方にでもの足りないかも知れませんが、貴の愛好者として、又男性ヌードの愛好者として、又若い人(十代から二十代)の友人を持ちたいという希望のもとに思い切つて撮つてみたのです。どうかよろしくお願ひします。これは本当に我儘というか、無理な事かも知れませんが、こうした男性による「被縛」とか「ヌード」の撮影の機会がありましたら御紹介願ひませんか。又、湖田平雄氏の様に男性ヌードのモデルの御紹介を願ひませんでしょうか。壮健で悠大とまでは行きませんが、私も普通の体の持主としては是非こ

うした撮影会にのぞんでみたいと思つて居ります。次に今後誌上に載せられるフォトについては、このな事もお考えになつたらいかでしょうか。男性の「禪美」のフォトについてはなるべく全身、そして前又は横向きで下腹部から股間へかけての起伏がはっきり線として表れるような撮り方、それから背景としては自然的(水泳とか相撲)な処より、かえつて不自然な処(旅館の一室とか洋間など)の方が見る方にはあらゆる想像が出来てよいのです。勿論、若いモデルが必用だと思います。学生(特に思春期の高校生)など、読者ソドミアの最もそのむ対象ですから、学生服による半裸体姿とか思春にも見える学生の風情などYにならぬ程度に演出すればよいと思ひます。そんなモデルになつてみたいと思ふのは私だけの特殊な感情でしょうか。(柏山多津夫)

浣腸通信

一月特大号拝読致しました。今日はこの通信欄を拝借致しまして

感想文を発表させて戴き度いと思ひます。先ず最初に、号を重ねるに従つて増々内容充実致し、一刻の沈滞をも許さぬ編集部御一同様の御努力に対し、心から、感謝の辞を申し上げます。目次裏の「責風景十態」の「浣腸器片手に足の紐をとく」の絵は大変面白いと思ひました。お預けがすんでいじめる宵の口」の絵も、浣腸されるポーズとして見ますと素晴らしいと思ひます。滝様、どうぞこれから私達浣腸マニヤの為に、是非「個性味溢れる浣腸の絵を沢山発表して下さいませ。フォト欄の浣腸写真は、行為直前の姿態だけにこれから行われる恥かしい浣腸の洗礼を想像致し、自由に幻想が描けますので、強烈な歓びを感じました。浣腸実施中のフォトと異なつた感興を覚えます。勝手な注文を言わせて下さるのでしたら、小道具に配した浣腸器の位置を真横にした方が明瞭に写つたのでは無いでしょうか。最も魅力ある嘴管部が容器外側の黒色に同化されてしまったように思ひます。医師が薬液吸引中の浣腸器をもっと大きく写して頂きたか、たと思ひます。しかし、公刊誌という性質を留意されつゝ、今迄不可能と思わ

れていました。浣腸写真(実写)を
発表して下さいました編集部の御
苦心並びに、私達浣腸マニヤの無
理な意向を尊重して下さいたこと
に關し、唯頭が下る思いです。青
葉氏の「秘虐」に於ける九十二頁
の事更、嘴管部を誇張させて描か
れた絵の持つ強烈さ、九十七頁の
将校と子供を配した絵の素晴らし
さ、そして「秘虐」の特異なテー
マにすっかり魅せられてしまいま
した。とかく題材の限定され易い
と考えられます浣腸の作品に、こ
うした面から描かれた青葉氏の斬
新な作品に、第二作の発表を待ち
望む思いで一杯です。この作品の
絵をお描きになられた画伯のお名
前も発表した下さるようお願いし
ます。羽村さんの「A感覚の秘
密」は流石にオーソリテイだけあ
って「A感覚の秘密」を深く追求
された文学的香り高き論文に啓発
されました。十一月号の「裏返し
のA感覚」と共に、浣腸マニヤの
心理にメスを入れた貴重な論文だ
と思います。角さんの「悪の広
場」に於る西条氏の挿絵(一四一
頁)は、最も深く私を惹きつけま
した。素晴らしい文章の心理描写と
合待って、この作品は忘れる事の
出来ないものとなりました。今更

の如くに角さんのお亡くなりなさ
れた事が残念でなりません。浣腸
通信欄の大阪、段野昭様。編集部
宛てにお便り下されば、お返事致
します。(花村恵美子)

最近に及び貴誌は浣腸に關する
記事を再々誌上に載せる等、漸く
その「面白さ」に気づかれた様で
す。本来、もっと早く気づかるべ
き性質のものである腸、尻、浣腸
及びこれに關する一切の事柄を、
一般サディズム、マゾヒズムに關
する記事に比して等閑に附されて
居たのは。貴誌のすばぬけた編集
才腕からすれば、むしろ不思議で
した。とにかくこの様な傾向が
(浣腸愛好)貴誌の大きな誌面を
占め始めた事は遅かりしとは云え
喜ばしい限りであり、益々促進し
て頂きたいものです。浣腸写真に
ついては種々の困難な問題が伏在
して居り、これ故に担当者の方が
大変な苦勞を重ねて居られるであ
ろう事は、察するに余りありま
す。然し、勇気を出して可及的な
大胆な写真を読者として希望致し
ます。ポーズについて一つ一寸面
白いものを見つけたのでお知
らせします。それはアトリエ社刊
猪熊弦一郎監の「モデルと構成」

☆奇譚クラブ四月特大号予告☆ 定価 140円

連載第七回愈々最終回 夜 光 島 吾 妻 新
賣マニアの手記 ボクの責め方 宝塚二三夫
きものシリーズ 『浴衣草紙』 白金紅次
受刑者の偽らざる手記 幽囚十ヶ月 春田一郎
お天狗松昔噺 「木曾の野村間」 緑 猛比古
懸賞入選作品(二席) 牛乳風呂の饗宴 馬 族 保
懸賞入選作品(三席) 調 教師 淡 美 一郎
懸賞入選作品(四席) 責衣(汗に) みずしま まもる
懸賞原稿 佳作第一席 耽 美 の 果 中 谷 冷 一
私の少年時代の告白 昆布と小 年 森 太 一
告 白 孤 獨 古 川 裕 子
創 作 惡 魔 の 遊 戲 二 俣 志 津 子
エッセイ 「男色者の地域性」 滋 賀 雄 二
続 半 公 刑 大 和 撫 子 篠 原 咲 恵
一露出狂の告白 モデルになりたい男 小 沢 一 夫
晴 雨 私 稿 血 染 の 毛 綱 伊 藤 晴 雨
好評連載 あるマゾヒストの手帖 沼 正 三
独文絵入単行本 残虐なる女性達 森 本 愛 造
手 記 緊縛モデルの素顔 辻 村 隆
写真撮影苦心談 アブホート一年生 狩 井 麗 作
絵 物 語 「女性のお灸十態」 岩 瀬 祥 一
私の理想の女性 飛行服姿の女腹切 藤 山 秀 緒
明治年間の新聞覚え書 吾 妻 新
アブ追求三十年の回顧 女 武 者 山 田 正 実
外に、告白、手記、公開状、其の他課題原稿入選作品等
多数掲載の予定、乞御期待!

(続々美しいポーズ)三十二頁下段に載って居るものです。これなど、このパリエーションは小生としては所謂、極限的写真作製には好適と思われます。(東京都、木村正人)

貴誌へ初めてお便り致します二十五才の独身の男性ですが、貴誌を愛読致してから約二年近くなりになります。私は性来男性なのですが、女性的な顔、形なのです。幼少の頃はよく人から女の子みたいだと言われ、自分でも何時の間にか女の子の様な振舞いをする様になりました、その様な仕草に自分自身でよろこびを感じて居ます。私のそもゝの出発点は十三才の時でした。友人の所へ行く途中の電車の中、それは物凄い満員で、乗った最後身動き一つも出来ないのです。私は苦しそうにしていたら、丁度前に居た人が私に親切に話しかけて下さり、色々私に話しかけてきたのです。私も打ちとけて話して居るうちに目的地が来たので私がおりるとその人も降りてこられて、私が行くまで送って行ってあげようと言ひ、一緒に歩き出したのです。私は変な人だなと思ひましたが、それでも一緒に歩い

ていました。道は田舎道なので人はあまり通りません。そのうちに草木の茂っている小高い丘にさしかゝった時、突然、その人は私を押倒し、私に四つ這いになれと言つてきかないのです。しばらく辛抱したらお金を上げるとか何んとか言つて、私に頼む様に、又おどす様にするので、それから何の事は何がなんだかわからないので中略しますが、その日は友人の家へも行かず帰りました。それからといふものは、私はマゾからホモへと数人の人からさゝれたりされたりして、何時の間にかその事自体が私のすべての様になり、戦時中の爆撃の時でも女教師と互によろこびに浸りました。その様な懐かしい人も今は皆行方が分らなくなり、今日に到りました。此の頃は一人で緊縛をしますが、どうも思う様に出来ず、それも一人ではよろこびが半減しています。私の様な者も他に居られるかと思うとたまりません。私達のマニアを極度に刺激する様な緊縛フォトをお願いします。又、同好の方々と文通出来ます様お取り計い願えないものでしょうか。

(布施、H・K生)

女優緊縛映画予告篇について

白石 稔

二月号誌上で一読者から「予告映画の中で緊縛シーンのないものがある」との投稿がありました事について、一言させていたゞきます。毎号御紹介する予告篇の資料は新聞、雑誌、ラジオ等に絶えず注意をはらう事によって集めていますが、何分投稿時には封切前の映画のこともあり、シナリオも手に入らないのでストーリーの中にも「縛られる」と云う表現のあるものは勿論、「捕えられ」「誘拐され」等の表現を用いてあるものを一応予告篇に挙げてゐる次第でありますから、必ずしも緊縛シーンがあるとは断定出来ない現状であり、この点については、皆様の御理解と御協力をお願いしておきます。

女優緊縛映画予告篇

題名(製作会社) 女優名

鉄腕巨人(新東宝) 安西 郷子

秘密設計図を狙う悪漢のため地下室に幽閉される。

地獄の花束(松竹) 島崎 雪子

恋人と共に監禁され、恋人はリ

ンチを受ける。

忍術児雷也(新東宝) 新倉 美子

近頃流行の忍術映画である。こ

の中で忠臣の娘に扮するが、反逆者の配下に二度三度さらわれる。

隼の魔王(東映) 田代百合子

プロ野球選手の恋人に扮し、殺人犯人におびき出され連れ去らる

伊太郎獅子(大映)

姿をかくした恋人の行方を云えと責められる。

青銅の魔人(松竹) 由美あづさ

家宝の時計を狙う怪人二十面相のため人質として捕われる。

大江戸千両囃子(東映) 美空ひばり

將軍拝領の扇をめぐるそれを狙う悪者のため危機におちいる

紅孔雀(東映) 高千穂ひづる

宝の鍵を狙う妖術師のため捕え

られる。

黒い骸骨(独立プロ)

ダイヤの首飾を狙う悪漢のため

森の小屋や、彼等の根城のクラブ

の二階に閉じ込められる。

凸凹巨人退治(独立プロ)

おとぎ話に出てくる巨人のため

牢屋へ入れられる。

ロビンJツド(RK・ラジオ)

J・ライス

オズの魔法使(メトロ)

J・ガールランド

課題原稿募集

(皆さまの共同の広場建設のために)

【創作】

異色ある題材を掲げて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用原稿には掲載後相当稿料を支払います。

【異常体験記】

一生に一度あるか、二度あるか、肌に粟を生ずる真実の体験記、或は異常なる人生体験記、幻想や夢はとりません。(二十枚迄、三千円)

【エッセイ】(小論文)

本誌の巻頭を飾るにふさわしい啓発的にして人をうなずかせるに足るもの。(二十枚迄三千円)

【アブ・コント】

告白でも、創作でも、見聞でも、形式はどんなものでもよろしいですが、奇智に富んだ雅味のあるもの、翻案はお断りします。(十枚迄千円)

【ラブ・レター】

送り先はどなたでも結構、猛烈に甘いものをお送り下さい。(十枚迄千円)

【私は訴える】

皆さまの胸に持っておられる諸々の悩みや御意見、主張等を発散して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。(十枚迄千円)

【口絵並に挿絵】

面材はサド、マゾ、流腸、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【ローカル・レポート】

新聞記事の切抜き或は見聞等、皆さまの興味を持たれた事件につきお知らせ下さい。掲載の分につきましては本誌二カ月分乃至半年分贈呈します。

【編集者或は執筆者への公開状】

適当なものは回答と共に発表の上、(十枚迄千円)モデル嬢に対してでも可。

【映画、雑誌通信】

映画や雑誌の中で特に興味を持たれた事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には、本誌二カ月分乃至半年分贈呈します。

【私のイメージ】

熱烈奔放なイメージをぶっ放して下さい。イメージですからどんな荒唐無稽なものでも、奇抜なものでも歓迎します。(十五枚迄千円)

【実写写真】

御自身写されたものに限ります。裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく、掲載分は相当謝礼。

【アイデア】

将来本誌にて企画すべきもの一般につき出来るだけ詳細に、優秀なものに本誌半年分乃至一年分贈呈。

【告白、体験、手記】

本月号百四十七頁に懸賞募集中、御参照下さい。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方に対する御意見等掲載分に対する私信は支障なき限り、つとめて御取次、転送いたします。通信は封書でなく葉書でも結構です。

○締切は毎月五日、原稿の第一頁に応募の種目を附記して下さい。

(開放した誌面を御利用下さい)

奇譚クラブ編集部

◎本誌月極直接購読料◎

一月分一冊(送料共)百四十円
 三月分三冊(送料共)四百二十円
 半年分六冊(送料共)八百四十円
 一年分三冊(送料共)千六百八〇円

本誌を毎月号御買洩れのないよう確実に御入手になるため、最寄りの書店へ御予約下さるか、直接購読の御申込みをして下さい。半年分前金御申込みの方には、責め写真二枚一組、一年分御申込みの方には、五枚一組、サ―ビス品として贈呈申し上げます。

昭和二十五年十月五日 第三種郵便物認可
 昭和二十六年一月廿四日 日本国有鉄道特別扱雑誌承認

奇譚クラブ

第九卷第三号、毎月一回一日発行

三月特大号

定価百四十円

昭和三十年二月二十五日印刷
 昭和三十年三月一日発行

編集人 箕田 京二
 印刷人 上田 庄之助
 発行人 吉田 稔

大阪府堺局区内菅原通四ノ三〇

発行所 曙 書房

振替口座大阪第三四九五六番

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断り致します。